魔法少女リリカルなのはStrikerS～炎の堕天使～

恵慈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～

【Ｎコード】
Ｎ０９１７Ｊ

【作者名】
恵慈

【あらすじ】
※完全凍結中。

戦いを終えた青年は過去の世界へ行くために我が里の秘術を使い、少年は兄として接してくれた青年についていった。
しかし、二人が流れ着いた場所は過去の世界ではなく、全く違う別世界だった。

キャラ解説（前書き）

タイトル通り、キャラ解説です。まだ全話読んでいない人にとっては、ネタバレになっちゃいますのでご注意を。

キャラ解説

・名前：紅麗（くれい）

・容姿：腰まで届く長い黒髪。左目の周りに火傷の痕がある。バリアジャケットは、目以外の顔面を覆う仮面と、全身を覆う黒衣。腹には黒いベルトを巻いている。

・デバイス
名前：紅
待機状態：真紅の腕輪。
『紅・壱式』：漆黒の手甲。指先の部分に紅い鉤爪が填められている。装甲の隙間にカートリッジが装填されている。
『紅・弐式』：紅い刃の日本刀。

・魔力光：真紅

・魔力変換資質：炎熱

・魔法
『翅斬（はざん）』―ＰＳ２版のオリジナル技。ただ炎を出すだけ。
『翅炎（はえん）』―背中から炎の片翼を出して、炎の羽根を飛ばす。鉄板でさえもアイスのように溶かす。

『嘴突(しとつ)』―天堂地獄に放った炎を纏った貫手。貫手と言っても、指を曲げた状態での構え。名前はこの小説オリジナル。

『焔鳴哭(ほむらめいこく)』―烈火が操る八竜の内一匹―虚空の能力を元に編み出した小説オリジナルの技。炎のレーザー砲というところだけは全く同じだが、威力は本家の烈火よりやや劣る。

『別魅(わけみ)』―分身の幻術。しかも、分身達を攻撃させる事ができる―ちょっと卑怯…；

『飛翔翅炎(ひしょうはえん)』―背中に一対の炎の翼を出現させ、術者に飛行能力を持たせる。カートリッジを使用して、加速能力を付加させる事も可能。

『死霊の炎』―相手が過去に殺した人間の怨念を炎の化身に変えて戦わせる。

・概要：?烈火の炎?の主人公である烈火の異母兄。戦国時代の人間だったが、烈火の母である陽炎が火影の禁術―時空流離によって烈火と一緒に４００年後の世界に流されてしまった。炎を出したり、素手で人間をボロ雑巾のように変えたり、ただの脚力で一瞬で間合いを詰めたり背後に回ったりと、軽くチートなダークヒーロー。ちなみに烈火に対するツンデレっぷりは、ツンデレクイーンであるティアナを遥かに凌駕する。

・名前：小金井（こがねいかおる）　薫

・容姿：髪の色は黒。
（たまに猫耳や猫の尻尾を生やしたり、両手が猫の手になる事がある）バリアジャケットは、エリオとほぼ同じだが、アンダーの色は青。ズボンの色は黒。

・デバイス
名前：鋼金暗器（こうごんあんき）。
六段階まで変形できる武器。カラーはアニメ版の金色。

待機状態：金色のロザリオ。

壱之型・『牙』：薙刀。

弐之型・『龍』：鎖鎌。

参之型・『極』：大鋏。

四之型・『三日月』：ブーメラン。

五之型・『暗』：弓矢。

六之型・『無』：型の無いバラバラの状態。？鋼金暗器？の部品がバラバラの状態になり、鎖に繋がれた核玉を投げつけて相手を拘束する。そして、バラバラになった部品が核玉に向けて引き寄せられ、相手を串刺しにする。完全に殺傷性の型ですね、滅多に使えませんね…；

・魔力光：鋼色

・魔力変換資質：金属

・魔法

『巨大錬金』―魔力変換資質?金属?の能力を持つ薫の最高の魔法。文字通り、?鋼金暗器?の一部を巨大化する事ができる。

『延伸錬金』―文字通り、?鋼金暗器?の一部を伸す事ができる。

『分裂錬金』―文字通り、?鋼金暗器?の一部を分裂させる事ができる（そればっか）。

・概要：女性読者に人気がある中二ショタ。元々孤児だったが、自殺しようとしていたところに紅麗に止められ、以後彼を兄として慕うようになる。

・名前：ナナシ（ジョーカー）

・容姿：長い金髪、額に長いバンダナを巻いている。バリアジャケットは、私服の上に胸当てとマントを羽織っている。

・デバイス

名前：ストーンカ

牛の頭部を模した金色の二叉の矛。魔力変換資質・電気を持つ者に

は相性の良いデバイス。
待機状態：牛の頭部を模した指輪。

・魔力光：紺色

・魔力変換資質：電気・重力

・魔法
『エレクトリックアイ』：？ストーンカ？の二叉の矛先に電気の眼球が生成され、そこから雷の奔流を発射する。（一部の）記憶が戻ってから、？重力？の能力が付加されている。

『サウザンド・ニードル』：術者を中心に、地表から千本の雷の棘が迸る。

概要：麗・十神衆の一人。自由気ままな性格で、女好き。
しかし、全ての女が好きなわけではなく、容姿がいくら良くても性格的にタイプでなければとことん嫌う。原作の？烈火の炎？では、ナナシ（ジョーカー）はブラックホールに吸い込まれて死亡という事になっているが、原作者の安西先生のもう一つの作品―？メル？で登場する？ナナシ？が？烈火の炎？のジョーカーではないかと言われている。

・名前：蛭湖（ひるこ）。

・容姿：髪の色は金色。両手には包帯を巻いている。バリアジャケットは、黒いスーツに黒いロングコート。

・デバイス
名前：ナイト・カウント
待機状態：赤い十字架のネックレス
ナイフ・モード：赤い刃のナイフ。
サーベル・モード：赤い刃のサーベル。

・魔力光：血のような赤色。

・魔力変換資質：血液

・魔法
『血塊弾』―出血させた血液を凝固させ、それを砕いて相手に投げつける。血塊の金属並の硬度と蛭湖の腕力により、銃弾並の威力を持つ。

『血塊球』―グローブのように手全体を血塊で覆い、相手を殴りつける。

『血固め』―大量の血液を相手に付着させてから凝固作用を使用し、相手の身動きを止める。

『ブラッドカッター』―循環作用を利用した血液のウォーターカッター。石をも容易に切り裂く。

『別魅』―紅麗の『別魅』と同文。

・概要：裏麗・？死四天？の一人、？不死身？の異名を持つ青年。戦いを神聖なものと考え、相手に敬意を表する紳士的な一面を持つ。また？使命感？で行動してきた蛭湖が石島土門という男に敗れてから、？自らの意思？というものを尊重して行動するようになる。

・名前：煉華（れんげ）

・容姿：長い紅い髪。紅麗と同じ黒衣を着ている。そして、幼い顔立ちのわりに胸が大きい。

・概要：？忠実な紅麗？として、紅麗と紅のＤＮＡから造り出されたクローン。性格も思考も幼く、彼女を生み出した森光蘭の言う事を素直に聞いている。しかし、その森光蘭に裏切られ、天堂地獄に取り込まれてしまった。

・名前：刹那

・容姿：ボサボサの灰色の長髪。目玉と刃の首飾りを首から下げ、

両目には黒い布を巻いている。黒いズボンを穿き、上半身には何も着ておらず、左胸には火影の烙印が刻まれている。

・デバイス
名前：『凶蜘蛛（まがぐも）』
巨大な肩当てである元祖の？凶蜘蛛？を大幅に軽量化し、巨大な蜘蛛を模した腕輪。
六本の脚先に刃が取り付けられ、口部からも長い刃が取り付けられている。

・魔力光：紫

・魔力変換資質：炎熱

・魔法
『瞬炎』―黒布に隠された両目で相手の目を見つめる事で、相手を一瞬で焼き尽くす。

・概要：火影忍軍の炎術士としての能力を持っていながら、味方殺しをする残忍な性格から火影忍軍頭首になれず、火影の民達に殺された。その後、死した魂が火竜となってからも残忍な性格は変わっておらず、他の火竜から？邪悪竜？と呼ばれている。

・名前：門都（かどっ）

・容姿：逆立った長い緑髪。顔全体を覆い隠す仮面。２ｍから３ｍ

の巨体には毛皮のようなもの身につけている。

・デバイス
名前：無し。
大槍型の簡素デバイス。変形もできず、大した能力もないが、その巨大さと重量から凄まじい破壊力と頑丈さを持つ。

・魔力光：緑

・魔法
『魔力弾』―名も無いただの魔力弾だが、その威力は砲撃魔法に匹敵する。しかし、その威力と巨大さ故に一個しか生成できない。

『餓獣ノ牙』―肉食獣の牙の形を模した巨大な魔力砲弾。『魔力弾』よりも生成時間は長いが、それに見合う破壊力を備えている。その威力は、バリア・シールド破壊の特性無しで、防御魔法を容易に破壊できるほどだ。

・概要：？死四天？の一人で、多くの者から畏怖を込めて裏麗最強と謳われている男。
紅麗の炎に焼かれても死ななかったが、瀕死のナナシ（ジョーカー）と一緒にブラックホールに吸い込まれた。
（あだ名はカドっちゃん。またの名を、烈火の炎版・ファンゴラム）

ここからは悪ふざけ。

・名前：ヴァイス・グランセニック

・概要：？機動六課ガンダム五人衆？のリーダー。
コードネーム：デュナメスガンダム。
好きなガンダム作品は、『機動戦士ガンダムＯＯ』。

・名前：八神はやて

・概要：？機動六課ガンダム五人衆？の副リーダー。
コードネーム：デストロイガンダム。
好きなガンダム作品は、『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』。
ちなみに好きな理由は、ＢＬっぽいから。

・名前：スバル・ナカジマ

・概要：？機動六課ガンダム五人衆？の一人。
コードネーム：ゴッドガンダム。
好きなガンダム作品は、『機動武闘伝Ｇガンダム』。
ちなみに結婚するなら、ドモンのような人と結婚したいそうだ。

・名前：シャリオ・フィニーノ

・概要：?機動六課ガンダム五人衆?の一人。
コードネーム：スターゲイザー。
好きなガンダム作品は、『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』。
ちなみに好きな理由は、ＢＬっぽいから。

・名前：エリオ・モンディアル

・概要：ヴァイスたちの影響でガンダム好きになり、?機動六課ガンダム五人衆?の一人となってしまった哀れな少年。
コードネーム：インパルスガンダム。
好きなガンダム作品は、『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ』。
ちなみにコードネームの由来は、ラッキースケベ（ヴァイス&はやてが命名）。

ホノダテ・キャッチフレーズ☆

紅麗――『史上最強のツンデレダークヒーロー』
「母想いで何が悪い…？」

フェイト・Ｔ・ハラオウン――『阪ネ申が大好きな多重人格者』
「巨人は敵だッ！！！！」

ヴァイス・グランセニック――『ガンダムフェチ・ガンスリンガー』
「たとえ成層圏の向こう側に逃げたところで…俺の狙撃範囲内だ」

高町なのは――『砲撃魔法（暴力）が最大のコミュニケーション』
「悪魔じゃないもんっ！！」

八神はやて――『昔は歩く萌え要素だったけれど、今はただの腹黒狸』
「何でこんなに汚れたんやろなぁ…？」

小金井薫――『年齢中二、頭の中身も中二』
「オレって、生意気かなぁ？」
「だけど、それが良い！　さぁ、猫耳つけて私に甘えてきてっ！！」

ティアナ・ランスター――『ブラコンツンデレ娘』
「ば、ばかっ！　ツンデレじゃないわよっ！」

スバル・ナカジマ――『甘え上手な人間ドッグ』
「好きな食べ物？　アイチュ…♪」

エリオ・モンディアル――『ラッキースケベ』
「あんたって人はぁ！！」
「怒ってるエリオも可愛いなぁ！　さぁ、犬耳つけて私に甘えてきてっ！！」

キャロ・ル・ルシエ――『将来の夢はフリード（レッドアイズ・ホワイトドラゴン』を三体まで増やして、ふつくしい社長になること』
「ふ、粉砕☆玉砕☆大喝采！」
「可愛い～！　さぁ、ウサ耳つけて私に甘えてきてっ！！」

フリードリヒ――『キャロの嫁』
「きゅくるー（くらえ、滅びのバーストストリーム！！！）」

ヴィヴィオ――『悪魔と人間の間に生まれし魔拳士』
「ママ～！　ストロベリーサンデ～！」

煉華――『頭脳は子供、パイオツは大人』
「フェイトお姉ちゃん、いっぱい甘えちゃうもんねっ♪」
「わ、私を萌え殺す気かッ！！？　／／／／」

紅――『心優しき炎のキューピット』
「特技？　しんちゃんのモノマネが得意よっ♪」

カリム・グラシア――『ヤンデレ・ジェノバ』
「『一見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ』！『一見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ』だ！！」

シグナム――『目をつけられたら何もかも終わり』
「ふむ、なかなか良い身のこなしだな。どうだ、私と闘　ら　ない　か？」

蛭湖――『別の意味で残念なイケメン』
「私はスペシャルで！　２０００回で！　模擬戦なのだよ～！」

ヴィータ――『地獄と天国の力を保有する金槌破壊神』
「光になれぇぇえええぇえええええええッ！！！」

シャマル――『彼女の手料理の危険度は天堂地獄級』
「酷いわっ！！　せめて、毒魔針にしてっ！！」

ザフィーラ――『主の盾となる蒼き守護獣』
「ナノマシン―？クルースニク０２？…４０％限定起動―承認」
「いや、違……あ、ドラマＣＤやね」

リインフォース？――『いつもおっきいお友だちに追われるロリっ子フェアリー』
「ストーカーであると同時に私の最強の兵隊ですっ」

シャリオ・フィニーノ――『趣味はＢＬ同人誌を書くこと』
「ちなみに一番人気は紅●×蛭湖○です」
「くはぁ！　く、●麗が○湖さんを…／／／」
「な、何という背徳的な…。でも、これはお買い得だわ…／／／」

リイン親衛隊――『君のためならどこまでも』
「「「リインたんを守れぇえええぇぇえええ～！！！」」」

クロノ・ハラオウン――『表の顔は提督、裏の顔はヴァイスのマブダチ』
「落ちろ、カトンボッ！！」

ヴェロッサ・アコース――『クロノを狙うＢＬ超能力者』
「酷いなぁ（苦笑）　まっ、否定はしないけどね」

レジアス・ゲイズ――『地上本部（ウェコムンド）のメタボ中将』
「見ろ…儂のこの窩には…貴様らの命も蟻の命も…等しく同じに映っているぞ」

ナナシ（ジョーカー）――『憎めない関西ハーレム男』
「いやぁ、モテる男はツラいなぁ（笑）」

ジェイル・スカリエッティ――『ナナシの○ナ○を狙うマッドサイエンティスト』
「ナナシくん、や　ら　な　い　か？　今日のプレイはア○○にオレンジジュースを――」

ウーノ――『ドクター好き好き、だ～い好き～♪』
「何ですか、このキャッチフレーズ！？」

ドゥーエ――『ナンバーズの中で一番出番が少ないけれど、一番人気が高い（俺も好き）』
「もっと出番が多ければ、悪魔や死神よりも勝てるんじゃないかしら？」

刹那――『中二病を燻るキャラナンバー1』
「中二病ってなんだ…？」

プロローグ（前書き）

初めまして、恵慈です！
自分の書いた小説を多くの方に見せるのが初めてなので、すごく緊張しています…
拙い文章だし、更新は遅めですが、よろしくお願いします！

また、この小説はオリジナル設定があったり、やり過ぎなギャグがあったり（主にガンダムネタ）、キャラが激しく崩壊しているので苦手な方はご注意を。

それと、ダークヒーローである紅麗が唐突に丸くなりすぎています（近いうちに書き直します。けど、後半はかなりダークになっていますｍ（＿＿）ｍ

プロローグ

「やる事が残っていてね…私はあの時代（とき）へ還る。一人でな…」

青年―紅麗は目の前に広がる時空の穴を見ながらそう言った。
最凶最悪の魔導具―?天堂地獄?が滅んだことで?火影?に関わる全てのものが消滅する。
そうなる前に、火影忍軍に伝わる禁断の秘術で過去に戻って?やる事?をせねばならない。

「御武運を、紅麗様」

今日まで仕えてくれた二人の仲間の言葉を受け、紅麗は時空の穴へ歩んでいく。

「紅麗ぃぃぃーっ!!!」

後ろから大声で名を呼ばれ、紅麗は首だけ振り返る。
振り返なくても、誰なのかすぐわかる。
自分と母を長く苦しませた憎むべき?男?。
幾度も戦い合った?宿敵?。
そして、何度も?姫を守る?と口にする?弟?。
紅麗の視線の先には―彼よりいくつか年下の青年が頭を掻きながら少し戸惑っている様子だった。

「あばよ…ア…ニキ…じゃねぇ…!あの…」

青年は何を言うべきかわからず、しどろもどろになった後、沈黙した。

無理もないだろう。異母兄弟とはいえ、今まで敵対して戦い合ってきたのだ。急に心を開くのは少し抵抗がいる。

「……」

しかし、口を閉ざしていた青年は―笑みを浮かべながら親指を立てた。

「ふっ…」

紅麗は笑みを返す。

実に弟らしい単純な暇乞いだ。

さらばだ…?烈火?…

紅麗はあえてその言葉を口にせず、再び時空の穴へ歩んでいった。

紅覇は歩を進めながら、過去に着いた後の事を考える。

まず、我が一族の仇―織田信長の首を取った後、父―桜火と母―麗奈の墓を作る。

（その後は…）

その後の事は―出てこなかった。

大方、老いて朽ち果てるまで?たった一人?で過ごすことになる―それだけだろう。

愛する人を見つけ、子供を授かり、家族として共に幸せを歩む。

そんな平凡だが、幸せな未来は―多くの人間たちを傷付け、殺してきた自分にそんな資格はない。

そもそも…?彼女?以上に愛しく思える女性など、これから先に現れるだろうか?

「紅麗ーっ!」

突然の少年の声によって、物思いにふけっていた紅麗の意識が現実に呼び戻された。
振り返ると、一人の少年が紅麗を追いかけていた。

「小金井…？」

少年の名は小金井薫（こがねいかおる）。
数年前、弟として育てていた孤児だ。

「紅麗！オレもついていくよ！」

紅麗に追いついた小金井はそう告げた。
彼の言葉に紅麗は訝しげな表情を浮かべた。

「…何故ついてきた？」

紅麗は小金井に尋ねた。
小金井の周りには、仲間や友人がいるはずだ。
？火影？が消滅した今、？時空流離？は二度と使えず、もう元の時代に帰ることはできない。
それなのに、何故ついてきた？
仲間や友人を置いて、何故自分のような男についてくる？

紅麗は小金井を拒絶した。
紅麗の非道なやり方に失望し、ついていかないと告げた小金井に対して―紅麗は引き留めなかった。
そして、裏武闘殺陣では―涙しながら残虐非道なことをしてきた紅麗を否定し、本当は優しい人間だと訴えかけた。
だが、その時の紅麗の答えは―否定と拒絶の暴力だった。

内心では小金井のことを想っていた紅麗だが、あえて彼を拒絶した。
紅麗は素直な人間ではない。
自分の本質は悪だと、周りの人間たちにわからせたかったのだ。
だが、それでも小金井は紅麗についてきた。
紅麗は納得がいかなかった。
だから、問う。
何故、ついてきた?
仲間や友人と永久の別れをしてまで、自分のような人間についていく価値と理由がどこにある?

「もう帰ることは―」
紅麗の言葉が言い終わる前に、小金井は紅麗の顔面に飛び蹴りをかました。

「何言ってんだよ!『兄弟になろう』って言ったのはあんただろ!?」

突然蹴られたことに目を丸くする紅麗に小金井は怒りながら言う。

「ずっと一緒にいてやるよ?兄者?!」

目を丸くしていた紅麗は笑みを浮かべた。
小金井に兄と呼ばれるのは―悪い気がしない。
紅麗は小金井の頭を撫でた。

「では、行くぞ…?薫?」

紅麗は先に歩き始めた。

「うんっ!」

小金井―薫は満面の笑顔で頷き、紅麗の後についていった。

しかし、二人は知らなかった。

彼らが流れ着いた場所は過去の世界ではなく、全く違う別世界だということに。

其之一：邂逅　前編（前書き）

邂逅したのは―?.炎の堕天使?.と?.金色の閃光?.。

この邂逅は奇跡。

そして、この奇跡が未来を変える。

其之一：邂逅　前編

時空を渡る秘術―？時空流離？によって、紅麗はとある森林に転移された。
青々とした若葉を透かして、綺麗な木漏れ日が紅麗を優しく照らす。

「ここが…４００年前の世界か…？」

紅麗は周りを見渡しながら疑問を口にする。
しかし、周りは木々ばかりで４００年前の世界とは判断できない。

「…？薫！？…薫っ！」

紅麗は、一緒に時空を渡った義理の弟がいないことに気付き、彼の名を呼ぶ。
しかし、周りを見ても彼の姿はなく、呼んでも返事がない。

（…一緒に？時空流離の穴？を通ったのだから、この世界にいるはずだが…）

もしかしたら、どこか近くの場所にいるかもしれない。紅麗はそう判断し、薫を探すと同時にこの世界が４００年前の世界なのか確かめるために森林を歩く。
その時、森林の奥からカプセル型の機械が数機、紅麗の前に現れた。

（…何だ、こいつらは？）

紅麗は目の前にあるカプセル型の機械―？この世界？で言うガジェット・ドローンのことを知らず、訝しげな表情を浮かべる。

だが、ガジェットの正体を考えるよりも先に、ある絶望的な確信をした。

（機械が存在しているということは…！ここは…４００年前の世界じゃない…！？）

見たところ、目の前にある機械は自律稼動型の機械。
４００年前の世界に機械なんて存在しない。
つまり…

（？時空流離？が失敗したというのか！？なら、この世界はいったい―）

紅麗が思考を巡らしている間に、ガジェットは黄色のカメラアイから青白い光線を放つ。
意識を現実に戻した紅麗は光線を回避する。

「ガラクタが…灰にしてくれる…！」

思考を邪魔されたことに苛立ちながら、紅麗は己の手から、最大の武器である？炎？を出そうとする。

彼は、？炎術士？と呼ばれる？火影一族？に代々伝わる炎の術者である。
？火影一族？だけとはいえ、？火影？の誰もが炎を使えたわけではなく、選ばれた人間のみの力だった。
炎術士としての力は父から子へ…そのまた子へと受け継がれ、それが火影頭首としての証でもあった。
術者によってその炎の姿は様々…大きい炎、小さい炎、赤い炎、青い炎―炎は術者の心を写す鏡と言われている。

しかし、炎を出そうとした紅麗はあることを思い出した。
?火影?が滅んだ今?火影?に関わる全てのものが消える―。
つまり、炎術士である紅麗は炎を出すことができない。
炎が使えなくても、素手で人体を破壊することができる腕力を有しているが、機械相手だと少し骨がいるかもしれない。
仕方なく、紅麗は徒手空拳で戦おうと判断した時―不思議なことが起こった。
紅麗の左手に、真紅色の炎が発生したのだ。

「…!!?」

驚愕した紅麗は目を見開いて、炎を纏う自分の手を見下ろす。
何故、炎を出せたのか疑問に思うが、考えている暇はない。
今すべきことは―眼前の敵を焼き払うこと…!
紅麗は一体のガジェットに左掌を向け、火炎放射器のように炎を放った。
ガジェットは為す術もなく炎に飲み込まれ、瞬時にボディを溶かされ、爆発した。
紅麗はすぐに別のガジェットに掌を向け、炎を放って破壊する。
残りのガジェットがカメラアイから光線を発射した。
大した速度もない単調な光線の群れを紅麗は上空へ跳躍して回避すると同時に、ガジェットたちに掌を向けた。

「『翅斬(はざん)』!!」

先程より強力で広大な炎が数機のガジェットを全て燃やし尽くした。
破壊されたガジェットの残骸から焦げた異臭が辺りに漂う。
紅覇はそれを意に介さず、自分の手を見つめる。
紅麗は違和感を感じていた。

炎を出せないはずなのに炎を出せたこともそうだが、一番の違和感は炎を出したときだった。
炎術士が炎を出すとき―媒体を使わず、自らの精神力を大気と呼応させ、炎を発動することができる。
だが、先程炎を出してみて、その感覚が少し違うのだ。
同じようで違う、違うようで同じ―。
何とも曖昧だが、上手く言葉に表せない違和感なのだ。

（そして…）

もう一つの違和感。
紅麗は炎を出しながら自分の足元を見た。
そこには、紅き光の刻印―?火影?の刻印がそこにあった。
今まで炎を出したとき、足元に?火影?の刻印など出現しなかった。

（いったい、何なのだ…?）

紅麗は困惑していた。
?時空流離?が失敗し、過去の世界へ行けなかった事―。
炎を出せないはずなのに、炎を出せた事―。
そして、その炎が今までの炎とは違う事―。
予想外の事が起こりすぎて、紅麗はいつもの冷静さを失い始めていた。

「…とにかく…まずは人に会って…この世界について、話を聞かなければな…」

焦燥感に駆られているが、今すべきことはわかっていた。
薫を探しながら、この世界の住人を見つけて話を聞くこと―。
目的を定めて、紅麗は歩き始めた。その時だった。

「待ってください」

物静かで、凛とした女性の声が紅麗の鼓膜を打った。

紅麗は後ろを振り向いた。

一瞬誰もいないかと思ったが、その人は上空にいたから気付かなかった。

黒い衣服の上に白い外套を羽織り、黒い斧のような杖を持ち、長い金髪をツインテールにした女性が地面に降りた。

「時空管理局執務官のフェイト・T・ハラオウンです」

?漆黒の堕天使?と?金色の閃光?が邂逅した瞬間だった。

其之二：邂逅　中編（前書き）

一人は孤独。

孤独は一人。

其之二：邂逅　中編

長々と続く森林の道を少年が一人歩いていた。
大自然特有の清涼な空気―。
煌々とした木漏れ日―。
青々とした木の葉―。
不快に思わせない土の香り―。
絶好な大自然の良さを満喫できる場所なのだが、少年はそれらを意に介する心の余裕はなかった。
そもそも、彼は森林を散歩するために歩いているのではない。

「はぁ…兄者はいったいどこにいるんだよ～…」

少年―薫は辟易した様子で溜め息をついた。
もう歩き始めて何十分も経っている。
最初、この場所に転移された薫は紅麗がいないことに慌てていたのだが、一緒に？時空流離？を通ったのだから近くにいるだろうと前向きな気持ちで探していた。
しかし、いくら歩いても彼の姿はないし、一向に森林から抜け出せずにいた。

「……」

薫はだんだん不安になってきた。

（も、もしかして…兄者だけが戦国時代に行けて…オレだけが別の時代に流されたってことは、ないかな…？）

もしかしたら、ここは明治時代かもしれない…

江戸時代かもしれない…
はたまた縄文時代かもしれない…

「ま、まさか～…」

口ではそう言っているが、ネガティブな妄想が膨らんでいく。

もしかしたら、ここは絶対に脱出不可能な樹海で…自分は一生ここから出られずに、誰とも会えずに餓死―

「やだやだやだやだやだぁぁぁぁぁぁぁぁ～！！！！」

最悪な未来予想図を脳内で描いてしまった薫は悲鳴をあげながら全速力で走り始めた。

「こんな形で死ぬなんてあんまりだぁぁぁぁぁ～！オカマ以外で、誰か助けてぇぇぇぇ～！！…うあっ！」

「きゃっ」

闇雲に走るものだから、薫は誰かにぶつかってしまった。

薫の目の前には、民族衣装のような衣服を着込んだ美少女が尻餅をついていた。

年齢は見た目からして１０歳前後、紫色の長い髪が特徴的だった。

「大丈夫か、ルーテシア？」

少女の傍らにいた壮年の男が彼女の身を案じた。

「おい、お前っ！どこに目ぇつけてんだっ！」

そして薫に怒鳴ったのは、露出度の高い服を着た体長３０ｃｍの少女の小人だった。

身体が小さい上に中空に浮いているのだから、薫は大きく驚いた。

「よ、妖精！？」

「妖精じゃねーよ！つーか、まずはルールーに謝りやがれっ！」

小人にそう言われて、薫はすぐに少女に手を伸ばした。

「ごめんね、大丈夫？どこかケガしてない？」

薫は心配そうに尋ねると、少女は小さく頷き、薫の差し出された手を無視して立ち上がった。

「…ところで、少年。聞きたいことがあるんだが―」

「ああ、オレ、薫っていうの。」

男の言葉を遮り、薫は自分の名前を言った。

「オレは？少年？じゃないよ。小金井　薫って名前がある、お互い名前で呼び合おうよ」

薫は無邪気な笑顔を浮かべながら言い、男も静かな笑みを浮かべた。

「すまなかったな。俺の名は、ゼスト。この娘はルーテシア」

「……」

少女―ルーテシアは挨拶として薫に軽く頭を下げた。

物静かな子だなと、薫のルーテシアに対する第一印象がそれだった。
しかし、彼女から醸し出される物静かさは、どこか哀しさを感じた。
そして、その哀しさがどこかで感じたような感覚を覚えた。

「そして、こいつはアギトだ」
「…よろしく」

小人―アギトはそっぽを向きながら不機嫌そうに言った。
まだルーテシアにぶつかってしまったことを怒っているみたいだ。

（それにしても…）

薫は改めてゼストたち―三人を見つめた。
渋いおじさんに、物静かな美少女、勝ち気な妖精もどき。
何とも、まぁ…統一感の欠片もないアンバランスなメンツだなぁと、
薫は素直にそう思った。

「では、改めて聞くぞ、薫。」
「あ、うん」

名前を呼ばれて薫は思考を中断して返事した。

「お前は、こんなところで何をしてるんだ？一人で遊ぶにしては、
場所がおかしいのではないか？」

ゼストは薫に尋ねた。
それはただの好奇心ではなく、心配げな質問だった。
この山岳地帯の森はとても広大で、近くに街などがない。
狩りとか、風景の絵画とか、昆虫採集など趣味のためならまだ少し
納得がいくが、この少年はそれらしいものを何一つ持っていない。

だから、ゼストは気になったのだ。

「え、えっと…何て言ったら、いいのか…」

ゼストに尋ねられて薫は頭を悩ませた。
?時空を渡る秘術で未来から来ました。ここは戦国時代ですか??
何て言えるはずがない！
珍獣を見るような目で見られ！イタい奴だなと思われ！生暖かい優しさで精神病院に連れて行かれるのがオチだ！！
どう上手く説明するべきか、薫が悩んでいると―

「迷子？」

ルーテシアがそう呟いた。

「――――。」

薫は固まった表情でルーテシアを見つめた。
ゼストもアギトも、ルーテシアを見る。

「絶叫しながら走ってたから、迷子になって慌ててたんじゃないかなって」

推測を喋るルーテシアの言葉は耳に入っておらず、薫は高速に思考を働かせていた。
迷子…だと…？
そんなはずはない。
国語辞典を引用してみると、迷子とは―?連れの人とはぐれたり、道に迷ったりした子供?という意味だ。
迷子のはずがない。

自分はただ義理の兄と一緒に?時空流離?を渡り、この世界にやってきた。
しかし、義兄がいない。
そして、ここは森林。森林なので、どこの時代についたのかわからない。
しかも、広大な森林なのだから、迷ってしま―

(迷子じゃないかぁぁぁぁぁぁぁ!!!)

薫は心の中で絶叫した。
そう、正真正銘の?迷子?だ。
国語辞典に書かれてあることを否定できない。
連れの人とはぐれたし、道に迷っているし、認めたくないが…子供だ。
典型的な?迷子?じゃないか。
薫は自嘲な笑い声をあげた。

「は、ははは…お、おっしゃる通りだよ…ルーテシアちゃん…」

薫はルーテシアの言葉を肯定した。
薫は、見た目は小学生ぐらいに見えるが、現在１４歳。
１４歳にもなれば男としてのプライドが大きく確立している。
だから、誤魔化したかった。
誤魔化したかったが、最悪な状況だからできなかった。
義兄はいないし、ここはいつの時代なのか、わからないのだ。
だから、素直に肯定した上で、この三人に助けを求めるしかないのだ。

「あっはっは!お前迷子なのかよ、ダッセー!」

アギトに笑われた。
な、泣くもんか！泣いたら負けだぁ！
小金井　薫―１４歳の男のプライドの小さな抵抗だった。「アギト、笑うもんじゃない。…薫、あまり気にするな」

ゼストは笑うアギトを叱責し、短い言葉で薫を慰める。
大笑いするアギトとは違い、ゼストは笑わないどころかフォローまでしてくれた。
良い人だ！
ルーテシアは笑ってはいないが、無表情だから内心ではどう思っているのかわからない。
まぁ、笑わないだけ…良い人だ！

「送ってやろう、家はどこだ？」
「いや…家は、？この世界？にはないんだよ…」

少しだけ立ち直った薫は首を振った。

「？この世界？？どういうことだ？」

当然ながらゼストは疑問げに首を傾げた。
薫は、もうヤケだと思いながら正直に話した。

「オレ…兄者と二人で時空を渡る秘術で過去の世界に行こうとしたんだ…だけど、兄者はいないし…ここが戦国時代なのかすら、わからない…だから、家がないんだ」
「…それは、本当のことなのか？」

ゼストは少し驚いた表情で尋ねた。

「うん、本当だよ…イタい奴だって思われるかもしれないけど、オレは嘘を―」
「薫…お前は？次元漂流者？なのかもしれない」
ゼストの言葉に薫は訝しげな表情を浮かべた。
笑われたり、変な奴だと思われるかと思ったが、ゼストは薫の言葉を肯定したのだ。
しかし、次元漂流者とはいったい何なのだろうか？
聞き慣れない単語に薫は首を傾げ、そんな彼に応えるようにゼストは説明を始めた。
「次元漂流者というのは、数多くある次元世界から何らかの原因で別世界へ漂流された者のことをいうんだ」
「…え？」
薫は固まった。
数多くある次元世界…？
別世界？
「えええええ！！？」
時代以前に、話のスケールがかなり大きくなっていた。
まさか、別世界が存在しているなんて思いも寄らなかった。
そんなファンタジーな事実を否定しようにも、否定できない。
アギトの存在が大きな原因だ。
小さいし、浮いている…こんな妖精みたいな存在が、薫に事実を突きつけていた。
ただ、この世界がまだ、地球ではない別世界だと決まったわけじゃない。
薫はこの世界について詳しく聞こうとした時―

「だ、旦那！デカい魔力がこっちに近付いてきた！」

アギトが明後日の方角を睨みながら焦った口調でゼストに叫んだ。

「おそらく、薫の転移反応を管理局が感付いたんだろう。」

ゼストはそう推測し、再び薫に向いた。

「ちょうどいい…薫、これからここにやって来る者は？時空管理局？という組織の者だ。心配しなくても、次元漂流者であるお前を保護してくれる。」

「え、あの…」

「すまない、俺たちは先を急がなければならない。…行くぞ」

ゼストはルーテシアとアギトを促し、その場から走り去っていった。

別れ際にルーテシアがさよなら…と言っていた。

その口調は儚げだが、薫を案ずるような優しげな響きがあった。

薫は、彼女を見たとき―ただの他人のように思えなかった。

彼女からの静かなる雰囲気、感情が見えない表情から―哀しさを感じたからだ。

「笑顔…見てみたいな…」

今置かれた状況を忘れ、薫は無意識に呟いた。

其之三：邂逅　後編

紅麗と薫がミッドチルダに次元転移した同時刻―。
その日、フェイト・Ｔ・ハラオウンは安堵の気持ちでいっぱいだった。
今日、レリックと呼ばれるロストロギアを積んでいるリニアレールがガジェットに襲われているということで？機動六課？の初出動だった。
その時、フェイトは不安と心配の気持ちになっていた。
それは任務に対してではなく、数年前に保護したエリオとキャロのことである。
二人とも１０歳の若さでエリオは陸戦Ｂランク、キャロは竜召喚のレアスキル持ち。
しかし、いくら実力があり、親友であるなのはに鍛えられているからといっても彼らはまだ１０歳―しかもキャロは強大なレアスキルを制御できずにいた。
心配するのは当然のことだった。
だが、キャロはレアスキルを制御することができ、エリオとの連携で新型のガジェットを撃破することができ、任務が完了された。
二人とも大怪我せずに任務を達成したことでフェイトは安堵した。
しかし、戦いはこれからも激化していくかもしれない。
そう思うと、また二人に対して心配してしまう。

（私って…過保護なのかな…）

フェイトが溜め息をついたそのときだった。

『フェイトちゃん、初任務お疲れのとこ悪いんやけど、ちょっとええか？』

フェイトの目の前にモニターが展開され、茶髪のショートヘアの女性の顔が映し出された。
彼女の名は八神はやて。
機動六課の部隊長でもあり、１０年前からの親友の一人だ。

「どうしたの、はやて？」
『実は、フェイトちゃんたちがいる山岳地区の森に次元転移反応が出たんよ。しかも、二ヶ所や。』
「二ヶ所も？」
『せや。一つの反応になのはちゃんが向かった、フェイトちゃんはもう一つの反応に向かってくれへんか？』
「うん、わかった。反応地点を？バルディッシュ？に送って」
『了解や』

そこでモニターが消え、フェイトが持っている黒い杖―？バルディッシュ？に次元転移反応の地点のデータが送られ、フェイトはそこに向かって飛行した。

フェイトは次元転移反応があった大まかな位置に近付いてきた。
すると、フェイトの鼻腔が匂いを感じた。
この匂いは―何かを燃やしたような焦げ臭い匂いだ。
フェイトは匂いを辿った。
そして、見つけた。
燃え盛るガジェットの残骸の周りに佇み、こちらに背を向けている青年を。
きっと転移反応はあの人によるものだろう。
彼はその場から立ち去ろうと歩み始めた。

「止まってください」

フェイトが制止の言葉をかける。

すると青年は歩みを止めて振り返り、フェイトは地面に降りる。

「私は時空管理局・執務官―フェイト・T・ハラオウンです」

所属と名前を名乗ったフェイトは、目の前の青年を近くで見た瞬間―言葉を失った。

赤みがかかった長い黒髪。

全身を覆う黒衣を纏い、腹に黒革のベルトをいくつも巻いている。

かなり特徴的な格好だが、フェイトは何より彼の顔に意識を持っていかれた。

左目の周りに火傷の痕があるが、それを意に介さないほどの端正な顔立ち。

これほど顔立ちの良い男性をフェイトは今まで見たことがなかった。

彼の大人っぽい顔立ちと落ち着いた雰囲気で3つか、4つぐらい年上なんじゃないかとフェイトは思った。

そして、フェイトは彼の紅い瞳にまで意識を向けた。

とても綺麗な瞳だ。

一見すると、氷のような冷たい印象を与えているのだが、それの奥底にある暖かな炎のようなものをフェイトは感じ取れた。

すると、フェイトの心臓の鼓動が早くなり、顔が熱くなってきた。

（な、何だろう…この感覚…）

今まで感じたことがない感覚を覚え、フェイトは狼狽した。

一方、紅麗は突然現れたフェイトに二つのことで驚いていた。

一つは、彼女が空を飛んでいたことだ。
空を飛ぶことができる魔導具の存在を知ってはいるが、それでも空を飛ぶことに驚きを隠せなかった。
そして、もう一つは、彼女が言った？時空管理局？という単語。
名前から察するに、時空を管理する組織なのだろう。
あのカプセル型の機械が現れた時点で確信していたが、少なくともここは４００年前の戦国時代ではないことがはっきりした。
では、ここは遥か未来の世界なのか？いくら未来でも？時空？なんて存在が信じられ、そのための組織が作られている―そんなことがあり得るのだろうか？
いや、未来のことなど―誰にも判断できない。

（もしかしたら…ここは？別世界？なのではないだろうか？）

紅麗は新たな予測を立てた。
それならば少し納得がいく。しかし、強引な予測だ。
？別世界？なのだから、時空を管理する組織が存在する事実、人が空を飛ぶ事実―それらの非常識な事実が？簡単？に納得することができる。
別世界というのは随分と？便利？だなと紅麗は内心で苦笑する。
しかし、紅麗は別世界というものを信じない方だ。
過去の世界、未来の世界とはスケールが全然違うし、別世界が存在するという証拠が皆無だからだ。
しかし、事実だったなら信じる。
とにかく、時空管理局という組織に所属するこの女性に詳しい話を聞こう。
とりあえず、簡単な自己紹介から始めた。

「初めまして、私は紅麗と申します。あなたに聞きたいことがいくつかあるのです、が…」

紅麗は自分の名前を言い、早速フェイトに質問しようとしたのだが、口が止まった。
彼女の様子が少しおかしい。
呆然とした表情で紅麗をじっと見つめていた。

（…？…何かおかしいだろうか…？）

自分の格好だろうか？…まぁ、他の人から見れば、派手だろうが向こうも普通の人から見れば同じようなものだ。
それとも仮面か？いや、仮面は？時空流離？を渡る前に外した。
顔に何かついているのか？
顔…
ああ、そうか…
あくまで予測だが、彼女が呆然と自分を見つめている理由が何となくわかった。

「火傷があるこの顔に驚いているのですか？昔からですよ。負傷したわけじゃありません」

しかし、彼女は無反応。
しかも、顔を赤くしているのは何故だろうか？

「あの…どうかしましたか？」

紅麗は不審げに思いながらフェイトの近くに寄って声をかけた。

「はにゃあっ！！？」

フェイトはようやく紅麗に反応した。

しかし、奇声をあげながら。

「い、いきなり近付かないでっ！あっ、いや、別にあなたのことを拒絶してるわけじゃないの！ビックリしただけだからねっ！嫌いじゃないの！む、むしろ好―って、何を言おうとしてるの、私ったら！と、というか、落ち着け、私～っ！」

ついさっきまで呆然としていたのに、今度はかなり動揺しながらまくし立てている。

紅麗は彼女の様子に目を丸くした後、ふっと小さく笑った。

「ちょっ、ちょっと！何で笑ってるの！？」

フェイトは顔を赤くしながら紅麗を睨む。

しかし、逆に愛らしく見えた。

「いや、すまない。私に話しかけてきたときは凛としていたのに、今はそれが微塵もない。だが、そこが可愛いなと思ってな」

「！！？」

紅麗に可愛いと言われ、フェイトは耳まで顔を真っ赤にした。

今まで周りの人に可愛いと言われてきたフェイトであったが、彼に言われると何故か嬉しさと恥ずかしさが一気に込み上げてきた。

フェイトは何か言おうとするが、口をぱくぱくしているだけで何も出て来なかった。

「あ、あの…その…あ、ありがとう…」

か細く言えたのは、それだけだった。

フェイトは気の利いたことが言えない自分に自嘲しながら紅麗に背

を向けた。

「そ、それじゃあ…私はこれで―」

「いや、ちょっと待て。」

紅麗は白いマントを掴んで、何故か帰ろうとするフェイトを止めた。

「何故帰るんだ。お前は私に用があってここに来たのだろう?」

「…え?あ、ああっ!そうだった!」

紅麗に言われてようやく自分の目的を思い出した。

やっぱり可愛いなと思いながら紅麗は笑う。

「むぅ…また笑った…」

フェイトは頬を少し膨らませながら不機嫌そうに言った。

「す、すまない…ふふっ…」

女性を笑って怒らせるのは失礼だと思って笑いを堪えるが、笑いが止まらない。

「ははっ…お前があまりに、可愛くて…ははははっ!」

「そ、そんなに笑わなくても…ふっ、ふふっ…あははははっ!」

フェイトもまた笑った。

二人は笑い合った。

紅麗は笑いながら思う―無垢な気持ちでこんなに笑ったのは初めてかもしれないと。

フェイトは笑いながら思う―彼の笑った顔も魅力的だと。

二人は笑いながら思う―お互いが笑い合っているだけで嬉しさが込み上げてくるのは何故だろうと。

薄暗く、広い空間に白衣の男がモニターを見ていた。
彼の横にある通信用モニターに紫髪の女性が映し出されている。

『刻印ナンバー9、護送体勢に入りました』

彼女の言葉に男は頷く。

『追撃戦力を送りますか?』
「やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ」

そこで会話を打ち切り、手元の端末を操作する。
中空にある大型モニターに機動六課のメンバーの映像が映し出される。

「それにしても…やはりこの案件は素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材が揃っている上に…」

切り替わったモニターの画面にフェイトと赤髪の少年が映し出され、男は笑みを浮かべる。

「特にこの子たち―生きて動いている?プロジェクトF?の残滓を手に入れるチャンスがあるのだからね。そして…」

また画面が切り替わり、そこに映し出されたのは真紅の炎を操る黒

衣の男―紅麗だった。

「彼はいったい何者だろうか？ＡＭＦを破る炎の射撃…そして、足元に浮かぶベルカでもミッドでもない魔法陣―いや、刻印というべきか。ふむ…？調べて？みたいものだ」

男が歪んだ笑みを浮かべた。

その時、どこからか轟音が鳴り響いた。

一度だけではない、何度も何度も鳴り響いている。

時折、野獣のような叫び声も聞こえる。

「…おやおや、お目覚めにしては産まれたての赤ん坊以上に騒がしい」

男は呆れながら肩をすくめた。

『ドクター、よろしかったのですか？あの男を助けるなど…初めて見たときから、危険を感じました。』

女性が再び口を開いた。その口調には不満さが含まれていた。

「ふふっ…確かにね。だけど、私は？これは良い戦力になるかもしれん？という確信もあった。」

そこで男は冷笑を浮かべた。

「なぁに…暴れ回る獣には？首輪？をつければいい」

その目、その笑みには―人を物だと主張するような冷たさがあった。

男が軽い足取りで轟音が鳴り響く所へと歩んでいった。

其之四：ミッドチルダ

「それで…この辺りに次元転移の反応があったんだけど、あれはあなたなの？」

フェイトは本題に入り、真摯な口調で紅麗に尋ねた。

「次元転移…確かに、私は過去へ行くために時空を渡る秘術を使った。」

紅麗は残念げな溜め息をつきながら首を振る。

「だが、どうやら失敗したみたいだ。過去へ行くつもりが…どうやら未来、か…別世界へ来たようだ」

「！？」

フェイトは驚愕に目を見開いた。

紅麗が次元転移の魔法を使えたことにも驚いたが、次元転移というものは遠く地域や別世界へ行けるもので、過去の世界や未来の世界に行けるなんて不可能だ。

詳しく聞きたいが、機動六課の隊舎で事情聴取するべきだろう。

彼の口振りから察するに、彼は自分の意思に反してミッドチルダ（この世界）に次元転移したのだろう。

そんな状況ならば？次元漂流者？として彼を保護することができるし、ちょくちょく彼と会える―って、何おかしなこと考えてるの私ったら！！

フェイトは頭を振って邪念（？）を振り払い、顔を赤くしながら紅麗に提案した。

「そ、それなら…私たちのところへ同行してくれないかな？私たち―時空管理局はあなたのような次元漂流者を保護するのも私たちの仕事なの。お互い詳しい話を聞きたいし、あなたに対するデメリットはあまりないはずだから」

提案された紅麗は沈黙しながら思考する。
時空管理局がどんな組織かわからないが、保護するということは悪いように扱われることはないだろう。
彼女の言うように、詳しい話を聞きたいしデメリットはあまりない、未知なる世界で単独で行動するよりずっと良い。

「…わかった、同行しよう」

紅麗がそう答えると、フェイトは顔を赤くしながらお礼を言った。
そこで紅麗は思い出しようにフェイトに尋ねた。

「そうだ…私の義弟を見かけなかった？右の手首にバンダナを巻いていて、小学生に見えるが１４歳の少年なんだが…」

本人の薫が聞いていたら確実に怒る発言だ。

「少年…？私は見かけてないけど、私の友達がもう一つの次元転移反応の地点に向かってて…ちょっと待ってね。今、確認するから」

そう言うと、フェイトは目を閉じた。
紅麗が訝しげに思いながら彼女を見つめ、数十秒後にフェイトを目を開けた。

「私の友達が少年を保護したって。右の手首にバンダナ巻いてて、小金井　薫くんって名前なんだけど」

「間違いなく、私の義弟だ。そうか…あいつもこの世界にいたか」

薫もこの世界に来ていたことに紅麗は安堵した。

「私の部隊のヘリがここに来るから、あなたはここで待ってて。本当は私も同行したかったんだけど、置きっぱなしにした車取りに行かなきゃいけないから」

「ああ、わかった。…すまないな、これから色々と世話になる。」

紅麗が申し訳なさそうに言うと、フェイトはううん、と首を振った。

「保護するのは当然のことだし、謝ることはないよ。逆に、私は嬉し―って、違う！」

フェイトは顔を真っ赤にしながら叫んだ。

（大丈夫なのか、彼女は…？）

呆然としたり、顔を赤くしたり、いきなり叫んだりするフェイトを紅麗は生暖かい気持ちで心配し始めた。

「そ、それじゃ、私はこれで…あ、そうだ。あなたの名前、何ていうの？」

フェイトは紅麗の名前を聞いていないことを思い出して、名前を尋ねた。

「紅麗という」

紅麗は短く答える。

一回言ったはずなんだが、その時フェイトが何故か呆然としていたから聞いていなかったみたいだ。
それを指摘したらまた彼女は恥ずかしがるだろう、その仕草が可愛いのだが…

「む…何か失礼なこと考えてた？」

フェイトはジト目で紅麗を見つめる。
かなり鋭い。

「考えてるわけがないだろう。…それより、車を取りに行った方がよいのではないか？」

紅麗は彼女の言葉を適当に否定し、車を取りに行くよう促す。
フェイトは納得がいかない表情をしていたが、車を取りに行くのが最優先だと思い、上空に飛び上がった。

「それじゃ、隊舎でまた会おうね」
「ああ、またな」

フェイトは飛行して去っていき、紅麗は改めて自由に飛行できることに驚かされた。
しばらくすると、大型のヘリがこちらに近付いてきた。
あれがフェイトが言っていたヘリだろう。
ヘリがゆっくりと紅麗の元へ下降し、プロペラの風圧によって紅麗の長い黒髪がなびき、周りの木々の葉がざわざわと音を立てる。
ヘリが着陸し、後部のハッチが開くと一人の少年がこちらに走ってきた。

「兄者ぁぁぁぁぁ～！！！」

薫だった。
よほど見知らぬ地で再会できたことが嬉しかったのだろう。
目に涙を浮かべながら紅麗の元へ走り、抱擁するように飛びかかってきた。

「無事でよかった、薫」

紅麗はそう言いながら薫を回避。

「ぎゃふっ！！？」

結果―薫は地面にダイブするはめになった。

「ひ、酷いよ、兄者ぁ…兄者と再会できて、オレすっごく嬉しかったのに…」

薫のそんな悲痛な言葉を無視し、紅麗は栗色の長い髪をサイドテールにした女性と話をしていた。

「初めまして、私は時空管理局・機動六課の高町なのは一等空尉です。」

女性の名は高町なのは。１９歳の若さで世間では？エース・オブ・エース？と謳われている凄腕の魔導師。
また、裏では？管理局の白い悪魔？とも呼ばれている（悪口）。

「紅麗さん、ですよね？フェイトちゃ…フェイト執務官から多少の話は伺っております。機動六課の隊舎へ案内しますので、どうぞヘリの中へ」

なのはに促され、紅麗はヘリへ乗り込み、薫もぶつぶつと不満を呟きながらヘリに乗った。
紅麗がヘリの中に入ると、三人の少女と一人の少年がいた。

「あ、紹介しますね。彼女たちは機動六課のフォワードメンバーです」

なのはがそう説明すると、フォワードメンバーの四人は順々に自己紹介を始めた。

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

オレンジ色の髪をツインテールにした少女―ティアナは真面目さを醸し出しながら頭を下げた。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

青髪のボーイッシュな少女―スバルは持ち前の元気の良さで自己紹介した。
その時、紅麗は軽く頭痛を覚えた。何故だろうか…彼女を見ていると、向こうの世界の馬鹿でお調子者の愚弟を思い出す…

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」

赤髪の少年―エリオは敬礼しながら元気良く名乗った。
紅麗はエリオと薫は同い年ぐらいだろうと思ったが、実際は四つもエリオが下だ。

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。そして、この子はフリードで

す」
「キュクル～！」
桃色の髪の少女―キャロは自分の名乗った後、胸に抱えた小さな白い飛竜―フリードを紹介した。
「――――。」
紅麗は呆然とした表情でフリードを見据えた。
竜なんて伝説上の生物が存在していたことに紅麗は驚きを隠せなかった。
そんな彼に薫がにやにやしながら話しかけてきた。
「兄者もビックリしたでしょ？見ての通り、竜なんだってさ。…まぁ、さらに？驚く事？があるんだけど」
「？驚く事？？薫、それはどういう意味―」
紅麗が詳しく聞こうする前に、？彼女？は現れた。
「はじめまして、機動六課・部隊長補佐及びロングアーチスタッフ―リインフォース？空曹長ですぅ♪」
「！！？」
なん…だと…！？
紅麗は目を大きく見開いた。
その驚愕はフリードの時とは比べものにならない。
長い銀髪で可愛らしい女の子の容姿までなら問題無い。
だが、身体の大きさが３０ｃｍな上に浮いているのだ。
異常。明らかに異常だ。

「あっはっは！すっごいビックリでしょ、兄者！この世界、妖精までいるんだぜぇ！」

薫が笑いながらそう言うと、リィンは頬を膨らませながら猛反発する。

「薫くん！リィンは妖精じゃないって言ってるじゃないですかぁ！確かにリィンはとっても可愛らしくて、体型がちょ～っと！ちょ～っと小柄ですけど！妖精じゃないです！」

紅麗は指で眉間を押さえた。

「本当に…何なのだ、この世界は…？」

困惑する紅麗を見て、なのはは苦笑いを浮かべた。

「あ、あはは…まぁ、紅麗さんは次元漂流者ですから、驚くのも無理ないですよ」

機動六課の隊舎に着くまで、紅麗と薫はなのはからこの世界―？ミッドチルダ？についての話を聞いた。

数多くある次元世界を管理する時空管理局のことや、？魔法？というメルヘンな存在のことを聞き、最初紅麗と薫は信じられない顔をした。

紅麗たちの世界でも、炎を自在に操る者や、様々な能力を発動する魔導具、時空を渡る秘術、不老不死など―非現実的な事実が存在するが、数々の別世界や魔法の存在もまた非現実的な事実だ。

だが、非現実的なものでも、事実なら事実。決して否定できないものだ。

故に、紅麗たちは事実の受け入れることにした。

「あ、見えてきました。あれが、機動六課の隊舎です」

なのはは窓から見える白くて大きな建物を指差した。

紅麗は薫と窓から機動六課の隊舎を見つめる。

その場所は?きっかけ?だった。

?不死鳥を携えた炎の堕天使?と?六つの顔を持つ金の少年?—異界の戦士たちの誕生のきっかけでもあり、運命を変えるきっかけでもあった。

其之五：機動六課

機動六課の隊舎に到着し、紅麗たちを乗せたヘリは隊舎の屋上の停留所に着陸した。
一番最初に声を発したのがなのはだった。

「フォワードの皆、初出動お疲れさま。ちゃんと練習通りにやれたみたいでとても良かったよ」

フォワードの四人は安堵の笑顔を浮かべた。

「これから空き時間をあげるから自室で休むのもいいし、無理しない程度に自主練するのもいいし、好きなように時間を有効的に使ってね」

スバルたちは大きな声で返事をした。
なのはは満足げに微笑み、紅麗と薫に顔を向けた。

「それでは、部隊長室へご案内しますのでついて来てください」

なのはとリィンが先導しようとした時―
甲高いサイレンの音とエンジンの重低音が紅麗たちの鼓膜を強く打った。
しかも、その音がこちらに近付いてくる。
なのはたちは屋上の塀に寄りながら音の正体を探す。
隊舎の前にある真横の長い道路の左側から、音の正体が紅麗たちの前に姿を現した。
漆黒のスポーツカーがサイレンを鳴らしながら物凄いスピードで近付いてくる―まるで咆哮をあげながら獲物を全速力で追いかける黒

豹のようだ。

（あれ…？あの車…どこで…）

なのはにはあの車に心当たりがあった。
そして、スポーツカーは速度をほとんど殺すことなく車体の向きが正反対になるように、プロのドライバー顔負けの華麗なドリフトをして隊舎の前に停車した。

「ふぅ…間に合ったかな」

安堵の呟きを漏らしながら車から出てきたのは―フェイトだった。

「ちょっ、ちょっとフェイトちゃん！！？」

なのはは塀に寄りかかりながらフェイトに叫んだ。
なのはの声が聞こえたのかフェイトはなのはに顔を向けると、輝かしいオーラを纏いながら素敵な笑顔で手を振ってきた。

「何そのリアクション！？とゆうか、隊舎に帰るためだけに何で緊急走行してるの！？」

なのはの尤もな言葉に賛成とばかりに紅麗とティアナは頷く。
しかし、リィン・スバル・エリオ・薫の四人は「ドリフト、カッケェ！！」と瞳を輝かせている。
キャロは何とも言えない苦笑いを浮かべている。
一方、フェイトはなのはの問いかけに、何故か頬を染めながらモジモジしていた。

「何でそのリアクション！？職権乱用の理由がそんなに恥ずかしい

の！？」

なのはの言葉を無視し、フェイトは走って隊舎の中へ入っていった。

なのはは溜め息をついた。

「…フェイトちゃん、どうしたんだろ？何か様子が変だし…」

「ドリフトがメチャメチャカッケェです！」

「いや、関係ないから」

リィンの力説をなのはは軽く返し―

「いやぁ…それほどでもないよ」

ドリフトをかました張本人がすぐ近くにいた。

「フェイトちゃん！？いつの間に―」

「フェイトさん、ドリフトすごくカッコよかったです！」

「すごい、すごいっ！」

エリオと薫がフェイトを褒め称え、フェイトはまんざらでもない様子だ。

「あははっ、努力の賜物だよ」

（私たちが見てないところで努力してたんだね…）

褒めるべきなのか呆れるべきなのか、なのははよくわからなかった。

「ねぇ、ティア！ティアもバイクでさっきみたいなドリフトを―」

「できるかっ！！」

期待の眼差しを向けながら無理難題を言うスバルにティアナは怒鳴りつけた。
一向に話が進まず、痺れを切らした紅麗は溜め息混じりに口を開いた。

「…早く部隊長室とやらに案内してほしいのですが」

彼の言葉でなのはたちはようやく目的を再認識された。

「そ、そうですね。では、案内いたします。…じゃ、スバルたちは自由に時間を使ってね」

なのはの言葉にエリオとキャロは元気よく返事をし、ティアナは「ドリフト、やって～！」とすがりつくスバルの頭を叩きながら返事した。
なのはとフェイトとリィンが先導して歩き、紅麗と薫は彼女たちについていった。

「じゃあ、ドリフト教えて～！」
「じゃあって、何よ！？できないっつってんでしょ！？」

スバルとティアナのコントはしばらく続いた。

紅麗たちが隊舎を歩いていると、すれ違う局員たちが紅麗と薫を見て様々な反応を示す。
派手な格好をしている紅麗に好奇な視線を向ける者もいたり、彼らの姿を一瞥してすぐに仕事に戻る者もいたり、紅麗と薫の容姿を見て黄色い声をあげている女性局員もいる。

しばらく歩いていると、前方からピンク色の長髪をポニーテールにした長身の女性と赤い髪をおさげにした少女が歩いてきた。

「あ、シグナムさん、ヴィータちゃん」

なのはが二人の名前を呼ぶ。

「なのは、こいつら誰だ？」

赤髪の少女―ヴィータが紅麗たちについてなのはに尋ねた。

「背が高い人が紅麗さん、ちっちゃい方が薫くんだよ。次元漂流者ということで、はやてちゃんと一緒に事情聴取するから部屋まで案内していたの。」

なのはの説明を受け、ヴィータは紅麗たちに顔を向けた。

「ヴィータだ、よろしく」

ぶっきらぼうな口調で自己紹介した。

「ここ、意外と子供が多いね」

薫がぽつり呟くと、ヴィータのこめかみに血管が浮かぶ。

「あんだと！？てめぇも子供じゃねぇか！」

「なっ！？そっちの方が子供じゃないか！」

「ハッ！年齢的にはこっちの方が何十倍も生きてんだよ！」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて。ね？」

低レベルな口論を始めたヴィータと薫をフェイトが優しくなだめる。
まるで子供の喧嘩を止める母親のようだ。
一方、長身の女性―シグナムが、竜の眼のような鋭い瞳で紅麗を睨んでいた。

「…何か？」

紅麗は彼女の睨みに一切臆さず無表情で尋ねる。

「ダメですよ、シグナム。初対面の人を睨んじゃっ」

リィンが人差し指を突きつけながらシグナムを注意する。
しかし、シグナムはリィンを無視して敵意を含んだ目で紅麗を睨み続け、紅麗も彼女の目線を外さずに見据える。
ただならぬ雰囲気が辺りを包み、口喧嘩していたヴィータと薫も二人の様子を見ていた。
やがて、シグナムはゆっくりと口を開いた。

「ここで良からぬ事をするなよ」
「…仰っている意味がわかりません。」

紅麗は無表情のまま、礼儀と皮肉を込めて敬語で返す。
彼の言葉に応えるように、シグナムが理由を口にする。

「お前から？血の匂い？がする」
「！！？」

その場にいるほとんどの人間が驚愕した。
しかし、紅麗は―

「ほう…鋭いな、女」

笑みを浮かべ、敬語を消した。
その笑み、その口調、その声、その雰囲気は—先程までの穏やかなものではなく、とてもとても…氷のような冷たいものだった。
突如豹変した紅麗になのはたちは恐怖した。
特にフェイトは恐怖と同時に驚愕していた。
笑い合った時の彼の笑顔が印象的だったため、今ではまるで別人のように見えた。

「…早く元の世界へ帰るがいい。それまで、この世界で良からぬ事をするな」

シグナムはそう言い終えると、身を翻して歩いていった。
ヴィータも紅麗を一瞥してシグナムについていった。

気まずい沈黙が流れ、最初に口を開いたのはフェイトだった。

「…あの…ごめんなさい、紅麗。その…シグナムは良い人なんだけど—」
「いや、気を遣わなくてよい。それよりも、部隊長室へ向かおう」

紅麗はフェイトの言葉を遮り、目的を促した。

「あ、うん…」

紅麗がいつもの穏やかな表情に戻り、フェイトたちは安堵し再び部隊長室の案内を始めた。
きっと紅麗はシグナムの言葉に怒っただけだろうと、フェイトは思

った。
いや、思いたかった。
そして、認めたくなかった—先程の紅麗の冷たい表情が、彼のもう一つの顔だということを。

フェイトたちが部隊長室へ入ると、出迎えたのは茶色のショートヘアの女性だった。

「初めまして。私は機動六課の部隊長—八神はやてです」

紅麗と薫は驚愕した。
まさか部隊をまとめる者が若い女性だとは思わなかった。
先程から思っていたが、この部隊はやけに女性が多い。しかも、ルックスがいい。
普通の男たちならば大いに歓喜できるハーレムなのだが、紅麗と薫はそんなことで大喜びする男ではない。

「それでは事情聴取を始めますので、どうぞ座ってください」

はやてに席を勧められ、紅麗と薫はソファーに座り、その前のソファーにはやて・フェイト・なのはが座った。

「それじゃ、ここに来るまでなのはちゃんにこの世界についての話を聞きましたね？私たち—時空管理局はあなた方のような次元漂流者を元の世界へ戻すことも仕事の一つなんです。せやから、あなた方がいた世界について話してもらえますか？」

紅麗が僅かに沈黙した後、挙手しながら口を開いた。

「…その前に一つ確認したいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」
「ええですよ、何ですか？」
「あなたは地球の―日本の出身ですよね？」
彼の言葉にはやてたちは驚愕した。
そのリアクションからして当たりだろう。
「え…何でわかったの、兄者？」
「高町一等空尉もそうだが、彼女の名前の響き…そして、喋り方が？奴？にそっくりだろう？」
「？奴？？…あ、確かにっ！」
薫の頭の中に真っ先に思い浮かんだのは、やたら自分とタイマンで戦いたがっていた関西弁を喋る男。
「え、じゃあ…オレたちの世界って…」
「彼女と同じ世界。違いますか、八神部隊長？」
「あ、は、はい…すごいですね、紅麗さん…そんなとこに気付くなんて」
別の世界へ飛ばされた状況の中、普通は冷静でいられないはずなのに、彼は冷静さを失わずはやての名前と喋り方で同じ世界の出身ではないかと指摘した。
はやてたちは彼の冷静さに驚かされた。
「じゃあ、同じ世界の出身だからすぐに帰すことができるね」
フェイトは嬉しさと残念さが混じった複雑な表情で言った。

しかし、紅麗は何故か不安が消えなかった。

「…一応、私たちの世界のことをお話しましょう」

紅麗は不安を抱えたまま自分の世界について話した。

火影の事―。

魔導具の事―。

森光蘭が率いる裏麗を滅ぼし、４００年前の世界へ行くために時空を渡る禁断の秘術―時空流離を使って薫とともに時空を渡った事―。

そして、流れ着いた先がこの世界だった事―。

紅麗が話し終えるとはやてたちは信じられないような顔をした。

無理もない。紅麗たちもこの世界について話を聞いたときも同じ心境だった。

「…はやてちゃん、魔導具とか時空流離とか…私たちの世界にあるのかな？」

なのはは不安そうな顔ではやてに聞き、はやてもまた気まずそうな顔をした。

そして、意を決した表情を紅麗たちに向けた。

「紅麗さん、薫くん…申し訳ありませんが、あなた方がいた世界へは一生帰れないかもしれません。話を聞いていると…そんな秘術や技術が私たちの地球にあることを―管理局がずっと気付かないわけがないと思います。つまり、紅麗さんたちがいた世界は―」

「平行世界―そして、平行世界には対処することができない、ということですか？」

「申し訳ありません…時空管理局といっても、過去・未来の世界や

平行世界には対処できないんです。私たちにできることと言ったら…保護して、衣食住を提供することしか…」

はやては自分の無力さに沈痛な面持ちで謝罪した。フェイトたちも彼女と同じ表情をしている。
しかし、紅麗は首を振った。

「気にすることはありません。私は向こう世界で大切な者たちに別れを告げました、心残りはありません。」
「うん。オレも…学校の友達に別れを言えなかったけど、仲間には別れを言ったしね。」
「そういうことです、あなた方が責任を感じることはありません。むしろ、衣食住を提供してくれるだけで私たちには十分過ぎます」

紅麗の優しい言葉がはやてたちの悲痛の気持ちを和らげ、彼女たちは笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます…優しいんですね、紅麗さん」
「そっ！兄者、すっげぇ素直じゃないけど優しいんだぜ？」
「五月蠅い。」

紅麗は片手で薫の両頬を押さえ、薫はもがっもがっともがく。
二人の様子にはやてたちは大きく笑った。

「…そうだ。もう一つ確認したいことがありました」
紅麗は思い出したように言いながら薫から手を放した。

「確認したいこと？いったい、何ですか？」

はやてが尋ねると、紅麗はソファーから立ち上がり、左手を掲げた。
すると、紅麗の足元に火影の刻印が浮かび、彼の左手に紅い炎が現れた。

「コレは、炎術士である私が前の世界で戦いのために使ってきた炎です。しかし、少し違うのです。火影が滅んだことで炎は出せないはずなのに出せたこともそうなのですが…以前は炎を出すとき足元に火影の刻印が浮かばないし、炎を出すときの感覚に微妙に違和感がある。魔法を扱うあなた方なら、わかると思ったのですが」

紅麗は炎を消して、フェイトたちに尋ねてみた。
フェイトたちは顔を見合わせた後、紅麗に顔を向けた。

「多分、紅麗が今炎を出せているのはリンカーコアによるものだと思う」
「…リンカーコア？何だ、それは？」

フェイトの言葉に紅麗は首を傾げた。

「リンカーコアというのは魔法を使うための重要な機関なの。足元にある魔法陣―いや、刻印というべきかな…それがミッドでもベルカでもないんだけど、紅麗には魔法の素質があると思う。…ちょっと試してみるね」

そう言うと、フェイトは口を閉じる。
しかし、

『聞こえる、紅麗？』
「！？…何だ、これは？」

頭の中にフェイトの声が聞こえてきた。

『紅麗もやってみて。心の中で相手に語りかけるように』

フェイトの説明を受け、紅麗は半信半疑になりながら実践してみる。

『…こうか？聞こえるか、フェイト？』

『うんっ。ちゃんと聞こえるよ』

フェイトは満足げな笑顔を浮かべる。

「これが念話っていうものなの。魔力を持たないとできないことなんだよ」

「あ、じゃあ！オレにもやってみて！」

薫は期待に目を輝かせながら言った。

フェイトは穏やかに頷くと、薫にも念話を送ってみる。

『どうかな、薫くん？』

「すっげぇ！ホントに聞こえた！テレパシーだぁ！」

薫は興奮しながら言い、フェイトにも念話を送る。

『あー、あー。聞こえる？』

『うん、バッチリ』

フェイトは念話で喋りながらＯＫサインを送る。

「すごいね、二人とも魔力を持っているんだね」

紅麗と薫が魔力を持っていたことになのははは驚嘆する。
一方、はやては顎に手を当てて何やら考え込んでいた。
すると、はやては紅麗と薫に真摯な表情を向けて口を開いた。

「紅麗さん、薫くん。魔導師として、うちの部隊に入ってくれませんか？」

突然の彼女の言葉にフェイト・なのは・リィンが驚いた。

「ちょっとはやてちゃ―」
「もちろん、強制やないで。」

なのはの言葉を遮り、はやては続ける。

「正直申しますと…管理局は万年人手不足で困っとるんです。私の部隊は新人が多いし、私も含めて隊長たちは魔力のリミッターをかけられとります。魔力もあり、戦闘経験もある紅麗さんたちの力が必要なんです」

はやては紅麗たちが少しでも断りやすいように、あえてすがらないように頼んだ。
もちろん、戦力は欲しい。
人手不足だし、戦力の保有制限によって機動六課の隊長たちにリミッターがかけられている。
紅麗たちがどれほどの実力かわからないが、低ランクの魔導師として高い戦闘力を持つであろう二人の切り札を迎え入れたい。
しかし、強制をするものじゃない。
彼らは彼らで元の世界で戦いを終えた。そんな彼らをまた戦わせるのも気が引ける。

ここからは彼らの意思。
たとえＮｏでも構わない。

（…どうすんの、兄者？）

薫は隣に座る義兄を見上げながら小声で尋ねる。
しかし、彼が尋ねる前には紅麗は思案していた。

―どうするべきか…。

行こうとしていた？過去の世界？へは行けない。
？元の世界？へも帰れない。

？元の世界？では家族や仲間たちに今生の別れを果たした。
帰りたい気持ちはなくもないが、帰れなくても割り切れる。

―しかし…？過去の世界？へ行けないのは…。

紅麗は表情に出さず、内心で苦渋した。

彼が？過去の世界？へ行きたいのは、二つの目的があるからだ。

愛する母と、尊敬する父の墓を作る事。

一族の仇である織田信長をこの手で討つ事。

それが、紅麗の義務だ。

己が無力故に、愛する両親のために戦う事すらできず、見捨てて逃げてしまった情けない己の義務。

しかし、？過去の世界？へは行けない。
そんな事実を言われて、納得できるはずがない。

―…？時空管理局？…。

紅麗は、目の前にいる少女たちが所属する組織名を内心で呟く。
数多くの世界を管理する―という事だが、平行世界や過去・未来の世界には対処できない。

―…彼女たちの言葉を信じていないわけではないが…。

果たして、本当に対処できないのだろうか？
多くの次元世界を管理する組織があり、魔法と呼ばれる未知なるも

のまで存在する世界なのだ。
勝手なイメージだが、過去の世界へ行ける方法もあるのではないだろうか？
彼女たちが知らないだけかもしれない。
このまま一般人として独自に調べようかと思ったが、右も左もわからない状態でこの未知なる世界で調べられるのかと不安が募る。

時空管理局という組織に入ったとしても、一般人には閲覧できない資料がたくさんあるかもしれないが、所属した時点で行動に大幅な制限がかかってしまうだろう。

―…どちらを選ぶか…。

独自に調べるのか。
組織に所属して調べるのか。

紅麗は熟思した結果、

「―わかりました、協力しましょう」

「ほ、ほんまですか！？」

はやての表情が明るくなった。

「ええ、そちらに就いた方が都合が良さそうです」

「うんっ。困ったときはお互い様だし、オレは魔法を使ってみたいしね」
「ありがとうございますっ！」

はやては紅麗と薫の手を握ってぶんっぶんっと上下に振って大喜びする。
その陰でフェイトは小さくガッツポーズをして喜びを噛み締めていた。

「えっへへ～、早速カリムに裏工作をた～のも～♪」

え、裏工作…？

紅麗たちは複雑な眼差しではやてを見つめた。

こうして、紅麗と薫の機動六課入隊が決まった。

其之六：名の無い男（前書き）

青年は自由な存在―流れる雲のように。

其之六：名の無い男

とある森の中で、青年が仰向けになって倒れていた。
青年は長い金髪に、ベージュ色のズボンを穿き、青いタンクトップを着ている。
しかし、タンクトップの胸の部分に大きな穴が空いており、生地が赤黒く染まっていた。
それもそのはず。
青年の胸は何かに貫かれたような大きな風穴が空き、傷口からおびただしい量の血が溢れていた。
青年は重い瞼を開け、自分の血がべったりとついた手を見つめる。

（自分…かなりの大ケガしとるみたいやな…まったく動けへん…）

青年は大量の出血によって薄れていく意識の中で自分の酷い状態を？冷静に？確認する。
意識が薄れるほどに弱っているのだから、致命傷を負っていても焦る気持ちすら湧かなかった。

（ここは…どこや…？）

青年は目線だけで周りを見渡す。
視界に入るのは、真っ正面に白い雲が流れる青い空。そして、自分の周りは木々ばかり。
どこかの森だとわかったが、何故ここにいるのだろう？しかも、大ケガをしながら。
青年は記憶を探る。

（…あれ…？思い出せへん…）

ここにいるまでの経緯、大ケガをしている経緯が何も思い出せないのだ。
それだけでなく、

（自分は…誰や…？）

青年は自分の事すら思い出せなかった。
名前も思い出せなかった。

（待てや…何もわからずに死ぬいうんか…？）

笑えない状況だ。
自分の事すらわからずに死ぬのはあまりに滑稽じゃないか。
だが、

（まぁ…もうじき、自分は死ぬみたいやし…別にいっか…）

もう死期は目の前だと悟り、青年はあっさりと諦めた。

簡単に諦めることができたのは記憶がないからだ。
記憶があったなら、自分がやりたい事―生きる理由もある。
しかし、記憶がなければ生きる理由もない。
記憶を取り戻すために生きたい―それを生きる理由として、生きるために抗うこともできる。
だが、青年はそういう考えを持たなかった。
どうせこんな人気がない所で助かる見込みは皆無に等しく、助かったとしても、その先どうすればいいのかわからない。

青年が瞳を閉じたその時だった。

「おい！どうしたんだよ、お前！？」

言葉使いが荒い少女の声が聞こえた。

「ひ、酷いケガじゃないっすか！？生きてるっすか！？」

「生きてるみたいだけど…助かるかな？」

さらに二つの別の少女の声も聞こえた。

青年が目を開けると、青いラバースーツを着込んだ赤髪の少女と濃いピンク色の髪をポニーテールにした少女と水色の髪の少女が見下ろしていた。

（ははっ…死ぬ前に可愛い女の子に会えるなんて、ちょっと嬉しいわ…）

青年は緊張感のない言葉を内心で呟き、意識がなくなると同時に視界が真っ暗になった。

とあるラボ―。

白衣を着た紫髪の男―ジェイル・スカリエッティは、今日という日をとても歓喜していた。

時空管理局に興味深い素材が多く揃っていたからだ。

特に？プロジェクトF？の残滓―フェイトとエリオのことや、ミッドでもベルカでもない炎の魔法を使う青年の存在が実に興味深かった。

そして、今日は？良い拾い物？をした。

スカリエッティは?男?を見て?これは使える?と確信した。
その男はいつ死んでもおかしくない重傷を負っていたが、なかなかしぶとい男だ。
そして、男をすぐに治療してしばらく放置していたのだが、男は目を覚ました瞬間―暴れまわりながら野獣のような咆哮をあげた。
まだ怪我が治り切っていないのに、赤ん坊以上に騒がしい。
うるさいし、大切な研究所を壊されたらたまらないので、とりあえず催眠ガスで眠ってもらうことにした。
しかし、耐性があるようで通常の何倍の濃度でようやく眠ってくれた。
スカリエッティの秘書であるウーノは「この男は危険です」と強く言ってきたのだが、スカリエッティは男を切り捨てる気はさらさらなかった。
恐らくこの男は機動六課に通用できるほどの実力を秘めていると思ったからだ。
それに―危険な野獣でも?首輪?をつければいいことだ。
男に?処置?を施したスカリエッティが一息をついた時だった。

「ドクターッ!」

聞き慣れた少女の声が、通称でスカリエッティを呼んだ。
スカリエッティが振り向くと、少女たちが血だらけの青年を抱えていた。

(ふぅ…今日は色々なことがあるねぇ…)

スカリエッティは感慨深げに呟いた。

青年は再び目を覚ました。
いよいよ、あの世とやらに辿り着いたかと思った。
しかし、白い天井に、薬品の匂い、自分を寝かしてある少し固いベッドは—青年が思い描いていた死後の世界とは大きく異なっていた。

「やぁ、目を覚ましたようだね」

それは平坦な男の声だった。
青年の視界に入ったのは紫髪の男—スカリエッティだった。

「あんた…誰や…？」

青年はかすれた声で尋ねる。

「私はジェイル・スカリエッティ。…しかし、危ないところだったよ。あと一歩治療が遅れていたら君は死んでいたんだよ」

スカリエッティの言葉で、ここはあの世ではなく—自分は助かったのだと青年は認識した。

「そっか…ありがとな」
「礼なら私ではなく、私の娘たちに言ってくれ。彼女たちがここまで君を運び、助けてくれと私にお願いしたんだから。…少し待っててくれ、すぐに呼んでくるよ」

そう言ってスカリエッティは部屋を退室した。
閉じられたスライド式のドアを一瞥して青年は天井を見つめる。
正直—今は複雑な心境だった。
死ぬかと思っていた自分の命が助かったのだ、嬉しくないはずはない。

だが、その命を助けられて―これからどうする？
まだ記憶が戻っていないのだ。
この世界のこともわからず、自分の名前すらもわからず―一人で生きていくには不安が多すぎる。
助けてくれたスカリエッティとやらに助力を頼むか？
いや、命を助けてもらっておいて、これ以上助けてもらうのは気が引ける。

（一人で適当に仕事見つけて、適当に生きっかな…）

青年が適当過ぎる目標を定めた時―突然、部屋のドアが開いた。

「目ぇ覚めたって、マジっすか！？」
「ケガ治ったのか！？大丈夫なんだろうな！？」
「こら、二人ともっ。怪我人の前で大声出しちゃダメだよっ。」

青年の前に姿を見せたのは、意識がなくなる前に現れた活発美少女三人組だ。
可愛い女の子が三人も出てきたものだから青年は自然とテンションが上がる。

「おお、嬢ちゃんたちが自分をここまで運んでくれたんかい？おおき―にぃ！！？」

濃いピンク色の髪の少女が青年に飛びつき、青年は痛みに奇声をあげる。

「胸のケガは治ったっすか！？おっきい穴が空いてたから心配してたんっすよ！？」

そう言いながら包帯が巻かれた青年の胸を何度も叩く。

「あたっ！あたたっ！大丈夫！大丈夫やから、治ってない傷を叩くなっ！」

「あ…ごめんなさいっす…」

青年に言われて、ようやく行動の間違いに気付いた少女はしゅんとなりながら青年から離れた。

「気を悪くしないでくれ。彼女たちはずっと君を心配してたんだから。」

フォローするように言ってきたのは、再び戻ってきたスカリエッティだった。

彼の後ろには、さらに二人の少女がいた。

一人は幼い体格に似合わない眼帯を右目につけた長い銀髪の少女と、茶色のロングヘアーを後ろに縛った少女だった。

この時、青年は―ここはハーレムという名の天国やと確信した。

「ドクター、別にあたしは心配なんかしてねーよ！」

赤髪の少女がスカリエッティの言葉を否定すると、水色の髪の少女がにやにや笑う。

「うっそだ～、あんたずっとソワソワしてたじゃん♪」

「ち、ちげーよ！」

「あー、怪我人の前で騒がしくするものじゃないよ。」

スカリエッティは少女たちを注意し、思い出したような顔をしながら青年に声をかけた。

「そういえば、君はこの子たちの名前を知らなかったね。…さ、自己紹介をしたまえ。」

スカリエッティは少女たちに自己紹介を促し、少女たちがそれぞれ個性溢れる自己紹介をした。

まず、濃いピンク色の髪をポニーテールにし、「～っす」という口調の少女の名はウェンディ。
赤髪で荒い言葉使いで話す少女の名はノーヴェ。
水色の髪の少女の名はセイン。
銀髪の少女の名はチンク。
男の言葉使いを使い、幼い体型でもこの少女たちの中で一番の姉だ。
最後に、茶色のロングヘアーを後ろに縛った無口な少女の名はディエチ。

ウェンディたちが自己紹介を終えたところで、スカリエッティは本題に入るように青年に尋ねた。

「ところで、君は何故あんな怪我を負って森に倒れていたんだい？服装からして、管理局の者ではなさそうだが…」

しかし、青年から返ってきた言葉は予想外なものだった。

「…わからへん」

青年は小さく呟き、スカリエッティは首を傾げた。

「…わからない？」
「せや…何で自分があんなとこにおったのか、何で怪我を負ってお

ったのか…思い出せへん。自分の名前まで、思い出せへんのや」

自分の名前すら思い出せないという青年の言葉にウェンディたちは驚愕した。

「…ドクター、これは？」

チンクがスカリエッティに問いかけると、彼は顎に手を当てながら彼女の言葉に答える。

「ふむ…どうやら脳に何らかの衝撃によって記憶を失っている―記憶喪失というものだね。実例は何件かあるが、実際に目にするのは初めてだよ」

「何だか、可哀想っす…」

ウェンディはうつ向きながら悲しそうに呟いた。

「あ、そうだ！どこも行く当てがないなら、ここで住むってのはどう！？」

セインが元気よく挙手しながら提案した。

しかし、チンクは首を振りながら否定した。

「ダメだ。私たちは？犯罪者？だ。彼まで巻き込むわけにはいかない、管理局に保護してもらった方がずっといい」

「ちょい待てや。？犯罪者？ってどういうことや？」

青年は表情を険しくしながら問い詰める。

「わかった、私から説明しよう」

「ドクター、良いのかよ?」

ノーヴェは不満げな口調で言った。

得体の知れない人間に、自分たちのことを話していいのかと心配だった。

「管理局の人間はともかく、彼は記憶喪失者だ。別に構わぬよ」

スカリエッティは青年に大方のことを説明した。

自分は生命操作や生体改造、精密機械に通じた科学者であり、ロストロギアやその他の数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者である事。

チンクたち―?ナンバーズ?は人の肉体と機械を融合させた?戦闘機人?である事。

そして、彼女たちを使って、ある目的のために犯罪を犯している事を明かした。

「……」

話を聞き終えた青年は長い前髪で隠れた目でスカリエッティを睨んだ。

青年は怒っていた。

こんなに可愛くて無垢な少女たちに犯罪を犯すことを平気でやらせるスカリエッティに怒りを感じた。

「ワレ…この娘らに犯罪に手ぇ染めさせて平気なんか?お前にとってこの娘らは何や?」

ふつふつと彼から発せられる怒気をスカリエッティは意に介さずに無感情な口調で答えた。

「私の娘たちであり―？作品？たちだ。」
「おんどれッ！！」

我慢の限界だった。
青年がスカリエッティに手を伸ばした。
しかし、腕が止まった。
誰かに腕を掴まれたからだ。

「おい、ドクターに手ぇ出すなら相手になるぞ」

ノーヴェが青年の腕を強く握りながら冷たい目で見下ろす。
腕を握られている青年は冷や汗をかいた。
腕がかなり痛い、全く腕が動かない。
もはや少女の―人間の握力ではない。
下手したら骨を折られるかもしれない。

「ノーヴェ、手を放してやれ」

チンクがノーヴェに言う。
しかし、ノーヴェは反発する。

「チンク姉！だけど、こいつは―」
「放してやれ。」
「…わかったよ」

一番好きな姉の言葉には逆らえない。
ノーヴェは納得いかない表情を浮かべながら手を放した。
そして、チンクは真っ直ぐに青年を見つめた。

「お前の怒りは、わからんでもない。しかし、わかってほしい。私たちは、嫌々でドクターに従っているわけではない。」

彼女の瞳は、迷いが一切無い澄んだものだった。

「ドクターは私たちに命を―?生きる事?を与えてくれた。たとえ犯罪をさせられても、生きる事を与えられたことがとても嬉しいんだ。特に―私は、姉や妹たちに囲まれながら過ごす日々が一番楽しくて、嬉しいものだ。だから…楽しい日々を与えてもらったから、私たちはドクターに従っているんだ。別にその事を同意しなくてもいい―だが…せめて、理解はしてほしい」

「……」

青年はチンクから目線を外し、他のナンバーズを見つめた。

セインたちもチンクの言葉に同意とばかりに力強い瞳で見つめ返す。

青年は目を瞑りながら溜め息をついた。

「…そうかい」

青年は複雑な思いで呟いた。

確かに、感情豊かなセインたちを見ていると、日々を楽しく生きていること感じさせた。

「スカリエッティ」

「…何だい?」

「自分はワレが嫌いや。」

青年は冷淡に言い切った。

スカリエッティはその言葉を無表情で受け止め、青年の言葉はさらに続く。

「だがな…自分は命を救われた。その恩をきっちりと返上せんと、筋が通らん。それに…」

青年は重々しい空気にそぐわない軽薄な笑顔を浮かべた。

「自分、女の子大好きやねん。」

先程までの緊張感をぶち壊す発言にチンクたちは唖然とした。

「記憶を失ってもわかるで。自分は女の子に優しくしたいし、エスコートしたいし、護ってあげたい―それが自分の生き甲斐ってやつやな」

青年はスカリエッティに指を差した。

「スカリエッティ、自分はあんたについていくで。だが、勘違いすんなや。あんたのためやない。自分はただ借りを返し、この娘らを護っていくためについていくんや！そういうわけで…」

今度は手を差し伸べた。

「？よろしく？や。」

「……」

名の無い男と次元犯罪者の視線が交わる。

「……」

スカリエッティは小さく笑いながら肩を竦め、青年の手を握った。

「ああ、良いだろう。よろしく。」

二人は握手を交わした。

彼らの様子にセインたちは安堵の笑顔を浮かべ、青年は満足げに笑いながら手を放した。

「さて…同盟成立したところで、自分は具体的にどうしたらええ？」

「ああ、実験台になってもらおうか。」

スカリエッティはまるで世間話をするような口調でとんでもないことを言った。

「……は？」

「いやね、実は君が眠っている間に君の身体を少～し色々と調べてね。何と！君の身体にリンカーコアが発見された！あ、リンカーコアというのは魔法を使うための重要な機関のことだ！しかも！君には電気の魔力変換資質を持っているじゃないか！稀少さを考えれば凍結が良かったんだが、魔力変換資質を持っているだけでも十分さ！嗚呼！私は今日、とても幸運に恵まれている！そうは思わないかい、ウーノ！？あ、ウーノいないだったね。それより！これは私の勝手な考えだがね、君に何か特別な力があるに違いない！君は？あの青年？と同じ！ミッドでもベルカでもない異端の魔法を使えるのではないかと思ってしまう！はっはっはっはっ！まったく、自分らしくない！そうは思わないかい、ウーノ！？あ、いないんだったね。私は推測で物事を判断する人間だと自負していたんだが、今日の私は良い意味でどうかしているよ～！そうは思わないかい、ウ～ノ～！？あ、やっぱりいないんだね。はーはっはっはっ！まぁ～、そんなことより是非！実験台に―」

「なるか、ボケ。」

青年はスカリエッティの両目にチョップを叩き込んだ。

「意味不明な長ったらしい説明はどうでもええが、実験台になるんはごめんや」

「チッ…そうか、残念だよ。」

「おい、こら。舌打ちしたろ、こら。ホンマにシメたろか、ワレ。」

「まぁまぁ！ケンカはダメだよ、せっかく一緒に暮らすんだから仲良くしよ。」

セインが和やかに二人の仲裁をする。

話題を変えるようにチンクが口を開く。

「そうだ。お前に名前をつけないといけないな。いつまで、君とかお前とかは良い気分じゃないだろ?何か名前を考えなければな」

確かに名前がないと何かと不便だ。

「はいは～い！私、早速思いついたっす～！」

ウェンディは手をおもいっきり上げながら言った。

「ほう、どんなもんや?」

「?ホウキ頭?っす～♪」

「ただのあだ名やないかっ！名前や、名前！」

「あ。私、思いついた。」

今までずっと静観していたディエチが挙手した。

「無口な奴は期待できそうやな、言うてみ」

「ヴァッシュ・ザ・スタンピード。」
「誰が平和主義のガンマンや！ネタわからん人がおったら、どないすんねん！」
「首領パッチ。」
「いや、ネタわかるわからんの問題やなくて―」
「じゃあ小野坂でいいよ。」
「何で投げやりやねん！さっきから危ない発言をするなっ！」
「では、私が決めるしよう」

スカリエッティが自信ありげに挙手した。

「一応聞いたるわ、変態ドクター。」
「実験台Ａ」
「諦めろやッ！！！」
「チッ…私、忙しいから研究に戻るとしよう。」
「舌打ちすんな、不貞腐れんな。」

不貞腐れたスカリエッティは本当に研究に取り掛かるために部屋を退室していた。

「ったく…他ないんか？ないんやったら、自分がメチャクチャカッコいい名前をつけるで？」
「あのよ…ナナシ、ってのはどうだ？」

少し躊躇いだちに言ったのはノーヴェだった。

「ナナシ？」
「ああ、名が無いからナナシだ。…安直すぎたか？」

ノーヴェは少し顔を赤くしながらそっぽを向いた。

「ん～。まぁ…他の案なんて、どうしょうもないヤツばっかやったし。よっしゃ、決まりや！ナナシ―使わせてもらうわ」

正直、安直なものだと思ったが―ノーヴェが羞恥しながら真面目に考えてくれた名だ。
否定するわけがない。
青年の名は―ナナシで決定した。

「ありがとな、ノーヴェちゃん♪」

青年―ナナシはノーヴェの頭を撫でてやった。

「な、撫でんじゃねぇよ！気持ちわりぃ！」
「なぁあ！？ワイのゴッドハンドを気持ち悪いやと！？」

二人のやり取りが微笑ましく思い、チンクは小さく笑う。

「ふふっ…大丈夫だ、ナナシ。ノーヴェはただ照れているだけだ」
「チ、チンク姉ぇ！て、照れてなんかいねーよっ！」
「うっはぁ～、ノーヴェのツンデレ～♪」
「萌えっす～♪」
「てめぇら馬鹿にしてんのかっ！！」

ノーヴェが怒り、セインとウェンディがからかい、チンクとディエチが微笑ましく笑う。
ナナシは楽しい気持ちが溢れて大きく笑った。
そして、笑いながら決意する。
絶対に護る―この少女たちの楽しい時間を、この少女たちの笑顔を。

其之七：訓練

ＡＭ５：４０―。
紅麗はベッドの中で目を覚ました。
最初に目に入るのは、もう見慣れてしまった天井。
そして―このベッドの感触も、この早い時間帯に起きるのも、この部屋で生活するのもすっかり慣れていた。
ベッドや机、タンス等―最低限な家具しか置いていないこの部屋は、彼が機動六課に入隊する際に部隊長である八神はやてに用意された部屋だ。
そう、紅麗と薫が機動六課に入隊して一週間以上経っていた。
これも全て―はやてと彼女の知人の裏工作という名の正式な手続き（？）を済ませたおかげである。
ちなみに薫はエリオと同じ部屋で過ごしている。
一番歳が近い男同士ということで、今では二人は親友のように仲良くしており、相部屋だと決まった時は二人は大喜びしていた。

閑話休題。
紅麗たちの朝は早い。
スバルたち―フォワードメンバーと紅麗と薫は朝練のために、戦技教導官であるなのはは彼らを鍛えるために、他の者たちはそれぞれの仕事のために、毎朝この時間帯に起床する。
元々早起きを習慣としている紅麗はすぐに眠気を振り払って起き上がる。
タンスを開け、支給された訓練服に着替える。
着替え終えると、机に置いてある真紅色の腕輪を左腕に填めた。

「おはよう、？紅？」
『おはようございます、我が主。』

紅麗が腕輪に挨拶すると、腕輪も女性の声で挨拶を返す。
腕輪の名は―?紅?。
先日、紅麗のために用意されたインテリジェントデバイスだ。
?紅?の名前の由来は―今は亡き愛する人の名前。
これから共に歩み、共に戦うのだからこの名前がしっくりくる。
だが―彼女と、このデバイスを一緒にしているわけではないが、未だに彼女と離れたくないんじゃないかと思うと、紅麗は自嘲してしまう。
余談だが、デバイスの名前を決める時、はやてが?千本桜?とか?トールギス??にしてくれと意味不明な事をやたら強く言ってきたが全力で却下した。

紅麗が男子寮の共用の洗面台に行くと、すでに先客がいた。

「おう、紅麗。おはよっ」

髭を剃りながら陽気な挨拶をしてきた彼の名はヴァイス・グランセニック。ヘリ操縦資格の最高位であるA級ライセンスを持つ機動六課のヘリパイロットだ。

「おはよう、ヴァイス」

紅麗も朝の挨拶で返す。
ヴァイスの陽気で軽薄な振る舞いは堅物の紅麗とは正反対だが、紅麗は彼の性格は嫌いではない。
紅麗の仲間にも彼のような人間がいたからだ。
そして、ヴァイスもまた紅麗のことを嫌いではない。

会話はちゃんと続くし、テンションは低めだがヴァイスのジョークにちゃんとツッコンでくれる。
ヴァイスにとって紅麗は―仲間というより、友人のような感覚だ。

「どうだい？訓練の方は？」
「いつも通りだ。私と薫が扱う魔法―？火影式魔法？を完全に把握する事、基礎魔法を取得する事、デバイスを使った戦いに馴染む事。やることはまだまだある。だが、今日中に終わる予定だ。明日からは高町教導官に教わる」
「あ～、だったら明日になるまで人生を楽しめ。なのはさんの教導はかなり厳しいし、疲れるぞ？」
「それは楽しみだ」

紅麗は強気な笑みを浮かべた。

「おはよ～…兄者～、ヴァイス兄ちゃ～ん…」
「おはようございます！紅麗さん、ヴァイスさんっ！」

二人の少年の声が紅麗たちに朝の挨拶をした。
まず眠たそうにテンション低めに挨拶したのは薫で、テンション高めに挨拶したのはエリオだった。

「おはよ、少年たち。しっかし、小金井はまだ早朝の起床に慣れねーのか？シャキッとしているエリオを見習え」
「いやぁ…烈火兄ちゃんより早く起きてたから、早起きには自信あったんだけど…まさか、こんな早く起きるなんてぇ…」
「ふんっ、彼奴より早く起きれるのは当たり前だ。」

紅麗は冷水で顔を洗い、タオルで顔を拭く。

「彼奴のことだ、目覚ましを止めてあと5分とか言って熟睡するのだろう」

素晴らしい正解。

「…？烈火兄ちゃん？？紅麗さん、もう一人弟さんがいたんですか？」

「勘違いするな、？赤の他人？だ。」

エリオの言葉を否定するように異母の弟を赤の他人と強調し、これ以上語りたくないと言わんばかりに紅麗は歯磨きを始めた。

紅麗と薫はエリオたちとは別の小さな訓練場へ向かった。

「あ、紅麗、薫くん。おはよう」

「おはよう、フェイト」

「おはよっ、フェイト姉ちゃん！」

訓練場で待っていた人物はフェイトだった。

ここ数日、紅麗と薫の魔法の基礎的な教育は彼女が行っている。

フェイトの教えや紅麗と薫の魔法の才能もあり、彼らの魔法の実力はすごいスピードで伸びていき、すでにいくつかの基礎魔法を取得している。

「それじゃ、早速デバイスを起動させよっか。バリアジャケットは展開しなくてもいいよ」

「わかった。…？紅？―起動せよ。」

『御意。壱式―起動。』

?紅?が紅麗の言葉に応えるように真紅色の魔力の光を放ち、彼の両手に武器が装着された。
紅麗の両手に填められたものは―手の甲に火影の刻印、指先に真紅の爪が填められた漆黒の籠手だった。
紅麗に倣って、薫もデバイスを起動させた。

「?鋼金暗器?―セットアップ!」
『Ｓｅｔ　ｕｐ.』

首から下げた金色のロザリオが鋼鉄色の輝きを発した。
そして、消えたロザリオの代わりに薫の手には?金?と書かれた赤いコアが填められた金色の薙刀が握られた。
これは薫が前の世界で一緒に戦ってきた魔導具―?鋼金暗器?のデバイスバージョンだ。
やはり、ずっと慣れ親しんだ武器の方が薫の実力が大いに発揮できる。
しかし?鋼金暗器?が完成するまで時間と手間が大きくかかった。
なぜなら?鋼金暗器?は六段階まで変型させることができるが、その構造は全魔導具の中で最も複雑なものだからだ。
デバイスマイスターであるシャリオ・フィニーノ―通称シャーリーは自動での変型を勧めたのだが、薫はそれを断った。
自動は確かに便利だが、その変型所要時間は約1～2秒。
だが、薫からすれば、それは?遅すぎる?。
手動での?鋼金暗器?の変型は慣れた者でも１０秒以上はかかる。
しかし、薫はルービックキューブなどの物に関して飛び抜けた才能を持ち、薫による?鋼金暗器?の変型所要時間は―０．６秒。
スピードが大事な薫は手動での変型を望み、熟知している?鋼金暗器?の構造をシャーリーに細かく教えた。
しかし、構造が複雑だった故に、完成したのはつい先日だった。
シャーリーは紅麗のデバイスも作っていたので、彼らにデバイスを

渡した時の彼女の顔は長き戦争を終えた若き兵士のそれだった。
今頃はベッドの中でぐっすりと眠っているのだろう。
ちなみに?鋼金暗器?のＡＩの語源を英語にしたのは、薫が厨二病だからだ。

紅麗たちがデバイスを余裕で起動できたことにフェイトは満足げに頷き、次の復習を行わせる。

「紅麗。次は魔法を使ってみよう、確か名前は―『翅炎(はえん)』、だっけ？」

紅麗は小さく頷き、足元に紅光の火影の刻印が浮かぶ。
フェイトに教わったことを頭の中で思い浮かべながら魔法を行使する。
周囲の魔力素を己のリンカーコアに取り込み、蓄積し、魔力へ変換する。
そして、それを技に型どる。

「『翅炎』…！！」

紅麗の背中に炎の片翼が出現した。
数千度にも達する炎翼の灼熱が周囲の温度を急激に高くする。

「うん、これも無事にできたね。」
「ああ、発動時間もだいぶ短縮できた」

紅麗は炎の翼を消した。
前の世界での彼の最高の技―『翅炎』を発動できたのは訓練初日だった。
炎術士として炎を出す感覚と魔導師として炎を出す感覚が似ている

ため、『翅炎』を発動することは決して難しいことではない。
しかし、『翅炎』は強力故に発動時間がかなりかかった。
不便さを感じたのだが、デバイスである?紅?の補助のおかげで発動時間が短縮できている。
ちなみに『翅炎』を発動した時に炎の羽根を飛ばしてみたら訓練場が軽く被災地になり、なのはにこっぴどく叱れた。

「フェイト姉ちゃん、教えてもらいたい魔法があるんだけどいいかなっ?」

薫は手を高くあげながらフェイトに期待の眼差しを向ける。

「ふふっ、言ってみて。何かな?」

薫の態度に保護欲を刺激されながらフェイトは尋ねた。

「飛行魔法を教えてほしいんだっ!」

魔導師のほとんどが憧れる魔法だった。
しかし、フェイトは難しそうな顔をした。

「う~ん…教えることはできなくもないんだけど、飛行魔法は意外と難しくて取得するまでにかなりの時間と手間がかかるの。なのはみたいに―才能があればすぐにでも飛べるけど、それは結構稀だからね」

「え~っ、そうなんだ」

空を飛ぶことを余程憧れていたらしく、薫は残念そうに肩を落とした。
そんな彼に見兼ねて紅麗が口を開いた。

「まぁ、確かめるだけならばよいだろう。稀な才能が有るか無いか―ただそれだけだ」

確かめるだけならと、フェイトは納得したように頷いた。

「そうだね。わかった、じゃあ教えるね」

飛行魔法のレクチャーが始まった。

「まずは蓄積した魔力で全身を包み込むようにして。身体の一部分だけだと、バランスが取れなくてちゃんと飛行できないからね。…そして、その魔力の安定を維持しつつ、身体が浮いていくようにして」

紅麗と薫はフェイトの言う通りに実行する。

だが、薫は上手くできていないようで全然身体が浮く気配がない。

しかし、紅麗は少し足元が浮いていた。

「すごいね、紅麗！一回教えただけで浮くところまでできるなんて」

フェイトに褒められるが、紅麗は複雑そうな顔をしながら着地した。

「だが、これは難しいな。完全に飛行できるまで、かなりの時間がかかる」

「仕方ないよ。浮くだけでもすごいと思うよ」

「オレなんて浮いてすらいないじゃん、才能ないのかぁ…」

「ま、まぁ…薫くんはまだまだ若いんだし！これからだよ、これから！」

フェイトは必死な様子でベタな励ましをする。
一方―紅麗は顎に手を当てながら考え込んでいた。
そして、熟思した後に―何かを決意した表情を浮かべる。

「…試してみるか」

紅麗は瞳を閉じ、意識を集中する。
足元に火影の刻印が浮かぶ。
そして、イメージする。
フェイトの教え通りに魔力を全身に包む。

「？紅？」
『御意。』

？紅？の補助も借りて、紅麗はさらにイメージを膨らませる。
背中に飛翔のための翼、を。
紅麗の背中に一対の炎の翼が生えた。
『翅炎』と同じように見えるが、違う。
今発動している『翅炎』から、灼熱という攻撃性が感じられないからだ。

「さて…飛べるどうか」

紅麗は少し不安を込めて呟くと、翼を羽ばたかせた。
炎の羽根を散らしながら、足元から地面が離れる。
規則正しいリズムで翼を振動させ、徐々に高度を上げていく。
フェイトと薫は目を丸くしながら呆然とした様子で紅麗を見つめた。
紅麗は初めて味わう浮遊感に慌てることなく縦横無尽な飛行を始めた。
全身に纏う魔力を維持しつつ、飛行の補助を行う炎の翼を振動させ

る。
高度を上げたり下げたりし、前後左右に飛んでみたり、飛行のスピードに緩急をつける。

「ふむ…こんなところか」

紅麗は満足げに頷き、ゆっくりと着地し炎の翼を消した。

「すごいよ、兄者！飛行魔法できるようになったね、羨ましいよ！」
「独自の無理矢理なやり方だし、上手くできるか不安だったがな」

フェイトは紅麗の実力に戦慄していた。
攻撃のための『翅炎』といい、飛行の補助を行う『翅炎』といい、彼は独自にオリジナルの魔法を造り出している。
彼の実力なのか、まだ謎がある火影式のおかげなのかわからないが、ここからは独学でいいんじゃないかと思った。

朝の訓練が終わって汗を流した後、紅麗たちは朝食を採るために食堂にいた。
薫はフォワード陣と同じテーブルで朝食を食べていた。

「薫くん、今朝はどんなことやったの？」

スバルはパンをおいしそうに頬張りながら尋ねた。

「魔法の復習。そんで、飛行魔法を教えてはもらったんだけど、飛べたのは兄者だけで、オレは浮いてすらいなかったよ」

薫は牛乳を飲んで残念そうに答える。

「紅麗さん飛行魔法を使えるようになったんですか!?すごいですね!」

エリオは驚きながらスクランブルエッグを掻き込む。

ティアナとキャロは目の前の光景に絶句していた。

朝練の後とはいえ、朝っぱらからスバルたちの食べる量が半端じゃない。

小柄な薫も彼女たちに劣らない量を食べている。

薫は、給食を食べた後に薫ファンの女子たちの弁当を食べていたから彼の胃袋はかなり大きかった。

『薫さんも、すごい食欲ですね…育ち盛り、なんですかね?』

『そんなレベルじゃないわよ、もはや。』

食べてすらいないのに満腹感を覚えながらキャロとティアナは呆れながら念話した。

別のテーブルにて、紅麗とフェイトの二人で朝食を採っていた。

薫たちとは違い、紅麗たちの朝食の量は普通だ。

「魔法の発動方法とか慣れてきた?」

「ああ。理論も理解し、十分に慣れた。後は素早い判断で魔法を使えるようにしないとな。」

「でも短期間でこんなに上達するなんて、すごいよ。才能があるんだね」

紅麗は首を振ってコーヒーを啜る。

「フェイトの教えが上手いだけだ。短期間で上達したのは、お前のおかげだ」

紅麗に褒められたフェイトの頬が赤くなった。

「あ、ありがと…」

小さな声でお礼を言った。

「時間があればだが、午後も付き合ってくれないか？今度は模擬戦をやってみたい」

「うん、いいよっ。今の紅麗だったら、私に勝っちゃうかもね？」

「ふっ…どうだろうな？そっちが手を抜いてくれたらいいんだがな」

軽い冗談に二人は笑い合った。

その時だった―。

「紅麗」

冷たい声が紅麗の名を呼んだ。

紅麗は先程の微笑を消して、無表情で振り返る。

ピンク色の長い髪をポニーテールにした女性―シグナムが鋭い目で紅麗を見下ろしていた。

「模擬戦をしたいのであれば、私が相手になってやろうか？」

「フッ…毎日私に対して敵愾心を放っているくせに、誘うのが遅すぎるのではないか？」

紅麗はシグナムの敵意を含んだ睨みと口調に脅えるどころか鼻で笑

う。

「私は自分より弱い人間をいたぶる趣味はない。お前が実力をつけてから誘うつもりだった」

「ほう…なるほど、そうなのか。私はてっきり?血の匂い?とやらを漂わす私に恐れていて、誘うのを躊躇っていたのかと思っていたよ」

紅麗は嘲笑うような口調で言いながら席を立ち、シグナムを睨む。

両者から交わせられる言葉、醸し出される雰囲気が、和やかだった空気が不穏な空気へと変えていく。

薫たちも、他の隊員たちも何があったのかと紅麗とシグナムを見ていた。

「ちょ、ちょっと…やめてよ、二人とも」

フェイトが睨み合う二人を仲裁する。

「……」

しかし、二人の状態に一切の変化はない。

ここ数日―彼らがこんなやり取りをするのは一度や二度ではない。

廊下や訓練場などで二人が顔を合わすたびに、すぐこんな状態になる。

睨み合いから始まり―シグナムが売り言葉、紅麗が買い言葉を口にするたびに険悪な空気になっていく。

その時には、はやてやなのはたち―隊長たちや薫などが仲裁するのだが、仲裁したからといって二人の不仲が改善されるわけでもなく、彼らの喧嘩は何度も起こっている。

「皆、おはよーさんっ！…って、何？この空気？」

重々しい雰囲気に似合わぬ明るい声で挨拶した人物が現れた。
機動六課部隊長―八神はやてだった。
そして、彼女も隣には高町なのはもいた。
二人は感じ取りやすい食堂の空気を不審げに思った。
そして、原因はすぐにわかった。
睨み合う紅麗とシグナムを見つけて、はやては呆れ半分怒り半分の表情で駆け寄った。

「またケンカしとるんか！？廊下とかならまだしも、食堂でケンカするなんて常識外れとちゃう！？」

紅麗は目線だけをはやてに向けた。

「八神部隊長、私は何もしていませんよ。シグナム二等空尉殿が一方的に喧嘩を売ってきただけです」
「主はやて、私は未だに納得できません。こんな男を我々の部隊に―時空管理局にいて良い人間ではありません。」

はやては唸りながら両手で激しく頭を掻いた。

「あ～、もうっ！別に無理して仲良くしろなんて言わへんけど、同じ部隊の仲間なんやからケンカはあかんよ！皆、迷惑しとるんやで！？」
「高町教導官」

紅麗ははやてを無視して、なのはに声をかける。

「訓練場全体をお借ります、これからシグナム二等空尉殿と模擬戦

をしたい。」
「ちょっ…勝手に決めないでくださいよっ。午後からスバルたちの練習もあるんですし…」
「八神部隊長、許可をいただきたい。」
今度はなのはの言葉を無視してはやてに許可を求める。
「……」
はやては不満げな顔で何か言いたそうにしていたが、それを吐き出すように大きく溜め息をついた。
「…わかった、許可する。せやけど！今後はケンカを一切！しない。それが条件や―ええか？」
「いいかと言われても…。私はともかく…シグナム二等空尉殿には善処していただきたい」
紅麗からの嫌味をシグナムは意に介さずに告げる。
「模擬戦は午後一時から始める。それまでに魔法の復習でもしていろ」
シグナムは背を向けてこの場から去り、紅麗は食べ終えた食事の食器を片付け始めた。
『はやて…よかったの？』
フェイトは不安げにはやてに念話を送る。
『仕方ないやろ…遅かれ早かれ、いつデバイス出してケンカするか

わからんし、これを機に少しでも不仲が改善するかもしれへんやろ？』

『改善、するかな…？』

なのはは辟易の溜め息をついた。

ティアナも溜め息をついて、薫に念話を飛ばした。

『ちょっと、薫。あんたのお兄さん、何でシグナム副隊長に対してあんなに喧嘩腰なのよ？そりゃあ、シグナム副隊長も悪いけど、豹変しすぎでしょ？』

『いや…兄者は多分…怒っているとは、少し違うと思う』

返ってきた薫の言葉にティアナは疑問げな顔をした。

『…どういう意味？』

『う～ん…上手く言えないんだけど…』

薫は腕を組みながら頭を捻る。

『兄者は―あんまり本心を見せないし、見えにくいんだよ』

『だからどういう意味よ。アレが本心じゃないってこと？』

薫は曖昧に頷いた。

『まぁ、そうだね。とにかく…兄者はただ怒ってるわけじゃない―そういう気がするんだ』

薫は複雑な苦笑いを浮かべた。

其之八：不死鳥と竜（前書き）

不死鳥はその嘴を以て刺し貫き、竜はその爪を以て斬り裂く。

其之八：不死鳥と竜

シグナムは紅麗のことが気に食わなかった。
それは彼を一目見た瞬間からそう思っていた。
彼から溢れ出る濃厚な血の匂いがシグナムの騎士としての心を逆撫でした。
そして、シグナムは血の匂いを指摘した時―紅麗は冷たい笑みを浮かべた。
端正な顔立ちで冷たい表情をしたその姿は―まるで堕天使のように見えた。
シグナムは確信した。
目の前にいるこの男は―笑いながら人を殺せる者だ、と。
今すぐに、この場から―この世界から消えてほしかった。
今すぐに、斬り殺したいとすら思った。
ここに居させてはいけない―この男は危険過ぎる。
だが、紅麗は次元漂流者ということでシグナムは武器を取らなかった。
次元漂流者ならば、すぐにとは言えないが―いなくなるなら、それでいい。
だが、彼女のそんな願望は叶わなかった。
何でも紅麗は、シグナムの主―八神はやてと同じ世界の平行世界から漂流されたのだ。
しかも、紅麗は機動六課の入隊が決まっていた。
シグナムははやてを問い詰め、彼の危険性について警告した。
しかし、はやてはそれを否定した。
彼は優しい人だ、と言った。
シグナムは納得がいかなかった。
あの冷たい表情を見ていないから、そう言える。
あの男に優しさなど無い。主に見せた優しさは―偽物だ。

我が主は誰よりも優しい―良い意味でも、悪い意味でも。
今回はその悪い意味が働いたのだ。
だが、すでに主が決めたことだ。
彼女の騎士であるシグナムは、信じる主の心に従うしかなかった。
紅麗に対して嫌悪感を抱きながら。

紅麗はシグナムのことが気に食わなかった。
だが、敵愾心を向けてくる―それだけの単純な理由ではない。
前の世界で敵愾心を向けてくる者など多くいた。
異母の弟が率いる火影忍軍が良い例だ。
では、何故彼女が気に食わないか。
それは―血の匂いを纏いながら聖人君子気取りをしているからだ。
いや、血の匂いだけではない―怨念まで見える。
人の魂を己の炎とすることができる炎術士としての紅麗の能力故か、
紅麗には怨念が見える。
人のことを言えないが、その怨念を彼女は纏っている。
彼女もまた人を殺しているのだ―もしかしたら、自分よりも。
血の匂いと怨念を纏った殺戮者のくせに聖人君子気取りで、血の匂
いと怨念を纏う自分を危険視する―紅麗にはそれが腹立たしかった。
だが、何故だろうか？
血の匂いと怨念を纏いながら―？何故あんな眼をする？？
シグナムは強い眼をしている。
竜のような強き眼―。
炎のような熱き眼―。
その眼は―愛する人を護るあの弟のようだった。

機動六課訓練場、ＰＭ１２：５５―。
模擬戦開始５分前にシグナムが瞳を閉じ、腕を組みながら紅麗を待っていた。
足音が聞こえてきた。
シグナムは凛々しい瞳を開く。
彼女の前に現れたのは、機動六課の制服を着た模擬戦相手の紅麗だった。
これから模擬戦が始まるというのに紅麗は、周りにある荒廃した建物を見上げている。
市街地を再現した空間シミュレーターが初めてなのだろう、彼は近くの建物を触れる。

「…これから模擬戦だというのに緊張しないのだな。それとも、余裕のつもりか？」

紅麗は無表情をシグナムに向けた。

「いや…この世界の技術力の高さに驚いているだけですよ、シグナム二等空尉殿」
「その？二等空尉殿？というのをやめろ、不愉快だ。」
「これは失礼、申し訳ありませんでした。」

紅麗は冷笑を浮かべながら気持ちが込もっていない謝罪をした。
そこへ、タイミングを見計らっていたかのようになのはが映し出されたモニターが二人の前に展開された。

『それではこれから紅麗さんとシグナムさんの模擬戦を始めます。
始める前に二つのことを守ってくださいね』

なのはは一呼吸置いて、大きな声で告げた。

『訓練場を壊さないこと！決して殺し合わないこと！です！』

結構真面目な口調で言った。

紅麗は溜め息をついた。

「前者は善処するとして…後者は些か誤解してないですか？」

『だって二人とも、いつ殺し合いしてもおかしくない雰囲気出してるじゃないですか～っ！というか、善処するってあんまり期待できないじゃないですか、訓練場壊さないでくださいよっ！』

『まぁ～まっ！なのはちゃん、抑えて抑えて』

涙目で訴えかけるなのはを宥めたのははやてだった。

『訓練場がどうなろうが、殺し合いをしようが、そんなんどうでもええ。』

『いや、どうでもいいわけないよっ！』

『とにかく、二人ともっ！』

はやてはなのはを無視して、真摯な眼差しを紅麗たちに向けた。

『私はこれを機に二人の不仲が改善―できれば、仲良くしてほしい…ただ模擬戦を終えたら？一切ケンカをしない？！それだけは守ってや』

「……」

紅麗とシグナムは相手を一瞥した後、小さく頷いた。

元々、この模擬戦は今後ケンカを一切しないという条件で行われたものだ。

二人はその事を承知している。
彼らの頷きを見て、はやては満足げに微笑んだ。

『それじゃ、早速始めよか。もう一時過ぎちゃったし。…二人とも、デバイスを起動させて』

シグナムは鎖に繋がれた小さな剣の首飾りを出した。

「？レヴァンティン？！」
『Ａｎｆａｎｇ.』

ラベンダー色の魔力の炎が彼女の身体を包み、紫色の騎士甲冑を纏う。
そして、彼女の手には炎の魔剣の名を冠する片刃の長剣―？レヴァンティン？が握られた。

紅麗は真紅の腕輪が填められた左腕を掲げた。

「？紅？―弐式で起動せよ」
『御意。弐式―起動。』

紅い炎が紅麗の身体を包みと、紅麗は全身を覆う黒衣を纏った。
そして、彼の顔には火影の刻印が刻まれた仮面が填められた。
これが紅麗のバリアジャケットだ。
そして、彼の手には真紅の刃の日本刀が握られた。

「…お前、剣術もできるのか？」

シグナムは嫌悪感を抱いているはずの男に何故か親近感を覚えながら尋ねた。

「人並み程度にはな。」

シグナムは紅麗の言葉に眉を潜めた。

「…人並み程度の実力で私に挑むのか？」

「お前も剣を使うからな―最初はこれで戦ってやろうと思った」

「後悔するぞ」

シグナムは両手で長剣を握った。

『準備できたようやね？そんじゃ、模擬戦開始っ！』

はやての開始合図とともに最初に仕掛けたのは紅麗だった。

シグナムに向けて疾走しながら刀を横薙ぎに振るう。

シグナムは表情を変えず、難なく斬撃を受け止める。

（ほう…？人並み程度？にしては、なかなか良い一撃だ…）

紅麗を卑下していたシグナムだったが、？人並み程度？の紅麗に対して評価を改めた。

型はちゃんとなっているし、踏み込みも、一撃の重みも悪くはない。

間合いを詰めたときのスピードも、機動六課最速のフェイトには及ばないが十分に速い。

だが、所詮―？悪くはない程度の実力？だ。

シグナムは鍔迫り合いの状態で腕力を以て、紅麗を圧し始めた。

「……」

このまま力負けすると判断したのか、紅麗は後ろへ跳躍して間合い

を開ける。
だが、すぐにシグナムが間合いを詰め、紅麗に向けて剛剣を振り下ろす。
紅麗は刀を横にして剣を受け止める。
シグナムは一度剣を引き、刺突を放つ。
紅麗は身体を捻って回避し、刀を振り下ろす。
シグナムはそれを払って、直ぐ様剣の横一閃を紅麗の腹に叩き込む。

「くっ…！」

紅麗は苦悶の声を漏らす。
そんな彼に容赦無くシグナムは追い打ちをかける。

なのはたちは訓練場から離れた場所で二人の様子をモニターで見ていた。彼女たちの後ろにはヴィータやフォワードメンバーまでいる。

「ん～…フェイトちゃん、どっちが勝つと思うん？」

はやては、二人の様子を心配そうに見守っているフェイトに尋ねた。

「私は紅麗が戦ったところを見たことがないんだけど…でも、彼の魔法に関しての才能は天才と言ってもいい」
「でも…シグナムさんが圧しているように見えるよ？まぁ…剣術に関して、シグナムさんの右に出る人はいないけど…」

なのはは、決着が着かなかったシグナムとの血戦とも言える模擬戦を思い出しながら苦笑いした。

「んー…これは、リミッター解除許可した意味なかったわ」
「え!?はやて、リミッター解除を許可しちゃったの!?」

はやての何気無い一言にフェイトが即反応した。

「あ、ああ…シグナムが許可を頼み込んできてな。あ、でも、デバイスだけやで?さすがに模擬戦に全リミッター解除を許可するわけにはいかんよ」

ティアナは防戦一方の紅麗を見て呆れたように溜め息をついた。

『あんなに強がってたわりに案外大したことないのね、圧されっぱなしじゃない』
『ティア、ダメだよそんなこと言っちゃっ』

辛辣な感想を言うティアナにスバルは軽く咎める。

「……」

薫は無表情にモニターを見ていた。
その表情に、圧されている義兄に対して心配の色は一切見えない。
エリオは疑問げに思いながら薫に話しかけた。

「薫さんは、紅麗さんが心配じゃないんですか?」
「え?何で?」

薫はキョトンとした表情で聞き返した。
彼の予想外の反応にエリオは戸惑う。

「え…いや、だって…紅麗さん、防戦一方じゃないですか」
「大丈夫だよ、兄者は本気出してないから」
「え!?本気を出していないんですか!?」

驚くエリオに薫は当然と言わんばかりに頷き、誇らしげな顔でモニターを見つめる。

「兄者は今までの戦いで一度しか負けたことがない—兄者が負けるとこなんて想像もつかないよ」

紅麗はシグナムの剣を受け止めながら刀を持っていない右手をシグナムに向けた。

「!?」
「『翅斬』」

紅麗の右手から紅き炎が噴き出した。

『Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ.』

シグナムは左手を突き出し、そこから防御魔法を展開して炎を防ぐ。

「……」

紅麗は再びシグナムから距離を開き、炎を放つ。

「?レヴァンティン?!」

電子音とともに?レヴァンティン?の刀身の付け根にあるダクトパーツがスライドし、そこから一発の薬莢が排莢された。

『Ｓｃｈｌａｎｇｅ－Ｆｏｒｍ.』

?レヴァンティン?の剣の刃が―鞭状の連結刃となった。

?カートリッジシステム?―魔力を圧縮した弾丸を使用することで一時的に魔力を底上げしたり、先程のように武器の形状を変えることなどができるシステムだ。

「『シュランゲ・バイセン』!!」

シグナムは連結刃を振りかぶった。
連結刃は蛇のように唸り、紅麗の放った炎を消し飛ばした。

「!?」

紅麗が目を見開く。
驚いている間にも連結刃は今度は紅麗に牙を剥く。
紅麗は刀で弾こうとしたが、連結刃が進行方向をずらして回避された。
いや、ただ回避したわけじゃない。
連結刃は紅麗を斬りつけるためのものじゃなかった。
連結刃は紅麗の身体を縛りつけた。

「…ッ…!」

紅麗は抜け出そうともがくが、全く外れる気配すらない。
シグナムはそのまま紅麗ごと連結刃を振り回した。

紅麗の身体が近く建物に叩きつけられ、重々しい音が響く。
シグナムは容赦無く?レヴァンティン?を振り続ける。
一旦上空に振り上げ、勢いをつけて地面に叩きつけ、直ぐ様建物に叩きつける。
そして、シグナムは連結刃を持った腕を大きく振り回し、紅麗の身体も振り回される。

「これで―終わりだッ!!」

シグナムは十分な遠心力をつけてビルに投げつけ、紅麗の身体が壁を突き破った。

「うわっ…シグナム容赦ねぇなぁ」

ヴィータは引きつった笑みを浮かべた。

「あ~、もうっ!紅麗さん、大丈夫かなぁ…」

シグナムの過激な戦い方になのはは紅麗を心配し、フェイトは涙目になりながら顔を背けた。

(この程度で終わるとは思えんが…)

シグナムは紅麗を放り込んだビルを睨んだ。
だが、ビルはしんと静まり返ったまま何も起こらない。

「……」

もしかしたら紅麗は気絶したのかと思い、シグナムはやや呆れながらビルに近付こうと歩み始めた。
その瞬間―。
ビルから重圧な殺気を感じ、そこから大きな炎の鳥が飛び出した。
まるで炎の中から蘇る火の鳥―?不死鳥?のようだった。

「!!?」

不死鳥を迎え撃とうと、シグナムは戦士としての防衛本能で身構えるが、不死鳥がシグナムを貫く方が速かった。
嘴で身体を貫通され、シグナムの全身が紅い炎に包まれた。
だが、それはすぐに?消えた?。
不死鳥も、貫かれた感触も、全身を燃え盛っていた紅い炎も―全てが何事もなかったかのように消えた。
シグナムは激しく動悸する胸を押さえ、大量の汗をかきながら混乱した。

(な、なんだ…今のは…!?幻術!?)

いや、違う。
幻術を使って相手を怯ませるためなら、シグナムはとっくに攻撃を受けている。
なら考えられるとしたら、ビルから未だに溢れる禍々しい殺気―。

(まさか、殺気か…!?殺気だけで…幻覚が…)

ビルの内側から灼熱の火炎が激しい勢いで噴き出した。

ビルから激しい炎が溢れ出した瞬間、はやてたちが見ていたモニターが砂嵐の状態になった。

「あれ…？画面が…」

「故障かな？…シャーリー呼ぶね」

なのはは端末を操作してシャーリーを呼ぶ。

その後ろで、薫が青ざめた顔で冷や汗をかいていた。

（兄者…大丈夫かな…？）

この心配の言葉は―紅麗の安否ではなく、彼が殺意を抑えられているかの意味だった。

ビルから噴き出した炎はすぐにビル全体を覆い、巨大な火柱と化した。

紅き火柱を中心に、周り一帯を赤々と照らす。

「やはり…やはり、貴様は危険な存在だ―紅麗ッ！！」

シグナムは未だに火柱の中から出てこない紅麗に不気味さを感じながら、？レヴァンティン？にカートリッジを補充する。

その後？レヴァンティン？の柄尻と鞘を接続させた。

『Ｂｏｇｅｎ－Ｆｏｒｍ！』

カートリッジを一発分使用し、？レヴァンティン？は長剣から長弓へと姿を変えた。

これが？レヴァンティン？のフルドライブモード―？ボーゲン・フォルム？。
シグナムは？レヴァンティン？の上下の排莢口から、さらにカートリッジを排出させる。
シグナムは魔力の矢を生成し、足元に炎を漂わせながらゆっくりと矢を引く。

「翔けよ―隼ッ！！」
『Ｓｔｕｒｍ－Ｆａｌｋｅｎ！』

さらにカートリッジを二発分使用し、魔矢が放たれた。
大気を突き破り、音速を越えた矢は火柱に吸い込まれた。
しかし、何も起こらない。
カートリッジ四発分の魔力を圧縮した一撃だ―その威力は結界や防御魔法を簡単に破壊できるほどだ。
何も起こらないはずがない。
やがて、火柱の中から人影が見えた。
ようやく現れた―黒衣を纏った炎の堕天使。
紅麗は仮面にある火影の刻印を紅く発光させながらゆっくりと歩む。
彼の右手には紅刃の日本刀―？紅・弐式？。
そして、左手には―先程シグナムが放った『シュトゥルム・ファルケン』の矢が握れており、シグナムは目を見開いた。

（馬鹿な！？素手で掴んだというのか！？）

紅麗は矢を握った左手をゆっくりと掲げた。
そして、左手を開くと―そこから紅い炎を放出し、魔力の矢が灰となった。

「？紅？―壱式へ変生（へんじょう）せよ」

?紅?の柄尻からカートリッジが排莢される。

『御意。壱式―変生。』

?紅?は日本刀の形態から籠手へと姿を変えた。

（いよいよ本気で来るかッ！）

刀から籠手に変えた事、何より彼から今まで抑えていた重圧な殺気―これから本気で出すことを教えていた。

紅麗の姿が消えた―。

「！！？」

突然のことにシグナムは驚愕する。

だが、剣士としての索敵能力が背後からの微かな気配を感じ取った。

シグナムは素早く?レヴァンティン?を長剣の形態に戻し、身体の向きを変えずに真紅の鉤爪を受け止めた。

「ほう…」

紅麗は鉤爪を受け止められながら感心したような呟きを漏らす。

「大抵の者なら対処できない一撃なのだが、流石だな。だが…」

紅麗はシグナムの背中を蹴り飛ばした。

「詰めが甘い。」

シグナムは素早く受け身を取り、長剣を構えながら紅麗を睨む。

（何だ…さっきのは…？こいつ…瞬間移動の魔法とかでも使ったのか？いや―違う。そんな様子はなかったし、使ったとしても発動時間があまりにも短すぎ―）

「教えてやろうか？何故、貴様の背後を取れたのか」

シグナムの疑問に答える声が背後から聞こえた。

まただ。

また瞬時に背後を取られた。

「断っておくが、私は加速の魔法も瞬間移動の魔法も使っていない―いや、取得していないと言った方が正しいか。…簡単な話だ。素早い動きで、貴様の背後に回った―？それだけだ？」

（単純な脚力だけだと…！？）

あり得ない事実に驚愕するシグナムを尻目に、紅麗は跳躍して距離を離し、音もなく着地する。

「さぁ…お前の疑問も消えた―もうこの私の前で考え事はするなよ？次は容赦無く、貴様を攻撃する。」

「……」

シグナムは深く息を吐き、心を落ち着かせる。

速さに関しては向こうが遥かに勝っているが、剣術の手数に関してはこちらが上。

自分より強い相手と戦う時は―相手より勝（まさ）っている部分で戦う！

それが―戦士としての最高の戦法。

（ふふっ…楽しい、な…）

シグナムは紅麗が自分より強い相手だと認識した瞬間―歓喜するのを実感した。
胸が高鳴り、身体が熱くなり、笑みが浮かぶ。
まだ紅麗に隠し球があるんじゃないかと思うと、さらに歓喜する。
つくづく戦闘狂だなとシグナムは自嘲げな笑みを浮かべる。
だが、こんなに楽しいのだ。
この歪んだ心が消えていってほしくない。

「行くぞッ！！」

シグナムは吼え、紅麗に向けて疾走する。

「浅知恵の猿め…」

紅麗は侮蔑するような呟きとともに、姿を消した。
そして、紅麗はシグナムの背後から真紅の鉤爪を振り下ろす。
一直線の突進なら背後に意識が向いておらず、余裕で攻撃が当たる。
紅麗はそう思っていた。

「浅知恵は貴様の方だッ！」

シグナムは自身を横に回転しながら魔剣を振るう。
剣刃が黒衣の胸元を切った。
仮面の下で紅麗の顔が歪む。

「？紅？…！！」
『『飛翔翅炎』。』

紅麗の背中に炎の翼が出現し、紅麗は炎の羽根を散らせながら上空に飛び立つ。
十分に距離を置き、紅麗は再び?紅?に命令する。

「?紅?―カートリッジ使用!」
『御意。魔力弾薬―起爆。』

籠手にある火影の刻印が紅く光る。
籠手の装甲の隙間が開き、そこからカートリッジが排莢された。
魔力が上昇し、足元に火影の刻印を浮かぶ。
炎の翼に数千度の灼熱が宿る。
シグナムは迎え撃とうと、?レヴァンティン?を鞘に収める。

「?レヴァンティン?!」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ!』

シグナムもカートリッジを使用し、鞘から?レヴァンティン?を振り抜くと、再び刃が連結刃となっていた。

「『翅炎』!!」

紅麗は炎の翼から、炎の羽根を豪雨のように降り注いだ。

「『飛竜一閃』!!」

シグナムは紫炎を纏った連結刃を振り回し、連結刃が螺旋を描く。
不死鳥の羽根と竜の爪が衝突した。
螺旋を描いた連結刃は次々と炎の羽根を斬り裂くが、羽根の量とス

ピードが凄まじく―対処できなかった炎の羽根がシグナムに降り注ぐ。

『Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ．』

「くっ…！」

シグナムは防御魔法で防ごうとするが、攻撃を受けるたびに防御魔法の耐久性が失っていく。

そして、とうとう防ぎ切れずに防御魔法が砕け散り、炎の羽根が彼女を襲った。

「ぐあああああああッ！！」

大量の炎の羽根は容赦無くシグナムの身体を打ち、焼いていく。

やがて、不死鳥の羽根の猛威が止んだ。

あれほどの攻撃を受けても、シグナムはまだ立っていた。

だが、騎士甲冑が所々焼き破れ、？レヴァンティン？の刃が軽く溶かされていた。

「満身創痍だな」

シグナムのすぐ目の前に紅麗が悠然と立っていた。

シグナムは紅麗に斬りかかる前に、紅麗は彼女の腹を容赦なく蹴る。

「かはっ…！」

シグナムが倒れる前に紅麗は彼女の髪を掴んだ。

「私はお前が気に食わない」

シグナムの髪を掴みながら紅麗は彼女に語りかけた。

「貴様は血の匂いがするから私に敵愾心を持っているのだろう？確かに血の匂いに関しては否定しないし、私に敵愾心を持つのは当然のことだろう。だがな、血の匂いがするのは貴様も同じだ」

シグナムの瞳が揺らぎ、心臓が大きく脈打つ。

「何だと…？」

「貴様から血の匂いと、怨念を感じられるのだよ。貴様だけではない。ヴィータも、ザフィーラも、シャマルも―貴様らから血の匂いと怨念が感じられる。」

シグナムは押し黙った。

図星だった。

確かにシグナムたち―？ヴォルケンリッター？は人を殺した過去があった。

戦争で多くの人の命を奪った、はやての前の主の命令を聞いて人を殺したこともあった。

だが、主が八神はやてとなった時―シグナムたちは人殺しを一切していない。

人殺しをしてほしくない―それが彼女の願いだからだ。

守護騎士プログラムである自分たちを家族として接してくれて、初めて心から仕えたいと思った主の願いだ―それを裏切るはずがない。

目の前にいる男とは違うのだ。

だが、紅麗はシグナムの信念を否定する。

「貴様も私と同じなのだよ。自分のことを棚に上げて、聖人君子面で私に説教か？ふざけるな！殺戮者である貴様が―綺麗事を謳うな

ッ！！」
「ッ！！！」

シグナムの中で何かが切れた。
シグナムは紅麗を殴り飛ばした。
？レヴァンティン？に魔力を込め、自動修復速度を早めさせ、溶解していた刀身が修復される。

「私は―私たちはッ！貴様とは違うのだ？不死鳥の堕天使？ッ！！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

カートリッジを排莢し、炎の魔剣の刃が炎に包まれ、シグナムの足元にベルカ式の魔法陣が浮かぶ。

「血の匂いと怨念を纏いながら言うことか？竜眼の騎士？ッ！！」
『起爆！』

紅麗もカートリッジを使用し、紅麗の左腕が炎に包まれ、足元に火影の刻印が浮かぶ。

二人は地面を蹴り、相手に向けて駆ける。

「『紫電一閃』ッ！！！」

シグナムは炎の魔剣を振り下ろす。

「『嘴突（しとつ）』ッ！！！」

紅麗は平手で指を軽く曲げた状態での、炎の貫手を放つ。

凄まじい衝突音が響いた。

シグナムの腹に重たい衝撃が走る。
紅麗の炎の左手がシグナムの腹に叩き込まれたのだ。
シグナムは吹き飛び、地面を転がった。
炎の貫手によって、シグナムの腹部分の騎士甲冑が焼き破れ、白い肌に痛々しい火傷が刻まれていた。
もし、手加減抜きだったらならば、紅麗の貫手は間違いなくシグナムの腹を貫通していただろう。
何はともあれ―この模擬戦は紅麗の勝利に終わった。

「……」

紅麗は興味を無くしたようにシグナムに背を向け、そのまま歩き始めた。

「…何故だ…？」

シグナムは地面に倒れたまま、苦しげな口調で言った。
彼女から出た言葉は何故か問いかけだった。

「何故…お前は…？泣いている？んだ…？」

彼女のその言葉で紅麗の足が止まった。

「…なに？」

紅麗は首だけ振り返って怪訝そうに呟いた。

「私は…何百年も騎士として、戦ってきた故なのか…私には…戦う

相手の心が…少し見える…」

シグナムは何百年も戦い、何十人もの戦士たちと戦ってきた。
だからなのだろうか。
シグナムは戦いを通して相手の心情がある程度わかる。
相手がどんな思いで戦っているのか。
それが彼女の意思に反して伝わっていくのだ。
彼女にとって、戦い方は―心を写す鏡だ。

「お前は、泣いているんだ…確かに…禍々しい負の感情も見えた…
だが…私には…お前が泣いているように見えた…」

シグナムは紅麗を真っ直ぐに見据えた。

「お前に、何があった…？お前の冷たい表情…歪んだ心…その源は
なんだ…？お前は―」

シグナムの言葉が止まった。
紅麗が彼女の頭を強く踏みつけたからだ。

「知ったような口を利くなッ！！貴様、何様のつもりだ！！？」

紅麗は怒気が籠った口調で叫びながらシグナムの頭を何度も踏みつ
ける。

「先程までの敵愾心はどうした！？私が気に食わないのだろう！？
仮に私が泣いているからなんだ！？私に同情したというのかッ！？」

紅麗は足を上げた。
シグナムは紅麗を見据えると、彼は足を止めた。

シグナムの瞳が―とても悲しげなものだった。

「ッ！！」

紅麗は足を振り下ろし、何かが砕かれた音が響く。
紅麗の足が、コンクリートの地面にめり込んでいた。

「……」

紅麗はシグナムを一瞥し、身を翻して再び歩き始めた。

（下らん…）

紅麗は複雑な思いで内心で呟いた。
敵愾心を持っていたと思ったら、今度は憐れみの目を向けてくる。
戦いに勝ったというのに、この虚しい気持ちは何なのだろう？

（下らん…）

紅麗の仮面が真っ二つに綺麗に割れた。
額から流れた血が―溢れた涙のように地面に落ちた。

其之八：不死鳥と竜（後書き）

読んでいただいてありがとうございました！
後書きを書くのは初めてですね…前書きとか後書きとかに何を書けばいいかわからないので、ずっと放置していました。予告とか先の展開などあまり言いたくない方なので…（感想のところで少し言ってますが）

さて、今回はオリジナルの技について説明しようと思います。
まずは『飛翔翅炎』―これは文字通り、飛行するための『翅炎』です。通常の攻撃用の『翅炎』とは別ですね、飛行魔法と同じ扱いです。

次は『嘴突』。
これは紅麗が天堂地獄に使った貫手です。
かなりカッコ良かったので、一つの技として名前をつけちゃいました。
これの設定にはかなり悩みました…
まず、構えからして掌底なのか貫手なのか、わからなかったです。
ただ、こんな殺傷能力がある掌底はあまりないだろうし、個人的に掌底より貫手が好きなので貫手―ということにしました。
次は技名！これが一番悩みました！
『飛翔翅炎』は名前の響きが良いし、技と技名が合っていてすぐに決まりましたが、『嘴突』はかなり悩みました。
最初は『翅炎』『翅斬』ときたから、翅がつく名前にしようと『翅壊』にしようかと思いましたが、翅は羽根や翼という意味で、技と技名が合わないので没になりました。
紅麗の炎の型である不死鳥をテーマに視野を広げて考えました。

貫手→貫く→嘴。よし、嘴だ！嘴がつく名前にしようと思い、色々候補を出しました。

嘴炎（しえん）―ありきたり。

嘴貫（しかん）―微妙…。

貫嘴（ぬきし）―カッコ悪い…。

嘴突―何か牙突みたいだなぁ…零式とかかなり強そうじゃん…。だけど響きが良いし、牙突そのものをパクってるわけじゃないし、これにしよう！

ということで、『嘴突』に決まりました！

中には他の候補の方がいいと思う人も、牙突のパクりだと思う人もいると思います。

だけど、俺的にはこれが一番良いと思って選びました！

技名を叫びながら貫手を放つ紅麗を妄そ…いや、想像してみたらとメチャメチャカッコ良かったです！

なので『嘴突』をこれからも使い続けるので生暖かい目で見守ってください。

そして、最後まで完結できるよう精一杯頑張るので、応援よろしくお願いします！

またお会いしましょう！

其之九：教導と嫉妬

紅麗とシグナムの模擬戦が終わって数日―はやてとの約束通り、あれから二人は喧嘩をしていない。
顔を合わせば、すぐに口喧嘩や睨み合いしていたのに―今では睨み合いすらない。
ただ、お互いが言葉を交わさないし、視線すら合わせない―まるで相手の存在を認識していないかのようだ。
特に紅麗がその傾向が強い―強いて言えば、避けているような感じだ。
これはこれで少し不穏な空気になるのだが、喧嘩より遥かにマシだ。
しかし？仲間なんだから仲良くしてほしい？―それが機動六課の大半の職員たちの望みだ。

さて、魔法についての基礎を十分に学んだ紅麗と薫はフォワード陣と合同で練習できるようになった。
二人は前の世界での戦闘経験もあり、独自にオリジナルの魔法を覚えたりもして、いつでも出撃しても問題ないほどの実力になっていた。
そのため、二人にコールサインが与えられた。
紅麗がライトニング０５、薫がスターズ０５だ。
戦力の均等や、ライトニングの隊長格であるフェイトとシグナムが別件で外れるなどの理由でこういう割り振りとなった。
紅麗と薫は断る理由もなく迷わず了承した。
そして、フェイトは陰でガッツポーズを取っていた。

訓練場、ＡＭ１１：３０―。
午前の訓練の最後に、紅麗対フォワード陣・薫との模擬戦が行われていた。
模擬戦を提案したのは紅麗だった。
何でも、少しでも魔法を使った対人戦闘の経験値を積みたいとのことだ。
提案されたなのはは少し悩んだ後、承認の頷きをした。
数的に紅麗の方が不利みたいだが、リミッター付きのシグナムをほぼ無傷で打倒したほどの実力を持っている―心配はないだろう。
そして、実際に模擬戦をさせてみたら未だにスバルたちは紅麗に一撃を与えずにいた。

「うおおおおおおッ！！」

スバルはローラーブーツ型のインテリジェントデバイス―？マッハキャリバー？を走らせ、紅麗に向かって拳装着型アームドデバイス―？リボルバーナックル？を填めた右の拳を振りかぶる。
紅麗は流れるような動きでスバルの拳打を回避しながら背後に回り、彼女の背中に向けて掌底を放つ。

「あうっ！」

ただの掌底なのに重い衝撃が背中を襲い、スバルは顔面から地面に倒れた。
紅麗はスバルを一瞥もせず、次の相手の攻撃に備える。

「？ストラーダ？！」
『Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆ．』

エリオは槍型アームドデバイス―？ストラーダ？のカートリッジを

一発分使用した。
？ストラーダ？にあるジェット機が噴射し、一直線に紅麗に目掛けて突き進む。
進行方向が一直線であるが、十分にスピードはある―しかし、紅麗にとっては遅すぎる。
紅麗は？ストラーダ？の刃の側面を蹴り、進行方向を無理矢理ずらした。

「うわあっ！」

急に方向転換され、バランスを崩したエリオは地面に転がった。

「モンディアル、スピードがある一直線の攻撃はもう少し敵に近付いてやれ。動きが鈍い奴には通用するかもしれんが、そうでない奴には自殺行為でしかない。身体の小柄さと速さを生かして敵を翻弄しろ」

紅麗はエリオにそうアドバイスすると同時に背後に手をかざし、炎を放つ。
紅麗の背後から魔力弾を撃とうとしたティアナは紅麗の炎に飲み込まれ―姿が消えた。

「…幻術」

紅麗は小さく呟く。
『フェイク・シルエット』―ティアナが得意とする幻術魔法だ。
そして、廃棄ビルの屋上から本体のティアナが攻撃を行う。
両手に持った拳銃型インテリジェントデバイス―？クロスミラージュ？の補助を受け、橙色の複数の魔力スフィアがティアナの周囲に生成されていく。

「『クロス・ファイア・シュート』！」

橙色の魔力弾が放たれた。

紅麗は瞬時に攻撃の気配を感じ取り、降下してくる魔力弾に向けて左手を向ける。

左手から炎を放出し、魔力弾を撃ち落としていく。

だが、紅麗の背後に密かな攻撃の本命が隠れていた。

建物の窓から金色の弓矢―？鋼金暗器・五之型？を構える薫だった。

これまでの流れはティアナの作戦だ。

まず一つ目の囮である『フェイク・シルエット』で紅麗を揺さぶり、二つ目の囮であるティアナの魔力弾に意識を向けている紅麗の背後から攻撃する三重策だ。

卑怯なやり方かもしれないが、シグナムを倒した実力を持つ紅麗相手にそんなことは言っていられない。

薫は紅麗に一撃を与える焦りの気持ちを抑えて紅麗に狙いを定めて、矢を放った。

その瞬間―。

紅麗は振り向かずに空いている右手を背後に向け、炎を放った。

（流石、兄者だね…）

紅麗の実力を嫌というほど知っている薫はこちらの攻撃に気付くことをある程度予想していた。

予想していたからこそ―新たに策を投じる。

「？鋼金暗器？！『分裂錬金』！」

薫がそう叫ぶとともに弓の排莢口からカートリッジを排莢する。

『Ｄｉｖｉｄｅ－Ａｌｃｈｅｍｙ.』

紅麗の炎を受けそうになった矢が鋼色の魔力光に包まれると、矢が六本に分裂した。
紅麗の炎によって四本撃ち落とされたが、残りの二本の矢が紅麗の肩と背中に直撃した。
初めて紅麗に一撃を与えられたことに薫たちは傲ることなく、体勢が崩れた紅麗を追撃する。

「『アルケミック・チェーン』！」

白い飛竜―?竜魂召喚?によって巨大化したフリードの背に乗るキャロがグローブ型ブーストデバイス―?ケリュケイオン?を使って魔法を発動した。
紅麗がいる近くの地表にピンク色の魔法陣が現れ、そこから飛び出してきた鎖が紅麗の身体を縛りつけた。

「今だ！兄者をフルボッコできるチャンスだッ！！」

薫が吼えた。
一撃すら与えることすら難しい相手をリンチできるチャンスにかなりテンションが上がっているようだ。

「リンチは気が進まないけど…行きますよ、紅麗さんッ！！」
「積年の恨み！ここで晴らすッ！！レッツ・フルボッコ！！」

エリオもスバルも薫に便乗され、攻撃を仕掛ける。
特にスバルは紅麗に余裕で攻撃を避わされたり、カウンターされたから誰よりもテンションが上がって、可笑しな発言をする始末。
ティアナはスバルたちのテンションに若干引きながら魔力スフィア

を生成し、キャロはドン引きして何もできずにいた。

「……」

一方―ピンチに立たされている紅麗は落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

そして、紅麗の足元に火影の刻印が浮かび、彼の全身から炎が噴き出した。

全身を纏う炎は紅麗を縛りつけている鎖を包むと、灰となって燃え尽きた。

「き、金属を燃やしたっ!?」

「もうメチャクチャだよ、この人ッ!!」

エリオは驚愕し、スバルは紅麗の実力の理不尽さに涙する。

しかし、もうすでにスバルたちは攻撃体勢に入っている。

せめて一撃を入れる覚悟と、やられる覚悟を持ちながら紅麗に攻撃を仕掛ける。

エリオは後ろから?ストラーダ?を振り下ろし、スバルは渾身の右ストレートを放つ。

紅麗は後ろ蹴りでエリオを蹴り飛ばし、スバルの右ストレートを掌底で弾く。

「くっ…!」

スバルは攻撃の手を緩めず、足を狙ったローキックを放つ。

紅麗は半歩後ろに下がって、回避。

スバルは再び右ストレートで紅麗を狙うが、彼は身体を捻って避わす。

スバルは掠りもしないことに焦りながら、今度は頭を狙った回し蹴

り。
紅麗は彼女の足を掴み、右の拳でスバルの鳩尾を打つ。
スバルは苦しげな呻き声をあげ、そのまま気絶した。

「兄者、覚悟ッ！！」

薫の声が聞こえ、紅麗は振り返ると―薫が薙刀の形態の？鋼金暗器・壱之型？を真上に構えていた。
だが、？鋼金暗器？の刃渡りが何十倍にも伸びていた。

「『延伸錬金』！くらえ、兄者っ！」

薫は魔法で強化された全身の筋肉をフルに使って？鋼金暗器？を振り下ろした。

「馬鹿が…」

小さく呟いた紅麗はスバルは放り投げ、薙刀の斬撃を余裕で回避する。
目標を失った薙刀の長刃が地面を斬り裂き、砂埃が辺りに舞う。
濃厚な砂埃の中から紅麗が突き破って姿を現し、薫に向けて疾走する。
薫は迎撃するために？鋼金暗器？の刃の長さを元に戻そうとするが、その前に間合いに入った紅麗が彼の頭頂部に拳骨をぶつけた。
重い衝撃を受けて薫は涙目になりながら頭を押さえる。

「新しい力を試したい気持ちはわからんでもないが…仲間を巻き込む攻撃はするな、チーム戦での暗黙の了解だぞ。次やったら倍にして打つ」
「ご、ごめんなさい…」

薫は頭を押さえながら謝った。

「さて…」

紅麗は『飛翔翅炎』を使って、ティアナたちがいる建物の屋上に向けて飛行する。

呆気に取られていたティアナたちは紅麗の接近によって気持ちを切り替え、射撃魔法で迎撃する。

だが、紅麗は炎の翼の補助を受けた飛行魔法を巧みに使って、回避しながらティアナたちの間合いをだんだん詰めていく。

そして、射撃範囲内に入った紅麗は炎を纏った左手をティアナたちに向けた。

「どうする、抵抗するか？」

「い、いえ…降参、です…」

突破口を見つけられず、ティアナたちは降参した。

遠くから彼らの模擬戦をモニターで見ていたなのはとフェイトとヴィータは感嘆と驚愕の表情を浮かべていた。

「紅麗さん、ほぼ無傷で勝っちゃったよ…」

「さすがにシグナムを負かしたことだけはあるな」

なのはとヴィータが感想を漏らす。

「でも…薫くんの？あの魔法？初めて見るな。なのはたちは知ってたの？」

フェイトが尋ねたのは、薫が使用した『分裂錬金』と『延伸錬金』のことだった。

「うん。新人たちに個人練習をさせている時、私が薫くんの担当をしてたんだけど、その時に見せてもらったの。デバイスの変形と違って一種の魔法みたいだから、さすがに驚いちゃったよ」

魔法といっても全く新しいものだから、魔法分類がわからない。しかし、なのはは薫の能力は？魔力変換資質？なのではないかと推測した。

魔力変換資質とは、魔力の変換を意識せずに行える一種の資質である。しかし、これを得意とする者は純粋魔力の大量放出が不得意だ。変換の種類は現在三種まで確認されている。

紅麗やシグナムに該当する？炎？、フェイトやエリオに該当する？電気？、最後は比較的に稀とされる？凍結？。

そして今、四つの目の魔力変換資質が発見された。

デバイスを魔力によって一部の形状を変化させる薫の魔力変換資質は―？金属？と名付けるべきだろう。

「…なのは。紅麗たちが使う魔法って、私たちが使う魔法とは全然違うよね」

「どうして？」

フェイトの言葉になのはは理由を尋ねる。

「ミッド式やベルカ式の魔法って、理系的な知識で魔法の構築や制御とかするでしょ？でも…本人に聞いたんだけど、紅麗たちの使う火影式にはその必要がないみたいなの」

フェイトの言う通り―?魔法?は、数学や物理といった理系的な知識が魔法の構築や制御には必要になる。
しかし、紅麗たちが扱う火影式魔法はそれに該当しない。
紅麗たちの話によると、魔法の構築は自らの?想像?で行っているそうだ。
さすがにミッドやベルカ式の魔法を使う場合には理系知識によって構築するしかないのだが、彼らが独自で編み出した火影式魔法は己の想像力によって構築されている。
想像さえできれば何でもありだと思うが、その想像を魔法として形を為すことができる場合とできない場合がある。できたとしても、長い発動時間、高い魔力消費量などのデメリットまでついてくる魔法もある。
そこの問題は、本人の実力次第のようだ。

「…そうなんだ。ふふっ…全く新しい魔法を使う人が二人もいると鍛え甲斐があるよ、どんなふうに成長していくか楽しみだよ」

まるで好奇心に溢れた子供のように、なのはは無邪気に微笑んだ。

模擬戦が終わった後、紅麗はスバルたち一人一人に欠点とアドバイスを教えていた。

「まずはランスター。お前は頭も良いし、皆を引っ張っていけるリーダーシップがある―だが、感情が高ぶって突撃思考になる傾向がある。お前は指揮官だ。どんな状況も冷静に考え、スバルたちを上手く指示していけるようにしろ」
「はい!」

ティアナは欠点を悔やみながらも、それを改善しようという意気込みを込めて返事をした。

「次にナカジマ。お前はシューティング・アーツで型がちゃんなってはいるが、攻撃が避わされるたびに型が乱れてしまう。突撃思考になるティアナと同じだ。頭を冷静に、どんなときも型をしっかりと守れ」

紅麗はそうアドバイスしながら、前の世界にいた完全無欠な突撃思考のゴリラ男を思い出していた。

「む…何か失礼なこと考えていませんでした？」

紅麗の内心に気付いたらしくスバルがジト目で見つめてくる。
その勘の鋭さを少しでも戦闘に生かせないだろうか？

「いや、ゴリラみたい戦い方だと思っただけだ」
「いや、メチャクチャ失礼でしょ！？何ですか、ゴリラみたいな戦い方って！」
「…ルシエ、お前は積極的に行動しろ。」

スバルを無視してキャロにアドバイスを送る。

「お前のサポートはチーム戦ではとても必要だ、補助魔法でモンディアルたちを助けてやれ」
「はい！」
「いや、人の話聞いてくださいよっ！」
「モンディアルは先程言ったが、身体の小柄さと速さで敵を翻弄しろ」

もう完全に無視を決め込む紅麗。
スバルは何か喚いているが、ティアナが彼女の頭をスパァン！！と平手打ちして黙らせる。

「それから槍のような長物をあまり縦に振るな。最小限な横の動きで振るった方がいい」
「わかりました！」

紅麗に尊敬の眼差しを向けながらエリオは元気よく返事した。

「そして…」

紅麗は視線をずらし、冷や汗をだらだら流しながら正座をしている薫を見下ろす。

「薫…チーム戦で仲間を巻き込む攻撃は愚の骨頂だ。ましてや自分の力を試したいという、下らない理由は救いようがない。もし、今度やったら―」
「ば、倍の力で殴るんでしょ…？」
「違う、眼　球　を　焼　く。」
「いや、さらに酷くなってない！？」

そこへ、なのはたちが戻ってきた。

「皆、お疲れさまっ。初めて薫くんと交えてのチームだったけど、ちゃんと連携を取れていたよ。今後はもっと連携を綿密にして、紅麗さんが言ったアドバイスを次に生かしていこうね。…それじゃ、午前の練習は終わり。シャワー浴びてお昼にしよ」

スバルたちは元気よく返事し、お礼の言葉を言って解散していった。

「…それにしても紅麗さんって、世話好きなんですね」

なのはは歩いていくスバルたちの背中を見つめながら紅麗に声をかける。

「模擬戦をやりたいっていう理由―ウソなんでしょ？本当はスバルたちの欠点を模擬戦を通して知り、アドバイスしたかった―違いますか？」

なのはは意味ありげな笑みで紅麗を見つめ、対する紅麗は小さく笑いながら肩を竦める。

「大外れですよ、高町教導官」

「え～っ！？ウソでしょ？だって、紅麗さん魔法をほとんど使ってなかったですし、スバルたちをアドバイスしてるとき楽しそうでしたよ？」

「そう見えただけです」

紅麗となのはのやり取りは隊舎に着くまで続き、フェイトは彼らの後ろで黒いオーラを漂わせ、ヴィータはそんなフェイトに少しビビっていた。

食堂、ＰＭ１２：３０―。

「紅麗さん、酷くない！？女の子に向かって、戦い方がゴリラって！」

スバルは愚痴を言い、大量のパスタを口の中に流し込む。

まだ根に持っていたようだ。

「別にあんた自身の事をゴリラって言ったわけじゃないでしょ？それよりヤケ食いやめなさいよ、ほんっとに食欲が失せるから」

皿に大量のパスタを盛っては胃に流し込む―それを5秒以内に済ます作業を何度も繰り返すスバルを見てティアナはいつも以上に満腹感を覚えていた。下手したら、見てるだけでお腹を壊しそうだ。

「んぐっんぐっ…それにさぁ…紅麗さんの声聞いてると、何かムカつく。セクハラされそう」

「意味不明よ。」

ティアナは冷徹にツッコんだ。

「やっぱり紅麗さんって強いなぁ…五人がかりでも一撃がやっとだったよ」

エリオは紅麗の強さに憧れを覚えながら呟いた。

「それに一回模擬戦しただけで的確な欠点とアドバイスできるのはすごいよねっ。…紅麗さんって、戦技教導官みたいなことをしてたんですか？」

キャロは薫に尋ねる。

「うえっ！？あー、その…何て言ったら、いいか…」

薫はしどろもどろになる。

紅麗が戦闘に関しての教え方が上手いのは彼が戦闘のプロだからだ

―そして、その話をすると自分と紅麗が暗殺部隊に所属していたことに繋がる。
まだそのことについて話すのはまだ早い。
薫は何とか誤魔化そうと言葉を選ぶが、彼の挙動不審な様子にキャロの表情が曇る。

「あ、あの、ごめんなさい…変なこと聞いちゃいましたね…」
「あっ、いや…気にしないで」

悟られてしまったことに悔やみながら薫は苦笑いする。

「話したくないことがあるのはあんただけじゃない。皆、色々と訳ありみたいだから話さなくてもいいわよ」

思うところがあるらしくティアナはそう言った。
彼女の言葉にスバルたちは表情を変えた。
スバルたちも何か訳ありがありそうだ。
特に、薫はエリオと仲が良いから彼の過去について少し知っている。
孤児だった自分をフェイトが拾ってくれた―それくらいのことしか聞いていないのだが、きっとまだ話に続きがあるのだろう。
そして、ティアナもスバルもキャロも―辛い過去を背負っている。
薫は何故かそれを感じ取れていた。

薫はティアナの言葉に対して安堵の微笑を浮かべた。

「ありがと、ティアナ姉ちゃん。でも、いつか話すよ」

ティアナはそう、と小さく頷いた。
だが、薫は内心では不安になっていた。
自分と義兄が暗殺部隊に所属し、罪を犯した過去をティアナたちは

受け入れてくれるだろうか、と。
薫は人を殺してはいないが、人間の拉致などの罪を犯している。
自分の事ならまだしも、多くの人間を殺してきた紅麗を受け入れてくれるかどうか不安だった。
尊敬の眼差しで紅麗を見つめているティアナたちが過去を知った途端に軽蔑や恐怖の眼差しに変わってしまうんじゃないかと思うと激しく動悸する。
彼女たちだけではない―なのはやフェイトたちも例外ではない。
自分のことはいい―だけど、義兄だけでも受け入れてほしい。
人を傷付け、人を殺した紅麗にも優しいところがある。
いや、彼の本質は優しいのだ。
でなければ、紅麗は自殺しようとした自分を助けてもいないし、生き残る術を教えてもいない―だから、自分は仲間に別れを告げて、紅麗を義兄として共に歩むことを決めた。
優しい兄者を受け入れてほしい―そのことを薫は願った。

別のテーブルにて、紅麗とフェイトとなのはとはやてが昼食を採っていた。
その光景を見て、９割りの男性局員たちが紅麗に嫉妬と憤怒の目で睨んでいた。
ヴァイスに至ってはハイパーバズーカを構えている。
ヴ　ァ　イ　ス、行　き　ま　ー　す。

「へぇ～、紅麗さん。スバルたちを教導してくだはったんですかぁ」
はやてはニヤニヤしながらからかうように言った。
話題は午前の訓練の最後にやった模擬戦のことだった。

「ですから誤解ですよ、八神部隊長。…高町教導官、勝手に改竄し

ないでいただきますか」

紅麗は辟易の溜め息をつきながら言った。

「私は事実を言ったまでですよ。教え方も上手ですし、戦技教導官を目指してみたらどうですか？」

なのはの言葉にフェイトがぴくりと反応する。

「なのは。戦技教導官は似合わないと思う、紅麗には執務官を目指した方がいいよ」

「えっと…フェイトちゃん？何でそんなにピリピリしてるの？」

対抗意識の黒いオーラを放つフェイトに睨まれて、なのははたじろぐ。そして、誤魔化すように別の話題を振る。

「えっと…あ、そういえば、紅麗さん。前々から言いたかったんですけど、？高町教導官？って呼ぶのやめてもらえますか？何か他人行儀みたいな感じですし」

「あ、私もそう思った！自分より年上の人に敬語を使われたり敬称を使われると、何かこそばゆいんやよね」

なのはの言葉にはやても同意した。

「いや…年齢を抜きにして、目上の者に対して敬語と敬称を使うのは当然ではないかと」

「でも、紅麗さん、私たちより一個年上ですやろ？公の場はともかく…プライベートの時は呼び捨てでええですよ。あ、もちろん、敬語無しで」

「いや、しかし―」

「しかしも何もありませんよ。それとも…私たちのこと、嫌いなんですか？」

なのはが寂しげな眼差しで紅麗を見つめてくる。

はやても同じ眼差し（だが、明らかに意識的な上目使い）で見つめてくる。

紅麗は溜め息をついた。

いくら若い女性とはいえ、軍みたいな組織に所属している者が厳格さを無くしていいのだろうか？

だが、上下関係をあまり厳しくしていないからこそ―ここの部隊の局員たちは皆和やかなのだろう。

「…わかった。八神、高町…これでいいか？」

「下の名前で呼んでくれないん？　私らは別に構へんけど…」

「うん、そっちの方が慣れてるしね」

次の瞬間、空気が重たくなると同時に、食堂の部屋の温度が下がった。

紅麗と、なのはと、はやての三人は戦慄する。

？この感覚？を、なのはとはやては今までその身に受けたことがなく、？この感覚？は何なんだと自問する。

しかし、紅麗だけはわかっていた。

―これは…殺気…！！

しかも、紅麗ですら味わったことがない重々しい殺気だ。

三人は首を軋ませながら、殺気の発生源である？彼女？を見た。

それは、輝かしい笑顔を浮かべながら黒いオーラを放つフェイトだった。

「…フェイト…どうかしたか？」

尋ねたのは紅麗だった。

殺気に対して抵抗力があるはずなのだが、声が若干震えていた。

「ん～？どうもしてないよ？」

―だったらその殺気は何なんですか！！？

三人の思考がシンクロした。

「お、おほんっ…ま、まぁ…ミッドチルダ症候群はともかく…えっと…その…」

はやてはわざとらしく咳払いし、意味不明な単語を言って話題を変えようとする。

しかし、恐怖で頭が働かずに話題が出てこない。

「あ、あーっ！そうだ！フェイトちゃんと紅麗さんって、何か最初から敬語使い合っていなかったよね！？」

わざとらしい口調で話題を変えたのはなのはだった。

はやては「ナイス、なのはちゃん！！」と、心の中で親指を立てる。

そして、なのはの指摘で、何故かフェイトの殺気が薄れた。

「ああ…そういえば、そうだったな。いつからだろうか？」

紅麗に尋ねられると、フェイトの殺気が消えた。

「あ、あれ？えっと…いつからだっけ…」

「すまんな、今まで敬語を使わないでしまって。直した方がいいな」

「えええっ！？」

フェイトは驚きの声をあげながら勢いよく立ち上がった。

「い、いいわけないよっ！敬語無しだよ、無し！！絶対にっ！！神様が許しても、私が許さないっ！！」

「あ、ああ、わかった…そんなに慌てなくてもいいだろう」

「あぅ…ごめん…」

いきなり立ち上がって叫んでしまったことにフェイトは羞恥に顔を赤くしながら座り込んだ。

一方―殺気に怯えていたなのはとはやては顔を見合わせた。

声も念話も使わず、二人は意思疎通を開始する。

―敬語と敬称をやめさせただけで殺気を出す。

―何があったか知らないが、いつの間にか敬語を使っていなかった模様。

―敬語を使おうとする紅麗を慌てて止める。

―つまり―。

―つまり―。

―フェイトは。

―紅麗のことが…。

なのはとはやては、ニヤリと笑たた。

「……？」

突然笑み浮かべる二人にフェイトは不審げに思う。

ただ、二人の笑みは良い意味での笑みではないことだけはわかってしまった。

『も～、フェイトちゃ～ん♪？そういうこと？なら早く言うてや～♪』

『フェイトちゃん、がんばって♪応援してる♪』

「～ッ！！！？」

二人からの念話にフェイトの顔が真っ赤になる。

「なのはちゃ～ん。何か私、もうお腹一杯や～」

「奇遇だね、はやてちゃ～ん。私もだよ、片付けよっか～」

二人はニヤニヤ笑いながらトレイを持って席を離れた。

「…何で、ニヤついていたんだ？」

紅麗は疑問げに首を傾げ、フェイトはずっとうつ向いたまま昼食に手をつけなかった。

紅麗を睨んでいた3分2の男性局員は安堵の息を漏らしながら昼食を食べ始め、残りの男性局員たちは紅麗に殺気を向ける（もちろん、フェイトに劣る）。

そして、ヴァイスはニヤニヤしながら紅麗に向けて親指を立てた。

其之十：和やかな時間　前編（前書き）

気付かずに、？ココロ？が生まれていく。
気付かずに、？ココロ？が変わっていく。

其之十：和やかな時間　前編

17：30の現在、地下に存在するスカリエッティのラボ―そこにある広大な訓練用スペースに一人の青年と一人の少女が模擬戦をしていた。
まず青年の方は―額に長いバンダナを巻き、強固な胸当てとマントを着込み、その手に牛の頭部を模した金色の二叉の大槍が握られている。
一方、少女の方は青いラバースーツを着込み、その手には武器がない。
というより、まだ武器が完成していないと言った方が正しい。
しかし、少女はそんなことを意に介さずに相手に目掛けて拳と足を振るう。
どうやら徒手空拳が彼女の戦闘スタイルのようだ。

「だあああッ！いい加減、くらいやがれぇ！！」

赤髪の少女―ノーヴェは荒い言葉使いで叫びながら青年に拳を振るう。
当たればただではすまないほどの重い一撃なのだが―当たらなければ意味がない。
青年―ナナシは余裕の笑みを浮かべながらひらりと避わす。

「へへ～、くらってたまるか～い♪何ならくらってやろうかい？ノーヴェちゃんが真っ裸見してくれたらの」
「するかッ！！」

ノーヴェは怒りと羞恥で顔を真っ赤しながら右ストレートを放つ。
ナナシはそれを避けると同時に、大槍を突き出す。

「かっ…！」

牛の角を模した槍の切っ先はノーヴェの腹に食い込み、彼女は苦しさに呻きながら片膝をついた。

「ほい、終了。また自分の勝ちやな、これで８勝や」

ナナシは勝ちを宣言し、ノーヴェに手を伸ばす。

「立てるかい？ノーヴェちゃん」

「ナメんじゃねぇ…」

ノーヴェは苦しげに呟きながら自力で立ち上がった。

「ノーヴェちゃん、あんまり感情的になったらあかんで？ノーヴェちゃんの一撃は当たればすごいけど、見切りやすくちゃ意味ないやろ？」

「挑発してくる奴に言われたくねーよッ！」

「…ま、確かにそうやな」

ナナシは軽薄な笑みを浮かべながら肩を竦めた。

「１０戦８勝、か…もうノーヴェじゃナナシには勝てないな」

そう言ったのは今まで二人の模擬戦を見学していたチンクだった。

「チ、チンク姉！今のはマグれだ！次は絶対に勝てるよっ！」

「ほほ～、８連敗もしているノーヴェが言うことっすか～？」

同じく見学していたウェンディはにやにや笑いながらノーヴェをからかう。

「上等だ！！ぶっ壊してやるよ！！」
「そう言うなら、こっちも上等っすよ？」
「まぁまぁ、やめなって、二人とも」

今にもケンカを始めようとするノーヴェとウェンディを宥めたのはセインだった。

「…しかし、ナナシは本当に強いな。戦闘経験があるのか？」

チンクはノーヴェたちを微笑ましげに見つめながらナナシに尋ねる。

「…みたいやな。記憶はまったくないが…身体は覚えとる」

ナナシは無表情に呟き、ここ数日のことを思い返す。

ナナシとスカリエッティが同盟を結んだ日から一週間―怪我が完治したナナシはスカリエッティに自分を戦えるようにし、協力させてくれと頼んだ。
それは別にスカリエッティ自身に荷担するためではなく、ナンバーズを護る―ただそれだけのためだ。
間接的に荷担することになるのだが、ナナシはあくまでナンバーズを護ると主張した。
頼み込まれたスカリエッティは了承の即答した。
時空管理局―特に機動六課が相手なのだから、使える戦力があるならばとことん使いたい。
それに前々からナナシの潜在能力について興味があったため、迷うことなく了承した。

そうと決まれば、ナナシの武器を用意しなければならない。
とりあえず、スカリエッティはナナシに杖型のストレージデバイスを渡した。
スカリエッティ曰く、本来なら剣や槍、手甲など―武器形状のデバイスであるアームドデバイスを製作しようかと思ったが、それでは時間が足りないという。
今まで武器を持たなかった人間が、武器を使う上での最適動作を覚えるのに一朝一夕でできることじゃない。
魔法を使うことでの最適動作・応用力も例外ではないのだが、武器の最適動作よりはマシだし、ナナシの持つ魔力変換資質・電気を大いに発揮させたい。
スカリエッティの的を射た説明を受け、ナナシは納得した。
ナナシとしても、早くナンバーズを護れるように強くなりたいと思っているからだ。
しかし、ナナシは杖型デバイスを握った瞬間―不思議な感覚を覚えた。
妙にしっくりくるし、どこか懐かしさを感じた。
そして、頭痛とともに頭の中にイメージが浮かんだ。

一つの目がある不気味な赤い三ツ叉の矛―。

ナナシはいきなり浮かんだイメージに混乱した。
あの武器は何なのだろうか？
思い出せない。
まだ記憶が回復していないようだ。
だが、ナナシは確信した。
これは失う前の記憶だと、そして自分はあの武器を取って戦っていたんだと―。
それならば杖のような長物を握ったときの懐かしい感覚にも納得ができる。

ナナシはすぐにそのことをスカリエッティに話し、槍型の武器を造ってくれと頼んだ。
そして、数日かけて彼専用のデバイスが完成された。
デバイスの名は―？ストーンカ？。
雷の魔牛の名を冠する大槍―魔力変換資質・電気を持っているナナシとは愛称が良いアームドデバイスだそうだ。

さて、武器を得たナナシは魔法の練習を後にして、最初にナンバーズに模擬戦を誘った。
その時、誘いに乗ったのはノーヴェだった。
そして、いざ模擬戦を始めてみたら―ナナシは思いの外、ノーヴェの攻撃が見切れていた。
そのことにナナシは驚いた。そして、驚いた隙を突かれて敗北。
初めは、失った記憶と覚えている感覚が上手く馴染めずに負けていたのだが、だんだん自分の高い戦闘能力を認識し始めた。
そして、ここ数日をかけてノーヴェと１０回の模擬戦をして、最初の２回しか負けていない―それ以降は８連勝だ。
ナナシは、自分が戦闘に関してまったくの素人ではないと喜びを感じた。
そして、ふと思う。
記憶を失う前の自分はどんな生活を送ってきたのだろうかと。
武器を取って戦ってきたのだから、ろくでもない生活をしていたんだろう。
そして、何のために戦ってきたのだろうか？
金のため？
ただの戦闘趣味？
家族や友人―大切な人たちを護るため？
それとも―ただ殺しを楽しむためだけの殺人狂だろうか？
そう思うと怖さも覚えた。
この強さが―人を殺すためだけに使われたのか？

「…ナナシ？」

声をかけられて、ナナシの意識が現実に戻る。
ナナシは視線を下にすると、チンクが心配そうな目で見上げていた。

「何か…悲しそうな顔をしていた…大丈夫か？」

心配そうに声をかけるチンクに、ナナシは嬉しさを覚えた。
そして、悪い予感を払拭した。
自分が殺人狂のはずがない、そんな人間が記憶が失ったからってチンクたちを護る決意をするだろうか？
自分がどんな人間だったか、どうでもいい。
大切な人たちを護る―今はただ、それだけを思っていればいい。
ナナシはチンクを安心させるようにいつもの笑顔を見せ、チンクと目線を合わせるように片膝をついた。

「だ～いじょうぶや♪悲しい顔なんてしてへんで、自分はいつも通りや」

ナナシはチンクの頭を優しく撫でた。

「やっ…ナ、ナナシ…やめて、くれ…恥ずかしい…」

チンクは赤くなった顔をうつ向かせ、恥ずかしそうに身体を縮こませる。

（か、可愛い…）

その場にいる全員がそう思った。

特にナナシは抱き締めたい欲望に駆られた。
別にナナシはロリコンではないのだが、チンクのこんなに可愛い仕草を見せつけられては萌えないわけがない。
ナナシは抱き締めたい欲望を必死に我慢―

「つ～か、もう限☆界ぃぃぃぃ～！！」

ナナシはチンクを抱き締めた。

「ええ！？ちょっと…ま、待て、ナナシ！？」

いきなり抱き締められたからチンクはさらに顔を赤くする。

「かわええのう、チンクたん♪よ～し、このままおっ持ち帰りや～♪」
「なっ！？てめぇ！チンク姉を放しやがれ！」

ノーヴェが吼える。

「チンク姉を抱きしめるのは私っすよ！」

ウェンディが吼える。

「いや、私だよ！！」

セインが吼える。

「ナナシって、ロリペド野郎だったんだね」
「ディエチぃぃぃ！！その第一声は納得いかんっ！！」

ローテンションで酷いことを言うディエチにナナシは怒号を発した。

「ナナシ！チンク姉をお持ち帰りして、チンクたんファンの読者を敵に回す気っすか！？チンク姉はナンバーズ（私たち）の中で上位の人気があるんっすよ！？」

「読者の都合なんか知るかい！それに自分、結構人気あるんやから読者も許してくれるやろ」

ナナシは、チンクを仔猫を抱くように抱えながら反論する。

「そんなことは限らないっすよ！ナナシは今こうやって普通にチンク姉をお持ち帰りできるけど、読者はそれをしようと思ってもできないんすよっ！？嫉妬しない方がおかしいくらいっす！」

「何なら読者に聞いてみるか？チンクたんをお持ち帰りすることを許すか、許さないか―感想欄に書かせようや」

「さっきから何の話をしてるんだ、お前たちは！！？とにかく、ナナシ、早く放してくれ！」

チンクは抱えられながら放すように言うが、ナナシは悲しげな表情で首を振る。

「すまなぁ、チンクたん…チンクたんの頼みでも、それはできへん…」

「さっきからその？たん？は何なのだ？」

チンクの言葉を無視し、ナナシは仰ぎながら続ける。

「自分はなぁ、自由に生きることを決めたんや…誰にも言われるわけでもなく、世界で唯一の自分だけの思いで動くと決めたんや！自分の意思を持って、自分の意思で決意し、自分の意思で足を動かす。

それが―自分や！自分は―？自分？を貫き続ける！」
「カッコいいことを言ってるけど、やろうとしてることは最低だからね」
セインはジト目で見つめながら言う。
ナナシは自嘲の笑みを浮かべ、セインたちに顔を向けた。
そして―
「と、いうわけで…自分はチンクたんをお持ち帰りしまっす！以上！」
ナナシは一方的に告げ、チンクを肩に担いでその場から駆け出した。
「何が『と、いうわけで』だ！！チンク姉をお持ち帰りすんじゃねぇ！！」
「ってか、どこに持ち帰るんすか…？」
「とにかく！チンク姉を救うんだ！そして、私らがお持ち帰りするんだ！」
セインたちがナナシを追いかけようとしたとき、突然ナナシが勢い良く真横に吹き飛んだ。
「ほげぇぇぇぇぇ～！！」
ナナシは変な悲鳴をあげながら受け身を取れずに床に倒れる。
いや、チンクに危害が及ばないように、自らがクッションになって受け身を取らなかったのだ。
ナナシに拍手。
「あ、あたた…誰や…？チンクたんのお持ち帰りを邪魔する奴は…

って、トーレ姐さん！？」

ナナシは邪魔者を咎めようと視線を巡らし、目の前にいる長身で短髪の女性を見て、彼女の名を畏怖を込めて叫んだ。
彼女の名はトーレ―Ｎｏ．３のナンバーズだ。

「ト、トーレ…助かった」

チンクは安堵を呟きを漏らし、複雑な表情でナナシから離れていく。

「あっ！チンクた～んっ！」

ナナシはチンクを追いかけようとするが、遮るようにトーレが立ちはだかる。
ナナシは冷や汗を浮かべながらトーレを見つめる。
彼女はこめかみに血管を浮かばせ、鋭い眼光がさらに鋭くなってナナシを睨む。

（こ、怖い…）

泣きそうになりながらナナシは正直な感想を心の中で呟く。

ナナシはトーレのことが苦手だった。
冗談が通じないし、会話も全然続かないし、喋りかけてくんなオーラを全開にしてくる―堅物であるトーレと飄々としたナナシとは相性が悪かった。

「あ、あのぅ…トーレ姐―」

「ナナシッ！！」

話しかけたナナシを遮るようにトーレは叫んだ。

「貴様という奴はチンクを拉致するとは軽薄すぎるにもほどがあるぞッ！」

「ちょ…ちょう待ってくれ、トーレ姐さん！」

心外とばかりにナナシは反論する。

「自分は拉致してへんで、お持ち帰りしようとしただけやッ！！」

「言い方を変えただけじゃないかッ！！」

ツッコみながらナナシを蹴り飛ばす。

「お前のその腐った性根を叩き直してやる！模擬戦をするぞッ！」

床に倒れるナナシを冷たい目で見下ろしながら怒鳴りつける。

「ト、トーレ姐さん…暴力で人を更生するなんて間違―」

「何　か　文　句　が　あ　る　の　か…？」

「喜んでさせていただきますッ！！」

圧力をかけてくるトーレの恐怖に囚われたナナシは喜んで従うしかなかった。

トーレは威圧感を放ちながら、ナナシは倦怠の溜め息をつきながら準備を整えた。

チンクたちは被害が及ばないよう、離れた場所から彼らを見守る。

「…ナナシ、戦う前に一つ言っておく」

「…何ですかい？」

ナナシはうんざりした様子で聞く。

「私に対して、先手を打たせるな」

トーレはそう言った。

ナナシはノーヴェと模擬戦をするとき、「レディーファーストや、お先にどーぞ」と言って先手を打たせている。

それを自分に対してやめろということだ。

「別にええやろ、自分のポリシーみたいなもんやで？」

「自分より弱い相手ならともかく…私に対してそんなことを言っているとお前は負けるぞ」

トーレは理由を述べた。

自分の戦闘機人として性能は全ナンバーズの中で一二を争う、と。

肉体増強レベルはオーバーSランク、稼動暦が長いから実戦経験も豊富。

そして、特殊能力がある。

ナンバーズにはそれぞれインヒューレントスキル―？IS？と呼ばれる先天固有技能を持っている。

そして、トーレの？IS？は？ライドインパルス？と呼ばれる高速移動―。

戦闘能力、経験値、？IS？―それらを考慮するとノーヴェとは比較にならない。

故に、下らないポリシーで相手に先手を打たせると確実に負ける―とのことだ。

「……」

トーレが言った理由を納得したのか、ナナシはいつになく真摯な表情を浮かべた。

「…そうかい、ほんならナメてかかったらあかんな」

ナナシは？ストーンカ？を構える。
その表情、その口調、その構え、その覇気―それらはいつものナナシではなく、戦士としてのナナシだった。
そんな彼にトーレは満足そうな顔をした。

「やっと理解したようだな。…チンク、合図を」
トーレはナナシを見据えたまま、チンクに合図を促す。
チンクは小さく頷く。

「模擬戦―始めっ！」

ナナシ対トーレの模擬戦が開始された。

「レディーファーストや、お先にどーぞ♪」

ナナシの一言で、トーレたちはずっこけた。
まさか…あの表情、あの口調、あの構え、あの覇気でこんなオチになるとは思わなかった。
一方、ナナシはボケが成功したことに嬉しい様子で、セインとウェンディもベタなずっこけをできたことに嬉しい様子だ。

「人の話を聞いていたのか、貴様はッ！！？」

だが、トーレの方は嬉しさなんて感じるはずがない―怒りしかなか

った。
ナナシは彼女の様子に辟易したように首を振った。
「トーレ姐さんの話なんか知るかい、自分は誰かに言われるんは好きやないんや」
「好き嫌いの問題ではない！」
トーレはうんざりした様子で頭を掻いた。
「何だって相手に先手を打たせることにこだわるんだ？理由は何だ？」
「ん～…理由って言われてもなぁ…」
理由を聞かれたナナシは腕を組みながら首を傾けた後、真摯さ込められた軽い口調で告げた。
「自分は男で、トーレ姐さんは女の子や。模擬戦とはいえ、女の子を立たせてやるんは―男として当然のことやろ？」
「――――」
トーレは固まった表情で沈黙した。
すると、何故か頬が染まり始めた。
「…どないした？」
トーレの様子に不審げに思いながらナナシは尋ねる。
「あ、いや…その…」
トーレは頬を染めたまま、ナナシから目線を反らす。

「そ、その…何だ…私、のこと…お、？女の子？に、見えるのか…？」
「……は？」
いきなりの問いかけの意味を理解できずにナナシは疑問の声を漏らす。
「い、いいから答えろっ。お前から見て…私は、女の子に見えるのか…？」
「…ああ、見えるで」
未だに言葉の意味を理解できないが、ナナシはとりあえず正直に答えた。
「お、男に見えないのか…？こんな顔立ちで…身体だって筋肉がついているし…言葉使いだって…」
「……」
彼女の言葉の意味をようやく理解できたナナシは、可愛いなと思いながら笑顔を浮かべた。
ずっとトーレは自分の見た目にコンプレックスを持っていたんだろう。
確かに顔立ち—特に目付きは鋭いし、身体だって筋肉質だ。言葉使いも男言葉だ。
しかし、ナナシは彼女をしっかりと？女の子？として見ている。
「自信を持てや、トーレ姐さんは立派な女の子やで（特に胸とか）」
何かがおかしい—。

だが、トーレはまったく違和感を感じずにナナシに期待の篭った眼差しを向ける。

「ほ、本当か？本当に…女の子らしく、見えるか？」

「断言できる、女の子らしく見えるで（特に尻とか）」

やっぱり何かがおかしい―。

「後になって…ウソとか言うなよ？」

「いい加減信じろや。トーレ姐さんはちゃあんと女の子に見える（特にくびれとか）」

お　か　し　い―。

ナナシは優しい言葉をかけているが、彼の瞳は立派な変態だった。

「まぁ、とにかく…トーレ姐さんは？女の子？なんやからレディーファーストでお先にどーぞ♪」

トーレの顔がにやつく。

「そ、そうだな…私は、？女の子？だからなっ。レディーファーストで私が先手を打つのは当然のことだっ」

トーレは顔を赤くしながら機嫌良く言って構えを取る。

（何かトーレ姉、完全に丸め込まれてない？）

（いいんじゃないっすか？トーレ姉、機嫌良さそうだし）

（トーレ姉の前で男女って言っちゃダメだな…）

活発三人組は姉の様子を見て小声で会話した。
そんな会話が耳に入らず、トーレは思考を戦闘に切り替える。
その表情も、醸し出す雰囲気も―戦士のものへと変わる。

「行くぞッ！」

トーレは握った拳を引きながら床を蹴った。

（は、速ッ…！）

瞬時に間合いを詰められ、ナナシは戦慄しながら？ストーンカ？を横に構え、トーレの拳打を防御する。
戦闘機人の拳とデバイスの大槍が衝突し、強烈な轟音が鳴り響く。

（くっ…パンチ力もすごいやないか…）

トーレの拳からの凄まじい衝撃が両手にびりびり伝わる。
気が緩んでいたら？ストーンカ？を取り落としていただろう。
しかし、怯んでいる場合ではない。
トーレはもう片方の手で？ストーンカ？の長柄を握り、軽く跳躍しながら側頭部を狙った蹴りを放つ。

「おわっ！！？」

ナナシは驚愕の悲鳴をあげながら反射神経で頭を下げ、蹴りを回避する。
トーレは？ストーンカ？から手を放し、蹴りの勢いを殺さずにその場で一回転して体勢を崩しているナナシに拳を振り下ろす。
ナナシはしゃがんだ体勢のまま？ストーンカ？を盾にし、後ろへ跳躍してトーレから距離を離す。

「ぷふぅ～…トーレ姐さん、ホンマ強いなぁ…確かに、ノーヴェちゃんとは比べものにならんわ」

疲れ切った様子で息を吐くナナシにトーレは鼻を鳴らす。

「だから言っただろう。…それに私はまだ？ＩＳ？すら使っていないんだぞ？本気でやらないと、いつ負けるかわからんぞ」

「そーだぞ、ナナシーっ。もうギブアップした方がいいんじゃねーかーっ」

ノーヴェが野次を飛ばす。

８連敗された腹いせだろう。

「そーなァ…ギブアップしたろかなぁ…」

ナナシは真摯な表情で、真摯な口調でこう言った。

「チンクたんがネコ耳＋ゴスロリ姿を見してくれたらの。」

「す、するかッ！！！」

顔を真っ赤にしながら叫ぶチンクの声を聞き、ナナシはいつもの軽薄な笑顔を浮かべた。

「…じゃあ、もうちょいねばるわ―？本気でな？」

そう言い終えた直後―ナナシは素早く間合いを詰め、トーレに向けて大槍の刺突を放つ。

腰を捻り、体重移動を乗せた渾身の一撃。

牛の角を模した二つの槍先がトーレに迫る。

トーレは身体をずらして、大槍の一撃を回避する。
獲物を捉えられなかった雷牛の角が怒っているかのように風の切る音を響かせる。

「そらッ！！」

だが、予想していたとばかりにナナシは大槍を横に振るう。
トーレは両腕を×字に組んで防御する。

「くっ…！」

これもまた強い一撃だ。
衝撃が走り、痛みも走る。
人間だったら骨が折れていてもおかしくはないだろう。

「まだまだ行くでぇ！！」

ナナシは叫びながら？ストーンカ？を引き―連続の刺突を繰り出す。
トーレは人より発達した自慢の動体視力で大槍の突きを回避する。
身体を横に捻ったり、後ろへ下がったり、また横に捻る。
防戦一方だが、連続的に放たれる大槍の一撃一撃はそんなに強く重いものではない。
トーレは大槍の長柄を殴る。

「ありゃっ…！？」

ナナシは間抜けな声をあげる。
武器を取り落とさなかったが、体勢が崩れた。
チャンスとばかりにトーレは構えながら間合いに入り、渾身の右ストレートを放つ。

しかし―。
響いたのは―固い音。
拳に伝わるのは―固い感触。

「…！？」

トーレが驚愕に目を見開く。
トーレの拳が―紺色に輝く光の刻印に阻まれていた。
そして、その刻印を発生させているのはナナシだった。

「おおっ、模擬戦で使うんは初めてやったが、上手くいったな」

ナナシは満足そうに言い、トーレは距離を離す。

「お前…魔法を使えるようになっていたのか？」
「ああ、自分は魔法を使えませんなんて一言も言うてないで、皆には内緒してたんや」

ナナシは悪戯っぽく笑う。
そう、ナナシは槍を使った格闘戦だけでなく、内緒で魔法の練習もしていたのだ。

「けど…ここの魔法いうんは、自分にはどうも性に合わん」

ナナシは肩を竦めた。
実はスカリエッティから？ストーンカ？と一緒に魔法に関する資料を渡されていた。
「これで魔法についての勉強をするといい」と言ったスカリエッティに、ナナシは「いや、教えろやッ！」と言って彼の頭を平手打ちした。

しかし、スカリエッティは魔法の戦技教導官でもないし、ナンバーズも魔法を使っての戦いをしない―故に魔法を教える人物がおらず、スカリエッティはナナシに資料を渡した。
ナナシはしょうがないと思い、空いている時間に資料を読んだ。
いざ読んでみると、魔法に関して素人のナナシでもわかりやすい説明が書かれてあった―それを考慮してスカリエッティはわかりやすい資料を集めてくれたのだろう。
だが、ナナシには性に合わなかった。
とりあえず基礎中の基礎である身体強化魔法と、防御魔法と、？ソニック・ムーブ？と呼ばれる加速魔法を取得したのだが―いくら？ストーンカ？が補助してくれるとはいえ、数学や物理など小難しい構築法なんて頭が痛くなるばかりだ。

「せやから、後から独学でやってみたんや。いやぁ、意外と上手くいったんやで？オリジナルの魔法を二つほど覚えた、出来立てやからまだまだ発動速度は満足やないけどな」
「…そうか」

トーレは軽く呟き、どこか満足げな微笑をしながら構えを取った。

「なら、もう出し惜しみはしない。本気でやらせてもらう」

凄まじい槍術を持ち、魔法も使えるのだから手を抜く必要はないだろう。
ナナシは？ＩＳ？とやらを使うつもりだと確信し、足元に火影の刻印が浮かばせる。

「じゃあ…こっちも行かせてもらうで。？ストーンカ？―？ソニック・ムーブ？！」
「？ＩＳ？―？ライド・インパルス？！！」

ナナシは紺色の光に包まれ、トーレは手足に紫色のエネルギー翼―?インパルスブレード?を発生させる。

二人は閃光となった―。
紺色の閃光はナナシ―。
紫色の閃光はトーレ―。
広大な訓練場の中で二色の閃光は凄まじい速度で何度も交差する―
そのたびに固い衝突音が響いていく。
チンクたちは戦慄しながら固唾を呑む。
戦闘機人である彼女たちの動体視力を持ってしても―?ただ二色の光がぶつかり合ってる?としか認識できていない。
しかし、ナナシとトーレはただぶりかり合っているのではない。自分の間合いに入った瞬間に攻撃を繰り出している。

走る―。
間合いに入る―。
大槍を突き出す―。
拳を振るう。
また走る―。
また間合いに入る―。
大槍を横に振るう―。
エネルギー翼を振るう―。

それが何度も何度も繰り返される。
加速状態が終了するまで延々と続く。

(チッ…なかなかキマらんなぁ…)

ナナシは辟易したように舌打ちする。

このままではジリ貧になってしまう。
向こうは戦闘機人、こちらは大怪我から復帰仕立ての人間―体力的にこちらが不利になっていく。

（やり方を変えてみっか…）

ナナシは勝負に出る決意を固めた。

「?ストーンカ?、カートリッジ―ロード！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ.』

?ストーンカ?の牛の口部が開き、そこから一発分のカートリッジが排莢される。
ナナシはトーレから距離を離し、足元に火影の刻印が浮かぶ。
詠唱を短縮するために威力を抑える。
?ストーンカ?の角と角の間に紺色の雷が発生し―それが眼球という形に為していく。

（射撃魔法！させんッ！）

発射する前に止める…！
トーレはナナシに向けて疾走する。
しかし、射撃体勢に入ったナナシの方が早かった。

「『エレクトリック・アイ』！！」

雷の眼球から、電撃の光線が放たれた。
紫色の閃光と紺色の雷線が衝突するように接する。
そして、ナナシとトーレの加速状態が終わったらしく、チンクたちは二人の状態を認識することができた。

「……」

ナナシは射撃体勢のまま立ち尽くし、

「……」

トーレは右の拳をナナシの顔面に寸止めしていた。
そして、彼女の後ろの壁に焦げ目がついていた。
ナナシの電気の射撃魔法は当たらなかったのだ。

「はぁ…負けてもうたな」

ナナシは溜め息をつき、残念さと潔さが混ざった口調で呟いた。

「だが…魔法に関してもう少し鍛練を積んでいれば、当たっていたかもしれない」

トーレは拳を引き、ナナシも構えを解く。

「ははっ、完敗や。良い勝負やったで、トーレ姐さん」
「ああ、楽しかったぞ」

二人は満足げに微笑みながら握手を交わした。

「惜しかったな、ナナシ。後一歩及ばず、だったな」
「でも、二人ともすごかったっす!!メチャクチャ燃えたっすよ!!」
「そうそう!ホントに良い試合だったよ!」

チンクとウェンディとセインがそれぞれ感想を言い、ナナシはおおきにと笑いながら三人の頭を撫でていく。

「ナナシ、ロリペド野郎のくせにトーレ姉と互角に戦えるなんてすごいね」

「だからディエチッ！！一言多いんじゃ、ワレッ！！」

またしても酷いことを言うディエチにナナシは怒鳴りつけた。

「おい、もうそろそろ飯にしねぇか？腹減ったよ、あたし」

ノーヴェが不機嫌そうに口を開いた。

「あ～…そうやった…晩飯作らなあかん。めんどくさ…」

ナナシは辟易しながら愚痴を漏らす。

実は彼は毎日三食の料理当番となっている。

というのも、今までナンバーズたちは栄養価だけで味気もないかなり質素なものばかり摂取してきたのだ。

スカリエッティも例外ではない。

この事態にナナシは反発を訴えた。

食べることは栄養を摂るだけじゃなく、舌と腹が満足しなければならない。

だから、あらゆる食材を調理し、料理を作ることを強く勧めた。

しかし、ナンバーズたちは誰も料理を作れず、誰一人として料理をしようと名乗り出る者がいなかった。

となると―言い出しっぺのナナシが毎日三食の料理当番をすることになってしまう。

言い出しっぺだし、誰も料理を作ろうとしないから、ナナシは仕方なく了承した。

そこで、せめて少しでも力になってあげようとスカリエッティはナナシに食材を買うための資金を渡した。
ナナシはそのお金を使うことに躊躇した。
スカリエッティは犯罪者なのだから強盗したお金だろうかと懸念していたのだが、スカリエッティは資金提供者からのお金だから心配はいらないと言った。
犯罪者に資金提供者？
ナナシは疑問に思うが、強盗したお金でないのなら躊躇も気持ちも薄れたし、必要なものを手に入れるためだから拒絶するわけにもいかない。
ナナシはスカリエッティからいただいたお金で料理の本、食材、食器、日用品などを買った。
そして、料理の本を読み漁り、食材を調理し、料理を作っていく。
思いの外、上手くできた。
ナンバーズたちもおいしいと言ってくれて評判も良い。
自分、料理の才能あるなぁとナナシは誇らしげに思った。
しかし、毎日三食は結構大変だ。
訓練の後だから余計に大変に感じられる。
ナンバーズの何人かが料理の手伝いをしてくれるのだが―セインとウェンディは食材で遊ぶし、ノーヴェは食材を握り潰すし、包丁でまな板を両断するし、お約束と言わんばかりにお鍋を爆発させるから―余計に大変ッ！！
結局、役に立ってくれているのはチンクとディエチくらいだ。
他は手伝ってくれないから話にならない。
確かに作る前は大変だなとうんざりするのだが、ナナシは自分が作った料理を美味しそうに食べてくれるナンバーズが好きだった。
そう思うと料理は大変だと思うと同時にやりがいがあると感じられる。

「じゃ、シャワーで汗を流した後に料理作ろか。」

ナナシはそう言い?ストーンカ?を待機状態に戻し、バリアジャケットを解除する。
?ストーンカ?は大槍の形態から、牛の頭部を模した金色の指輪になった—これが?ストーンカ?の待機状態だ。
そして、バリアジャケットを解除するとナナシの首にマフラーが巻かれ、下はベージュ色のズボン、上はデザインクローズ—これがナナシの私服だ。
これもスカリエッティから渡されたお金で買ったものだ。
血だらけで大穴が空いたタンクトップをずっと着るわけにもいかない。
ナナシは、本来ならナンバーズにも私服を買ってあげたかったのだが、食材や冷蔵庫、多くの日用品などを買ったからすぐに無くなってしまった。

(そう…しょうがないんや…)

別にボディラインを強調するラバースーツを着るナンバーズの眼福のためではない。
絶対に。そう絶対に。
おかげで見慣れるまで股間を押さえながらの生活をするはめになった。

其之十一：和やかな時間　後編

シャワーや風呂で汗を流した後、すぐにナナシはキッチンにて料理に取り掛かっていた。彼を手伝っているのはチンクとディエチ。セイン・ウェンディ・ノーヴェはキッチンの立ち入り禁止となっている。

「何か…エプロンしてるナナシ、良いね」

セインは長いテーブルに頬杖をつき、ナナシを見つめながら呟いた。ナナシは長い金髪を縛り、エプロンをしながら料理を作っている。

「そっすねぇ…エプロンして料理を作る男の人って何かカッコいいっすよね」

ウェンディも頬を緩ませながらセインに同意する。

「裸エプロンだったらかなりセクシーなのにね」

「裸エプロンはないやろッ！！」

聞こえていたらしくナナシはセインに怒鳴りつけた。

「女子の読者はともかく、男子の読者からしたらキモス以外の何ものでもないわ」

「ナナシ、女の子から見てもキモスだと思う」

ディエチはシチューを味見しながら呟く。

「せやから、一言余計や。何なら聞いてみるか？女子の読者からし

て、自分の裸エプロンはキモスなのかキモスじゃないのか―感想欄に書かせようや」

「またそれかよッ！！どんだけ読者を神扱いしてんだよ！？」

ノーヴェがツッコむ。

ちなみにチンクは背が低いから台の上に乗りながら、野菜を切っている。

そこへ、スライド式のドアが開くと―紫色のロングヘアーの女性と、茶髪を二つに結い眼鏡をかけた女性が現れた。

まず、ロングヘアーの女性の名はウーノ。Ｎｏ．１の戦闘機人であり、スカリエッティの秘書でもある。

そして、眼鏡をかけた女性の名はウアットロ。Ｎｏ．４の戦闘機人だ。

「おお、ウーノ姐さんとクアットロかい。もうちょい待っててな、すぐに出来るさかい」

「はい、楽しみにしています」

「ナナシの作る料理は美味しいからねぇ」

ウーノとクアットロはそう言いながら食卓の席に着く。

「スカリエッティはどないした？」

ナナシはまだ来ていないスカリエッティについて尋ねる。

「ドクターは後で頂くそうですよ」

ウーノはそう言うが、ナナシは溜め息をつく。

「またそれかい。そう言って毎回毎回来ないやないか」

「まぁ、ドクターも忙しいですし…ちゃんとサプリメントを摂取して―」
「そういうのはあかんで、ちゃんとメシ食わな。…よっしゃ出来たで」

今晩のメニューが完成し、ナナシはテーブルに料理を並べていく。
シチューとミートソースパスタとサラダだ。

「すまんなぁ、今日疲れたから簡単なもんばかりで」
「いえ、美味しいお料理を作ってくれるだけで嬉しいです」
「そうよぉ、謝る必要はないわぁ」

ウーノとクアットロの言葉を受け、ナナシはそっかと安堵に微笑む。

「ナナシ～、早く食べよっす～」

ウェンディは左手にスプーン、右手にフォークを握りながら急かすように言う。
ノーヴェもすごく食べたそうに料理を凝視している。
ナナシは微笑ましく思いながら席に着く。

「んじゃ、変態ドクターはおらんけど自分らだけで食べよか」

食卓の席に着いたナナシとナンバーズの全員は食べる前の挨拶する。
掌を合わせて、

『いただきます！』

この挨拶はナナシがきっかけだった。
前の世界にいた頃の名残なのだろう―記憶は失っても、身体と口は

覚えていたようだ。

晩ごはんを食べ終えた後、ナナシはトレーの上に先程の料理を乗せていた。

「それはドクターに？」

尋ねてきたのはウーノだった。

「ああ、そうや。どうせ、来ないんや。しょうがないから持ってってやるんや」

「優しいんですね」

「いんや、ただのお節介や」

微笑みながら言うウーノに、ナナシは肩を竦めながら否定した。

「それ、私が持って行ってあげます。丁度、ドクターに用があるので」

「ああ。ええ、ええ」

ナナシは手を振って断る。

「女の子に何かやらせるんは好きやないんや」

「ふふっ…やっぱり優しいんですね」

「せやから、お節介や―いや、当然の義務？」

二人は笑い合った。

飾り気のない薄暗い長い廊下を、料理を乗せたトレーを持ったナナシとウーノが並んで歩いていた。

「最近、調子はどうですか？魔法を使えるようになりましたか？」
「ん～、ボチボチや。何個か覚えたんだが、発動時間がまったく短縮できてへんから実戦に使うんはまだまだや。トーレ姐さんに負けたしな」
「トーレと戦ったのですか…どうでした？」
「メッチャ強いな。ナンバーズの中で一二を争う実力って言うんのも納得できる」
「確かにトーレは強いですからね」

そこで会話が止まる。
しばらくすると、ナナシは思い出した様子でウーノに話しかけた。

「そや。ウーノ姐さん、料理とか作ってみる気はあらへんか？」
「え、料理、ですか？」

ナナシからの急な提案にウーノは戸惑いの様子を見せた。

「そっ。さすがに自分だけやと、キツいんや。日にちごとに当番を決めようや」
「しかし…私に、料理ができるんでしょうか？」

不安が込められた口調になっていた。

「だ～いじょうぶや。自分が教えるし、ウーノ姐さんならきっとで

きるで。」

それにな…と、ナナシはウーノの耳元でこう囁いた。

（スカリエッティにアピールできるチャンスやで？）

その瞬間―ウーノの顔が真っ赤になった。

「な、何を言ってるんですか、ナナシ！！何でそこでドクターが出て来るんですか！？しかも、アピールってどういう意味！？」

「ん～？そのまんまの意味や。ウーノ姐さん、変態ドクター好きやろ」

「な、何の確証があって…」

「？男の勘？ってやつ？しかも、今まさにかなり動揺しとるで？」

ナナシは口元に手を当てながらクスクスと悪戯っぽく笑う。

顔を赤くしながらナナシを睨んでいたウーノは溜め息をつきながら肩を落とす。

「ええ、そうです…私は…ド、ドクターのことを…」

ウーノは顔を赤くしながら口をぱくぱく開閉させ、

「あ、愛してるんです…」

「萌え…♪」

「真面目に聞いてるんですか！！？」

「ご、ごめんなさい…けど、真面目に萌えたんやけど…。…そっか、ちなみに理由聞いてもええか？」

「理由、ですか…」

ウーノは自分の心情について考えた後、小さく微笑む。

「私はドクターの補佐なので一緒にいる時間が多くあったりもして色々とお話をしましたし、一人で突っ走る彼の姿が微笑ましいと言うか可愛いと言うか…そんなところです」

（可愛い…？）

聞き逃せない単語を耳にしてナナシは信じられないと言わんばかりに首を傾げる。

しかし、個人に対する印象や価値観は決める人の勝手で、皆それぞれだ。

ナナシは一人で納得する。

「んじゃ、式はいつ上げるんや？」

「し、式!?結婚式ですか!?」

「そ～や。お似合いの夫婦やと思うで」

「ふ、夫婦、ですか…話が飛びすぎじゃないですか？」

「そうやって婚期を逃し続けると、一生結婚できなくなるで。積極的になるのが丁度ええ。…それに、確か戦闘機人でもガキは産めるんやろ？」

「え？は、はい、産めますが…こ、子供…ドクターと…私の…子ども…」

「あー、戦闘機人に冷却装置はないんかな？」

湯気が出るほどに顔を赤くするウーノを見て、ナナシはジョークを口にした後、少し真剣に表情を引き締める。

「せやけど…変態ドクターはどう思っているかやな。…どんな感じや？」

ナナシの問いかけに、ウーノは僅かに沈黙し、

「…少なくとも嫌われてはいないです、むしろ好意を持ってくれていると思います。しかし…」

ウーノは寂しげな表情を浮かべた。

「その好意は…私が望んでいるものとは、違うと思うのです」

恐らくスカリエッティはウーノのことを?娘?として見ていると同時に?作品?として見ているのだろう。
実際にスカリエッティはチンクたちに対してそう言っていた。
ウーノが望む—?愛人?としての好意を彼は持っていない。

「でも…それでも良いのかもしれません」

ウーノは感慨深げな表情で言った。
それは諦めなのか、潔さなのか—。

「私は戦闘機人—人間を愛する資格なんてありません。こんな私でも、彼のそばにいるだけで幸—いたっ!」

ウーノが悲鳴をあげる。
ナナシが彼女の頭にチョップを叩き込んだからだ。

「アホっ、人を好きになるんに自分の身体も資格も関係ないやろ。」

ナナシは腰に片手を当てながら厳しい目付きでウーノを見つめる。

「?話し合いたい、笑顔が見たい、そばにいたい?—その気持ちが

あれば十分過ぎるで」

それになぁ…と、ナナシは歯を剥き出すようにして軽薄に笑う。

「女は大好きな男を愛し、幸せになってナンボなんや―例外なんて一切無い。もちろん、戦闘機人も例外やないんやで？」

「……」

呆けた顔でナナシの顔を見つめていたウーノは自然と笑みを浮かべた。

やっぱり彼は優しい人だとウーノは再認識した。

しかも、彼の言葉はただ優しいだけでなく、強い説得力が感じられた。

諦めていたはずの恋心が暖かく湧き上がってきたのが、その証拠だ。

そうだ。

諦めたくない。

彼から？娘？でも？作品？でもなく？愛人？として見てほしい。

まだ自分は、彼に告白どころか、何のアプローチもせずに勝手に諦めていたじゃないか。

諦めるのは、まだ早い。

ウーノは今の気持ちを忘れぬよう―彼の言葉を心の中で復唱し、刻み込む。

ただ話し合い―。

笑顔が見たい―。

そばにいたい―。

それだけで十分過ぎる―。

それだけで恋心が強くなる。
それだけで勇気が湧いてくる。
後は、この気持ちを行動に使うだけ。

「そう、ですね…ありがとうございます、ナナシ…がんばって、みます」

恥ずかしそうに—だが、しっかりと言葉を紡ぐウーノを見て、ナナシは満足げに頷いた。

「んっ、わかればえぇ。」

二人は再び歩き始めた。

その頃、チンクは自分の部屋にいた。
白い床に、白い壁、白い天井—椅子や机とベッドしかない飾り気が全くない部屋だ。
チンクは今、とても悩んでいた。
他の者には言えない—いや、言ってはいけない悩みだ。
それは彼女の視線の先—部屋の隅に置かれている?何か?が入った紙袋だ。
チンクはそれを見るたびに溜め息をついた。

「どうすればいいのだ…?」

チンクは呟き、紙袋の方へと歩み寄る。

紙袋を持ち、その中に入っている?中身?を机に上に並べる。
それは—猫耳カチューシャとピンク色のゴスロリ衣装だった。

「おかしいだろ!?いったい何を考えているんだ、ナナシは!?」

そう、これはナナシが食材や日用品など買うついでにこの衣装を買い、皆に内緒でチンクに送ったものだ。
その時に「チンクたんには絶対似合うから着てみてや」と言われた。
何というお節介。

「こ、こんな服…姉には似合わん…」

服なんてナンバーズの戦闘服しか着たことがないからゴスロリ衣装は未知なるものだった。

(だが…)

可愛く見えなくもない。
しかも、これを見ていると、着てみたくなる衝動に駆られてくる。

「き、着るだけなら…いいか…」

ただ本当に似合うのか確認するだけだ。
誰かに見せるなんて恥ずかしすぎる。
着るだけならいいだろう。
チンクはラバースーツを脱ぎ、幼い体躯を露にする。
そして、慣れない手付きでゴスロリ衣装を着込む。

(何か…妙にサイズが合うな…)

目測でサイズを選んだのだろうか？だとしたら、ナナシは良い意味でも悪い意味でもスゴい人間だ。

最後に、チンクは銀髪に合わせた銀毛の猫耳カチューシャを頭につける。

しかし、着てはみたがどんな感じなのかわからない。

（鏡は…ないしな…）

日用品すら乏しいこの部屋に鏡はなかった。

彼女自身、鏡など必要ないだろうと部屋に置く気すらなかった。

（…まぁいい）

どうせ鏡を見ても、似合わない自分しか映らない。

しかし、空回りした好奇心と何故か寂しさを覚える。

チンクはゴスロリ衣装を脱ごうと服に手を掛けた時―

「チンク姉～、ノーヴェがイジメるっす～！」

「てめぇがナメた真似すっからだろ！？つーか、勝手にチンク姉の部屋に入るんじゃねぇよ！！」

ノックもなしにドアが開き、そこから現れたのはウェンディとノーヴェだった。

こんなことが起こるのは日常茶飯事だ。

ノーヴェが追いかけ回し、ウェンディがチンクに泣きつき、チンクが二人を宥める。

それが習慣化されているようにほぼ毎日起こることだ。

しかし、チンクには彼女たちを宥める余裕はなかった。

「――――」

ウェンディとノーヴェはチンクを見た瞬間、言葉を失った。

「――――」

チンクも言葉を失った。

この状態が数秒続き―

「チ、チンク姉…可愛、すぎ…」

その言葉を残し、ノーヴェは気絶した。その表情はかなりニヤけている。

一方、ウェンディはキラキラと瞳を輝かせていた。

「こ、これがナナシの言っていた?萌え?ってやつっすね!?皆に知らせなきゃっす!」

「知らせんでいいッ!!」

チンクは大声を張り上げた。

その頃、ナナシとウーノはスカリエッティがいる研究室へと入った。スカリエッティはナナシたちに背を向けながら、大きなモニター画面を見ながら端末を操作している。

「失礼します、ドクター」

ウーノがスカリエッティに声をかけると、彼は端末に手を置いたまま首だけ振り返った。

「ああ、ウーノか。…ん？ナナシも一緒か、珍しいね」

研究室に滅多に来ないナナシがいたことに珍しげに言うが、その口調と表情に大した感情が感じられない。

「メシ持ってきたで、変態ドクター。ここに置くで」

ナナシはそう言い、近くの机に料理を乗せたトレーを置く。

「持ってきてくれたのかい、私はサプリメントで十分なんだが…」

「アホかっ。世の中にはなぁ、食いもん食べよう思うにも、食えへん奴がぎょうさんおるんやで。食える人間はしっかり食わな」

スカリエッティは肩を竦めながら軽く溜め息をつく。

「…ああ、わかった。後で食べるよ」

「いや、今食え。シチュー、冷めてまうやろ」

「いやいや、冷めてもいいよ。まだ終わらせたいものが―」

「いやいやいや、んなもん知るかい。シチューはな、温かいから上手いんやで」

「いやいやいやいや―」

「さっさと食わんかいッ！！」

しつこく口答えするスカリエッティにナナシは怒鳴りつけた。

「後で食うとか言うて、食わん気やろ！！？食え！！今すぐ食えぃ！！」

「…わかったよ。そんなに怒ることないじゃないか…ねぇ、ウーノ？」

スカリエッティは溜め息混じりに言いながら椅子に座り、いきなりウーノに同意を求める。

あまりに当然だったのでウーノは戸惑いの様子を見せる。

「え…？あ、その…」

同意を求められて焦っているのもあるが、ナナシとのやり取りでスカリエッティに対して変に意識しているからより焦っていた。

見兼ねたナナシが彼女に助け船を出そうとした時―

「ナナシっ！大変だっ！」

血相変えながら研究室に入ってきたのはディエチだった。

「騒々しいなぁ…何があったんや、ディエチ？」

普段物静かな彼女がこんなにも慌てていることに珍しげに思いながら尋ね、ディエチはずっと走っていたらしく、荒くなっている呼吸を整えてから口を開く。

「チンク姉が…チンク姉が…チンク姉が、猫耳＋ゴスロリを着用してるんだっ！」

その瞬間―ナナシは女神を目にしたかのような驚愕の表情を浮かべる。

一方、スカリエッティとウーノの二人は顔に影を作る。

「なん…やて…？」
「とにかく急いだ方がいいよ！今、ウェンディとセインが脱ごうとしているチンクを足止めしてるっ！」
「よしゃあっ！ディエチぃ！映像用と画像用のカメラを用意するんやっ！」

ナナシは拳を振り上げながら、これから戦場に赴く兵士たちに対する指揮官のようにディエチに命令を下す。

「了解！」

ディエチはナナシに敬礼し、研究室を飛び出そうとした時―

「ちょっと待て」
「私たちのこと、忘れてないかしらぁ？」

新たに現れた二人の人物は―映像用カメラを持ったトーレと画像用カメラと三脚を持ったクアットロだった。

「お、お前ら…」

ナナシは意外げに呟く。
何故、自分に協力する？
口に出さなかったが、ナナシの心情を察したのか二人は答える。

「私は…か、可愛いものに目がないからな…」
「私は恥ずかしがってるチンクちゃんをさらに辱しめたいだけよぉ」

トーレは恥じらいながら言い、クアットロはドS発言する。
二人を呆然と見つめていたナナシはへっ…と笑いながら親指で鼻を

撫でる。

「この…大馬鹿野郎っ」

ナナシの言葉にトーレとクアットロは当然と言わんばかりに頷き、スカリエッティとウーノは顔の影を作ったまま彼らのやり取りを見つめている。

「よしゃ！もうすでに戦いは始まっとる！後は功績を残すだけやっ！行くでぇ、お前らぁ！！良い目をした人、私に続けぇぇぇぇぇぇ～！！」

ナナシの言葉にトーレたちは敬礼で応え、己が使命を果たすために戦いの場へと走り出した。

「……」

扉がスライドして閉じられ、残されたスカリエッティとウーノはお互いに顔を見合わせ、小さく笑った。

「まったく…彼が来てから、ここはだいぶ騒がしくなったものだよ。トーレたちもいつも以上に楽しそうだ」

スカリエッティは満足げに笑い、ナナシが作ってくれたシチューをスプーンを使って啜る。

ウーノもそうですね、と笑いながら同意した。

そして、彼らのおかしなやり取りを見て、今までの緊張感がほぐれていた。

「あの、ドクター」

ウーノは今の状態が失ってしまわないうちに、スカリエッティに声をかける。

「ん？なんだい？」

スカリエッティは食事の手を止めてウーノを見上げる。

ウーノの鼓動が早まる。

大好きな人に目を合わせられて緊張感が振り返してくる。

しかし、口だけを動かすことに集中する。

「あの、ですね…私も…お、お料理を作っても、よろしいでしょうか？」

「料理？君がかい？」

今までナナシの手伝いすらしなかった彼女からの提案にスカリエッティは意外そうに尋ねる。

「え、ええ…ナナシが言うには一人で毎日作り続けるのは難しいと…それで…私もやって、負担を減らそうかと思いまして…もちろん、私はドクターの補佐なので…当番制で―」

「うん、いいよ」

ウーノが言い終わる前に、スカリエッティは簡単に了承をした。

「確かにナナシは毎日作ってるし、訓練の後とかはかなり辛いだろう。情報処理ならクアットロもできるし、私は構わないよ」

「あ、ありがとうございますっ」

ウーノは顔を赤くしながらお礼を言った。

「それにウーノ、料理上手そうだからね。楽しみにしてるよ」

彼の言葉にウーノの心臓が跳ね上がる。

「は、はいっ！お任せをっ！」

ウーノは若干声が裏返りながら返事した。

スカリエッティは小さく笑い、食事を再開する。

ウーノは、やはり自分は彼のことを諦めていないと再認識した。

楽しみしているよ―と言われたとき、安堵と嬉しさが胸に染み渡ったからだ。

普段料理を口にしない彼がそう言ったのだ、嬉しくないはずがない。

後は―ナナシから料理を教わり、作った料理で彼に応える。

それだけではなく、色々なアプローチをしてみよう。

仕事以外に関する話題で話をしてみよう。

そうやって少しずつ、一歩ずつ、確かな一歩を刻んで近付いていこう。

大好きな彼が―自分を？娘？や？作品？としてではなく、？愛人？として見てくれるその日まで―。

其之十一：和やかな時間　後編（後書き）

チンク「ううっ…酷い目にあった…」

ナナシ「いや～、ええもん撮れたで。チンクたん♪お見せできないのが残念や」

チンク「見せんでいいっ！！」

クアットロ「そんなことより、今日はこの後書きコーナーにゲストが来てるのよぉ」

チンク「そ、そんなことって―」

セイン「ゲ、ゲストって！」

ウェンディ「待ちあびたっす！」

ディエチ「私から紹介します、『魔法少年の物語』より―ソラくんです」

ソラ「こんにちは、皆さん」

セイン・ウェンディ・クアットロ「可愛い～っ！！」

ソラを抱き締める三人。

ソラ「あうっ…ちょっ、苦しい、です…」

「あー、気持ちはわからんでもないが、ソラくん苦しそうやで」

セイン「あ、ごめんね、ソラくん」

ウェンディ「つい衝動が…」

クアットロ「本当は放したくないですが…」

ソラから離れる三人。

ナナシ「おんや～？堅物二人とツンデレも抱き締めたかって顔しとるでぇ？」

トーレ「な、何を馬鹿なっ！」

チンク「私、も…別に…抱き締めたくなんか…」

ノーヴェ「あ、あたしもだよっ！」

ナナシ「ふむ…（＝ω＝）まぁ、それはそれとして。かわええソラくんには猫耳＋ゴスロリをプレゼントや」

ソラ「わあっ、ありがとうございますっ」

セイン「ソ、ソラくんに猫耳＋ゴスロリ！？」

ウェンディ「は、破壊力ありすぎっす！」

クアットロ「そして、それを喜んで受け取るソラくんも可愛いわっ！」

スカリエッティ「さらに、特殊な魔法を使うそうじゃないか―調べてみたいものだ」

ナナシ「出たな、変態ドクター」

ソラ「な、何か…この人、怖いんですけど…」

ウーノ「ドクターは少し危ない人なので、５mは離れてね」

スカリエッティ「ははははっ、手厳しいな、ウーノはぁ。…だが、やらせんよっ！」

両手にメスを持ってソラに飛びかかるスカリエッティ。

ナナシ「あかんっ！ここに連れてきたのが間違いやった…逃げるんや、ソラくん！」

ソラ「は、はいっ。…あ、猫耳とゴスロリ衣装をくれて、どうもありがとうございました」

ナナシ「いえいえ、どういたしまして～、って呑気にお礼言うとる場合ちゃうでっ！」

ソラ「は、はいっ！（ノリツッコミｗｗ）」

ナナシ「ちゅうことでっ！ゲストのソラくんでしたっ！」

スカリエッティ「実験台（ゲスト）、募集中」

ナナシ「諦めろやっ！！」

灰色の野良猫さん、ありがとうございましたっ！

其之十二：ホテル・アグスタ

機動六課　部隊長室―。

この日の午前、機動六課・部隊長―八神はやては通信モニターを使って、そこに映る金髪の美女と会話をしていた。

彼女の名はカリム・グラシア。

ミッドチルダ極北地区ベルカ自治領に構える聖王教会の騎士であると同時に、時空管理局理事官でもある女性だ。

彼女とはやては姉妹のように仲が良く、はやてが機動六課を設立する際にカリムが後見人として尽力してくれた。

紅麗と薫が機動六課に編入できたのも、彼女の裏工作のおかげでもある。

そして、その彼女から突然の連絡がきたのだ。

「通り魔事件…？」

はやては怪訝と、若干の恐怖感が混ざった表情で聞き返した。

カリム曰く、ここ最近深夜の時間帯にミッドチルダ全域にて、通り魔事件が発生し、一般人も魔導師も―老若男女問わずに被害を受けているそうだ。

ただ、後一歩遅れていたら手遅れになっていた重傷者もいたが、死者が一人も出ていない事が幸いだった。

しかし、数十人もの被害者たちは全員「いきなり襲われた」「暗闇

で見えなかった」と、加害者の姿を見た者が一人もいないという事が少し不思議だった。
相手は姿を消す幻術魔法でも使ったのか、加速魔法を使ったのか―それとも、？ただのとんでもない速さ？で襲ったのか―真実は謎のままだった。

『そして…被害者のほとんどが？紫色の炎？に焼かれているの。それ以外に刃物で斬りつけられた切り傷と刺し傷…恐らく犯人は、炎熱系の魔法を扱う騎士ね』

カリムの口から、？炎？という単語が出た瞬間、はやては真っ先に紅麗が思い浮かんでしまった。
だが、別に彼を通り魔事件の犯人だと疑っているわけではない、？何となく？だ。

？炎？に？切り傷・刺し傷？―それだけで考えれば、シグナムと紅麗が該当する。
しかし、二人が通り魔をする理由もメリットもあるはずがない。

シグナムは周りから戦闘狂と呼ばれるほど、色々な人物に模擬戦を申し込んではいるが、通り魔の被害者の中には一般人も含まれている。
騎士として誇り高いシグナムが一般人に手を出すはずがなく、自分から戦いを挑むなら自分と同等かそれ以上の実力を持つ者にしかしない。それは家族として付き合いが長いはやてが十分に熟知している。

そして、紅麗もまた、犯人だとは考えにくい。

朝方から夕方の時間帯にはなのはから魔法に関しての教導を受けたり、スバルやエリオたちに身のこなしの指導もしているから空いている時間がほとんどなく、就寝する時間も早い。
もし、こっそり隊舎を抜け出したとして、大きなリスクを背負って通り魔を行うメリットなど彼にはない。
何より…彼の炎の色は紫色ではなく、紅色だ。
故に、二人は通り魔と判断する要素は皆無に等しい。

『もちろん、私もはやての仲間を疑っているわけじゃないわ』

長い付き合いであるはやての内心を察したカリムはそう主張する。

『ただ…その通り魔が、いつ機動六課(あなたたち)にまで危害をくわえてくるかわからない。だから…聖王教会(わたしのところ)から騎士を一人派遣するわ』

「ええ!?」

突然のカリムの申し出にはやては驚きの声をあげる。

「そ、そんな無理せんでええよ。こっちは十分に戦力があるんやから…」

ありがたい提案だが、はやては申し訳なさそうに断る。

確かに通り魔についての危機感と恐怖感はあるが、こちらには十分過ぎるほどの戦力がある。
部隊それぞれに定められている戦力保有制限により、はやてを初め機動六課の隊長格にリミッターをつけられているが、たった一人の通り魔なら十分対処できるし、リミッター付きとはいえシグナムを負かした紅麗すらいる。

ただ何より、はやてはカリムにあまり迷惑をかけたくなかった。
機動六課設立の時も、戦力を集める時も、紅麗たちを入隊させる時も――全て彼女（カリム）に頼ってきた。
これからは彼女に迷惑をかけたくない、彼女を頼り過ぎない――それがはやての気持ちだった。
しかし、

『いいえ。やらせて、はやて』

申し訳なさそうに断ろうとするはやてに対し、カリムは首を振った。

彼女も、はやての気持ちを理解できていた。
きっと迷惑をかけたくないのだろう、頼り過ぎたくないのだろう。
しかし、理解はできても、納得はできない。

八神はやては―機動六課が設立した今でも、不安定な立ち位置にいる状態だ。
彼女を快く思っていない管理局の上層部が少なくないからだ。
若いから、女だから―の理由もあるが、何より１０年前に起こった？闇の書事件？が大きな理由だった。

この事件について、はやては間接的にしか関わってないのだが、その守護騎士―シグナムたち？ヴォルケンリッター？がきっかけを引き起こした。
だが、引き起こしたその理由は―闇の書と呼ばれていた夜天の書の呪いを、それに蝕まれているはやてから解き放つためだった。
全ては、善意でやったことだったのだ。
実際にシグナムたちは魔導師たちからリンカーコアを奪うことすれ、命までは奪っていない。
しかし、罪である事に変わりはない。
事件が解決した後、シグナムたちも、その主であるはやても事件について深く反省し、罪を償うために時空管理局へ入局した。
はやてのレアスキル、ヴォルケンリッターの実力から考えて、管理局からすれば喉から手が出るほどに欲しい人材だ。
管理局は、ただでさえ万年人材不足なのだから尚更だ。
しかし、優秀な人材なら過去や出自に文句はない、大切なのは現在の意思と能力だと考える上層部もいると同時に、現在は関係ない、罪人は罪人だと快く思わない上層部も存在している。

はやては、今まで―いや、今でも後者の上層部に色々な中傷されている。
家族（シグナムたち）をも侮辱されている。
たとえ、はやてたちが罪を償うために結果を出していても、未だに認められていない状態が続いている。

カリムにはそれが許せなかった。
罪を背負って毎日を生き、罪を償うために毎日を生きている彼女達をどうして中傷する？
どうして侮辱する？
どうして認めない？

彼女の出した結果と、償おうとする心―それらを無視して、どうして過去の罪をだらだらと引きずっている？
そんな奴らを―たとえ上官だろうが、誰であろうが一人残らず殴り飛ばしたい気分だ。

だが、はやてはそれを耐えている。
暴言とも言える反論を吐かないように口を閉ざし、唇を噛み、手をあげないように拳を握って耐えている。
当然はやてもまたカリムと同じ気持ちなのだ。特に自分自身の事はともかく、家族を侮辱される事が何よりたまらないだ。
だが、上下関係の厳しい状況の中で上官に対して乱暴な言い返しや暴力は指摘される―それが社会という厳しくも、当たり前なルールだ。
これを違反すれば、それこそ彼らの思う壺であり、はやてたちの立場が益々悪くなるばかりだ。
だから、はやては社会人として、部隊長として自分の立場をしっかりと理解し、耐えている。
カリムはそんな彼女に呆れる以上に、とても気高いとすら思った。
だからだ。
そんな彼女だからこそ、自分は協力している。
はやての優しい気持ち、気高い志―それに魅せられたから、喜んで協力している。
？過去？も？現在？も―そうしてきた。
はやての心が変わらなければ、？未来？もずっとそうだ。
だから、できる事もできない事も喜んで協力させてほしい――それがカリム・グラシアの気持ちだった。

『この通り魔事件とレリック事件が片付くまでの期間でいいの。面倒な手続きについては心配しないで』

カリムははやてを安心させるように柔らかく微笑む。
だが、その微笑みから不安の色に染まる。

『それに…私にはどうも、胸騒ぎがするの。しかも…』

カリムが不安げな顔で呟いた後、はやてを真っ直ぐに見据えた。

『新たな?予言?も出たわ』

はやては目を見開いた。

「ちょ、ちょう待って…新たな予言って、出てくんの早すぎるんちゃう?」

『私にもわからないわ…急に…急によ…?急に現れた?の。次々と次元漂流者が現れ、連続通り魔事件が発生したと同じように』

はやては胸の中が冷めていく感覚を覚えた。
不吉な予感を感じた。

『はやて…私には、それらが全て繋がっているんじゃないかと思えてならない。きっと…私たちが思っているより、予言に記されていることよりも…?歪んだ事?が起こるに違いない、そんな気がするの』

「……」

『私は心配なの、はやて。だから、私は機動六課へ騎士を派遣する―了承してくれますか、八神部隊長?』

その口調と、その表情と、その眼差しは―拒否を許さない強い意思が感じられた。
カリムは意外と頑固者であり、こうなった彼女は絶対に考えを揺る

がない―それを知っているはやては彼女の申し出を受け入れるしかなかった。

「うん…わかった…ありがとうな、カリム」

だが、嬉しい。

ここまで自分に対して協力的なのはカリムくらいだろう。

はやてには、それがとても嬉しかった。

彼女からの言葉にカリムは満足げに頷く。

その後、冷えきった空気を和ますかのように二人は小さく笑い合う。

「そんで、その騎士はいったいどんな人なんや?」

はやてが話題を変える。

『実は一週間ぐらい前にこの世界に転移された次元漂流者なの―しかも、紅麗さんと薫さんと同じ世界の』

カリム曰く、事情聴取の際、その青年から火影やら魔導具やら裏麗やら―紅麗たちと共通する単語を口にしていた。

恐らく紅麗たちと同じ世界の出身であり、紅麗たちと面識があるのかもしれない。

青年と紅麗たちと会わせてみたい―それも機動六課に派遣する理由でもある。

『彼は魔法に触れて数日だけど、前の世界で戦闘訓練を受けていたみたいで徐々にシャッハの実力に近付いていっているわ。将来は聖王教会・最強の騎士になると思うわ』

「ほえ～っ、すごいんやなぁ。紅麗さんの世界って、超人の集まりとちゃうか?…まぁ、とにかく、そんなに強い騎士様が来てくれれ

ば私らも大助かりや。ありがとうな、カリム」

はやては姉に対する妹のように微笑み、カリムも妹に対する姉のように優しく微笑んだ。

『ええ、あなたのためなら力の限り協力するわ。…あ、それともう一つ重要なことを教えるわ』

「ん？重要なこと？」

機動六課にプラスになることなのか、マイナスになることなのか――期待と不安を抱えながら尋ねる。

そして、カリムは微笑みながらこう言った。

『？彼？にちょっかいを出したら――許さないわよ』

濃密な圧力が部隊長室に一気に充満した。

両腕を枕にして小さな机で眠っていたリインが「こーどぎあすっ！？」と変な悲鳴をあげながら跳ね起きる。

はやては、微笑みながら黒いオーラを放つカリムに恐怖した。

この圧力は――殺気だ。

しかも、はやてにはこの感覚を一度味わったことがある。

これは――嫉妬の殺気を放つフェイトと同じものだった。

『そして…？彼？にちょっかい出す人間も許さない――あなたの手で排除しなさい』

微笑みながら怖いことを言うカリム。

もはや、いつも優しい姉のようにニコニコ笑っていた彼女の面影が

まったくなかった。

『見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ）、見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ）よ。』

カリムは、ロボットに乗る兵士たちに対する?鉄の女?のように命令を下す。

『私の邪魔をするあらゆる勢力を叩いて潰しなさい。』

『逃げも隠れもせず、正面から打って出なさい。』

『全ての障害はただ進み、押し潰し、粉砕し、遠き地にて闇に沈めさせなさい。』

カリムが命令を下して、しばらくの沈黙が続いた。
何十秒経ったのか、何分経ったのか―とても長い沈黙だった。
そして、

「は、はは、はははは、はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!!」

はやては全身をがくがく震わせながら高笑いした。

「ら、ららら、了解（ラージャ）！！そうや！それが、最後のいちじくの葉やっ！なんとも素晴らしい！股座がいきり立つで、騎士カリム！！」

はやては震える手で通信用の端末に手を伸ばす。

「なら、私は誠心誠意でその任務を承ろう！ご安心を、グラシア卿！！」

はやては早口で告げ、逃げるかのようにカリムとの通信が切った。

聖王教会―。

はやてからの通信が切れたと同時にカリムがいる執務室のドアがノックされた。

カリムは返事をしながら先程の殺気を霧散する。

「失礼します」

入ってきたのは―皺のない燕尾服を着込んだ金髪の青年だった。

その手にはティーセットを乗せた銀のトレーがある。

彼がカリムの言っていた次元漂流者で、カリムに保護されてから、騎士として執事として聖王教会のお世話になっている。

青年は慣れた手付きでティーポットからカップへと淡い赤色の紅茶を注ぐ。

紅茶は湯気を立たせ、特級の茶葉特有の香りがカリムの鼻孔を刺激する。

「どうぞ」

青年はカップを乗せた碗皿をカリムの前に置く。
その立ち振舞いはとても様になっている。

「いつもありがとう」

先程の殺気が嘘のように、カリムは輝かしい笑顔で微笑みながら優雅な仕草で紅茶を啜る。

「いえ、お世話になっている身です。私は当たり前のことをしているだけです、故に私自身の意思でもあります」

青年は慇懃に言葉を紡ぐ。
そんな彼にカリムはもう一度微笑む。
彼の慇懃な言葉遣いと仕草―。
彼の優雅な態度―。
彼から醸し出されてる気品がある雰囲気―。
カリムはその全てが好きだ、他の人には魅力だ。
思えば、自分の周りにはろくな男がいない。
サボリストの義弟、堅物提督、メタボ中将ｅｔｃ…
嗚呼…ほんっとにろくな男がいない！
特に―やたら自分と友人に絡んでくるメタボ中将は捻り潰したいほどだ。
見　肥　満　必　殺（サーチ・アンド・レジアス・デストロイ）、見　肥　満　必　殺（サーチ・アンド・レジアス・デストロイ）だ。
それに比べて、目の前の彼はとても魅力的な男性だ。
いや、魅惑的というべきか―カリムは彼に魅せられたのだ。
例えるなら、白馬に乗った王子様―。
そして、自分は彼を愛するお姫様―。

子供の頃に抱いていたそんな乙女チックな心が再び湧き上がってくる―彼はそれを引き起こす魅惑があるのだ。

しかし、白馬の王子様といっても、絵本に書かれてあるような心優しいものとは違う。

危険な香りを漂わす白馬の王子様―。

慇懃な優しさの中に冷酷とも言える冷たさがあり、その冷たさが重度の危険に変わり―お姫様の心臓に何と躊躇いもなく、白刃のレイピアを突き出すほどの狂気となっていく。

だが、その赤黒い狂気が―無垢な心を昂らせ、犯し、蕩けさせていく。

こんな心情を、周りに可笑しい言われようが関係ないし、否定しない。

理由はどうあれ、そんな彼に惚れた―それが事実である。

カリムは高ぶる気持ちを抑え、彼に向けて表情を引き締める。

「？蛭湖（ひるこ）？―あなたを、私の友人の部隊へ派遣し、部隊の支援と例の通り魔事件の調査を行ってもらうわ。？優先すべきは任務完了より己の命？―私が下したその命令をしっかりと守ってください」

蛭湖と呼ばれた青年は胸に手を当てながらゆっくりと一礼した。

「Ｙｅｓ，Ｍｙ　ｍａ' ａｍ（心得ております、我が主）．」

彼は、前の世界では？死四天（ししてん）？と呼ばれる森光蘭直属の暗殺部隊―裏麗を統括する四人の首領のうちの一人。

死四天の戦闘能力は他の裏麗の忍達をはるかに凌駕し、紅麗が率いていた麗の十神衆を超える者もあると謳われた。

そして、蛭湖は―その強さから？不死身の蛭湖？と呼ばれた男だ。

はやてたちとフォワード陣、そして機動六課・医療主任であるシャマルを乗せたヘリは現在、ミッドチルダの首都―クラナガンの南東地区の上空を飛行していた。
そして、とある目的地へ着くまではやてたちがこれからの任務説明を行う。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや」

まず最初に口を開いたのははやてだった。

「これまで謎やったガジェット・ドローンの制作者―及びレリックの収集者は現状ではこの男」

中空にモニターが現れ、そこに紫色の髪に金色の瞳の男が映し出された。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者―ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」
「こっちの捜査は、主に私が進めるんだけど皆も一応覚えておいてね」

はやての説明をフェイトが付け足し、スバルたちは了解の返事した。

「で、今日これから向かう先はここ―ホテル・アグスタっ」

リインが切り替わったモニターの隣に飛びながら言う。
モニターには、森林の中にそびえ立つ大きなホテルが映し出された。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね」

と、なのは。

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出て来ちゃう可能性が高い…とのことで、私たちが警護に呼ばれたです」

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑になったりするし、色々油断は禁物だよ」

リインの言葉を引き継いでフェイトが説明した。

「現場には昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長他、数名の隊員が張ってくれてる」

キャロははやての説明に耳を傾けながらも、シャマルの足元に置かれている四つのトランクケースに目を落とす。

「私たちは建物の中の警備に回るから、前線は副隊長の指示に従ってね」

なのはの言葉にスバルたちは再び了解の返事する。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って…」

「ん？…ああ、コレ？」

シャマルはトランクケースに目を向けた後、楽しそうに微笑みなが

らキャロの疑問に答えてあげる。

「隊長たちと紅麗さんの、お仕事着♪」

シャマルの言葉に―紅麗は閉じていた瞳を開けて「なんだ?」と言いたげな表情を浮かべ、フェイトは「え?ちょっ…もしかしてぇ～♪」と言いたげに期待に頬を緩ませ、ヴァイスは「なん…だと?」と言いたげに振り向いた。

ホテル・アグスタ、受付会場―。

「何故、私までこんな格好を…」

はやてから渡された縁無しの伊達眼鏡をかけ、紅麗は腰まである長い襟足を縛りながら不満を漏らす。

しかし、フェイトもなのはもはやても―彼の言葉に応えられるほど、心理状態は安定していなかった。

フェイトたち―三人は化粧とドレスで着飾っている。

しかし、本来魅了する側の三人が今、目の前にいる一人の男性に魅了されていた。

紅麗の今の格好は、機動六課の制服ではない。

黒光りするロングノーズのレザーシューズ―。

光沢生地を使用した漆黒のスーツに同色のネクタイ―。

そして、ジャケットの下は真紅のシャツ―。

派手な組み合わせなのだが、紅麗はそれをバッチリと着こなしている。

フェイトたちは顔を赤くしながら見とれていた。

別に露出度の高い服を着ているわけでもないのに、何故スーツは着

ているだけで色っぽいのだろう。

「う、うむっ。やはり、私とシャマルのコーディネイトは完璧やなっ！」

はやては顔を赤くしながら、腕を組んで満足げに頷く。

フェイトもなのはも、同意と言いたげに何度も頷く。

そして、受付会場の隅で紅麗を睨みながらフィン・ファンネルを浮かばせるスーツ姿のヴァイス。

どこからツッコめばいい？

「え、越後屋ぁ…お主も悪よのぅ…」

フェイトは、はやてに向けてテレビで見たことがある台詞を言う。

「いやいやぁ、お代官様こそぉ♪」

はやてもノってくる。

「うひっ…うひひひひひひひひひひっ♪」

「ふふっ…ふふふふふふふふふっ♪」

前者がはやて、後者がフェイト―と思いたいところだが残念、逆だ。

フェイトとは思えない不気味な笑い方だ。

紅麗となのはを初め、周りにいる他の来客たちがドン引きしている。

「しっかし…私的には、こっちの方がええと思うんや」

はやてはそう言うと、紅麗の前髪を軽く後ろに撫で付け、彼の引き締まった胸元を露にするようにネクタイを緩め、シャツのボタンを

外す。

ぶふッ！！

フェイトは凄い勢いで鼻血を噴き出した。

「ナ、ナイス、はやて…」

フェイトは左手で流血する鼻を押さえ、立てた右手の親指をはやてに向ける。

「へへ～、ナイスやろ～♪」

はやてもフェイトに向けて親指を立てる。

「何がナイスだ…」

紅麗は不機嫌そうに言いながら前髪を下ろし、外されたボタンを止めていく。

「あっ！むっちゃセクシーやったのにぃ～」

「公の場は気品が第一だ、色気などではない」

紅麗は、ブーイングを漏らすはやてにそう言い聞かせながらネクタイを締める。

「あっ…く、紅麗…一生のお願いが、あるの…」

フェイトは鼻を押さえながら言った。

鼻血が止まらない。

「一生のお願いを今使っていいのか？…一応聞いてやろう、何だ？」
「あの…その…ネクタイを、外して…乱暴な感じで…」
意味不明だと言いたげに紅麗は表情を歪ませるが、一応やってみた。
ぶふぅぅぅぅーっ！！
フェイトの鼻血の勢いと量が先程より凌駕していた。
はやては急に火照った顔に両手を当てる。
「あ、あかん…私も…危ないところやった…ホンマに股ぐらがいきり立ちそ―あ、そうやっ！私からも一生のお願いっ！」
はやては人差し指を立てながら紅麗に期待の眼差しを向ける。
「だから一生のお願いを今使っていいのか？」
紅麗の言葉を無視し、はやては？一生のお願い？を言った。
「ネクタイを緩めながらなぁ…『抱かせろ…』って言うてみてっ♪」
「――――」
紅麗は顔に影を作りながらはやてを睨み、瞬時に妄想したフェイトは鼻血を出しながら気絶し、なのはは周りからの視線が恥ずかしくなってその場から走り出した。
そして、ヴァイスは一人で練習していた。

其之十二：ホテル・アグスタ（後書き）

薫「あぅ…今回、オレ出番なかったよ…名前すら出てないじゃん…」

紅麗「この後書きで目立てばよいだろう、お前が司会だ」

薫「うえぇ、オレぇ!?…え～と、こ、今回もゲストが来てるよっ!?魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～?より井上直人さん、でぇすっ!」

直人「どうも、お邪魔するよ」

薫「三作目も突入して、なのは姉ちゃんたちと結ばれて、幸せな毎日を送ってるねっ♪」

直人「別に良いことばかりじゃないさ、マテリアルたちが大変でな…」

薫「あ～、最終的には消えなかったよね、マテリアルたち。でも、ちっちゃくなったなのは姉ちゃんたちと一緒に世話したときよりマシじゃない?」

直人「まぁ、確かにあのときはかなり大変だったな。だが、マテリアル三人とも俺にべったり懐いてくるからそれでも大変―って、さっきから何ずっと黙っているんだお前はっ!!?」

紅麗「…ん?何か?」

直人「何かじゃない!俺と薫しか喋ってないじゃないかっ!お前も

何か喋ろっ！」

紅麗「…では、一言。」

直人「一言だけかよ」

紅麗「私は一夫多妻のお前が嫌いだ」

直人「な、なんだと―」

紅麗「だが、三人も愛するからには差別せずに平等に愛し、護り、共に一生を歩んでいけ。―以上だ」

直人「…あ、ああ。わかってる、そんなことは。…その…すまんな、怒鳴りつけて」

紅麗「私は別に気にしていない」

薫「一時はどうなることかと思ったけど、和やかになってよかったよ♪…んじゃ、もうそろそろ終わりが近付いてきたから直人兄ちゃんにはコレを読んで」

カンペを渡す。

直人「…何だ、これは？ああ、募集のことか」

薫「そっ。感想欄とかでわかる人もいるけど、わからない人のためにここで説明して」

直人「ゲストにやらせるのかよ」

薫「ほらほら、もう時間がないよ」

直人「…わかったよ。えー、この度は？魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～？の続編を書くことになったので、これについて―出してほしい原作キャラ・オリキャラ、そして機動六課側のデバイス改造案を募集しています。詳しい話は作者のページの最新活動報告をご覧になって下さい。…こんな感じか？」

薫「うんっ、ありがと♪というわけで、今回のゲストは井上直人兄ちゃんでしたっ♪」

紅麗「また会おう、直人」

直人「お前、喋ると意外に良い奴だな」

秋風さん、ありがとうございましたっ！

其之十三：劣等感（前書き）

自分の弾丸が届いて欲しかった。
全ては兄のために。

其之十三：劣等感

『でも今日は、八神部隊長と守護騎士団全員集合かぁ…』

スバルはホテルの内部を警護しながら、外で警護をしているティアナと念話をしていた。

『そうね。あんたは、結構詳しいわよね？　八神部隊長とか副隊長たちのこと』

『うん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど…』

スバルは自分が知りうる限りの事を話し始めた。

はやての使っているデバイスは―？夜天の書？と呼ばれる魔導書型だという事。

シグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ―？ヴォルケンリッター？ははやて個人が保有している特別戦力だという事。

そして、それにリインを合わせて六人揃えば―無敵の戦力だという事。

『ま、八神部隊長たちの詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、あたしも詳しくは知らないけど…』

『…レアスキル持ちの人は皆そうよね』

ティアナは翳りを含んだ小さな呟きを漏らした。

『ティア、何か気になるの？』

その翳りに気付かずスバルは尋ねると、ティアナは「別に」と短く返す。

『そう。じゃ、またあとでね』

任務中だから、いつまでも話しているわけにはいかない。
スバルの言葉を皮切りに、二人は念話を終えた。

ティアナは一人物思いに耽っていた。

機動六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常。
部隊長であるはやてがどんな裏技を使ったのかわからないが、隊長格全員がオーバーＳ。副隊長でもニアＳランク。

他の隊員たちも、前線から管制官まで未来のエリートたちばかり。

１０歳の若さでＢランクを取っているエリオと、レアで強力な竜召喚士のキャロは二人ともフェイトさんの秘蔵っ子。

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

スバルとエリオ以上の身のこなしと、ミッドチルダ初の新たな魔力変換資質を持つ薫。

そして、リミッター付きのシグナムをほぼ無傷で敗北させ、体術に関してはオーバーSランク、魔法に関してはニアSランクの紅麗。

―やっぱりうちの部隊で凡人なのは、あたしだけか…。

彼女たちに対して、劣等感を覚えないと言えば嘘になる。
レアスキルもないし、大きな魔力だって自分にはない。

―だけど…関係ない。

?あの日?から、今日までずっと努力してきた。

ただ、?その思い?だけを糧に努力をしてきた。
それでレアスキルが生まれてくるわけでもないし、簡単に魔力値が上がるわけでもない。

しかし、

―あたしは…立ち止まるわけにはいかないんだ…！

◇

ホテル・アグスタから離れた森林の中に壮年の男と少女が手を繋いでいた。
男の名はゼスト、少女の名はルーテシアだ。

「…あそこか。…お前の探しモノはここにないのだろ?」

ゼストはオークション会場であるホテルを一瞥してルーテシアに言う。
しかし、彼女はじっとゼストを見上げている。
言葉を出してないが、その態度でゼストは彼女の心境をある程度理解できた。

「…何か気になるのか?」

ゼストの問いかけにルーテシアは小さく頷く。
すると、妙な音がルーテシアたちの耳を打った。
何かが小刻みに振動する音—虫の羽根音だ。

予想通り、羽根の音とともに小さな羽虫がルーテシアに近付いていく。
その羽虫に対して、ルーテシアは一切の嫌悪感を示さなかった。
それどころか、ここに止まってと言わんばかりにルーテシアは人指し指を立てる。

そして、羽虫は当たり前のようにそこに止まった。

「……」

その羽虫を無表情に見つめていたルーテシアは、ゼストを見上げる。

「…ドクターのオモチャが、近付いて来てるって」

どうやらその羽虫はルーテシアの使い魔か何かだろう。
そして、羽虫と意思疎通ができるらしく、ルーテシアは羽虫から伝えられた言葉をそのままゼストに告げた。

◇

ホテルの屋上にて、金髪の女性―シャマルが警備を行っていると、突如彼女の指に填められている金色の指輪が光った。

その指輪は、シャマルのアームドデバイス―？クラール・ヴィント？。

それの広範囲索敵能力が真っ先に、ガジェットの反応を捉えたのだ。そして、管制官のシャーリーたちもガジェットの反応を捉え、局員たちに報告した。

◇

ホテルの地下駐車場で巡回していたシグナムたちにもその知らせが届けられた。

「エリオ、キャロ、小金井。お前たちは上に上がれ。ティアナの指揮でホテル前で合流、防衛ラインを設置する」

シグナムの言葉に、薫たちは返事をする。彼女はそれを一瞥し、今度はザフィーラに声をかける。

「ザフィーラは私と迎撃に出るぞ」

「心得た」

蒼き狼―ザフィーラが返事をすると、薫たちは驚きの声をあげた。

「ザ、ザッフィーって！」

「喋れたの！？」

「びっくり…」

薫・エリオ・キャロの順に感想を口にする。今までザフィーラが喋るところなど見たことがなかった彼らにはとても衝撃的だった。

一方、ザフィーラは予想通りな反応を意に介さず「守りの要はお前たちだ。頼んだぞ」と激励を送った。

◇

「前線各員へ」

シャマルは通信を通して防衛前線メンバーへ告げる。

「状況は広域防御戦です、ロングアーチ1の総合回線と合わせて、私―シャマルが現場指揮を行います」

彼女の言葉にフォワード陣は了解の返事をしながら、持ち場へと走る。

そして、最前線で戦闘を行うシグナム・ヴィータ・ザフィーラは、フォワード陣より早く出撃した。

この任務はシグナムたちにいつも以上の緊張感を与えていた。

機動六課が防衛するホテル・アグスタには、様々な資産家たちがいる。

無事に任務を完了できれば、機動六課の実力を彼らにアピールできるし、上手くいけば機動六課にとって良き味方になってくれるかもしれない。

まだまだ不安定な存在である機動六課には少しでも味方が欲しいところだ。

しかし、任務が失敗すれば悪い意味で大問題にもなる諸刃の剣だ。

それは機動六課を毛嫌いする上層部にとって、六課を解散させる格好なネタにもなる。

だが、機動六課はそんな事に臆しはしない。

これだけの大きい戦力を投入して失敗するはずがない。

傲りではない、事実だ。

その結果シグナムたちはガジェットたちをフォワード陣の防衛ラインへ行かせる間もなく、次々と撃破していった。

「副隊長たちとザフィーラ、すご～いっ！」

シグナムの戦いの様子が映し出されたモニターを見ながらスバルは興奮の声をあげる。

「これで…能力リミッター付き…」

一方、ティアナは感激と歓喜の感情が湧かなかった。

あるのは、再び湧き上がった劣等感。そして、焦燥感。

ティアナは強く拳を握った。

◇

森林の中でガジェットの撃破による爆発を見つめていたゼストたちの前に、紫髪の男―スカリエッティが映し出されたモニターが現れた。

ルーテシアは無表情に、ゼストは露骨な嫌悪感を表情に現す。

『ごきげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア』

「ごきげんよう」

「何の用だ？」

スカリエッティからの挨拶に対し、感情を感じられないがルーテシアはちゃんと返すが、ゼストは不快感を込めた口調で返す。
ゼストの反応にスカリエッティは特に嫌な反応を示さなかった。いつものことだと割り切っているからだ。

『冷たいね。近くで状況を見ているんだろう？　あのホテルにレリックはなさそうだったが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少し協力をしてはくれないかね？　君たちなら、実に造作もないことのはずなんだが…』

「断る」

ゼストは冷徹に切り捨てた。

「レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

『…ルーテシアはどうだい？　頼まれてくれないかな？』

スカリエッティはゼストの言葉を無視し、ルーテシアに同意を求め

る。
すると、彼女は「いいよ」と即答した。

『優しいなぁ…ありがとう。今度是非、お茶とお菓子をナナシに奢ってもらってくれ。ああ、ナナシというのはねぇ―』

スカリエッティが嬉しそうに語りかける中、ゼストは苛立っていた。
この男はいつもそうだ。
自分が断れば、すぐにルーテシアに同意を求める。
彼女はスカリエッティのお願いに対して、あまり断らない方だ。
そしてルーテシアの決定を、自分やアギトは文句を言いながらも従うしかないとわかっているから、いつも彼女にお願いをする。

―実際…今も予想通りだと顔に書いてあるじゃないか。

ゼストが内心で悪態をつく中、スカリエッティは話を進めていく。

『君のデバイス―?アスクレピオス?に私が欲しいもののデータを送ったよ』

スカリエッティはルーテシアの両手に填めているグローブ型デバイスを一瞥しながら言い、彼女はうんと小さく返す。

「じゃ、ごきげんよう、ドクター」

『ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ』

スカリエッティとの通信を終え、ルーテシアは民族衣装を彷彿させるローブを脱ぐ。
その下に着ていたものは黒いゴスロリ衣装だった。

「いいのか？」

ゼストはルーテシアからローブを手渡されながら尋ねる。
レリックすらないのに、あんな男の命令を聞いていいのか？という意味だ。
ルーテシアは肯定の頷きしたあと、理由を口にする。

「ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、わたしはドクターのことそんなに嫌いじゃないから」

「…そうか」

そう呟く彼の口調には哀愁のようなものがあった。
その事を感じ取れているのか、いないのかルーテシアは魔法を行使する。

手の甲に填められている円型の宝石が紫色に光り、彼女の足元に召喚士の魔法陣が浮かぶ。

「吾は、乞う」

そして、詠唱する。

◇

その頃、キャロのデバイスがルーテシアの魔法に対して反応を示した。
同じブーストデバイス故か、誰よりも先に察知した。

「近くで…誰かが召喚を使ってる」

◇

ルーテシアの魔法陣から、半透明の触手のようなものが三つ現れた。
まるでカエルの卵のようだった。

「小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が命を果たせ。召喚―インゼクトツーク」

触手の半透明の膜が弾け、そこから多数の羽虫たちが小さな羽根を小刻みに振動させて中空に浮かぶ。

「ミッション―オブジェクト・コントロール。…いってらっしゃい、気をつけてね」

ルーテシアは羽虫―インゼクトたちに優しい言葉をかける。
それに対し、インゼクトたちは主人の言葉に応答するように身体を紫色に光らせ、与えられた命令を果たすために飛行した。

そして、インゼクトたちはまだシグナムたちに撃破されていないガジェットたちにたどり着いた。
インゼクトは身体を紫色に発光させ、装甲を破壊することなくガジェットの内部へ入り込んだ。
すると、ガジェットが一度だけ紫色に発光した。

「…な、何だ?」

それを上空から見ていたヴィータは訝しげな表情を浮かべる。

何をしたのかわからないが、ガジェットである以上―破壊の他無い。
シグナムは雄叫びをあげながら大型ガジェットへ向けて上段から長剣を振り下ろす。
そのまま真っ二つになると思っていた。
しかし、次に響いたのは斬り裂いた音ではなく、鋭い金属音だった。
大型ガジェットが両脇にある鋼鉄のベルトアームでシグナムの剣撃を受け止めたのだ。

「なに！？」

シグナムは驚愕を露にする。
ガジェット程度の反応速度なら、今の攻撃を防げるはずがない。それなのに急に反応が良くなった。
だが、驚いている暇はない。
ガジェットの黄色のカメラアイからのレーザーポインターがシグナムの額を捉え、攻撃箇所を定める。
シグナムは舌打ちしながら後ろへ跳躍し、障壁を発動する。
それと同時にガジェットは青白い光線を発射した。光線と障壁が衝突し、その拮抗で爆発が起こる。
シグナムは爆風から逃れるように直ぐ様上空へ飛び上がる。

一方、ガジェット?型の撃破を担当していたヴィータは４つの鉄球を出現させ、それをハンマー型デバイス―?鉄の伯爵(グラーフ・アイゼン)?で叩いて飛ばす。
しかし、全てのガジェットがそれを余裕で回避した。
獲物を捉えなかった鉄球が地面に叩き込まれ、土砂と砂埃が舞う。

「急に動きがよくなった…」

「自動機械の動きじゃないな」

ヴィータの驚きの呟きに、シグナムも同意した。

考えれるとしたら、先程の召喚士の魔法。そして、ガジェットに入り込んだあの羽虫は有人操作に切り替えるためのものだろう。

「ヴィータ、ラインまで下がれ。向こうに召喚士がいるなら、新人たちの元へ回り込まれるやもしれん」

「わ、わかった」

シグナムの提案に従い、ヴィータはフォワード陣のところへ後退を始めた。

そして、シグナムはガジェットたちを見下ろす。

その目には、急激に性能が上がったガジェットに対して一切臆する感情がない。

有人操作の切り替え？

機動性が上がった？

上等じゃないか。

こんなガラクタ共を斬り捨てる事など、？不死鳥の堕天使？と戦う事に比べれば、呼吸するのと同じくらいに造作もないことだ。
「少しでも…私の強さの糧になってもらうぞ」

◇

「遠隔召喚、来ます！」

キャロが叫ぶ。
ルーテシアが新たな魔法を行使したらしく、４つの魔法陣からガジェット？型が複数、ガジェット？型一機が防衛ラインのスバルたちの前に現れた。

「召喚魔法陣？　召喚ってこんなこともできるの？」

「優れた召喚士は転送魔法のエキスパートでもあるんです」

キャロはガジェットたちを睨みながらスバルの疑問に答える。

「何でもいいわ。迎撃行くわよっ！」

ティアナの飛ばした激に対し、薫たちは力強く応えた。
それは、謎の召喚士が現れたときだ。
そして、後からその違和感がだんだんわかってきた。
―今までと同じだ…証明すればいい…。
ティアナは?クロスミラージュ?を構える。
―自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいつだってやってきた!
ティアナの足元に魔法陣が浮かび、彼女の想いに呼応するように目映く輝いた。

◇

「…ドクターの探しモノ、見つけた」
ホテルの地下駐車場にいるインゼクトからの報告を聞き、ルーテシアはそう呟いた。
「ガリュー、ちょっとお願いしていい?」
ルーテシアは手袋の宝玉に向けて語りかけると、返事をするように

宝玉が妖しく光る。

「邪魔な子はインゼクトたちが引き付けてくれてる、荷物を確保して」

了解の返事をするように宝玉が再び光る。

「うん。気をつけて、いってらっしゃい」

宝玉から漆黒の光が飛び出し、ホテル・アグスタへ向けて飛んでいった。

◇

ティアナはトリガーを引き、橙色の魔力弾がガジェットに肉薄する。
狙いの良い射撃だったが、有人操作により機動性が大幅に上がっているガジェットはティアナの魔力弾を回避する。
ティアナは露骨に舌打ちする。
今度は別のガジェットがミサイルを発射する。
しかし、大した速度もない山なりの機動だったから、ティアナは簡単に撃ち落とすことができた。
しかし、

「ティアさんっ！」

キャロが警告する。
二機のガジェットが別方向からティアナにレーザーを放っていた。
ティアナは跳躍して回避。
すぐに体勢を整えて魔力弾を発射する。
しかし、ガジェットのＡＭＦによってそれが防がれた。

『防衛ライン、もう少し持ち堪えててね！』

シャマルがフォワードたちに安心させるように激励を飛ばす。

『ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから！』

彼女の言葉を耳にしたティアナは焦燥感を駆られた。

―それでは自分の力が証明できない！

―次にいつあるかわからないこの機会を無駄するわけにはいかない！

「守ってばっかじゃ行き詰まります！　ちゃんと全機落とします！」

『ティアナ、大丈夫!?　無茶しないで!』

心配するシャマルに対し、ティアナは「大丈夫です!」と力強く答えた後、自分とスバルでやるとエリオたちを下がらせる。

「スバル!　クロスシフトA、行くわよ!」

「おおっ!」

スバルは返事したあと、ウイング・ロードの上で加速する。
ガジェットたちがスバルを見上げてくる。
スバルが陽動している間に、ティアナはカートリッジを四発分も使用する。

―証明するんだ…。特別な才能や凄い魔力がなくたって、一流の隊長たちのいる部隊でだって…どんな危険な戦いだって…!

ティアナの周囲に多くの魔力弾が生成される。

「私は、?ランスターの弾丸?は…ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって!」

ティアナは白き双銃を構える。

魔力のスパークが彼女の両腕に走る。
それを見たシャマルはヒステリックに警告した。

『ティアナ！　四発ロードなんて無茶だよっ！　それじゃティアナも？クロス・ミラージュ？も―』

「撃てます！！」

『Ｙｅｓ．』

ティアナはガジェットたちに銃口を向ける。
それを確認したスバルすぐに回避行動に移る。

「クロス・ファイアー…シュートッ！！」

想いを乗せた多数の魔力弾が発射された。
ガジェットはそれを瞬時に察知したが、回避行動を取れずに魔力弾を受け、呆気なく爆発した。
狙いも威力も十分で、ガジェットが次々と撃墜していく。
しかし、カートリッジの四発ロードが無理があったらしく、一発の魔力弾がスバルに肉薄した。
スバルは目を見開く。
回避も間に合わない。
防御も間に合わない。
次の瞬間、突如現れた赤い影が橙色の魔力弾を弾き飛ばした。
フォワードたちの元へ後退していたヴィータだった。

そして、彼女は直ぐ様ティアナを怒鳴りつけた。

「ティアナ！！　このバカッ！！　無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！？」

ティアナは失敗のショックに呆然とヴィータたちを見上げた。
できると思っていた、失敗しないと思っていた。
だが、失敗した。
証明が、できなかった。

「あの、ヴィータ副隊長…今のも、その…コンビネーションのうちで―」

「ふざけろ、タコ…！　直撃コースだよ、今のは！」

無茶苦茶な庇い立てをするスバルの言葉を、ヴィータは真っ向から否定した。

「違うんです！　今のは、あたしがいけないんです！」

「うるせぇ、バカ共！！」

それでも食い下がらないスバルに、話にならないと言わんばかりヴィータは怒鳴る。

「もういい、後はあたしがやる！　二人まとめて、すっこんでろ！！！」

◇

「うん。ガリュー、ミッション・クリアー。いい子だよ」

ガリューとやらがスカリエッティの？探し物？を確保したらしく、ルーテシアは労いの言葉をかける。

「じゃ、そのままドクターに届けてあげて」

ルーテシアはそう言い終えると同時に魔法陣が消える。

「…品物は何だったんだ？」

ゼストはルーテシアに近寄りながら尋ねる。

あの男（スカリエッティ）が求めるものだ。きっとろくなものじゃない。
しかし、ルーテシアはわかんないと答えた。

「オークションに立つ品物じゃなくて、密輸品みたいだけど」

「そうか…」

―密輸品だと、さらにろくなものじゃないな…。

ゼストが内心で呟く中、ルーテシアは彼から手渡されたローブを着込んでいく。
それを横目で見ながら、ゼストは戦場になっていた森林を見やる。

「…戦いももう終わりだ。前線の騎士たちがなかなか良い戦いをした」

ローブを着終えたルーテシアはゼストの服を掴む。

「…さて、お前の探しモノに戻るとしよう」

ゼストの言葉にルーテシアは小さく頷いた。
そして、何故かホテルの方へ一瞥した。
もうスカリエッティからのお願いを果たしたし、オークションにも、超高級ホテルにも、怪しげな骨董品にも興味がない―一瞥する理由なんてないはずだ。

何故だろうか？
そして、この胸に感じる違和感は何だろうか？
ルーテシアには、わからなかった。

◇

「ティア…向こう、終わったみたいだよ」

「…あたしはここを警備してる、あんたはあっちへ行きなさいよ」

声をかけてきたスバルに対し、ティアナは背を向けたまま拒絶するように冷たく告げた。
きっと失敗したことを気にしているんだと思い、スバルはティアナにフォローを入れる。

「あのね、ティア…」

「いいから行って…」

スバルの慰めの言葉を遮るように、ティアナは再び拒絶の口調で言葉を紡ぐ。
しかし、彼女の言葉にスバルは引かなかった。

彼女は優しい性格だから、落ち込むパートナーを放っておけなかった。
しかし、あえて放っておくという気の遣い方を彼女は知らなかった。
だから、余計にティアナを苛立たせてしまった。
そして、鈍感な故なのかパートナーとはいえスバルはそれを感じ取ることができなかった。

「ティア、全然悪くないよ。あたしがもっとちゃんと―」

「行けっつってんでしょッ！！」

苛立ちを抑える限界を超えたティアナはとうとう怒鳴ってしまった。
一方スバルは、怒鳴られてからようやく自分の間違いに気付いた。

「…ごめんね。またあとでね、ティア…」

スバルは小さな呟きを言い残してこの場から立ち去った。
そして、ティアナはスバルがいなくなったのをわかった後、壁に手をついた。
そして、彼女の瞳から悔しさの涙が溢れた。

証明できなかった、自分（ランスター）の弾丸が。
届かなかった、自分（ランスター）の弾丸が。
撃ち抜けなかった、自分（ランスター）の弾丸が。

そして。

思い出したのは、最後に見た、世界一愛している兄の優しい笑顔。

思い出したのは、兄を失ったときの苦しみと悲しみ。

思い出したのは、死んだ兄を侮辱した男たちの声。

「あたしはっ…あたし、は…」

兄を、さらに苦しめてしまった。

其之十三：劣等感（後書き）

ナナシ「さっ！今回もやるでぇ、ゲストを交えた後書きコーナー！ゲストは…」

ハヤト「待たせたな、同志よ！！」

ナナシ「？魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～とある新人の日常～？より、自分の同志―ハヤト・ロックウェルや！！」

ウーノ「帰ってください」
トーレ「帰れ」

ナナシ「ちょう待て！自分の同志に向かってなんてことを！」

ハヤト「いや！いいよ、ナナシ。…ウーノさん、トーレさん。初めまして、ハヤト・ロックウェルです」

ウーノ「胸を凝視しながら言わないでください」
トーレ「さっさと帰れ」

ハヤト「実はお土産があるんですよ！じゃん♪ウーノさんには裸エプロン用のフリフリエプロン、トーレさんには危なぁい☆水着をプレゼント♪」

ウーノ「だから胸に向かって話しかけないでください」
トーレ「ふざけるのも大概にしろ。そして、それを捨てろ」

ハヤト「ええ！？お礼におっぱいを好き勝手揉んで良い！？あざー

すっ！あぁぁぁざぁぁぁすっ！！」

ウーノ「いや、言ってないですよ！！」

トーレ「どんな聞き間違いだ！！」

スカリエッティ「やぁ、ハヤトくん。来てくれて嬉しいよ」

ウーノ・トーレ「ドクター！」

ナナシ「ああ…同志が人体実験させる…（泣）」

ハヤト「ハッ！上等だ！俺はウーノさんたちのおっぱいが見れただけで十分なんだよ！改造してみろや！アーカードみたいなチートに改造されても、紅麗さんみたいなイケメンに改造されても、世界中のおっぱい美女が喜んで寄って来るフェロモンを撒き散らす改造をされても構わねーよ！」

ウーノ「何という醜い欲望の塊…」

トーレ「最悪だ…」

スカリエッティ「では、早速始めようか、ハヤトくん」

白衣を脱ぎ、シャツのボタンを外し始めるスカリエッティ。

ナナシ・ハヤト・トーレ「いや、何をををををををををををを！！？」

スカリエッティを撮影するウーノ。

スカリエッティ「毎度毎度、人体実験ネタは飽きてしまってねぇ」

ナナシ・ハヤト「そこは諦めるなよッ！！！」

スカリエッティ「よろしい、ならば男色（戦争）だ」

ハヤト「意味わかんねぇよ！！帰る！帰るよ、俺！！」

スカリエッティ「逃がさないよ。そして、ただでは帰さないよ」

ハヤト「ちょっと待て！ちょっ…いやあああああああああッ！！」

ご想像にお任せします。

ラモンさん。ありがとうございましたｗｗそして、ごめんなさい（汗）

其之十四：教導というもの（前書き）

幼き頃から抱いていた信念―いつからか、それを忘れてしまった。
忘れていなければ、こんな事にはならなかったかもしれない。

其之十四：教導というもの

ホテル・アグスタの防衛戦は無事に終わり、表立った被害はなく任務は完了された。ただ、ティアナが無茶をして誤射してしまったことに関しては部隊からしてみれば減点だった。
そして、現在管理局の調査班が現場検証を行い、機動六課もそれの手伝いをしていた時だった。

「…なぁ、フェイト」

紅麗はガジェットの残骸を見つめながら、一緒に現場検証をしているフェイトに話しかける。

「ん？　なに、紅麗？」

「高町と話している彼は？」

紅麗は、なのはと親しげに話している眼鏡をかけた青年を横目で見る。
するとフェイトはああと呟いてから、青年を紹介する。

「彼はユーノ。ユーノ・スクライヤ。無限書庫の司書長にして、古代遺跡の発掘や研究で業績を上げてる考古学者で、なのはの幼馴染みだよ」

フェイトが説明し終えたが、紅麗はその続きを待つように沈黙していた。だが、フェイトが続きを話さないので紅麗は再度尋ねる。

「…それだけか？」

「えっ？　それだけって…」

紅麗の言葉にフェイトは当然戸惑ってしまう。そんな彼女の様子に見兼ねて、紅麗は単刀直入に尋ねた。

「彼と高町は、恋人同士じゃないのか？」

どうやらそれを確認したかったようだ。フェイトは苦笑いしながら彼の言葉を否定する。

「恋人同士じゃ、ないよ。まぁ、二人はお似合いだなって思っているんだけど…二人は、あくまで仲の良い幼馴染みだって」

「…その割りに、お互い意識しているように見えるが」

「あ、紅麗もそう思う？　私も…二人を見るたびに、実は両想いなんじゃないかなって思ったの」

それはフェイトだけではない。
はやても、ヴィータたちも―なのはとユーノをよく知る人たち皆がそう思っていた。
しかし、フェイトはだんだん歳を重ねていくごとに二人の心がわかってきた。

「多分、二人は…付き合うことを躊躇っているんだよ。お互い忙しいし、役職も違う…それで、一緒にいる時間がなかなか取れない。実際、そういうことがいっぱいあったからね」

「多忙のすれ違い、か…」

よくある話だ。
実際、それで破局した芸能人のニュースなんかよく目にする。
なのはとユーノはそれを懸念して、友達以上恋人未満の関係でずっと歩んでいくつもりなのだろう。
紅麗はそんな二人の気持ちは理解できる。

―だが…。

納得まではできない。
愛し合いたくても、愛し合えなかった人間もいる。

紅麗はかつて、愛する者を失った。
愛する者の名は―紅。

四年前に失った最愛の女性。
当時、紅麗の心は冷たく歪んでいた。
誰にも心を開かず、冷たい印象しかなかった。
愛されず、愛さず—。
表情一つ変えぬその顔を?仮面?と陰で言う者もいた。
しかし、そんな彼に対して、紅は真っ直ぐに、正直な気持ちで接してきた。
それがきっかけで、彼女の優しい心に紅麗は惹かれ始め、心が暖かく、表情に笑顔が浮かんできた。
そして、紅もまた、変わっていく紅麗に惹かれ始めた。

しかし、それは絶望の予兆だった。
これも全て、紅麗の義父—森光蘭が仕組んだことだった。
紅麗に服従心を植えつけるために。
紅麗の感情を砕くために。
森光蘭は、養女である紅を紅麗に近付けさせ、紅麗に隠された一滴の感情を引き出させたのだ。
そして、森光蘭は紅麗の目の前で紅を殺した。
簡単に殺された。
あっさりと殺された。
紅麗は悲しみながら涙した。

それは、紅麗に悲しむほどの暖かな感情があったからだ。
それは、紅と歩んできた日常がとても楽しかったからだ。
それは、紅麗は紅のことを心から愛していたからだ。
そして、紅が死した後、紅麗は?炎?を出した。
炎術士にはそれぞれ炎の源となる?炎の型?が存在し、紅麗の炎の

型は―?不死鳥?。
それは火影の歴史に前例がない幻の炎の型とされ?人の魂を炎と化す?魔性の炎。

それは、非人道的で、冒涜的な能力なのだ。

だが、紅は最期にこう言ったのだ。

「どんなに醜くなってもいい…ずっと…あなたといたかった…」

紅の言葉で、紅麗は踏み切った。

「お前の望み―叶えよう、紅…」

紅麗としても?悪魔にその命を奪われるなら、せめて我が炎で?と、愛しい彼女の命を誰にも汚されたくなった。

そして、紅麗は不死鳥の炎を使い、紅の魂を己の炎へと変え、彼女の肉体を炎そのものにした。

青年は人ならざる少女を愛し、人ならざる少女は青年を愛した。

とても―。
とても、とても―。
歪みに歪みきった、醜い愛―。
だが―。

とても―。
とても、とても―。
何よりも美しい、二人だけの愛―。

だが、その醜くも美しい愛は永遠ではなかった。

最凶最悪の魔導具―『天堂地獄』が滅びた時、火影に関わる全てのもの消滅する。
それは、紅麗の炎術士としての?炎?も例外ではない。
そして、不死鳥の炎でこの世に留(とど)まっていた紅も、死後の世界へと旅立っていった。

紅を?炎?に変えた紅麗は、最初から最後まで後悔していなかった。
紅麗に?炎?にされた紅も、最初から最期まで後悔していなかった。
どんな形でも、二人は愛し合いながら共に歩んできた―後悔なんて微塵もない。

だが…。

できれば…。

平凡で幸せな形で、生きていたかった。
紅も、できれば人間として紅麗を愛し、共に歩んでいきたかった。
紅麗も、できれば人間である紅を愛し、共に歩んでいきたかった。

もっと、屋敷の中で楽しく話をしたかった。
一緒に街へ出掛け、デートもしたかった。

少し勇気を出して、手を繋ぎたかった。

時々、ケンカもしたかった。

恥ずかしくも、幸せな道を歩むための告白もしたかった。

結婚もしたかった。

子供も作りたかった。

そして、家庭を築きながら、平凡であると同時にとても幸せな日常の中で生きていたかった。

そんな幸せを感じながら共に笑い合いたかった。
そんな幸せを感じながら共に歩んでいきたかった。

二人は、永久の別れの間際に—そう思った。

だから紅麗は、平凡で幸せな道を歩めるなのはとユーノが羨ましい。
自分たちがどんなに足掻いても、どんなに手を伸ばしても手に入れられなかった日常を—彼女たちは手にすることができるのだ。
可能性があるのなら、それに飛び込んでもよいのではないか？
幸せのために、勇気を踏み出して共に歩んでもよいのではないか？

「……」

長く思案していた紅麗は自嘲しながら軽く首を振った。

どう考え、どうしようが他人の勝手だ。
紅麗がなのはたちの考えを納得できないように、なのはたちも紅麗の考えを納得できないかもしれない。
自分が必死に自分の考えを述べ、説得し、世話を焼く必要などない。
紅麗は諦念を抱えながら、再び現場検証を再開した。
そんな彼の後ろ姿が、フェイトには寂しいものに見えた。

◇

機動六課　隊舎。
紅麗たちが隊舎に戻った時には、すでに空は夕暮れとなっていた。
そして、なのははフォワード陣に午後の訓練は休みと言い渡し、解散となった。

「スバル…あたし、これからちょっと一人で練習してくるから」

解散後、ティアナはスバルに向けてそう告げた。

「自主練？　あたしも付き合うよ」

スバルがそう言うと、エリオとキャロも「自分も」と参加の意を表す。ただ一人、薫だけはそれに乗っからなかった。

一緒に自主練するスバルたちに対し、ティアナは彼女たちの申し出を断る。

「ゆっくりしてねって言われたでしょ？…それに、スバルも。悪いけど一人でやりたいから」

「あ、うん…」

スバルは少し寂しげな顔をしながら短く返事を返す。
それを聞き澄ましたティアナは歩き出そうとしたとき―

「あの、さ…ティアナ姉ちゃん」

薫がティアナを呼び止めた。
彼女は足を止めて振り返ると、薫は何か言いたそうに口を開閉させ、

「あんまり…無理しないでね」

それだけ伝えた。
その言葉から感じる不安の感情を、感じ取ったティアナはすぐには返事しなかったが、しっかりと頷いた。

「…ええ、わかってるわ」

ティアナは再び歩き出した。
しかし、薫の胸に感じている不安感は一切拭えなかった。

◇

なのはとフェイトと紅麗の三人が隊舎の渡り廊下を歩いていると、後ろからヴィータに呼び止められた。彼女の後ろにはシグナムもシャーリーもいた。

場所は休憩所に変わり、まず最初に口を開いたのはヴィータだった。

「訓練中から時々気になってたんだよ、ティアナのこと。強くなりたいなんてことは若い魔導師なら、皆そうだし、無茶は多少はするもんだけど…時々、ちょっと度を越えている。…あいつ、ここへ来る前、何かあったのか？」

今までティアナの行動について怪訝に思っていたヴィータはなのはに尋ねると、彼女は悲しげな顔をしながら話し始めた。

ティアナの兄―ティーダ・ランスター一等空尉。享年―２１歳。
両親を事故で亡くし、彼一人でティアナを育てていた。
執務官志望の魔導師だったそうだが、任務中に殉職した。
逃走中の違法魔導師に手傷は負わせたのだが、取り逃がしてしまっ

た。
地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで、犯人はその日のうちに取り押さえられたのだが、その件について心無い上司が酷いコメントをした。

『犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だ、たとえ死んでも取り押さえるべきだった』

『任務を失敗するような役立たずは魔導師失格だ』

ティアナは―愛する兄を侮辱されたのが、何より悔しく、許せなかった。
だから、ティアナは証明したがっている―兄の魔法は役立たずじゃない、どんな場所でもどんな任務でもこなせる、と。
そして、兄が叶えられなかった執務官の夢を自分が叶える。
彼女はその思いを抱えながら生きている。
全ては、兄のために。

◇

隊舎からそれほど離れていないところにある小さな森の中を、紅麗は歩いていた。
その手にはタオルと、缶のスポーツドリンクがある。
ここへ来たのはティアナに会うためで、手にあるものは彼女に渡すためだ。
スバルからティアナは自主練していると聞き、ここへ来たのだ。
休みを言い渡したなのはが空間シュミレーターの訓練場を使う許可

を出すわけないし、他に練習できるとしたらここしかない。

やがて、紅麗は一人の人物を発見した。
しかし、ティアナではない、ヴァイスだ。
彼は腕を組んで木に寄り掛かりながら、どこか遠くを見つめている。
紅麗はヴァイスに近寄ると、彼は紅麗の存在に気付き、「よう」と手を上げながら挨拶する。
紅麗も彼に歩み寄りながら軽く挨拶を返す。そして、ここから少し離れたところにティアナを見つけた。
彼女は、両手に持った？クロスミラージュ？の銃口を周囲に浮かんだ光の球体に正確に向けている。
そのたびに音と発光が成功の判定を示し、ティアナは素早く次の球体へと銃口を向ける。
軽やかな動きで、ずっとそれを繰り返している。何の練習だろうか？
疑問に思う紅麗の心中を察したのか、ヴァイスは説明する。

「周囲にあるターゲットに向かって、正確なフォームで素早く構える―精密射撃の練習だ。…けど、もう何時間もやってんだぞ？　止めても聞かねーし」

「…そうか」

後半は呆れながら語るヴァイスに紅麗は小さく返すと、ティアナの方へ歩き始めた。
ヴァイスはそれを止めずに、歩いていく彼の背中をじっと見守る。

「ランスター」

紅麗がティアナに声をかけると、ようやく彼女は彼の存在に気が付いた。よほど集中していたんだろう、声をかけられるまで気付かなかったようだ。

「紅麗さん…」

乱れた呼吸をしながらもティアナはしっかりと言葉を紡ぐ。

「少し休憩しろ」

紅麗は持ってきていたタオルとスポーツドリンクを渡した。

「ありがとう、ございます…」

わざわざ持ってきてくれたことに、驚きと申し訳ない気持ちを抱えながら受け取った。

汗だらけの手に冷えたスポーツドリンクが触れ、熱った手を気持ちよく冷ましていく。

ティアナは地面に座りながらタオルで汗を拭い、紅麗は彼女の横で佇みながら虚空を見つめる。

「……」

「……」

お互い何も話さない。
話題がないのか、話題はあるが切り出したくないのか、二人は沈黙する。
やがて、まず最初に沈黙を破ったのは紅麗だった。

「高町たちから…お前の過去について少し聞いた」

「…そうですか」

本人に内緒で話されたことに対し、ティアナは別に不快感を覚えなかった。
あのことについては公になっているし、皆にはいずれ機会があれば話そうとも思っていた。
そこで一旦会話が止まり、再び紅麗が口を開く。

「兄が…好きなのだな」

兄のために努力し続けるティアナに対する、紅麗の感想だった。

「はい…愛しています」

ティアナは正直に肯定した。その顔には一切の羞恥がなかった。
それを聞いて、紅麗はそうか…と呟く。そして、彼はようやく本題を切り出した。

「ランスター…ヴァイスにも言われただろうが、あまり無理はするな。過度に練習すれば、すぐに強くなるわけじゃないんだぞ。逆に身体を痛め付けるだけだ」

紅麗はティアナを見下ろしながら、言い聞かせるような口調で言う。
しかし、ティアナは彼の言葉を納得しなかった。

「それでも…凡人は、誰よりも努力するしかないんです」

ティアナは短く言って、口を閉ざした。
これ以上言えば、目の前にいる?天才?に怒鳴りそうだったからだ。
ティアナは紅麗に対して、強い劣等感を持っていた。魔法体系が違うとはいえ、つい数ヶ月前までは魔法について全くの素人だった。だが、現在では彼の魔力値も魔法技術も、ティアナよりも遥かに凌駕している。
故に、ティアナは紅麗を?天才?と印象付けている。
そして、今はそれが嫌悪感に発展した。
?天才?から言われる言葉は全て、?嫌味?にしか聞こえない。
そして、?天才?は小さくため息をつき、また?嫌味?を言う。

「だからと言って…身体を壊したら元も子もないだろう。それに、お前は自分のことを凡人と卑下するが―」

「？天才（あなた）？に？凡人（あたし）？の何がわかるんですかっ！！！」

とうとう怒鳴ってしまった。

ありったけの気持ちで叫んでしまった。

だが、罪悪感は湧き上がらない。

あるのは妬ましい怒りのみだった。

？天才？に？凡人？の何がわかる？

レアスキルも膨大な魔力もないが、自分は必死に努力をしているのに、？天才？は生まれながらの才能であっさりと抜いていく。

その瞬間に感じる悔しさと劣等感がわかるのか？

そして。

何より。

兄のために、強くなろうとしている自分の気持ちがわかるのか？

兄を失ったときの苦しみと悲しみがわかるのか？

そして、世界一愛している兄を侮辱された気持ちがわかるのか？

過去を知って自分の決意は理解できても、その決意に対する思いまで理解できるはずがない！

「あたしの気持ちなんて、絶対にわかりませんよッ！！！」

怒りの全てを吐き出したティアナはその場から走り去っていった。

「……」

紅麗は彼女を引き止めもせず、小さくなっていくティアナの背中を見つめていた。
そこへ、今まで静観していたヴァイスが紅麗に歩み寄ってきた。

「説得失敗、だな。しかし…意外と引き止めなかったんだな」

正直な言葉だが、そこに一切の悪意がなかった。

「あいつは私を?天才?と印象付けている。私が何を言っても無駄だろう」

「ま、実際?天才?だからな」

ヴァイスは肩を竦めながら返す。
その口調にはティアナのような妬ましさはない。事実を語るような、友人を自慢するような口調だった。
それに対し、紅麗は首を振りながら否定する。

「私の火影式魔法は、私の炎術士として能力を大半引き継いでいる。それに戦闘能力に関しては、私が幼い頃から?無理矢理?叩き込まれたものだ―ただの長年の努力と経験値だ」

「それ―ティアナの前で言ってみろ、今度は多分引っ叩かれるぞ」

冗談半分、本気半分の口調でヴァイスは言った。
紅麗は軽くため息をついた。

「言い訳にしかならん、か」

「ぶっちゃけ、そういうことだ」

ヴァイスは再び肩を竦めながら正直に返した。
本当に正直な男だと、紅麗は内心で苦笑する。
しかし、彼のそんなところが紅麗は好きだった。
紅麗がそう思う中、ヴァイスは話を進める。

「ま、今回は無理矢理引き上げさせただけでも上等だ。…ありがとな」

「…何故、礼を言う？」

紅麗は怪訝そうに尋ねる。
彼女に、何か思い入れがあるのだろうか？
ヴァイスは首を振りながら理由を言う。

「いや、どんな形であれ…俺にできなかったことを、お前はできた

んだからな。心配だったんだよ…ティアナのことを―ちょいと、妹と…重ねて見えてな」

「…妹がいたのか？」

途中のヴァイスの表情と口調に暗いもの感じたが、紅麗はあえて突っ込まずにありがちなことを尋ねた。

「…ん、ああ…」

ヴァイスは曖昧に返した後、いつもの陽気な表情を浮かべた。

「まぁ、それより！　お前もさっさと戻れ、朝早いんだろ？」

無理矢理話を終わらせ、隊舎に帰るように促す。

―確かに、いつまでここで話してるわけにはいかないな。

「ああ。では、また明日な、ヴァイス」

「おうっ！」

ヴァイスの言葉を受け、紅麗は隊舎へ歩いていく。

（重ねて見える、か…）

紅麗は歩みながら、ヴァイスの言った言葉を復唱する。
紅麗自身も感じていた。
誰かと重ねて見えていることに。それは―

―…何故、烈火が出てくる？

彼の脳裏に真っ先に思い浮かんだのは、何故か異母弟だった。
もし、思い浮かぶのだったら、水鏡凍季也ではないか？

水鏡凍季也（みかがみときや）―新生火影忍軍の一人で、闇水と呼ばれる魔導具を使う水の剣士。
彼とティアナは似ている。
殺された姉の仇のために武器を取った青年と、死んだ兄のために武器を取った少女―。
志は少し違えど、死んだ唯一の肉親のために技を磨き上げている二人はよく似ている。
しかし、何故そこで弟が出てくる？
烈火はティアナと違って、無知で馬鹿で阿呆だ。
何を思って生きているのかに対して、何の共通点もない。
しかし、いくら考えても答えは出ず、これ以上の思案は無駄だと感じた紅麗はあっさりと諦め、納得のいかない違和感を抱えながら歩き続けた。

◇

機動六課隊舎　女子寮の一室。

スバルが自室でデバイスを磨いていると、同じルームメイトであるティアナが入ってきた。
入浴した後のようで、訓練服から着替えていた。

「おかえりっ」

思っていた早く戻ってきれくれて、スバルは少し安堵した。それに対し、ティアナは曖昧に返事してから、スバルに告げる。

「あのさ…明日、三時起きだから目覚ましうるさかったら、ごめんね」

「いいけど…大丈夫？」

スバルは今度は心配げに尋ねると、ティアナは「大丈夫よ」と言いながら紅麗からもらったスポーツドリンクを机の上に置いた。
そこでようやく、これの存在に気が付いた。

「……」

あんなに怒鳴り散らし、時間が経って怒りが消えかけていたのに、また苛立ちが湧いてきた。

？凡人？の気持ちもわからない？天才？からの餞別。

最初、ゴミ箱に捨ててやろうかと残酷なことも考えたが、何故か憚ってしまう。代わりにスバルに渡そうっていう気も起こらなかった。

「…ッ…」

ティアナは半ばヤケになりながら、缶のプルタブを剥がし、八つ当たりをするようにそれを一気に飲み干す。

かなりの時間が経っていたから、すでに温くなっていた。

それでも自主練と風呂上がりで渇いた喉を潤し、水分が補給されていることを実感できた。

だが、とても不味く感じた。

◇

訓練場―。

数日が過ぎ、訓練場にて、予告されていた２ｏｎ１の模擬戦が行われていた。

「あ、模擬戦もう始まっちゃってる？」

廃ビルの屋上で見学を徹していた紅麗たちの前に現れたのは、フェイトだった。

「私も手伝おうと思ってたんだけど」

「今はスターズの番」

とヴィータ。

「ほんとはスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ、なのはもここんとこ訓練密度濃いからなぁ。少し休ませねーと」

「なのは…部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニューを作ったり、ビデオで皆の陣形をチェックしたり」

ヴィータとフェイトの言葉を紅麗は無言で聞いていたが、その表情が僅かに変わっていた。

「なのはさん…訓練中も、いつもボクたちのこと見ててくれるんですよね」

「ほんとに、ずっと…」

エリオとキャロがそう言う中、ただ一人薫だけがずっと不安感を抱えていた。

―何か、胸騒ぎがする…。

何に対して？

わからない―。

ティアナのことに対して？

わからないままだが、そうかもしれない。

だが、彼女たちを教導してくれているなのはがちゃんと対処してくれるに違いない。

なのはは優しくて、皆が言ったように、ちゃんと相手のことを考えてくれている。

心配はないだろう。

「お、クロスシフトだな」

ヴィータの言葉で薫の意識が現実に戻る。

ティアナは、上空にいるなのはの真下から『クロス・ファイアー・シュート』を放つ。

しかし、狙いは良いようだが、魔力弾の動きにいつもの鋭さがない。

それは紅麗にもヴィータたちも感じ取れた。

魔力弾の群れから逃げ切ったなのはだったが、彼女の目の前に水色の道が現れた。
スバルのウイング・ロードだ。
きっと、ティアナが作った幻影のスバルが、揺さぶりをかけてくるのだろう。
なのはは魔力弾を生成する。
しかし、気付いた。
眼前に向かってくるスバルはフェイクではない。

「本物!?」

なのはは予想外のことに驚きながらも魔力弾を放つ。
スバルは障壁を展開し、爆風と衝撃を受けながらも何とか防ぐ。そして、なのはに向けて加速する。

「うりやあぁあぁぁあぁあッ!!」

スバルは自分の間合いに入ったときには拳を振りかぶっていた。彼女の拳がなのはに吸い込まれていくが、それが当たる前になのははプロテクションを展開し、スバルの拳打を受け止める。

―危険な機動だ…。
なのはは表情を強張らせながら受け流すと、スバルはバランスを崩した。

「ダメだよ、スバル！　そんな危ない機動！」

なのははティアナの魔力弾を避けながらスバルを注意する。

「すいません！　でも、ちゃんと防ぎますから！」

「…ティアナはどこ？」

なのははスバルの言い訳を聞きながらティアナの姿が見えないことに気付き、なのはは周りを見渡す―そして、見つけた。

廃ビルの屋上にいたティアナが、なのはに銃口を向けながら魔力を収束していた。

「砲撃？　ティアナが？」

砲撃魔法なんてまだ教えていないはずだ。独自で取得したのか？

なのはは再び表情を強張らせる。

そんな中、ティアナはスバルに念話を飛ばす。

『特訓成果―クロスシフトC！行くわよ、スバル！』

「おおっ！」

スバルは元気良く返事しながらカートリッジを使用し、急加速しながらなのはに肉薄していく。
なのはは魔力弾で迎撃するが、スバルはスピードを緩めずに全弾避けていく。
そして、己の間合いに入ったときにはスバルは拳を突き出していた。
それと同時になのはは再び防御魔法を展開した。スバルの拳となのはの障壁がぶつかり、拮抗のスパークが発生する。
なのははスバルの拳を受け止めながら、砲撃魔法の準備をするティアナを警戒する。
だが、魔力を収束していたティアナの姿が突如消滅した。
幻影だったのだ。
本物のティアナはウイングロードを走りながら、カートリッジを使用し、魔力刃を生成していた。
―バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける！
ティアナはウイングロードを蹴り、急降下しながらなのはに魔力刃を振り下ろす。

「一撃必殺ッ！！」

？証明のため？の第一歩である一撃を―

「？レイジング・ハート？…モード・リリース…」

それは、冷たい声だった。

巻き起こる爆風。

すぐに晴れる硝煙。

「おかしいな…二人とも、どうしちゃったのかな」

なのはの手に、レイジング・ハートはなかった。
その右手でティアナの魔力刃を掴み、その左手でスバルの拳を掴んでいた。

「頑張ってるのは、わかるけど—模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ」

その表情に、その口調に怒りの感情がないように思えるが、なのはは怒っていた。
静かに、静かに怒っていた。
スバルも、ティアナも—初めて本気で怒ったなのはを目の当たりにして何もできずにいた。

「練習のときだけ言うことを聞いてるフリで…本番でこんな危険な無茶をするんなら—練習の意味、ないじゃない」

ティアナは、魔力刃を掴んでいるなのはの手を見た。

血だ。

刃を掴んだことによって、当然手が裂かれ、血が流れていた。

ティアナの瞳が揺らいだ。

「ちゃんとさ…練習通りやろうよ」

そんなティアナの様子に気付かず、なのはは淡々と語り続ける。

「ねぇ…私の言ってること、私の訓練―そんなに間違ってる…？」

なのはは静かな口調で問い掛ける。

ティアナは後ろへ跳躍し、涙を流しながらなのはの言葉に応える。

「あたしはッ！もう―誰も傷付けたくないからッ！」

すぐに帰ると言ってくれた、兄の優しい声。

「無くしたくないからッ！」

約束を交わした時の、兄の笑顔。

「だから―強くなりたいんですッ！！」

約束の結末は、白い墓標。

理解しても、理解してくれなくてもいい―それでも、伝えたかった言葉だった。

ティアナは万感の思いを込めて訴えた。

その返答は、

「少し…頭冷やそうか」

相変わらずの冷たい口調だった。

なのははティアナに人差し指を向けた。

生成される桜色の魔力弾。

「クロス・ファイアー…」

「うあああああッ！！ファントム・ブレイ―」

「シュート」

砲撃魔法と通常の射撃魔法―発動の速さは後者の方が勝っていた。

一直線に飛来した魔力弾が容赦なく、ティアナに撃ち込まれた。

「ティアッ！！」

スバルが悲鳴をあげ、ティアナに駆け寄ろうとしたが、動くことができなかった。
なのはのバインドがスバルの身体を縛りつけていたからだ。

「じっとして…よく見てなさい」

なのはが二発目の射撃体勢に入っている。
そんな彼女の姿を、薫は呆然とした目で見つめた。

―ウソ、だろ…？

一発はともかく、二発目？

確かに、ティアナたちの戦い方はよくないものだった。
ちょっとした体罰だって、仕方ないことかもしれない。
だけど、これ以上撃つことないじゃないか！！

そして、なのはが魔力弾を発射するのと、薫が加速魔法を使うのがほぼ同時だった。

放たれた魔力弾はティアナに直撃したのだろうか？
魔力弾によって、巻き起こった爆風と硝煙。

スバルは、ティアナはまた撃たれたんだと思った。
しかし、硝煙が晴れると―その予測は良い意味で外れてくれた。
まず見えたのは、黄金の牙。
白いロングコートに青のインナー、黒いズボン――バリアジャケットを着込み、防御魔法を展開した薫がティアナの前に佇んでいた。
「……」
なのはは眉を潜める。
「薫くん…何で邪魔をするのかな？」
小さな声による問い掛けだったが、威圧感があるだった言葉だった。
しかし、その返答は、それに全く畏縮していない怒鳴り声だった。
「こんなの…こんなの間違ってるよッ！！」
薫は悲しげに顔を歪ませながら、怒りの言葉を吐き出した。
彼は、この世界へ来て初めて怒りを露にした。
「どうしてだよ！？　どうして、ここまでやるんだよ！？　これ以

上やる必要はないだろ！！？」

理不尽を反抗する薫の訴えに対し、なのはは理屈の言葉を口にする。

「…これは、教導なんだよ」

その言葉を聞いた瞬間、薫の顔に血管を浮かぶ。

女の子に対して、こんなにブチギレたのは初めてかもしれない。

久しぶりかもしれない。

いや、そんなことはどうでもいい。

？この女？は何を見ていた？

？この女？は何を聞いていた？

泣いているティアナの顔を見て、何も感じ取れなかったのか？

泣いているティアナの声を聞いて、何も感じ取れなかったのか？

こんなの教導なもんか、絶対に教導なもんか！

なぜなら、今のなのはに？想い？が感じられないからだ。

薫は幼少の頃、義兄の紅麗に戦闘を教えてもらっていた時期があった。その戦闘訓練は、幼少の男児にはとても厳しく、無茶と言ってもいい内容だった。

その時はただ、薫は理不尽さに涙を流した。

だが、それは全て―自分を思ってのことだと後になってわかった。
？負ければ死？の世界で生き延びるための術を、紅麗は教えてくれんだ。
そう。どんなに無茶な訓練でも、ちゃんと自分のことを思ってくれている教導だったんだ。

だが、今のなのはには？それ？がない。
何の思いも感じられない。
感じられるのは、ただ言うことを利いてくれないから八つ当たりする怒りだけだ。

そんな奴が、

「教導を語るなよッ！！！」

薫がそう叫んだ次の瞬間、なのはが行動を起こすより先に、彼の横に黒い影が現れた。
仮面を填め、黒衣を纏った黒髪の青年―紅麗だった。

「薫…ティアナを医務室へ連れていけ」

紅麗はなのはを見据えたまま、そう告げた。
ティアナは先程の一撃と、今まで溜まった無理な疲労で気を失っていた。

一方、薫は何か言いたそうに口を開閉していたが、

「…わかった」

短く答え、ティアナを肩に担いだ。
それを横目で見ながら、紅麗は今度スバルに声をかける。

「…スバル、お前も薫と一緒に行け。ティアナと一緒に自主練して、疲労が溜まっているはずだ」

「で、でも―」

スバルは気まずげに口答えをしようとしたが、紅麗は視線だけで黙らせた。

「さっさとしろ。私は薫と違って…お前たちに対しても、怒っているんだぞ」

「……」

スバルは何か言いたそうな表情を浮かべていたが結局何も言えず、薫たちに付き添って行った。
スバルのウイングロードが消え、足場を失った紅麗となのはは建物の屋上に降り立つ。

「薫くんも、紅麗さんも…どうして、私の教導の邪魔するの？」

なのはは紅麗を冷たく睨みながら尋ねる。

「―教導というものは…楽しいものだな」

紅麗は彼女の問い掛けに答えなかった。

歩き去っていく薫たちを見つめるながら、自分の正直な気持ちをなのはにだけ聞こえるように言葉を紡ぐ。

「教え子は失敗し、叱られ、学び―それの繰り返しで、少しずつ強くなっていく。教え子にとって、それはもちろん嬉しいことでもあり―教官にとっても、それは嬉しいことだ」

静かに語る紅麗の言葉を、なのはは同意するように無言で耳を傾けている。

「私とお前は同じだと思っていた―教え子を、教え導くことに対する想いが同じだと思っていた」

紅麗はなのはに顔を向けた。

「なのに…？これ？か。？この様？か」

「……」

「お前だってわかっているはずだ。教えるということは？そういうこと？ではない。わかっているはずなのだよ―教導に対する想いは、私よりも…誰よりも…お前が一番わかっているはずではないか」

紅麗は、なのはの生き様が好きだった。

教え子のために訓練メニューを作っているとき。

教え子を教え導くとき。

強くなっていくことを実感した教え子の笑顔を、自分のことのように微笑んだとき。

そのどれもが、紅麗から見て、なのはがとても楽しそうに見えた。

そして。

教導しているなのはの生き様が、とても美しいとすら思った。

だが…。

あんなに、美しかったのに。

教導している生き様の美しさが、羨ましいと思ったのに。

紅麗は己の左手を見つめる。

そして、告げた。

「痛恨だ―そして、失望したよ」

「……」

その一言が気に入らなかったのか、なのはは？レイジング・ハート？を構えた次の瞬間、急に視界が真っ暗になった。

「…！！？」

一瞬反応が遅れ、なのはは驚愕に目を見開く。

視界が真っ暗になったというより、視界に？何か？が埋め尽くした。

掌だ。

黒い籠手が填められた掌―紅麗の掌だ。

あまりにも一瞬のことで、なのはは全く反応できなかった。

静観していたヴィータたちも反応できなかった。

唯一反応できたのは―高速戦魔導師のフェイトだけだった。

ヴィータたちは口々に加速魔法を使ったのか？と言っているが、フェイトがそれを否定した。

あの一瞬で魔法を行使できるはずがないし、彼に魔法を使った様子

がなかったからだ。
つまり、?単純な脚力?だ。
なのはたちが戦慄する中、紅麗は彼女の胸ぐらを掴む。

「私の気のせいだと思うが…」

相変わらず淡々な口調で語りかける紅麗。
だが、次の言った言葉が、なのはを驚愕させた。

「お前は、無茶をするティアナたちを通して―?何かを見ていたか?」

「!!?」

意味がよくわからない問い。だが、なのははすぐに驚愕のリアクションを取ることができた。
つまり、

「その反応は図星のようだな。ならば問うぞ、お前はティアナたちを通して―?何を見ていた?」

「……」

なのはは何も答えない。
代わりに、彼女の手が小さく震えていた。
沈黙を貫くなのはに見兼ねて、紅麗は再び言葉を紡ぐ。

「あえて例をあげよう。自分が無茶したことか？　仲間が無茶したことか？　お前が本気で怒るということは、余程深刻な問題なのだろう。無茶した自分が大怪我したのか？　無茶した仲間が大怪我、もしくは殉職したのか？…答えろ、高町なのは。」

なのはは紅麗から目線を外し、うつ向きながら身体を震わせる。

「……」

紅麗は小さくため息をつきながら手を放した。
仮面で彼の表情を読み取ることはできないが、彼の眼差しにはなのはを責める感情はなく―代わりに淡い哀しみがあった。

「何故？それ？を伝えん？？それ？が―？ティアナたちのためのお前の教導？なのだろう？」

なのははまだ沈黙を続ける。
今のなのはは、まるで親に叱られている子供のように見えた。

「…なのは」

紅麗は、初めて彼女を下の名前で呼んだ。
泣いている妹を慰める、兄のような口調だった。

「話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきっとあるぞ」

「―っ！？」

うつ向いていたなのははは驚いたように顔を上げた。
？何で、その言葉を知ってるのか？―そんな顔だった。
そのことを気付いているのか、気付いていないのか―紅麗はなのはに背を向け、一瞥もせずに歩き去っていった。

其之十四：教導というもの（後書き）

ＮＧシーン。

ヴァイス「もう何時間もやってんだぞ？止めても聞かねーし」

紅麗「…そうか」

後半は呆れながら語るヴァイスに紅麗は小さく返し、ティアナに歩み寄ろうとする。

ヴァイス「ちょっと待てぃ！お前、ティアナにまでフラグを立てる気か！？」

立ち塞がりながらヴェスバーを構えるヴァイス。

な　ん　と　ォ　！！？

紅麗「…フラグというものが何のかわからぬが、ただ話をするだけだ。それより、何だその兵器は？」

ヴァイス「？ヴェスバー？！！作者の大～好きなガンダムＦ９１の」

紅麗「そういうことではない。何でそんなものを持っているのかと聞いているんだ」

ヴァイス「？大人の事情？というやつだ♪」

紅麗「…そもそも撃てるのか？」

ヴァイス「あったぼーよ！何なら、撃つぞ？今、撃つぞ？絶対撃つぞ！？ほ～ら、撃つぞ～！？」

ティアナ「あんたらさっきから、うっさいのよッ！！！」

おまけシーン。
某月某日、機動六課・食堂―。

はやて「それにしても紅麗の声って、パンをくわえて？俺は大好きだー！！？なんて言いながら妻を追いかける親バカのパン屋さんみたいやな」

紅麗「言ってる意味がさっぱりわからんわ」

はやて「愛娘である病弱美少女―ティアナをつけ狙う同学年の男子―ヴァイスくんに、ティアナの父親である紅麗は激怒して―」

紅麗「さっきから話が具体的すぎるぞ、お前はいったい何を知っているんだ」

はやて「ええなぁ、紅麗。テンションは高うないけど、そのツッコミもまた味やな♪」

紅麗（女版ジョーカーだな。だが、そんな君が―私は嫌いだ）

フェイト「は・や・て～♪楽　し　そ　う　だ　ね、私　も　混　ぜ　て～♪」

はやて「フェ、フェイトちゃん？その…肩に担いでいる鋼鉄の大鎌は…？」

フェイト「ぶっぶ～っ、ざ～んねん♪鋼鉄じゃなくてぇ、オリハルコンなんだ♪残念ながらぁ、不正解しちゃったはやてには～…●　ん　で　も　ら　う　ね♪」

はやて「ひゃあああああああッ！！あかんっ！ミッドチルダ症候群やッ！！ダ、ダメや！！フェイトちゃん！！お願い！許して！もう紅麗には絡まんから！ああ、あかんっ！！振り下ろさんといてぇ！！私の股ぐらが―」

あ　な　た　は―信　じ　ら　れ　ま　す　か？

終わり。

其之十五：兄

―あたしは兄さんのことを、世界一愛している。

―昔からそうだし、今もそうだし、これからもずっと…あたしが歳を取って死ぬまで、ずっと愛しているだろう。

―ずっと。

―ずっとずっと。

◇

そこは、安くもなく高くもない普通の家賃のマンション。
あたしと兄さん、二人で一緒に住んでいる我が家だ。
あたしが物心を着く前から?兄さんが亡くなる?まで、あたしたちはここに住んでいた。
当時のあたしが通っている魔法学校は寮制なのだが、少しでも兄さんと同じ場所で、同じ時間を過ごしたいという思いからあたしは自宅から通っていた。

「……」

今日、１０歳の誕生日を迎えた当時のあたしは、不安と寂しさの色が宿った目で壁に掛けてある時計を見た。
時計の針は―午後８時を示していた。
いつもならこの時間帯には兄さんは必ず帰ってくるのだが、今日に限って帰りが遅くなっていた。

「……」

不安と寂しさがさらに募った。
帰りのタクシーが渋滞に巻き込まれたのだろうか？
仕事で遅れているのだろうか？
それとも、何か事故にでもあったのだろうか？
だんだん予想が悪い方向へと向いていき、あたしはその不安から、瞳に涙を浮かんだ。
当時のあたしは、泣き虫の部類に入らない方なのだが、兄のことだけになると泣き虫になってしまう。
唯一の肉親で、誰よりも大好きな人なんだ。絶対に失いたくないと思っているからすぐに不安になったり、すぐに泣いてしまう。
それほどまでに、あたしは兄さんのことを溺愛していた。

そこへ、玄関からドアが開く音がした。
その音だけであたしの不安が払拭された。

「ティアナ、ただいまっ」

玄関から、聞き慣れた優しい声が聞こえた。

その声を聞いただけで、あたしの表情がぱあっと明るくなった。
そして、あたしは目に滲んだ涙を服の袖でゴシゴシと拭い、すぐに玄関の方へ走っていった。

そして、玄関には予想通り、兄さんの姿があった。
兄さんは靴を脱いで我が家に足を踏み入れながら、あたしに申し訳なさそうな苦笑いをする。

「ごめんね、ティアナ…仕事と寄り道で遅くなってしまって」

「お兄ちゃんっ！」

あたしは寂しさを紛らすように、幸せを噛み締めるように、兄さんの腰にしがみついた。
当時のあたしは兄さんのこと？お兄ちゃん？と呼んでいた。
だけど今にして思えば、後悔はしていないが、少し気恥ずかしい。

兄さんはあたしをひょいと軽々と抱き上げるとリビングまで歩いていきながら、あたしに語りかける。

「今日はティアナの誕生日だろ？　何のプレゼントを渡そうか…ギリギリまで悩んでしまってね」

兄さんは苦笑いしたまま、あたしをゆっくりとソファーに座らせる。
そして、兄さんはあたしに綺麗にラッピングされた一つの箱を渡した。

「誕生日おめでとう、ティアナ」

そう言って、兄さんは優しく微笑んだ。

「ありがとう、お兄ちゃんっ」

あたしは満面の笑顔でお礼を言った後、開けていい？と尋ねる。
兄さんは笑顔のまま頷き、あたしは待ち遠しそうにラッピングを剥がしていく。
そして、剥がし終えて露になった紙製の箱を開けると―そこには、銃のオモチャが入ってあった。
あたしの笑顔がさらに明るくなり、

「ありがとう、お兄ちゃんっ！」

あたしはもう一度お礼を言った。
今にして思えば、女の子に銃のオモチャをプレゼントする兄さんは天然なんじゃないかと思ったが、あたしはそれを貰ったとき、心の底から嬉しかった。
プレゼントの中身もそうなのだが、何より？兄から？のプレゼント―その単純且つ最大の理由があるだけであたしは十分に喜べたのだ。
その後は、いつも通りのたわいのない話をする。
ほとんどあたしが一方的に話していただけだが、学校の話、友達の話など、兄さんはしっかりと聞きくれて、魔法に関しての自慢話で

すら自分のことのように喜んでくれた。
今のあたしからすれば、聞き流してくれてもいいのにって思うが―
兄さんは本当に嬉しいそうに、
こんなたわいのない会話だけで、あたしは最高に幸せだと感じた。
一番大好きな人と同じ場所、同じ時間を共有できるだけで、あたしは満足だったのだ。
きっと、兄さんもそう思っていたに違いない。

◇

その翌日、朝食を作り終えたあたしはいつものように兄さんを起こしに行った。

「お兄ちゃんっ。朝だよ、お兄ちゃん！　早く朝ご飯食べよっ！」

あたしはカーテンを開けながら、ベッドの上で毛布にくるまって兄さんを呼びかける。
遮られていた朝日が、部屋を目映く照らす。

「んん～っ…あと5分だけぇ…ほんとにぃ…」

毛布から顔も出さずにベタなことを言う兄さん。

「もうっ。早く起きてよ、お兄ちゃん。お仕事に遅刻しちゃうよっ？」

「ううっ…眠くて寝てましたって言えば、言い訳通るよ～…ほんとにぃ…」

「わかりやすいウソだッ！　お兄ちゃんの仕事先、どんだけたるんでんのっ！？」

そう言ってあたしは兄さんの毛布を無理矢理引き剥がした。
この朝の風景はいつものことだった。
早めに起きて朝食を作り、低血圧な兄さんを起こしに行き、無理矢理毛布を引き剥がして起こすのも、いつものことだった。

あたしは兄さんを叩き起こした後、あたしたちはいつものように朝食を採っていた。

「ティアナの料理は相変わらず美味しいね、良いお嫁さんになるよっ」

兄さんは微笑みながら、あたしを褒めた。冗談にも聞こえるが、あたしは嘘偽りない言葉だと自然と感じ取れた。
手料理を始めたのはつい最近だから、簡単なものしか作れないのだが、それでも兄さんは褒めてくれる。
あたしはそれだけで嬉しかった。

あたしは、兄さんの笑顔が大好きだ。
その笑顔を浮かばせるために、あたしは幼い頃から頑張っていた。
家事に関しても、魔法に関しても―その全ての原動力は兄さんの笑顔だった。

「お嫁さんかぁ…」

あたしは小さく呟いた後、兄さんに向けて爆弾発言した。

「あたし、お兄ちゃんのお嫁さんがいいなっ」

「―ッ!!?」

あたしの言葉に、兄さんは激しく咳き込んだ。
無理もないかもしれない。当時のあたしは何の躊躇いもない真剣な言葉だったが、今の自分にとっては思い出したくもない、恥ずかしい発言だった。
兄さんは息を整えてから、冷静に振る舞いながら言葉を紡ぐ。

「ティ、ティアナ…お嫁さんになるって…俺以外の男の子じゃなきゃダメなんだぞ?」

あたしは小さく首を傾げた。

「あたしが大好きな人だよ？　お兄ちゃんじゃ…ダメなの？」

あたしはつぶらな瞳に涙を浮かばせる。

「お兄ちゃん…あたしのこと、嫌いなの…？」

「そ、そうじゃないさ」

兄さんはかなり焦った様子だった。だけど、図星というわけではないと断言できる。兄さんの顔が赤かったから。

「ただ、その…いくら大好きな人同士でも、兄妹との…結婚はダメなんだよ。まぁ…大人になれば、わかるよ。その頃には、ティアナは大好きな人を見つけているだろうけど」

兄さんは簡単に説明し、大雑把に話を終わらせた。

しかし、当時のあたしは納得がいかなかった。

？大人？というものが、子供のあたしにはわからなかったからだ。

大人になればわかるのかと半信半疑になっていたが、どちらしても絶対に大人になりたくないなと思う自分もいた。

「お兄ちゃんは…」

あたしは、ある不安を抱えながら別のことを尋ねることにした。

「お兄ちゃんは…大好きな人とか、いないの？　結婚、しないの？」

あたしの突然の質問に目を丸くしていた兄さんは、気まずげに小さく笑った。

「大好きな人、か…俺、自分のことで精一杯だし…何より、モテないからさ。大好きな人とか、結婚とか…俺にとっては、漠然としたものなんだよ」

兄さんは笑いながらそう言った。

しかし、あたしは大好きな兄の言葉を何故か鵜呑みにすることができなかった。

兄さんの言ったことは本当なのか、嘘なのか判断に迷っていた。

すると、あたしは悪い予想を立ててしまった。

もしかしたら、大好きな人はいるけど、あたしを育てるのに精一杯でそんな暇がないのかもしれない。

だとしたら、あたしは邪魔者なのだろうか？

あたしがいなくなれば、兄さんは大好きな人と幸せになれるんじゃないだろうか？

そんなメチャクチャなことを考えていたあたしの気持ちを察したのか、兄さんはあたしの頭を優しく撫でてくれた。

「でもな、ティアナ？　俺は…ティアナがいてくれるだけでも十分

過ぎるほどに幸せだよ。そして…ティアナが大好きな人を見つけて、結婚して、幸せになってくれれば―俺はもっともっと幸せになれるよ」

兄さんは、優しく笑ってくれた。
やっぱり、兄さんは優しい…。
いつでも、あたしのことを第一に考えてくれている。
だけど、その優しさが、あたしには重すぎた。

あたしはうつ向きながら首を振った。

「あたし、だけが…幸せに、なる、なんて…ヤだよぉ…」

視界が歪み、声が震えた。
あたしは、泣いていた。
あたしは、悲しんでいた。
兄さんは笑ってくれているけど、本当は無理してるんじゃないと思ってしまった。
幼い頃のあたしでも、そんなことまで思ってしまった。

「お兄ちゃんも…うっ…お兄ちゃんも、大好きな人を見つけて…結婚して…ひくっ…幸せに、なってよ…ううっ…しあわせに、なろうよぉ…」

兄さんがあたしの幸せを願うように、あたしも兄さんの幸せを願っている。

兄さんにだって大好きな人がいれば、その人と一緒になって、幸せな道を歩んでいってほしい。

泣いているあたしを、兄さんはまた優しく撫でてくれた。

「ありがとう…ティアナ」

兄さんはいつものように笑ってくれた。

「頑張ってみるよ」

嬉しそうに、笑ってくれた。
そして、あたしも嬉しそうに笑い返した。

◇

朝食を済ませた後、身支度を整えたあたしたちはマンションを出た。
そして、あたしが通っている魔法学院の学バスの停留所まで、あたしと兄さんは手を繋いで歩いていた。
これもまた、毎日の日課だった。

「ねぇ、ティアナ。今日の晩ご飯は何かな?」

「んーと…シチューとグラタンと…あとはぁ、考え中っ」

あたしは困ったような笑顔を浮かべた。

「そっか…じゃあ、楽しみにしてる」

兄さんもいつもの笑顔を浮かべた。
そして、あっという間に停留所へ着くと、タイミング良くバスも停留所に到着した。
バスの窓から、あたしに向かって手を振ってくる友達が見える。
あたしも手を振り、名残惜しげに兄さんと繋いでいた手を放す。

「じゃあ、お兄ちゃん。いってきます」

「うん、いってらっしゃい。…今日は任務がなければ、すぐに帰れると思うよ」

すぐに帰れる—その言葉であたしは嬉しくなった。

「うんっ！すぐに帰ってきてね！」

「うん、すぐに帰るよ」

笑顔のまま頷いた兄さんの顔を見て、安心したあたしはバスに乗り込んだ。
姿が見えなくなるまで、あたしと兄さんは手を振った。

だけど、思いも寄らなかった。
あれが、兄さんの最後の笑顔だということを。
あれが、兄さんとの最後の会話だったということを。

◇

あたしは、喪服を着ていた。
あたしは、兄さんからもらったオモチャの銃を抱えていた。
あたしの目の前には、地中に収まった棺があった。
棺の中にいるのは、兄さんだ。

兄さんは、殉職した。
逃走中の違法魔導師を追い、犯人に手傷を負わせたのだが、兄さんは重傷を負い、そのまま帰らぬ人となってしまったのだ。
逃走した犯人は、地上の陸士部隊の協力でその日のうちに取り押さえられた。
だが、あたしには犯人のことなんてどうでもよかった。

「……」

あたしは、泣いていなかった。
兄さんの亡骸が収まった棺を見つめても、兄が死んだという実感がなかったからだ。
誰かの悪いイタズラなのではないかと思っていた。
きっと、兄さんはまた、いつも通り帰ってくるに違いない。
また、いつも通り、あの優しい笑顔を見せてくれるに違いない。
そう、思っていた。

「犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だな」

あたしの後ろから、そんな声が聞こえた。
兄さんの仕事先の上司だろうと、あたしはすぐにわかった。

「たとえ死んでも取り押さえるべきだったな」

（やめ、て…やめてよ…）

あたしの身体が震えた。
心も震えた。
やめさせたかった。
今すぐに、その言葉を、その声をやめさせたかった。
黙らせないと、？自覚？してしまう。
？最低最悪な自覚？をしてしまう。
そうならないために、大声を張り上げて黙らせたかった。
でも、そんなことをしちゃいけない。

兄さんだって喜ばない。
だって、ここは、

この場所は、

「任務を失敗するような役立たずは魔導師失格だな」

？兄さんが死んだ？んだと、自覚させられた瞬間だった。
ここは、死んだ兄さんが安らかに眠る場所だと自覚させられた。
そして、今、兄さんの葬式が行われていることを自覚させられた。

「お兄、ちゃん…ううっ…お兄ちゃんっ…おにいちゃん…」

今になって、涙が出た。
兄さんが死んだ悲しさ。
兄さんを侮辱された悔しさ。
全てが涙となって流れた。

そして、この瞬間から、あたしの全てが始まったんだ。

◇

目を覚ましたティアナが最初に目にしたものは、白い天井だった。
いきなり視界の情景が変わったことに、ティアナは上体を起こしながら少し混乱していた。
そこへ、スライド式のドアが開き、白衣を着ているシャマルが入ってきた。
どうやらここは医務室なのだとティアナは認識された。

「あら、ティアナ。起きた…って、大丈夫?」

シャマルはティアナに駆け寄ると、ハンカチを渡してきた。
何故、それを渡すのだろう?
疑問に思っていたティアナは、顔に何か違和感を覚えた。
彼女は一度手で顔を触れ、それを見てみると、涙があった。
どうやら、自分はあの夢を見て泣いていたようだ。
混乱していた意識が定まり、ティアナはシャマルにお礼を言った後ハンカチで涙を拭いた。

「ここは医務室ね。昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは、覚えてる?」

「はい…」

ティアナは思い返したくない出来事を思い出しながら力無く返事する。

「なのはちゃんの訓練魔法弾は優秀だから、身体にダメージはないと思うんだけど」

そう言いながらシャマルはティアナにズボンを渡した。そこで、ようやくティアナは自分が薄着だということに気が付いた。

「どこか、痛いとこある？」

「いえ、大丈夫です…」

短く返したティアナは時計を見た。

「9時すぎ！？」

昼間から今の時間までずっと寝ていたことにティアナは驚いた。

「すごく熟睡してたわよ？　死んでるんじゃないかって思うくらい」

シャマルは微笑みながら冗談を口にする。

「最近、ほとんど寝てなかったでしょ？溜って疲れがまとめてきたのよ」

ティアナは気まずげに表情を曇らせた。

◇

空間シュミレーターが起動されていない訓練場で、なのはは端末のキーボードを黙々と打っていた。

「なのは」

名前を呼ばれて振り向くと、そこには自分の暴挙を止めてくれた人物―紅麗がいた。

◇

「ティアナが目を覚ましてな、スバルと一緒にオフィスに謝りに来ていた」

紅麗は、なのはと一緒に隊舎へ歩みながら伝える。

「なのはは訓練場にいるから、明日話せと伝えた」

「うん、ありがと…」

暗鬱な表情でお礼を言った。

いつの間にか、なのはは紅麗に対して敬語を使っていなかった。まるで、兄に対するような口調だった。しかし、なのはも紅麗もそれが当たり前のように会話を続ける。

「でも、ごめんね。監督不行届きで…フェイトちゃんやライトニングの二人まで巻き込んじゃって…」

「ああ、まったくだ」

「フォ、フォローしてくれないんだね…」

申し訳なそうに言うなのはに、紅麗は一切フォローせずに正直に返す。彼の言葉がグサリッとハートに突き刺さるが、自分にも非があると思っているからすぐに受け入れる。

「…ティアナとスバル、どんな感じだった？」

なのはは紅麗を見上げながら不安げに尋ねる。

予想はついているのだが、それでも聞きたかった。

「スバルはともかく…ティアナは何だか納得がいかない顔をしていた。…二人より薫の方が怒っているぞ？　あいつは普段優しいから怒りの沸点は低いが、一度怒るとなかなか静まらん」

「…そっか。まぁ…当然だよね」

「ああ。お前はティアナたちに何も話していない…理由がなければ、納得もいかない。当たり前なことだ」

「あの、紅麗…」

なのはは立ち止まりながら紅麗を呼び止めると、彼も振り向きながら立ち止まった。

「紅麗に…話すよ。私の、教導の意味」

なのはは紅麗を真っ直ぐ見据え、話し始めた。
１０年前に偶然、魔法を手にした事。
命の危険が伴う大事件に、自ら関わった事。
当時、まだ不安定とされたカートリッジシステムを用いた事。
その二年後、溜まってきた疲労と何度も繰り返した無茶が原因で大怪我を負い、復帰どころか、まともに歩くことすら出来なくなってしまうかもしれないという状態にまでなってしまった事。
そして、自分みたいになってしまわないために、今の教導で教え子を育てている事。

「…そうか」

なのはの話を聞き終えた紅麗は小さく呟いた。
予想していたとはいえ、幼い頃からそんな無茶をしていた事に少し驚いていた。
もっとも、１０年前から人を殺すための戦闘訓練を受けさせられた彼も例外ではない。

「こんなふうに…ティアナたちに話せればよかった」

なのはは自嘲の笑みを浮かべた。だが、紅麗には今のなのはは泣いているように見えた。
そんな彼の気持ちを知らずに、なのはは続ける。

「私…敵だったフェイトちゃんや、ヴィータちゃんたちに話し合いたいってずっとずっと言ってた、無駄だとわかってても。…？話さないと…言葉にしないと伝わらないこともきっとある？―昔の私が、フェイトちゃんに言った言葉だったんだよ。昔の私はそう言っていたのに、その気持ちをずっと大事にしていたのに…紅麗に言われるまで、忘れちゃってた…」

そう言った後、なのはは紅麗に笑顔を向けた。

「明日、ちゃんと話すよ…フォワードの皆と」

「……」

なのはの笑顔を黙って見つめていた紅麗はそうか…とまた小さく呟いた。

その時、機動六課隊舎全体にけたたましい警報が鳴り響いた。

◇

東部海上に航空タイプのガジェット?型が現れ、旋回飛行を続けているとのことだ。

付近にレリックの反応もないし、海上施設も船もない場所だ—大方、敵は機動六課のデータ収集を狙っているのだろう。

ならば、なるべくこちらの情報を渡さずに今までと同じやり方で殲滅—それが今回の作戦だ。

そして、なのはたちは今、出撃のためにヘリポートにいた。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

なのははフォワードたちに告げる。

「皆はロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

薫たちは返事をするが、ティアナだけ一歩遅れて返事をする。

「……」

ティアナの様子を悲しげな顔で見つめていたなのはは少し躊躇うように告げた。

「…それから、ティアナは出動待機から外れとこうか」

彼女の言葉にフォワードたちは驚愕を浮かべた。紅麗は当然といった顔をしていた。

「その方がいいな、そうしとけ」

ヴィータも同意した。

「体調も魔力もベストじゃないだろうし―」

「言うことを利かない奴は、使えないってことですか…？」

なのはの言葉を遮ったティアナの言葉には、冷たい怒気が露骨に含んでいた。

「……」

彼女の言葉に対し、なのはは呆れたように溜め息をつくと厳しい表情でティアナを見据える。

「自分で言っててわからない？　当たり前のことだよ、それ」

「現場での指示や命令は聞いてます！　教導だってちゃんとサボらずにやってます！」

口答えするティアナに険しい表情を浮かべたヴィータが歩み寄ろうとするが、なのはが手で制する。

「あたしは、なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない！　少しくらい、無茶したって！　死ぬ気でやらなきゃ、強くなんてなれないじゃないですかッ！！」

次の瞬間、シグナムはティアナを黙らせるために拳を振りかぶった。
手加減の力を込めた拳がティアナの頬に吸い込まれていく。だが、
それは渇いた音とともに届かなかった。
いや、誰かに止められたのだ。

「……」

シグナムは視線をずらし、自分の拳を止めた者を見た。

「……」

紅麗だった。
いつの間にかシグナムの横に立っていた紅麗が、彼女の拳を止めたのだ。

「…ティアナ、話はそれだけか？」

紅麗は表情を見せぬように俯きながら、ティアナに淡々とした口調で問いかける。

「え…？」

「答えだ」

紅麗は手の甲でティアナの頬を打った。乾いた音が響き、手の甲で打たれただけでティアナは膝をついた。

「あ、兄者っ！！」

「拳で殴るよりマシだ」

血相を変えて咎めてくる薫に対し、紅麗は淡々と返す。

『…お前はどっちの味方なんだ？』

シグナムは紅麗を睨みながら念話を飛ばす。

『どちらの味方でもない。私は正しい方の味方だ』

数週間ぶりのシグナムとの会話を短く終わらせた紅麗は、なのはたちに早くヘリへ乗り込むよう言った。

「あ、あの、紅麗さんっ！」

出動したヘリを見送った後、スバルは紅麗を呼んだ。
彼は何も言わず、スバルに視線を向ける。
その視線だけで一瞬怯んだスバルだったが、ティアナ（パートナー）のために勇気を振り絞って言葉を紡ぐ。

「その…命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとか…それを止められなかったあたしは、確かにダメだったと思います。だけど…」

スバルは毅然とした表情で紅麗を見据えた。

「自分なりに強くなろうとするのとか、キツい状況でも何とかしようとがんばるのって、そんなにいけないことなんでしょうかッ！！？」

スバルの言葉を、紅麗とシグナムは黙って耳を傾ける。

「自分なりの努力とかそういうことも、やっちゃいけないんでしょうかッ！！？」

そう訴えるスバルの言葉に、紅麗は話にならん…と内心で悪態をつく。

―ティアナの行動を熟知した上でそんな事を言っているのか？

それはシグナムも思っていることだった。紅麗とシグナムのどちらかが言葉を発しようとしたとき―

「自主練習はいいことだし、強くなるための努力はすごく良い事だよ」

そう言ったのは、眼鏡をかけた女性―シャーリーだった。

「何かもう…皆無器用で、見てられなくて…」

シャーリーはそう呟くと、何かを決意した表情をティアナたちに向けた。

「皆、ちょっとロビーに集まって。私が説明するから―なのはさんのことと、なのはさんの教導の意味―」

「待て、シャーリー」

紅麗は、皆を先導しようするシャーリーを呼び止めた。

「その事については、なのはがティアナたちに直々に話す。余計な世話を焼くな」

紅麗はそう言うが、シャーリーは納得の表情を浮かべなかった。

「ですけど――」

「シャリオ・フィニーノ」

「ごめんなさいッ！！！」

フルネームで呼びながら圧力をかけてくる紅麗に恐怖したシャーリーは土下座しながら了承した。

◇

ティアナは、なのはの口から、教導の意味の全てを知った。
溜ってきた疲労と、繰り返した無茶の結果が――下手したら、自分もあんなふうになっていたんじゃないかと思うとティアナはぞっとした。
そして、自分の無茶が、意味のない無茶なんだと痛感した。
兄の力の証明のためだけを考えていて、それが見えていなかったのだ。
そして、その後、ようやくティアナはなのはと話し合った。
それまでティアナは自分のことを凡人だと思っていた。だけど、なのははそれを否定した。

統率力、射撃、幻術、知恵―ティアナの長所をちゃんと教えてくれた。
そして、執務官志望のティアナのために用意してくれた？クロスミラージュ？のモード2、教導のカリキュラムのことについても教えてくれた。
ちゃんとなのはは自分のことを見ていてくれた、何も見えていなかったのは自分だった。
それを思い知らされたティアナは涙を流した。

◇

ティアナは空間シミュレーターが起動された訓練場を歩いていた。
紅麗に会うためだ。
彼を？天才？と印象付けて、彼の話に耳を傾けず、暴言まで吐いてしまった。そのことについて謝りたかった。
やがてティアナは歩き続けていると、訓練場の一角に紅い光がぽうと光っているのを見つけた。
ティアナはその光に向けて、走り出した。
そして、彼女の予想通り、紅い光の正体は紅麗だった。
訓練服を着ている彼は左手に魔力を集中させ、紅い炎の魔力スフィアを生成している最中だった。

「……？」

紅麗はティアナの気配に気付き、後ろを振り向きながらスフィアを消した。

「…ティアナか」

紅麗は一言呟く。
それに対しティアナは気まずけな表情を浮かべていたが、すぐに表情を引き締め、紅麗に駆け寄ると、手に持っていたタオルとスポーツドリンクを渡した—紅麗がティアナに渡したように。

「お、お疲れさまですっ。この前の…お礼です」

気まずそうに、それでいて気恥ずかしそうに言うティアナに対し、紅麗は苦笑を浮かべた。

「…汗をかくほど、身体を動かしてはいないんだがな。…だが、礼を言っておこう」

紅麗はややぶっきらぼうな言い草でそう言うと、タオルとスポーツドリンクを受け取った。
ティアナには紅麗の表情と言葉が、何故か兄と重なって見えた。

紅麗とティアナの二人は、並んで地面に座り込んでいた。

「……」

「……」

この前と同じようにお互い何も喋らなかった。だが、すぐに沈黙を破ったのはティアナだった。

「すみませんでした、紅麗さんっ！」

ティアナは立ち上がり、紅麗に頭を下げながら謝罪した。

「紅麗さんが、あたしを止めようとしてくれたのに…あたしは紅麗さんを？天才？の一括りで、全然耳を貸さなくて…」

それに対し、紅麗は首を振った。

「気にするな。お前の気持ちはわからんでもない」

紅麗は短く返すと、そこでまた二人は沈黙する。

「……」

すると、紅麗は何かを決意したような表情を浮かべると、立ち上がりながらティアナに顔を向けた。

「ティアナ…強くなりたいか？」

突然の問い掛け。
ティアナは彼を見上げた後、気まずげに表情を曇らせる。

「はい…。兄の力を証明したいって気持ちも、少なからずありますでも、無茶な努力はしません。もう十分に、理解も納得もできました…」

ティアナの言葉に対し、紅麗は満足げに小さく頷く。そして、ティアナに向けて言葉を紡ぐ。

「ティアナ…よく見ておけ」

次の瞬間、紅麗の姿が瞬時に複数に分裂した。
ティアナは驚きに目を見開く。。だが、その正体が何なのかすぐにわかった。
これは―分身の幻術だ。

だが、魔法を行使した様子はないし、瞬時に発動できるものだろうか？
そんな疑問を浮かべるティアナを察したのか、紅麗はティアナの疑問に答える。

「『別魅（わけみ）』―これは前の世界で、とある男から教わったものだ。魔法とは無関係だから、魔力を消費しないし、瞬時に発動できる。しかし、衝撃に弱く、分身たちを操って魔法を行使させるとその分魔力を大きく消費するがな」

ティアナは言葉を失った。
もちろんデメリットはあるが、それでも自分が使っている分身の幻術より使い勝手がいい。
そんなティアナの期待に応えるように紅麗は紡ぐ。

「良ければ、私が教えてやろうか？　お前なら、すぐに覚えられるとだろう」

「…は、はいっ！　ぜひ！」

「なら、なのはに時間を取らせるよう掛け合ってみる」

「…あの、紅麗さん」

ティアナは紅麗を見上げる。

「どうして、あたしにそんなに良くしてくれるんですか？」

「……」

尋ねられた紅麗は、彼女から視線を外しながら己の心情を思案する。
すると、珍しく困ったような表情を浮かべた。

「…どうしても言わなければ、ならないか？」

「…無理にとは言いませんけど、知りたいです」

ティアナは曖昧に返すが、教えてもらいたいという気持ちの方が強かった。
そして、それを感じ取った紅麗はため息をつき、渋々といった様子で話し始めた。

「お前が…私の弟のように見えてな」

「弟…薫、ですか？」

「いや、薫は義理だ。血の繋がった異母の弟だ。そいつは私よりも高い潜在能力を持っているくせに―馬鹿で間抜けで、感情的で…敵を前にして私語したりと、かなり危なっかしい奴でな」

?危なっかしい?―その点から、紅麗はティアナと?弟?を重ねて見えてしまった。
一方、ティアナは、悪態をつくように?弟?を語る紅麗が、その?弟?を心配しているように見えた。
そして、そんな彼を見つめていたティアナは遠い記憶を呼び起こされた。

◇

それは7年前のある日のこと、ティアナは自分と兄が住むマンションから歩いて5分ぐらい離れた距離にある公園にいた。
時刻は午後8時も回っているのだが、ティアナは帰らずに悪戯っぽい笑顔をしながら兄を待っていた。
日頃の寂しさ故か、兄を心配させようという、ちょっとした悪戯心から始まったことだった。

「ティアナっ!」

自分が待っていた人の声が聞こえた。
ティアナの兄―ティーダは安堵と心配そうな顔をしながらティアナに駆け寄ってくる。

「えへへ、心配したぁ?」

ティアナは、兄の顔を見て満足げな笑顔を浮かべた次の瞬間、乾いた音が響いた。
そして、頬に感じる痛み。

「当たり前じゃないか！心配したんだぞッ！！」

ティーダは怒鳴った。
それに対し、ティアナは呆然としていた。
初めて、兄に叩かれた。
初めて、兄に怒られた。
そのことに呆然し続けているティアナを、ティーダは今度は強く抱き締めた。

「無事で…無事で良かったよ…ティアナ…」

抱き締めながらティーダは泣いていた。
愛する唯一の肉親が無事だということにティーダは安堵の涙を流していた。
一方、ティアナはよくわからない心境だった。
さっきまで怒っていたのに、何で無事で良かったと言ったんだろう？
何で抱き締めてくれたんだろう？
自分を嫌いになったんじゃないのだろうか？
幼いティアナには、よくわからなかった。
だから、質問した。

「お兄ちゃんは…あたしのこと、嫌いになったんじゃないの…？」

ティーダはティアナの小さな肩に手を置いて、彼女を真っ直ぐに見据える。

「嫌いになるもんか…ティアナをぶったのは、ティアナに怒ったのは…もう二度と、こんな危ないことはしないでくれっていう意味だ」

ティーダは、ティアナの大好きな―あの優しい笑顔を浮かべた。

「嫌いになるはずがないじゃないか…だって、オレはティアナのことを…」

？世界一愛してるんだから？

◇

「うっ…ううっ…うあああああっ…！お兄、ちゃん…お兄ちゃあん…！」

ティアナは膝をついて泣いた。
涸れ果てたはずの涙が、また流れた。
あの日から、もう二度と兄を心配させないと誓ったはずなのに、自分はまた間違いを繰り返してしまっていた。
罪悪感が胸を締め付けられ、ティアナは泣いた。
幼い頃に戻ったかのように何度も泣いた。
何度も何度も兄を呼び、何度も何度も謝る。
許しを請うように、何度も何度も。

だが、紅麗には?見えている?。
泣いているティアナをあやすように優しく抱き締めている、彼女と同じ髪色の青年を—。

ちゃんと、許してくれている。兄というのはそういうものだ。

ティアナが泣き止むまで、紅麗は何も言わずにずっと佇んでいた。

其之十五：兄（後書き）

NGシーン。

空間シュミレーターが起動されていない訓練場でなのはは端末のキーボードを黙々と打っていた。

なのは「……」

フェイト「ダメだよ、紅麗！なのはとフラグを立てるなんて私が許さないっ！！」

バスケのディフェンスのように、フェイトは紅麗の前に立ち塞がっていた。

プロの選手顔負けでございます。

ヴァイス「ああ。俺からも許せねぇな、紅麗」

サテライトキャノンを構えるヴァイス。

月は出ているか？

紅麗「だからフラグというものは何なのだ？」

ヴァイス「よ～し！俺がフラグを立ててやる！俺に行かせてくれぃ！！」

なのはに向けて雄々しく歩むヴァイス。

フェイト「がんばってね、ヴァイス！朋也のように！」

紅麗「いや、私に行かせろよ」

ヴァイスは振り返り、紅麗たちに真摯な表情を向けた。

ヴァイス「ところで、さ…なのはさんに何があったの？」

紅麗・フェイト「知らないのかよ！」

なのは「何か楽しそうだね、三人とも…」

何故か疎外感を覚えたなのはだった。

NGシーン・2。

紅麗「…ティアナ、話はそれだけか？」

紅麗は表情を見せぬようにうつ向きながら、ティアナに淡々とした口調で問いかける。

ティアナ「え…？」

紅麗「答えだ」

紅麗は『翅炎』を出した。

皆「やり過ぎです！！紅麗様ぁぁぁぁぁぁ！！」

其之十五・五：歩んだ二人　前編（前書き）

ヴァイス「オッス、皆ぁ！ヴァイス・グランセニックだ。この話はな、其之十二～十五までのなのはさん視点の話だ。本編に出ていない場面もあるし、すでに出ている場面もある。あの『ＯＨＡＮＡＳＳＩシーン』もあるが、また見たくない奴は読み飛ばしておけ！…そんじゃ魔法（ｒｙ、始まるぜッ！！」

其之十五・五：歩んだ二人　前編

ホテル・アグスター―。

紅麗さんと、フェイトちゃんと、はやてちゃんの面白恥ずかしいコントにより、周りの人たちの視線が恥ずかしくなって走り出していた私は紅麗さんたちから十分に離れた所で足を止めた。

壁に手をつき、息を整える。

でも、あの場から離れたのは、周りの視線が恥ずかしくなったからだけではない。

？紅麗さん（別の男性）？に対して胸を高鳴らせ、見惚れていた私に嫌気が差したからだ。

だって…私は―

「―あれ？なのは？」

後ろからかけられた声で、思案に耽っていた私の意識が現実に戻る。

それは、聞き覚えがある声だった。声変わりで少し声音が変わっているが―？彼？なんだと認識できた。

それだけで胸が高鳴っていく。

紅麗さんに対するものとはまた違う高鳴り―いや、それ以上の強い高鳴りだった。

私は？彼？を確認するために、後ろを振り返った。

「あ、やっぱりなのはだったんだ」

そこには、丸いレンズの眼鏡をかけ、長い襟足を後ろに縛り、緑色のスーツを着た青年が笑顔を浮かべていた。

「ユーノ、くん…？」

私は呆けたように呟いた。

彼は、間違いなく自分に魔法を使うきっかけを与え、自分が恋心を抱く―ユーノ・スクライア本人だった。

彼だと認識できた瞬間、頬が熱くなったり、胸の鼓動が激しくなっていく。

紅麗さんと比べたら容姿は普通だし、一見頼りなさそうだし、眼鏡もスーツも格好良いとは思えない。

―でも…。

―それでも…。

私は、ユーノくんを誰よりも一番魅力的な男性だと思っている。

恋心を抱いたのはいつぐらいだろうか？

幼い頃は？仲の良い幼馴染み？という気持ちしかなかった。

でも、年を重ねていくごとに、だんだん気持ちが高ぶっていった。

一見彼は頼りなそうだけど、後ろからちゃんと私の事を優しく支えてくれたことが何度もあった。

たとえ、彼に私を守れるほどの大魔力はなくても、そんな彼だから

こそ、私は逆に彼を守ってあげたいと思う母性本能を持ち始めた。
そして、その気持ちが、いつの間にか恋心へと変わっていった。

しかし、それはあまりに遅すぎた。

長い長い時間が経ち、お互い実績を積み上げ、高い役職についてからお互いの時間がなかなか取れなくなってしまった。
一緒にいた頃は？一緒にいる日常が当たり前だ？と思っていた。しかし、ここまで劇的に変わるとは思いもしなかった。
早く告白しておけばよかったと後悔した。
いや、告白を早くにしろ遅くにしろ、成功するにしろ失敗するにしろ—多忙である私たちはいずれ間違いなくすれ違いをする。
だから、彼に対する恋心を諦めている。

—いや…。

違う。
矛盾している。

私が、今まで多くの男性からの告白を断ってきたのは何で？
彼を忘れようと、他の男性と付き合おうとしなかったのは何で？
つい先程、紅麗さんに対して胸を高鳴らせ、見惚れてしまった自分に苛立ったは何で？
彼の声を聞いただけで、強く胸を高鳴らせたのは何で？

簡単だ。
私は…まだユーノくんの事を諦めきれていないからだ。
だけど、多忙のすれ違いを懸念し、恋心を無理矢理抑えて、彼に歩めずにいただけなんだ。

「…ユーノくんは、どうしてここに？」

自分の気持ちを悟られないように、私は言葉を紡ぐ。

「うん、オークションの品々の鑑定と解説のためにここに喚ばれたんだよ」

そう言うと、ユーノくんははにかむように笑う。

「でも驚いたよ…最初見た時、なのはだって気付かなくてさ。あまりにも、その…綺麗だなって…」

ユーノくんは少し気恥ずかしそうにそう言うと、私は今まで以上に胸を高鳴らせた。

大好きな人に初めて綺麗って言われたんだ、嬉しくて当たり前だ。

しかも、ユーノくんが恥ずかしそうに言っているところが、すごく可愛い…。

だけど、私はそれに対して照れ隠しにするように、少し意地悪してみる。

「むぅ…何か複雑な気持ち。それじゃ、私が普段綺麗じゃない言い方だよっ」

私は悪戯心を隠しながら頬を膨らませて不満そうに言うと、私の予想通りにユーノくんは顔を赤くしながら慌て始める。

「ああっ！い、いや！そういう意味じゃないんだよっ！なのはは、えっと…普段、綺麗というより、可愛いというか…その…」

ユーノくんは慌てながら必死に弁明し、自分が口走った言葉に恥ずかしがっている。
彼の慌てた反応に母性本能を燻れながら、私は小さく噴き出す。

「冗談だよっ。ありがと、ユーノくんっ！」

私は嬉しそうに微笑む。
すると、ユーノくんもまた微笑んだ。
そして、私たちは笑い合った。
世界中に私たちしかいないんじゃないかと思える、私たちだけの笑い合い。
だけど、決して寂しくない笑い合いだった。

「…じゃあ、僕はそろそろ準備しなくちゃいけないから」

一頻りに笑い合った後、ユーノくんは少し寂しそうに言った。

「あ、うん…」

私もまた寂しそうな口調になっていた。
だけど、いつまでもこうしているわけにもいかない。私も、ユーノくんも仕事でここへ来ているんだから。

「じゃあ、またね」

ユーノくんは小さく微笑みながらそう言い、私に背を向けて歩き始めた瞬間、

「ま、待って！　ユーノくんっ！」

私はユーノくんを呼び止めた。
しかも、何故か慌ててたから大きな声になっていた。

「…ど、どうしたの、なのは？」

私に大きな声で呼び止められた事に驚いているらしく、ユーノくんは戸惑った様子で尋ねてくる。

「あ、あの…その…」

今になって、何で彼を呼び止めたんだろうと疑問に思い始め、何を言っていいかわからなくなった。

だけど、私の恋心が何をするべきなのか、何を言うべきなのかを伝えてくる。

―だけど…。

「う、ううん…何でも、ないの…ごめんね…」

私は、それを拒絶してしまった。

私は顔をうつ向かせた。

ユーノくんは何も言わず、私の事をじっと見つめる。

顔は見えないが、視線だけは感じる。

私は、彼の顔を見ないようにうつ向き続ける。

今…ユーノくんはどんな顔しているんだろう？

悲しい顔してるの？

怒った顔をしてるの？

それとも、無表情なの？

どちらにしろ、私は彼の顔を見るのが、何だか怖かった。

「…そっか。じゃあね」

ユーノくんはそう言い終えると、再び歩き出した。
私は、また彼を呼び止めようとする気持ちを我慢するように唇を強く噛む。

ユーノくんの足音がだんだん遠くなっていく。
その度に呼び止めたい衝動が湧き上がり、胸が切なくなっていく。

ユーノくんと別れ、オークションが無事に終わった後も、ユーノくんと再会したのだが―私は結局？言えなかった？。
そして、ユーノくんとの貴重な再会があっという間に、もったいなく終わった。

◇

それから数日が経った。

何だが、ティアナとスバルが訓練に対していつも以上に意気込んでいる様子だった。
教官である私にとってそれは嬉しい事ではあるんだけど、その意気込みが悪い方向へ行くんじゃないのかと不安になってしまう。
特に、ティアナはお兄さんの力を証明するための焦燥感を持っていると思うから、その傾向が強い。
だけど、心配はないだろう。
ティアナたちはしっかり者だし、ティアナは物事を深く考える子だ

から周りに劣等感を感じようと、周りには負けないくらいの自分の長所の事もわかってくれるだろう。
そして、？私の教導の意味？だってちゃんと察してくれるだろう。
私はそう信じていた。
だけど、ティアナたちとの２ｏｎ１の模擬戦で、その信頼と期待が打ち砕かれた。

スバルの危険な機動。
教えてもいない砲撃を行使し、魔力刃を使って突撃してくるティアナ。
彼女たちを見た瞬間…私は、無茶を繰り返した馬鹿な自分を思い出した。
激しい痛み。
リハビリの苦しみ。
友達や家族の、悲しそうな顔。
嫌な思い出だった。
とても苦しい、地獄のようなものだった。
だから、私は決意した。
私が受けた苦しみを、味わわせないために綿密な教導メニューを作ってきた。

信じていたのに。
ちゃんと私の教導の意味を理解してくれていると信じていたのに。

私は…久しぶりに、本気で怒った。

「おかしいな…二人とも、どうしちゃったのかな」

自分でも驚くくらいに静かな声だった。
本気で怒った時って、こんなに静かになるものだろうか？
以前、本気で怒った時はあっけど、その時はどうだったかな？
今のように冷えきっていたかな？
それとも、激しく怒鳴ったかな？
怒った事事態は覚えているけど、どんな風に怒ったかまでは覚えていない。
でも…そんなことはどうでもいいや。
今は、ティアナたちを叱らなくちゃ。

「頑張ってるのは、わかるけど―模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ」

私の右手はティアナの魔力刃を掴んだ事によって切り裂かれているけど、気にならない。
血が出ているけど、気にならない。
もちろん、痛みはあるけど、気にならない。
怒りの方が勝っているから、どうでもよかった。

「練習のときだけ言うことを聞いてるフリで…本番でこんな危険な無茶をするんなら―練習の意味、ないじゃない」

スバルも、ティアナも―初めて本気で怒った私に怖がって、何もできず、何も言えずにいた。

「ちゃんとさ…練習通りやろうよ」

「…ッ…！？」

…今、ティアナの様子が何か変かなって頭の片隅で思っていたけど、
それすらも気にならなくなった。
何だか…怒ってから頭が真っ白だ。
深く考えられなくなった。
意識はあるんだけど、頭の中が真っ白だ。
だけど…それすら、どうでもよくなった。

「ねぇ…私の言ってる事、私の訓練―そんなに間違ってる…？」

私は静かな口調で問い掛ける。
ティアナは後ろへ跳躍して、距離を離す。

「あたしはッ！　もう、誰も傷付けたくないからッ！」

ティアナは悲しそうに叫ぶ。

「無くしたくないからッ！」

きっと、お兄さんの事を思い出しているんだね…。

「だから、強くなりたいんですッ！！」

私は静かにティアナの思いの篭った言葉を聞き澄ました。

…うん。辛かったんだね、苦しかったんだね。

でも…。

でもね…。

ティアナがしてきたことは間違いなんだよ。
今の言葉だって、言い訳にしかならないんだよ。
もし大怪我を負ったら、死んじゃったら…何もかも、終わってしまうんだよ？

それを、わからせてあげる。

「少し…頭冷やそうか」

私はティアナに人差し指を向けた。
生成される桜色の魔力弾。

「クロス・ファイアー…」

「うあああああッ！！　ファントム・ブレイ―」

「シュート」

砲撃魔法と通常の射撃魔法―発動の速さは後者の方が勝っている。
ティアナが砲撃魔法を撃つ前に、私が撃った魔力弾がティアナの身体に直撃した。

「ティアッ！！」

スバルが悲鳴をあげ、ティアナに駆け寄ろうとしたが―私がバインドで動きを封じる。

「じっとして…よく見てなさい」

私は二発目の射撃体勢に入る。

まだ足りない。
間違っていたんだと、徹底的にわからせなくちゃいけない。
これだって？教導？だよ。

…だけど、胸の中に感じる…しこりのようなモノはなんだろうか？
自分がやっていることに、何か違和感があるのかな？

…でも、すぐに気にならなくなった。

そして、気付いた時には私は二発目を撃っていた。

爆発音。

魔力弾によって、爆風と硝煙が巻き起こる。

だけど、硝煙が晴れると―まず見えたのはティアナではなく、金色の薙刀だった。続いて、白いロングコート、青のインナー、黒いズボン。

ああ…このバリアジャケットは誰のか知っている。

防御魔法を展開した薫くんがティアナを庇うように佇んでいた。

「……」

私は眉を潜める。

「薫くん…何で邪魔をするのかな？」

私は静かに問い掛ける。

「こんなの…こんなの間違ってるよッ！！」

薫くんは畏縮した様子なく私に怒鳴りつけてきた。

薫くんはこの世界へ来て、初めて本気で怒ったんじゃないだろうか？
だけど、私とは真逆な激しい怒り方だった。

「どうしてだよ！？　どうして、ここまでやるんだよ！？　これ以上やる必要はないだろ！？」

薫くんは怒ってるような悲しんでるような口調で訴えかける。

やる必要はあるよ。
二度と間違いを犯さぬよう、躾する必要がある。
だから、私はこう言った。

「…これは、教導なんだよ」

だけど私の言葉に、薫くんは顔に血管を浮かばせながら全然納得がいかない顔をしていた。
さらに怒らせちゃったかな？
だけど、薫くんには理解できないでしょ？
私が教え子たちを教導する思いが。
教え子に信頼と期待を裏切れた気持ちが。
私の教導を理解してくれなかった気持ちが。

だけど、薫くんはこう返してきた。

「教導を語るなよッ！！！」

…今の言葉は聞き捨てならないな。
薫くんにも、頭を冷やそうかな？
私がそう思った次の瞬間、仮面を填め、黒衣を纏った紅麗さんが、いつの間にか薫くんの横に立っていた。
紅麗さんは私を見つめる。
仮面で素顔は見えないけど、薫くんとスバルの様子からして、私を見つめながら薫くんたちに話しているみたいだ。
だけど、あまり聞き取れない。

すると、薫くんは頷き、気絶したティアナを肩に担いだ。そして、スバルと一緒に立ち去っていった。

ウイングロードが消え、足場を失った紅麗さんと私は建物の屋上に降り立つ。

「薫くんも、紅麗さんも…どうして、私の教導の邪魔をするの？」

私は紅麗さんを冷たく睨みながら尋ねる。あまり素人に手を出されるのって、嫌なんだよね…。

「教導というものは、楽しいものだな」

私の問い掛けに答えず、紅麗さんは歩き去っていく薫くんたちの背

中を見つめる。

「教え子は失敗し、叱られ、学び―それの繰り返しで、少しずつ強くなっていく。教え子にとって、それはもちろん嬉しいことでもあり―教官にとっても、それは嬉しいことだ」

静かに語る紅麗さんの言葉を私は無言で耳を傾ける。

…紅麗さんの言う事は私も同意できる。
だけど、紅麗さんからその言葉を聞けるのは意外だった。
紅麗さんも、誰かに戦い方を教えたことがあるんだろうか？
そういえば、スバルたちに的確なアドバイスしていた時があった。
だけど、素人とは思えないほど上手な教え方だった。
素人ではないのだろうか？
私がそんなことを思案しながら、紅麗さんの言葉に耳を傾ける。

「私とお前は同じだと思っていた―教え子を、教え導くことに対する思いが同じだと思っていた」

紅麗さんは私に顔を向けた。

「なのに…？これ？か。？この様？か」

紅麗さんは失望した口調で言う。
だけど、私だって…ティアナたちに対して失望している。

そこのところをわかった上で言っているの？

「お前だってわかっているはずだ。教えるということは？そういうこと？ではない。わかっているはずなのだよ。教導に対する思いは、私よりも…誰よりも…お前が一番わかっているはずではないか」

紅麗さんからの言葉を聞くと、何だか私は複雑な気持ちになった。
会って一年も経っていない他人に自分の事を語られると不快な気分になるはずなんだけど、何故か彼に言われるとそんな気持ちは湧かなかった。
しかも、紅麗さんの言葉には説得力があった。
そして、私は…ティアナにした事が間違っていたんじゃないかと思い始めた。

…何だか、頭の中がぐしゃぐしゃになって気持ち悪い…。

あれこれ考えている私に、紅麗さんは自分の左手を見つめながらこう告げた。

「痛恨だ―そして、失望したよ」

「……」

…気に入らない言葉だった。
私は怒りに任せるように？レイジング・ハート？を構えた次の瞬間、視界が真っ暗になった。

「…！！？」

一瞬遅れて、私は驚きに目を見開く。
視界が真っ暗になったというより、視界に？何か？が埋め尽くされていた。
掌だ。
黒い籠手が填められた掌―紅麗の掌だ。
あまりにも一瞬のことだったから、私は全く反応できなかった。

瞬間移動の魔法や加速魔法を使ったのだろうか？
だけど、紅麗さんにその様子がなかった。
ということは―？単純な脚力？だろうか？
人間業とは思えないが、紅麗さんならできるかもしれない。
私が戦慄する中、紅麗さんは私の胸ぐらを掴む。

「私の気のせいだと思うが…」

相変わらず淡々な口調で語りかけてくる紅麗さん。
だけど、次の言った言葉が―私を驚愕させた。

「お前は無茶をするティアナたちを通して―？何かを見ていたか？」

「！！？」

私は驚いて、目を見開いた。

…そうだ、私はティアナたちを通して…昔の自分と重ねて見ていた。

「その反応は図星のようだな。ならば問うぞ…お前はティアナたちを通して、？何を見ていた？？」

「……」

私は何も答えられなかった。

だけど、私の手が小さく震えた。

沈黙する私に見兼ね、紅麗さんは再び言葉を紡ぐ。

「あえて例をあげるぞ。自分が無茶したことか？　仲間が無茶したことか？　お前が本気で怒るということは、余程深刻な問題なのだろう。無茶した自分が大怪我したのか？無茶した仲間が大怪我、もしくは殉職したのか？…答えろ、高町なのは。」

私はとうとう紅麗さんから目線を外し、うつ向きながら身体を震わせる。

「……」

紅麗さんは手を放した。

「何故？それ？を伝えん？？それ？が―？ティアナたちのためのお前の教導？なのだろう？」

私は黙り続ける。
伝わっているんだと思っていた。
言わなくても、わかってくれていると思っていた。

「…なのは」

紅麗さんは初めて、下の名前で私を呼んだ。
彼の口調は―兄のような優しい口調になっていた。

「話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきっとあるぞ」

うつ向いていた私は驚いたように顔を上げた。

何で…その言葉を知っているの…？

私はその言葉を知っている。
１０年前―お互いがわかり合うために、私がフェイトちゃんに言った言葉だった。
その事を思い出して、私はようやく自分の間違いに気がついた。

私はティアナに何一つ話していない。
私の教導の意味をちゃんと理解してくれているだろうと思って、話し合っていないじゃないか。
何もかも他人任せじゃないか。
私はいつの間にかその言葉を…その思いを…忘れてしまっていた。
忘れていなければ…話し合っていれば…こんな事にはならなかったじゃないか。

紅麗さんは私に背を向け、一瞥もせずに歩き去っていった。
私はその背中を見つめながら、ずっと立ち尽くしていた。

其之十五・五：歩んだ二人　前編（後書き）

薫「さっ！ゲストをお呼びした後書きコーナーでぃーす！司会は私！軽く背景化している小金井　薫です（泣）！」

ロウ・コウタ「ネガティブな自己紹介だな！」

薫「今回は？魔法少女リリカル　ＯＧ－ＡＳＴＲＡＹｓ？の宇宙一のジャンク屋―ロウ・ギュール兄ちゃんと、下町育ちの江戸っ子高校生―アヅマ・コウタ兄ちゃんでっす！」

ロウ・コウタ「どうもーっ」

ロウ「ところで…主人公の紅麗って人は？」

薫「面倒だからって来てないよ」

コウタ「主人公それでいいのかぁ！？」

薫「でも、代わりの人が来てるよ」

ヴァイス「デュナメスのガンダムマイスター（自称）、ヴァイス・グランセニック！」

ロウ・コウタ「出たァァァァァァァ！！」

ヴァイス「突然だが、コウタ！お前を抹殺する！！」

コウタ「はああ！？何でだよ！？」

ヴァイス「お前はアルフ（豊満タイプ）とフェイト（幼女タイプ）にフラグを立ててるそうじゃねぇか！！俺はなぁ…複数の女にフラグ立てる奴が許せねぇんだよ！！」

１５０ガーベラストレートとオクスタンランチャーを構える。

コウタ「何だその兵器は！？どっから出した！？」

ヴァイス「監督提督から頂いたモノだ」

コウタ「作者ァァァ！！何てモン送りつけたんだ！？だが、上等だ！祭りと喧嘩は江戸の華！表に出ろ！」

ヴァイス「馬鹿野郎っ、もう出てんだよ。ここは海鳴ビーチだ」

コウタ「そうだったのか！？ってか、今の季節さぶしくね！？」

ヴァイス「そして、俺たちはミッドチルダから出張してきたんだよ！」

コウタ「そんな設定だったのか！？ご苦労さまァ！！」

ヴァイス「もう時間がねぇ…大人しく殺されなァ！！」

コウタ「上等だァ！！」

薫「あはは、楽しそうだね（笑）さて…もうお別れの時間が近付いてきたよ」

ロウ「はえーなッ！！」

薫「だって書くスペース少ないし、ヴァイス兄ちゃんケンカ売るし」

ロウ「グダグダだな」

薫「それでは最後に！オリキャラを送ってくれた読者の皆さん、ありがとうございました！意外と多くて選抜になっちゃいますがご了承ください！…ということで、今回のゲスト―ロウ兄ちゃんとコウタ兄ちゃんでした～！ありがとうございました～！」

コウタ「ちくしょう！！負けたァァァァァ！！」

薫・ロウ「負けてるし！！」

監督提督さん、ありがとうございました！

其之十五・七：歩んだ二人　後編

午後9時　訓練場。

空間シミュレーターが起動されていない訓練場で、私は端末のキーボードを黙々と打っていた。

いつまでも落ち込んではいられない。ティアナたちのために、訓練メニューを考えなくちゃね…。

…だけど、これほどティアナたちの事を思っている自分がいたのに、何でティアナにあんな酷い事をしたの…何で話し合わなかったの…。

バカだ、私…。

「なのは」

名前を呼ばれて私は振り向くと、私の暴挙を止めてくれた人―紅麗さんが立っていた。

◇

「ティアナが目を覚ましてな、スバルと一緒にオフィスに謝りに来ていた」

紅麗さんは私と一緒に隊舎へ歩きながら伝える。

「なのはは訓練場にいるから、明日話せと伝えた」

「うん、ありがと…」

私は、いつの間にか紅麗さんに対して敬語で話さなかったことに気付いた。
きっと、午後にあったあのやり取りがきっかけだね…。
紅麗さんは私を叱ったけど…私は逆に嬉しかった。
あの時の紅麗さんは…？お兄ちゃん？みたいだった。
私には一人の兄がいるけれど…紅麗さんは私のお兄ちゃんより、お兄ちゃんらしかった。

「でも、ごめんね。監督不行届きで…フェイトちゃんやライトニングの二人まで巻き込んじゃって…」

「ああ、まったくだ」

「フォ、フォローしてくれないんだね…」

申し訳なそうに言う私に、紅麗さんは一切フォローせずに正直に返してきた。
紅麗さんの言葉がグサリッとハートに突き刺さるが、自分にも非が

あるからすぐに受け入れる。
それに中途半端な事は言わず、正直に言葉にするところが、紅麗さんの良い所だ。

「ティアナとスバル…どんな感じだった？」

私は不安げに尋ねる。
予想はついているのだが、それでも聞きたかった。

「スバルはともかく…ティアナは何だか納得がいかない顔をしていた。…二人より薫の方が怒っているぞ？あいつは普段優しいから怒りの沸点は低いが、一度怒るとなかなか静まらん」

「そっか…まぁ、当然だよね」
「ああ。お前の教導の真実を知っていないからな…理由がなければ納得もいかない―当たり前の事だ」

「あ、あの、紅麗…」

私は立ち止まりながら呼び止め、紅麗も立ち止まる。
さん付けをしなかったのは、多分兄に相談するような気持ちが私の胸に溢れていたかもしれない。

「紅麗に…話すよ。私の―教導の意味」

私は紅麗を真っ直ぐ見据え、話し始めた。

◇

「…そうか」

紅麗は小さく呟いた。
驚いているような、悲しんでいるような―彼はそんな表情を浮かべていた。

「こんなふうに…ティアナたちに話せればよかった」

私は自嘲げな笑みを浮かべた。
こんなふうに話していれば、あんな事は起こらなかった。
私も、ティアナも、皆も…嫌な思いをせずに済んだのに。
私は泣き出したくなるのを必死に抑えながら続ける。

「私…敵だったフェイトちゃんやヴィータちゃんたちに話し合いたいって…無駄だとわかってもずっと言ってた。？話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきっとある？―私がフェイトちゃんに言った言葉だったんだよ。昔の私はそう言ったのに、その気持ちを大事にしていたのに…紅麗に言われるまで、忘れちゃってた…」

そう言った後、私は紅麗に笑顔を向けた。
泣き出したい自分の気持ちを悟られないように、作り笑いをする。
「明日、ちゃんと話すよ…フォワードの皆と」
「……」
私の顔を黙って見つめていた紅麗はそうか…とまた小さく呟いた。
その時、機動六課隊舎全体にけたたましい警報が鳴り響いた。
◇
東部海上に航空タイプのガジェット?型が現れ、旋回飛行を続けているとのことだ。
付近にレリックの反応もないし、海上施設も船もない場所だ—フェイトちゃんは敵の狙いは機動六課のデータ収集だと推測した。
私も同じ意見だ。
だったら、なるべくこちらの情報を渡さずに今までと同じやり方で撃破する—それが今回の作戦だ。
そして、私たちは今、出撃のためにヘリポートにいた。
「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」
私はフォワードたちに告げた。

「皆はロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

薫くんたちは返事をするが、ティアナだけは一歩遅れて返事をした。

「……」

私はティアナの姿を悲しげに見つめた。
まだ…思い詰めているんだね。
ティアナにも問題があるんだけど、大きな原因はこの私だ。
他人任せにして、話し合う気持ちを忘れてしまった私が、ティアナを悲しませてしまったんだ。

「…ッ…」

だけど、私はこれからティアナをさらに追い詰める事を告げなくちゃいけない。
それは誰から見ても最善な事なんだけど、今のティアナはそう思わないだろう。
私は少し躊躇うように告げた。

「…それから、ティアナは出動待機から外れとこうか」

私の言葉にフォワードたちは驚愕を浮かべた。
だけど、紅麗は当然といった顔をしていた。

「その方がいいな、そうしとけ」

ヴィータちゃんも同意する。

「体調も魔力もベストじゃないだろうし―」

「言うことを利かない奴は、使えないってことですか…？」

私の言葉を遮ったティアナの言葉は冷たい怒気を含んでいた。

「……」

ティアナの言葉に対し、私は呆れた溜め息をついた。

「自分で言っててわからない？　当たり前のことだよ、それ」

命令や指示はちゃんと聞く―それは当たり前の事だ。
いくら実力があっても、命令や指示を聞かなくちゃ周りに迷惑がかかる。
例外も少なからずあるが、ティアナの場合周りに迷惑しかかけていないじゃないか。
だけど、ティアナはそれをわかっていない様子だった。

「現場での指示や命令は聞いてます！教導だってちゃんとサボらずにやってます！」

口答えをするティアナにヴィータちゃんが歩み寄るが、私は手で制する。

「あたしは、なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない！」

違う…。

違うよ、ティアナ…。

ティアナにだって、誰にも負けない才能や実力があるのに…。

「少しくらい、無茶したって！　死ぬ気でやらなきゃ、強くなんてなれないじゃないですかッ！！」

その瞬間、シグナムさんがティアナに向けて拳を振りかぶった。私はそれを止めようとするが、間に合わない。
しかし、それは届かなかった。
いや、いつの間にかシグナムさんの横に立っていた紅麗がその拳を止めてくれていたのだ。
私は安堵の息を吐いた。

「…ティアナ、話はそれだけか？」

紅麗は表情を見せぬようにうつ向きながら、ティアナに淡々とした口調で問いかける。

「え…？」

「答えだ」

紅麗は手の甲でティアナの頬を打ち、ティアナは膝をついた。

「あ、兄者っ！！」

「拳で殴るよりマシだ」

血相を変えて咎めてくる薫くんを紅麗は淡々と返す。

「…早くヘリへ乗り込め、時間の無駄だ」

紅麗はティアナを一瞥もせずに、静かな口調で言う。
私は小さく頷き、ちゃんと話し合おうと決意しながらヘリへ乗り込んだ。

◇

滞りなくガジェットを撃墜し終えた私たちはヘリで隊舎へ戻ると、紅麗が一人出迎えてくれた。

「紅麗…」

「なのは。今すぐロビーに行って、ティアナたちに全て話してこい」

紅麗は私に短くそう伝えると、返事を待たずに「訓練場を借りるぞ」と言って訓練場に向かって行った。
わざわざ話し合いの場を設けてくれたのかな？
紅麗の気遣いに小さく微笑みながら、私は隊舎のロビーへ向かって行った。

◇

私がロビーに足を踏み入れると、沈鬱な表情を浮かべるティアナたちがソファーに座っていた。
やがて、私に気付いたティアナたちはソファーから立ち上がり、私に「お疲れさまです」と言って敬礼した。だけど、その表情は相変わらず暗かった。
私はティアナたちを安心させるように微笑み、ソファーに座るよう促す。
そして、ティアナが座るのを確認すると、私もソファーに腰掛ける。

「…それじゃあ、どこから話そうか…」

私はティアナたちに?私の教導の意味?を話そうしたが、一旦言葉を止めた。
…どうせなら、?映像?を見てもらった方がいいかな。
私にとっては辛いし、ティアナたちから見ても辛くなる映像かもしれない。だけど、わかってもらうために、話すより見てもらった方がいい。
そう判断した私はシャーリーを呼んで、私の昔の頃の映像を流してもらった。(余談だけど、シャーリーが何故か?何か?に怯えてたみたいだけど、気のせいかな?)

◇

映像が終わるとともに私が話し終えると、ティアナたちは悲しげな表情を浮かべていた。
重ねてきた無茶がどんな惨事を招くのか、わかってくれたようだ。
だけど、ティアナが無茶した原因は私にもある。
だから、私は、

「全部話そうとしないで…酷いことして…ごめんね、ティアナ」

と、謝った。すると、ティアナはまさか謝られるとは思っていなかったらしく、驚きの声をあげた。

「ええ!?　そ、そんな酷いことなんてないです！　あたしが、悪かったんですからっ！」

ティアナは、自分が悪い事を主張する。すると、それに乗っかるように薫くんも声をあげた。

「オレも、何も知らずに怒鳴っちゃった…ごめんっ」

薫くんも自分が悪いと主張するが、それを否定するように首を振った。

「ううん…これも全部、ティアナの気持ちをわかっていながら、話

し合いもしなかった私が悪いの。薫くんだって…私の方が頭に血が上ってやり過ぎちゃったんだから、薫くんが怒るのは当たり前だよ。だから、二人とも謝らせて…ごめんね」

「……」

「……」

まだ自分が悪いと思っているんだろう、ティアナと薫くんは納得いかない顔をして返事を返さなかった。

二人とも…優しいな…。

私は二人の優しさに嬉しく思いながら、小さくため息をついた。

「…じゃあ、おあいこってことで。それなら、いいでしょ？」

私は微笑みながらそう言うと、ティアナと薫くんは僅かに躊躇い様子を見せると、小さく頷いた。

そして、私は今更ながらティアナに話したかった事、伝えたかった事を話し始めた。

「あのね…ティアナは自分の事を凡人で、射撃と幻術しかできないっていうけど…それ、間違ってるからね。ティアナも他の皆も、今はまだ原石の状態。デコボコだらけだし、本当の価値もわかりずら

いけど…だけど、磨いていくうちにどんどん輝く部分が見えていく」

エリオは、スピード。

キャロは、優しい支援魔法。

スバルは、クロスレンジの爆発力。

薫くんは、均等に研鑽されたオールレンジ。

紅麗は……防御魔法以外ハーペキだね。規格外だね。

そして、持ち前の知恵と統率力でフォワードたちを指揮するティアナは射撃と幻術で仲間を守ってどんな状況でも切り抜ける。

そんなチームが理想形でゆっくりだけど、その形に近付いていっている。

「模擬戦でさ、自分で受けてみて気付かなかった？　ティアナの射撃魔法って、ちゃんと使えばあんなに避けにくくて当たると痛いんだよ？」

私に言われて、ティアナははっとした。

「一番魅力的なところを蔑ろにして…慌てて他の事をやろうとするから。だからあぶなっかしくなっちゃうんだよって…教えたかったんだけど」

私はティアナに?クロスミラージュ?を起動させるように促すと、ティアナは言われた通りに?クロスミラージュ?を起動させ、私はそれを手に取る。

「まぁ、でもティアナが考えた事―間違ってはいないんだよね。…システムリミッター・テストモード―リリース。」

『Ｙｅｓ.』

私はティアナに?クロスミラージュ?を手渡す。

「命令してみて、モード2って」

ティアナは少し戸惑った様子で?クロスミラージュ?を構えながら言葉を紡ぐ。

「モード、2」

『Ｓｅｔ　ｕｐ. Ｄａｇｇｅｒ－Ｍｏｄｅ.』

?クロスミラージュ?が橙色に光ると、銃口とグリップからそれぞれ魔力刃が伸び、一つに連結された。

「これ…」

「ティアナは執務官志望だもんね。ここを出て執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし将来を考えて、用意はしてたんだ」

私がそう言い終えると、ティアナはうつ向きながら嗚咽を漏らし始めた。

…ああ…私のせいで、こんなに泣いている。

話しておけば、ティアナはこんなふうに泣かなかったのに。

私は泣いているティアナを抱き寄せながら言葉を続ける。

「クロスもロングも…もう少ししたら教えようと思ってた、だけど出動は今すぐにでもあるかもしれないでしょ？　だから、もう使いこなせている武器をもっともっと確実なものにしてあげたかった。私の教導地味だから、あんまり成果が出てないように感じて苦しかったんだよね…ごめんね」

ティアナは泣きながら、ごめんなさい…ごめんなさい…と何度も謝る。

私はそんなティアナをあやすように、ずっと抱き締め続けた。

◇

ティアナたちと話し終えた後、私は隊舎の外へ出て、海に面した場所に佇んでいた。

「……」

ちゃんとティアナとわかり合えたはずなのに、何だか気持ちが晴れなかった。

きっと私は、話し合わなかった事への後悔と、話し合おうとする気持ちを忘れてしまった事への悔しさが、私の心にまだ強く残っているんだろう。

…これぱっかりは、一日や一週間じゃ気が晴れないね。

下手したら、一生それを引きずって生きていくかもしれない。

だけど、当然の代償かもしれない。

無茶を繰り返し、大怪我を負った8年前のように。

それに…自分はいつも通りにしていればいい。

周りの人たちに気持ちを悟られないように作り笑いをしながら?大丈夫だよ?って言えばいい。

「そう…いつも通りだよ…」

私が小さく呟いたその時だった。

「なのはっ！！」

私の心臓が驚きでびくりと跳ね上がった。
だけど、それはいきなり大声で名前を呼ばれただけではない。？この声？が、私の大好きな人のものだったからだ。

私はすぐに振り向くと、私が恋心を抱く男性―ユーノくんがいた。
ユーノくんは何だか走ってきたらしく、膝に手をつきながら息を切らしている。

「ユ、ユーノくん、どうしたの！？」

私は驚きの声をあげ、とりあえずすぐにユーノくんを座らせて休ませてあげる。

「はあっ…はあっ…」

休んだ事でユーノくんの息が整え始め、私は再び尋ねる。

「いったいどうしたの、ユーノくん？　ここに何か用があったの？」

「え、えっと…何だっけ…紅麗、さん、だっけ？　あの黒い髪の男

性局員の人…」

…え？

何で、そこで紅麗が出てくるんだろうか？

そして、次にユーノくんの口から出た言葉が、私をさらに驚かせた。

「1時間ぐらい、前だったかな…機動六課から無限書庫に連絡がきて…その紅麗って人に『なのはに、すぐに会いに行け』って言われて…」

「えええええぇぇぇ～！！？」

意味がわからない。

何で私に会えって言ったの？

しかも、1時間前っていうと…私たちが出撃した時だ。

それにしても、

「ユーノくんも、ユーノくんだよっ！　何で紅麗に言われてだけで、ここに来ちゃったの？　ユーノくんだって、忙しいでしょ？」

ユーノくんの職場の一つである無限書庫は人手不足だし、ユーノくんはそこの司書長であるから余計に忙しいはずだ。

なのに、何ですぐに了承して来たんだろうか。

「ぼ、僕だって…最初は忙しいから明日の朝にって言ったん、だけど…」

……何か、私、予想ついちゃったんですけど…。

「お、脅されて…ここに来たってこと…？」

「うん…人間ってすごいもんでさ…恐怖心さえあれば、走りだけでここまで来れるもんだね…」

ユーノくんはハハハ…と、力無く笑う。
何か褒めるべきなのか哀れむべきなのか、わからないよ。

「…それに、紅麗さんが言ってた」

ユーノくんは相変わらず疲れた表情をしていたが、その口調が真剣なものになっていた。

「？なのはが、泣いている？って…」

「！！？」

私の心臓が驚愕で跳ね上がる。
―図星、だ。
実際泣いていないのだが、私は泣き出したい気持ちを抑えながら紅麗に作り笑いを見せていた。
きっと、その事を言ってるんだね…。
感付かれ、ちゃったな…。
でも…。

「…何言ってるの？　私、全然泣いてないよ」

私は嘘半分・本当半分の言葉を紡いだ。
いつもの作り笑いをしながら。

「……」

私の笑顔をじっと見つめていたユーノくんはうつ向きながら小さく溜め息をついた。

「もう…その笑顔はやめてよ、なのは…」

ユーノくんの横顔は怒っているような、悲しんでいるような顔をしていた。そして、とても苦しそうに見えた。

「ここ数年あまり会えなかったけど…僕たちは幼い頃、ずっと一緒だった…だから、何度も見てきた？無理をしている笑顔？なんて簡単に見破れるよ…」

「ち、違うよ、ユーノくん…私、無理してないよ…笑顔だって、普通だよ？」

私はまた嘘をついてしまった。
疑われるのをわかっていながら、見破られるのをわかっていながら嘘をついた。
迷惑をかけたくない、迷惑をかけたくないと何度も叫ぶもう一人の私がそう訴えかけている。
だから、嘘をついた。
昔から嘘をついてきた。
これからも嘘をつき続けてしまう。

「なのは」

ユーノくんは私を真っ直ぐに見つめながら私の名前を呼ぶ。
ユーノくんのこんな表情を見るのは、久しぶりかもしれない。
いや、もしかしたら初めて見たかもしれない。
どちらにしろ、今のユーノくんはとても頼もしく見えた。

「僕だけでもいいから…なのはの気持ちを正直に聞かせてよ、素直

になってよ」

ユーノくんの優しい言葉が、ユーノくんの悲しい顔が…私の、？大好きな人に甘えたい？という感情の抑制がだんだん壊されていく。だけど？甘えたくない？感情の方が僅かに勝っていた。

「何、で…そんな事、言うの？　ユーノくんがそんなに、必死になって…私に関わろうとする事、ないじゃない…理由もないじゃない」

…ああ、私は最低だ。
甘えたくないばっかりに、酷い事を言ってしまった。

「理由なら、あるよ」

だけど、ユーノくんは力強く応えてくれた。

「僕は…なのはの事が好きだからだよ」

大好きな人から…一番言われたかった言葉だった。

私の胸がドキドキ高鳴っていく。
顔が火照っていくのを感じる。
甘えたい感情の抑制が壊れていく。

「僕は！　なのはの事を…誰よりも、誰よりも大好きなんだよ！！」

ユーノくんは力強い声で訴えかくる。

「だから、なのはを助けたいだよ！！」

逞しい声で訴えかける。

「？大好きな娘を支えてあげたい？―理由なんて、それで十分じゃないかっ！！」

「…ッ…」

抑制が…完全に壊れた。
我慢していた涙も、我慢していた感情も…全部かなぐり捨てた。

「ユーノくんッ！！」

私は行動の全てを感情に任せ、ユーノくんに抱きついた。
ユーノくんもしっかりと私を受け止める。

「ユーノくんっ…ユーノ、くんっ…うっ…ううっ…うあああああっ！
うあああああんっ！」

私は、彼の胸の中で泣いた。
今まで我慢してきた感情が涙となって流れ、嗚咽となって漏れた。

ああ…ユーノくんの腕の中って…こんなに逞しくて、暖かかったんだ…。
もっと早くこうすればよかった…。
私って…弱気な行動ばかりとって…いつも後悔ばかりだ…。
だけど、今は…後悔よりも喜びと安心感でいっぱいだった…。

◇

「本当は…もっと早く言いたかった」

ユーノくんは私を抱き止めたまま、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「だんだんお互い忙しくなったから、すれ違いを意識しちゃって言えなかった…というのもあるんだけど、一番の理由は…僕じゃ、なのはとは釣り合わないって自信なかったんだよ」

「そんな事ないよっ。だいたい…恋愛に釣り合いなんて関係ないよ」

私はユーノくんの言葉を否定した。
私がユーノくんの事が大好きで、ユーノくんも私の事が大好き―それだけあれば十分。

「私だって、すれ違いを心配して告白しなかったけど…ユーノくんのおかげで、そんな気持ちなくなったんだよ」

「…そっか」

ユーノくんは嬉しそうに呟いた。それからしばらくした後、驚きの声をあげた。

「えええええ!?　な、なのは…い、今ッ！」

「…ふぇ？　ああ、うん…私もユーノくんの事、ずっと前から大好きなんだよ？　えへへっ」

まだ自分の気持ちを伝えていなかった事を思い出し、私は悪戯っぽく笑う。

「そ、そう…。じゃ、じゃあ、さ…僕と、付き合って、くれない…かな…？」

ユーノくんはモジモジしながら告白した。
私の事を好きだと言った時はあんなに男らしいなって思ったのに。
だけど、そのギャップが逆に可愛く思えてきて、そんなに悪い気分にはならない。
私は笑顔でユーノくんの告白に応える。

「うん、いいよっ。結婚を前提にしてくれたらっ」

「けっ、結婚!!?」

ユーノくんは顔を真っ赤にした。
私も、自分で言っててかなり恥ずかしい…。
きっと私の顔も赤くなっているに違いない。

「だって…ずっとずっと…私の事、支えてほしいもん」

私は期待を込めた目で、ユーノくんを見上げる。

この幸せは、絶対に無くしたくない。
ずっとユーノくんに甘えられたいし、ずっとユーノくんを甘えていたい。
これが、私がユーノくんに対するワガママだ。

「…そっか。うん…わかった」
ユーノくんは赤くなっている顔を、さらに赤らめながら頷いてくれ

た。
何だか私まで照れくさくなってくる。
すると、私はある事を思い出した。

「…あ、そうだ。ユーノくん、無限書庫とかはもういいの？」

私はそう言うと、ユーノくんも思い出したようで血相を変えた。

「あ、あああっ！　そうだ！　今日中にやらなきゃいけない事があったんだった！！」

「じゃ、じゃあ早く帰らなきゃじゃん！　帰りはどうするの！？
フェイトちゃんに送ってもらう！？」

「い、いや、いいよっ！　もう遅いし、タクシーにでも乗って帰るよっ！」

「…そっか。じゃあ…またね、ユーノくん。おやすみなさい」

私は少し名残惜しげに言葉を紡いだ。…顔を赤くしながら。

「うんっ！なのはも、おやすみ―」

ユーノくんがそう言い終わった直後、私は大好きな彼の唇にキスをした。
自分の激しい心臓の鼓動と、恥ずかしさに顔が熱くなるのを感じな

がら、私はゆっくりと唇を放した。

「あ、会える時間は、少ないけど…メールとか電話とか毎日してね？　私…結構寂しがり屋なんだから…」

「――――」

ユーノくんは呆然とした顔で私の顔を見つめていたが、やがてこくっこくっと頷き、私に背を向けた次の瞬間、ありえない速度で走り去っていった。

メチャクチャ速くて、数秒でもう姿が見えなくなっちゃった。

「ふふっ」

私は思わず、小さく吹き出した。

ユーノくんの可愛くて可笑しい行動を目の当たりにしただけじゃない。

ようやく勇気を出して、大好きな人と結ばれたからだ。

私は星が輝く夜空を見上げた。

私の心は―とても晴れやかだった。

そして、その時に浮かべた笑顔は―作り笑いじゃなく、心の底から本当の笑顔だった。

おまけシーン1。
無限書庫―。
なのはたちが出撃した同時刻。

「ユーノ、機動六課から通信が来てるよ～」

「ああ、わかった。こっちの端末に繋げて」

ユーノはフェイトの使い魔―アルフにそう言った後、端末を開き、目の前にモニターが映し出される。
そのモニターの中にいたのは、ユーノとは面識がない黒髪の青年だった。

『ユーノ・スクライヤ司書長ですね？　私は機動六課隊員の紅麗と申します』

「あ、はい…。あの、どのようなご用件で？」

ユーノは用件を尋ねつつも、ある程度予想していた。
また調べものの依頼だろう。
やっぱり忙しさはなかなか抜け出せない…。

だが、次に紅麗の口から語らわれた言葉は、ユーノにとってかなり予想外なものだった。

『あまり時間がないので手短に言います、?今すぐになのはに会ってあげてください?』

「えええ!?」

本当に手短だった。
しかも、今すぐに会えってどういうことだ?
まさか、

「な、なのはに何かあったんですか!!?」

ユーノは声を荒げた。
もしかして、昔みたいな…また大怪我を!?

『…まぁ、何かあったと言えばあったのですが…。…ああ、別に大怪我をしたとかではありません。ただ、彼女は…泣いているだけです』

いまいち要領あのなのはが泣いているってことは…ただ事ではないとユーノは

「…わかりました。明日の朝にそちらの隊舎に伺います。今夜は調べものが―」

『駄目です。今すぐにお願いします』

紅麗は聞く耳持たずと言わんばかりに、ユーノを促す。
しかし、無限書庫司書長として、ユーノも譲らなかった。

「いや、ですけどっ。こっちも忙し―」

『さっさとしろ…通信越しに灰にされたいか…？』

（こ、怖えぇえぇぇえええええぇぇえええええッ！！！）

ユーノは心の中でシャウトした。

―さっきまでの口調と言葉使いが全然違うじゃないか！！

―というか、通信越しに灰にするって、本当っぽい嘘はやめてッ！！

そして、ユーノは自分が気付かぬうちに機動六課の隊舎へ全速力で走っていた。

おまけシーン・2。

機動六課　隊舎―。

なのはが隊舎の中に戻ると、黒髪の青年―紅麗が足を組みながらソファーに腰掛けているのが見えた。

「…ようやく戻ってきた」

紅麗はなのはの姿を見つけると、そう呟いてソファーから立ち上がった。

どうやらずっとなのはを待っていたようだ。

「あ、あの、紅麗―」

なのははユーノの事でお礼を言おうとしたが、紅麗はそれを制する。

「なのは。突然だが、早朝の訓練はお前の代わりに私がやることになった。訓練内容はクロスレンジ。ティアナやキャロにも、最低限な身のこなしを覚えさせねばならんからな」

「か、かなり突然だね…と、というかダメだよ！　いきなりそんな勝手な事っ！」

「お前…近頃、無理をしているだろう？　訓練メニューを考えたり、モニターでスバルたちの陣形をチェックしたりと…少しでも休んだ方が良いぞ」

「い、いや…でも…」

尚口答えするなのはに対し、紅麗は首を振りながら溜め息をつく。

「何とも往生際が悪いじゃじゃ馬娘―いや？邪々悪魔娘？だな」

「ねぇ？紅麗？何で言い直したの？ねぇ？なに、邪々悪魔娘って？ねぇ？悪意しか感じないんだけど？ねぇ？何か言ってよ？ねぇ？ねぇ？ねぇ？」

なのはは黒いオーラを放ちながら紅麗を問い詰めるが、彼は全く畏縮せず、指を弾き鳴らした。

すると、いつスタンバイしていたのか、物陰からフェイトとヴィータがぬっと現れた。妙な組み合わせだが、二人に共通している事は、なのはの無理に悩まされている事だった。
それだけでなく、おまけに召喚されたヴァイス。
そして、何故か巻き込まれたザフィーラ。
どんな組み合わせだ？

「あ、あの…紅麗？　なに、これ？」

なのはは嫌な予感をしながら召喚されたフェイトたちに指を差す。
そして、彼女の予想通り、紅麗は無表情にこう答えた。

「？お話？」

彼の言葉通り、四人と一匹の？お話？が始まった。

３０分経過―。

「だから、お前は悪魔と呼ばれ―」

「私がどれだけ心配し―」

「だいたい、おめーはいっつも―」

「高町、厳しい事を言うが―」
「機動戦士は、ＭＳなんだよっ！」

一時間経過―。

「だからお前は魔王と呼―」
「なのはが無理をしてる姿が―」
「あたしもあの日、気付―」
「高町、己を偽るな―」
「機動戦士は、人型兵器なんだよっ！！」

2時間経過―。

「だから、お前は魔神―」
「私、もう嫌だ―」
「あたしはお前を守るけど―」
「高町、己を解き放て―」

「機動戦士は…機械なんだよォォォォォォォォォォォ！！！」

3時間経過―。

「「「「「わかった（か）？」」」」」

「ご、ごめんなさい～…」

四人と一匹の？お話？を聞き終えたとき、なのはは正座してながら泣いていた。

「おら、なのはァ！　U．C．0079年に何が起こったか言ってみろォ！！？」

ヴァイス・グランセニック―機動戦士に関してだけは、松岡修造のように熱くなれる男。

「？一年戦争？ですっ！！」

なのはは正座しながらしっかりと答える。

「そうだァ！！　そして？一年戦争？で活躍したアムロ・レイは何という異名で呼ばれていたァ！！？」

「？連邦の白い悪魔？ですっ！！」

「そうだァァァ！！　そして、なのはァ！　お前は敵からも味方からも何て呼ばれているゥ！！？」

「？管理局の白い悪魔？ですっ！！―って、何言わせるのッ！！？」

「ごめんなさいッ！！！」

なのはの？ディバイン・バスター？をくらいながらヴァイスは悲鳴をあげるように謝罪した。

其之十六：兄の敬称

今日の早朝も、機動六課のフォワードたちは相変わらず早朝の訓練に励んでいる。
しかし、その時の教官はなのはではなく、紅麗だった。
毎日新人たちの指導をしたり、訓練のメニューを考えたりと―少々無理をしているなのはを少しでも休ませようと、昨夜紅麗が早朝の訓練の指導は自分がやると提案した。
訓練内容はクロスレンジ。前衛タイプであるスバルとエリオはもちろんで、ティアナとキャロは後衛タイプだが最低限な身のこなしを覚えておく必要があった。
しかし、なのはは初め、紅麗の提案を断った。
別に訓練内容に文句があるわけじゃないし、紅麗を信用していないわけでもないが、自分のせいで迷惑をかけてしまうことに罪悪感を覚えていたからだ。
強情に譲らないなのはに対し、何とも往生際が悪いじゃじゃ馬娘―いや、邪々悪魔娘と思いながら、紅麗はなのはに断られた際、なのはの無理に悩まされているフェイトとヴィータを召喚した。
さらに、おまけに召喚されたヴァイス。
そして、何故か巻き込まれたザフィーラ。

四人と一匹のネチネチとした？お話（内一人は機動戦士について熱く語った）？によって、なのはは涙ながらに紅麗の提案を受け入れた。受け入れるしかなかった。

そんなことがあり、今日の早朝の訓練場になのははいない（ちなみにフェイトは、全力全開でなのはの見張りをしている）。

なのはが新人たちに対する教導の意味―それを知ったスバルたちは一段と訓練に熱を入れていた。
そして、ティアナは紅麗から?特別授業?として、分身の幻術―『別魅』を教わっていた。
今朝に教わったばかりなのだが、ティアナは早くも分身を発生させることができた。
幻術の魔法を取得している故か、ティアナは幻術に対しての才能があったのだ。
紅麗曰く「私より筋が良い」とのことだった。

そして、早朝の訓練が終わり、全員が集合した時だった。

「皆、今朝もご苦労だった。いつも以上に張り切ってくれて、教える側としてはとても嬉しい」

紅麗はティアナたちに言葉を紡いだ。彼の口調と表情には大した感情は見られないが、どこか楽しそうに見えた。

「私から言うことはいつも通りだが…皆、確実に実力を伸ばしていっている。後は、努力と経験値を積んでいけばいい。…特にティアナは大きく化けるかもしれん。私が教えた幻術に対して、もう成果を出している」

戦闘に関しての評価が厳しいあの紅麗に褒められるのは珍しい事だった。それを嫌でも熟知しているティアナは自然と顔を綻ばせると、

「ありがとうございます、？兄さん？っ！」

爆弾発言をした。

「「「「えええええええええええええ～っ！！！？」」」」

全員は一斉にティアナを見ながら驚きの声をあげた。紅麗は大袈裟なリアクションはしなかったが、何とも言えない表情でティアナを見つめる。

「あっ…！　こ、これは違うんですっ！　間違えたんですっ！」

自分の間違いに気付いたティアナは顔を赤くしながら必死に弁明すると、それに同意したのは薫だった。

「あ～、先生のことを間違えて『お母さん』って呼ぶやつでしょ？　オレのクラスにもいた！　『先輩』って呼んだヤツもいたよ～」

薫はからから笑いながらまったくフォローになってないことを言う。しかし、パニックに陥っているティアナはそれをツッコム余裕がなかった。

「そ、そうよ！…そうですっ！　今のはただ、間違えただけですっ！」

「あっれ～？　ティアちゃ～ん、果たしてそれは本心なのかな～？」

スバルは口に手を当てながらニヤニヤ笑うと、ティアナは凄んだ目で彼女を睨みつける。

「…何が言いたいのよ、馬鹿スバル」

しかし、スバルは全く畏縮せずにニヤニヤ笑い続けながらワザとらしくそっぽを向く。

「べっつに～？　何かあまりにも嬉しそうに言ったな～って♪」

「そりゃあ、嬉しいに決まってるじゃない！？兄さん？に褒められて嬉しくないはずが―って、いやあああああッ！！！」

また爆弾発言した事に気付いた瞬間、ティアナは頭を抱えながら悲鳴をあげた。

「ほらほら～、紅麗さんのことを？兄さん？って呼びたくて仕方ないんでしょ～？」

「うるさいうるさいうるさぁぁぁ～い！！」

ティアナは顔を真っ赤にしながら、からかってくるスバルをぽかぽか叩く。
とても和やかな光景だった。
そこへ、思わぬ第三者が現れた。

「んっ！　確かに、紅麗を？兄さん？って呼ぶ気持ちはわかるでっ！」

「や、八神部隊長っ！？」

「いつの間に！？」

我等が機動六課部隊長―八神はやてが何故かここにいた。
疑問に思うエリオとキャロの言葉を無視し、はやては話を進める。

「私から見てもなぁ、紅麗は？兄？っちゅう印象が強いんや（というか声）。例えば朽木―」

「それは最後まで付き合わなければ駄目なのか？」

顔の影を作る紅麗の言葉に答えず、はやてはさくさく話を進める。

「しっかし…ティアナの声で紅麗のことを？お父さん？って呼ばへんのは釈然せぇへんけど…まっ？兄さん？でもええやろ」

「はいは～い！　はやて姉ちゃ～ん、何でそんなに上から目線なの～？」

挙手しながら笑顔でツッコむ薫を、はやてはやっぱり無視する。

「と、言うわけで―ティアナ！　紅麗に？兄さん？って呼ばせてくださいって言うんや！」

「い、いやですよっ！　そんな恥ずかしいッ！」

「…お前たち、せめて念話で話せ」

本人の前で、それも大声でそんな話をされたら何とも言えない気持ちになる。
もう帰ってもいいだろうかと紅麗が思い始めている一方、はやては躊躇っているティアナを必死に説得し続けている。

「誰もが通る道なんや！　二次元でも三次元でも、世の中にはなぁ！　紅麗のことを？兄さん？って呼びたくても呼べない人たちがいっぱいいるんや　！なのに、少しでも可能性があるのに、それを躊躇っているティアナは！　彼らに対する冒涜そのものやっ！！」

ツッコミどころが満載な説得だ。
しかも、そんな説得に対し、逡巡しながらも納得されてしまったテ

ィアナは紅麗に顔を向けた。

「あ、あの…紅麗、さん…」

ティアナは顔を赤くし、上目使いで紅麗をチラチラ見ながら言葉を紡ぎ始めた。

―何だ…この甘々しい空気は…？

―これから愛の告白をするような感じになってないか…？

紅麗は異様な空気を感じながらそう思う中、ティアナは勇気を振り絞って声を発した。

「く、紅麗さんのことをっ！　？紅麗兄さん？って呼ばせてくださいっ！」

ティアナは顔を真っ赤にしながら告白すると、はやてとスバルがにやにやしながら激しく野次を飛ばしてきた。

―灰にしていいだろうか…？

はやてとスバルに対して無償に殺意を湧き上がらせる紅麗だったが、？寛大な精神？にて、それは自重しよう。

そして、紅麗はティアナの言葉に答え始める。

「…しかし、お前にはティーダという兄が―」

「もちろん、ティーダ兄さんはティーダ兄さんです。…でも、紅麗さんを―?もう一人の兄?として接していきたいんです。ダメ…でしょうか?」

ティアナが寂しげな眼差しで紅麗を見上げた。

その後ろでスバルが「ティア、そのデレ卑怯すぎるよっ。チートだよ～っ!」と不満そうに言い、はやては「ツンデレはステータスや、希少価値やっ!」と意味不明な事を言っていた。

「……」

紅麗は溜め息をついた。

どうして自分の周りには、?兄?と呼ぶ奴が多くいるんだろうか?

烈火は……まぁ、異母でも当然血は繋がっているか。

薫は……兄弟になろうと言ったからな。

クローン女は……アレは、自分のＤＮＡから作られたから血は繋がっているのか?

しかし、血も繋がっていないのに、相手から?兄?と呼びたいと言ってきた者は初めてだ。

何故だ?

?兄?と呼びたくなる特殊過ぎるフェロモンでも発生しているのだ

ろうか？
だが、

「…そう呼びたいのなら、好きにしろ」

特に断る理由もないし、悪い気分はしない。
紅麗は案外すぐに了承した。それに対し、ティアナは顔を赤くしながら照れくさげに俯いた。

「あ、ありがとう、ございます…」

「良かったなぁ！　良かったなぁ、ティアナ！」

はやてはティアナを抱き締めながら何故か感激の涙を流す。
そんな光景を横目で見ながら、薫はふとエリオとキャロを見ると、二人は物欲しそうな顔で紅麗を見つめていた。

「…あれっ？　エリオとキャロも、兄者のことを、？兄さん？って呼びたい？」

薫は悪戯っぽい笑みで指摘すると、エリオたちはびくりっと身体を震わせた。
どうやら図星のようだ。
肉親のいない二人にとって、厳しくも優しい紅麗という存在は兄としての憧れがあるのだろう。

薫も二人の気持ちがよくわかり、無邪気に笑うと、隊舎に帰り始めた紅麗の背中に向けて大声を張り上げた。

「兄者ーっ！　エリオとキャロも?兄さん?って呼びたいってさーっ！」

「「か、薫さんっ」」

恥ずかしくて躊躇っていた言葉を言われてエリオとキャロは羞恥しながら慌ててしまう。
薫の言葉に対し紅麗はまたか…と小さく呟くと、「好きにしろ」と短く答えた。
すると、エリオは「兄さん…」、キャロは「お兄ちゃん…」と嬉しそうに呟いた。

そして、その光景を目の当たりにし、兄貴キャラとして嫉妬したヴァイスはツインバスターライフルを構えた。
俺は…後何回嫉妬すればいい…?

それまで、紅麗たちの様子を見つめていたスバルはにんまりと笑うと、子犬のように紅麗に駆け寄った。

「じゃあ、あたしも…紅麗さんのことを?紅麗兄?って呼んでいいですかっ?」

「だが、断る。」

即答で断られた。

「え〝ええぇぇえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～！！？」

スバルは目を大きく見開きながら、やかましく悲鳴をあげた。

「な、何でですか！？　ティア（ツンデレ）は良くて、あたし（デレデレ）はダメなんですか！？　エリオ（ショタ）とキャロ（ロリ）は良くて、あたし（デレデレ）はダメなんですかッ！！？」

納得がいかないとばかりにスバルは猛烈に抗議する。

「これほど残酷な差別はないですよっ！！　あたしの何が悪いんですかっ！？」

「そんなところだ」

「そんなところだ」

「そんなところってどんなところですか！？」

「そんなところだ」

「そんなところってどんなところですか！！？」

「そんなところだ」

「そんなところってどんなところですか、紅麗兄！！？」

「さりげなく呼んで定着できると思うたか。そんなところが駄目なのだ」

「そんなところってどんなところですか！？」

「そんなところだ」

「そんなところってどんなところですか！！？」

「そんなところだ」

「そんなところってどんなとこ―」

「黙　れ　。そ　し　て　、灰　に　な　れ」

「ッ！！！？」

紅麗の酷い一言で、スバルは飼い主に捨てられた子犬のようなショックを受け、泣きながらティアナにもたれかかった。

「ティア～…紅麗さんがデレてくれない～…むしろ、ツンツンからザクザクになってるよ～…」

泣きついてくるスバルに対し、ティアナは「はいはい」と軽くあしらう。

そして、スバルの言葉に「ザク…？」と反応したヴァイスに応える者は、誰もいなかった。

◇

機動六課・食堂―。

「う～ん…紅麗さん、いつになったらデレ期に入るのかなぁ…」

ティアナと同じテーブルに着いているスバルはパンを咀嚼しながら独り言を呟いていると、ティアナは辟易の溜め息をついた。

「多分一生来ないと思うわよ。あんたのそんなところがダメなのよ」

「そんなところってどんなところっ！？」

「しっつけーのよッ！！…なに、ちょっと嬉しそうに笑ってんのよ！？　そのセリフ気に入ってるでしょッ！！」

一方、別のテーブルにて紅麗とフェイトが会話をしながら朝食を採っていると―

「フェイトさん、兄さんっ。一緒に食べてもいいでしょうか？」

「フェイトさん、お兄ちゃんっ。わたしもいいですか？」

エリオとキャロが顔を綻ばせながらそう言った。

「――――」

フェイトは顔に影を作りながら硬直し、手に持っていたパンがポロリと落ちた。そして、彼女は直ぐ様、両手で紅麗の肩を強く掴む。

「ちょっと紅麗！！　どういうことなの！！？　エリオとキャロに何したの！？　脅迫！？　裏金！？　洗脳！？　返答次第じゃ怒るよ！！？　ああっ、怒るともさァ！！！」

フェイトは問い詰めながら、紅麗を激しく揺さぶる。

紅麗の脳内―震度7を観測。

「落ち着け、ちゃんと説明する」

フェイトに揺さぶられながら紅麗は冷静に事情を話し始めた。

説明中♪説明中♪

「―なるほど、そうだったんだ」

事情を理解したフェイトは、紅麗の肩から手を放した。

だが、少し納得がいかないところがあった。

自分は保護者として、紅麗よりずっと長く―何年もエリオたちと接してきた。

だが、今になっても彼らから?フェイトさん?と呼ばれたり、敬語を話されたりと―どこか他人行儀みたいな感じになっていた。

何故だろうか?

自分は、エリオたちに優しく接してきた。

それは自分と同じ悲しき境遇を味わった二人に対する同情ではない、昔の自分のような子供たちに手を差し伸べ、悲しい気持ちをただ分け合いたいのだ。

だから、優しく接してきた。

しかし、?兄?と呼ばれている紅麗を見ていると嫉妬に似た劣等感を覚えてしまう。

長く過ごしてきた時間と、自分がエリオたちに対する優しさを覆すほどに、紅麗と自分の間にどんな差があるんだろうか?

『…嫉妬してるのか?』

紅麗からの突然の念話にフェイトの思案が中断された。

『？自分は二人の保護者で、長く接してきたのに―紅麗は二人から兄と呼ばれているのに、自分に対して他人行儀じゃないか？―そんな風に思い、嫉妬しているのか？』

『う、うん…』

フェイトは紅麗の指摘に少し驚きながらも正直に肯定すると、彼は小さく首を振った。

『勘違いしていると思うが…エリオとキャロはただタイミングを窺っていた事と、恥ずかしさを覚えていただけだと思うぞ』

紅麗はフェイトにそう告げると、エリオとキャロに顔を向けた。

「二人とも、前々から思っていたが…フェイトはお前たちの保護者なのだから、いつまでも？フェイトさん？と呼んだり、敬語を使ったりするのはおかしいのではないか？　血は繋がってなくとも、お前たちは家族だ―そろそろ言葉使いをそれらしくした方がいいと思うぞ」

「……」

「……」

紅麗の説得が通じたのか、エリオとキャロはゆっくりとフェイトに顔を向ける。そして、顔を赤くしながら、

「姉さん…」

「お姉ちゃん…」

「はうっ！！！」

フェイトは顔を真っ赤にしながら胸を押さえた。

―顔を赤くしながらそんな恥ずかしそうに言われたら萌えないはずがないじゃない！

―特にキャロはポイントが高いッ！　できればエリオにも？お姉ちゃん？と呼ばれたかったが、十分っ！！

―ご　飯、三　杯　は　い　け　ま　すッ！！！

一方、エリオとキャロもまたフェイトを？姉？と呼んだことに嬉しさを覚えていた。

保護責任者として引き取ってもらい、優しく接してくれて、二人にとってフェイトは姉のような存在だ。

しかし、それと同時に不幸から救い出してくれた？恩人？のような存在でもある。

だからなのか、二人はフェイトを？フェイトさん？と呼び、敬語で

話すようになった。
その毎日が続き、それが定着してフェイトを?姉?と呼ぶことに、今更の躊躇いと羞恥を覚えてしまっていた。
しかし、紅麗を通してそれは破られた。
真っ直ぐに接してくる紅麗が、フェイトを?姉?と呼ぶきっかけを作ってくれた。
今まで胸に抱いていた、しこりのようなものが消え、エリオとキャロは嬉しそうに微笑んだ次の瞬間、

『は〜い、全員注目〜!』

それは、かなり突然だった。
マイクを握ったはやてが食堂にいる局員たちに言葉を紡ぎ、局員たちは何事かと思いながらはやてに視線を向ける。

『実は今日!　嬉しいようで、残酷なお話がありまっす!』

ちなみにはやてが使っているマイクには隊舎中に配置されている放送スピーカーと繋がっている。つまり、隊舎中に彼女の言葉が届くというわけだ。

『今日の午後、聖王教会から一人の優秀な騎士が派遣されてきます!』

局員たちはざわざわと騒ぎ出す。

あまりにも突然な話だと呟く人間もおれば、どんな人かと囁き合っている者もいる。

「かなり唐突だねっ」

『色々忙しかったから言う時間がなかったんや』

薫の無邪気な指摘をはやては短く返す。ちなみに、ただ言い忘れていただけ。

『その人は強くて、カッコ良くて、優しい人やけど…女性局員も、ホモ局員も、彼に手を出したらあかんでっ！！！』

はやては嫌な汗をかきながら真摯な口調で警告した。しかし、本人は真剣かもしれないが、言葉の内容はふざけているとしか思えない。そもそも、機動六課にホモ局員がいるのだろうか？

『さ、さもないと…さもない、と…』

はやては？何か？を恐れるように身体を震わせながら、息を吸う。そして、言いたくない事を局員たちに告げた。

『わ、私が拘束制御術式を開放してっ！　あんたらを遠き地にて闇

に沈めなあかんっ！！』

いったい何に怯えているんだろうか？　リインも怯えている様子で、全身を痙攣させながらと悲鳴をあげている。
局員たちはただただ疑問に思うばかりだ。

『とにかくやっ！　その騎士に手を出したらあかんでっ！　絶対や！！　絶対やからな！？　さもないと、私が殺されるからぁあぁぁあああぁぁあぁぁ～！！！』

そして、色々な謎を残して、機動六課部隊長のお話が終了した。

◇

午後1時になろうとしていた時刻に機動六課の隊舎の前に一台のタクシーが止まった。
ドアが開き、そこからアタッシュケースを持った金髪の青年が降り立った。

「ここが機動六課、か…」

青年は目の前に聳え立つ隊舎を見つめながら小さく呟く。

青年は機動六課から支給された制服を一切の乱れなく着込んでいる

が、両手全体に巻いた包帯と、首から下げた血の色のような赤黒い大きな十字架のネックレスが強い違和感を感じられずにはいられなかった。

「では、行くか…？夜の伯爵（ナイト・カウント）？」

『Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ．』

青年―蛭湖の言葉に、十字架型のインテリジェントデバイス―？ナイト・カウント？は慇懃に応えた。

そして、蛭湖は隊舎へ歩んでいった瞬間、隊舎の入り口からタイミング良く訓練服を着た紅麗と薫が現れた。

「「「……？」」」

三人の目が合う。

「「「――」」」

紅麗と薫は蛭湖を見つめ、蛭湖は紅麗と薫を見つめる。

「「「え…？」」」

三人の呟きが重なった。

「？死四天？の、蛭湖か…？」

紅麗が呟く。

「？麗？の紅麗と？火影？の小金井薫か…？」

蛭湖も呟く。

「「「え…？」」」

三人の呟きがまた重なった。

おまけシーン（元ネタ：ＣＬＡＮＮＡＤ）

これは、機動六課の整備室にてヴァイスがリインに言ったちょっとした一言が原因で起こった出来事である。

リイン
「リイン無器用じゃないです！　ヴァイスさんより遥かに器用で機敏だと思います！」

ヴァイス
「言いましたねぇ…じゃあ、早口言葉で勝負してみますか？」

リイン
「受けて立ちます！」

二人は真正面に向き直り、最初に仕掛けたのはヴァイスだった。

ヴァイス
「東京特許許可局！東京特許許可局！東京特許許可局！…ふぅ」

成功できたことに、ガッツポーズを取るヴァイス。
しかし、完璧だったはずなのにリインは納得がいかない顔をした。

リイン
「…最後の方、ジャブローになってました」

ヴァイス
「んな噛み方するかッ！！…リイン曹長、結構コスいんすね」

リイン
「コスい？」

ヴァイス

「ずるいって意味っすよ」

リイン
「リインずるくないです！！　とてもフェアです！　近所でも、あの子はとてもフェアだとよく言われます！」

ヴァイス
「どんな近所っすか…」

リイン
「行きますっ」

呆れるヴァイスの言葉を無視し、リインはいっぱい息を吸い込み、ヴァイスと同じ早口言葉を叫んだ。

リイン
「きょうきょうきょっきょっきょきゃきょく！　こっこかこかっこっこけっこっこっこっこっこっこっ…ふふ～ん、どうですか？」

ヴァイス
「『ニール、やってやったぜ』みたいなドヤ顔して言うな！！」

リイン
「ヴァイスさん、とても失礼です」

ヴァイス
「失礼なのはそっちでしょっ？」

薫
「おっす、二人とも！…あれ？珍しい組み合わせだね。まぁ、仲良さそうだからいいけど♪」

薫の言葉に対し、心外とばかりにリインとヴァイスは否定する。

リイン
「全っ然！仲良くないです！」

ヴァイス
「そうだ！今もケンカの真っ最中だ！」

リインはつぶらな瞳でヴァイスたちを睨みつける。可愛らしく。

リイン
「…ヴァイスさんも薫くんも、リインを困らせるようなことをしない方がいいです。さもないと…恐ろしいことが起こりますっ」

薫
「へぇ～、何が起きるか教えてよ～♪」

薫は悪戯っぽく笑いながらリインの顔面をつつく。

リイン
「うっ…あうっ…あうっ、あうっ…」

薫
「ほらほら、何が起きるって～？」

注：小金井　薫―好きな女の子をイジメるタイプではない。
一方、とうとう堪忍袋の緒を切らしたリインは薫たちから離れると指をくわえ、

リイン
「ふぅぅぅ～…」

指笛のつもりだろうか。息を吹く音しか聞こえなかった。
それを見て、薫はリインを馬鹿にしたように肩を竦めた次の瞬間、

ドドドドドドドドドドドドッ！！

震動を感じ、何かの足音が聞こえてきた。
しかも、震動も足元もだんだん激しくなり、徐々にこっちに近付いてくるではないか。

薫
「……？」

リイン親衛隊
「「「「「「リインたんを守れぇぇぇぇぇぇぇ～！！！」」」」」」

リインファンの男性局員たち（そういう趣味のおっきいお友達）が波のような勢いで走ってきた。

薫
「ひぃいいいいいいぃ〜っ！！！　ヴァイス兄ちゃん、助けてぇえええぇえええええぇ〜！！！！」

無数の人間たちで作られた怒濤の波に飲み込まれた薫はそのままリインのおっきいお友達とともに、どこかへ連れて行かれてしまった。

ヴァイス
「…ど、どこに連れてったんすか？」

リイン
「わかりませんっ！」

其之十六：兄の敬称（後書き）

どうも、恵慈です！

早速ですが、次回作のオリキャラ募集についての事で、思っていたより多くの応募あったので、ここらで〆切らせていただきます。
本当にたくさんの応募ありがとうございます！設定が少し変わったり、あまりにも多くて選抜になっちゃいますけど、良い作品になるように活用させていただきます！
ありがとうございましたっ！

其之十七：血戦（前書き）

空の彼方が地獄の元でも構わない。
ただ翼を羽搏かせ、あの不死鳥に我が爪を以て斬り裂ければ、それでいい。

其之十七：血戦

思わぬ再会を果たした紅麗と薫と蛭湖は、部隊長室のソファーに座っていた。
蛭湖が部隊長のはやてに挨拶するついでに、紅麗たちとも話し合いたかったのだ。
はやてはどこぞの家政婦のように、せっせと三人にお茶を出している。

「それで…いったいどうやってこの世界へ来たのだ？？時空流離？を使ったわけではないのだろう？」

最初に口を開いたのは紅麗だった。
蛭湖は首肯し、ミッドチルダに転移された経緯を話し始めた。

？あの戦い？が終わって数週間が経ち、平凡で平和な毎日が続いていたある日、蛭湖は裏武闘殺陣という武闘大会に参加していた。
最近まで、殺しや賭博が許された非合法的な大会だったのだが、主催者―森光蘭が亡き今、殺しご法度なクリーンな大会へと激変した。
蛭湖はその大会に参加し、決勝戦まで勝ち進んだのだ。
だが、決勝戦前に控え室で待機していると―突如、強烈な地震と発光に襲われた。
そして、それが収まった頃には見知らぬ土地―聖王教会の敷地内にいたそうだ。

蛭湖の説明を聞いた後、紅麗と薫は少し訝しげに思った。
転移の経緯があまりにも謎で、納得し難いものだったからだ。

しかし、現に蛭湖はここにいる。
転移の経緯についてはわからない事だらけだが、無理矢理にでも納得するしかないだろう。

「しかし…火影、麗、裏麗―三つ巴の勢力の者が、今こうして？仲間？―という関係になってしまうとはな」

蛭湖が呟く。
もし、敵対していた頃だったならば、複雑な心境だったろう。しかし、現在はその三つの勢力は解散され、敵対する理由も意味もない。しかし、どこか新鮮な気持ちを覚えていた。

「…まぁ、三人とも敵愾心とか持っとるわけやないから安心したわ」

はやては安堵しながら微笑む。
機動六課にも聖王教会にもヤンデレがいるし、紅麗とシグナムは相変わらず仲悪いから、これ以上ストレスの問題を増やしたくなかったのが、はやての正直な気持ちだ。

「はい。よろしくお願いします、八神部隊長」

蛭湖は起立をし、慇懃を込めてはやてに敬礼する。
その動作の一つ一つがきっちりと叩き込まれていた。しかし、はやては彼の慇懃な態度を見て、苦笑を浮かべた。

「ああ、そんなに固くならんでええよ。私の部隊は他と違うて、上下関係とか厳しくせえへんから」

軽く手を振りながら朗らかに言ったはやてだったが、急にその表情が青ざめた。

「あああああああッ！！　で、でも！　私の事を友達以上に接したらあかんで！！？　私、殺されるからァ！！！」

はやては？ここにいない何か？に怯え、顔を青ざめたまま自分の肩を強く抱く。

『…彼女はいったいどうしたのだ？』

蛭湖は、軽く痙攣しているはやてを不審げに見ながら紅麗に念話を送る。

『いつもこんな感じだ。真剣な態度を取るこいつを見たら、偽物だと思え』

紅麗は無感情に断言した。その言葉には、彼が今までのはやてを見

て、どんな思いを抱いているか想像に難くない色を帯びていた。
彼の酷い言葉に、蛭湖は曖昧な相槌を打ったその時だった。

『―蛭湖、待っていたぞ』

低い女の声が念話で伝えられた。
声の正体がすぐにわかった蛭湖は、珍しく辟易の溜め息をつきながら肩を落とした。

『…お前か。そういえば、ここの副隊長だったな』

『ああ、早く訓練場へ来い。？新しく入った騎士の実力を模擬戦で見せてやる？と教官と教え子を丸め込んだ。…早く来い。2分以内に来い。遅刻したら模擬戦の時間を三倍に増やすぞ』

『…ああ、わかった。すぐに行く』

念話を終わらせた蛭湖は深い溜め息をついた。

「…誰かと念話してたの？」

蛭湖の様子を見て、察した薫が尋ねてきた。蛭湖は苦笑しながら頷く。

「ああ、バトルマ―」

「「「ああー」」」

蛭湖が言い終わない内に、三人は納得の声をあげた。

◇

訓練場―。

荒廃したビルの群れを再現した空間シミュレーターの中で、騎士甲冑を纏ったバトルマニア―シグナムが戦闘狂の笑みを浮かべながら佇んでいた。

ビルの屋上には、なのはやフェイト、ヴィータ、フォワードたちがシグナムの模擬戦相手である機動六課に新しく入った騎士を待っていた。

屋上のドアが開き、そこから紅麗と薫とはやての三人が入ってきた。

「あっ、？お兄ちゃん？！」

紅麗を見てそう言ったのは、なのはだった。

「なのは…お　前　も　か」

紅麗は顔に影を作りながら呟くと、なのはは頬を染めながら理由を話す。

「だって、紅麗って…私のお兄ちゃんより？お兄ちゃん？らしくて…呼んでも、いいでしょ？」

なのはの兄―恭也が聞いたら確実に落ち込む発言だった。

「…さて、蛭湖たちとの模擬戦を見ようか」

紅麗はなのはの言葉を無視して、対峙する蛭湖とシグナムを見下ろす。

「久しぶりの模擬戦だ、楽しくやろう、蛭湖」

「久しぶりって四日前にしたばかりじゃないか」

嬉しそうに語るシグナムに、蛭湖はため息混じりに淡々と返す。

四日前―シグナムが聖王教会に訪れ、用事を済ませるついでに魔法を使った戦いの経験値を積ませるために、蛭湖を模擬戦に誘ったの

だが―蛭湖の研鑽された戦闘能力と、戦いを神聖なものと考える思想に惹かれ、蛭湖にがっちりと目をつけた。
そして、その日に何十回も模擬戦をした楽しい思い出がある（蛭湖にとっては苦い思い出）。

「ふっ…私にとっては１００年の地獄のように思えたぞ」

「長生きし過ぎて、時間に対する感覚まで狂ったか」

しかし、蛭湖もシグナムの事を嫌いではない。
彼女もまた騎士として戦いを神聖なものと考えているのだ、そこに親近感を覚えていた。だが、幾度も行った戦いを通して、彼女から感じた？翳り？は何だろうか？
蛭湖はそう思いながら、首から下げた血色の十字架を掴んだ。

「？ナイト・カウント？―セット・アップ」

『Ｓｅｔ　ｕｐ.』

十字架が発した赤い光が蛭湖の身体を包み込む。
光が消えると―蛭湖はダークスーツを着込み、その上に背中に赤い十字架を刺繍された漆黒のロングコートを羽織っていた。
これが蛭湖のバリアジャケットだ。
そして、彼の手には血の色の刃を備えたナイフ―？ナイト・カウント？ナイフ・フォームが握られていた。
そして、次の瞬間、蛭湖は一時的に殺傷設定にした？ナイト・カウント？で、何の躊躇いもなく、左手に突き刺した。

当然、貫通された左手からおびただしい量の血が溢れ出る。
彼の奇行にシグナムと紅麗と薫は表情を変えなかったが、それ以外の者たちは驚愕しながら顔を青ざめさせた。キャロに至っては目に涙を浮かべている。

「あの～…あの人、何やってるんですか？」

エリオは蛭湖に指を差しながら当たり前の質問をする。しかし、それに答える薫の口調はあまりにも軽いものだった。

「ああ、アレはあの人にとってはいつも通りだから」

「いや…いつも通りって…」

当然そんな簡単で短い言葉で納得できるはずがなかった。

「まぁ、見ればわかるよ」

お互いの準備が整ったところで、蛭湖とシグナムは己の武器を構えながら互いに相手を見つめる。
模擬戦で何度も戦い合った二人には他者からの戦闘の合図など必要ない。
彼らは目配せだけを合図とし、戦闘を開始した。
まず最初に仕掛けたのは蛭湖だった。蛭湖の左掌から血が噴き出し、それが瞬時に凝固させる。

そして、蛭湖は血塊となったそれを強靭な握力を以て粉砕する。

「血塊弾ッ！！」

蛭湖は砕いた血塊を投擲した。
放たれた血塊は弾丸のように一直線にシグナムに迫るが、彼女は蛭湖へ疾走しながら左手から発生させた障壁でそれを防いでいく。
そして、血塊の弾丸を防ぎながら駆け抜けたシグナムはすでに己の間合いに入り、長剣を両手で握り締めながら蛭湖に向けて袈裟懸けに振り下ろした。それに対し、蛭湖は左手の甲を差し出してきた。
包帯が巻かれただけの左手だけで防ごうというのか？
だが、次に響いたのは斬り裂いた音ではなく、堅固の物同士がぶつかり合う鋭い音だった。
シグナムは長剣を通して？硬い感触？を覚えながら、差し出された蛭湖の左手の甲を直視してみると、そこには鋼鉄並の硬度を持つ血塊があった。
長剣が接触する寸前、蛭湖は左手の甲から出血させた血液を、盾の形に凝固させ、それでシグナムの斬撃を防いだのだ。

◇

「ち、血を使って攻撃したり、固めて防ぐって…どんな魔法だよ…」

何百年も何百人と戦ってきたヴィータでさえ、蛭湖の異様な戦い方を見て、驚いているような呆れているような呟きを漏らした。
その横で、紅麗は納得したように独り言を呟いた。

「…なるほど。蛭湖の魔法は、？あの魔導具？の能力をそのまま引き継いでいるようだな」

生体魔導具―？血種（けっしゅ）？。それが、蛭湖が以前使っていた魔導具の名だ。

その能力は、術者の血液の凝固作用・運搬作用・循環作用の三つの作用を意のままに操り、己の血を武器とする事ができる。

そして？血種？によって体内に巡る血液は？魔血？と呼ばれ、それは常人の血液の濃度と量を凌駕している。

しかし、全魔導具が滅びた現在でも、その能力が引き継がれているようだ。

それは―蛭湖の体内に存在するリンカーコアが？血種？の代わりとなっているからだ。

差し詰め、蛭湖が持つ魔力変換資質は？血液？と言えよう。

「血塊球ッ！！」

蛭湖は左手全体を覆うように球体の形に血液を凝固させ、それでシグナムに正拳を放つ。

蛭湖の腕力と凝固血液の硬度を合わせれば、容易く骨折させられる一撃だ。

シグナムは直ぐ様剣の平で防ぐと、耳障りな轟音が響く。

まるで鋼鉄を容易く粉砕しそうな音だったが、？レヴァンティン？にはヒビすら入っていなかった。だが、得物を手放したくなるような重たい衝撃がシグナムの両手にびりびりと伝わっていく。

蛭湖はさらに追撃しようとした次の瞬間、意識が朦朧とし、目眩が起き始めた。

―使い過ぎたか…！

蛭湖は心中で悪態をつく。

リンカーコアによって蛭湖の体内に流れる血液の量は常人よりも多いが、使い続ければ当然貧血症を起こす。

だが、血液が不足したらすぐに補給すればいい。

蛭湖はシグナムから距離を離しながら懐に手を伸ばす。

そこから取り出したのは、血液が入った１０ｃｍほどのバイアルだ。

見た感じバイアルに入っている血液の量は数ｍｌしかないと思われるが、その血液には魔法措置が施されており、１Ｌ分に圧縮されてあるのだ。

蛭湖は左手でバイアルを握り潰すとガラスが割れる破砕音が響く。

溢れ出した血液が傷口に入り込み、血管に浸透する。

そして？運搬作用？によって輸血された血液は瞬時に蛭湖の全身を駆け巡り、すぐに目眩が治まる。

その時には、蛭湖はすでに戦闘体勢に戻っていた。

「？別魅？ッ！！」

次の瞬間、蛭湖の姿が複数に分裂した。

◇

「あ、あの技って…！」

分裂した蛭湖を見てティアナだけが驚きの声をあげた。
あれは、紅麗から教わっている分身の幻術ではないか！
五人にまで分裂した蛭湖は、それぞれ違うアクションでシグナムに攻撃を仕掛けた。
一人の蛭湖が左掌に伸ばした血液の刃で斬りかかる。

一人の蛭湖が素手で殴りかかる。

一人の蛭湖が血塊の弾丸を飛ばす。

一人の蛭湖が血塊のグローブで殴りかかる。

そして、最後の蛭湖が赤刃サーベルで斬りかかった。

複数の蛭湖を前にしてシグナムは怯むどころか、逆に戦闘狂の笑みを浮かべながら迎え撃つ。
彼女は渾身の横薙ぎの一閃で、血液の刃を持った蛭湖と素手の蛭湖を一気に斬り払う。
消滅する二人の蛭湖。
そして、その後ろに隠れていた蛭湖が血塊の左手を振るう。
シグナムは刺突で迎撃する。
長い切っ先が蛭湖の胸に突き刺さり、その姿が消滅する。
もう幻術とわかっていると言わんばかりに、刺突を放った時にはシグナムは別の蛭湖を見ていた。

『Ｓｃｈｌａｎｇｅ－Ｆｏｒｍ』

長剣は連結刃となり、血塊弾を放った蛭湖に振りかぶった。
連結刃は数発の血塊弾を掻い潜り、飛来してきた血塊弾に対しシグナムが障壁で防ぐのと、連結刃が蛭湖を斬り裂きのがほぼ同時だった。
またしても消滅する蛭湖。
これまで、全てが幻術。
つまり。

シグナムは連結刃を長剣に戻し、赤刃サーベルで斬りかかってきた蛭湖の斬撃を受け止めた。
鳴り響く金属音。

「まさか全ての別魅がやられるとは思わなかったぞ…」

「あまり私を舐めないでもらおうか…」

鍔迫り合いながら世間話をするような口調で会話をする蛭湖とシグナム。
そして、二人は距離を離す。
蛭湖は右手で赤刃サーベルを握り締め、左手から血液の刃を造り、二つの赤き刃を以てシグナムに斬りかかった。
シグナムは両手で長剣を握り直し、蛭湖に肉薄する。
夜のサーベルと炎の魔剣が衝突する。
しかし、片手でサーベルを握る蛭湖と両手で長剣を握るシグナム―力比べならば、シグナムの方が有利だった。
蛭湖は押し負ける前に、血液の刃を突き出す。
しかし、シグナムは柄から片手を放し、そこに填められた手甲で防

いだ。
蛭湖は直ぐ様、大きくバックステップをする。そして、疾走しながら赤刃サーベルと血液の刃で×字を描くように勢いを乗せた斬撃を放った次の瞬間、

「紫電…一閃」

静かな呟き。

響く破壊音。

何かが落ちる音。

蛭湖は片膝をついた。
彼の周りには、サーベルの刃と血液の刃が割れたガラスのように散らばっている。
そして、彼のバリアジャケットは袈裟懸けに斬り裂かれている。
一方、シグナムは炎を纏う長剣を下段に構えていた。

あまりにも一瞬の出来事だったので、なのはたちは蛭湖がシグナムに斬り裂かれたのだと気付くまで数瞬遅れた。
しかし、紅麗とフェイトだけは認識できていた。
エリオはかろうじて、といったところだ。

「…負けてしまったな」

潔い呟きを漏らしながら同様の笑みを浮かべ、蛭湖は立ち上がる。
長剣に裂かれた肌には血がにじているが、彼は平気だった。
傷口を増やすためにあえて相手の攻撃をくらう男だ。このくらい無傷に等しい。

―しかし…先程の一撃は、本当に凄まじかったな…。

蛭湖はシグナムの剣の腕に、心の底から感嘆した。
剣技だけなら、以前戦った水の剣士―水鏡凍季也と互角かそれ以上のものだ。
相違点としては水鏡は繊細さ、シグナムは豪快さが他と超絶している。
そして、シグナムの最後の一撃は、己の長所を生かした素晴らしい一撃だった。
デバイスの性能と魔力付加だけでなく、斬撃を最大限に発揮させる正しい体勢で剣を振るった。
武器や魔法だけでなく、己の研鑽された技術を以てこそ―得物ごと相手の身体を斬り裂く事ができた。
敗北したにも関わらず何故か笑みを浮かべる蛭湖。そして、戦いの終わりに敬意を込めた握手しようとシグナムに手を伸ばした次の瞬間、

「さぁ…続きをやろうか」

残酷な一言だった。

「な　ん　だ　と…？」

蛭湖は手を伸ばしたまま、顔に影を作りながら聞き返す。

「まさか一回だけで満足したのか？　だがな、私は余裕で続けられるぞ。それに、お前の剣技はまだまだ温い。私が模擬戦を通して叩き込んでやろう」

シグナムはそう言うと、地面に落ちている刃を失った？ナイト・カウント？を、差し出されている蛭湖の手に握らせた。

「嬉しいだろう？」

「――――」

戦　闘　狂　地　獄　の　始　ま　り　だ　っ　た。

◇

―深夜　機動六課・女子寮の一室。

茶色のショートカットの少女―八神はやてはベッドの中でゆっくりと目を覚ました。夜がもたらす暗い空間の中で彼女は見慣れた天井を一瞥し、何気なく視線を横にズラすと、同じベッドの中で眠るヴィータの寝顔があった。可愛いなと思いながら、はやてはさらに視線とズラし、机に置かれた時計を見やる。

デジタル時計は午前2時を示していた。

起床するまでまだ余裕がある時間帯だ。

はやては再び瞼を閉じる。

「……」

だが、すぐ瞼が開いた。

―どうも寝付けられんなぁ…。

はやては苛立つように辟易しながら、身体の向きを変え、もう一度瞼を閉じる。だが、眠りが一向にやってこない。

しっかりと睡眠を取らないとお肌にも悪いし、仕事に支障が出てしまう。

しかし、いくら強くそう思っても眠気がやってくるわけがない。

はやては溜め息をつき、ヴィータを起こさないようにベッドから下りる。

そして、パジャマの上にカーディガンを羽織り、眠くなるまで探検しようと隊舎の外へ出た。

真夜中の時間だから当然外は暗いのだが、夜空に浮かぶ二つの月が夜の世界をぼんやりと照らしていた。

夜風が吹く。

「ううっ…」

まだ夏を迎えていない季節だ。
風は冷たく、はやては身震いする。
そして、彼女はふと夜空を見上げる。

無限に広がる夜の空。

止まっているんじゃないかと思うくらいにゆっくりと流れる雲。

夜に光を与える二つの月。

閃々と輝く星。

まるで八神家みたいやと、夜天（はやて）の主は頬を緩ませる。

夜空が自分。

それを護るように覆う雲が、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの守護騎士（ヴォルケンリッター）。

そして、今吹く夜風がリイン。当然、リインの場合は冷たい風ではなく、暖かい風なのだが。

夜の空を身近な人物に例えて一人楽しむはやてはふと首を傾げた。

月と星は誰だろうか？
月も星も、夜空に存在しなくちゃいけない。

―そうや！

月が、これから現れる（多分）自分の恋人。星々は、その子供達だ！

しかし、月となる男性が自分の前に現れるだろうか？

―ロッサ。う～ん…仲は良いんやけど、お兄ちゃんって感じやな。

―師匠。いや、おじさんやん。しかも、ギンガとスバルのお母さんになるやん。おっきい子供やなぁ（直接的な意味と別の意味で）

―グリフィスくん。真面目過ぎやから嫌やわ。
もっと話してて楽しい人がええ。

―ヴァイスくん。話は合うし、話してて楽しいなぁ。
今までガンダムに興味なかったんやけど、彼から借りたＤＶＤ－ＢＯＸを見てすぐにハマったわ。
先入観で物事を判断したらあかんな。こんな素晴らしい作品を看過するんやから。
ってか、この世界にもガンダムがあったんやね。
神やな、ガンダムッ！！
今度スバルやカオリンとかにも見せたろ―あ、脱線脱線…
ヴァイスくんはそうやなぁ…友達みたいな感じやな。

二つの月を見上げながら思案していたはやてはふと一つの考えが浮かんだ。

二つの月＝二人の男性。

―ちょっ…三角関係！？　二人の男が私を取り合う！？　いやぁ、可愛さは罪やなぁ……ん？

頬を緩ませながら惚気るようにしていると、また別の考えが浮かんだ。

男1、女2の三角関係。

（マクロスみたいやな。って事は私が歌姫？　いや、それはフェイトちゃんやろ。歌上手やし（特にピクミン）……んんっ！？）

今度は不吉な考えが浮かんだ。

―マクロスみたいな三角関係。

―一人は私。

―歌姫であるフェイトちゃんがもう一人。

―フェイトちゃんは紅麗が好き。

―私も紅麗が好き（ツッコミ役として）。

―つまり。

―つまり。

（私、死亡フラグやんッ！！！）

はやては顔を歪ませながら心の中でシャウトした。

殺されるーッ！！
間違いなく殺されるーッ！！
ミッドチルダ症候群によって、大鎌を持ったフェイトちゃんが私を殺しに来るーッ！！（おまけシーンで一回殺された）
それに私が紅麗をコクったとして、紅麗は「私に灰にされたら愛してやろう」というヤンデレ発言を言いかねんッ！！
恋愛に命を賭けてたまるかいッ！！
二人でお幸せにーッ！！
最強で最凶でヤンデレなモンスターペアレント（比喩じゃない）になってくだせぇぇぇーッ！！！

歩きながら猛然と思案していたはやてはいつの間にか、隊舎の近くの小さな森林にいることに気付く。

「あ、ここまで歩いてもうた…戻ろ戻ろ」

はやてが踵を返そうとした次の瞬間、一つの音が彼女の鼓膜を小さく打った。
はやては足を止める。

そして、耳を澄ます。
風が吹く音ではなく、風を切るような音が何度も響いている。
何の音だろうか？
はやては熟思する。

―はっ！もしかして！

一つの予想が浮かんだ。

―濡れた雑巾を振り回して凍らせる遊び？

シュールな予想だった。

―まぁ、あんまり人に見られたくない遊びやし…この時間帯でこの場所でやるのも納得できるっ。

そこまでしてそんな下らない遊びをする人間の心情を納得も理解もできないが、はやては好奇心を原動力にその音がする方へ歩んでいく。
真夜中に響く風を切る音に不気味さを感じるが、はやての場合好奇心の方が勝っていた。

はやては歩を進め続ける。
だんだん近くなる音と、彼女が草を踏みしめる音だけが響く。

そして、はやてはその音の正体を見つけた。
しかし、はやてにとって予想外なものだった。

「シ、シグナム！？」

「…あ、主はやて！？」

そこには頼もしい騎士でもあり、自分の大切な家族の一人でもある―シグナムだった。

彼女は訓練服を着込み、長剣型デバイス―？レヴァンティン？で素振りをしていたのだ。

何十回、何百回振るったのだろうか？

彼女の顔や腕には水を浴びせられたように大量の汗が浮かんでおり、訓練服は汗を吸収して彼女の肢体にぴったりと張り付き、その魅惑的なボディラインを強調していた。

―…またデカくなったんとちゃうか…？

はやては真剣な目付きでシグナムの豊満な胸を凝視した。その瞳は嫉妬しているような、羨望しているような、いやらしい目付きだった。

だが、主にそんな目で見られている事すら気付かず、シグナムは近くに置いてあったタオルで顔の汗を拭く。

しかし、いくら拭いても火照った肌からすぐに汗が浮かんでいく。

「それで…主はやてはどうしてこんな時間に？」

「ん、何か目が冴えてなぁ…眠くなるまでお散歩や。…シグナムは鍛練か？」

「はい。私も眠れなくて…身体を動かそうと」

そう言うとシグナムはタオルを放り投げ、再び素振りを始めた。
はやてはそっかと呟き、草が生えた地面に腰を下ろす。
そして、黙々と剣を振るうシグナムをじっと見つめる。

「…強うなったなぁ、シグナム」

はやては嬉しそうに微笑みながら、シグナムと蛭湖が行った模擬戦の感想を言った。

「そう、ですか…？」

シグナムは嬉しいのか照れ臭いのか、火照りで赤くなった頬がさらに赤くなる。そして、すぐに表情を引き締める。

「…いつも以上に、鍛練に力を入れてますから」

「…紅麗の、影響？」

表情を曇らせたはやての口から、自然とその言葉から出た。
するとシグナムの剣の軌道が揺らいだ。それが図星である事を教えていた。

「はい…そう、ですね…」

シグナムはぎこちないが正直に肯定し、はやてはそっかと呟く。
しばらく二人は口を閉ざした。
夜風が吹く音。
虫の鳴き声。
剣を振るう音が沈黙の中に何度も響く。

「……」

やがて、沈黙していたはやては意を決した表情を浮かべながら、口を開いた。

「シグナムは…まだ紅麗の事を、？敵？だと思うとるん？」

はやては不安げに尋ねた。
？今後一切、喧嘩をしない？という名目で始めた模擬戦から、紅麗とシグナムは互いに相手を認識していないかのように言葉を交わさないし、目も合わせようとしない。
？顔を合わせればすぐに喧嘩？よりマシなのだが、それでも良い気分はしなかった。
？一度拳を交わし、相手を認め合い、仲良しになっておしまい？というドラマみたいな展開をはやては期待していたのだが、所詮ドラマはドラマ、現実は現実。
思うようにいかないのが現実だ。

はやての問い掛けに対し、シグナムは素振りをやめ、？レヴァンティン？を地面に突き刺した。

「正直…よくわかりません…」

シグナムは複雑な表情で、複雑な言葉を呟いた。

「？いつか我々を脅かす？という敵愾心を持つ気持ちもあり…？何故、泣いているのか？？と知りたいと思う気持ちもあります…」

「…？泣いてる？？」

はやては、シグナムの言葉の中にあった単語に反応する。

「はい…彼は？泣いています？…」

今度は悲しそうな顔をしながらそう言った。

シグナムは何百年も生き、何十人もの猛者たちと戦い、得物を交えてながらその心情を見てきた。

―金のため。

―護るため。

―殺しの快楽のため。

剣を通して様々な心情を見てきたシグナムだったが、泣きながら戦う者を見たのは初めてかもしれない。

何故、彼は泣いているのだ?

この世界に来る前、彼にいったい何があったのだろうか?

シグナムは彼の姿を見るたびにそう思っていた。

しかし、聞こうと思っても、何故か憚ってしまう。

それに、向こうは自分を避けている。

聞こうにも聞けず―そのまま日々が流れていった。

何だか、色々な気持ちが浮かび、自分の心が整理できなくなってきた。

敵愾心、疑問、嫌悪、哀れみ―それらが心の中に何度も渦巻き、自分は彼に対してどうしたいのか、彼をどう思っているのかわからなくなってくる。

だが。

一つだけ。

一つだけわかっている事がある。

「私は…奴の事を?好敵手?だと思っています」

シグナムは力強くそう言い放った。

紅麗は強い。

今まで斬り殺してきた猛者たちよりも。

なのはよりも。

フェイトよりも。

誰よりも。

誰よりも誰よりも、紅麗は強い。

まるで大空の高みに羽搏く不死鳥のような存在だ。

そして、竜である自分は彼に届かなかった。

飛翔のための翼が疲れ果て、敵を斬り裂くための爪が、あの不死鳥に届かなかった。

翼を引きちぎれ、鱗を砕かれ、大地へと墜ちながら不死鳥に見下ろされるような、敗北感を味わった。

しかし、それを超える歓喜と満足感を覚えたのも事実だ。

初めてだったのだ。あの激しい胸の高鳴りと、熱い高揚感は。

初めてだったのだ。これほどまでに超えたいと思える者と出会えた事が。

―超えたい！

絶対にあの男を超えたい。

その身に己の竜の爪を届かせ、食い込ませ、斬り裂き、大地へと叩き落としてやろうと強く強く思った。

だから、敗北したあの日から、紅麗を超えるための鍛練を毎日毎日積んでいる。

「…そっか」

シグナムの心からの言葉を聞き澄ましたはやてはそう呟いた。

――…失望しただろうか？

シグナムが不安げに思っていると、はやてはこう言った。

「それでもええ。それでもええよ、シグナム」

はやては微笑みながらシグナムの気持ちを肯定した。

「だって、今のシグナム…とっても楽しそうやもん」

「楽しそう、ですか…？」

シグナムは主の言葉を躊躇いがちに復唱する。

「んっ。楽しそうやで？　まるで、遊びをする子供のようや」

はやては微笑ましくそう言った。

老人たちと一緒にゲートボールをするヴィータのように。

散歩をするザフィーラのように。

料理という名の最凶最悪な殺人兵器を造り出すシャマルのように。

甘いものを嬉しそうな顔で頬張るリインのように。

今のシグナムはそれと全く同じだ。

はやての言葉に戸惑っていたシグナムだったが、しばらくしてその言葉を受け止めた。

楽しそう―確かにそうだ。

強者と戦うのも、鍛練を積むのも―自分にとっては趣味と言っていいほどに楽しい。

だが。

「ただ自己満足のためだけに力を磨く者は…いずれ、惨めに滅びます」

それは何百年もの経験から得た言葉だった。

己の血にまみれながら、敵の血にまみれながら武器を振るい—気が付けば自分が歩んできた道を振り返ると死体の山、周りを見渡すと誰もいない。

孤独になるのだ。

強さを得る代わりに、孤独になっていくのだ。

そして、最期は—孤独に、惨めに、滅びる。

シグナムはそうなった者を何人か見た事があった。

何とも美しい生き様で、何とも醜い死に様だった。

そして、シグナムはその道を歩もうとしている。

孤独になろうとも、惨めに死のうとも—その道を歩もうとしている。

?強さを磨け??強者を超えろ?と身体と本能が叫んでいるのだ。

もはや闘争の中毒者のようなものに成れ果てている。

そして、恐らく自分が紅麗を超えた時—達成感よりも虚しさを感じ、?壊れる?のだろう。

そして更なる強者を求め、敗北し、鍛練し、超え、壊れ、求める。

それが、無限に繰り返されるのかもしれない。

それが、戦闘狂の人格になってしまった自分の宿命かもしれない。

だが、受け入れる。

今はただ強さを磨く事と紅麗を超えたいという気持ちがいっぱいで、
それより先の事などに懸念する気持ちを持っていないからだ。

「―じゃあ、私たちの事を思い浮かべてや」

いつの間にか、シグナムの目の前に笑顔を浮かべるはやてがいた。

「シグナムが限界やと感じた時、自分の生き方に本気で悩んだ時―
私たちの事を思い浮かべてや」

シグナムは、主の言葉を理解できなかった。
それに何の意味があるんだろうか？
シグナムが問う前に、はやては言葉を紡ぐ。

「だって…騎士として誰かを護ろうとするシグナムは誰よりも強くて、誰よりも美しいんやから」

１０年前と変わらぬ無垢な笑顔でそう言った。
だが、戦闘狂（シグナム）には今いちぴんと来ない言葉だった。
そんな言葉で救われるはずがない。
だが、何故か聞き逃せない言葉でもあった。
脳裏にいつまでも反芻し、無意識に心の中に刻み込まれていく強い言葉。
―きっと、実感がないのは今だけかもしれない。

その時が来た瞬間から、実感を覚え、自分は救われるのかもしれない。

「…さっ、そろそろ帰ろか。さすがにもう眠らんと」

はやては笑顔のまま、シグナムに手を差しのべた。

「…はい、主はやて」

シグナムは小さく微笑みながらはやての手を取り、二人は手を繋ぎながら隊舎へと歩んでいった。

◇

―同時刻。

とある山岳地帯の崖の上に、複数のガジェットの残骸が転がっていた。

残骸はまだ新しい。

刃物ようなもので斬り裂かれた残骸。

紫色の炎で爆破された残骸。

溶かされた残骸。

ボディが所々へこまされて機能停止になった残骸。

「チッ…鉄屑じゃあ全然楽しくねぇなぁ」

?青年?は悪態をつきながら一つの残骸に腰を下ろす。
恐らくこの男がガジェットを撃破したのだろう。

しかし、青年の格好の全てが異様だった。
冷たい夜風が吹く中、寒さを感じないと言わんばかりに上半身には何も着ておらず、黒いズボンしか穿いていない。
靴すら履いておらず、素足には包帯が巻かれているだけだった。
首から下げているのは、目玉と刃が括られた不気味な首飾り。
盲目なのか両目を覆い隠すように黒い布が巻かれている。
そして、露になった左胸には火影の烙印が刻まれている。

「ったく妙な気分だぜ…人間はともかく、何で鉄屑には?何も感じねぇ?んだ…?　久しぶりに?人間の姿?になったからか…??生き返った身体?と魂が上手く馴染まねぇのか…?」

ボサボサの灰色の長髪を揺らしながら意味不明な事を呟く盲目男。
ふと背後に気配を感じた。

「…またてめぇか」

盲目男はうんざりした様子で溜め息をつく。
振り返なくても誰かはわかる。
いや、盲目だから振り返る必要はない。

匂いと音だけで誰かは判別できる。

「やぁ、せっちゃん。今夜も良い夜だね」

そう言ったのは盲目男の背後に佇んでいる一人の青年だった。
茶色と緑の着物を着込み、白髪が生えた頭の上に引きちぎった僧侶の袈裟をバンダナのように巻いている。

「変な名で呼ぶんじゃねぇと言ったはずだろ、殺されてぇのかてめぇは…？」

「惜しいッ。僕の場合？壊される？んだ」

袈裟男は作り物めいた満面の笑顔を浮かべ、不気味な訂正をしながらガジェットの残骸を撫でる。

「ところで、どうだい？軽量化の？凶蜘蛛（まがぐも）？の調子は？」

袈裟男は残骸を撫でながら盲目男の左腕を見つめる。
彼の左腕には巨大な蜘蛛がいた。
いや、蜘蛛を模した腕輪だった。
六本の足先には刃が取り付けられ、蜘蛛の口部から長い刃が伸びていた。

「ああ、なかなか使えるぜ。この魔導具は」

「魔導具じゃなくて、魔導デバイスだよ」

「うるせぇッ。同じようなもんだろッ」

袈裟男の訂正を盲目男は不機嫌に返し、別の話題に移す。

「しっかし…まだ本調子に戻らねぇ。人間相手に何故か加減しちまう…鉄屑はそんな事はねぇんだが」

「…せっちゃん、自覚ないのかい？」

盲目男の呟きを袈裟男は笑顔を浮かべながら不審げに返す。

「君はさ…人間を殺すのを躊躇っているだけなんだよ？　実際…殺そうと思えば殺せたはずだ。なのに、あえて急所を外した」

袈裟男の言葉に盲目男は黒布の下で眉間を歪める。

そして、暴言を堪えて反論する。

「だがな…放っておけば死んでた奴だっていたんだぞ？それを―陰に隠れてたてめぇが軽い手当てして助けたんだろうが」

「…何だ、気付いてたのかい？」

袈裟男は笑顔のまま肩をすくめる。

「索敵は自信あるんでな。てめぇが俺を尾行していたのをとっくの昔にわかってたんだよ。…それより何で助けたんだ？坊主だからか？」

「坊主じゃないよ破戒僧だよ」

袈裟男は律儀に三回目の訂正をし、自分の考えを述べる。

「僕はね…？道具を使う種族？にあまり減って欲しくないんだよ。そしたら使ってくれない道具達がどんどん増え、多くの道具達が悲しんじゃうでしょ？」

人間の生き死によりも道具の存在意義を優先する言葉だった。

「ハッ…下らねぇ」

盲目男にとって袈裟男の言葉は意味不明なものでしかない。

鼻を鳴らして言い捨てた。

「ありゃっ…真面目に言ったつもりなんだけど」

まさかそんなリアクションを取られるとは本当に思ってなかったらしく袈裟男は軽くずっこける。

「まぁ、とにかくね。僕から言いたい事は―壊れるまで？凶蜘蛛？を使って欲しい事と、あんまり人間を殺さないで欲しい事だけだから」

「んなもん俺の勝手だろうが、命令すんじゃねぇよ…！」

盲目男は八つ当たりするように返す。
命令ではなくお願いのつもりだったのだが、彼にそれは伝わらなかったようだ。
とにかくこれ以上言うと本当に壊されかねないと思い、袈裟男はここらで別れの言葉を言う。

「じゃあ、またね、せっちゃん。今度会う時まで死なないでね」

「だから、その名で呼ぶなっつったろッ！！！」

盲目男の右腕に禍々しい紫色の炎が纏う。
しかし、袈裟男の匂いと音がなくなったと感じ、地面を強く踏みつけながら炎を消した。

「ったく…相変わらずあの手の野郎は気に入らねぇ…？同胞？の方がまだマシだぜ」

盲目男は視力を失った目で、二つの月を忌々しく見上げた。

盲目男の名は―？刹那？。
火影・炎術士として死に、火竜として消滅したはずの男が―肉体を宿し、もう一度人間としての生をこの世界で与えられていた。

？瞬炎の邪悪竜？が―この世界に残忍な炎を燃え上がらせる。

◇

ＮＧシーン。
―その夜。機動六課・女子寮の一室。

はやてはベッドの中で目を覚ました。
同じベッドの中で眠るヴィータの寝顔を、可愛いなと思いながら一瞥し、机に置かれた時計を見やる。
デジタル時計は午前２時を示していた。
まだ起床するまでまだ余裕がある。
はやては再び瞼を閉じる。

「……」

再び瞼が開く。

―どうも寝付けられない。

身体の向きを変えても、ずっと瞼を閉じてても、
眠りが一向にやってこない。
しっかりと睡眠を取らないと肌にも悪いし、仕事に支障が出てしまう。
しかし、いくらそう思っても眠れるはずがない。
何か眠れる方法はないかと熟思し―

はやて
（…そうや！羊の着ぐるみを着たリインを数えよ！）

寝起きなのかシュールな妙案が思い付いた。
早速、はやては羊の着ぐるみを着たリインが柵を飛び越えるイメージをする。

はやて
（リインが一匹）

リイン１
『はやてちゃ～ん♪』

一匹目のリインが可愛らしく柵を飛び越える。

はやて
（あはっ、かわええなぁ。…リインが二匹）

リイン２
『何か虫の数え方みたいでヤです～』

リインは頬を膨らませ不満を言いながら柵を飛び越える。

はやて
（ごめんなぁ。そして、かわええわ。…えっと、リインが三人）

リイン３
『はいです―ごはッ！！！』

柵を飛び越えようとした三人目のリインは柵にお腹をおもいっきりぶつけてしまった。

リイン３
『うっ…ぐすっ…ふえええええええん！イタいですぅぅぅぅぅ！！』

リイン４
『だ、大丈夫です！？』

リイン５

『萌え萌えです～♪』

リイン６

『泣いたらダメです！はやてちゃんのためにガンバるです！！』

泣き出してしまった三人目のリインの周りに、陰でスタンバイしていた他のリインたちが集まり、身を案じたり、褒めたり（？）、激励を飛ばしたりしている。

リイン３

『ぐすっ…ガ、ガンバるです！どりゃあああああです！！』

何とか気を取り直した三人目のリインは柵を飛び越えた。

はやて

（うん…よう頑張ったなぁ、リイン。けど？ごはッ？とか？どりゃあああ？はやめといた方がええ。…リインが四人）

リイン４

『はいですっ♪』

ヴァイス

『狙い撃つぜッ！』

バキューン！

リイン４

『ぺぎゃあああああああああああッ！！！』

はやて
（撃ち殺されたァァァァァァァァァ！！！…リ、リインが五人！！）

リイン５
『はいですっ♪』

五人目のリインが柵を飛び越え、

男性局員
『リインた～ん♪』

何故か狼の着ぐるみを着たおっきいお友達も柵を飛び越えた。

はやて
（…リ、リインが六人）

リイン６
『はいです♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

リイン６
『いやあああああああッ！！』

おっきいお友達と一緒に飛び越える六人目のリイン。
しかも、それだけでなく―

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

男性局員
『リインた～ん♪』

全リイン
『いやあああああああですぅぅぅぅぅぅぅッ！！！』

はやて
（寝れるかあああああああああああああッ！！！）

はやては目を見開きながら心中でシャウトする。

はやて
（おっきいお友達、邪魔するなやッ！！　夢の中でも同じ事したらあかんで！！？）

はやてはベッドから下り、何気なく、リインが眠るバッグをゆっくりと開けた。

そして、中を覗き込む。

リイン
「うっ…ううっ…は、はやてちゃ…助け…」

う な さ れ て い た。

はやて
（ごめん…ごめんなぁ…リイン）

―きっと自分のせいだ。
―今度何か美味しいものでも奢ったる。

其之十七：血戦（後書き）

ナナシ「ゲストをお呼びした後書きコーナーの時間や！司会者は自分や！…では登場～っ！」

直人「よう、久しぶりだな、ナナシ」

マリカ「何で私まで…シクシク…」

ナナシ「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～より、直人くんとマリカちゃんや。…マリカちゃん、嬉し泣きか？自分も貰い泣きしてくるやん」

マリカ「違いますッ！！！」

ヴァイス「ガンダムから飛び出てじゃじゃじゃ～ん♪ヴァイス・グランセニック登場！」

直人「ヴァイス、語呂悪いぞ」

ヴァイス「旦那ぁ…ハーレム男である貴様を…今ここで抹殺する」

直人「ここのヴァイスはかなり強気だな…だが、すぐに瞬殺してやるぞ！」

ヴァイス「へっ…やってみ☆ろ☆よッ！！！」

マリカ「あ、主～！置いていかないでください～！」

ナナシ「マリカちゃん…今…二人っきりやな（真面目な顔と口調）」

マリカ「やめてください、セクハラですよ」

ナナシ「全ッ然セクハラちゃうやろ！！」

マリカ「ところで、ここのヴァイスさんは何でガンダムネタをやり始めたのですか？」

ナナシ「流しおった…。…きっかけは醜い嫉妬なんや。初めに、ヴァイスが構えてた武器はハイパーバズーカやったろ？本当はただのバズーカにする予定やったが、どうせならガンダムネタ使おうとハイパーバズーカにしたんや。そしたらどんどんガンダム兵器が過激していき…しかもガンダムネタを元に―嫉妬兵器だけやなくて、ガンダムに関連したボケまで造り上げた。ヴァイスがなのはにした？お話？がその例や」

マリカ「なるほど…」

ナナシ「情報料―デート一回」

マリカ「最悪ですッ！！！」

直人「はあーッ…はあーッ…」

ナナシ「お疲れさぁん」

マリカ「ボロボロじゃないですか！腕、鈍ったんじゃないんですか？」

直人「違う！！向こうがチートにモノを言わせているんだ！！背中から蝶の羽根を出すわ！何回殺しても死なないわ！何なんだアイツは！！？」

ヴァイス「俺はホムンクルスだぜぇ？殺しても死なねーのは…当・た・り・前・だ・ろ…？」

ナナシ「声優ネタにまで手を出しおった！！」

マリカ「帰りましょう、主！何か色々崩壊してます！」

直人「あ、ああ…かなり…かなり悔しいが仕方ない。すまない、ナナシ…これで失礼する」

ナナシ「あ、うん…」

ヴァイス「逃ィィィがァァァすかァァァァァァァ！！！」

其之十八：戒め（前書き）

俺は罪人だ。
その証拠は、右の人差し指に残る戒めの感触。

俺は臆病者だ。
その証拠は、向き合わず逃げているから。

俺が老いて死ぬまで、戒めの感触がなくなる事はないだろう。そして、逃げ続けるだろう。

其之十八：戒め

蛭湖が機動六課に派遣されてから数日が経ち、機動六課に新たな分隊が編成された。
紅麗が隊長を務める？クリムゾン分隊？だ。
機動六課の戦闘要員が増え、？麗（うるは）？という部隊を率いていた紅麗に、十分な戦闘力と統率力がある事から決定された。
そして、彼に次ぐ実力を持つ蛭湖はその副隊長を務め、薫はクリムゾン０３としてクリムゾン分隊に編入された。
ちなみに編成された日から、はやては紅麗の事を時々？朽木隊長？と呼ぶようになったのは、言うまでもない。

閑話休題。

機動六課の訓練場にて、今日の午前もフォワードたちは繰り返される訓練をこなした。
もちろん、フォワードたちは疲労困憊。そして、薫たちより遥かに体力があるはずの蛭湖は、薫たちより遥かに疲労していた。
しかし、原因は訓練ではなく―戦闘狂姐さん。
血液バイアルの節約のため、剣技だけの模擬戦でも数時間打っ通しだから嫌でも疲れる。

疲れたら、笑ってごらん！―By、松岡修造。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れさま！…蛭湖さんも、かなりお疲れさまでした」

なのはは薫たちを労った後、蛭湖にも労いの言葉をかける（哀れみの目で見ながら）。

「いえ…この疲れは、強さの糧です。私にとっては嬉しい事でもあります」

ポジティブな蛭湖に拍手。
ちなみにシグナムは満足げに微笑みながら隊舎へ帰っていた。

『…嫌なら嫌と断ればいいだろう、いい加減見ていられん』

紅麗は蛭湖に向けて念話をする。

『断ろうとしても問答無用だ。哀れむ気持ちがあるなら君が代わりにやってくれ』

ついに本音を出しちゃった蛭湖。紅麗が『だが、断る』と返している中、なのはは話を進めている。

「実は何気に今日の模擬戦が、第二段階クリアの見極めテストだったんだけど…」

なのはの言葉に薫たちは驚き、ちゃんと及第点に達したかと不安と期待を抱える。それを尻目に、なのははフェイトたちに顔を向けた。

「どうでした？」

「合格っ」
「「早ッ」」

フェイトの即答に、スバルとティアナが言葉を合わせた。
次に、なのはは紅麗に顔を向ける。

「紅れ―」

「合格」

「「「「早ァッ！！！」」」」

フェイト以上の早い即答に、薫とエリオとキャロまでツッコむ。
あまりにも早いやり取りだった。

「も～、答えるの早いよ、紅麗兄～」

「紅麗兄と呼ぶな」

無邪気な笑顔でさりげなく兄と呼ぶスバルに対し、紅麗は冷然と返す。
しかし、スバルは悪い意味で諦めなかった。

「じゃあ、紅麗兄さんっ！」

「だが、断る」

「では、紅麗兄ちゃんっ！！」

「しかし、断る」

「ならば、紅麗兄様っ！！！」

「しかしながら、断る」

そんなスバルと紅麗の下らないやり取りを、フェイトは微笑ましく見つめていた。しかし、その身体から滲み出る黒いオーラがその柔和な笑顔を台無しにしていた。
これ以上はマズいと感じたなのはは、遮るように紅麗とスバルの間にさりげなく（？）割り込む。

「わ、私も皆良い線を言ってると思うし、これにて、二段階終了っ！　デバイスリミッターも一段解除するから後でシャーリーのところに行って来てね」

「明日からはセカンド・モードを基本にして訓練すっからな」

いつも通り元気良く返事をした薫たちだったが、ヴィータの言葉の一部に反応して疑問げに首を傾げた。

「？明日？？」

「せや、訓練再開は明日からや」

キャロの疑問に答えたのは、いつの間にか訓練場に現れたはやてだった。もはや、いつもの事だから皆は何も言わなかった。はやては、そんな彼女たちの反応に少し寂しさを覚えながら言葉を続ける。

「皆、入隊日からずっと訓練漬けやったろ？　せやから今日一日お休み、街にでも出掛けて遊んでくるとええよ」

薫たちは喜びの声をあげた。蛭湖も陰で小さくガッツポーズを取っている。

はやては、おおはしゃぎする薫たちを微笑ましく見つめながら、フェイトに念話で話しかける。

『フェイトちゃんにも休みあげるから、紅麗とデートでも行ってきいや』

『え、えええぇ！！？…い、いいよ…私まで休むなんて、悪いよ…』

顔を赤くしながらそう返したフェイトだったが、本当はメチャクチャ行きたかった。いつか紅麗とデートしたいと毎日思っているほどだ。

だから親友からの申し出はとても嬉しい。だが、友人らが働いている中、自分が遊びに出掛けるのは何だか気が重い。何より、紅麗をデートに誘う時点で恥ずかしくてとてもできない。

そんなフェイトの心情を容易に察する事ができたはやては小さく溜め息をついた。

『そんな消極的やと、他の女の子に取られてまうで。実はな…紅麗、本局の方でも結構有名なんやで？？機動六課にイケメンがいる？言うて』

「な　ん　だ　と…？」

フェイトは黒いオーラを放ちながら低い呟きを漏らした。

一瞬たじろきながらも、はやては続ける。

『せやから、すでに紅麗のファンクラブまで出来―』

「殲滅戦闘（ジェノサイド・コンバット）―開始ッ！！」

「待てぃ！！」

?バルディッシュ?を起動させながら駆け出すフェイトだったが、はやてが彼女の肩を掴んでそれを制する。

「だって、はやて!!　邪魔者は排除するべきだッ!!」

フェイトは周りの人間なぞ全く気にせず殺意を込めて叫んだ。
いつにない彼女の剣幕に、周りにいる薫たちは怯えてしまっている。
エリオとキャロは至っては呆然と見つめるその目には涙が浮かんでいた。
教育に悪いと思った紅麗は、エリオたちの背を押しながら隊舎へと帰っていった。

「ダメやで、フェイトちゃん。そんな危険な真似は」

フェイトの剣幕に慣れ始めたはやては落ち着いた様子でフェイトを諭す。しかし、怒り狂った彼女はそれであっさりと納得するはずがなかった。

「だって!　紅麗を狙う他の女がいると思うと、イライラするッ!!」

「やり方が違うで、フェイトちゃん」

はやてはフェイトの肩に手を置いて真摯な眼差しを向ける。

「フェイトちゃんが紅麗親衛隊を滅ぼしても、フェイトちゃんが紅麗に対する消極性は解決されへんで。動かんと意味ないんや。フェイトちゃんが、積極的になって紅麗を奪うんや！　そりゃあ、もう！　ホテルに連れこんで、無理矢理ベッドに押し倒すくらいの積極性がないと―」

「にゃ、にゃに言ってんにょ、はにゃてッ！！」

「フェイトちゃん、鼻血鼻血」

なのはが、鼻血を噴き出すフェイトを指摘する。それに構わず、はやてとフェイトは話を続ける。

「別に押し倒せと言わん。とにかく、積極的になれって事や」

「だ、だって…恥じゅかしいもん…」

フェイトは真っ赤になった顔に手を当てながらモジモジする。

「だから、フェイトちゃん、鼻血鼻血」

なのはがもう一度指摘する。

「恋する奴は皆恥ずかしいもんや。…大丈夫やで、フェイトちゃんなら。紅麗はフェイトちゃんの事を嫌いやないみたいやし、すぐにOK出すと思うで。私とスバルだったら『だが、断る』で瞬殺やけど」

「だ、大丈夫かなぁ…？　紅麗、断らないかなぁ…？」

フェイトは涙目になりながら不安の言葉を漏らす。

「だからさ、フェイトちゃん、鼻血鼻血」

なのはがまたまた指摘する。

「不安に思う暇があったら紅麗を誘うんや。…ほらほら、鼻水が出とるで」

「違うよ、はやてちゃん、鼻血鼻血」

なのはが四回目の指摘をした。
はやては取り出したティッシュをフェイトの鼻に当てる。

「ほら、フェイトちゃん。?ちーん?や。不安と一緒にお鼻を?ちーん?するんや」「うん…」

フェイトは可愛らしい音を鳴らしながら鼻をかんだ。

「いや、鼻血鼻血をかませちゃをダメでしょ」

なのはの言葉はあまりにも虚しかった。

◇

機動六課・格納庫前―。

「―何ならやろうか？」

街へ出掛ける足として、ティアナがヴァイスにバイクを貸してほしいと言った時、彼からそう言われた。

「そ、そんな悪いですよっ！」

まさかくれるとは思わず、驚きながら断るティアナだったが、ヴァイスは陽気に手を振った。

「いい、いい。実は新しいバイクを買ってな、二つもいらねーんだよ。あ、見せてやろうか？」

「い、いえ―」

「そうかそうか、見たいか。ったく、しょうがねぇなぁ」

よほど見せて自慢をしたいのだろう。断ろうとするティアナの言葉を無視して、ヴァイスは嬉しそうに笑いながら格納庫へ歩いていった。

ティアナは溜め息をつき、げんなりとした表情で待っていると―

「願いよ～、風～に乗って～♪」

ヴァイスがどっかの主題歌を歌いながら？新しく買ったバイク？を押しながらやって来た。

「夜明け～の～鐘を～鳴～らせよ～♪」

そのバイクは？何か？を模していた。

「鳥のように～、Ｍｙ　ｌｉｆｅ　ｔｒａｄｅ　ｉｎ　ｆｏｒ　ｙｏｕｒ　ｐａｉｎ！」

しかも、歌メチャクチャ上手かった。

「…ヴァイス陸曹？」

「無数の～波を越え～♪」

ティアナが声をかけてもヴァイスは歌うのをやめない。

「明日へ～立～ち向かう～♪貴方を～守りた～ま～え～、Ｍｙ　ｌｉｆｅ　Ｉ　ｔｒａｄｅ　ｉｎ　ｆｏｒ　ｙｏｕｒ　ｐａｉｎ！」

ヴァイスは両腕を大きく広げたり、髪を振り乱したり、胸に手を当てたりしながら、カッコいい自分に酔いしれるように熱唱を続ける。

「……」

ただのアホとして言いようがないヴァイスの様子をティアナはジト目で静観していたが、

「振り向か～ず～、羽～ばたけ～♪」

何故か、ヴァイスがカッコ良く見えてしまった。
歌は上手いし、良い声しているし、歌っている姿がカッコ良く見えなくもない。
ティアナは思わず一瞬見惚れていたが、頭を振るって理性を覚醒させる。

「この想～いを運んで～、あの空を飛んでくぅぅぅ～♪」

「……」

ティアナは右手をゴキゴキっ鳴らしながら声を高く響かせるヴァイスにゆっくりと歩み寄る。

「願いは～、誰にも～、撃ち落と、されたァァァァァァァァァァァァ～ッ！！！」

スバル直伝のティアナの裏拳を顔面にくらいながらヴァイスは悲鳴をあげた。

◇

機動六課・隊舎内。

「あの、紅麗、ちょっと…いいかなっ？」

紅麗はシャワーを浴びた後、休憩場で寛いでいるとフェイトが話しかけてきた。
ちなみに陰から、なのはとはやてがこっそりと彼女を見守っている。

「どうした？」

紅麗はなのはたちの存在に気付いていたが、あえて無視して、フェイトだけに意識を向ける。

「え、えっと…その…これから休みなんだけど…紅麗は…予定、あるかな？」

フェイトは緊張で顔を赤くしながら尋ねると、紅麗は首を振った。

「いや、特にないな…訓練場にでも行って自主で鍛練しようかと思っていたところなんだが…」

フェイトは拳を握った。

―よし、チャンスだッ！！　さぁ、誘うんだッ！！

フェイトは自分を奮い立たせて、誘いの言葉を紡ぎ始める。

「じゃ、じゃあ！　これから…私と…デ…デ…デデデ…デー…」

？デート行かない？？という短い言葉を言おうとするが、緊張のせいで口が回らず、デをずっと連呼していた。

時間が経つほどに緊張が高ぶり、胸が激しく鼓動し、身体が熱くなって汗がかいてくる。

もう何を言うべきなのかわからなくなってくる。

『フェイトちゃん、ガンバって！』

『もっと、熱くなれやっ！』

なのはは念話を使ってフェイトに応援の言葉を送り、はやてはフェイトに熱い言葉を送る。

想いが籠った二人の言葉が通じたのか、フェイトは意を決して声を発した。

「デ、デデデ大王はともかく！　一緒に街へ出掛けないっ！？」

「「――――」」

なのはとはやては顔に影を作った。
そして、フェイトは堰を切ったように言葉を続ける。

「や、やっぱり紅麗も外に出掛けて、街の事とかよく知っとかないとダメだよ！時空管理局の局員としての義務、みたいな！？機動六課の隊員としての義務、みたいな！？人間としての義務、みたいな！？それにさ、それにさ！私服とか色々揃えないといけないしさ！あ、そうだ！エリオとキャロと薫も誘おうよ！家族五人で出掛けるのもいいよね～！こんな時間は滅多にないんだから―」

―うあああああ～、私のバカぁぁぁぁぁぁ～っ！！

フェイトは早口で捲し立てながら、心の中で大泣きしていた。
デートの誘いの言葉を言えなかったし、薫たちと出掛けようと言ってしまった。
別に薫たちの事は大好きだし、一緒に出掛けたいという気持ちもあるが、今回はデートとして二人っきりで行きたかった。
だが、もう言ってしまったからしょうがない。

―この悔しさはデデデ大王にぶつけてやる～っ！

一方、フェイトの言葉を受けた紅麗は顎に手を当てながら思案していた。

―確かに、街の事とはいえ、社会人としてこの世界についてよく知っておかないといけないな。

それに局員として働いていて給料をもらってはいるが、自動販売機以外使う機会がないから多く溜まっている。

―これを機に、数少ない私服とかのために使うとするか…。

紅麗はそう決め、フェイトに目を向ける。

「わかった。一緒に行こうか」

「…え…あ…う、うんっ」

フェイトは複雑な気持ちで返事をした。

了承してくれた事にはもちろん嬉しいが、やっぱり二人っきりで行きたかった。

―次こそは、二人っきりでッ！！

フェイトはいつになるかわからない目標を立てながら雄々しく拳を握った。

『あ～っ…こうなってもうたかぁ…』

はやては、紅麗とフェイトのやり取りを見ながらなのはに念話で呟く。

『でも…最初はこれでいいんじゃないかな？　フェイトちゃんはよく頑張ったよ』

『まぁ、そうやけど…。…ところで、なのはちゃんもユーノくんとデート行かへんの？』

『いや、すっごく行きたいけど…私まで休むわけにはいかないし、ユーノくんも忙し―って、何でユーノくんが出てくんの！？　ま、まさか、私たちが付き合ってるって知ってるの！？』

血相変えて問いかけるなのはに、はやてはニヤニヤしながら首を振った。

『ううん、何も知らへんで。何かなのはちゃんから？女の匂い？というもんがしたから、もしかしてと思うて、カマかけてみたんやけど…そうかそうか。やっと、付き合おうたんやなぁ。のほほっ、早速皆に教えちゃお～♪』

狸の耳と尻尾を生やしながら駆け出すはやてを、なのはは悲鳴をあげながら追いかけていった。

◇

再び格納庫前―。

「？デュナメス？ってんだ、コイツの名前」

鼻にティッシュを詰めているヴァイスはガンダムを模した新しいバイク―?デュナメス?を愛おしく撫でる。
それを見て、ティアナは呆れながら溜め息をついた。

「ヴァイス陸曹、ホントに好きですよね。…で、ここがライトになるんですか?」

ティアナは?デュナメス?の目の部分に指を差す。しかし、ヴァイスはチッチッチと指を振りながら否定すると、小さなリモコンで?デュナメス?を起動させる。
そして、ハンドルにある一つのボタンを押した。
すると、?デュナメス?の黄色いV字の角のようなものが下へスライドした。そこから現れたのは、丸いヘッドライトだった。

「こ・こ・だ・よ♪」

「ヴァイス陸曹、バカでしょ」

しかも、言葉とライトの点滅を合わせているところがさらに腹が立つ。
ティアナは辛辣な言葉を言うが、ヴァイスは全く気にせずに小さく笑う。

「ああ、バカさ。バカはバカでも、ガンダムバカさ。」

「全然上手くないですよ、ただのバカですよ」

「ぅお～いおい、ツンデレがジェラシーかよ～！」

（イラ イラ すん な、こ い つ…！）

苛立ちながら怒りの拳を握るティアナだったが、彼女の憤怒など意に介さず、ヴァイスは自慢話を続ける。

「さらになぁ…ほら、こいつを見てみろよ」

ヴァイスはハンドル部分に指を差す。

ティアナはこめかみに血管を浮かばながらそこに顔を覗かせた次の瞬間、その表情が衝撃的なものを目にしたような驚愕の表情に変わった。

左右のハンドルの間には、球体の可愛らしいマスコットキャラのようなものが設置されてあったのだ。

「？ハロ？ってんだ。しかも、喋れるんだぜ？…ほら、挨拶しな」

『ヨロシク、ヨロシク！』

ハロは上部左右のカバーを羽根のように開閉させながら挨拶した。

（か、可愛すぎるっ！！）

犬や猫やロリキャラには無いハロの可愛らしい魅力に、ティアナの母性本能がくすぶられた。
お持ち帰りしたい気分だ。

「こいつはシャーリーに頼んで造ってもらったんだ。あ、あいつもガンダム好きなんだぜ？…そんでな、ハロはデバイス技術を応用して造られたから、会話は可能だし、目的地までナビしてくれんだぜ？　さらにな―」

長々と語るヴァイスの言葉は、ティアナの耳に届いていなかった。
彼女は頬を緩ませ、ハロを凝視しながらこう言った。

「ヴァ、ヴァイス陸曹…バイクはいいですから、代わりにハロをお持ち帰りしてもいいですか？」

「駄　目　だ」

『即答、即答！』

ヴァイスは即答し、ハロはカバーを開閉させながら言葉を紡いだ。

◇

「しかし、何だなぁ…俺ぁ時々、お前らの訓練とか見るんだけどよ」

?デュナメス?を格納庫にしまったヴァイスは、もう一台の赤いバイクを慣れた手付きで点検している。

「最近、お前、立ち回りちょっと変わったよな」

「あ、はい…」

ヴァイスは満足げな顔をしながら言うと、ティアナはハロを胸に抱えたまま短く返す。

「お前…今まではシングルでも、チームでも、コンビでも—動きは全部同じだったけどよ。最近はだいぶ、臨機応変になってきてるように見えるぜ？　センターらしい動きになってきたんじゃねぇか？」

「皆さんのご指導のおかげですよ」

ティアナはなのはたちの事を思いながら小さく笑う。ちょっとしたアドバイスをくれたヴァイスも、そこに含まれている。

ヴァイスは小型リモコンでバイクを起動させ、重々しいエンジン音がリズミカルに鳴り響く。

ヴァイスはハンドルを握り、ちゃんとアクセルがかかるか最後の点

検をする。

「…よし、良い調子だ。…ほれっ」

ヴァイスは小型リモコンを投げ渡し、それをティアナはキャッチする。

「…でも、ホントにもらっちゃっていいんですか？」

メルヘットを被ったティアナはバイクに跨る。

「だから、いいっつってんだろ？　野郎相手なら高値で売りつけてやるとこだがな」

ヴァイスは軽薄に笑った。

「……」

バイクに跨がっているティアナはすぐに発進せず、少し気まずげな顔をしていた。そして、意を決したらしく、その口を開き始めた。

「…あの、失礼かとは思ったんですが…ヴァイス陸曹の事、ちょっと調べちゃいました。数年前まで、エース級の魔導師だって」

ティアナは不審に思っていた。
自分が以前無理な自主練をしていた時、彼からアドバイスをもらった時からそう思っていた。
彼の言葉を自分は耳を貸さなかったが、的を射た言葉だった。しかも、説得力がある。
ヘリパイロットの―いや、ただの一魔導師の経験からの言葉すら思えなかった。
だから、好奇心とはまた違う気持ちでヴァイスの事を調べてしまったのだ。

「…何だそりゃあ？」

しかし、ヴァイスは訝しげな顔をしながら、ティアナの言葉を否定してきた。

「エースなもんかい、俺の魔力値なんざお前の半分以下だっつの」

「それでも…アウトレンジショットの達人で、優秀な狙撃手だったって」

ティアナは、まるで諭すようにそう反論した。それに対して、ヴァイスは溜め息をつきながら、左手で右の人指し指を握る。そして、すぐに手を放す。

「昔はどうあれ…今の俺は、六課のヘリパイロットだよ。お前が聞いて、参考になるような話なんぞねーぞ」

「……」

ティアナは探るように、じっとヴァイスを見つめる。その視線に耐えられなくなったのか、ヴァイスは誤魔化すようにいつもの軽薄な笑みを浮かべた。しかし、その笑みは少しぎこちないものだった。

「んな事より、さっさと行きな。相棒が待ってんだろ？」

「……」

ティアナは納得がいかない顔をしていたが、これ以上の追求は失礼だと思い、短い返事をしてバイクを走らせた。

「……」

ヴァイスはティアナの姿が見えなくなるまで見送り、

「――――ッ！！！」

左手で右の人差し指を握った。
強く。
握り潰すような勢いで強く握る。

―まだ、残っている…！

ヴァイスは冷や汗をかきながら表情を歪ませた。

？あの時？の、引き金を引いた時の感触が、この人差し指にずっと残っている。
そして、呼び起こされる―数年前、犯罪者に人質にされた妹の左目を誤射した忌々しい記憶が。

妹の悲鳴―。

妹の苦悶の表情―。

左目に直撃した魔力弾の音―。

それらが脳裏に強く叩き込まれ、心に深く刻まれる。

そして、引き金を引いた感触があの日から今日までずっと続いている。
ずっとずっと続いている。
まるで、戒めるかのように。

こんな指、無くなってしまえと思った。
切り落とそうとした時もあった。
だが、憚られた。

切り落としても、感触がまだ残るんじゃないかという恐怖があったからだ。
そう、怖かった。
妹と言葉を交わす事と同じくらいに怖かった。
妹の目を見る事と同じくらいに怖かった。

「……」

ヴァイスは人差し指を掴んだ左手を再び放し、自嘲な笑みを浮かべた。

―何がエース級のスナイパーだよ…。

犯罪者を撃とうとして妹を誤射した下手くそじゃないか。

―だが、もうスナイパーに戻る事はない…。

スコープで敵に狙いを定める事も、グリップを握る事も、引き金を引く事も―無い。
今の自分は―ただのヘリパイロットだ。
世間から見れば、今の自分を？チキン？やら？ヘタレ？やらと思っても仕方ないかもしれない。

だが、こんな様になるのも仕方のない事だ。
誤射とはいえ、自分の妹の左目に苦痛と失明を与えてしまったのだ。
強くて、深い罪悪感に囚われ、トラウマにならないのがおかしいくらいだ。だが、ヘリパイロットとして、戦闘要員の手助けをしている辺り、まだ自分はマシな人間じゃないか。

『ヴァイス、ヴァイス』

物思いに耽っていたヴァイスに機械的な明るい声が耳を打つ。
ヴァイスは目線を下ろすと、ハロが飛び跳ねながら彼の名を呼んできた。
ヴァイスは両手でハロを高く持ち上げる。

「昔の話さ…そうだろ、ハロ？」

ヴァイスは、まるで言い聞かせるに言葉を紡いだ。
しかし、いつもヴァイスの言葉に応えてくれるはずのハロは―この時に限って何も応えなかった。

◇

隊舎のロビーにて、私服姿の紅麗と薫とエリオがフェイトとキャロを待っていた。
紅麗の私服はダメージが入ったジーンズ、白いTシャツの上に黒いジャケットを着ている。
これは機動六課に入隊して間もない頃、街へ出歩くためとしてフェイトに用意された服だ。
いつも着ている黒衣や制服は、絶対に街を歩く服装ではない。

「ごめんっ、お待たせ」

声と共に、小走りに歩く足音が聞こえた。
紅麗たちは顔を向けると、私服姿のフェイトとキャロが小走りに歩いてきた。
フェイトは白いTシャツに黒いジャケット、下は太股を露にしたフリフリのミニスカートを穿いていた。
上の服装は?誰か?に合わせような気がする。

「紅麗、私が選んだ服、大丈夫っ?　サイズ合ってる?」

フェイトは不安げに尋ねる。自分のセンスで彼に似合いそうな服を選んだものだから気に入ってくれたのかと不安を覚えていた。

「ああ、合っているよ。それに、私好みのファッションだ。ありがとう」

紅麗がお礼を言うと、不安を覚えていたフェイトは顔を赤くしながら嬉しそうに笑う。

「あ、ありがと…。えっと…私の服、どうかな?!似合う?」

今度は期待と不安な目で紅麗を見上げながら自分の私服姿について問いかける。

「ああ、とても似合っているよ。…足は…少々出しすぎな気がするが…」

紅麗はとても正直に答えた。後半は少し顔を赤くしながら、目線を反らした。

「く、紅麗のエッチっ！！」

狙ってこのスカートを選んだ事も忘れて、フェイトも顔を赤くしながら両手で太股を隠した。

一方、エリオは顔を赤くしながら私服姿のキャロに見惚れていた。

彼女の私服姿を見た事がなかったし、ピンク色を基調とした清楚を感じさせるキャロによく似合った服装だ。

エリオはキャロを見つめ続けていると、彼女はその視線に気付き、エリオに優しく微笑んできた。その赤らんだ笑顔もまた可愛いと感じたエリオも彼女に笑い返した。

そして、一人取り残された薫は小刻みに壁を殴っていた。

◇

その頃、蛭湖はいつになく清々しい表情で隊舎の廊下を歩いていた。
訓練はないし、戦闘狂によって溜まりに溜まりまくった疲労を今日一日で癒そう。
すると、

「蛭湖」

一番聞きたくない声が背後から聞こえた。
振り向きたくない、このまま逃げ出したい。
だが、敬意と礼儀を重んじる彼にはそんな事はできなかった。
蛭湖はゆっくりと振り返ると、シグナムとヴィータがいた。
―前者いらない。

「…何か用か？」

蛭湖は表情にこそ出していないが、内心で負の感情を抑え込んでいた。
どうせ、模擬戦の誘いだろう。いや、強制だろう。しかし、次に彼女の口から出た言葉は、彼にとって良い意味で予想外だった。

「これから１０８部隊と聖王教会の外回りに行く、お前も来い」

―よかった、外回りか。
蛭湖は内心でかなり安堵した。

「ナカジマ三佐が合同捜査本部を作ってくれるんだってさ、その辺の打ち合わせ」

と、ヴィータが付け足す。

「ま、あたしは向こうの魔導師の戦技指導なんだけどな。まったく教官資格なんて取るもんじゃねーな」

ヴィータの愚痴に蛭湖は苦笑いする。しかし、彼女はそれほど嫌がっていないという事を蛭湖は感じ取っていた。毎日の訓練でも、スバルたちを指導するヴィータは実に楽しそうに見える。

―少なくとも、戦闘狂との模擬戦より遥かにマシだろう。

蛭湖がそんな事を思っていると、シグナムが彼の肩に手を置いてきた。

「そして、外回りのついでに訓練場で私と模擬戦をしよう―どうだ、嬉しいだろう?」

―ふざけるなッ!!!

人生最悪な糠喜びに、蛭湖は内心で怒声を発した。

◇

フェイトたちを乗せた漆黒のスポーツは最寄の市街地に向かって走行していた。
運転席にフェイト、助手席に紅麗、後部座席には薫たちが座っている。
最初は紅麗が運転しようと思ったのが、前の世界での免許を取ってはいてもミッドチルダでの免許は取っていない。
何よりドライブが趣味なフェイトが運転したいと強く言ってきた。
故にフェイトが運転し、紅麗は男として複雑な気持ちを覚えながら助手席に座っていた。

そして、目的地に着くまで、紅麗とフェイトは『教育のあり方』を議題に熱く語り合っていた。

「違うよっ。やっぱり、そこは優しく接するべきで―」

「違う。だからこそ厳しくする事が正し―」

考えが違えば激しく議論をするし、

「―とは思わないか？」

「あっ、それ、わかるっ！　さすが紅麗だねっ！」

考えが同じになれば賛成の言葉を言い合ったりしている。
まるでお父さんとお母さんの会話だった。
薫たちにはついていけない議論だった。皆が楽しめる話題ができないものか。

「―あ、そういえば、エリオたちはどこか行きたいところとかある？」

議論に熱中してて、大切な事を忘れていた。
フェイトが尋ねると、エリオが応えた。

「あ、うんっ。実はシャーリーさんに教えてもらったプランがあって」

「わたしとエリオくんだけのプランみたいなんだけど…」

付け足すキャロの言葉にフェイトたちは耳を疑うが、エリオは？ストラーダ？に記録したメモを読む。

「まずはレールウェイでサード・アヴェニューを出て、市街地を二

人で散歩、ウインドウショッピングや会話等を楽しむ。食事はなるべく雰囲気が良くて会話の弾みそうな場所…」

「――――」

フェイトは顔に影を作った。そんな彼女の様子に気付かず、エリオは続ける。

「その後、映画を見て…」

「――――」

紅麗も顔に影を作る。エリオはさらに続ける。

「夕方には海岸線の夕やけを眺める―というプランなんだっ」

「――――」

ついに薫も顔に影を作った。

フェイト、紅麗、薫の三人は顔に影を作ったまま沈黙する。

天然なのか、幼い故なのか―彼らの様子に気付いていないキャロはさらに付け足す。

「シャーリーさんに?成功を祈るわ?って言われたけど…どういう意味なのかな?」

車体が揺らぐ。

「……」

「……」

「……」

紅麗とフェイトと薫は何とも言えない顔で沈黙を続ける。

エリオとキャロだけはプランについて？何か難しい？だの？ゲームなのかな？？と話し合っている。

『…なぁ、フェイト』

紅麗はフェイトに躊躇いがちに念話を飛ばす。

『これは…二人っきりに行かせた方がよいのではないか…？』

『き、奇遇だね、紅麗…私も、そう思っていた…』

紅麗の言葉に同意するフェイト。

別にくっつけるつもりで保護した二人をこうして会わせたわけではないが、二人はお似合いだし、シャーリーが首を突っ込む気持ちもわからないわけではない。

フェイトはわずかに逡巡した後、意を決してエリオたちに告げた。

「エ、エリオ、キャロ…そのプランにそって、二人っきりでお出掛けして」

「「…？」」

フェイトからの提案に二人は疑問げに首を傾げる。
その仕草に可愛い！！と思いながらフェイトは続ける。

「ほ、ほら…二人っきりでお出掛けしたりするのも、その…何か…良いと思うのっ。経験値を稼ぐ、みたいな？距離を縮める、みたいな？な、何かへの発展、みたいな？」

諭すつもりだったが、エリオとキャロは余計に混乱させてしまっている。彼らの思考はすでに迷宮入り―青木ヶ原樹海になっていた。

「と、とにかくっ！　二人っきりで楽しむ！―私からの最期の言葉は以上っ」

フェイトはかなり適当に切り上げ、再び紅麗と『教育のあり方』について熱苦しい議論を再会する。

―大人って、よくわからない…。

エリオとキャロはそう思った。
当たり前の事だが、自分達―子供が知らない事を大人達は知っている。
自分達のちょっとした言動に、大人達は大袈裟に反応したり不審げな態度を取ったりする。何でその反応をするのかと尋ねても、大人達ははぐらかす。
きっと、説明するのが難しくて自分達には理解できない内容かもしれない。何かの理由で教えたくないのかもしれない。
だったら、自分達も?大人?になって理解するしかない。
だけど、理解した瞬間の恐怖は―無くもない。
もしかしたら、自分達が軽い気持ちでの言動が、大人になれば恥ずかしい思い出になるのかもしれない。
だけど、何も知らないから―自分らしく、普通に言動するのは当たり前の事だと思う。

だから、エリオとキャロはこれからもその言動を続けていく。

『薫兄さん。紅麗兄さんと姉さんって恋人同士なのかな?』

エリオの言葉に、窓際に座っている薫は窓に頭をぶつけた。

『い、いや、違うみたいだけど…どうしてそう思うの?』

薫はエリオの言葉を否定し、頭に感じる重い痛みに耐えながら尋ね

る。

『だって、紅麗兄さんと姉さん、一緒にいる時とても楽しそうだから』

『んーっ…確かにそうだね』

薫はエリオの言葉に同意する。
特にフェイトが楽しそうに見える。

（というか…フェイト姉ちゃん、兄者大好きでしょ…）

毎日彼女の様子を見れば、誰でもわかるくらいだ。

―…兄者は気付いてんのかな。

薫は内心で不安げに呟く。
あんな堅物でも恋愛経験はある男だ、恐らくフェイトの気持ちに気付いているかもしれない。
気付かないフリをしているのかもしれない。

―だけど…兄者は、フェイト姉ちゃんを受け入れるのかな…？

薫は深い不安を募らせる。
引っ掛かるのは、紅麗の亡き恋人―紅の事だ。
薫は、紅麗が紅を亡くしてからどれほど冷たく歪んだか知っている。
たとえ本心は優しい心でも、彼は人を笑いながら殺す表面上の冷酷

を持ってしまった。
それほどまでに、紅の事を愛していたのだ。
いや、今でも愛しているのかもしれない。
なら、フェイトはどうなるのだろうか？
顔を赤くさせるほどに緊張し、幸せそうな笑顔を浮かべ、一生懸命に恋をしている彼女はどうなるのだろうか？
そして、紅麗はどうするのだろうか？
亡き恋人が忘れられないから拒絶するのだろうか？

だとしたら―あまりにも酷い。

薫は愛する恋人を持った事ないし、失った事もない。
だから、紅麗の深い悲しみを理解し切れない。
ただただ悲しいと思えるくらいだ。
だが、拒絶された時のフェイトの事を思うと、それ以上に悲しく思える。

『…薫お兄ちゃん？』

名前を呼ばれて意識を現実に戻ると、キャロが心配そうな顔で見つめていた。

『大丈夫？　何か、元気なさそうだったけど…』

『ああ、いや、大丈夫。ただ考え事をしてただけだよ』

薫は安心させるように明るい笑顔を浮かべる。
そして、未だに議論が絶えない紅麗とフェイトを見つめる。

『エリオたちは…兄者とフェイト姉ちゃんは―恋人同士に見える？』

まるで同意を求めるような口調だった。薫の問い掛けに、エリオたちはもちろんと即答した。

『一人だったボクとキャロを姉さんが姉として育ててくれたように、薫兄さんだって紅麗兄さんに兄として育ててもらったじゃん。だから二人ともとってもよく似ていて、恋人同士になってもおかしくないよっ』

エリオが嬉しそうに言う。
男子寮で同じ部屋だから薫とエリオは一緒にいる時間が多く、お互いの過去について話し合った事があった。

『紅麗お兄ちゃんは時々厳しくてちょっぴり怖いけど、本当は優しくて…お姉ちゃんも同じくらいにとっても優しくて、優しい二人はとってもお似合いだと思うっ』

キャロも嬉しそうに言う。

エリオとキャロにとって一番大好きで、尊敬できる人は―紅麗とフ

ェイトの二人だ。
だから、弟（妹）として、幸せをくれた大好きな二人には結ばれて欲しいと思っている。
お互いにその気持ちがなければそれまでだが、もし少しでも気があれば結ばれて欲しい。

『…そっか』

二人の言葉を聞いて、薫は嬉しそうに笑った。

純粋だ。
純粋すぎる言葉だ。
現実を知らない無知な言葉だが、とてもとても良い言葉だった。

薫が抱いている不安は払拭されないが、悪い方向に考えていた彼には良い方向に考える二人が羨ましいと思った。

―そうだね、二人には…幸せになって欲しいね…。

薫は、紅麗とフェイトの良き未来を期待するように小さく笑った。

おまけ―『機動六課の呟き！』

はやて「刹那と、Ｇｕｎ　Ｇｒａｖｅ　Ｏ．Ｄ．の屍十二の二人が似てると思うんは私だけやろか？」

キャロ「…え？何か言うんですか？え～っと…え？八神部隊長？…これを読めと？…え、えっと…バ、バルサミコ酢～！」

シャマル「誰かッ！私にッ！！フ・ラ・グをッ！！！」

ティアナ「べ、別にあんたの事なんか、好きでも何でもないんだからっ！」

紅麗「……」

なのは「では、教育してやろう…本当の魔導師の闘争というものを！」

キャロ「…え？また言うんですかぁ？バルサミコ酢～！！」

はやて「アニメの執事って決まって超人だと思うんは私だけやろか？」

シグナム「模擬戦アルバイト募集中（日給：４９７６円、応募資格：とにかく強い者）」

ヴァイス「この小説の一番のコメディアンは俺だよなぁ？」

はやて「もっと！熱くなれよォォォォォォォォ！！」

キャロ「バルサミコ酢ゥゥゥゥゥゥゥゥ～（涙目）！！」

おまけ2―『ヴァイスのガンダム相談室』

このコーナーは普段抱えている自分の悩みをヴァイスに話し、彼からガンダムネタのセリフを受けて悩みを解決するという面白半分ふざけ半分なコーナーである（解決する可能性は限り無く低い）

ＨＮ：二代目の祝福の風

「全力全開で追っかけくるおっきいお友達にはどう対処したらいいですか！？」

ヴァイス「そういう時は、身を隠すんだ！！」

HN：血の騎士

「私の仲間が毎日模擬戦に誘って来ます。断っても、問答無用な感じで…。悪い人ではないんですが、ああいうところが玉に瑕なんです。…何か良きアドバイスを」

ヴァイス「お前に挑んで来る相手を―無下にはできんだろうが（現実逃避）！！」

HN：金色の閃光

「紅麗を狙う羽虫共―●そっかなぁ…」

ヴァイス「エ、エゴだよ、それはっ！！」

其之十八：戒め（後書き）

薫「今回も始まったゲストをお呼びした後書きコーナー！ゲストは？魔法少女リリカルなのは～片翼の天使の導いた世界～？より…」

クラウド「クラウド・ストライフだ」

紅麗「ようこそ、お越しした」

薫「あ、後書き限定のサボり魔の兄者だ」

クラウド「…失礼だが、こいつを見ているとセフィロスを思い出す…！」

紅麗「何の事だか」

薫「あ～っ、確かにキャラ被ってるしマザコンだし。フェイト姉ちゃんを入れて三人でママについて熱く語り合ったら？」

紅麗「馬鹿にしているのか…？」

薫「ごめんなさいッ！！」

紅麗「だが、奴とは戦ってみたいものだ。この？鬼の手？で、妖狐であるあ奴を斬り裂いてやる…！！」

クラウド「お前は何を言っているんだ！？」

薫「はやて姉ちゃんに感化されちゃったんだね…」

紅麗「だが、セフィロスのあの剣技には対抗できない…？千本桜？を使うか？草薙剣？を使うか…」

クラウド「もう色々崩壊しているぞ」

紅麗「さて…そちらの世界はどんな感じだ？」

クラウド「そして、切り替えが早いな。…こちらはフェイトが９歳の頃の時間軸だ」

薫「フェイト姉ちゃんが９歳！？こっちと全然時間軸が違うね」

紅麗「フェイトは９歳の頃から少し変な奴なのか？」

クラウド「変な奴？」

薫「違う違う！？ここの小説自体がイレギュラー？なのっ！」

クラウド「何の事かよくわからないが…フェイトはとても純粋で良い子だ。だが…今は少し精神が衰弱して危険な状態だが…」

紅麗「…そうか。だったら私が平景清になって、９歳のフェイトに喝を入れてやろう」

クラウド「できる事なら…そうしてくれ」

薫「いや、怖がらせるだけだからっ！！顔だけでホラーだからっ！！兄者、ホントにどうしちゃったの！？」

紅麗「気にせんといて…いや、気にするな」

クラウド「何ださっきの口調はっ！」

薫「はやて姉ちゃん？」

紅麗「ちっ…バレてもうたか…」

ぱかっ（仮面を外す）

はやて「そうや、私や。本物の紅麗は今日もサボりや」

薫・クラウド「仮面つけただけで変装できてる！？」

はやて「さて…最後にクラウドさん。私から餞別や」

はやては？佗助？を渡す。

クラウド「いらんわっ！」

U，Tさん、ありがとうございました。

其之十九：プライドを懸けた勝負

市街地の駐車場―。

「ハンカチ持ってるよね？　ＩＤカード忘れてないよね？　デバイスも忘れてないよねっ？　お財布も忘れてないよねっ？　『あの日の思い出』も忘れてないよねっ？　ね？　ね？　ね？」

紅麗達一行が街へ着いて早々、フェイトはこれから別行動をするエリオとキャロに対して、あれはないかこれはないかと過保護モードを全開にしていた。

「う、うん…」

「だ、大丈夫だよ、お姉ちゃん…」

エリオとキャロは、妙な迫力を醸し出すフェイトにやや圧倒されながら返事をした。

「あ、お小遣いは足りてる？　もし、足りなくなると大変だから…」

フェイトはハンドバックの中から自分の財布を出そうとするが、エリオとキャロがそれを止める。

「姉さん、ボクたちもちゃんとお給料頂いてるからっ」

エリオとキャロは不満そうな顔をした。
そういう気遣いは嬉しくないわけではないが、いつまでも甘えているわけにはいかない。
彼女に保護されてから、たくさんワガママを言って困らせたきた。
だからその分、これからは彼女に甘えずに過ごしたい―それが二人の気持ちだった。

一方、フェイトは複雑な気持ちだった。別にお小遣いを拒否されたからといって落ち込みはしない、むしろ立派だと思える。
しかし、拒否された時、何だか？絶対に甘えたくない？という二人の気持ちが伝わったような気がした。
もうこれから先、絶対に甘えてこないんじゃないかと―そんな被害妄想のようなものが浮かんでしまった。
フェイトとしては、もっともっとエリオとキャロには甘えてきて欲しかった。自分は昔、？母？に甘えたくても、甘えられなかったのだ。その悲哀を含んだ消失感は、１０年経っても決して変わらず、今も自分の心に深く根付いている。だから、そんな気持ちを味わわせないために、二人にはうんと甘えてきて欲しかった。

「―じゃあ、二人とも気をつけてね。暗くなる前に帰るんだよ？」

フェイトは暗い気持ちを抑えつつ、エリオたちに言い聞かせる。
二人は微笑みながら返事をすると、フェイトは満足げに頷いた後、

エリオに念話をした。

『エリオは男の子だし、キャロより二ヶ月年上なんだからちゃんとエスコートしてあげるんだよ？』

『…う、うんっ』

エリオはフェイトの言葉に答えが、内心エスコートって具体的にどうすればいいのだろうかと、彼女の言葉を今いち理解できなかった。ただ一緒にプランを遂行するだけじゃダメなのかと困惑していると、

『…まずは手でも握ってやれ』

そんな彼の挙動と心中を察したらしく、紅麗が念話でそう伝えた。義兄からの言葉に、エリオは顔を赤くしながら戸惑いの様子を見せたが、逡巡してからお礼を言う。

そして、エリオは勇気を振り絞って、キャロに手を伸ばした。

「キャロ。手、繋ごっか…？」

エリオはさらに顔を赤くしながら、キャロにそう言った。

一方、キャロは彼の突然の言動に一瞬戸惑いを見せたが、彼女もまた頬を染めながら嬉しそうに微笑んだ。

「…うんっ！」

キャロは、エリオの手を握った。
彼の手の感触が伝わる。
初出動の時も手を繋いだ事はあったが、その時とは違う感触があった。
手が大きくなったとか、体温が違うとか―そんな事じゃない。
何だか安心感を覚えてくる。一生手放したくないと思えてくる。そして、胸が高鳴っていくと同時に、顔が少し熱くなっていく。
今までにない不思議なこの感覚を、キャロは生まれて初めて感じた。
それは、エリオもまた感じていた。何だかよくわからない感覚だった。
よくわからない感覚なのだが、この状態は幸せな事なんだと―それだけはわかっていた。
キャロは彼の手を握る力を少し強くする。そんな彼女に応えるように、エリオもぎゅっと握り返す。
そして、二人は照れくさそうに笑い合い、手を繋ぎながら歩いて行った。

そんな二人の背中を、

「はわぁ～…二人とも可愛いなぁ～…」

フェイト（姉バカ）がにへら～っと頬を緩ませていた。

「…んじゃ、オレも皆とは別行動するね」

薫はフェイトについてあえてツッコまずにそう言うと、フェイトは彼に心配そうな顔を向けた。

「薫、大丈夫？　ちゃんと道とかわかる？」

「うん、シャーリー姉ちゃんに？鋼金暗器？に地図のデータつけてくれたしさ」

そして、念話に切り替える。

『それに兄者とのデート、邪魔しちゃ悪いでしょ？』

フェイトの顔が赤くなった。

何故自分の気持ちがバレてしまったのか疑問に思うが、気を使ってくれた薫に感謝の意を込めて、立てた親指を向けた。

『ありがと、薫。お礼に猫耳カチューシャ、買ってあげるっ！』

『いらないよっ！』

薫は素早く断り、言葉を続ける。

『…その…ガンバってね、フェイト姉ちゃん…』

そう言った彼の口調には、暗い響きが宿っていた。
しかし、フェイトはそんな変化に気付いておらず、彼の言葉に明るい声で応えた。
薫は不安と期待を抱えながらエリオたちとは違うルートを歩いていき、雑踏によってすぐに彼の姿が見えなくなった。

一方、紅麗と二人っきりになった瞬間、フェイトは心臓を激しく高鳴らせた。
出掛ける前と、運転中の時はそれほど緊張していなかったが、今になって急に緊張し始めた。
大好きな彼と二人っきりで街を歩き回るのだ―これは完全にデートとなっている。

(ど、どうしよ…どうしよどうしよ…二人っきり…紅麗と二人っきりだ…な、何するんだっけ?この街で何するんだっけ?どこ行くんだっけ?どこ行くんだっけ?紅麗とどこ行くだっけ?どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ…)

フェイトの思考が大パニックになって収拾がつかなくなってくる。
しかし、そんな彼女に天から救いの言葉が降りてきた。

《アニメイトに行くですよ~》

（リイン！　別に私と紅麗はアニメ好きのカップルじゃないからっ！　はやてじゃないんだからっ！）

ツッコむフェイトに、さらに天から救いの言葉が降りてきた。

《ホテルに行けばええやん》

（は、はにゃて！　一応昼間だきゃらっ！　早すぎるかりゃっ！　い、いにゃ、別に夜になってきゃりゃ行くわけじゃないけど！）

そう言いながらいかがわしい妄想するフェイトに、またまた天から救いの言葉が降りてきた。

《俺だったらダチ呼んで、コンパに行きますねぇ》

（ヴ　ァ　イ　ス、死　ん　で…）

殺気を滲み出すフェイトに、四度目の救いの言葉が降りてきた。

《もっと！！　熱くなれよぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！》

（しゅ、修造さんッ！！？）

「…フェイト」

密かに尊敬する人物の言葉を聞いて驚愕するフェイトに、紅麗が声をかける。

彼の声でフェイトの意識が現実に戻った。

「は、はいっ！　何でございましょうかっ！？」

パニクって敬語になるフェイト。彼女の様子に、紅麗は何とも言えない表情を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「服とかを買いたいから、店に案内してくれないか？」

彼の言葉で、フェイトはようやく目的を思い出した。

「あ、そうだった！　そ、そうですよねっ！　こ、こちらでございますっ！」

そうだ。自分たちが向かう場所は、アニメイトでもホテルでもコンパ会場でもない。

―よしッ！　熱くなれ、私ッ！！

フェイトは熱苦しい言葉で自分を奮い立たせ、行着けのお店に案内しようと勇ましく歩き始めた時、紅麗に肩を掴まれて止められた。

フェイトは呆けた顔で紅麗を見返す。そして、紅麗は彼女の顔に指を差した。

「フェイト、鼻血鼻血」

◇

下水路―。

ひた…ひた…ひた…ひた…

渇いた音が響く。

ごりごり…ごりごり…

引き摺る音が響く。

歩く。

ひた…ひた…

歩く、歩く。

ごりごり…

歩く、歩く、歩く。

ひた…ひた…ひた…ひた…

ごりごり…ごりごり…

薄暗い下水路の道を?少女?はひたすら歩く。
衰弱していく体力を全て、ただただ歩く事だけに集中する。
細い腕に繋がれた鉄箱の重さを意に介する余裕もなく、少女は歩き続ける。
この薄暗い道の先にある?光?を求めて歩いていく。

助けを求めるように。

すがりつくように。

誰かに甘えるように。

歩く、歩く、歩く。

歩く、歩く、歩く。

歩く、歩く、歩く。

◇

衣料品店―。

紅麗は、店員の言葉を受けながら、購入した衣服が詰まった二つの買物袋を片手ずつ持つ。

―思っていたより多く買ったな…。

紅麗は心中で淡々と呟く。

ただでさえ街に出歩く私服がないから、上着やズボンなどを何着も買い、下着も靴下も含まれているから、買物袋がぱんぱんに膨らんでいた。

―一旦、車に置いていくか。

この巨大な膨らみのせいで歩きずらいし、周りからの変な視線を受けたくない。
紅麗は次の行動を決め、周りを見渡しながらフェイトを探す。
すると、すぐに彼女を見つけた。
だが、彼女は？おかしな空間？にいた。
？萌え萌え♪コーナー！？とふざけた文章が書かれた看板が立て掛けられたスペースの所を、フェイトは妙なオーラを放ちながらウロチョロしている。
紅麗は、そこのスペースにある妙な衣装にも、近寄りがたい雰囲気を醸し出すフェイトにも気にかけず、ある一つの疑問に思考を働かせていた。

―…？萌え萌え？とは何だろうか？

まともな疑問ではなかった。
しかし、本人は至って真剣だ。
紅麗は離れた距離から、コーナーに並べられているゴスロリ、セーラー服、ナース服、スクール水着等―数々のふざけた衣装を見つめる。

（…正規のルートでしか手に入れられない服を、このような裏ルートで購入できる―という事か？）

しかし、何か要領を得ない。

―むっ…そういえば…？萌え？という言葉が聞いた事があるぞ。

紅麗は記憶の糸を手繰り始めた。

◇

それはある日の事、紅麗が隊舎の廊下を歩いていた時だった。

「……？」

振動と音を発しながら、前方から？ある三人組？が物凄い勢いで走ってきた。

「よっしゃ、お前らッ！　自分の愛を…叫びやがれ！！」

三人組の中の一人が、意味不明な事を叫んだ。

「……――」

紅麗は目を凝らし？その三人組？を認識した瞬間―彼は顔に影を作った。

そして？三人組？は通り過ぎ様に一人ずつ叫ぶ。

「ラクス萌えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！」

と、ヴァイス。

「アレルヤ萌えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！」

と、はやて。

「待ってくださ～い！　ヴァイス先輩～、はやて先輩～！…あ、ちなみにあたしはティアのツンデレ萌えぇぇぇぇぇぇぇ～！」

と、スバル。

「――――」

意味不明な遊びをするヴァイス(バカども)たちの後ろ姿を紅麗はじっと見つめていた。
その時の表情は、隅に？注：紅麗？と書きたくなるような、そんな顔をしていた。

◇

「――――」

紅麗の顔の影が濃くなった。

未だに？萌え？という言葉も、ヴァイスたちの意味不明な遊びも理解できないが、悪ふざけ以外のなにものでもないという事を判断した。

フェイトをこの変な空間から救うため、紅麗は彼女に駆け寄る。

紅麗は出会った当初から彼女の事を変な奴だとは思っていたが、悪い意味で変な奴になって欲しくなかった。奴らと同類になって欲しくなかった。

「フェイトッ」

紅麗はフェイトに声をかける。すると彼女は、眩しいほどに明るい笑顔で振り返ってきた。

「ねぇ、紅麗っ！？これ？―絶対、薫たちに似合うよねっ？」

彼女の手に持っていたのは―猫耳カチューシャ（薫専用）と、犬耳カチューシャ（エリオ専用）と、ウサ耳カチューシャ（キャロ専用）だった。

「それを…薫たちにやるのか…？」

紅麗は若干引きながら問い掛けると、フェイトはもちろんと即答した。

「…もらった人の気持ちを考えてみろ」

紅麗は溜め息をついて、諭すように言葉を紡ぐ。

そんなプレゼントをもらって薫たちが喜ぶはずがない（キャロはわからないが）。

「……」

フェイトは視線を上に向けながら想像してみた。

「…か、かわいい」

どうやらカチューシャを装着した時の妄想をしてしまったようだ。

紅麗は制止しようとするが、フェイトは『ソニック・ムーブ』を発動したときと同じ速度でレジへ走っていった。

◇

買い物を済ませた紅麗とフェイトは、今度はバッティングセンターに訪れた。

「…凄いな、フェイト」

ピッチングマシンから放たれる１４０ｋｍの速球を難なく打ち続けるフェイトを眺めて、紅麗は意外そうに呟く。

彼女の運動神経が良いというのは、訓練の時で知っているが、まさか１４０ｋｍの球を簡単に打てるとは思わず紅麗は感心する。

しかし、フェイトの表情や雰囲気、バッティングフォームが勇ましいというか、猛々しいというか、雄々しいというか、逞しいというか―失礼だが、野球している彼女はとても？女性？には見えなかった。

そんな紅麗の心情など全く知らずフェイトはバットを握りながら、えへへと照れ笑いする。

「野球見るのも、するのも大好きなんだぁ。ちなみに私、１０年前から阪神ファンなの」

フェイトが阪神タイガースのファンになったのは、彼女が９歳の頃第９７管理外世界―？地球？に住んでいた時期があり、たまたまテレビに映っていた阪神タイガースの試合を見たのがきっかけだった。

それ以来、彼女は野球という神スポーツに興味を持ち始めた。
もちろん、野球チームに入りたかったのだが、管理局員という役職に就いている故、断念せざるを得なかった。しかし、それでも学校の昼休みの時や、空いてる時間に友達（はやてとか、吾郎くんとか、カツオくんとか、スネ夫くんとか）を誘って野球をしていた。
そして、ミッドチルダに移り住んだ今でも、阪神タイガースを愛する心を忘れずに、遠き世界から応援し続けている（休日の日には？地球？へ訪れて、阪神タイガースの試合を観戦しに行く事もある）。
１０年前から今日までの思い出を楽しそうに思い返すフェイトだったが、次に紅麗の口から出た言葉が彼女の心を凍てつかせた。

「ちなみに私は巨人派だ」

紅麗が何気ない一言を言った瞬間、フェイトの表情が固まり、徐々に不機嫌なものに変わった。頬を膨らませ、まるで親の仇を見るような目付きで紅麗を睨みつける。
彼女にとって、宿敵である巨人という球団名は禁句なのである。

「ふざけないでよ、紅麗！　巨人はダメ！　絶対ダメ！　阪神の方が強くてカッコいいんだもん！？最強？なんだもんっ！！」

フェイト・Ｔ・ハラオウン―阪神と教育に関しては、松岡修造のように熱くなれる女。

「いや？最強？は巨人だろ」

紅麗は、やたら阪神の方が強いと主張するフェイトに対抗心を燃やす。もちろん、フェイトも断固として譲らなかった。

「？最強？は阪神だもんっ！　紅麗！　あなたは巨人に騙されているのよッ！！」

「貴様…！　何なのだ、その言い草は…！！？」

「よし、わかった！　じゃあ、勝負しようよ！　阪神と巨人―どっちが？最強？か、ファンである私たちのバッティングで決めようよ！」

「いや、おかしいだろ。何故いきなりバッティング勝負なんだ？」

「あら、勝負から逃げるって言うの！？　紅麗が巨人に対する愛は、その程度だったんだっ！！　それもそうだよね～っ！　紅麗は！巨人に！　洗脳されてるんだから～！！」

「…いいだろう、受けて立とう。阪神に永久（とわ）の別れを済ますがよい」

明らかに安い挑発だったが、長年応援し続けている球団に対する愛がその程度だと言われたり、洗脳されてると言われれば引き下がるわけにはいかず、紅麗はあっさりと乗ってしまった。

勝負のルールは単純。

ピッチングマシンから放たれる１３０ｋｍのストレートを一人１０

球打ち、ホームランの標的に当てれば3ポイント、ヒットの標的に当てれば1ポイント、ファールと空振りは0ポイントとし―その合計点数で勝敗を決める。

紅麗とフェイトはプライドを燃やし、己の信じる球団に?最強?という名の栄光を勝手に与えるために勝負をした。

そして、6対14という圧倒的な点数差で紅麗は完敗し、人生初のｏｒｚポーズを取った。

そして、後に紅麗は語る―「バットを握るのは、あれが初めてだった…」と。

後にフェイトは語る―「空振りする紅麗、すっごい可愛かった…／／／」と。

其之十九：プライドを懸けた勝負（後書き）

ちなみに、当時のフェイトのポジションはキャッチャー（矢野燿大選手が大好きなので）。たまにショート。打順は1番（野球に対する熱き情熱は誰にも負けない！）。

はやてのポジションはピッチャー（クローザー）。（試合中ずっとＢＬＥＡＣＨのセリフを叫ぶので、よくフェイトに怒られる）。

吾郎くんのポジションはピッチャー（先発）。打順は4番（たまに何故か鋼金暗器を持ち出してくる）。

カツオくんのポジションはライト。打順は5番（たまにお母さんのような姉に連れて行かれる）。

スネ夫くんのポジションはショート。打順は8番（たまに脱臼か骨折する）。

中島くんのポジションはファースト。打順は2番（彼のバントは地味に神技）。

ファンゴラムくんのポジションはセンター。打順は3番（シュール過ぎる）。

日向くんのポジションはセカンド。打順は7番。（セカンドフライがトラウマ）

春原くんのポジションはサード。打順は9番（チームのお荷物だが、彼の珍プレーがかなり笑えるのでチームに入れている）。

ヴァイスくんのポジションはレフト。打順は6番（何　故　いる？）。

のび太くんは補欠。

そして、監督は体育教師である松岡修造（だが、テニスについて熱苦しく語るだけなのでフェイト以外の全員に煙たがられている）。

其之二十：嫌悪の言葉

ゲームセンターにて、薫は一人で?ドラムの達人?というゲームをやっていた。

―はぁ～あ…皆、立派に恋愛しちゃってぇ…。

薫は辟易したように呟きながら、手に持ったスティックでドラムを叩く。

エリオとキャロ、紅麗とフェイトを見ているとどこか疎外感を覚えた。

そして、記憶に呼び起こされるのは―初めて恋愛感情を抱いた一人の少女―佐古下柳（さこした）の事。

薫は、彼女に恋愛感情を持ち、そして失恋した。

彼女は、紅麗の異母弟―烈火を選んだのだ。

だが、薫は特に悔やむ思いはなかった。

むしろ二人はお似合いだと思った。朴念仁な烈火はともかく、柳は彼の事をずっと前から好きだったようだ。二人のやり取りを見ればすぐにわかった。

だから、薫は半ば諦めていた（半ば可能性の低い期待をしていたが）。

―恋愛、かぁ…したいっちゃ、したいけどなぁ…。

前の世界でもこの世界でも薫はモテる方だが、彼はこれまで柳以外の女の子に惹かれた事はない。周りは年上ばかりだし、恋愛感情より姉扱いする感情の方が勝っていた。

ふと、一つの顔が脳裏に過る。

赤い瞳、紫色の髪、可愛い顔だが無表情な女の子――。

――…何でルーテシアちゃんが出てくんだろうなぁ。

薫が彼女に対する感情は恋愛とは少し違うものだ。

彼女の事を見ていると?昔の自分?を見ているようで、何か放っておけなかった。

そして、無表情な彼女の笑顔を見てみたいとも思い始めた。

しかし、薫はそれが恋愛感情の兆しという事に気付くまで、長い時間がかかった。

◇

ショッピングやバッティングセンターを楽しんだ紅麗とフェイトは喫茶店に訪れていた。

二人は今、窓際の席に向かい合って座っている。

その窓から見える景色は、建ち並ぶビルやお店、歩道を歩く人々、道路を走る車。

お世辞にも良い景色とは言えないが、二人は意に介さない。今は目の前にいる異性だけに意識を向けているからだ。

「…エリオたち、大丈夫かなぁ」

フェイトは窓から街の景色を見ながら心配そうに口を開いた。
街並みを見ても、エリオたちの姿はない。
いないとわかっていても、彼女の心配性からほぼ無意識に街並みを見つめていた。
彼女のそわそわとした様子を見て、紅麗は小さく溜め息をつく。

「二人で行動をしているし、デバイスに地図のデータが入っているんだから、そんなに心配する事はないだろう」

「でも…保護者として、姉として心配だよ」

「…前々から思っていたが、お前は二人に対して少し過保護が過ぎるのではないか？」

「そんな…過保護なんて…！」

心外と言わんばかりにフェイトは顔を強張らせると、紅麗はすぐに自分の言葉を付け足す。

「いや、私はただ疑問に思っているだけだ。お前が二人に対する態度が…何だか妙だと思ってな」

その指摘に図星を指されたようにフェイトの心臓が跳ね上がる。
彼の鋭い感性にはいつも驚かされる。
それとも自分の態度にわかりやすく出ているのだろうか？　フェイトはそう思いながら、紅麗の言葉に応える。

「二人は…私とちょっと、似てるんだ」

フェイトは、エリオとキャロの境遇についてぽつりぽつりと話し始めた。

まずエリオは、富豪・モンディアル家の長男として英才教育を受けながらも両親からの愛情をもらい、幸せな生活を送っていた。しかし、そんな生活はあまりにも短かった。

エリオは真実を知った。

？本物のエリオ？はすでに病死しており、今いるエリオは違法研究―？プロジェクトF？によって生み出されたクローンなのだ。
その事実を突き止めた研究機関によって、エリオは無理矢理両親から引き離された。
クローンとはいえエリオを溺愛していた両親は当然抵抗した。
しかし、研究機関にエリオの事実を突きつけられ、あっさりと抵抗を諦めた。
違法研究に手を出してしまった事が公になれば当然罪を問われてしまう。エリオの両親はそれを懸念していた。
それに、エリオは所詮―クローンだ。

公にならなければ、売り渡しても構わない。
だから、抵抗を諦めたのだ。
両親の裏切り、研究機関からの非人道的な扱いから、エリオは一時期重度な人間不信に陥っていたそうだ。

そして、キャロはある次元世界での召喚部族の出身で、強力な召喚術の才能を秘めていた。しかし、強力と言うより―?強力過ぎた?のだ。
?強い力は災いしか生まない?と、部族の長老たちは災いを懸念し、幼い彼女とフリードを部族から追放した。
幸いにも管理局に保護されたのだが、正規の教育も訓練もほとんど受けていなかったから、当然竜達の制御が上手くできず、どの部隊からも持て余されていた。

そして、エリオとキャロを保護してからも自分になついてくれまで、穏やかで明るい性格になるまで随分と時間がかかったと、フェイトは語った。

「…そうか」

フェイトの話を聞いて、紅麗は感慨深げな呟きを漏らした。
そして、キャロの苦しみに対して、強い共感を覚えた。
紅麗は四歳の時、火影の民たちに酷い扱いを受けた事があった。
天正三年（１５７２）、当時の火影は後の頭首となる?炎の児?の出生は切に望まれていたため、現頭首である炎術士には二、三人の妻がいた。

そして、六代目火影頭首―桜火に?炎の児?を授かった。彼の側室―麗奈が生んだ紅麗と、正室―陽炎が生んだ烈火だった。
しかし?炎の児?は一代に一人のみ現れるとされ、炎の児が二人以上生まれた時―それは火影に災いが起こる不吉な予兆とされ、災いとなるどちらかの児を殺さなければならなかった。
そして、火影の里の長老は、紅麗が災いと説いた。
紅麗が生まれた時から長老は彼から?感じるもの?があり、紅麗が生まれた後も子作りを続けさせた。

邪悪なる心―?呪われし炎?、長老はそれを感じ取り、彼を恐れ、紅麗を殺させようとした。
しかし、桜火の正室―陽炎が幼子を殺めるのは忍びないと里の重鎮たちに説得した。
何とか説得は成功したものの、紅麗は火影の民の子供たちから?呪い児?と罵られ、傷付けられ、死にたくなるほどの苦しい思いをしてきた。
だが、そんな彼にも愛する母もおり、尊敬している父もいた。当時、紅麗が自害しなかったのは、二人の存在があったからだ。

自身の生まれついた?力?によって、里から恐れられた紅麗とキャロはよく似ている。

両親はいるが民たちに酷い扱いを受けていた自分と、親もおらず孤独に苦しみながら彷徨うキャロ――どちらが不幸なのかと紅麗は頭の隅で考えながら、語り続けるフェイトの話に耳を傾ける。

「―私もね…エリオと同じなんだ…」

フェイトは自分の胸に手を当てながら紅麗にこう告げた。

「私も…クローンなんだ」

紅麗の瞳がわずかに見開き、フェイトは続ける。

１０年前、９歳だったフェイトは母―プレシア・テスタロッサから虐待を受けながら、当時第９７管理外世界―地球に現れたロストロギア―?ジュエル・シード?を集めていた。

日々が過ぎていく中、だんだんエスカレートしていく虐待。

しかし、フェイトはそれに耐えながら母が求める?ジュエル・シード?を集め続けた。

記憶に存在する優しい母―それが、フェイトがプレシアを憎まず、愛する理由だった。

しかし、真実を知った。

フェイトは、プレシアの実娘―アリシアのクローンだった。

?プロジェクトF?は容姿や記憶を元の人間と同じにする事はできても、性格、魔力資質等は同じにする事はできなかった。

だから、プレシアはアリシアとは異なるフェイトを愛情を以て接する事ができなかった。

そして、プレシアはフェイトの事をこう言った―?役立たずなお人形??いらない子??アリシアの偽物??失敗作?。

最も愛する母に言われた、残酷な言葉の数々だった。

「―だからね…孤独に苦しむ気持ちと、悲しい気持ちを分け合うために―私は、エリオとキャロを保護したの」

フェイトは小さく微笑む。

なのはが友達として手を差し伸べてくれた時、リンディが母として手を差し伸べてくれた時―悲しい思いをしてきたフェイトにとって、とても嬉しかった。

裏切りや孤独などの悲しい気持ちと、手を差し伸べてくれた嬉しい気持ちがわかるからこそ―フェイトは、なのはたちにしてくれた時と同じように、悲しい気持ちに苦しむエリオとキャロに手を差し伸べたのだ。

―フェイトは…エリオたちに対して、そんな思いがあったのか…。

自分が実の親に愛情を恵まれなかったから、自分が与えられなかった愛情をエリオたちに与える―確かに、そんな思いがあれば過保護になるのは無理ないかもしれない。

紅麗はそう思いながら、別の事も思案する。

？クローン？―その単語から、そう遠くない記憶を呼び起こす。

自分と、今は亡き愛する人のＤＮＡから造られたクローン―煉華（れんげ）の事だ。

？邪な事を考えない忠実な紅麗？として、森光蘭に造られた哀れな玩具。

彼女もまたフェイトとエリオと同じように、造った人間に裏切られた。

炎術士である紅麗と烈火に対抗するために、炎に対する抵抗力をつけるために、？免疫？として天堂地獄に取り込まれたのだ。

だが、紅麗にはわかっていた。

彼女は、どの道？死ぬ？運命だったという事を。
自分以外の人間をどうでもいいと思っている森光蘭の心が嫌でもわかっていたから、彼女は森光蘭に裏切られて、死ぬという事を確信していた。
自分（オリジナル）に殺されるか、森光蘭に裏切られて殺されるか―彼女の末路はその二つしかない。？誰に殺されるか？―ただ、それだけの違いだ。
―？クローン？の気持ちなどわからぬ…。
紅麗は正直に断言した。
自分はクローンですらないから、クローン女が森光蘭に裏切られたその気持ちはわからない。
そこまで思案していた紅麗は内心で自嘲するように小さく鼻を鳴らした。？息をしているだけで不愉快に思う人形？の事を考えてても時間の無駄だ。
紅麗は煉華の事を閑却し、彼女に対する思案を消し去るようにフェイトに向けて疑問を口にする。
「フェイトのミドルネームの…Ｔ（テスタロッサ）とは、母の名字からか？」
フェイトは首肯し、それを見て紅麗は続ける。
「一度も優しくしてくれなかった母の名字を捨ててないという事は…まだ、母を愛しているのか？」

答えはわかっている。それでも確認したかった。
紅麗の問い掛けに、フェイトは笑顔を浮かべながらもう一度頷いた。

「だって、私がクローンでも…プレシア母さんにどんなに傷付けられても…私と母さんは―?親子?だもん」

フェイトは照れくさそうに、それでいて誇らしげに微笑んだ。
優しいプレシアの記憶があるから、プレシアを愛しているのではない。それはアリシアの記憶だ。そして、あの時の優しいプレシアは、アリシアを愛していた。
だから?記憶?があるから、プレシアを愛しているのではない。
どんな形とはいえ自分が子供で、プレシアが母―その?絆?があるから、自分は母を今でも愛している。
どんなに罵られても、どんなに傷付けられても、そんなものは?絆?があれば関係ないのだ。
フェイトの言葉に、紅麗もまた嬉しそうに微笑した。
彼もまた母を愛する人間だ。彼女の言葉に、共感と嬉しさを覚えていた。
すると、今度はフェイトが尋ねた。

「紅麗は?　紅麗のお母さんは、どんな人?　今は、どうしているの?」

紅麗は微笑を消し、静かに口を開く。

「…一人目の母は、私が四つの時に亡くした」

―正確には見殺しだが…。

紅麗はあえて言わず、愛する母すら救えなかった当時の無力な自分を強く呪いながら答えた。

「ご、ごめんね…」

悲しげに顔を伏せるにフェイトに紅麗は気にするなと言い、話を続ける。

「その後、時空流離で４００年先の未来へ流れ…二人目の母と出会った。数ヶ月前に今生の別れてをしてしまって…１６年間しか共に過ごせなかったんだがな」

―母上は…今頃、どうしておられるだろうか…？

紅麗は、今生の別れを果たした二人目の母―月乃（つきの）の事を思案していると、フェイトがまだ顔を伏せている事に気付いた。

「…どうした？」

紅麗が問い掛けると、彼女はうつ向いたまま暗い口調で言葉を紡ぐ。

「ごめんね…時空管理局（わたしたち）の技術が、平行世界に対処できたら…二人目のお母さんと、再会できるのに…」

フェイトは自分の無力さに悔やみながら、自身の手を強く握る。
母と離ればなれになる寂しさは、フェイト自身もよくわかっている。
もし方法があるならそれにすがりたい。
彼に、母と再会（あ）わせてやりたい。

「…だから気にするな」

紅麗は短く言葉を紡ぐ。短いが、その言葉には優しいものがあった。

「母に会いたい―というのが正直な気持ちだが、母上には別れを告げた。…それに、時空管理局の高度な技術を持ってしても対処できないのなら仕方ない…お前が悔やむ必要はない」

だが、諦めてはいない。
知人のユーノに無限書庫で過去の世界、平行世界を行ける方法を探してもらっている（未だに方法の片鱗すら見つかっていないが）。

「…うん…ありがと、紅麗…」

彼の言葉に少し立ち直ったフェイトは、再び紅麗の母についての話に戻る。

「二人のお母さんは、どんな人だった？」

フェイトは尋ねると、紅麗は二人の母の事を思い起こしながら口を開く。

「一人目の母は厳しい人だったが、とても優しい母だった…二人目の母は共にいる時間が少なかったが、彼女もまた優しい母だった」

「…そっか」

無表情に語る紅麗だったが、母を語る彼の顔がどこか楽しそうに見え、フェイトは嬉しそうに微笑む。

「…しかし、お前は強い人間だな」

「……？」

紅麗の突然の言葉を理解できずフェイトは首を傾げると、彼は理由を口にする。

「母とは言えお前を虐待し、酷い言葉を言った人間だ…その者に対して母として愛する事ができるお前が、とても強い人間だと思ってな」

するとフェイトは苦笑いしながら首を振った。

「私は強くないよ…どちらかと言うと、弱い人間だよ。…それに子供が母親を愛するのは、当たり前な事だと思うの。紅麗だって、私と同じ境遇になってもお母さんの事を愛すると思う」

フェイトの言葉を受け、紅麗は沈黙しながら思案する。
もし、自分が母―麗奈に虐待や酷い言葉を言われたら、自分はどうするだろうか？
厳しくもあるが、優しい母だ。そんな酷い母は想像もできない。
だが、

「―そうだな。たとえ虐げられても…私も…そんな母を愛するかもしれない」

確信めいたものがあった。やはり？母子（おやこ）の絆？と言うものが、紅麗が母を愛する理由となっていた。そして、紅麗はプレシアを愛するフェイトに共感を覚えた。

一方、紅麗の言葉にフェイトは嬉しそうに微笑んでいた。

―やっぱり、私と紅麗は似ている…。

母を愛する気持ちも、母を失った悲しみも、二人目の母から手を差し伸べてくれた嬉しさも―全てが似ている。
嬉しい思いも、悲しい思いも似ていて、フェイトは紅麗に対して親近感を覚え、彼の事を益々好きになれた。
もしかしたら彼と出会った時から、彼から醸し出される?母を愛する気持ち?というものを感じ取っていたのかもしれない。

そして、フェイトは確信した。
―私は…紅麗の事、大好きなんだ…。

彼を見た瞬間から、今までになかった暖かな気持ち―それが何なのか、これまでよくわからなかった。
今まで恋愛をしてこなかったフェイトにとって、それが恋心なのかあまり確信できなかった。
しかし、フェイトは紅麗の気持ちを知り、自分と似ているんだと確信すると同時に―自分は紅麗の事が大好きなんだという事にも気付く事ができた。

一方、紅麗は胸の中に感じる暖かな気持ちに思いを巡らせていた。
思えばこんなに楽しく、嬉しい気持ちになったのは久しぶりかもしれない。

―まるで、紅と一緒にいる時のようだ…。

自分が一番素直になれる、最も愛しい者。
フェイトと過ごす時間が、紅と過ごした時間と重なって思えた。
紅と一緒に買い物をしたり、街を遊び回ったりした事はないのだが、

もし、したのならこんな楽しい気持ちになるのだろう。

―…いや、よそう。

紅の事について思案していた紅麗は内心で自嘲するように呟く。

フェイトと紅を重ねてはいけない。

フェイトはフェイト、紅は紅だ。

これではまるで、フェイトを?紅の代わり?として見ているようではない。

紅麗はそんな考えを否定するように、フェイトの顔を見た次の瞬間、景色が揺らぎ始めた。

いや、正確にはフェイトの姿だけが揺らいだ。

そして、揺らぎが止まった瞬間――紅麗の瞳に映ったフェイトの姿が、?全く別の女性?へと変貌した。

長い金色の髪が栗毛の髪になり、瞳の色も、形も、顔の輪郭も、肌の色も、眉毛の長さも―全てが変わった。

――!!?

紅麗は目を見開く。

フェイトの姿が――紅の姿になっていた。

―やめろッ!!重ねるなッ!!

紅麗はすぐに顔を背けた。

冷や汗が止まらない。

動悸が止まらない。

胸の中が冷えた感触が止まらない。

―やめろ…

否定したかった。

―やめろやめろ…！

己の本能が、フェイトを？紅の代わり？として見ている事を否定したかった。

―やめろやめろやめろ…！！

だけど、否定できない。

―やめろ…重ねるな…！！

紅麗は必死に何度も何度も、自分の心に言い聞かせる。

？フェイトと紅を重ねるな！！？

？フェイトは？紅の代わり？じゃない！！！？

しかし、いくら言い聞かせても、心が彼の言葉を否定した。

？違う？と。

「――――」

たった一言。

たった一言だ。

たった一言でも、それには強くて、重たくて、はっきりとした説得力があった。
心からの、本能からの、本心からの一言に、紅麗はすぐに諦めてしまった。
そして、確信した。

―私は…？紅の事を引き摺っている？…。

今まさにフェイトの姿が紅の姿に見えた事も、フェイトと過ごす時間が紅と過ごした時間と重ねて思えた事も、心からの言葉を否定できなかった事も、自分のデバイスに？紅？と名付けた事も―全て、彼女を引き摺っているからだ。

彼女とは別れを果たしたはずだった。
この世界に来る前に、別れを果たしたはずだった。
しかし、未だに忘れられず―いや、未だに彼女に依存せずにはいられなくなっていた。
たとえ、抱き締めたいと思っていた身体が、触れ合いたいと思っていた唇が炎になっていても構わない。
ただ、彼女と共に永遠を歩みたかった。
それだけで自分は満足なのだ。

だが、その彼女がいない今―自分は無意識に？彼女の代わり？となる者を探していたのかもしれない。
そして、それが―フェイトだった。
その姿もその心も、何もかも紅と似ていない。？だが、似ている？。
正確には、心が無理矢理似せた。
紅に依存する自分の心が無理矢理似せたのだ。
そう思うと、自分とフェイトが過ごしてきた時間が嘘のように思えた。そして、自分と？紅の代わり？が過ごしてきた時間が本当のよ

うに思えた。

思えばこの世界へ流れてフェイトと出会い、嬉しく笑ったのは―？
紅の代わり？を見つけたと心が歓喜に震えたからなのかもしれない。
あの時は無意識に笑っていたから、実際はわからない。
だが、そう思うと、そう思えてくる。

「紅…れ…麗、紅麗っ！」

誰かに呼ばれ、紅麗の意識が現実に呼び戻される。
紅麗が顔を上げると、フェイトが心配そうな顔をしていた。

「どうしたの、紅麗？　呼んでも、返事なかったから…何か顔色悪いし…」

「…ああ…大丈夫だ…」

紅麗は苦しげに呟く。
そして、優しい彼女に対して罪悪感を覚えた。

―心配してくれているのは嬉しいが…お前が心配している男は…とても残酷で、醜悪な事を考えいるんだぞ…。

そんな事を露程も知らないフェイトから目を反らすように、紅麗は窓から景色を見たその瞬間、彼は目を見開いた。

「……？」

フェイトは彼の様子に訝しげに見た。
自分の呼び掛けに反応しなかったり、顔色を悪くしたり、今度は景色を見たら目を見開いている。
しかも、とても驚いている様子だった。
絶対に目にしないものを目にしたような、そんな顔だった。

―何を見たのかな？

フェイトも彼と同じように窓から景色を見ようと思った時、今度は彼女も驚きに目を見開いた。驚きの他にも、恐怖があった。

―また…あの時の顔…。

驚愕の表情を浮かべていた紅麗が、氷のような冷たい表情に切り替わっていた。
目付きが鋭くなり、その瞳がギラギラと強い殺意に満ちていた。
そして、彼から醸し出される重々しい殺気。
それは敵愾心を向けてきたシグナムに見せた表情よりもずっとずっと冷たかった。その殺気も以前よりずっとずっと重たかった。
しばらく見ていなかったから、忘れていた。
もう見る事はないだろうと思っていた。
もう見たくないと思っていた。
なのに、彼はまた？こんな姿？になってしまった。

「…フェイト」

紅麗は？景色？を睨んだまま、フェイトの名を呼ぶ。
冷たい声だった。
その声に含まれる冷たさと殺意はフェイトに向けられていない。だが、それをわかっていてもフェイトは？殺される？と思ってしまった。
だが、そんな彼女に意に介していない様子で紅麗は続ける。

「私は少し外へ出る…？すぐに済ませる？」

最後の言葉が、一番冷たい響きと殺意が宿っていた。
フェイトは彼を止めようと、制止の声をかけようとするが恐怖で声が出ない。

―止めなきゃ…紅麗を止めなきゃ…！

胸騒ぎがする。
彼を止めなきゃ？何かとんでもない事？が起こるかもしれないと、フェイトは恐怖感を覚えながら確信した。
しかし、紅麗はフェイトの返事を待たずに、その姿を消した。

◇

―私…何で…こんなところにいるの…？

？少女？は混乱しながら、街中をふらいた足取りで歩んでいく。
周りの人たちは少女に奇妙な視線を向ける。

少女は腰までの長さがある真紅の髪とつぶらな瞳を持ち、その可愛げがある容姿で一人や二人の視線を集める事はできるだろうが、多くの視線を集める事まではできないだろう。
その視線を集めている理由は、？紅麗と同じ？漆黒の黒衣を纏っていたからだ。
その全身を纏う黒衣は街中を歩く服装ではないから、通行人たちに注目されていた。
そして、彼女の挙動不審な様子もまた視線を向ける理由でもあった。
混乱した様子で周りを見渡しながらふらいついた足取りで歩く少女に、迷子なのかと思わされた。
心優しいのかお節介なのか一人の通行人が少女に声をかけるが、酷く混乱している少女はそれすら耳に入らず歩みを止めない。

―ここは、どこなの…？

少女は混乱しながらも、何故自分はこの場所にいるのか。ここはどこなのかと、鈍い思考を巡らせていた。

―確か…私は…たくさん目があるおっきな蛇に食べられたはずなのに…。

巨大蛇にくわえられながら抜けていく力、石化していく身体―あの時は自分は死ぬんだと思っていた。

そして、視界が暗くなった時―自分は死んだんだと確信した。
あの真っ暗な世界は、吐き気がするほどに嫌な世界だった。

何も見えないけど、色んな声が聞こえた。
声というより悲鳴だ。色んな悲鳴が聞こえた。
ほとんどが女性の声だったが、色んな言葉を絶叫していた。

?助ケテェ助ケテェェェェェェェェェェェェェェ!!!!!??
何デ、私ガコンナ目ニッ!!!??アノ男、絶対ニ絶対ニ殺シテヤルッ!!!??苦シイィィィィィィ!!苦シイィィィィィィィィィィィィッ!!!?

少女は必死に耳を塞いだ。
耳が潰す勢いで耳を塞いだ。
だけど、絶叫は頭の中に何度も何度も響く。
決して逃れられない絶叫の地獄。
気が狂いそうだった。

そして、自分もまたこの絶叫の仲間入りになるんだと思った。
しかし、あまり嫌ではなかった。
こんな絶叫を四六時中聞くより仲間入りになって楽になった方がずっと良かった。
だが、絶叫の地獄は終わり、少女がそれの仲間入りする事はなかった。

暗い世界に光が照らしてくれた。
だが、その光の正体が?炎?だと認識するまでしばらく時間がかかった。
炎なのに熱く感じず、とても暖かで優しい?炎?だった。

そして、その?炎?に包まれた時、身も心もとても安らげた。
お風呂に入ったり、ベッドの中で眠ったりして一日の疲れを癒すものとは遥かに違う安らぎだった。
死んだ自分はこれからどうなっていくのか、そんな不安すら?炎?が払拭してくれた。
きっと、とても幸せな世界が待っているに違いない。
そう思いながら?炎?に包まれながら眠りについた。

そして、現在に至る。
死んだ自分の行き先が、全く見知らぬ街とはどういうことだろうか?
天国にも地獄にも見えない。それどころか、あの世の世界ですらないのか?
この世にいる人間が、死後の世界がどんな所なのかと語れるはずがないのだから、ここがあの世だったのならそう思い込むしかない。

―とりあえず…ここがどこなのか、誰かに聞いてみよ…。

混乱していた少女の思考は、時間経過で落ち着き始める。
幸いにも周りに多くの人達がいるから適当に捕まえて、話を聞こう。
少女は行動の方針を決め、早速実行しようした次の瞬間、景色が急に切り替わった。
さっきまで視界に入っていた道路を走る車も、たくさん並んでいる建物も、好奇な視線を向ける人達も、何気無く視界に入っていた空も地面さえも―?全て消えた?。
代わりに視界に入ったのは―壁、だろうか?再び思考が混乱したからよくわからない。
他にわかっている事は、さっきまで太陽の光で明るかったのに急に暗くなった。暗くなったと言っても、真っ暗になったわけじゃない。
少し暗くなった程度だ。

そして、他にわかっている事は―浮遊感。
さらに、自分の首が？ダレカ？に掴まれている感、ショ、ク―

落ちた。

転がった。

しばらく転がった。

止まった。

何が？

自分自身の身体だ。

そして、アスファルトに叩きつけられた事によって全身に走る鈍い痛み。

「ああっ…あぐっ…ううっ…！」

少女は呻き声を漏らしながら、地面の上で身体を縮こませる。

―な、何が…何が起こったの…？

少女は痛みに耐え、混乱しながら視線だけで辺りを見渡す。
上を見上げれば青い空、周りを見れば自分を挟むように聳え立つ建物。

どうやらここは街の路地のようだ。
あの一瞬で横合いから?誰か?に、ここに引き摺り込まれたらしい。
でも、?誰?が?
だが、その?答え?が少女の視界に捉えた。

「―ッ!!?」

少女は恐怖と驚愕につぶらな瞳を大きく見開く。驚愕よりも恐怖の方が遥かに勝っていた。
なぜなら、少女の目の前に?最も会いたくない人間?がいたのだから。

赤みがかかった長い黒髪。

―怖い…

死神の彷彿させる漆黒の黒衣。

―怖い怖い!

顔全体を覆うように刻印が刻まれた仮面。

―怖い怖い怖い!!

少女は、目の前にいる?恐怖?は幻だと思いたかった。自分は悪い夢を見ているんだと思いたかった。
しかし、否定できなかった。
?自分がもう一人いるみたいなこのカンジ?―それが最大の理由だ

ったからだ。

―ヤだ！！怖い！！怖い怖い怖い怖イこワいコワいこわいコワイ死ぬシヌしぬシヌ死ヌシヌシヌしぬ！！！

「貴様は余程…」

？恐怖？が冷たい声をかけてくる。
髪を掴まれる。
そして、そのまま顔の前まで持ち上げられる。

「この私を苛立たせたいらしいな…そんなに早く死にたいのか？」

言葉を紡いだ男が―？紅麗？だと少女は認識した瞬間、少女は悲鳴をあげようとした。
だが、悲鳴をあげる前に殴られる。
口内に広がる血の味を感じながら少女は地面に倒れる。
そんな彼女を、紅麗は容赦無く蹴り飛ばした。
そして、蹴る。
さらに蹴る。
踏みつける。蹴る。踏みつける。踏みつける。蹴る蹴る蹴る蹴る。
顔面に。腹に。腕に。足に。胸に。首に。顔面に。

少女を十分に痛みつけた紅麗は再び少女の髪を掴み、持ち上げる。

「？失敗作？…死んだはずのお前がこの世界に巡ってしまった運は

最悪と言っていい、この私と出会ってしまったんだからな。だが…」

少女の髪を掴んでいない右手に、マッチに火が点くように紅い炎が纏った。

「同時に最善でもある」

その炎を纏った右手が少女の顔に突きつけられた。
少女にとって、その右手は剣の刃よりも、拳銃の銃口よりも遥かに遥かに恐ろしいものだった。

「喜べ…その苦しみから解き放つために私がお前を灰にしてやろう…」

「いやあぁぁぁ

少女は助けを求める。必死に必死に助けを求める。
いつも自分を褒めてくれるパパに。
いつも自分の頭を撫でてくれるパパに。
いつも自分を優しくしてくれるパパに。

『貴様も本体進化の贄となれ、？失敗作？』

自分ヲ突キ飛バシナガラ、冷タイ声デ言ッタパパニ。

「――――」

少女の全身の力が抜けた。
少女の瞳に生気が失った。

助けてくれる人なんて、どこにもいない。
ずっと信じていたパパでさえ、自分を裏切った。
もう死んでいいのかもしれない。
早く殺されたい。
早くこの恐怖が終わって欲しい。

少女は全てを諦めた。

そして、紅麗は少女を焼き殺すために炎を放―

「紅麗ッ！！！」

第三者の声が紅麗の暴挙を止めた。
紅麗は首だけ振り返ると、そこには彼を追いかけてきたフェイトだった。

「いったい何してるの、紅麗！！？」

フェイトは血相を変えながら紅麗たちの間に割り込み、彼の手から無理矢理少女を引ったくった。そして、フェイトは痣だらけになっている少女の顔を見て、驚きの表情を浮かべた後、表情を強張らせた。

「…紅麗が、やったの…？」

フェイトの口から自然とその言葉が出た。
あのやり取りを見たら、答えはわかっている。
だが、否定されたかった。
？優しい紅麗？が、そんな事をするはずがない。
フェイトは紅麗から否定の言葉を期待した。
しかし、

「ああ、私がやった」

紅麗は否定しなかった。事実を語った。軽い口調で、淡々と。

「…ッ…」

フェイトは少女をあやすように抱き寄せ、優しく頭を撫でる。
すると少女の瞳に生気が戻り、少女はフェイトの胸に顔を埋めながら嗚咽を漏らし始めた。
フェイトは少女を抱き寄せながら言葉を紡ぐ。

「酷いよ、紅麗…何で…何でこんな事するの…？　この子が…何したっていうの…？」

「…教えてやろう、そいつが何なのか」

フェイトの問い掛けに紅麗は淡々とした口調で答える。

「そいつの名は煉華―私と紅のＤＮＡから造られたクローンだ」

「―！！？」

フェイトは驚愕した。

―この子も…私とエリオと同じ、クローン…？　紅麗の、クローン…？

フェイトが困惑の表情を浮かべていると、少女―煉華は涙を流しながら言葉を紡ぎ始めた。

「パパぁ…どうしてぇ…？」

煉華はここにいない？パパ？という人物に向けて、独り言のように問いかける。

「どうして…どうして、私を裏切ったの…？」

フェイトは目を見開く。

煉華の言葉に、フェイトの心が揺さぶられた。

「ううっ…私、ガンバったのに…ひっく…？何も考えず？に、パパの言うことを聞いてたのにぃ…なのに…何で、何でぇ…うくっ…うっ…うえええええええんっ！！」

フェイトは、幼女のように泣き叫ぶ煉華を見つめながら理解した。

―ああ、そうだ…この子は、？昔の私と同じ？なんだ…。

ただ褒められたかったから、笑顔になってもらいたかったから文句を言わずに何でも言う事を聞いてきた。頑張ってきた。

でも、最後には裏切られた。

同じだ。全く同じだ。

フェイトは慰めるように煉華を強く抱き締める。

しかし、そんな彼女に残酷な言葉が掛けられた。

「フェイト、その？出来損ない？をこちらに渡してくれ。今すぐ、そいつを？焼却？せねばならん」

紅麗は、まるでゴミを燃やすような軽い口調で言った。

それに対して、フェイトは呆けた表情を浮かべた。

―今…何て言ったの…？

フェイトは彼の言葉を一瞬理解できなかった。

？出来損ナイ？？

誰ガ？―煉華（コノ子）ノ事？

？焼却？スル？

誰ヲ？―煉華（コノ子）ヲ？

フェイトの心情を知ってか知らずか、紅麗は言葉を続ける。

「そいつは?欠陥品?の?作りモノ?だ。造った者に—信じていた者に飽きられた哀れな?オモチャ（人形）?だ」

フェイトの頭の中が混乱した。

ただただ紅麗の言葉を思い出す。彼の言葉を否定するように、間違ったところはないかと思い出す。

?欠陥品??煉華（コノ子）ガ?

?作リモノ??煉華（コノ子）ガ?

?人形??煉華（コノ子）ガ?

誰ガ

誰ガ言ッタノ?

紅麗ガ?

紅麗ガ言ッタノ?

ク麗ガ?紅レいが?クれイガ?クレイガ?くれいガ?

?私ノ大好キナ人?が言ッタノ?

信じられなかった。

信じたくなかった。
彼は優しい人のはずだ。

暴挙を起こしたなのはから、ティアナを庇ったじゃないか。なのはを説得したじゃないか。
エリオとキャロを、兄として接してくれたじゃないか。
エリオたちの他人行儀な言葉使いを指摘し、自分を姉と呼ばせるきっかけをくれたじゃないか。
今日のデートで、楽しい時間をくれたじゃないか。

一年すら経ってないが、彼と過ごす時間がとても楽しかったのに…。
彼の心に、自分はますます惹かれていったのに…。

なのに、どうして？
何でそんな酷い事を言うの？
あなたはそんなに残酷な人だったの？
これじゃあ…今までの楽しくて、嬉しくて、ドキドキした時間が全部―嘘ノヨウジャナイカ…。

沈黙するフェイトに痺れを切らした紅麗はさらに言葉を続けた。

「さっさとしてくれないか？　私は、その？失敗作？を―」

「うるさいッ！！！！！」

怒鳴り声が彼の言葉を止めた。
フェイトは顔を伏せながら、泣き続ける煉華を強く抱き締める。

「？出来損ない？…？欠陥品？…？作りモノ？…？人形？…？失敗作？…全部…全部、私が大っ嫌いな言葉だよッ！！！」

フェイトは怒りと失望の感情を込めた言葉を、紅麗に叩きつけた。
そして、次に彼女の口から出た言葉は先程とは真逆な、静かな言葉だった。

「最低だよ…紅麗…」

するりとその言葉が出た。
息を吐くのと同じくらい、あまりにも簡単に出た言葉だった。
罪悪感なんてなかった。これでもまだ足りないくらいだった。

「……」

一方、紅麗は何も言わなかった。
仮面を被っている彼の表情はわからない。怒っている顔なのか、悲しんでいる顔なのか、無表情なのかすらわからない。
ただただ、フェイトの言葉を肯定するように口を噤んでいた。

其之二十一：無眼の蜘蛛（前書き）

我は炎の蜘蛛。
糸で捕らえ、毒牙で喰らい、魔眼で焼き尽くす。

我は炎の龍。
火鱗で切り裂き、炎牙で喰らい、魔眼で焼き尽くす。

そして、我は邪悪竜。

其之二十一：無眼の蜘蛛

聖王教会本部―。

この教会本部の一室にて、黒い礼服を纏った金髪の美女と黒い制服を着た黒髪の青年が、花を生けた花瓶が置かれた白いテーブルを挟んで椅子に腰掛けていた。

まず、美女の名はカリム・グラシア。聖王教会の騎士でもあり、時空管理局としての階級は少将、役職は理事官の肩書きを持っている。

一方、青年の名はクロノ・ハラオウン。階級は執務官と提督、役職はＸＶ級艦船―？クラウディア？の艦長。フェイトの義兄でもあり、カリムと同じく機動六課の運営に尽力している人物だ。

今日、ここで二人が対面しているのは、今後の機動六課の運営面や任務等についての話し合いのためだ。

話し合いには、部隊長のはやてや、査察官であるカリムの義弟―ヴェロッサも交える時もあるが、今回はカリムとクロノの二人だけだ。

しかし、堅苦しい話し合いだけでなく、今もこうしてお茶を飲みながら世間話をすることもある。

「それにしても、あなたの制服姿はやっぱり新鮮ですね」

最初に口を開いたカリムの言葉に、クロノは少し苦笑いする。

「制服が似合わないと言うのは、友人どころか妻にまで言われますよ」

若々しい容姿に似合わず、彼には妻と二児の子供がいるのだ。
クロノの冗談混じりな言葉に、カリムは小さく笑う。

「そんな…いつもの防護服姿と同じくらい凛々しくていらっしゃいますよ、クロノ提督」

カリムは微笑んだまま、社交辞令が一切無い正直な感想を言う。
しかし、？彼？には遠く及ばない、と心中で呟く。
？彼？の燕尾服姿と防護服姿は誰よりも凛々しく、逞しく、美しい。
しかし、？彼？が別部隊へ異動してから、目の保養になるその姿をしばらく見ていない。
異動させたのはカリムの意思であり、例の？通り魔事件？や？レリック事件？のことを考慮すれば最善的な選択なのだから、後悔はしていない。だが、密かに恋心を抱く？彼？がいないことに、カリムは寂しく思える。

今、？彼？はどうしているだろうか？
どこの馬の骨かわからない女の毒牙にかかっていないだろうか？
もし、その害虫が現れたとして、友人は―ちゃんと排除してくれただろうか？
聖王教会の聖母がそんなおっかない事を思っていると、部屋のドアが開かれた。

「失礼します、騎士カリム」

現れたのはシグナムとシャッハ、そして蛭湖だった。

「おかえりっ、蛭湖、シグナム」

先程の黒い心が霧散し、カリム頬を染めながら蛭湖たちに挨拶をする。

まだ数週間だが、久しぶりの蛭湖の姿を見ることができて、カリムは嬉しさを覚えながら胸を高鳴らせた。

今すぐに、溜まった欲求不満を解消するために彼に思いっきり甘えたいが、今は自重しよう。

性に対して制限が緩い聖王教会だが、教会の人間とは思えない邪な考えを巡らせているカリムをよそに、クロノたちは話を進めている。

シグナムと蛭湖が先程１０８部隊へ外回りをし、合同捜査の会議が滞りなく終了したそうだ。

「こっちは丁度、六課の運営面の話が済んだところだよ。ここからは今後の任務についての話だから、君も同席して聞いておいてくれ」

クロノの言葉に、シグナムはわかりましたと慇懃に答えた後、隣に佇む蛭湖の肩に手を置きながら邪気の無い微笑を見せた。

「では、蛭湖。それが終わったら、訓練場で私と一緒に模擬戦をしよう―どうだ、嬉しいだろう？」

「ああ…わかっている…」

素敵な笑顔で残酷な事を言うシグナムに、蛭湖が辟易の表情で返した。

次の瞬間、

「ちょっとお待ちなさい」

突如、重圧な圧迫感が部屋中に充満した。

先程までの和やかな空気が一瞬にして凍りつく。

そして、蛭湖、シグナム、シャッハ、クロノの四人は目を向けた――聖母のような微笑みを浮かべながら黒いオーラを放つカリム・グラシアを。

「あ、あの～…カリム様？」

クロノは、カリムから溢れ出る殺気にかなり怯えながら様付けで彼女の名前を呼ぶ。まるで？最強且つ最凶の天人？に対して、気を遣いすぎている銀髪の侍のようだった。

クロノは、こんなカリムを見るのは初めてだった。

？慈母？？聖女？？女神？―そんな言葉が似合うほどに清楚で、穏やかで、美しい彼女が今、全く似合わぬ黒々とした殺気を放っている。

彼女の豹変に恐怖しているのはクロノだけでなく、シャッハも蛭湖

も同じだった。しかし、シグナムだけは何故か喜んでいた。

「シグナム…？　蛭湖の肩に手を置くなんて―どういう了見かしら…？」

カリムは優しく微笑みながら、まるで最凶の呪文を唱えるような声音で問い掛ける。それだけで、大抵の者を失神させる事ができるかもしれない圧力があった。

しかし、カリムから殺気を受けたシグナムは恐怖で怯まなかった。

それどころか、興奮していた。

シグナムの心の奥底に根付く戦闘狂としての心が、カリムと戦ってみたいと殺し合いたいと何度も叫ぶ。

シグナムはそんな気持ちを必死に抑え、戦闘狂の笑みを浮かべながらカリムの言葉に答える。

「騎士カリム…私と蛭湖は？浅はかな関係ではない？のです。肩に手を置くぐらい―」

何かがヒビ割れる音がした。

「ど　う　い　う　事、蛭　湖…？」

カリムは優しい笑顔のまま殺気を増幅させながら今度は蛭湖に顔を向けた。

蛭湖の身体がびくりと震える。

―前の世界でも受けた事がない最凶のプレッシャーだ…！

殺意の塊の紅麗とも、？十神衆？最強と謳われている水剣士の老人とも違うタイプだ。

カリムはある意味、彼ら以上の力を持っているかもしれない。

今まで周りの人間から？不死身？と謳われてきた蛭湖だが、殺気を放つ彼女を前にするとその自信が粉々に砕かれる。

蛭湖は主の殺気に気を失いそうになるが、長年鍛えてきた鋼の精神で踏み留まる。

「ど、どういう事とおっしゃられても…。…シグナム！誤解を招くような事を言うな…！」

蛭湖は元凶であるシグナムを叱責するが、彼女は天然なのかそういう知識がないのか、彼の言葉にキョトンとしていた。

「誤解？　何をだ？　私とお前は、ただ激しく闘り合っただけではないか」

「激　し　く　ヤ　り　合　っ　た…？」

禍々しい殺気で構築されたプレッシャーの重さがさらに増した。

―こ、このままでは、この場にいる全員が皆殺しにされてしまう…！

早くカリムを止めなければと思い、蛭湖は誤解を解くための言葉を紡ぐ。

「ち、違います、主ッ！　私とシグナムは、ただ模擬戦をしていただけですッ！！」

蛭湖の短く、正確な説明をした。それに対してカリムは、

「―あら、そうなの？」

あっさりと殺気を消してしまった。

恋愛よりも闘争を優先するシグナムの気持ちを十分に知っていたからだろう、意外と簡単に信じてくれた。

カリムのヤンデレ化が鎮まってくれて、蛭湖とクロノとシャッハが安堵の息をついた次の瞬間、

「でも、やっぱり蛭湖にちょっかいを出す事は許せないわ」

安堵した矢先にカリムが再び殺気を放った。無防備な心に殺気の衝撃を当てられたシャッハが気絶してしまった。

そんな彼女を全く意に介さず、カリムは美しい金色の髪を揺らしな

がら優雅な仕草で椅子から立ち上がる。
その仕草を見れば、美と愛を司る女神が玉座から立ち上がったかのような扇情的な錯覚を感じてしまうだろう。
だが、蛭湖とクロノには―幾星霜の封印から復活された？殺戮女神？が、封印の谷底からよじ登ってきたかのような恐怖の錯覚を感じてしまった。ガ　チ　で。
そんな二人の気持ちを知ってか知らずか、殺戮女神は竜眼の騎士に聖母の笑顔を向ける。

「シグナム…そんなに模擬戦がしたいなら私が直々に相手になってあげる。聖王教会（われわれ）の授業料がいかに高額か―？教育？してあげるわ」

まるで？これからあなたを殴り殺しますよ～♪？みたいな発言だった。
しかし、シグナムは

「おおっ、これは感謝の極みっ！　是非、お願いしますッ！！」

喜　ぶ　始　末。
シグナムは闘る気満々、カリムも殺る気満々―もはや、こうなってしまっては誰も止められる人間はいない。
クロノが恐怖と辟易の溜め息をついたその時だった。
彼の前に、エンブレムが映し出されたモニターが展開された。
そのエンブレムの事をよく知っているクロノは誰からの通信なのかすぐにわかった。
そして、彼は、シグナムと一緒に？いずこへ？歩いていくカリムに

向けて声を発した。

「カリム様ッ！！　機動（はやて）六課から直接通信ですッ！！」

◇

合流した薫とスバルとティアナは、エリオとキャロが待機している街の路地裏に走っていた。

先程キャロからの全体通信で、街の路地裏にてレリックとおぼしきケースと、それを持っていたらしい少女を発見したとの事だ。

報告を受けた機動六課は、レリックの回収と少女の保護のためにすぐに動き出した。

「エリオ、キャロっ！」

エリオたちの元へ到着したスバルたちは駆け寄りながら彼らの名を呼び、ティアナは地面に横たわっている少女に目を向けた。

「この子が…また随分ボロボロに…」

見た目は6歳前後。幼い体躯にボロボロの衣を纏っている。気絶し

ているが、目立った外傷がないのは幸いだ。
キャロは、地下水路を通って、かなり長い距離を歩いてきたらしいと報告するが、ティアナは怪訝そうな顔をした。
こんな幼い女の子が、結構な重さがあるレリックのケースを引き摺りながら長い距離を歩けるだろうか？
何より、何故こんな幼い子供がレリックのケースを持っていたのだろうか？

しかし、わからない事を熟思してもしょうがない。
ティアナはとりあえず現状の詳しい確認をする。

「ケースの封印処理は？」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思います」

ティアナの問いに答えたエリオはそれからと続け、レリックのケースを見せる。ケースに繋がれた長い鎖が何かの拍子で途切れていた。

「…ケースはもう一個あった？」

「今、ロングアーチに調べてもらってます」

エリオの言葉を受け、ティアナは顎に手を当てながら再び熟思した後、口を開く。

「隊長たちとシャマル先生、リイン曹長がこっちに向かってくれてるそうだし、とりあえず現状を確保しつつ周辺警戒ね」

◇

聖王教会本部―。

「―そう、レリックが」

はやてからの報告を聞き、カリムは厳しい表情で呟いた。

『それを、小さな女の子が持ってた言うも気になる』

はやてもまた厳しい表情で呟いた。

少女に対して疑問に思うが、レリックを嗅ぎ付けたガジェットや召喚士が出てきた場合、市街地付近での戦闘になってしまう。

被害を被らないために、なるべく迅速に確実に片付けなければならない。

「近隣の部隊にはもう？」

『うん、市街地と海岸線の部隊には連絡したよ。…？奥の手？も出さなあかんかもしれん』

「そうならない事を祈るがな」

クロノとはやてのやり取りを一瞥し、カリムは蛭湖とシグナムに振り向いた。

「蛭湖、シグナム。あなたたちも向こうに戻っておいた方が良いわ。シャッハに送ってもらえばすぐに戻れるから」

カリムの言葉にシグナムはお礼を言い、蛭湖は胸に手を当てながら殿勤に一礼した。

◇

路地裏―。

「バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ」

シャマルは携帯機器を握りながら少女の簡単な検査を報告し、薫たちは安堵の息を吐いた。
そこへ、フェイトたちも路地裏に姿を現した。
フェイトは赤髪の少女―煉華の肩を抱えながら歩み、その後ろで彼女たちから距離を離しながら歩いている紅麗だった。
彼らを目にした瞬間、薫だけが目を疑った。
フェイトに肩を抱かれながら、怯えるように身体を震わせている赤髪の少女に見覚えるからだ。
名前は確か、煉華。紅麗と紅から生まれたと聞いている。しかし、彼女は死んだはずだ。何故、生きてこの世界にいる？
薫が煉華について思案している中、シャマルはフェイトたちに駆け寄る。

「フェイトちゃん、その子は？」

「…路地裏で見つけたんです。搬送している間、この子に治癒魔法をお願いします」

フェイトは詳しく言わず、最低限な言葉しか言わなかった。
そして、煉華の痣だらけの顔を見て、シャマルは表情を曇らせた。

「酷い…どうしたの、いったい？」

シャマルが尋ねると、フェイトは唇を噛んだ。そして、残酷な言葉

を吐いた紅麗の姿を思い起こしながら呟いた。

「紅麗が…やったんです…」

大好きだった彼を失望するような、咎めるような口調だった。
小さな声で呟いたため、聞き取れなかったシャマルは聞き返すが、フェイトは顔を俯かせながら何も答えなかった。
一方、フェイトたちの様子を静観していた薫は彼らに何があったのかを理解し、表情を険しくした。

怒っているような悲しんでいるようなフェイトの表情。痣だらけの顔で怯えた表情をしている煉華。そして、彼女たちから距離を離している紅麗。

それだけで十分に理解できた。

紅麗が煉華を暴行し、それを見たフェイトが彼に激怒した—といったところだろうか。

—ああ、もうっ！　心配した矢先にこれかよ…！

薫は内心で頭を抱えたくなる衝動に駆られる。
彼は、義兄が心の闇の部分を、まだ持っていたことを予想はしていた。
しかし、まさかそれをフェイトの前でさらけ出すとは思わなかった。
恐らく紅麗は煉華の事が心底憎んでいるのだろう。だから迷わず凶行をしたのだろう。
だが、それでフェイトにまで深く傷付けてしまった。

薫にはそれがわかっていた。
彼女を見ればわかる。
フェイトの表情は、怒りと失望と悲哀に満ち溢れている。

よほど紅麗の事が大好きだったのだろう。
だが、彼の闇の部分を知って、失望したのだろう。
紅麗が、煉華に対してどんな憎々しい感情を持っているか詳しくは知らないが、紅麗に対して恋心を抱いていた彼女があまりにも可哀想じゃないか。

薫は義兄として育ててくれた紅麗を敬愛しているが、彼の闇の部分に対して未だに嫌悪感を抱いていた。
本当は優しい心を持っている事を知っているが、それでも闇の部分を受け入れられずにいた。現に、一度彼の事を見限った事がある。
薫が悶々と思案している最中に、スバルが念話で話しかけてきた。

『ねぇ、カオリン。あの赤い髪の子、紅麗兄とおんなじ格好してるけど…もしかして次元漂流者？　カオリンたちの知り合い？』

煉華の姿を見れば、誰もが予想する言葉だった。

『…うん、そうみたい』

薫が不機嫌そうに返す。別にスバルに対して苛立っていないが、今は誰とも話したくなかった。

しかし、そんな彼の心情に気付かずスバルは話し続ける。

『そっか。もしかして紅麗兄の妹っ？　ちょっと逆立った髪とか似てるし』

―そんな関係だったら、こんな面倒な事は起こらないんだけど…。

薫が悪態をつくように心中で呟いていると、ロングアーチからガジェットが現れたとの連絡が入った。

地下水路に？型、海上方面に？型が現れ、はやては素早く隊員たちに指示を出す。

フォワード陣と、別件捜査をしていたスバルの姉―ギンガは地下水路のガジェットの撃破。

上空のガジェットはヴィータとリインと紅麗で海上の南西方面を、なのはとフェイトは北西部から制圧。

紅麗たちは了解の返事をし、行動を開始した。

◇

薫たちから少し離れたビルの電波塔の上に一人の少女が悠然と立っていた。

少女―ルーテシアの横に、スカリエッティの秘書―ウーノが映し出されたモニターが展開する。

『ヘリに確保されたケースと？マテリアル？は妹たちが回収します。お嬢様は地下の方へ』

事務的な口調のウーノの言葉にルーテシアは小さく頷く。

『騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動」

『お一人ですか？』

「一人じゃない」

ウーノの言葉を否定したルーテシアは宝玉が填められたグローブを掲げる。すると、宝玉から楕円形の黒い卵のようなものが現れた。ルーテシアは小さな手でそれを手に取り、愛おしげに頬に寄せる。

「私には？ガリュー？がいる」

『失礼しました。協力が必要でしたらお申し付けください。最優先で実行します』

ルーテシアが頷くと同時にモニターが消える。

彼女は今、複雑な心境だった。
いつも通り、レリックを手に入れるための行動を、これから行う。
しかし、今度こそ?目当ての番号のレリック?が見つかればいいなと思う自分もいれば、ここから動きたくないと思う自分もいた。何だろうか?
胸騒ぎ、とは少し違う感覚を感じている。
この感じは、前にも感じた事があった。

そんなに嫌いではないスカリエッティの?探し物?を手に入れるために、ホテル・アグスタに訪れた時と同じ感覚だ。
何だかよくわからないが、これから行動を起こせば、?知りたくない事?を知ってしまうような恐怖に似た感覚があった。

―でも…。

立ち止まるわけにはいかない。
自分には?望み?がある。
これから何が起ころうが、知った事ではない。

「行こっか、ガリュー…?探し物?を見つけに」

ルーテシアの足元に魔法陣が浮かび、彼女は姿を消した。

◇

スカリエッティのラボ―。

『ドクター。ルーテシアお嬢様への指示、終わりました』

ウーノは通信でスカリエッティに報告する。その口調は事務的でもあり、ある種の感情が込められていた。

スカリエッティは端末を操作しながらウーノに労いの言葉をかける。いつもならここで通信が終わるはずなのだが、ウーノは密かに愛するスカリエッティと、まだ話したいのか通信を切らなかった。だが、これから世間話をするにしては、彼女の表情は少し悲しげだった。

『―ルーテシアお嬢様の事を知ったら…ナナシは、怒るでしょうね…』

ウーノは悲しげな表情のまま、ここにいない青年の名を口にする。

現在、彼はトーレと共に戦線から少し離れたところに待機している。

「ああ、彼は絶対に怒るだろうね」

スカリエッティは軽い口調でウーノの言葉を肯定した。思い起こすのは―ナンバーズたちを?作品?だと言った自分に激怒したナナシ。

きっとナナシは、ルーテシアの事を知ったらまた激怒するだろう。
彼女自身の意思で動いているとはいえ、幼い少女を危険な事をさせているのだから。それに彼女に加えた？措置？、？言い聞かせた事？―それらを知られれば彼はさらに怒るだろう。
だが、

「彼には何もできないさ。私を殴る事はできても、現状を変える事なんて一切できない」

スカリエッティは絶対な自信を以て断言した。

彼はとても優しい人間だ。
偽善者だと思いたくなるほどに優しい人間だ。

だが、スカリエッティはナナシの人格を否定するつもりも罵るつもりもない。
むしろ、犯罪に手を染めてまでナンバーズと一緒に過ごす事を選んだ人間だ。ある意味立派だと言える。様々な非人道的な事をしてきた自分に怒るのも納得できる―ナナシは？とても優しいから？だ。
しかし、彼はとても優しいからこそ、？動かし易い人間？だ。

スカリエッティは意味ありげな笑みを浮かべながらナナシの事を閑却し、ウーノに顔を向ける。

「そんな事よりも、？アレ？の最終調整を頼むよ。今回の作戦で、機動六課にどれほど通用するのか知りたいからね。それに…」

スカリエッティは一旦言葉を切り、大きなモニターを展開する。
そこに映し出されているのは―ヴィータとリインと共にガジェットを撃破している紅麗だった。

「?彼を手に入れたい?からね」

『…はい』

歪んだ子供のような笑顔を浮かべるスカリエッティを一瞥し、ウーノは沈んだ表情のまま返事をした。

◇

?炎の児?としてこの世に誕生した?少年?は、生まれた時から目が見えなかった。
しかし、それを補うように視力以外の五感が常人よりも遥かに鋭敏化していたのも、生まれた時からだった。

しかし、何も映らない瞳でも一つだけ――生まれた瞬間から?見えたもの?が一つだけあった。

?それ?は―巨大な蜘蛛だった。

人間を簡単に丸飲みできるほどの巨体、その身体全体が紫色の炎で出来た無眼の蜘蛛だった。
眼は無いはずなのに、？少年？はその炎の蜘蛛には？一つの凶悪な眼？が隠されているんだと自然と感じ取れた。
そして、この炎の蜘蛛こそが自分の？炎術士？としての力の源なんだと確信した。
炎の蜘蛛の他にも、三ツ俣の火竜も見えた気がしたが、？少年？は炎の蜘蛛にしか目に入らなかった。
炎の蜘蛛の存在感、格好の良さ、どこか危険なものを醸し出す魅力―それらに？少年？は惹かれ始めていた。

そして、？少年？は炎の蜘蛛から色々な事を伝えられた。
視力が失っているのは―？眼（まなこ）に合わせた全ての者を焼き尽くす？という、炎術士の能力を身につけるための代償だという事。
そして、失った視力の代わりに視力の五感を鋭敏化させた事。

？少年？は炎の蜘蛛から聞かされた自分の能力を知ると、？少年？はそれが恐ろしくなり、能力を封じるために両目に包帯を巻いた。

視力を失った状態での生活は、あまり支障を感じなかった。
常人より遥かに発達した聴覚と嗅覚と味覚と触覚が、思っていたより役立ってくれていたからだ。
だが、生活に支障はなかったが、？別の意味の支障？が現れた。

？普通とは違う存在？を嫌悪する―それが人間の本質かもしれない。

毎日、両目に包帯を巻いておきながら何の支障もなく生活できている少年に、周りの人間たちは不気味さを感じていた。

?少年?とほとんど歳が変わらない子供たちは、彼に対して露骨に態度を表した。

初めは軽い悪口だった。

しかし、?少年?は元々無口な性格だったため、それを無視していたのだが、それが余計に虐めをエスカレートさせていった。

悪口がだんだん酷くなったり、包帯を無理矢理取られて隠されたり、石を投げつけられたり、暴力まで振るわれた時もあった。

そんな生活が数日続き、?少年?は気晴らしとして一羽の雀を焼き殺してしまった。

小動物とはいえ、一つの命を己の炎で奪った事に罪悪感はあった。

しかし、それを遥かに超える?快楽?を感じてしまった。

それが、?少年?を歪ませるきっかけだった。

それが、?少年?が?殺しの快楽?という魔性に取り憑かれたきっかけだった。

?少年?はさらに歪む。

雀や烏だけでは飽き足らず、猫にまでその凶炎(ほのお)を向けた。

?少年?はさらに歪む。

次は犬や狐も焼き殺した。

?少年?はさらに歪む。

次は猪を焼き殺した。

？少年？はさらに歪む。

ついに熊をも焼き殺した。

？少年？はさらに歪んだ。

さらにさらにさらに。

歪む歪む歪む。

歪んで歪んで歪んで、歪み切ったはずなのに、さらに歪んだ。

そして、更なる快楽を得るために、？少年？は欠落していく理性で一つの考えが浮かんだ。

―？ニンゲンヲ、焼キ殺ス？…。

いや、もはや理性から生まれた言葉ではなかった。

本能だ。

本能から生まれた欲求の言葉だった。

理性がそれを歯止めをかけていたが、周りの人間に虐められ、ただの気晴らしから、たった一羽の雀を焼き殺した事で得てしまった？殺しの快楽？によって理性が欠落していき、？少年？は高ぶる本能を抑えられなかった。

そして、?少年?はついに実行した。

自分を虐めてきた子供たちを呼び出し、?少年?は?畏怖していた能力?を封じていた包帯を外したのだ。
最強で最凶の?魔眼?を解放し、?獲物?に目を合わせた。

まさに、刹那の一瞬だった。

一瞬にして子供たちは炎に焼かれ、一瞬にして原型を留められない塵と化した。

?少年?はそれを冷たい眼差しで見下ろしながら小さく笑った。
?少年?は狂笑(わら)った。
?魔眼?を見開きながら、大きく大きく狂笑った。
そして、?少年?は強さを求め始めた。強く強く求めた。
全ては—?殺しの快楽?のために!

それを原動力に?少年?は己を鍛え、?少年?は?青年?となり、ついに待ち望んでいた戦場(いくさば)に立つ事ができた。
数年ぶりに人間を殺す事ができるのだ、?青年?はとてもとても歓喜した。狂いながらとてもとても歓喜した。

そして、?それ?は他人から見れば地獄のようで?青年?からすれば天堂のようだった。

?青年?は人を殺す。殺して殺して殺しまくる。

炎で敵を焼き払い、刃で敵を斬り捨て、脚で敵を蹴り殺し、?魔眼?で敵を一気に塵にした。

常人より鋭敏化している聴覚・嗅覚・触覚・味覚を通して、外からの情報を得て、?青年?は狂喜(よろこ)びに浸った。

刃で斬り殺す。

身体を斬り裂いた?感触?と?音?と、噴き出した血の?匂い?を楽しむ。

炎で焼き殺す。

断末魔の?悲鳴?と、焦げた?匂い?を楽しむ。

脚で蹴り殺す。

骨や内臓を潰した?感触?と?音?を楽しむ。

?魔眼?で焼き殺す。

複数の心臓の?消音?を楽しむ。

楽しい。

戦というものは、殺戮というものはこれほどに楽しいモノなのか。

?青年?はあまりの楽しさに、味方まで斬り捨て、焼き払ってしまった。

しかし、?青年?に罪悪感は欠片ほどもなかった。初めて雀を殺した時とは全然違う。

?快楽の喜び?しかなかった。

当然、？味方殺し？の事について、里の長老や？青年？の仲間が咎めてきた。
しかし、？青年？は周りの人間の言う事を聞く気はさらさらなかった。
即刻やめなければ？頭首？にしてやらんと言われても、？青年？はそれでも構わないとあっさりと答えた。
安い肩書きや地位のために、快楽（殺し）に制限を加えられる事は、？青年？にとって死と同じだった。

？青年？を毒々しく睨んでいた長老だったが、せめて妻に子を孕めろと今までの話からずれた事を言った。だが？青年？はその言葉の意味をすぐに理解した。
大方、孕んだ？炎の児？を次の頭首にさせるのだろう。
？青年？としては女を抱くよりも、殺しか鍛練をしていた方が遥かにマシだった。
しかし、？炎の児？を孕んでくれれば、後は好きにして良いとの条件を長老は出した。
しかし、？青年？にはそれが嘘だとすぐにわかっていた。？炎の児？を孕んで欲しいのは本心だ。しかし、後は好きにして良いのは、明らかに嘘だ。
相手の心音を聞く事ができる？青年？は、長老の心音の揺らぎを聞き取り、嘘だと判断できた。
いや、心音を聞かなくとも、里の長老として、そんな分の悪過ぎる条件を出すはずがない。
殺戮だけを考える馬鹿だと邪推しているのだろうか？
しかし、？青年？はあえて長老に騙されたふりをするように条件を呑んだ。
そして、？青年？は無理矢理与えられた複数の女たちを全く楽しくない性交を行った晩の事だった。

油断だった。
こうなる事はある程度予想としていたが、こんなに早く実行されるとは思わなかった。もしかしら、味方殺しをする前から危険視されていたかもしれない。

?青年?はいつも日課としている深夜の鍛練をしようとしていたところに、里の者達に闇討ちされたのだ。
殺気を敏感に感じ取った?青年?は初撃を回避し、何人かの里の者達を殺したものの、敵の数と魔導具の性能が?青年?を僅かに凌駕していた。

そして、?青年?は?人間として?死んだ。

?青年?は死ぬ間際に、自分から?快楽?を奪った里の人間達を憎んだ。とても憎んだ。
しかし、?青年?は彼らを憎みながら死した後、化けて復讐しようなどと思わなかった。
ただ殺したかった。
快楽のために殺したかった。
生き甲斐のために殺したかった。
誰でも良いから殺したかった。

そんな?青年?の歪んだ欲望が叶ったのか、死したはずの?青年?は新たな生を与えられた。

?青年?は―?火竜?となっていた。

炎術士が強い無念、怨念を残して死した時、その魂は成仏されず、炎の化身―火竜となる。

そして、火竜達は己の無念を炎術士を通じて晴らし、成仏するために―この世に存在する炎術士に取り憑いていく。

?火竜?が?少年?だった頃に見えた三ツ俣の炎の竜がまさしくそれだったのだ。

?火竜?は人ならざる姿になり、成仏されなくても特に悔やむ気持ちはなかった。

逆に大いに狂喜んだ。

だが、四竜の長となった?火竜?は、すぐに炎術士に取り憑いたのは良いものの、彼の意思で暴れられる事ができなかった。

それには理由があり―火竜に取り憑かれた炎術士が火竜を召喚するか、炎術士が生まれた時に与えれる―炎(ちから)を制御するための?封印の腕輪?を外さなければならない。前者にしても、一度後者の過程を踏まなければならなかったのだ。

―これじゃあ…特に信じちゃいねぇ、あの世とやらに逝った方がまだマシだったんじゃねぇか…!!?

?火竜?は悪態をつくように叫んだ。

そんな欲求不満を抱えながら長い時が流れ、取り憑いていた炎術士が戦死した。

その死した魂に強い無念がなければ、死後の世界へ。逆に、あれば火竜の仲間入り。

だが、？火竜？にとっては知った事ではなかった。ただ暴れられればいい、ただ人を焼き殺せればいい―それればかり思っていた。

長い長い時が流れる―。

炎術士が死に、火竜達が新たな炎術士に取り憑き―何度もそれを繰り返していき、同胞も次々と増えてきた。

そして、ついに、火竜の総数は八匹となっていた。

そして、火竜達は毎回のようにこの世に存在する炎術士に取り憑いた。

その炎術士の名は―花菱烈火（はなびしれっか）。

八竜の長―裂神の子供の、弟の方だ。

そして、この青年こそが―火竜達の最後の宿主だった。

今まで指で数えるほどしか暴れられなかった？火竜？だが、彼に取り憑いてから今まで以上に暴れられた。

しかし、暴れられたとしても、？火竜？には不満があった。

なぜなら今取り憑いている宿主は人殺しを好まず、召喚した？火竜？の火力を相手を殺さない程度に抑えているからだ。

―反吐が出る程に甘すぎる宿主だなッ…！！！

？火竜？は烈火を憎々しく思い始めた。

折角、今まで以上に暴れられると思っていたのに人を焼き殺せないのでは不満が募るのは当然だ。

そして、ある日、八竜の中の一匹の計らいで、宿主を鍛えるために火竜達が人間の姿になって彼と戦う事となった。
ほとんどの火竜達は宿主の成長の望むために、宿主を試すために戦った。
しかし？火竜？だけは、宿主を殺すために戦った。火竜となっても思う存分暴れられない。召喚されても、宿主は人を殺そうとしない。

―だったら宿主を殺した方がマシだ…。

窮屈な生から脱するために、殺しの快楽のために、？火竜？は宿主を本気で殺そうとした。
しかし？火竜？は油断したせいで、宿主に敗北してしまった。

油断。

またしても油断だった。
人間として死んだ時も、自分の油断だった。
？火竜？は己を悔やみながら、再び宿主に取り込まれた。

そして、？火竜？は嫌々ながらも宿主に従い続け、ついに火竜としての生が終わろうとしていた。
最強にして最凶最悪な魔導具―？天堂地獄？との最終決戦。

？火竜？は天堂地獄が酷く気に入らなかった。殺したいほどに気に入らなかった。
しかし、その理由が上手く表せなかった。
何故、奴が気に入らなかった？

ガキのくせにヒトを馬鹿にした態度を取るからか？

？その眼で全てを焼き尽くす？と謳われた、加減無しの？魔眼？を食らわせても焼き殺せなかったからか？

自分がどう足掻いてもできない？永遠の殺戮？を、奴だけが味わう事ができるからか？

それとも―？別の何か？か？

宿主に召喚されながら？火竜？はそんな事を思っていた。

そして、七竜同時召喚によって八竜の長―裂神を召喚した宿主は死した愛する少女を炎へと変え、彼女の治癒の炎によって天堂地獄を討ち倒した。

さらに、天堂地獄が滅びた事によって火影に関わる全てのものが滅び始めた。

それは火竜も例外ではなかった。

その時の？火竜？は、複雑な心境だった。

嬉しくないはずはない。

火竜となってから人間の頃より、人を殺せず、欲求不満な無限地獄が続いていたのだ。ようやく終わってくれたと少し喜んでいた。

しかし、最後の宿主との日々は悪くなかった思っていた自分もいた。

宿主の女を護りながら敵を焼いた時―。

炎と化した宿主の女と、七匹の同胞達と共に並んだ時―。
その二つだけの短すぎる思い出は―不思議と悪く思わなかった。
そして、火竜としての生涯を終えた？火竜？はそのまま死後の世界へ逝くはずだった。

しかし、そこは死後の世界とは思えない世界だった。
空は快晴、周りは緑が溢れる森林―とても死後の世界とは思えなかった。
さらに、？火竜？の身体は人間だった頃の身体になっており、？火竜？は再び？青年？となっていた。

何故火竜として消滅したはずの自分が人間になったのか？
ここはどこなのか？
もっと人を殺したいと思っていた自分の願いがまた叶ったのか？

？青年？が思案していると、彼の前に一人の男が現れた。
どうやら男は？青年？の事を前々から知っていたようだ。
男は、？青年？に親しげに話しかけてきた。

―？不気味な奴…？。
それが？青年？が男に対する第一印象だった。
？青年？は男について全く知らないのに、男は？青年？についてよく知っている事。
突然この場所に立っていた事に混乱している中、タイミング良く現れた事。

何より男から?人間の匂いがしない?事―それが?青年?には不気味だった。
だが、敵意はない事だけはわかっていた。
そんな?青年?の心情を意に介した様子はなく、男は?この世界?について丁寧に話し始めた。
だが、あまりにも丁寧過ぎて?青年?には理解不能だった。
?魔法?とやらは妖術の類だと思えばいい、?デバイス?とやら魔導具の類だと思えばいい。
しかし、後の説明は理解できなかった。

だが、?殺しの快楽?さえ貪れればこの世界がどんな所なんてどうでもよかった。

そして、話し終えた男は?青年?に一つの武器を渡してきた。
名は?凶蜘蛛?。巨大な肩当てである元祖の?凶蜘蛛?を大幅に軽量化した武器だそうだ。
コレを、左腕につけている武骨な刃の代わりに使ってくれと男は頼み込んできた、土下座しながら。
妙な奴だと思いながら?青年?は?凶蜘蛛?を受け取った。
男が特に悪巧みをしているように思えないし、刃こぼれしてきた今の武器には少々懸念していたところだ。

そして、?青年?は男と別れた。

本来なら試し切りとして男を斬り捨てようかと考えた?青年?だったが、新しい武器を与えてくれたから見逃す事にした。だが、男に対して畏縮していた自分もいた事を?青年?は気付かなかった。

何はともあれ、?青年?はようやく窮屈なところから出られ、自由

を得た。
そして、快楽を貪るために人を殺す事ができるようになった。
後は本能に従って行動するだけだ。
？青年？は喜びに浸りながら手当たり次第に走り回り、獲物を見つけたら直ぐ様殺しにかかった。

しかし、どういう事だろうか？
人を簡単に殺せない。
急所を外してしまう。
何回も何回も人間を襲っても、その度に急所を外してしまう。
炎の火力を抑え込んでしまう。

？青年？は人を襲う事に抵抗はなかった。だが、殺す事に抵抗してしまっていた。
最初は気のせいだと思っていた。
きっとどこかが不調なんだろうと思っていた。いや、思い込んでいた。
だが、偶然に遭遇した動く鉄屑に対しては、何の抵抗もなく破壊し尽く事ができていた。

もはや、否定はできなくなっていた。
自分は、人を殺す事に抵抗を感じてしまっていた。

いつだ？
いつからだ？

その残忍な性格から同胞や宿主から？邪悪竜？と呼ばれていた自分が、いつの間にこんなに腑抜けた…？

?青年?は記憶を手繰る。
思い起こされるのは―反吐が出るほどに甘い考えを掲げる宿主だった。

◇

「烈火の野郎に…感化されちまったか…?」

地下水路にて、ガジェットの残骸に囲まれながら?青年?―刹那は悪態をつくように独り言を呟いた。
まるで否定を求めているような口調だった。しかし、当然ながら答えはない、彼の周りには誰もいないからだ。
いや、いる事にはいるが―?その者?は?壁の中?にいた。

(う、うわぁ…なに、アイツ…?)

6番のナンバーズ―セインだった。
彼女の?IS?―?ディープ・ダイバー?は無機物内部を泳ぐように移動したり、自在に通り抜けたりする事ができる。
彼女はそのレアな能力を使いながら身を潜め、彼女の人差し指―?ペリスコープ・アイ?で外の様子を探っていた。

だが、目と同じ機能を持つ？ペリスコープ・アイ？が見たものは―？一瞬？にして数機のガジェットを破壊した刹那だった。
セインは、刹那がガジェットを破壊した瞬間が見えなかった。
彼らが対峙したときはしっかりと見えていた。だが、刹那の姿が見えなくなった事に気付いたときには―刹那はガジェットの残骸の周りに立っていた。
常人より発達した戦闘機人の視力を以てしても見えなかった俊足の動きだった。しかし、戦闘機人と言っても、セインは非戦闘要員だ。高速戦闘が可能なナナシやトーレには目で追えるかもしれない。
―あの紅い炎を使う奴よりヤバいんじゃない…？　ドクターに急いで報告しないと…。

もしかしたら巷で騒がれている？通り魔？というのは彼の事かもしれない。
セインはこの場から立ち去ろうとする。だが、次の瞬間、セインに背を向けていた刹那が突然、彼女の方に振り向いたのだ。
セインの心臓がびくりっと跳ね上がる。
最初は何気なく振り向いたんだと思っていた。だが、違う。
刹那は、しっかりと、セインに、顔を向けていた。
セインの心臓が、恐怖と疑問で高鳴っていく。

―う、ウソ…！？　み、見えてんの…？　いや、でも…両目にあんなぶ厚い布、巻いて見えるはずがないよね…？い、いや、背中向けてたから見えてても振り向くはずがないよね…？　じゃあ、なんで！？　なんで、なんで！？

逃げる事すら忘れ、セインは何故彼が自分の存在に気付いていたのか混乱しながら思案していると―刹那が静かに口を開いた。

「オイ…誰だよ…？」

彼の右手に、残忍な紫色の炎が纏う。

「そこの？壁ん中に隠れている奴？は…？」

――完全に気付かれてるッ！

セインが咄嗟の防衛本能で逃げ出すのと、刹那が炎を放ったのがほぼ同時だった。

セインがいたコンクリートの壁に炎が炸裂し、爆発したように壁が破壊される。

しかし、そこにはセインの姿はなかった。

「チッ…！逃げやがった…」

遠ざかっていくセインの心臓の音を聞きながら刹那は舌打ちした。

どんな妖術を使ったかわからないが、壁の中を移動する鼠を捕らえるのはかなり面倒だ。

いや、わざわざ捕らえるほどの強さ（価値）はない。

刹那は早々にセインの事を忘れ、獲物を見つけるために耳を澄ませる。

そして、?音?を捉えた。

刹那は、足音や声、破壊音などの様々な雑音の中から?心臓の音だけ?を聞き分ける。

―一…二、三…六か。…いや、今、一つ追加で七だ、な…。

獲物の数を確認した刹那は?凶蜘蛛?から伸びた長刃を地面に当てながらゆっくりと歩を進める。

刃とアスファルトが擦れ合う耳障りな音を立てたながら、刹那は?音?に向けてゆっくりと歩んでいった。自分の本心を確かめに行くように、自分の心を否定しに行くように。

其之二十一：無眼の蜘蛛（後書き）

『機動六課の呟き！』

はやて「作者の地元の保育園の園長先生は森光蘭に似ています」

薫「ＲＰＧとかやってて有り余ったお金を見て、これ現金に換金できないかなぁって思うのはオレだけかな」

シグナム「蛭湖が機動六課へ来てから生き生きしていると思うのは私だけだろうか？」

蛭湖「お前だけだッ！！！」

紅麗「生き生きとしているのは貴様だろう」

『ヴァイスのガンダム相談室』

このコーナーは普段抱えている自分の悩みをヴァイスに話し、彼からガンダムネタのセリフを受けて悩みを解決するという面白半分ふざけ半分なコーナーである（早くもネタが尽きてきている）

ＨＮ：金色の閃光

「ううっ…私、大好きな人とケンカしちゃいました…早く仲直りしたいです…」

ヴァイス「ホワイトドールの御加護をッ！」

ＨＮ：裸エプロンの１番

「あの、実は…好きな男性がいるんですが、なかなか告白する勇気が出てきません…勇気が出るお言葉をお願いします」

ヴァイス「守ったら負ける―攻めるんだ！！」

ＨＮ：アイス大好きっ子

「紅麗さんが一生デレてくれないと思うのはあたしだけでしょうか？というか、最終的に灰にされないかな？」

ヴァイス「南無三ッ！！！」

ＨＮ：管理局の白い悪魔

「何か周りの皆から白い悪魔とか魔王とか魔神とか色々酷いあだ名で呼ばれてるんです！私もうイヤです！耐えられないです！どうしたらいいでしょうか！？」

ヴァイス「ホワイトデビルの御加護をッ！！……な、なのはさん！？ぃやあああああああああッ！！ごめんなさいッ！！」

ＨＮ：風の癒し手

「どこの小説でも私の存在が背景化しています！この小説だけでも目立ちたいです！（できれば、誰かとフラグを…）何かアドバイス

をお願いします！」
ヴァイス「残念だが…さよならだ。……あれ？シャマルさん！？さ、差し入れ？いや…あの…これ…噂の殺人兵―ごめんなさいッ！！」

ＨＮ：デバイスマイスター・ＭＥＧＡＮＥ

「悩みではないんですが…ヴァイスくんが一番カッコいいと思うセリフを教えてください」
ヴァイス「常に世の中を動かしてきたのは―一握りの天才だ…！」

ＨＮ：夜天の主
「あ、クロノくんや」

ヴァイス「万死に値するーッ！！」

其之二十二：再会　前編（前書き）

こんなに苦しい気持ちを味わうくらいなら、最初から彼に会っていなければよかった。
だけど、心の底からそう思わなかった。

其之二十二：再会　前編

南西の海上方面でガジェットと交戦していた紅麗とヴィータとリインは、その魔導師の全体の平均を遥かに超える戦闘力でスムーズにガジェットを全機撃破し、破壊されたガジェットの残骸が海面に浮かんでいた。

「おっし、イイ感じだ」

「リインも絶好調ですっ！」

ガジェットの残骸を一瞥し、ヴィータとリインは満足げに言葉を紡いだ。

「ガンガン行くぞ、さっさと片付けて他のフォローに回らねーと。なぁ、紅麗？」

ヴィータは同意を求めるように紅麗を呼び掛けた。

「…ん、あぁ…」

少し遅れて紅麗は生返事を返した。

―今日の紅麗、やけに無口だな…。

ヴィータは紅麗を訝しげに見つめた。

彼女は訓練場などで彼とよく話すから、彼の性格をだいたい把握している。彼は普段物静かな性格だが、決して無口ではないし、生返事を口にするような人間ではない。

機動六課隊員として初めての戦闘だから緊張しているのだろうか？

しかし、長き戦いをしてきたヴィータから見て、紅麗は相当な手練れだと一目見たときに感じ取っていた。戦闘経験は初めてではないだろうし、沈着冷静な彼が緊張する事はないはずだ。

では、原因は何だろうか？

だが、元来考え事が苦手なヴィータはいくら考えても思い当たることが全く浮かばない。ただ、戦闘に支障になっていないからそんなに問題視する事はないだろうと判断したとき、

「―ヴィータちゃん、あれっ！」

リインの声でヴィータの意識が現実に引き戻される。

血相を変えているリインが指を差している方向に顔を向けると、ガジェット?型の増援が彼女たちの前に現れた。

◇

一方、北西部で交戦しているフェイトとなのはの所にもガジェット

の増援が現れていた。しかも、数が尋常じゃない。ただ気になるのは、ガジェットの数が？急に？増加した事だ。あまりに不自然なことに誤認ではないかと思われたが、ロングアーチが調べても問題は出ず、全ての実機の反応を示しているし、なのはたちも目視で確認できていた。

しかし、フェイトの放った射撃魔法で解明された。

魔力弾の直撃で一部のガジェットが何の不自然もなく爆発したが、もう一方のガジェットは爆発せずに機体を明滅させ、魔力弾がすり抜けたのだ。

「幻影と実機の構成編隊…？」

フェイトが呟きを漏らす。

そうしている間にもガジェットは攻撃を仕掛ける。発射されたミサイルがフェイトに牙を剥くが、なのはの防御魔法でそれが防がれた。

『オーバル・プロテクション』―自身の防御のためだけでなく、仲間の防御までできる全方位防御魔法だ。

「防衛ラインを追われない自信はあるけど、ちょっとキリがないね」

なのはは防御魔法を維持しながら背中合わせでフェイトに言葉を紡ぐ。

そして、二人の思考が一致する。

―ここまで派手な引き付けをするということは―地下かヘリの方に主力が向かっている。

地下にはレリック、ヘリには謎の少女。後者については謎が多いが、絶対に狙われないという保証はない。

それらを考慮してフェイトは意を決した表情で口を開いた。

「…なのは。私が残って、ここを抑えるからヴィータたちと一緒に…」

「フェイトちゃんっ？」

なのはは驚いた表情で振り向くと、フェイトは理由を口にする。

「コンビでも、普通に空戦してたんじゃ時間がかかりすぎる…限定解除をすれば、広域戦圧でまとめて落とせる。…何だか、嫌な予感がするんだ…」

「……」

しかし、フェイトの的を射た提案を耳にしても、なのはは納得しがたい顔をした。

提案自体には賛成だ。

だが、

「…？今の？フェイトちゃんじゃ…心配だよ」

なのはの不安げな呟きに、フェイトは微かに目を見開いた。背中合わせだからその表情は見えないが、彼女が動揺していることをなのはにはわかっていた。

「昔から長くフェイトちゃんと空にいたからわかるよ…今のフェイトちゃん、動きがぎこちない…」

魔力弾が何発か外れる。機動の判断が遅い。自慢のスピードは緩慢ではないが、キレがない。

とてもじゃないが?不調?なフェイトに、この場を任せるわけにはいかない。

そして、なのはは今まで我慢して言わなかった?フェイトが不調になっている原因と思われること?を口にした。

「紅麗と…ケンカしたの…?」

「…ッ!!」

表情を強張らせたフェイトは顔を伏せた。

図星の反応を示している彼女を見て、なのはの表情がさらに悲しげに染まる。

依然とフェイトの表情は見えないが、なのはには彼女の表情が脳裏

に浮かんでしまう。
きっと嗚咽を我慢するように唇を噛んでいるのだろう。
きっと泣くのを我慢するように表情を歪ませているのだろう。

紅麗とフェイトが喧嘩していることは―あの少女たちをヘリに乗せる前の彼らの様子を見れば、すぐに予想がついていた。
しかし、予想がついていたとはいえ、外れて欲しかった予想だった。

いったい何があったのだろうか？
紅麗と、彼と同じ格好をしたあの赤髪の少女と関係があるのだろうか？
もしかして、あの少女の顔にあるあの痣は、紅麗によるものだろうか？　あの少女が怯えているのは紅麗がいるからなのだろうか？
フェイトから聞きたいことは山ほどあるが、今は任務中であると同時に戦闘中だ。話し合いをしている場合ではない。
なのはは思考を切り替えて、言い聞かせるようにフェイトに言葉を紡ぐ。

「…とにかく、その案を実行するなら私にやらせて。私が限定解除して―」

『割り込み失礼っ』

突然の第三者の声で、なのはの言葉が遮られた。

『ロングアーチからスターズ０１へ―その案も限定解除申請も、部隊長権限にて却下します』

なのはとフェイトの前に展開される通信画面に、騎士甲冑を纏ったはやてが映し出されていた。

「はやてちゃん!?　何で騎士甲冑!?」

部隊長直々の出撃になのはは驚きの声をあげ、フェイトも驚きを隠せないでいた。訝しげに思うなのはたちに、はやては真摯な表情で口を開く。

『嫌な予感は私も同じでなぁ、クロノくんから私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ』

はやては力強く告げると、紅麗たちに指示を出す。
まず、廃棄都市区画から近い地点にいるヴィータとリインは地下水路へ行ってフォワード陣と合流し、ケースの確保。紅麗はヘリの護衛。
その後からフェイトが地下水路へ、なのはがヘリの護衛へ向かうこととなった。

◇

地下水路では、フォワード陣が次々とガジェットを撃破していた。
なのはと紅麗たちの教導の成果で、以前の任務よりもスムーズに打ち負かす事ができた。しかし、フォワード陣はそれに傲ることなく、本来の目的であるレリックの確保のために足を動かす。

「ケースの推定位置までもうすぐです」

キャロは探索させている?ケリュケイオン?を一瞥し、スバルたちに報告する。スバルは応えの頷きをした後、薫に顔を向けた。

「カオリン、どうしたの？　何かいつになく元気ないよ?」

スバルが心配そうに言うと、図星を突かれたからなのか、いきなり声かけられたからなのか、薫はびくりと身体を震わせる。

「えッ！？　そ、そう…？　オレはいつも通りだけど…」

薫は誤魔化すようにそう言うと、スバルだけでなくティアナたちまで心配そうな顔をしてくる。どうやら彼女たちも薫の異変に気にかけていたようだ。
薫は態度に出やすい自分の性癖を悔やみながら思案し始めた。

―何か…胸騒ぎがするんだよなぁ…。

口には出さず、薫は内心で呟いた。
思えば地下水路に入った時からだろうか？　何だかこれ以上足を進めたくないと言わんばかりに足取りが重い。この胸騒ぎのようなものは何だろうか？
紅麗とフェイトとの事か？　それもあるかもしれないが、もっと？別の何か？かもしれない。

スバルたちの存在すら忘れて薫は物思いに耽っていると―突然、爆発音と共にコンクリートの壁が破壊された。

―ガジェット…！？

突然のことに驚愕していた薫たちだったが、それも一瞬。瞬時に戦闘思考に切り替えながら身構える。砂煙でその向こうは見えないが、ガジェットである可能性は高い。
しかし、良い意味でその予想が外れた。
砂煙が徐々に晴れていき、まず目に入ったのは青色のロングヘアー―この時点でガジェットではなく、人だと判断できた。しかも女性だった。
長い髪に同色のリボンをし、左手にはスバルと色違いの？リボルバーナックル？を填め、両足にはスバルと色違いのローラーブーツ型のデバイスを履いていた。

「ギン姉っ！」

「ギンガさんっ！」

スバルとティアナが、女性の名前を呼んだ。
スバルの姉―ギンガ・ナカジマは微笑を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「一緒にケースを探しましょう、ここまでのガジェットはほとんど叩いてきたと思うから」

ギンガとスバルとティアナが仲良さげに話し合っている中、ギンガと面識がない薫たちはただただ彼女を見つめていた。
その視線に気付いたギンガは、挨拶するかのように三人に柔らかく微笑む。それに応えるように、エリオとキャロは生真面目に敬礼し、薫は軽く頭を下げた。

そして、ギンガが加わったフォワード陣は遭遇したガジェットを撃破しながら通路を進んでいく。
スバルにシューティング・アーツを教えただけあってギンガの実力はスバル以上だった。しかも、フォワード陣としっかりと連携できていた。特にスバルとのコンビネーションは、とても即席とは思えない姉妹の息の合ったものだった。それ故、ガジェット?型を相手に無傷で撃破することができた。

◇

ケースの推定位置まで到着した薫たちは薄暗い中、辺りを見渡しながらケースを探していく。

「あっ…ありましたぁ！」

ケースを見つけたのはキャロだった。
無事に確保できたことにスバルたちは安堵した時だった。
何かを叩く音が響いた。一度や二度ではない、何度も何度も連続的に響いている。
しかも、その音がだんだんこちらに近付いていっている。
薫たちは周りを見渡すが、特に異常といえるものはない。何もない空間に響く音に少し不気味に思いながら正体を探り続ける。
そして、エリオは見た―音を立てながら水溜まりの水面が跳ねているのを。
―？何か？がいる…！

エリオは？見えない敵？を見つけられた。
しかし、大きな音が鳴った後―上空に四つの黒色の魔力弾が浮かび、ケースを持つキャロに向かって放たれる。
わざと狙いを外したのか、直撃はしなかったが、その衝撃でキャロは吹き飛ばされながらケースを手放してしまった。
正体を突き止めたエリオは、上空に飛び上がりながら虚空を一閃する。
堅固な物同士がぶつかり合う鋭い音が響いた。どうやら、エリオの一撃は？見えない敵？に届いたようだ。
しかし、？見えない敵？は反撃したらしく、エリオの頬に鮮血と共に裂傷が刻まれる。

「エリオくんっ！」

キャロは彼の名を悲鳴をあげるように叫びながら駆け寄り、エリオは彼女を庇うように片腕を広げながら前方を睨む。
彼の視線の先には、ぼやけた？何か？があり、そのぼやけが色と形を帯び始める。

それ？は―虫を大きく連想させる存在だった。
首に紫色のマフラーを巻き、二足で地面に立ち、人とそう変わらない体型をしていた。だが、ほぼ全身を覆う漆黒の甲殻と赤く光る四つの瞳から、人間の体型をした虫だと認識できた。
エリオたちが目の前にいる虫人を見据える中、キャロが手放したケースを手に取る者がいた。
虫人―ガリューの主人であるルーテシアだった。

彼女がケースを手に取るのに気付いたキャロはルーテシアに駆け寄るが―

「邪魔」

ルーテシアは短い言葉と共に紫光の魔力弾を放つ。キャロは咄嗟に防御魔法を展開する。しかし、発動時間によって生み出される出力で、勝敗が大きく左右された。
十分な時間をかけて構築した魔力弾と、一瞬の時間でしか構築できなかった防御魔法では前者の方が勝っていた。キャロは防御や回避を中心に訓練を受けていたから、最初こそ防げていたが時間の経過と共に障壁はすぐに脆くなっていき、消滅された。
キャロは悲鳴をあげながら吹き飛ばされ、エリオは受け止めようと

するが、その凄まじい衝撃を受け止めきれずに壁に叩きつけられた。
ルーテシアはその様子を一瞥もせず、ケースを抱えながらマイペースに歩を進める。
他の者にはガリューが足止めしてくれる―そんな余裕を持ちながらルーテシアは歩き続けていたが―

「ルーテシア、ちゃん…？」

彼女の名を呼ぶ者がいた。
ルーテシアは微かに目を見開きながら歩みを止めた。
何故？一局員？が、表に一度も姿を見せていないルーテシアの名前を知っているのか―しかし、ルーテシアはそのことについては驚愕していなかった。
自分の名を呼ぶ？その声？に、聞き覚えがあったからだ。
ルーテシアはゆっくりと振り向く。本当は振り向きたくなかった。
自分の予想が裏切って欲しかった―そう願いながら？事実？を否定するように振り向いた。
そこには―数ヵ月前、森の中で偶然出会った次元漂流者の少年―小金井　薫がいた。

「薫…」

ルーテシアは暗鬱な口調で呟いた。いつも無表情な彼女が、今はその表情が少しだけ悲哀の色に染まっていた。思わぬ再会ができたことに少し嬉しいと思っている。しかし、管理局で保護されたかと思

われた彼が、デバイスを所持しながらここにいるということは―

「薫…管理局に入っていたの…？」

ルーテシアは？事実？を強く予想しながらも、それを否定する言葉を求めるように尋ねた。
しかし、その答えは―躊躇いがちな肯定の頷きだった。
ルーテシアは自分の腕に抱えているケースの存在すら忘れて呆然とした様子で薫を見つめる。
だが、いつまでもそんな状態は続かず、今度は薫から口を開いた。

「…ルーテシアちゃん、君が抱えている？それ？が、何なのかわかってる？　それ…危険なものなんだよ？」

薫はルーテシアが抱えるケースに指を差しながら言葉を紡ぐ。そして、彼の心中に様々な疑問が浮かんでいく。

どうしてルーテシアがここにいるのか？
どうしてケースを持って行くのか？
もしかしたら、ホテル・アグスタの時にいた召喚士というのは彼女のことなのだろうか？
だとしたら、彼女は？犯罪者？―時空管理局局員（自分）の？敵？だという事か？

薫は、どんどん膨らんでいく自分の悪い予想を否定したかった。
そして、もし、その予想が事実だとしてルーテシアはどうしてレリ

ックを狙うのか？　何か理由があるのだろうか？

一方、ルーテシアは薫に言われてようやくケースの存在を再認識した。そして、ケースを一瞥し、薫に目を向ける。

「わかってる…でも、これは渡せない」

ルーテシアは？自分の目的？を忘れないように、自分に言い聞かせるように言葉を返した。
彼女の言葉に、薫の表情がさらに悲しげに歪む。

「どうして…？　どうして、ルーテシアちゃんがレリックなんかを…」

「…ッ…」

薫からの問い掛けに、ルーテシアは唇を噛んだ。こうでもしないと喋りそうになったからだ。そして、ルーテシアは？言いたかった事？を我慢して、本心とは別の言葉を苦しげに言った。

「薫には…関係ないよ…」

「―ッ！！」

その言葉に、表情を強張らせた薫が反論しようとしたその時だった。

「ごめんね、乱暴で」

第三者の声と共に、ルーテシアの背後に姿が浮かぶ。
幻術で姿を隠していたティアナがルーテシアの肩に片手を置きながら、もう片方の手に持っている？クロスミラージュ？の魔力刃を突き付けていた。

「でもね、コレ―本当に危ない物なのよ」

「……」

ルーテシアは小さく眉を潜める。幻術を使われたとはいえ、自ら作り出した油断に歯噛みした。
自分は下手に動けないし、ガリューはスバルたちの相手で手を貸せない。第三者の助けがなければ潜り抜けられない状況だ。
ルーテシアは無駄だとわかりつつも、この状況を打破できる策を考え始めた次の瞬間、

悪寒が走った。

まるで毒が塗られた鉄刃を全身に突きつけられたような悪寒が、この場にいる全員の動きを凍結させた。そして、心臓が激しく鼓動し、脂汗をかき始める。

「な、何なの…？　この感じ…」

ティアナはルーテシアのことすら忘れて、恐怖で身体を震わせながら悪寒について怪訝そうに呟く。ルーテシアも、隙を突いて逃げる事すら忘れてしまっていた。

この場にいるほとんどが悪寒に狼狽している中、死線を潜り抜けてきた薫とガリューだけが、それが殺気だということを理解した。

そして、殺気から感じる方向に顔を向ける。

薄暗い一区画を睨んでも、暗闇で何も見えない。

しかし、？何か？がいることはしっかりとわかっていた。

薫とガリューは構えを取りながら、殺気を放つ方向に睨み続けた次の瞬間、紫色の光が凄まじい速さで襲ってきた。

それが炎だと認識する前に、薫は動いていた。

彼は、狼狽するギンガの前まで移動し？鋼金暗器？の刃で炎を斬り裂いた。

彼が動いていなければギンガは紫炎に焼かれていただろう。

「あ、ありがとう、薫くん…」

「油断しないで、まだ終わりじゃない」

薫は厳しい口調でギンガに告げた。

そう、攻撃を防いだ瞬間が？終わり？じゃない。攻撃を仕掛けた敵を倒した瞬間が？終わり？だ。
薫は、紫炎が放たれた暗闇を睨み続ける。
しかし、

―…？…何か、変だな…。

薫は暗闇の先を警戒しながら異変に気付いた。
暗闇から殺気を感じない。いや、殺気が無くなったわけじゃない。
今でも自分たちに向けてくる殺気は無くなっていない。
正確には殺気を感じつつも？暗闇から何も感じない？。殺気も、気配も無い。
どういうことだ？
薫は思案していると―

「いつの間にか獲物が増えてたなァ…」

背後から、この場にいる誰でもない掠れた男の声が聞こえた。

―まさか…あの一瞬で移動した…！？

薫はすぐに振り向き、スバルたちも薫が向いた方向に顔を向けた。

それは―異様な格好をした青年だった。
黒いズボンを穿き、上半身には刃と目玉の首飾り以外何も身につけておらず、盲目なのか両目に黒い布を巻いている。
そして、青年の左腕には―本物だと思うほどに精巧に造られた巨大な蜘蛛を模した不気味な腕輪が填められ、六本の脚先と口先に長い

刃が伸びていた。

異様な格好をする青年に、スバルたちは恐怖を含んだ怪訝な目で見つめる。

しかし、薫だけは違っていた。

薫は目の前の青年にどこかで会ったような感覚を覚えた。薫は、この青年と面識が無いはずだ。こんな目立つ格好をする人間を見たら忘れるはずがない。

だが、面識が無いはずなのに、どこかで会ったような感覚に囚われてしまう。しかし、いくら記憶の糸を手繰っても青年に関する記憶が浮かばない。

いや、全く浮かばないわけじゃない。しかし、記憶の中に現れたのは何故か—烈火が操る無眼の火竜だった。

薫が思案している中、青年—刹那は邪悪な笑みを浮かべながら声を発する。

「ヒヒ…数だけの連中かと思ったら、なかなか?出来そう?だなァ…今まで襲ってきた奴らとは違って楽しめそうだァ…ヒヒヒ…」

刹那はぶつぶつと楽しげな呟きを漏らす。

敵と対峙しているにも関わらず、構えを取らずに独り言を呟き続ける様は隙だらけのように見える。しかし、薫たちは攻撃するどころか、動けずにいた。

蛇に見込まれた蛙—いや、蜘蛛の糸に捕らわれた羽虫のような感覚だ。

下手に動けば、喰われてしまう。

薫たちは、目の前の？蜘蛛？に恐怖していた。

「…どうしたぁ…？」

薫たちの心情を知ってか知らずか、独り言をやめた刹那は彼らに話し掛けた。

「心の臓が、ウルサく鳴ってるぜ…？」

まるで、心の隅々まで見透かされたような感覚だった。

「うあああああああああああああああッ！！！」

スバルは絶叫をあげながら刹那に殴りかかった。
恐怖を原動力にして、目の前の蜘蛛を潰しにかかる。潰さなければ、自分たちが毒牙にかかってしまう。
生物としての生存本能で、刹那に拳を振るう。しかし、次の瞬間、その拳が目標に到達する直前―腹に感じる重い衝撃と浮遊感を覚えた。足を上げている刹那を見て、蹴り飛ばされたんだと認識した頃には、スバルは壁に吹き飛ばされた。

「スバルッ！」

ギンガは悲鳴をあげるようにスバルの名を叫んだ後、妹を傷付けた青年に殴りかかった。

「ヒャアアアッ！！」

刹那は奇声を発しながら左腕を振るう。
？凶蜘蛛？の口先から伸びた長刃がギンガの左肩を貫く。
鮮血が飛び散る。

ギンガが痛みに悲鳴をあげる前に、刹那はギンガの肩から刃を引き抜くように蹴り飛ばす。ギンガはデバイスを凶器として振るわれた恐怖で受け身を取ることすら忘れて地面を転がった。
今度はガリューが攻撃を仕掛けた。
自らの生存率を高めるために、相手を確実に仕留めるために、自身に魔力を込めて環境迷彩フィールドを生成し、不可視状態になる。
そして、腕部骨格から鋭い突起物を出現させ、疾走しながら刹那の頭部を貫く勢いでそれを突き出す。
しかし、ガリューは大きなミスをした―刹那には視力が無く、不可視化しても全く意味がないということを。
刹那はガリューの腕を掴み、鋭利な突起物は目標に到達できずに止まった。
不可視化された自分を捉えられたことにガリューは驚愕する。

「ハッ！！　何ビビってやがるッ！！？」

刹那はガリューの心音を聞きながら嘲笑し、紫炎を纏った右脚でガリューを蹴り飛ばした。
刹那からしてみれば、姿を消そうが気配を消そうが—視力以外の鋭い五感を使えば容易に捉えられる。そもそも、鋭敏化している聴覚と嗅覚がなくても殺気だけでも十分過ぎるほどに察知できる。

刹那が繰り広げる一方的な戦いを目の当たりにして、ティアナは恐怖しながら呆然としていた。
彼の左腕に填めてある武器が殺傷設定のデバイスなのか、質量兵器なのかわからないが、人を簡単に殺せる武器を平然と振るう刹那をかなり危険な人物だと認識した。
そして、反則的に強い。もしかしたら、隊長格にも通用するのではないだろうか？　その気になれば、数秒でこの場にいる全員を殺せるんじゃないだろうか？
初めて覚える死の恐怖。
今までの任務が、今まで倒してきたガジェットが、どれほど生温かったのか痛感した。

勝てるのか？
余裕で、一撃でスバルたちを撃破したこの男に勝てるのか？
そもそも自分たちは、逃げられるのか？

？蜘蛛？からの恐怖の糸に捕らわれたティアナは思考と行動を停止されていた。

「—ティアさん、キャロをお願いしますっ！」

少年の声で意識が現実に戻る。

ティアナは声の方向に顔を向けると、エリオが彼女の足元に気絶しているキャロを横たえさせていた。

「た、頼むって…あんた、まさか…」

ティアナと薫は、？ストラーダ？を構えるエリオがこれから何をするのか理解できた―エリオは、あの男を相手に、戦う気なのだ。しかし、彼の手が若干震えていた。エリオもまた恐怖しているのだ。だが、それでも―戦う選択を選んだのだ。

勇姿を見せるエリオにティアナが呆然とする中、薫は満足げに頷きながらエリオに念話する。

『よし…エリオ、行くぞッ！』

『うんッ！』

薫からの言葉に激励され、エリオは頼もしく返事をする。

そして、瞬時に作戦を立てる。

加速魔法で翻弄しながら連携で仕留める―訓練や模擬戦でいつもやっていることだ。そして、連携に関して、薫とエリオは相性が良い―なのは相手に一撃を与えたことだってある。手傷の三つや四つ負うかもしれないが、敗けはしないはずだ。

薫とエリオは同時に加速魔法を発動する。

『Ｓｏｎｉｃ―Ｍｏ―』

「遅えッ！！！」

だが、魔法を発動するより、刹那の方が速かった。刹那は加速魔法に頼らない純粋な速さで疾走し、通りすぎ様に薫とエリオを斬りつける。

「くうっ…にゃろッ！！」

薫は痛みを堪え、一秒未満で？鋼金暗器？を四之型・？三日月？―ブーメランに変形させ、それを刹那に向けて投擲する。ブーメランは風を切る音を発しながら刹那に一直線に向かう。十分に？速い部類？に入る速度だが、八竜最速の刹那からしてみれば遅い部類だ。刹那は欠伸を堪えた様子でブーメランを受け止めようと手を伸ばした時―金色のブーメランが突然六つに分裂した。ブーメランの音と匂いが増えたことに刹那は驚愕する。

？宿主の兄？が使う分身のようなものかと思ったが、聴覚が捉える風を切る音と、嗅覚が捉える金属の匂いと、触覚が捉える風圧からして―分身ではなく、どれも実物のようだ。

―だったら…全部叩き落とせばいい…。

刹那は？凶蜘蛛？の六脚と口部の刃を伸ばし、リーチを長くする。そして、？凶蜘蛛？が填められた左腕を乱暴に振り回す。

高速且つ連続的な金属音が響くと―刹那にかすり傷すら与えられず、

六つのブーメランは地面に落ち、『分裂錬金』が施されていた？鋼金暗器？は一つに戻った。
一撃すら与えられずに防がれたことに薫は驚愕する。そして、それが隙となった。

「鉄屑はともかく、俺様相手に武器を手放すべきじゃ無かったなァ！！」

刹那は嘲弄の叫び声をあげ、瞬時に薫との間合いを詰め、蜘蛛の牙を振り下ろす。

「薫ッ！！」

ルーテシアは悲鳴をあげるように薫の名前を叫んだ。
何とか彼を助けたいと思うが、今から魔法の構築が間に合うはずがない。それはティアナたちも同じだった。
薫ですら、防御も回避も間に合わない。
できた事と言ったら―斬り殺される自分を想像しながらぎゅっと目を瞑るだけだった。
だが、次の瞬間―薫は九死に一生を得た。
突如、強烈な轟音と発光が発生したからだ。

「―ぐあああああああああああッ！！」

脳髄を直接殴られたような激痛に、刹那は苦痛の叫びをあげながら耳を押さえて蹲った。異常聴覚を持つ彼にとってこの轟音は、手傷を負わされるより遥かに苦痛なものだった。

「い、いったい、何が…？」

薫は耳鳴りを覚えながら、表情を歪ませた。
いったい何が起こったのだ？

「無事か、薫っ！？」

聞こえずらくなった彼の聴覚に、聞き覚えのある声を微かに捉えた。
露出度の高い服を着た赤髪の小人が薫に心配げに話しかけてきたのだ。

「ア、アギト！」

薫は喜びと驚きの口調で彼女の名を呼ぶ。

「よかった、ケガしてねーみてぇだな」

アギトは無傷の薫を見て安堵の息をつく。彼女も少なからず、薫と

再会できたことに少し喜んでいた。しかし、その微笑みが一変し、怪訝そうな顔をした。

「けどよ…何でおめーが局員たちとつるんでんだ？　あたし、てっきり保護されてんのかと…」

「あ、ああ…これには深い理由があって―」

薫が苦笑いしながら言葉を紡ごうとした時、

「こ、の…クソガキがあああああああああああああッ！！！」

怒鳴り声が空気を一変させた。
先程まで激痛で蹲っていた刹那だ。
刹那の殺気が込められた怒声だけで、アギトは失神しそうになる。
アギトは、完全に？邪悪竜？の逆鱗に触れてしまったのだ。

「もういい…！？もうやめ？だ！！」

刹那は灰色の長髪を振り乱し、悪態をつきながら？ある決断？をする。それと同時に、彼の背後に巨大な炎の蜘蛛が現れた。

「もう出し惜しみは無しだッ！　てめぇら、まとめて焼き殺して―

塵にしてやるッ！！！」

刹那はアギトたちに毒牙のような殺気を放ちながら、両目を覆う黒布に手を掛けた。

だが、ほとんど聞こえなくなった聴覚と、頭に血が上り過ぎていたことで、こちらに近付いてくる？存在？に気付くのが遅れてしまった。

刹那の嗅覚が？濃密な血の匂い？を感じた時には―頬の触覚に、生暖かい温度と鉄のような堅固な感触を覚えながら吹き飛ばされた。

まるで車に轢かれたかのように吹き飛んだ刹那の身体は地面を何回か転がり、気絶したのかそのまま動かなくなった。

薫たちは刹那を殴り飛ばした？男？を確認しようとするが、それは遮られた。

破砕音と共にコンクリートの天井の破片が地面に落下し、砂埃が舞い上がる。

次から次へ何が起こったのかと薫達は砂埃に目を凝らしていると―そこから小さな影が飛び出してきた。

「捕らえよ、凍てつく足枷！」

小さな影―リインは、ルーテシアとアギトに向けて、ベルカ式魔法陣を浮かべた掌を向けた。

「『フリーレン・フェッセルン』！」

ルーテシアとアギトの周囲の水分が瞬時に凍結し、ルーテシアたちを氷塊に閉じ込めた。場所が水分の多い地下水路だから通常より発動速度が早く、氷塊の強度も増していた。

さらに砂埃から、赤い服を着た少女―ヴィータが現れる。

「ぶっ飛べエエエエエエエエエエエエ！！」

ヴィータはガリューに、巨大な金槌―？グラーフアイゼン・ギガントフォルム？を大振りに振るった。

ガリューは強固な甲殻に覆われた腕で防御しながら踏ん張る。しかし、純粋な力比べでヴィータが負けることはありえなかった。

ヴィータは筋肉の無さそうな短い両腕にさらに力を込め、ガリューを吹き飛ばした。ガリューはコンクリートで出来た柱の一部を破壊しながら、壁に叩きつけられた。

突然の援軍が、薫たちが手こずった相手をあまりにも短い時間で片付けてしまった。

「―おう、待たせたな」

「―少々遅れてしまったが…」

ヴィータと、刹那を殴り飛ばした青年―蛭湖が薫たちを一瞥して言葉を紡いだ。

「やっぱり…副隊長達って…強い…」

ティアナは頬を引き吊らせながら呆然と呟いた。
彼女たちが強いことは訓練で嫌と言うほど知っているが、ここまで大きな差があるのかと、ティアナたちはただただ呆然するしかなかった。
そんな中、

「ヒル兄ぃぃぃぃ～！」

スバルは安堵の涙を流しながら、刹那を撃破してくれた蛭湖に抱き付いた。
余程刹那が怖かったようだ。

「ヒル兄…？」

一方蛭湖は、何気に死亡フラグを立てているスバルの言葉に疑問げに呟いた。

だが、安堵の喜びはすぐに終わってしまった。

―ッ！！！

再び走った悪寒に、全員は一斉にその方向に顔を向けた。

「……」

いつの間にか立ち上がっていた刹那は折れた奥歯を吐き飛ばし、灰色の長髪を揺らしながら首をゆっくりと左右に傾けて骨を鳴らす。
先程まで激怒していた彼が、今は不気味なほどに静かな様子だった。
蛭湖に顔を殴られ、アギトたちを焼き殺すたちを遮られたのだ—激情な彼が何の反応を示さないのは不気味なほどにおかしい。
だが、

「ヒヒ…キヒヒ…」

刹那は、蛭湖とヴィータと対峙した瞬間から—怒りは消え失せていた。
あるのは—

「ヒャッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！」

喜びだった。

突然、狂ったように高笑いする刹那に薫たちは恐怖の目で見つめる。
しかし、刹那は構わずに笑い続ける。

刹那は嬉しかった。突然現れた青年と子供から、自分と同じ?血の匂い?を持っていたからだ。
親近感から、ではない。
?血の匂い?を持つ者は、殺し慣れている。殺し慣れているから、決まって強者だからだ。
そして、?強者と戦い、強者を殺す?のが―刹那の歪んだ趣味だった。いや、なっていた。
戦国の世で人間だった頃の刹那は弱者であろうが強者であろうが、殺せればそれだけで楽しかった。
しかし、いつの間にかその心が少し変わったようだ。
?強者と戦い、強者を殺す?―そういう風に変わっていた。

自分にもまだ?殺す心?という心があったことに、刹那は安堵するように高笑いした。

「ヒヒヒ…ここまで歩いて来た甲斐があった…最っ高に楽しめる獲物を見つけたんだからなァ…」

刹那は右手に紫色の炎を纏わせながら?凶蜘蛛?の刃先を蛭湖に向けた。彼こそが、一番強い人間だと認識したからだ。

しかし、蛭湖は刹那の言葉を聞いておらず、彼の右手にある紫炎に注目していた。

「紫色の炎…そうか、お前が通り魔だったのか」

蛭湖が呟く。
通り魔については、聖王教会も危険視していた。
だったら尚更、目の前にいる通り魔を確保しなければならない。
蛭湖はサーベル・フォームの?ナイト・カウント?を手に取った。
しかし、突然起こった地震によって、蛭湖と刹那は戦闘の意識を外された。

「…あ?　いつの間にか?音?が三つ消えてやがる…」

刹那は呟きを漏らす。
彼の言葉を何となく察したヴィータはガリューを吹き飛ばした場所を見た—彼女の予感は的中し、ガリューの姿がなかった。

「チッ…」

「—こっちもです」

リインは厳しい表情で氷塊を睨み、氷塊の凍結を解除する。
氷塊がなくなるとルーテシアとアギトの姿はなく、地面に人一人通れるほどの穴が空いていた。
もしかしたらこの不自然な振動は、彼女たちによるものなのかもしれない。

刹那は聴覚と触覚を使って、この場所が崩壊するまでの時間を計算する。

―…だいたい三分ってとこか…

蛭湖と闘争するにしては、あまりにも短い時間だ。
刹那は悪態をつきたい気持ちに駆られるが、楽しみは後で取っておくのも有りだとすぐに悟り、蛭湖に顔を向ける。

「ヒヒヒ…どうやら、俺たちの戦いはまた今度、ってことだなァ…」

「私はお前を逃がすつもりはないのだがな」

蛭湖は刹那に赤刃サーベルを向けながら言葉を紡ぐと、刹那は鼻を鳴らした。

「？逃がすつもりない？？　そりゃあ、俺がこれから逃げるって事かァ？　笑わせんな…！お前は―お前らは、ただ運良く命を拾われただけだ」

せっかく巣に捕らえた羽虫たちを前に、逃げ出す蜘蛛なんているはずがない。あえてすぐに食さず、空腹を我慢し、喰らう―それが蜘蛛の食事の醍醐味だ。
刹那は背後に巨大な炎の蜘蛛を出現させながら、目の前の？蝙蝠？に縛束の糸を絡めるように己の名を名乗った。

「俺は―刹那…！！？邪悪竜？の刹那だ…！！」

彼の名を聞くと、蛭湖と薫は驚愕した。
？刹那？―それは、烈火が操る八俣の火竜の内の一匹の名だった。
蛭湖と薫は、？火竜？が元は炎術士だとは知らず、？火竜の刹那？と、目の前にいる？刹那？が同一人物なのかと判断に迷う。
しかし、彼の左胸にある火影の烙印。炎を操る事。
そして、？邪悪竜？という異名を名乗る事から―同一人物という考えに傾いていく。
蛭湖たちは刹那自身についてさらに詳しく聞こうとした時には、彼はこの場から姿を消していた。

◇

薫たちのいる真上の地上に巨大な甲虫―地雷王が身体中から放電し、地下を崩壊させるために小規模な地震を発生させていた。
そして、そこから少し離れた建物の屋上からルーテシアとアギトが見下ろしていた。
しかし、無表情だがどこか複雑そうな顔を浮かべているルーテシアとは対照的に、アギトは焦燥感を露にしていた。

「ダメだよ、ルールー！　これはマズいって！　埋まった中からどうやってケースを探す！？アイツらだって局員とはいえ、潰れて死んじゃうかもなんだぞ！？」

「…あのレベルなら多分…これくらいじゃ死なない」

冷静に言葉を紡ぐルーテシアにアギトは彼女に対して珍しく怒りを露にした。

「多分じゃ、ダメなんだよッ！！　他の奴らはともかく、薫が死んじまったらどうすんだよッ！！？」

「…ッ…」

ルーテシアは表情を強張らせた。
アギトに言われなくてもわかっている。
地雷王を使って、地下を陥没させ、ナンバーズたちにレリックを奪取させる―その選択は、地下にいる薫に当然危険が伴うことをすでに懸念していた。だが、懸念しながらも、ルーテシアはそれを選択した。
自分には？叶えたい願い？があり、そのためにどうしてもレリックが必要なのだ。
しかし、？薫？と？願い？を天秤に掛けてしまう自分に、ルーテシアは自嘲してしまう。

葛藤が彼女の中で渦巻く。

自分らしくない。
いつもの自分なら何の迷いもなく、淡々と、何の感情も抱かずに？願い？を優先させ、？天秤に掛ける？などという表現すら使わないはずだ。
しかし、？願い？を優先させたことで、強い後悔が胸の中で渦巻い

てしまう。
どうしてだろう？
たった二度しか会っていないし、会話すらまともにしていない彼のことをどうしてこんなにも思えるんだろうか？
彼に思い入れがあるんだろうか？

しかし、ルーテシアはいくら考えても答えは見つからない。
ただ考えついたことは―地雷王による地盤崩壊をやめさせ、別の方法でケースを奪取する、ということだった。
しかし、そこまで思案していたルーテシアの耳に―嫌な音を捉えてしまった。
彼女は意識を現実に戻し、地雷王の方を見ると―地雷王を中心に円形の窪地が出来上がっていた。
ルーテシアの瞳が揺らぐ。後悔がさらに強くなっていく。
薫が無事であることを願いつつ、傍らにいるガリューに顔を向けた。

「ガリュー…戻っていいよ…」

ガリューは、エリオと刹那による怪我を負っていたが、彼女はそれを労る言葉をかける余裕もなく、短い言葉を紡いだ。
ガリューが頷くと同時に、足元に魔法陣が浮かび、姿を消した。

「地雷王も…――ッ！？」

ルーテシアは地雷王も送還しようとした時―地雷王を中心にピンク色の魔法陣が浮かび、そこから現れた光鎖が地雷王を縛りつけた。

そして、別の所から上空へ向けて二色の光の道が伸びていく。
スバルとギンガの？ウイング・ロード？だ。もちろん、その光の道に、彼女たちの姿がある。
そして、そのまた別の地点からティアナはルーテシアたちに向けて魔力弾を放つ。
初めは呆気に取られたルーテシアとアギトだったが、すぐに思考を戦闘に切り替え、距離を離しながら射撃魔法でティアナたちを迎撃する。
しかし、ティアナの方にも、スバルたちの方にも向かった射撃魔法はどれも不発に終わる。
そして、彼女たちから距離を離したルーテシアの前に、鋼色の光が地上を光速に走っていた。
そして、その光が人の姿を成したとき―黒髪の少年が黄金の薙刀の刃をルーテシアに突き付けていた。

「ごめん…ルーテシアちゃん…」

薫は悲しげな表情と口調で、何故か謝罪の言葉を口にした。
それに対してルーテシアは無表情だったが、どこか安堵したような色を秘めていた。

其之二十三：再会　後編（前書き）

聞き澄ませ、麗しく響く不死鳥の鳴哭。

其之二十三：再会　後編

廃棄都市区画にある多く建物の中で、一際高いビルの上に二人の少女がいた。
一人は白銀の外套を羽織り、眼鏡をかけた少女。もう一人は茶色のロングヘアーを後ろに縛った無表情な少女。その手には、古めかしい布に包まれた長大な何かを持っている。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる～？」

眼鏡をかけた少女―ナンバーズＮｏ．４のクアットロは、人を食ったような口調で相手に問い掛ける。

「ああ…遮蔽物もないし、空気も澄んでる…よく見える」

ナンバーズＮｏ．１０―ディエチは無表情のまま、少しだけ満足げな口調で返す。

？狙撃をする？上で、標的を確実に撃ち抜くために、相手に自分の存在を悟られないように、狙撃手は適切な位置につかなければならない。狙撃の妨げになる遮蔽物がない高い位置―ディエチたちが立つこの高層ビルの屋上こそが、その適切な位置だ。
さらに今日は快晴だ。積雲もまた狙撃の妨げになる存在だ。しかし、今日はそれがない。狙撃手にとって好ましい状況だ。
そう、ディエチはこれから狙撃をするのだ。そして、布にくるまれ

た長大のそれは狙撃するための兵器だ。

ディエチは戦闘機人の左目で、目の前に広がる光景をズームする。
拡大された彼女の視線の先には―機動六課のヘリと、周囲を警戒しながらヘリと並んで飛行する紅麗の姿があった。

「でも良いのか、クアットロ？撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、？マテリアル？と？黒い奴？の方は破壊しちゃうことになる…」

ディエチが懸念していることは、ヘリに乗せている謎の幼女と紅麗を撃ち殺して良いのか、という事だ。
出撃前からスカリエッティに、できれば両者を確保して欲しいと言われている。大方、彼の言う？計画？とやらのために二人の存在が、どうしても必要なのだろう。
しかし、ケースを手に入れるためだけに二人を撃ち殺すのはまずいのではないだろうか？と、ディエチは躊躇っていた。

―…いや…ちょっと、違うかな…。

ディエチは自分の心情を少し訂正する。
撃ち殺すのに躊躇いを覚えているのは、ドクターに対しての損得だけではない。それ以上に躊躇う理由があった。
しかし、それを上手く表すことができなかった。だからと言って理由がないというわけじゃない。
理由がないと思えるのに、しっかりとした理由がある。
ディエチは深く思案するが、その理由とやらの答えは見つからなかった。

ただわかっていることは―締め付けられるような違和感が、胸の中にあったことだった。

―…不調、なのかな…？

初めての感覚に、ディエチはそれが―？殺しを躊躇う罪悪感？というものを知覚できなかった。

きっとどこか不調だろうと思い込み、後でドクターに検査と整備してもらおうと短い予定を定めたディエチは意識を現実に戻す。

一方、そんなディエチの心情には全く気付かず、クアットロは妖しく笑いながらディエチの懸念の言葉に答える。

「ドクター曰く…あのマテリアルが？当たり？なら、本当に？聖王の器？なら…砲撃くらいでは死んだりしない大丈夫、だそうよ。そして、あの仮面男を殺したとしても、原型を留めていなくても、身体の一部さえ回収できれば良いそうよ」

「……」

クアットロの言葉にディエチは返事をせず、躊躇いがちに兵器をくるんだ布を取り払う。

それは、青く長大な大砲だった。

？イノーメスカノン？―ディエチの固有武装である狙撃砲だ。

とても一人の少女に持てなさそうな代物だが、戦闘機人である彼女にとってそれを抱えるのはそれほど苦ではなかった。

ディエチが狙撃の準備をしている中―クアットロの前に、ウーノの顔が映し出されたモニターが展開された。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あ～、そういえば例のチビ騎士に捕まってましたねぇ」

仮にもクアットロたちとルーテシアたちは協力関係。それなのに―いや、それだからこそかもしれないが、クアットロは他人事のように返した。

『今はセインが様子を窺ってるし、ナナシとトーレが待機しているんだけど…』

ウーノの呟きに、クアットロは瞳を鋭くさせた。

しかし、それは真摯に見えて、悪戯っぽい魔性を秘めていた。

「わざわざナナシとトーレ姉様を出す必要はないですわ。私がセインをフォローする―それだけで十分です」

ナナシとトーレを出撃させず、戦線から離れた所に待機させているのは―彼らのデータを管理局にできるだけ渡さないため、それと妹たちに経験値を積ませるためだ。

クアットロはそれを思っての発言なのだろうと、ウーノは最初思っていたが、妹の魔性な表情を見た瞬間に考えが変わった。

？快楽を貪る？―それも思っての発言だ。

こんなな表情を浮かべるこの妹は、ろくな事を考えない。
だが、自分たちが不利益になるような考えは起こさない。
クアットロは頭が切れるから、自分たちにとってとても良い仕事をしてくれる。しかし、敵側からすれば―かなり悪質で醜悪な考えをすぐに呼び起こすのだ。
彼女の世話係である二番目の姉のドゥーエの影響なのか、元々の性格なのかわからないが―クアットロは、他人を貶める事に強い快楽を覚える性格を持ってしまっている。
だが、ちゃんと仕事をしているので、ウーノは彼女の性格を受け入れていたが、最近だんだん受け入れがたくなってきた。
それが―笑顔と和みを与えてくれているナナシの影響なんだと、ウーノは実感する事ができなかった。

『…お願い』

ウーノにできた事といったら、感情論を出さず、任務達成を優先させるために妹に任せることだけだった。

◇

１０分前―。
クアットロとディエチがいる地点から数ｋｍ離れた廃ビルの屋上に、長い金髪の青年と短髪の女性が佇んでいた。
彼らの前には、廃棄都市の色々な地点を映し出した複数のモニターが展開されている。

「あ～…ヒマやなぁ…もう帰ってもええか？」

ディエチたちのやり取りとは違い、モニターを見ずに緊張感が全く無い口調で愚痴をこぼしたのは金髪の青年―ナナシだった。

「帰るな。ちゃんとモニターを見据えていろ」

厳しい口調で返したのは短髪の女性―トーレだった。トーレは喝を入れるためにナナシを叱責するが、彼はそれを簡単に受け流す。

「そうは言うても…何もおもろいもんがないこんな寂れた所で、何十分もおるのは精神的にキツい――およ？」

愚痴を言い続けていたナナシだったが、視界に入った自分の長い金髪にちょっとした異常に気付き、不審げに目を細めながらそれを摘まむ。

「うわっ…色、落ちてきとるやん…染め直さなあかんなぁ。ラボ(あこ)に染毛剤あったか？　まぁ、無かったらウーノ姐さんにお小遣いもろうて街へ出掛け――はッ!?　ちゅうか、自分の金髪、地毛ちゃうんかッ!!?それとも、?プラント?特有の死の兆候―?黒髪化？なんかッ!!?　ショックやわァァァ～!!　マジで!?　マジか

！！？　マぁぁぁジぃぃぃでぇぇぇぇぇぇ～！！？」

「やかましいッ！！！」

「ごめんなさいッ！！」

トーレのシャイニングウィザードをくらいながらナナシは悲鳴をあげるように謝った。

◇

「ちゅうか、最初から自分らが出た方が良かったんとちゃうか？その方が、クアットロたちが危ない目に遭うことないで」

ナナシは真剣な目付きでモニターを見つめながら、真剣な口調で言葉を紡ぐ。だが、トーレの見事な一撃で頬が青く腫れ上がっているので全てが台無しになっている。

「ドクターは慎重な性格だからな。無駄に戦力を出して敵に自分たちのデータを渡したくないし、妹たちに少しでも実戦経験を積ませたいのだ。…安心しろ、もしもの時のために私たちが待機しているのだ」

トーレは諭すようにナナシに言うが、彼は納得がいかない顔をしたままだった。
敵に自分たちのデータが渡たることも、クアットロたちに実戦経験を積ませることも―ナナシにとって、そんなことはどうでもよかった。
自分が守ると決めた彼女たちが戦いの場にいること時点で、ナナシにとって不快だった。
そして、そうさせているスカリエッティにもまた不快感を覚えていた。
話には聞いていたが、実際に彼女たちを戦いの場に送り込んでいる今の現状に、話を聞いた時以上に静かな怒りがふつふつと湧き上がってくる。
その怒りを原動力にして我慢が崩壊していく。
もう命令を無視して、クアットロたちの支援しに行こうかと思った時―

「―ルーテシアお嬢様達が捕まった…！」

トーレの焦った声が、ナナシの意識が現実に戻る。
彼は、トーレが見つめるモニターに顔を覗かせる。
そこには―手錠をかけられた紫髪の少女と、バインドに縛られた赤髪の小人がいる。そして、彼女たちを取り囲み、厳しい表情で話し掛けているのはナナシよりも１０歳以上も離れていると思われる若い男女だった。
そして、ナナシはふと、その男女の集団の中で―金色の薙刀を持つ一人の少年の姿を見た瞬間、

「――ッ！！！」

脳内に激痛が走り、ナナシは片手で頭を押さえた。

「ナ、ナナシ、どうしたッ！？」

トーレは血相を変え、心配そうに尋ねてくる。しかし、ナナシは彼女の言葉に応える余裕はなく、頭の苦痛を覚えながら表情を歪ませる。

―な、何かを…思い出しそうや…！

ナナシは、この少年をどこかで見たことがあると確信した。しかし、思い出しそうで記憶の情景が浮かんでこない。

だが、ナナシは自分の過去が知りたいと、無理に思い出そうとする。しかし、何も思い出せず、頭痛も激しくなっていった。

「くっ…！」

ナナシは頭痛に耐えきれず、思い出すことをすぐに諦めた。それと共に、だんだん頭痛が引いていく。

ナナシは過去を知りたい気持ちはもちろんあるが、強くなっていく苦痛に耐えながら必死に思い出そうとする程渇望していないし、過去のことよりもナンバーズと過ごすこれからの日々のことの方が遥

かに大切だと思っている。故にあっさりと諦めた。

「大丈夫か、ナナシ…？」

トーレは、ナナシの顔を覗き込みながら声をかける。
彼はようやく彼女に顔を向けると、トーレの心配そうな表情が目に入った。
こんな顔をしているトーレを見るのは、ナナシにとって初めてだった。
もしかしたらスカリエッティにも、他のナンバーズにも見せていない顔ではないだろうか？

ナナシは、共に生活して一年も経っていないのに自分を心配してくれた嬉しさと、女の子を心配させてしまった罪悪感が同時に込み上げてくる。
彼は複雑な思いを抱えながら、彼女をを安心させるように軽薄な笑顔を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「ああ、何でもあらへんでっ。しっかし、自分を心配してくれるトーレ姐さん、かわええな～♪」

ナナシがニヤニヤしながらそう言うと、トーレは羞恥に顔を真っ赤にした。

「ば、馬鹿者がッ！！　誰がお前なんかを心配するかァ！！」

トーレは顔を赤くしたまま、激しい勢いでそっぽを向いた。
その様子をナナシは微笑ましい笑顔で一瞥し、表情を引き締めながら再びモニターに映る少年を見つめる。

―こいつは、自分と何か関係がありそうやな…。

軽い頭痛を覚えながらナナシは心中で呟く。
この少年が自分と関係があるのは、先程のことでわかった。

―いつか、一回会うて話してみるか…。

次に会える日はいつになるかわからない曖昧な予定を決めたナナシは、今度はクアットロとディエチが映るモニターに視線を移す。
その瞬間、ナナシは目を見開いた。
ディエチが足元に橙色の魔法陣状のテンプレートを浮かべながら長大な大砲を構えていたからだ。

「ちょう待て！！　何する気や、アイツッ！！？」

ナナシは焦りながら自分の疑問を声に出して叫ぶ。
ディエチの様子を見れば、彼女がこれから何をするのか容易に考え付く。

―まさか…誰かを撃ち殺すつもりか…！？

しかし、ディエチが定める砲身の先には―何も見当たらない空だ。

標的と言えるものなどない。

―まさか…！

ナナシは鋭い目付きで、複数のモニターの一つ一つに視線を動かしていく。

そして、見つけた。

空を飛行するヘリと、黒衣を着た男を。

ディエチはこれらに向けて撃つつもりだ。

「させるか…！！」

ナナシは、牛の頭部を模した金色の二叉の矛―？ストーンカ？を手に取る。

―犯罪を犯すとこまでは何とか我慢してやるが、殺人を犯すことは絶対に我慢できんッ！！

ナナシは最近習得したばかりの飛行魔法を行使し、上空に飛び立つ。

トーレがナナシに向けて何かを叫んでいるが、彼の耳に入っていない。

そして、

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ.』

ナナシは加速魔法を発動し、その身を雷光に変えた。

◇

その頃、ヴィータたちはルーテシアたちに事情聴取を行っていた。
しかし、ルーテシアは目を瞑ったまま何も答えない。
彼女の態度に、短気なヴィータが痺れを切らしそうになった時―今まで何の反応を示さなかったルーテシアが突然ゆっくりと瞳を開いた。

「逮捕はいいけど…」

そして、言葉を紡ぐ。
しかし、それは彼女自身の言葉ではない。ヴィータたちに伝えることをクアットロが念話でルーテシアに伝え、彼女がそれを代弁しているのだ。

「大事なヘリは、放っておいていいの？」

「！！？」

ルーテシアの言葉にヴィータたちははっとなる。

◇

『市街地にエネルギー反応！大きい！』

『砲撃のチャージ確認！物理破壊型―推定Ｓランク！』

ディエチの砲撃チャージのエネルギー反応を探知したロングアーチが、紅麗たちに報告する。

ヘリの操縦しているヴァイスは真っ先に自分たちの危機を感じると、ヘリの外側にいる紅麗に向けて叫ぶ。

『おい、紅麗！　何とかしやがれ！！　俺はまだ、？よう、お前ら…満足か…？こんな世界で…。俺は…嫌だね？みたいな台詞言いたくねーんだよッ！！』

紅麗は、ヴァイスの悪ふざけな言葉を無視し、焦る様子なくエネルギー反応がある方角に身体を向ける。

そして、火影式魔法の一つの構築を開始する。

砲撃魔法が来るのなら、構築すべきは大規模な防御魔法だろう。

しかし、紅麗は防御魔法を使う気はなかった。

彼は今まで独自に強力な射撃魔法や飛行魔法などを創製してきたが、防御魔法だけは苦手だった。

火影式魔法は術者の想像で創製するのだから、創製や構築をすること自体、そんなに難しくはない。しかし、その強度と構築速度は全魔導師の平均以下―具体的に言うとスバルよりも下なものだった。

それは紅麗に防御魔法の才能がないということだが、彼が？防御？というものを重視していないということも関係しているのかもしれない。
彼には純粋な脚力による脅威的なスピードがある。わざわざ防御しなくても、そのスピードだけでほとんどの敵の攻撃を受けることがない。
紅麗の火影式魔法は、炎術士としての能力を大半引き継いでいる―それは、防御を重視しない彼の戦闘思考まで引き継がれているようだ。
しかし、三種の防御魔法の中でただ一つ―フィールドタイプの防御魔法だけは例外だが、それは後に語られる。

とにかく、防御魔法が苦手な紅麗がヘリを守るためにSランクの砲撃を受け止めることができない。
自身の防御だけでも難しいのに、ヘリをも防御するとなるとより強度を上げないといけないし、防御範囲も広げないといけない。
カートリッジで補うこともできなくもないが、苦手な防御魔法を使う時点で不安が募る。
故に―こちらも砲撃魔法を発動し、相殺することにした。
その新しく創製した？砲撃魔法？は模擬戦でも使ったことがなく、なのはたちにも見せていないものだ。それでも苦手な防御魔法を使うより遥かにマシだった。

「…カートリッジ使用」

『御意。魔力弾薬―起爆』

紅麗はあえてデバイスである?紅?の名前を呼ばずに、命令を下す。本来、彼は?紅?に命令を下す時には必ず名前を呼ぶ。しかし、デバイスだからなのか?紅?はそんな主の異変に気付いた様子なく彼の命に応える。

漆黒の手甲の隙間から、二発のカートリッジが排莢される。

そして、紅麗は足元に紅い光の刻印を浮かばせながら、エネルギー反応がある方角に左手を向ける。

そして、構築する—弟が操る八俣の火竜の内、一匹の能力を元に創製した砲撃魔法を。

紅麗の左腕に紅き炎が噴き出す。それがだんだん形を成していき、炎の鳥—不死鳥の頭部に変化する。

生を持たぬはずの頭部はまるで生きているかのように嘴を開閉させたり、頭を上下左右に動かしたりしている。

そして、敵意がする方向へ顔を向けた不死鳥は嘴を大きく開けると、その口内に太陽をそのまま拳ほどの大きさに縮小した火玉が生成される。

砲撃魔法に対抗するにしてはあまりにも大きさが小さい。しかし、その火玉にはとてつもない破壊力を持つ灼熱が宿っていた。

◇

「後１２秒…」

ディエチは、自分のＩＳ—『ヘビィバレル』を発動し、チャージしてから十分な時間が経ち、いよいよ標的に向けて発射するまでカウ

ントダウンを取っていく。
それを心地よく聞きながら、クアットロはルーテシアを通して、ヴィータに対して毒のような言葉を紡いだ。

「あなたはまた…」

◇

「あなたはまた…護れないかもね」

「!!?」

ヴィータは驚愕しながら表情を蒼白させた。

―まさか…?あの時?のことを言ってんのか…!!?

どうしてこの少女がそれを知っているのか?　しかし、それを考えることより、ヴィータの脳裏に最も忌まわしい記憶が蘇る。
8年前―なのはが落とされた日のことだ。
当時彼女がハードワークをしていたことを知っていたのに、?大丈夫だよ?と言う彼女の言葉をすぐに信じてして安心してしまった。
その笑顔とその言葉が、無理しているんだと気付いてすらいなかった。
そして、結果が―?アレ?だった。
なのはと共にいる時間が多かった自分が気付いてあげるべきだった。
たとえ、彼女の言葉が本心でもハードワークをしている時点で休ま

せてあげるべきだった。
あの時のことについて―最も罪悪感を覚えていたのはヴィータだ。
いや、今でもその罪悪感を引き摺っている。だから、なのはを護ると決めた。誰も落とさせないと決めた。
だが、
―また…護れないっていうのか…！！？

◇

「発射」
ディエチが持つ？イノーメスカノン？の砲口から、橙色と赤色の光の奔流が放たれた。
奔流はヘリと紅麗を撃ち落とすために、彼らへ向けて真っ直ぐに伸びていく。
しかし、

「『焔鳴哭（ほむらめいこく）』」

紅麗も静かに言葉を紡いだ。
それと共に不死鳥の口内に生成されていた火の玉が―炎の奔流へと

変わった。
鳥類特有の甲高き鳴き声が発射音のように空全体に響き、炎の奔流が閃く。
まるでレーザー砲のような、一直線に走る炎の砲撃。
ただ一直線に伸びているだけなのに、その大きさとその熱さが凄まじい破壊力を物語っていた。
ヘリと紅麗を撃ち落とすための砲撃と、その砲撃を相殺するための砲撃―二つの奔流が空に駆け抜け、衝突した。
爆発音が響く。
ほぼ同威力の二つの奔流は拮抗し、押さず押されずの状態のまま、拮抗による魔力のスパークが発生する。
やがて、その拮抗を維持し続けることができず、二つの奔流の接触点を中心に爆発音を響かせながら広大の魔力煙が霧のように辺りの空を埋め尽くした。

◇

機動六課・管制室。
廃棄都市全体を映し出された複数のモニターに向かっていたシャーリーたちは、ヘリと紅麗がどうなったのかわからなかった。
紅麗が敵の砲撃に向けて、それを相殺するための砲撃魔法を放った時までは、ちゃんとモニターに映っていた。
しかし、途中から発生した強いジャミングにて、状況を映し出すモニターが砂嵐状態になってしまい、状況を確認することができなくなった。

「…ど、どうなったの…？まさか…ヘリも、紅麗隊長も…」

「そんなはずない！状況確認！」

シャーリーは、消極的な予想を口にするアルトを叱責し、状況確認を促す。

シャーリーもまた、自らが立てた悪い予想が脳裏に浮かんでいた。

しかし、アルトの発言で、自分が何て馬鹿なことを考えていたんだと自覚し、彼らの無事を信じて必死に状況を調べる。

しかし、未だにジャミングが発生しており、状況を確認することができなくなっていた。

砲撃の相殺が見事に成功し、ヘリと紅麗が無事である事を知らずに。

◇

一方、ヴィータたちは状況がつかないと語るシャーリーたちの報告に表情を蒼白とさせた。

自分たちがいる地点とヘリとの地点があまりにも遠いものだから、目視で状況を確認することができない。だから状況を知るための方法は、管制室にいる局員達からの報告しかない。

しかし、その頼りとなる報告はわからない状態だ。状況を確認することができないから、ヘリと紅麗が無事なのか無事じゃないのか判断できない。

だが、悪い予感が浮かんで仕方がない。

それはヴィータもスバルたちも、紅麗が防御魔法が苦手だということを知っているからだ。

いくら紅麗とはいえ、防御魔法が苦手な彼がSランクの砲撃を防げないと不安が募っていく。

「―てめえッ！！」

ヴィータは今にも殴りかかる勢いで、ルーテシアの両肩を掴む。
いくら短気でも、長年管理局員として常識を覚えてきたいつもの彼女なら、ルーテシアに対してここまでの態度を取ることはなかっただろう。
しかし、今の彼女はルーテシアから放たれた言葉で冷静さを失っていた。

「ふ、副隊長…落ち着いて…」

スバルはヴィータを宥めるようとするが、彼女は「うるせぇ！！」と荒々しく返してスバルを黙らせ、再びルーテシアに顔を向ける。

「オイ、仲間がいんのか！？　どこにいる！？　言えッ！！」

ヴィータは怒気を込めてルーテシアを激しく問い詰める。しかし、ルーテシアはヴィータの態度に畏縮する事なく無表情に口を閉ざす。
そんなやり取りを静観していたギンガは、ふと地面の方に違和感を発見した。
最初は、青い蛆虫かと思った。しかし、こちらに近付いてくる蛆虫

は地を這わず、直立している。
あまりにも不自然だ。
やがて直視していると、それは蛆虫ではなく――？人差し指？なんだと理解した。
しかも、それがケースを持つエリオに真っ直ぐに近付いていっているではないか。

「エリオくん！　足元に何か！」

ギンガは警告を飛ばす。
エリオは咄嗟に振り向くが、？地面に潜んでいた敵？の方が早かった。
人差し指が生えている地面から、水色の髪の少女――セインが飛び出し、エリオからケースを奪った。

「いただきっ」

セインは悪戯が成功した子供のような無邪気な笑みを浮かべながら、再び地面に飛び込んだ。
まるでプールの水に飛び込んだかのように、セインの肢体がコンクリートの地面に沈んでいく。ティアナはセインに受けて魔力弾を発射するが、セインが地面に完全に沈み込む方が早く、魔力弾は虚しく地面を打つだけだった。

あまりにもイレギュラーの能力に、唖然としていたヴィータたちだったが、まだ敵はそう遠くへは行っていないはずだと判断し、セイ

ンを探しに行く。
彼女たちの様子を無表情な目で見つめていたルーテシアに、先程ケースを奪ったセインの念話が届けられる。

『ルーお嬢様、ナンバーズ6番―セインです。私の？ＩＳ？―『ディープ・ダイバー』でお助けします。フィールドとバリアをオフにして、じっとしててくださいね』

ルーテシアは無言でいたが、彼女の言葉に応えるように自身に纏う魔法を解除する。それと同時にタイミング良く地面から再びセインが現れ、ルーテシアを抱える。
まさかこんなにも早くセインが再び現れるとは思っていなかったらしく、ヴィータたちは彼女の存在に気付くのが遅れしまい、セインはルーテシアと一緒に地面に沈み込んだ。
その瞬間、ルーテシアが最後に見たものは、自分に届くはずがない手を必死に伸ばしながら何かを叫ぶ薫の姿だった。
ルーテシアはそんな彼の姿を見ても表情に変化を起こさなかった。
しかし、気付かなかった。
自分も薫に向けて手を伸ばしていることを。

◇

砲撃を放った後、狙撃の成功を示すような広大で濃密な魔力煙を―クアットロはいつもの作り笑顔を浮かべ、ディエチは無表情に見つ

めていた。

「うふっふぅのふ～。どう？　この完璧な計画♪」

「黙って。今、命中確認中」

ディエチはクアットロを黙らせ、妙な不安感を覚えながらヘリたちの姿を遮る邪魔な魔力煙を見据える。
ディエチが砲撃をした際、紅麗がそれに対抗するように砲撃魔法を撃ったのを、彼女の視覚に捉えていた。
しかし、両者の砲撃の相殺した地点がヘリと紅麗側であったため相殺されたのか、狙撃が成功したのか、アングル的にもディエチは判断できなかった。
だが、ディエチは砲撃魔法を放った紅麗ごとヘリを破壊したんだという自信を持っていた。最大出力でないとはいえ、自分のSランクの砲撃を防げる者など、片手の指で数えるほどしかいない―例えば、エース・オブ・エースと謳われている高町なのはくらいなものだろう。
あの黒衣の男もまたそうなのだろうか？
戦闘に関するデータはないが、あのドクターが目を付ける程だ―只者ではないのだろう。
しかし、だからといってSランクの砲撃を防げる絶対的な根拠はない。
だから、ディエチは自信を以て？狙撃が成功した側？の予想を浮かべていた。
しかし、自信と共に？小さな不安感？もディエチの心に根付いていた。
自信と不安を同時に抱えることは別に不思議なことではない。

大きな自信を持っても、？もしも？の小さな不安も覚えることもある。
しかし、ディエチは違う。
？大きな自信？に対する？小さな不安？がだんだん膨れ上がっている。
矛盾な出来事だ。
現実性も信憑性もある？大きな自信？の方が勝っているはずなのに、根拠の薄い？小さな不安？の方が勝り始める。

―気持ち悪い、感覚だ…！

ディエチにまったく理解できなかった。理解できなかったが、一つだけわかる―その？小さな不安？には一切の常識を覆す？何か？があるということを。

ディエチが思案している間に、魔力煙が晴れ始めた。
ディエチは自信と不安を抱えながら見つめていると、結果が現れる。
ディエチたちの視界に捉えたのは、無事なヘリと黒衣の男の姿だった。

「うそ！？　防いだって言うのっ！？」

クアットロはいつになく驚きの声をあげる。ディエチも予想していたとはいえ、彼女もまた驚いていた。しかし、未だに結果が信じられず、ディエチは紅麗を見据える。すると、

―…何か、変だな…。

ディエチは紅麗に対して違和感を覚えた。

別に彼に変わった様子はまったくない。しかし、何故か違和感を覚えてしまう。
上手く言い表せない不気味な感覚だ。
そして、先程の不安感に似た恐怖感が、ディエチの胸の中を支配する。
まるで心臓を鷲掴みされ、握り潰されそうになっているかのようだ。
しかも、その恐怖感が強くなっていくのに伴って、ディエチの心臓がだんだん高鳴っていく。

「――――」

ディエチはふと無意識に、無意識に空を見上げた。
次の瞬間、ディエチは全身が凍りつくような感覚を覚えながら目を見開いた。
ディエチが見上げる上空には―黒い影があった。
腰まで届く長い黒髪、背中に一対の炎の翼、全身に纏う黒衣を着込み、仮面を填めた青年―紅麗だ。
その紅麗が左手に持った紅き刀を構えながらこちらに急降下してくるではないか。
ディエチは自らの砲撃を防がれたこと以上に驚愕した。先程までヘリの側にいたはずの紅麗が、距離があるとはいえ自分たちの真上にいるのだ。
瞬間移動の魔法を使ったのか？
ディエチは紅麗を警戒しながら素早くヘリの方を見た。
しかし、依然としてヘリの近くには紅麗がいる。だが、？その紅麗？が霧が晴れるかのように姿が消えた。
―幻術！？　まさか…ヘリの方に意識を向けさせるための囮…！？

そうこうしている間にも、紅麗は距離を詰めてくる。
いや、もうすでにすぐ側まで来ている。
ディエチは？イノーメスカノン？を放り出し、クアットロを押し倒す。
それと同時に二人を狙った紅刀の一閃は二人の背中を掠め、ディエチの？イノーメスカノン？を斬り裂いた。

「！？―な、何で、あなたがここに…！？」

クアットロは何故紅麗がここにいることが理解できずに混乱した。
そんな彼女に喝を入れるようにディエチが叫ぶ。

「クアットロ！　早く逃げるんだ！」

彼女の言葉で、クアットロは混乱から解き放たれた。色々疑問に思うところがあるが、目の前の男から逃げなければならないと思考が固められた。
クアットロはディエチと共に紅麗に背を向けて逃げようとした時、自分の顔に何かがぶつかった。堅くもなく、柔らかくもない―そんな感触だ。
ただ、クアットロは直感的に悟る―嫌な感触だ。
クアットロは嫌な予想をしつつ、恐る恐る顔を上げると、そこには仮面の刻印を赤く発光させながら佇む紅麗がいた。
あの一瞬でクアットロたちの目の前に先回りしたのだ。
恐るべき速さだ。

驚愕しながら恐怖するクアットロたちの様子など意に介した様子なく、紅麗は紅い刀―?紅・弐式?をゆっくりと振り上げた。
紅麗は?紅?を非殺傷設定にしているが、彼の纏う重圧な殺気で、クアットロとディエチは殺されるんだと錯覚した。そして、恐怖で逃げることすら忘れてしまった。
振り下ろされる紅き刃をクアットロは虚ろな瞳で見つめた。そして、次に響いたのは、金属音だった。

「―ッ!?」

一瞬遅れてクアットロは瞳に生気を宿す。
彼女に振り下ろされた刀の刃は、横合いから伸びた金色の二叉の矛によって止められていた。

「……」

紅麗は視線をずらし、自分の斬撃を止めた者を見た。その瞬間、驚愕に目を見開いた。

「すまんなぁ、兄さん。こっちの二人は自分のツレやから、暴力はやめといてや」

ナナシは軽薄な笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

麗―及び、裏火影の首領である紅麗と、その配下である？ジョーカー？―ナナシがついに再会を果たした。

其之二十四：狂戦士（前書き）

喰らうは、野獣（ケモノ）。
殺すは、狂人（ヒト）。

其之二十四：狂戦士

「「ナ、ナナシっ！？」」

ディエチとクアットロは突然乱入してきたナナシに、驚きの声をあげた。その口調には駆けつけてきてくれた喜びの感情も混ざっていた。

一方、ナナシは、目の前にいる仮面をつけた男と対峙した瞬間、軽い頭痛を覚えるとともに脳内の意識が混濁し始めていた。
数十前にモニター越しに、薫の姿を見た時と同じ状態だ。

あの時の余波がまだ残っているのかと初めは思ったが、？感覚的？にそれは違うと断言できた。

―もしかして…コイツも、自分に関係ある奴なんか…？

恐らくそうなのだろう。
しかし、ナナシは失った過去を思い出そうとするが、薫の姿を見た時と同じように頭痛がするばかりで、記憶の情景が全く浮かんでこない。
なら、この男と会話でもすれば何か少しでも思い出せるんじゃないかと思ったが、そんな状況ではない。

今は目の前の男一人だが、すぐにでも彼の増援が来るだろう。
隙を窺って、クアットロたちを抱えて加速状態で逃亡しようかと、ナナシが思考を巡らせている最中、彼を観察するように静観していた紅麗が重い口を開いた。そして、次に彼の口から出た言葉は、ナナシにとって―いや、？記憶を失っているナナシ？にとって、ある

意味衝撃的な一言だった。

「お前―?ジョーカー?か…?」

「――!!?」

ナナシは大きく目を見開いた。
紅麗の声から紡がれた?ジョーカー?という単語が、ナナシの脳内と心が激しく揺さぶり、軽い頭痛だったものが急に激しいものへと変わった。

「うぐっ…あああああああっ…!!」

ナナシは片手で頭を抱えた。
薫の姿を見た時以上の激しい痛みが襲う。
心拍数が急上昇していく。
全身に嫌な汗がかいていく。

急に苦しみだしたナナシを見て、クアットロとディエチが血相かえながら心配そうに声をかけるが、彼はそれに応える余裕はなかった。
そして、彼の脳内に記憶の情景と記憶の音声が再生し始めた。

◇

まず最初に見せられた記憶の情景は―夜空に満月が輝く、人気の無

い山奥だった。
そこで、二振りの太刀を持った大男と、二日にも及ぶ?手加減した戦い?を終えた時だった。

『強いな…名は何という?』

視界に入ったのは—黒衣を纏い、顔全体を覆う仮面を填めた青年だった。

「あ?あんた、誰や?」

逆に聞き返す。
だが、目の前の青年が何者なのかは、だいたい察しがつく。
元々?そちら側?に入るために、今まで手を出してきたのだ。少なからずの情報は持っている。

「人に聞く時は、まずあんたが名乗るもんやで」

『貴様っ！　紅麗様になんと…』

大男が野太い声で叱責してくるが、青年の方は気にした様子なく自らの仮面を外した。

『愉快な奴だな。私は…？紅麗？』

そう名乗った青年の顔は無表情だったが、どこか笑っているように見えた。

これが―？紅麗？という青年との、最初の出会いだった。

時は流れ―？記憶の情景？が変わる。

場所は―これもまた夜の、どこかの山奥。

しかし、最初に見せられた山奥とは違う場所なんだと感覚的に理解できていた。

「行きましょ、？紅麗さん？。こないな？その他大勢？ほっといてもええやろ」

？その他大勢？を横目で見ながら、？炎の天使？を出現させて彼らを焼き殺そうとしている青年を制した。

『…指図か？』

青年は突っ掛かるように、静かに尋ねてきた。

それだけで、大抵の者たちは恐怖で震え上がるだろう。

「指図やありません、助言や」

しかし、そんな彼に全く臆せずに言葉を返す。

周りの者たちは彼を恐れるが、本当の彼はそんなに怖くない。

平気で人を殺せるほど歪んでいようが、良くも悪くも、彼は?まだ人間?だからだ。

「その炎を使うんは他にいる。―な?」

『……』

無言で見据えていた青年はやがて、?その他大勢?の存在のことをすっかり忘れたかのように身を翻した。

『…行くぞ』

「わほーっ♪?紅麗さん?がゆー事きいてくれたーっ♪」

大袈裟に、テンション高く喜ぶ。

そして、彼に見えないように―殺されかけた?その他大勢?の内一人に、陽気に親指を立てた。

再び記憶の情景が変わる。

場所は、どこかの室内。

その場所で、自らが作り出した黒い渦―ブラックホールに、？ある男？と一緒に吸い込まれていた。

―ホレ…見い…？次？がのうなってもうた…。

この時の記憶は、あやふやだった。

ここの場所はどこなのか？　一緒に吸い込まれている？男？は誰なのか？　どうして、自分がブラックホールに吸い込まれているのか？　どうして、自分は大怪我を負っているのか？

完全に記憶が戻ってこないから、過去の情景について疑問だらけだ。

だが。

―損な性格やな…自分…。

ただ、？何かの楽しみ？を失ってしまったような気持ちだけは、確かに感じられた。

そして、深い喪失感を覚えながら、最期の言葉を紡ぐ。

―さいなら…？紅麗さん？…。

◇

記憶の情景と音声の再生が終え、だんだん引いていく頭痛を感じながら、ナナシは汗だらけの顔を―？紅麗？に向けた。

「そうか…そうやったんか…」

ナナシは荒い呼吸を繰り返しながら独り言を呟く。

「自分の名は？ジョーカー？で…あんたの名は？紅麗？、さんか…」

紅麗は仮面の下で訝しげな表情を浮かべた。
何を当たり前な事を言っているのだろうか？
紅麗が疑問に思う中、クアットロだけはナナシの紡いだ言葉の意味が理解できた。

「ナナシ…もしかして、記憶が…？」

沈鬱な呟きを漏らすクアットロを、紅麗は微かに見開いた目で一瞥したあと、ナナシに視線を戻した。

「…ジョーカー、記憶を失っていたのか？」

「現在進行形や…まだ完全に記憶は戻っとらん。思い出せたのは、あんたに関する記憶だけや、？紅麗さん？」

言葉を返したナナシの口調には、いつもの陽気な明るさがなかった。

滅多にない真摯な口調だ。
どうやら、記憶を失っている事は、嘘でも冗談でもないようだ。
だが、疑問は残る。
彼は死んだはずではなかったのか？
何故彼が、どうやってミッドチルダ（ここ）へ来たのか？
そして、何故犯罪者であるこの少女たちを助けた？　彼女たちの共犯者なのか？

一方、クアットロとディエチは逃亡が最優先である今の状況を忘れて、別の事を思案していた。

思わぬ所で現れたナナシの知人。
それによって、ナナシの記憶の一部が蘇った。
そして、知った。
ナナシの？本当の名？は―？ジョーカー？。

それらのことを目の当たりにして、二人の心に喜びはなかった。とてつもない寂しさだけだった。
何だか？ナナシとしての彼？と過ごしてきた日々が、偽物のように思えてきたのだ。

模擬戦のときも、食事のときも、遊ぶときも―いつだって、彼（ナナシ）がその中心にいた。
突然現れた彼の存在が、何気ない日常が楽しくなっていったことを実感していた。
しかし、それすらも？作り話？だったかのように思えてしまった。

彼(ナナシ)はこれからどうするのだろうか？

記憶が完全に戻るきっかけの存在が、すぐそばにいる。

ナナシは、この男について行くのだろうか？

記憶を取り戻すために、自分たちを見限って、この男について行くのだろうか？

―でも、それは当然かもしれない…。

クアットロもディエチも心中にそう呟いた。

自分たちは、ついさっきヘリを落とそうとした――人ヲ殺ソウトシタ。

殺人未遂まで行った自分たちと関わる必要はないのではないか？

一緒に犯罪者になるくらいなら、記憶を取り戻すための道を選んだ方が良いのではないのか？

クアットロとディエチは今更ながらそんな事を思っていた次の瞬間、背後に気配を感じた。

二人は慌てて振り向くと、ディエチの砲撃のエネルギー反応を追ってきたフェイトとなのはが険しい表情をナナシたちに向けていた。

さっさと逃げるべきだったとクアットロとディエチは悔しげに表情を歪ませた。

だが、その表情はすぐに一変し、クアットロとディエチはお互いに真摯な表情で顔を見合わせた。

『…ディエチちゃん』

『…うん』

二人は顔を見合わせながら短い念話をした。
特に言葉を交わしていないが、お互いが何を思い、これからどうするべきなのかを意思疎通で確認し合うことができていた。

そして、クアットロとディエチは紅麗に立ちはだかるように佇むナナシの背中を、寂しげな目で一瞥した。
別れを告げるように。

そう。彼女たちは、このままナナシを置いて逃げるつもりなのだ。
自分たちといるより、記憶を完全に取り戻すきっかけである紅麗といる方が、ナナシのためになると思ったからだ。

そう思案していたクアットロはここまでナナシに対して想える、自分の心情に微かな違和感を抱いた。

―…何なの、この気持ち…。

いつもの自分なら、一切の寂しい感情を抱かなかったはずだ。
いつもの自分なら、？戦力が減って残念っ？と思うだけだったはずだ。
しかし、事実は―クアットロはスカリエッティや、姉のドゥーエ以外の人間―ナナシのことをしっかりと想っていた。

敵に対する容赦の無い歪んだ性格は相変わらずだが、クアットロもまた少なからずナナシによってココロを変えられた者だ。

クアットロたちが思案する間にも、紅麗たちは話を進めていた。

「市街地での危険魔法使用―及び、殺人未遂の現行犯で逮捕します。大人しく投降してもらいます」

なのはは険しい口調で投降を勧告する。それに倣うように紅麗も言葉を紡ぐ。

「？ジョーカー？。お前に対して聞きたい事は山ほどあるが…お前がコイツらと共犯者であるにしろ、そうでないにしろ―？次元漂流者？であるお前を、そう悪い扱いにはならないはずだ」

紅麗がそう言い終えた瞬間―クアットロとディエチが逃亡しようとし、それを見てなのはたちが咄嗟にクアットロたちにバインドを掛けようとしたその時だった。

「せやなぁ…」

記憶を失いし青年が小さく呟いた。
その一言だけで、クアットロたちも、なのはたちも―この場にいる全身が、自然と動きが止まった。
別に大声で言ったわけでもない。口調にも制止できるような気迫はない。
しかし、ナナシの言葉の中に、彼女たちを制止する？何か？があった。
しかし、そんなことを意に介しておらず、ナナシは続ける。

「自分の少ない記憶と…紅麗（あんた）の記憶からして…？自分？は…？ジョーカー？なんやろなぁ」

「……」

妙な言い方だった。

事実、ナナシという仮の名を語っている人間の本当の名は、？ジョーカー？だ。

もしかして、自分の記憶と自分の本名を疑っているのだろうか？

「せやけど…」

次の瞬間、ナナシは紅麗に？ストーンカ？の矛先を向けた。

雷牛の二本角の間には、すでに雷の眼球が生成されていた。

「？人違い？や！！」

『Ｅｌｅｃｔｒｉｃ　Ｅｙｅ．』

雷の眼球から、奔流が迸った。

バチバチと弾ける音を発しながら雷の奔流が紅麗に迫る。

誘導性がない単調な一直線な射撃魔法だが、その速度は大抵の者な

ら避け切れずに受けてしまう速さを持っている。
しかし、紅麗はその?大抵の者?ではない。

―避けるまでもない…。

紅麗は奔流を斬り払うために、紅き刀―?紅・弐式?を真横に振るう。
咄嗟にした構築した射撃魔法の威力なぞ、たかが知れている。簡単に斬り払うことができる。
紅麗は、そう思っていた。

しかし、紅き刀と雷の奔流が接触した次の瞬間―刀を持った紅麗の腕ががくりと下がった。

「!!?」

紅麗は目を見開く。
奔流の威力に押し負けたのではない。
それと接触した瞬間に、刀が急に?重くなった?のだ。
そして、斬り払う事ができなかった奔流が紅麗の無防備な腹に直撃する。

「―ッ!!?」

その着弾点を中心に、まるで加速をつけた鉄柱を叩きつけられたかのような重々しい衝撃が走り、紅麗の身体が後方に吹き飛んだ。

咄嗟の射撃魔法で、ここまでの衝撃を与える事ができるのだろうか？
紅麗は訓練の時に、なのはの魔力弾を少なからずその身で味わった事があるが、痛みはともかく、衝撃はナナシの射撃魔法の方が凌駕していた。
ナナシの放った雷の奔流は、まるで質量を持っているかのようだった。

ナナシは、突然の事態に身体と思考を硬直しているフェイトとなのはに目もくれず、クアットロとディエチをそれぞれ脇に抱える。

「逃げるで！　クアットロ、ディエチ！」

彼の咄嗟の行動と叫びに、クアットロとディエチが驚いた様子で彼を見上げた。
一緒に逃げるというのか？　自分たちを優先して、せっかくの記憶を取り戻す手掛かりを手放すというのか？
クアットロたちが声を発するよりも早く、ナナシは加速魔法を発動してその場から飛び去っていた。
だが、

「この私から逃れられると思っているのか…ジョーカー」

ナナシたちの姿が目視で確認できないほどの距離を離されてもなお、紅麗は吹き飛ばされながらそう呟いた。
彼は、自分の身体が地面に接触する前に受け身を取り、ブーツの靴

底が地面を擦りながら、背中に一対の炎の翼―『飛翔翅炎』を出現させる。さらに、カートリッジを一発使用し、炎翼に加速能力を付加する。
紅麗は地面を蹴り、不死鳥の翼を羽搏かせながらナナシの追跡を開始した。

「ま、待って！　紅麗！」

我に返ったフェイトたちは紅麗を呼び止める、すでに彼は声が届かない距離にまで離れてしまっている。
フェイトたちは紅麗を追おうとした時―

『なのはさん、フェイトさんッ！！』

機動六課の管制室にいるシャーリーからの通信で、彼女たちの動きが止まる。

いったい何があったのだろうか？
彼女の切羽詰まった口調から嫌な予感を覚えながらフェイトたちが尋ねる前に、シャーリーは悲鳴をあげるように叫んだ。

『急いで…急いでヴィータ副隊長達の所へ向かってくださいッ！！』

◇

２０分前―。

「ちくしょうッ！！」

ヴィータは？グラーフ・アイゼン？で思いっきりコンクリートの地面を叩いた。破砕音とともに小さな石片が飛び散る。

蛭湖とリインが彼女を宥めるが、ヴィータは落ち着くどころか余計に苛立っていた。

無理もない。

ルーテシアを通してクアットロの口からヴィータにとって最も忌まわしい記憶を呼び起こされ、最も耳にしたくない言葉で言い捨てられ、レリックのケースを奪われ、ルーテシアを取り逃がしてしまったのだ。

元来短気なヴィータなら、露骨に苛立ちの態度を出してしまうのは当然なのかもしれない。

一方、ヴィータたちの様子を見ながらスバルたちは気まずげな顔をしていた。

しかし、それはレリックを奪われてしまった自分たちの不甲斐なさからではない。

崩壊する地下水路から脱出する前、ティアナは敵にレリックを奪われないように、ある工夫をしていたのだ。

使用した魔法は彼女の得意な幻術魔法―『フェイク・シルエット』。

しかし、ケース自体は『フェイク・シルエット』ではなく、本物だ。

衝撃に弱い幻術では、奪われた時点でバレてしまう。なので一旦ケースを開封し、レリック本体に直接厳重封印を掛け、見た目を誤魔化すために幻術を掛ける。そして、幻術を掛けたレリックは敵との直接接触が一番少ないキャロに持っててもらうことにした。

そして、その策は見事にセインを欺くことができ、成功した。
しかし、その事実を知らされていないヴィータたちはレリックを奪われてしまったと思っている。
このムードの最中に事実を話すのは気が引けるが、絶対に伝えねばならない。

「あ、あのっ…ヴィータ副隊長―」

スバルが代表した説明をしようとした次の瞬間、彼女は後ろに飛び退いた。

何故、そうしたのかスバル自身にもわからない。ただ?本能的?に身体が動いていたのだ。

そして、その行動がスバルの危機を救ったのだと―飛び退いた瞬間に、その答えが出た。

破砕音とともに地面から飛び出てきた?何か?が、スバルの鼻先を掠めた。

「――え…?」

スバルは呆けた呟きを漏らした。
彼女の鼻先を掠めたのは、巨大な槍だった。
同じ槍でもエリオが持つ?ストラーダ?の、三倍近くの大きさを誇っている武骨な大槍。それがコンクリートの地面から、草木が芽吹

くように突き出ていた。
獲物を捉え損なった大槍は金属とコンクリートが擦れる耳障りな音を立てながらゆっくりと地面へと潜る。
そして、次の瞬間、地面が破裂した。まるで地中に仕掛けた地雷が爆発したように、コンクリートの破片と砂埃が周囲に飛び散る。
ヴィータたちは一瞬動揺しながら、すぐに戦闘思考に切り替える視界を遮る砂埃を睨みながら身構える。

槍という武器が現れた時点で、これまで見てきたガジェットではないだろう。
新型のガジェットか？　それとも、先程の水色髪の少女か？
どのみち攻撃してきたということは、敵であることに間違いない。
砂埃が晴れていく。それに伴って襲撃者の存在が露になっていく。

「―ッ！！？」

？襲撃者？の姿を目の当たりにした瞬間、ただ一人驚愕の様子を見せたのは蛭湖だった。彼は二つのことで驚愕していた。

―何故、ミッドチルダ（ここ）にいる！？

―何故、奴が生きている！？

蛭湖は？襲撃者？の事を知っていた。
当たり前だ。
同じ？死四天？の同士を知らぬはずがない。忘れるはずがない。

まず、？襲撃者？の大きな特徴はその巨大な身体だった。身長はだいたい２ｍから３ｍ。
その手に持つ巨大な槍を持ってもアンバランスさを感じさせないほどの巨大さを持ち、その身には獣の毛皮のようなものを纏っていた。
顔には、紅麗と同じように顔面を覆う仮面が填められ、素顔も、目付きもわからない。
不自然に逆立った長い緑色の髪が、微風によって不気味に揺れる。

？襲撃者？の名は―門都（かどっ）。
敵からも味方からも強く恐れられ、多くの者から？死四天？最強―裏麗最強だと謳われている男だった。

「門都、なのか…？」

蛭湖は、不気味なものを目の当たりにしたような目と口調で、元仲間に問いかける。

前の世界では、彼は紅麗に焼き殺され、死んだはずだ。
だが、ＳＰからの報告で知っただけで、実際にこの目で死体を確認したわけではない。
そもそも、紅麗が相手とはいえ、門都がそう簡単に死ぬような男ではないと、同じ？死四天？の蛭湖には嫌というほど知っている。
しかし、何故か不気味さを感じられずにはいられなかった。

一方、スバルたちフォワード陣は門都から発せられる殺気の圧迫感に、刹那の時と同様に動けずにいた。
しかし、同じ殺気でも、肌に冷たい刃を当てられたかのような刹那の殺気とは違う。全身を強く圧迫され、吐き気が覚えるほどの重圧

な殺気だった。

「ウオォォォオオオォォオオオオォォオオオッ！！！」

門都は野獣のような咆哮をあげた。その大音量の重々しい叫び声だけで、この場にいる全員が内臓を揺さぶられたような感覚を覚えた。そして、それによって重圧な殺気を必死に耐えていたキャロはとうとう気絶してしまった。

しかし、そんな事すら意に介さない様子で門都は蛭湖の問いかけに答えた――大槍の一撃だ。

大槍の長大さと重量さを全く感じさせないほどの素早い縦一閃。

蛭湖はそれより速く後ろへ飛ぶ。捉えられなかった大槍の一撃がコンクリートの地面を易々と破壊する。

「やめろ、門都！　何のつもりだ！？」

蛭湖は門都に再び問い掛けた。

――何故、いきなり攻撃してくる？

自分が裏麗を抜けたからか？

それとも、門都はスカリエッティの配下になっているのか？

「オォオオォォオオオオォォォォッ！！」

しかし、門都はただただ重々しい咆哮をあげながら大槍を振り回す

だけで、彼の言葉に答えない。まるで蛭湖の事など完全に忘れているようだ。
いや、それどころか―
―…こいつ、自我を失っているのか…？
蛭湖は門都の様子を見て、不審げに思う。
以前から、その片言の喋り方やその殺戮狂から―歪んだ性格だと前々から思っていたが、自我が失っていることはなかった。しかし、今の彼からその自我が全く感じられない。しかも、戦い方が滅茶苦茶だ。
「ランスター！　お前たちは下がれ！！」
蛭湖は繰り返される門都の攻撃を避わしながら、ティアナたちフォワード陣に向けて叫ぶ。
門都相手に、彼女たちでは絶対に相手になるはずがない。殺気で動けずにいるのなら尚更だ。
「で、ですが…」
副隊長達たち一方的に押し付けていいのかとティアナは口ごもるが、蛭湖に強く叱責されてわずかに浚巡した後、門都たちから離れ始めた。
だが、ヴィータとリインと薫の三人だけは戦いの意思を示すと言わんばかりにこの場に残っていた。
やはり死線をくぐり抜けてきただけあって、リインはともかくヴィータと薫は重圧な殺気には抵抗力があるらしく、戦いの意思がその表情に出ていた。

蛭湖は手を借りようか一瞬迷ったが、協力に感謝するようにヴィータたちを一瞥した。そして、門都は蛭湖に向けて大槍を突き出す。
蛭湖は回避しながら掌の傷口から血液を出血させる。凝固作用で血液を瞬時に凝固させ、強靭な握力を以てそれを砕く。
そして、投擲する。
金属並の硬度を持つ血塊の弾丸が、門都の身体に強く食い込む。
非殺傷設定とはいえ、鉛玉を叩きつけられたような激痛が襲う攻撃だ。
しかし、門都は全く痛みを感じていないようだった。たとえ、殺傷設定の『血塊弾』でも、門都にとっては？痛いと思える程度？でしかないだろう。
蛭湖の攻撃は効果無しに終わったが、？彼ら？の攻撃はまだ終わりではない。
門都の真上上空に、長い柄のハンマーを持った一人の少女がいた。
ヴィータだ。
しかし、彼女の騎士甲冑の色は赤色のはずなのに、今は白色の騎士甲冑だった。しかも、彼女の髪も、脱色したかのように白みがかかっている。
それは、ユニゾンデバイスであるリインとユニゾンした事による影響だ。
門都と対峙した瞬間に、手加減できない相手だと判断したからだろう。
ヴィータは長柄のハンマー―？グラーフ・アイゼン？を振り上げる。
「アイゼンッ！！」
『Ｇｉｇａｎｔ－Ｆｏｒｍ！』

主の呼び掛けに応え、鉄の伯爵は二発のカートリッジを排莢し、その姿を数十倍の大きさへと変えた。
その大きさは、門都が持つ大槍型簡素デバイスよりも遥かに上だ。
その巨大さから、純粋で脅威的な破壊力を物語っている。

「ギガント…ハンマァァァァァァァァ！！！」

ヴィータは叫び声をあげ、真下にいる門都に向けて巨大鉄槌を振り下ろす。
単純且つ高威力であるこの一撃は、防御魔法を破り、直撃すれば必倒の一撃だ。
頑丈な肉体を持つ門都でも何本かの骨を折られるのは確実だろう。
巨大鉄槌が叩き潰さんと門都に迫る。

しかし、門都は仮面が填められた顔をヴィータに向けた。そして、その手に持つ大槍を、巨大鉄槌に向けて高々く突き上げた。

轟音が鳴り響く。

巨大鉄槌が門都を叩き潰したのだと、この場にいるほとんどの者がそう思ったに違いない。しかし、現実には、？鉄槌の騎士？と？鉄の伯爵？―そして、？祝福の風？が加えられた大威力の一撃は、大槍と門都の怪力によって阻まれてしまっていた。

「くっ…！」

一瞬驚愕したヴィータだったが、歯を食いしばりながら力を込める。だが、びくともしない。あの漆黒の虫人とは全く比較にならないほどの膂力が門都に存在している事を思い知らされる。

しかし、不気味な違和感を覚える。

門都の体格からいくら膂力があろうと、破壊力に関して機動六課の中で一、二を争うほどの自分の攻撃を簡単に受け止められることができるだろうか？しかも、自分はリインとユニゾンをしているのだ。限定解除をしていれば確実に勝っていただろうが、それでも今の自分と拮抗の怪力を持っているこの男に違和感を覚える。

これは、身体能力向上の魔法だけではない。それ以外の？何か？だ。

ヴィータは鍔迫り合いをしながら思案していると、門都が大槍から片手を放した。そして、その手に瞬時に生成された巨大な緑色の魔力弾が発射される。

―ヤベぇ…！！

ヴィータは身の危険を感じて、後ろへ下がる。魔力弾は彼女に当たらなかったが、得物である？グラーフ・アイゼン？がその巨大さ故に魔力弾の餌食になり、一部を破壊された。

しかも、それだけで終わらなかった。

得物に被弾した事によって、魔力弾の衝撃でヴィータの体勢が崩れてしまった。

門都が咆哮する。

まるで苦労した末にようやく欲しいモノを手にした事を歓喜するような咆哮をあげ、ヴィータに大槍を突き出した。

大槍が風を巻く。

強大且つ高速な野獣の牙が、ヴィータの顔面を貫かんと迫る。次の瞬間、

「『巨大錬金』ッ！！」

そんな叫び声が耳に届いたとき、重い衝撃と共に門都の身体がよろめいた。

大槍の軌道がずれた事によって、ヴィータを貫いたはずの槍刃は虚しく空を切り、彼女の白髪が数本宙に舞う。

「グウウ…？」

門都が獣のような呻き声をあげながら、自分の身体を見下ろす。彼の腹には、巨大な黄金色の矢が突き刺さっているように食い込んでいた。

「くっ…全然効いてない…！」

薫は黄金の弓―?鋼金暗器?五之型を手にしながら、平気そうに佇む門都を見て顔を歪ませた。

状況から察するに、黄金の矢を放ったのは薫だ。
その際、『巨大錬金』と呼ばれる―魔力変換資質?金属?の能力を持つ薫の最高の魔法を付加し、矢を巨大化させたのだ。
しかし、武器型デバイスによる直接攻撃には非殺傷設定がないから、相手の身体を損傷させないように加減をした。
しかし、門都は質量の塊を受けてもなおよろめいた程度で、全く苦痛の色が感じられない。

―…やはり、殺す気で掛からないと厳しいか…。

蛭湖は門都を睨みながら、複雑な感情を交えながらそう論じた。
?殺傷?というものは時空管理局にとって最大のタブーだ。だが、門都相手にそうは言っていられない。殺傷設定を使ったとしても彼を撃破する事が難しいのに、非殺傷設定なんて以ての外だ。
しかし、蛭湖の脳裏によぎるのは、自らの意思で仕える美しき主の事。
行く当てもない自分を拾ってくれた彼女に一つでも迷惑をかけたくないという生真面目とも言える忠誠心から、殺傷を躊躇われた。

非殺傷設定でも、自分たち三人の連携で門都を撃破することができるのではないだろうか?

蛭湖はそう思った次の瞬間、

【Ｋｉｌｌ（殺せ）…】

この場にいる誰でもない低い呟きが、蛭湖の耳だけに届いた。

其之二十四：狂戦士（後書き）

お久しぶりです、恵慈です！
せっかく見せたいシーンがあったのに、思っていたより長くなっちゃいました…シリアスパートがまた遠退く…；

それはさておき、ようやく！ようやくカドっちゃん（門都のあだ名。またの名を烈火の炎版・ファンゴラム）を出す事ができました！３話と６話に伏線を出したんですが、もう忘れてる人いるんじゃないんでしょうか？；
ある読者の方にこれ以上キャラを出すと収拾がつかなくなると言われたんですが、しかし、時はすでに遅し！！　しかも、ネタバレですが、スカリエッティの口ぶりから予想ついている人もいるかと思いますが、紅麗のクローンを出す予定なんですよ；
ああ…こうやって、駄作になってしまうんですね…；
でも、どうしても見せたいシーンとか話の運びとかで、どうしても彼らが外せないんです。

「収拾がつかなくなる？それをさせないのが腕という奴だよ」と某十二番隊隊長さんのような自信過剰なカッコいい事は言えませんけど、何かメッチャ頑張ります！そりゃあ、もう、旧ザクでサイコガンダムを倒すような気持ちで頑張りますので、よろしくお願いします！

ヴァイス
「それ、なんて無理ゲー！！？」

其之二十五：余裕と傲り（前書き）

天に羽搏く者は、高き余裕を語る。

地に伏す者は、愚かな傲りを語る。

其之二十五：余裕と傲り

【Ｋｉｌｌ（殺せ）…】

そんな言葉が、蛭湖の脳内に響いた。

―誰だ…？

流暢な英語を紡ぐこの声は、蛭湖が所有するデバイス―？ナイト・カウント？の声でもなく、この場にいる誰でもない声だ。

【Ｋｉｌｌ（殺せ）…】

幻聴かと思ったが、？感覚的？に違うと断言できていた。
ならば、念話か？

【Ｋｉｌｌ（殺せ）…】

いや、それに近いが、違う。

念話は、離れた距離で会話するものだ。しかし、この声は離れたところから声を発しているように思えなかった。

近くから。

とてもとても近くから声が聞こえているように思えた。

まるで、己の全身に循環する?血液?が、酸素の運搬と一緒に脳へ直接語りかけてきているかのような感覚だった。

【Ｋｉｌｌ　ｅａｒｌｙ（早く殺せ）…！！】

諭すように静かに語りかけてきた?声?が、痺れを切らした様子で声を荒げた。

【Ｋｉｌｌ（殺せ）…！　Ｃｕｔ　ｈｉｓ　ｔｈｒｏａｔ　ｗｉｔｈ　ａ　ｓａｂｅｒ，ａｎｄ　ｓｉｐ　Ｂｌｏｏｄ（奴の喉をサー

ベルで斬り裂いて、血を啜れ）…！！】

次の瞬間、全身に流れる血液が泡立つように蛭湖の身体に激痛が走った。

さらに、彼の視界が血に染まるかのように、赤色に染まった。

そして、喉が酷く渇き始めた。

その？渇き？が、水分の補給を訴えている―とは、少し違う。

蛭湖にとって、とても馴染みがある――戦闘で、血液を大量使用した時に起こる貧血症―それと似た感覚だった。

―何なんだ…これはッ…！？

突如起こった異様な感覚に、蛭湖は混乱した。

そうしている間にも、全身の激痛と、？渇き？がだんだんと増していく。

それらを知覚していながら、彼は気付いていなかった。

身動きが取れず、現実に意識を向けていなかった事によって、？狂戦士？に目をつけられた事に。

「―ッ！！！」

？狂戦士？―門都は、獲物に肉薄する野獣のように、地面を蹴った。

それだけで爆発音に似た激しい音が響く。

そして、その巨体に見合わぬほどの速さで一気に蛭湖との間合いを詰めた。

「蛭湖ッ！！」

ヴィータは悲鳴をあげるような声で蛭湖の名前を叫ぶ。
しかし、蛭湖は彼女の声にも、目の前に迫る危機にすら気付いていなかった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

門都は咆哮をあげながら、蛭湖の頭部に向けて大槍を突き出した。
殺戮の獣牙が迫っているにも関わらず、蛭湖は未だに無反応で、避けようとも防ごうともしない。

ヴィータも、薫も、スバルたちも誰もが―頭を潰された蛭湖を想像した。

だが、次の瞬間、蛭湖は九死に一生を得る事となった。
突如飛来した雷の光弾と桜色の奔流が、門都の巨大な背中に炸裂したのだ。

「グウウッ…！？」

その衝撃によって門都の身体がふらつき、蛭湖の頭部を吹き飛ばすはずだった大槍は、彼の頬を掠めるだけに終わった。

「ウウウ…」

門都は振り返った。蛭湖を追撃するよりも、狩りの邪魔をした乱入者の姿を確認する方を優先にしたらしい。

彼の視界―後方の上空に捉えたのは、白いマントに黒いバリアジャケット着た金髪の女と、白いバリアジャケットを着た栗毛の女―フェイトとなのはだった。

S級魔導師である二人の姿を目にしただけで、多くの犯罪者や違法魔導師は圧倒的な格の差に歯噛みをするところだろう。

しかし、門都は歯噛みをするほどの自我は持っていない。

ただ?獲物が増えた?、彼にとってはそれだけでしかなかった。

一方、フェイトとなのはは門都が振り向いてきた瞬間、今まで味わった事がない冷たい感覚に囚われた。

いや、なのはからしてみれば久しぶり―と言ったところだ。

それは―?死の恐怖?。

なのはの脳内に、8年前に落とされた記憶が強制的に再生される。

死に近付いていく己の肉体。

死んだ方がマシだと思えるほどの激しい痛み。

それを引き起こした自分の無茶に対する強い後悔。
肉体的にも精神的にも、二度と味わいたくない経験だった。
そして、これから、目の前の男にあの時と同じ目に遭わせられるかもしれない。

「…っ…」

身体中から汗が噴き出る。
胸の中が冷えていくのを覚えながら、恐怖で動悸が止まらない。
正直、今すぐにでも逃げ出したい気分だ。
―でも…。
なのはは深く一呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。
それだけで恐怖は払拭できないが、少しでも楽になれた。

「…フェイトちゃん、行ける？」

なのはは門都を見据えながら、隣にいるフェイトに問い掛ける。
顔を直接見なくても、親友の顔にも恐怖が滲み出ているのがわかった。しかし、それでもフェイトはしっかりと頷いた。
彼女もまた、今のなのはと同じ気持ちだった。
逃げ出したくなるほどの恐怖が感情を犯していくが、逃げ出すなん

て選択肢は選ばない。

８年前のあの時とは、状況が全然違う。

体調は万全。

長年の実戦経験と、？力？がある。

頼りになる仲間が多くいる。

そして、護るべき者達がいる。

それだけあれば恐怖を抱えながらも、十分すぎるほどに戦う気力が湧いていく。

「行くよ、？レイジング・ハート？」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．』

◇

なのは達と門都が戦闘を行っているところから遠く離れた高層ビルの屋上に、一人の男がいた。

ボサボサの灰色の長髪を風に揺られながら、屋上の手摺にしゃがんでいる青年―刹那だ。

「ヒヒヒ…なかなか楽しそうじゃねぇかぁ…」

異常聴覚を持つ両耳をぴくぴく微動させながら悦に浸る声を漏らす。
彼の眼下には、何十メートルも離れたアスファルトがある。屋上の手摺にしゃがんでいる彼が少しでもバランスを崩せば、死をもたらす硬質な地面に真っ逆さまだ。
絶対に落ちない自信があるのか、落ちても何か対処法があるのか、それともただの考え無しか。
とにかく、刹那は何の恐怖もなく、?音?を楽しむ事を優先させながら手摺にしゃがみ続けていた。

「楽しそうだなぁ…楽しそうだなぁ…」

刹那は狂った音声機械のように、掠れ(ノイズ)た声で何度も言葉を繰り返す。
できれば、自分も向こうに混ざりたい気分だ。
敵味方関係なく、無差別に斬り付け、強い奴がいたら焼き殺すなり斬り殺すなり蹴り殺すなり―様々や殺り方を厳選してから、殺す。
しかし、それは我慢しよう。
何かを楽しむために、それを際立たせる?雰囲気作り?を整えなければならない。
今の環境では、まったく足りないのだ。
触覚を刺激する環境には、まだ足りない。

味覚を刺激する環境には、まだ足りない。

嗅覚を刺激する環境には、まだ足りない。

聴覚を刺激する環境には、まだ足りないのだ。

まだ足りない。

まだ足りない。

「…そこの者」

威圧感が込められた低い女の声が、刹那の耳に届いた。

いきなり声をかけられた事に刹那は驚いていなかった。

彼の索敵能力に関して、右に出る者はいない。

気配や?音?が、自分に近付いている事に5分前から気付いていた。

刹那は首だけ後ろに振り向く。

視力が無いから、相手の姿を確認する必要などない。だが、それでも何となく振り向いた。

彼の視線の先には―長剣を握り、竜の眼ような鋭い目付きをした女―シグナムと、トンファーのような双剣を握った短髪の女―シスター・シャッハがいた。

「ここは廃棄都市区で、戦闘区域だ。そこで何をしている？一般人、のようには見えないが…」

シグナムは警戒心を醸し出しながら言葉を紡いだ。

すでに、シグナムは対峙した瞬間から、刹那の事を一般人として見ておらず、危険人物として見ていた。

この場所にいる事もそうだが、彼の左腕に填められた蜘蛛の腕輪の刃に付着されている赤い液体。

何より、？好敵手？と同じ？血の匂い？を漂わせているからだ。

危険人物として認識する要素は、十分に揃っていた。

「何をしていた、か…」

刹那は再び前方に顔を向けて、笑い混じりに言葉を紡ぐ。

「ヒヒヒ…？戦いの音？をよ、聞いてたんだよ…。ただ聞いてるだけだってのに、結構面白ぇよ…キヒヒヒ…」

笑い話のように楽しく話す刹那の言葉に、シャッハは寒気を感じた。

話している内容もそうだが、彼から醸し出される雰囲気が、異様で不気味だったからだ。

それに対して、シグナムは不思議と彼に対して嫌悪感があまりなか

った。
紅麗と模擬戦をする以前の自分だったら、嫌悪感を抱きながら敵愾心を向けていただろう。
しかし、？今の自分？は嫌悪感よりも、親近感の方が強かった。
高ぶっていく感情を抑えつつ、事務的な口調で刹那に告げる。

「特に何もしていないのなら早々に帰れ、と言うところだが…私はお前を見す見す帰したくはない」

理由は単純明快。

「？貴様は危険？だからだ。決め付けを言っているのではない…事実を言っているんだ」

「……」

静寂が訪れた。

シグナムの言葉に図星を突かれたのか、刹那は沈黙している。
しかし、次の瞬間、

「ひゃっはははははははははははははははッ！！！」

刹那の姿が手摺の上から消えたとほぼ同時に、シグナムとシャッハ

の目の前まで移動していた。

「ああ、そうなるかァ！　そうなるよなァ！！」

刹那は黒布に巻かれた両目でシグナムを見据えながら、怒っているように、喜んでいるように声を高らかにあげた。

「ちくしょうがッ！　こうなる事はわかってたんだよ！！　俺が抑えられれば良かった！　お前が何も言わずに、さっさと消えれば良かった！　だが、駄目だった！！？俺達ァ、同じだ？ッ！！！」

刹那は歓喜しながら後悔していた。

刹那も対峙した瞬間に、シグナムから？血を匂い？と、強さを醸し出す？覇気？を感じ取り、彼女を自分と同類だと認識していた。

そして、今すぐに戦いという歪んだ欲望が渦巻いていった。

しかし、我慢していた。

自分が望む闘争の？雰囲気作り？が、まだ整っていないのだ。

？その刻？が来るまで、戦いは我慢するつもりだった。

しかし、シグナムは？貴様は危険だ？と言った。

その言葉は刹那にとって、何よりも誘惑な言葉だった。

そして、我慢は崩壊していった。

歪んだ意味で惹かれ合っているように思え、親近感で気持ちが高ぶっていった。

今日は良い日だ。

自分が本気で殺し合いたい、殺したい人間が二人もいたんだから。

今日は良い日だ。

本当に本当に良い日だ。

刹那の高ぶる感情に呼応するように、彼の右腕に紫色の炎が噴き出した。

「？紫の炎？…！？」

シャッハは驚愕と恐怖で目を見開いた。

―という事は、通り魔事件の犯人はこの男か…！

「殺しはしねぇぞ…」

刹那は感情を抑えているように、先程とは打って変わって静かな口調で言う。風を切る音と金属音を響かせながら、？凶蜘蛛？を大きく上下に振るう。

「まだ殺す時でも、殺す場所でもねぇんだ…殺しはしねぇ…これは、遊びだァ…」

刹那の歪んだ言葉に、シグナムは?レヴァンティン?を構えながら彼の言葉に同意した。

―?遊び?、確かにそうだ…。

自分にとって、戦いは趣味と呼べるほどに楽しいものだ。

自分の振るった剣の刃を、相手に当てるのが楽しい。

敵の攻撃を避わした時も楽しい。

自分の攻撃が避わされた時も楽しい。

敵の攻撃を受けた時も楽しい。

相手が自分より強ければ、楽しさが増す。

自分が不利な状況ならば、さらにさらに楽しさが増す。

そう。

自分にとって?戦い?とは、自分が楽しむ?遊戯?でしかない。

―ふっ…私が…だんだんと?壊れて?いく…。

シグナムは笑みを浮かべた。しかし、それは自嘲よりも、歓喜の方が強かった。

前々から周りに戦闘狂だと言われて自覚していたが、それがますます歪んだ方向へ進んでいく。

しかし、止まらない。いや、止まりたくない。

醜い生き方になろうとも、醜い死に様になろうとも、止まるわけにはいかない。

たとえ、主や仲間を敵に回す道だったとして、自分は喜んでその道を進もう。

歪んでいく。

月日が経つごとに、強者と対峙するごとに、シグナムは歪んでいく。

そんな歪んだ彼女を、笑顔で受け入れてくれた主の？ある言葉？さえ、守護騎士（シグナム）は忘れてしまっていた。

◇

「…もう撒いたみたいやな」

ナナシは後ろを振り向きながら、安堵と警戒の呟きを漏らした。
加速魔法を使って逃亡してから、何キロもの距離を飛行した。
その間に追跡者がいないか何度か後ろを向いたが、紅麗達の姿はなかった。
最初から自分達を追跡していなかったのか、途中で追跡を諦めたのかわからないが、追って来ていないのなら幸いだ。

加速状態の活動限界を迎え、ナナシは加速魔法を解除した。
速度が急激に落ち、ナナシはクアットロとディエチを抱えたまま飛行を続ける。

「……」

しばらくの静寂が続いてから、ナナシは一切喋ろうとしないクアットロとディエチを訝しげな目で見下ろす。

「……」

「……」

二人とも、沈鬱な表情で口をつぐんでいる。

―…もしかして、紅麗さんがよっぽど怖かったんかな…。

ナナシは、一番考えられる原因を捻り出した。

彼の事を怖がるのは、無理もない。
自分は彼の本質を知っているし、怖いなどとは思っていないが、二人からしてみれば?殺意の塊の存在?にしか見えないだろう。

しかし、ナナシの予想している事は彼女達が考えている事と大きく離れているが、彼はそれに気付くはずもなくクアットロ達の恐怖を取り払うように陽気な口調で話しかける。「しっかし、二人とも、ケガなくて安心したわ。自分がちょっとでも遅れてたら、アイツに―」

「どうして…?」

ナナシの言葉を遮ったのは、悲しみを含んだ少女の呟きだった。
ナナシは、呟きを漏らした少女―ディエチを訝しげな目で見下ろすと、彼女は涙で目を潤ませながらナナシを見上げていた。

「どうして…?向こう?に、行かなかったの…?」

ナナシは、ディエチの問いかけの意味がわからなかった。

―…?向こう?.?.?向こう?に行くって、どういう事や…?

ますます怪訝そうになるナナシにわかりやすく説明するようにクアットロが重い口を開く。

「どうして、あの？紅麗？って人について行かなかったんですか…？あの人は、ナナシの知り合いで…彼について行けば、あなたの記憶が完全に戻るかもしれないんですよ…？」

ナナシの記憶は完全に戻っていない。紅麗と対峙した事で、彼に対する記憶しか思い出せていないのだ。

しかし、数少ない記憶の手がかりがあり、それと接していればいつか記憶が完全に戻るだろう。

しかし、ナナシはそれを放棄した。

記憶もない次元漂流者で、スカリエッティに無理矢理協力させられたと少ない嘘を含んだ説明をすれば、管理局はナナシを悪いように扱う事はないし、記憶の手がかりである男と接する機会も増える。少なくとも、犯罪に手を染める自分達と一緒にいるより、遥かに良い生活を送れるはずだ。

―どうして…？

「どうして…私達を選んだのですか…？」

クアットロはいつもの人を食ったような口調ではなく、真摯な―それでいて悲しみと？何か？が混ざった複雑な声音で尋ねる。ディエチも、声を発さずに瞳で問いかける。

だが、クアットロもディエチも、？答え？はわかっていた。

ナナシがこれからどんな答えを返すのか、簡単すぎるほどにわかっていた。
しかし、それでも、聞きたかった。
大好きな人の声で、その答えを聞きたかった。

「アホかっ」

ナナシは軽薄な笑みを浮かべた。

「記憶なんかより、お前らと一緒にいた方がずっとええに決まっとるやろ」

まるで女を口説くような口調だったが、それがナナシなりの真摯な口調であった事にクアットロとディエチは気付いていた。

そして、胸の中が暖かくなっていく。

今まで味わった事がない感覚だ。
いや、彼と過ごしている時に必ず—微かにだが、確かにあった気持ちだ。
それが、今まで以上に強く感じていた。

では、？コレ？は、いったい何だろうか？

この？暖かな気持ち？—？コレ？を、言葉で言い表すと何と言うのだろうか？
嬉しさ？喜び？

近いかもしれないが、違う。

考えても、考えても、知識が豊富なクアットロですら、わからない。だが、名称などどうでもいい。

？暖かい気持ち？が胸の中に存在している、それさえ知覚していれば十分だった。

「…バカみたい」

ナナシの言葉に、クアットロは顔を背けながら呟いた。しかし、言葉とは裏腹に口調には悪意はなく、背けた顔には赤みが差していた。

「……」

一方、ディエチは赤くなっている顔を隠さず、何も言わずにナナシの服をきゅっと掴む。

ナナシはそんな二人の可愛い仕草に、満足そうな笑顔を浮かべた。

次の瞬間、ナナシの背中に重い衝撃が走った。

「…ッがはぁ！！」

ナナシは強制的に酸素を吐き出されながら、その身体が落下した。
このまま落ちれば、アスファルトに叩きつけられる。

「くっ…！！」

ナナシは背中の痛みと衝撃による嘔吐感を堪えながら、体勢を整える。
衝撃を緩和し、地面に着地してクアットロとディエチを下ろした。

「ったく…油断しとった自分も悪いが、不意打ちで邪魔するあんたも相当な悪(わる)やなぁ」

ナナシは上空を睨む。

そこには、黒衣をはためかせた仮面の男―紅麗が、ナナシを見下ろしていた。

「あ…ああ…」

クアットロとディエチは、重圧な殺意を放つ紅麗に怯えた様子を見せながら後退る。

しかし、彼は彼女達など見ていなかった。
紅麗はナナシを見据えながらゆっくりと降下し、音も無く地に足を着ける。

「鬼事も終わりだな、ジョーカー。どうせ追い付かれるのだから、時間の無駄だったな」

「あんたが異常なんや。それに？人違い？や言うてるやろ、ＫＹ仮面」

ナナシはマイペースな様子で軽口を叩くが、内心では焦っていた。

―…さて、どうすっかなぁ…。

ナナシは冷や汗をかきながら、紅麗から逃れる術を思案する。
また隙を突くなんて、この男に二度も通じるはずがない。
戦うなんて以ての外だ。この男のありえない強さは、彼の近くにいた自分が嫌というほど知っている。加速魔法と電気魔法だけの自分に、彼に勝つ自信がない。
もっと戦力が欲しいところか？
いや、紅麗という男の強さは戦力を増やせば勝てるなどと、そんな次元ではない。恐らくナンバーズ全員で掛かっても、せいぜい手傷を負わせられる程度でしかない。

それに、ディエチは得物である？イノーメスカノン？を持っていないし、クアットロは非戦闘要員。幻術を使える事は知っているが、それが逃げるチャンスを作れるだろうか？紅麗に幻術が通用するだろうか？

―…ちょう試してみるか…。

迷っている暇はない。

ナナシは決心をしてクアットロに念話しようとした時、それより早く紅麗が言葉を紡いだ。

「…理解に苦しむ」

それは氷のように冷たく、固い口調だった。

「貴様は普段ふざけてはいるが、頭の悪い男ではない。その犯罪者である小娘共と行動をともにし、私と敵対する事に何の意味がある？デメリットが多すぎる。結果が目に見えている。それをわかっているのか？わからぬはずがないだろう？…まさかとは思うが、また？つまらぬ感情論？を出すつもりではないだろうな？そうだったのなら、実に？下らん事？だ。それがお前の欠点だぞ、ジョーカー」

次の瞬間、辺りに漂う空気が張り詰めたものに変わった。

「…そうかい」

ナナシは歯を剥き出しにして、獣じみた笑みを浮かべた。

―大正解や。

そう、紅麗の言う?くだらない感情論?で、クアットロ達と過ごす事を選んだ。
だが、それが?下らない?という一言で片付けられるのは、腸が煮え繰り返る。
彼女達と一緒に生活して一年も経っていないが、その中で生まれた絆は決して、下らないものではない。

しかし、ナナシは気付いていなかった。紅麗の言葉の中に含まれた、?寂しげな拒絶?というものを。
いつものナナシなら、それに気付いていたかもしれないが、紅麗の言葉に対する怒りで冷静さを失い、気付く事ができなかった。

「クアットロ、ディエチ…下がっとき」

ナナシは背後にいるクアットロとディエチに静かに告げると、紅麗に?ストーンカ?の矛先を向けた。

「?こいつをぶっ潰して?から、帰ろうや」

ナナシは、自信に満ち溢れたような表情で高らかに宣言した。
しかし、それに対しての紅麗の言葉は相変わらず静かだった。

「私の言葉に怒り…戦う気になったか。そういうつもりで言ったわ

けではないが…やはり、貴様は感情的だ。もう一度言おう、それが欠点だ」

「自分が神サマみたいに調子に乗んのも、ええ加減にせえ。その饒舌（した）、引っこ抜くで」

「貴様こそ、傲りの軽口もいい加減にしろ。…先程、私を潰すと言ったな？　十神衆（きさまごとき）が。裏火影首領（このわたし）を…」

紅麗は両腕を広げた。

己の余裕。相手の傲り。そして、圧倒的な力の差を語るように言葉を紡いだ。

「やれるものなら、やってみろ」

其之二十五：余裕と傲り（後書き）

どうも。先日、楽器店で店員さんとアニソンの神曲について熱く語り合いました、恵慈です。

ヴァイス
「ガンダムについて熱く語り合えよッ！！」

今回の話についてなんですが…クアットロが、ねぇ…何か、可愛いっすよねｗ　まさかのツンデレですよ。かなりのギャップなんで、これで数少ない彼女の株が少し上がるでしょうか？　でも、彼女のツンデレは身内だけなんで、敵に対する残虐性は変わらないのでご安心を（？）。ってか、ナンバーズ、ツンデレ多くないですか？俺的に、ツンデレは好きな方ですが、お淑やか系のすずかちゃんの方が遥かに大好きですよっ！！　リインに対するリイン親衛隊、ガンダムに対するヴァイス、強者に対するシグナム、蛭湖に対する殺戮女神―それくらい大好きです。

それと、蛭湖に語りかけてきた？謎の声？の事について何ですが、次に出て来るのは最終決戦になります。まぁ、ご察しの通り、何か蛭湖がヴァンパイアみたいになっています。これは完っ全に俺の趣味です。また脱線しますが、俺、ヴァンパイアものがすっごい大好きなんですよ！リインに対するリイン親衛隊、ガンダムに対するヴァ（ｒｙ

なかなかシリアスパート、終わらないですねぇ…。だらだらいっぱい書いてしまうんで、思っていたよりずっと長くなってしまうんですよ。
あと４話ぐらい進んだらシリアスパートは終わると思います。
大学の試験やら劇団の活動やらで更新がさらに遅くなるかもしれませんが、気長に待っていてください。

それではっ！

其之二十六：奪う側　前編（前書き）

奪われてきた者は、二つの生き方に分かれる。

他者を優しくする生き方。

そして、他者を奪う生き方。

其之二十六：奪う側　前編

「やれるものなら、やってみろ」

両腕を広げた紅麗から紡がれたその言葉が、戦いの合図だった。

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ．』

ナナシの手にした牛の頭部を模した二叉の金矛―？ストーンカ？が加速魔法の名称を紡いだ時には、持ち主の姿は雷光に変わっていた。
ナナシは瞬時に己の間合いに入る。
一方、紅麗はナナシの高速移動に反応できていないのか、両腕を広げたまま佇んでいる。

―傲っていたのは、あんたの方やったな…！

ナナシは勝利を宣言するように二叉矛を突き出す。
いくら化け物じみた戦闘能力を有しているとはいえ、所詮は人間だ。
？高速？というものに反応できるはずがない。
しかし、ナナシは紅麗の実力を知っていたにも関わらず、それでも彼の事を甘く見すぎていた。

「！！？」

ナナシは二叉矛を突き出した体勢のまま驚愕に目を見開いた。
届くかと思われた矛の一撃が、後わずかなところで紅麗に届いていなかった。いや、？届かなかった？―とは少し違う。長く使いこんできた己の得物の攻撃範囲をナナシが見誤るはずがない。
それはつまり、届かなかったのではなく、紅麗が？高速の攻撃？に反応してわずかに後ろに下がって避けたのだ。

「―何を呆けている？」

豪炎を氷に変えたような静かな声がナナシの耳を打った。

「まだ高速化の活動限界まで、まだ余裕があるはずだろう？時間を無駄にするな。潰すと宣言したのだから、早く私を潰してみるがいい」

明らかな挑発の言葉。しかし、いつものマイペースを失ってしまったナナシにとって苛立つものだった。

「わかっとるわッ！！」

叫んだ瞬間には、紅麗の背後から二叉矛を横薙ぎに振るった。しかし、紅麗は振り返りながら後方へ跳躍して再び避わす。間髪を容れず、今度は二叉矛による連続突きを繰り出す。雷牛の角が、獲物を貫かんと肉薄する。だが、紅麗は一撃ごとに左右に身体を捻るだけ

の最低限な動きで悉く避けていく。

―何でや…!?

ナナシは何度も二叉矛を振るい、何度も避けられながら内心で絶句した。

何故当たらない?速度は自分の方が上のはず。確かに紅麗とは一度も戦った事はなく、その身で彼の強さを体感したわけじゃない。だが、いざ戦ってみると、ここまで差が生じるほどにこの男は強いというのか!?

確かに速度自体は、ナナシの方が上だ。もし二人が競走をしたならば、勝利するのは確実にナナシだ。

しかし、ナナシに施した加速魔法は、紅麗に一撃を与えるにはまだ不十分だった。

紅麗の身体能力は、異常だ。

そして、その異常な身体能力に、身体能力向上の魔法でさらに上乗せされているのだ。

?速度だけは?加速化したナナシには及ばずとも、向上された紅麗の動体視力はナナシの動きを捉えるには十分であり、小規模な移動範囲でしか動けずとも最適な回避方法でナナシの攻撃を避わすには十分だった。

つまり、ナナシの速度は、紅麗にはまだ後一歩のところで届かないのだ。

「…皮肉なものだな」

焦燥に支配されたナナシの心を見透かしたような言葉が静かに響く。

「この滑稽なやり取りは、まさに…天に羽搏く不死鳥に向けて、届くはずもない角を突き上げ続ける、哀れな牛のようだ」

言葉はともかく、口調には嘲弄の色はなかった。ただ淡々と事実を突きつけるような口調だった。しかし、それがまたナナシを苛立たせた。

「いつまでも雑魚扱いするな！　届かせたるわッ！！」

ナナシは紅麗に接近した状態で、魔法を構築した。

『Ｔｈｏｕｓａｎｄ　Ｎｅｅｄｌｅ.』

ナナシの足元に火影式魔法の刻印が大きく浮かぶと、そこから千に達するほどの雷の棘が地表から空へ向けて迸った。近距離でナナシの周囲を走る千の雷棘を、紅麗といえども避けられず、彼の身体に何本か掠めた。しかし、大したダメージにはならず、紅麗はやや鈍った速さで後退し、雷棘の嵐から逃れた。

―やはり…ジョーカーの魔法は、異質だ…。

紅麗には不可解な事があった。
ナナシの放った雷の棘が身体を掠めた時、その箇所だけが急激に重くなったのだ。『エレクトリック・アイ』という魔法を受けた時もそうだった。
この能力は、明らかな?重力変化?だ。
―まさか、奴の火影式魔法は、『帝釈廻天』の能力を引き継いでいる…?
『帝釈廻天(たいしゃくかいてん)』―全ての魔導具の中で最も扱いが難しいとされる、重力を操る三つ叉の矛。ナナシが愛用していた魔導具(ジョーカー)の名だ。
その能力が、ナナシの火影式魔法に引き継がれていた。正確には、ナナシが一部の記憶を思い出せた事によって、隠された第二の魔力変換資質―『重力』の能力が開花したのだ。
―重力を纏った雷撃か…厄介なものだ…。
紅麗の配下に、ナナシと同じく雷撃を操る者がいたが、威力に関してはナナシよりも遥かに勝っている。
だが、その者より威力が劣っていようと、それに重力変化を加えるという異質な雷撃も厄介だ。当たれば、自慢の速度が封じられてしまう。
だが、当たればの話だ。
「『翅斬』」
紅麗は左の掌から紅い炎を放った。ナナシは直ぐ様、防御魔法を展開してそれを防ぐが、いつの間にか背後に紅麗がいた事に気付くま

で反応が遅れてしまっていた。
紅麗はナナシの背中に向けて紅い鉤爪を振り下ろす。ようやくナナシは背後に紅麗がいた事に気付くが、もう遅い。すでに高速化が終了しているから避けられない。間合い的に、長物である二叉矛を盾にする事ができない。
ナナシは、赤い縦線が作られた自分の背中を想像しながら痛みを覚悟する。
だが、次の瞬間、紅麗はナナシを攻撃するために振り下ろそうとした左手を、突然全く別の方向に振りかぶった。

渇いた音が響くと、紅麗に襲いかかってきた?襲撃者?の姿がナナシ達の視界に入った。

「くっ…まさか、私を捉えるとは…!」

?襲撃者?―トーレは、紅麗に殴られた右頬の痛みと、高速化した自分を捕捉された悔しさに顔を歪ませた。
一方、ナナシは思わぬトーレの乱入に少し驚きつつも、おずおず口を開く。

「ト、トーレ姐さ―」

「馬鹿者、ナナシッ!　何故、すぐに私を呼ばなかったッ!?」

トーレは紅麗を警戒したまま、ナナシの言葉を遮って叱責した。
その口調には怒気よりも、頼ってくれなかった悲しさの方が強く感

じた。
彼女の言葉で、ようやくナナシは自分が冷静でなかった事に気付いた。
別に呼ばなかったわけじゃない。
紅麗の専売特許である挑発の言葉で冷静さを失い、トーレを呼ぶ事を忘れてしまったのだ。しかも、逃げ出す事よりも、紅麗を倒すという無謀な事を優先しまった事にも今さら気付いた。

『…すまん、トーレ姐さん。自分が、冷静やなかった…』

ナナシは責任感を覚えながら念話でトーレに謝る。それに対し彼女は、あのナナシに素直に謝れた事に若干の違和感を覚えたが、深く反省しているようでこれ以上責める気にはならなかった。

『…いや、もういい。…それより、この男は何なのだ…?』

『…?一応?知り合いや。勝とうなんて思わん方がええ…傷一つ付けるだけでも一苦労や』

ナナシの言葉に、トーレは口には出さずに同意した。
加速化を加えた自分の不意打ちを逆に反撃してきた男だ。確かに勝つどころか、一撃を与える事すら難しい。
しかし、退却できる事に関しては心配いらない。

『ルーテシアお嬢様が空間転送を使ってくださるそうだ、それで退

却できる。その準備が整うまで、何とか持ちこたえるぞ』

『あの小っこい嬢ちゃんが？　…気は乗らへんが…仕方ないなぁ』

ナナシにとって、戦いの場に居てはならない―あんな１０歳前後の少女の力を借りるのは気が重かった。しかし、紅麗相手に戦って勝てるはずがないし、逃げる事すら困難だ。ルーテシアの力を借りなければ、この場を切り抜けられない自分の無力さにナナシは歯噛みしながらも、それに甘えるしかなかった。

―…今回は、逃げたもん勝ちや…。

ナナシは、自分に言い聞かせるように内心で呟く。
トーレの言葉で冷静さを取り戻したナナシだったが、未だに紅麗に対する怒りは静まっていなかった。
一発殴りたい気持ちが湧き上がるが、返り打ちになるのがオチだ。
トーレが加わったからと言って、勝つどころか手傷一つ負わせる事すら難しい。
なら、ここは退却するのが最善だ。
無理に倒そうとして、返り打ちに遭い、四人とも捕まったのでは元も子もない。

―逃げたって…負けやない…。

ナナシはもう一度自分の心に言い聞かせ、戦闘思考に切り替えながらクアットロに念話を送る。

『…クアットロ、紅麗（やっ）に幻術を使こうてくれ。効果あるかどうかわ

からんが、少しでも時間稼ぎになるかもしれへん』

『は、はいっ…わかりました』

クアットロは、急に話し掛けられて少し驚きながらもナナシに言われた通り、すぐに幻術の発動に取り掛かる。
だが、次の瞬間、今まで無言で佇んでいた仮面の男の背中から、炎の片翼が出現した。

「『翅炎』」

冷たい声が静かに響いた。
その発声とは全く正反対な、灼熱の羽根が夥しく迸った。
炎の羽根は真横に走る豪雨のようにナナシ達に襲いかかった。ナナシは直ぐ様トーレ達の前に立ち、防御魔法を広範囲に展開した。
しかし、咄嗟に発動した事、防御範囲を通常より広くした事、そして『翅炎』の威力により、防御魔法があっさりと砕け散った。
だが、それでもナナシは大好きな娘達のために、身体を広げてその身を盾にした。

「ぐあああああああああああああああッ!!!」

ナナシは絶叫をあげた。
炎の羽根がその生身に容赦無く叩きつけられるたびに、おもいっきり投擲された鉄球を浴びせられたような痛みと、人体など、簡単に

燃やせそうな熱さが同時に襲いかかる。
何度も何度も。
何度も何度も何度も何度も何度も。
それでもナナシは気が遠くなりそうな意識の中で、自分の身を盾にする事をやめなかった。
だが、悲しい事に、紅麗の最高の攻撃範囲を持つ『翅炎』を前に、人一人が盾になったくらいでトーレ達を守りきる事は敵わず、彼女達もまた炎の羽根の餌食になっていた。

紅麗は、炎の片翼を消した。
彼の目の前に広がる光景は、彼が『翅炎』を放つ以前とは、大きく変わった。
まずは大きな特徴は―？紅いこと？。
地面は砕かれ、廃ビルは穴だらけになったり、崩されたり、それらが紅い炎によって赤々と燃え、赤々と照らしていた。
そして、地面に倒れ伏す三人の女と、彼女達を守るように佇む一人の男の姿。
ナナシのバリアジャケットは、炎の羽根の猛威によって所々が焼き破れ、露になった肌からは血が流れ出ていた。

「……」

そんな元・仲間の姿を紅麗は仮面の下でも無表情を一切変えず、ナナシ達の方へゆっくりと歩み始めた。
ナナシは嫌な予感がした。

「な…何する、気や…？」

もはや立っている事すら精一杯なナナシは、力無い口調で問い掛けた。

嫌な予感に伴って、心臓の音がだんだん激しくなる。

自分達は満身創痍だ。これ以上何をするつもりだ？

紅麗は、今にも倒れそうなナナシを無視し、彼の傍らに倒れているトーレの首を掴んだ。そして、そのまま見せつけるように高々く持ち上げると、トーレは呻き声を漏らす。

「何…する、気や…？」

ナナシは嫌な予感を抱えながら再び問い掛けた。『嫌な予感』が実行されないよう、今すぐにでも紅麗に近寄って、彼を止めたかった。しかし、立っているのがやっとの状態で、歩く事すらできなかった。

「やめ、ろッ…」

肉体が衰弱した彼にできた事は、制止の一言だけだった。

しかし、それだけで、紅麗はトーレを手放すはずがなかった。それはナナシ自身も予想がついていた。

「やめて、くれ…」

今度は懇願の言葉に変わった。

―紅麗さん…これ以上やる必要ないやろ…？

―今まで奪われてきたあんたは、『奪われる側』の人間の気持ちがわかるはずや…。

弟との最後の戦いで、『奪う事（今までの生き方）』がどれほど馬鹿な事だったのかを知ったはずだ。

―何でや…？

―何で、また…奪おうとしているんや…？

「殺しはしない。」

言葉の内容とは裏腹に、慈悲をかけるなどという感情がない、残酷な口調だ。

そして、トーレの首を掴んだ紅麗の手から、紅い炎が噴き出した。

「ぅあああああああああああああああああッ！！！」

トーレは悲鳴をあげた。
非殺傷設定とはいえ、その灼熱の炎をその身に焼かれる苦痛というものは、決して耐えられるものではない。
しかも、紅麗は焼かれる苦痛を長く味わわせるように、容赦無くトーレを焼き続けているのだ。

「――――――ッ！！！」

ナナシは声にならぬ声で叫んだ。

自分が好く、守るべき者が悲鳴をあげながら苦しむ様を目の当たりにして、理性が崩壊された。
たぎった怒りが、全身の傷の痛みを打ち消し、立つ事だけで精一杯だった満身創痍の身体を強制的に動かす。
元・仲間である事は一切関係無く、ナナシは紅麗に対して明確な殺意を以て、二叉矛を突き出した。
ナナシが放った渾身の刺突は、紅麗の身体を貫いた。だが、紅麗の身体が幻のように掻き消えた瞬間、ナナシの身体が紅い炎に包まれた。

「―届かなかったな…」

背後から声が聞こえた。

地に倒れ伏す雷牛に向けて、空の高みから見下ろす不死鳥のような声だった。

―…紅麗さん…。

地面に倒れたナナシは火だるまになりながら、心中で彼の名前を呼んだ。
もはや、声を発する体力もない。
なら、せめて、届かずとも、心の内で彼に語りかけた。

―何で、あんたは…また…そんな生き方をしとるんや…？

周りの人間の心情を察しやすいナナシは、戦いの最中に、見えにくい紅麗の心情を今更感じ取っていた。

今の彼は、『あの頃』と同じだ。

自分は不幸だから、奪われてきたからというのを言い訳にして、他者を奪ってきたあの頃と同じだ。

異母弟の言う通り、いじめられっ子がいじめ返しているようにしか見えない生き方だ。

奪われる側の気持ちを、痛いほどに理解できる紅麗には全く相応しくない生き方じゃないか。

その気持ちがありながら、何故奪い続ける？

―何で…『あの頃』の生き方に戻ってしまったんや…。

だが、一つの相違点としては―彼は一度も、狂笑い声をあげなかった事だ。

そして、ナナシが倒れている地表に魔方陣が浮かぶと、彼の姿は消え去ってしまった。

「…逃がしたか」

紅麗は、先程までナナシが横たわっていた地面を見据えながら一人呟いた。

次元転送されたのは、ナナシだけではない。他のナンバーズも次元転送され、紅麗の前から姿を消していた。

しかし、紅麗の内心では、ナナシ達を取り逃がした事による悔しさは微塵もなかった。

と言うより、何の感情も抱いていなかった。

死んだかと思われたナナシが生きていた事に最初は驚きと喜びはあったが、今は彼に対して何の感情も抱いていなかった。

詳しく言えば、今の彼は、それどころではないのだ。

『…さんっ！　紅麗さんっ！』

紅麗は、通信にてシャーリーの声が喧しく自分の名前を呼んでいる事にようやく気が付いた。
紅麗は彼女の言葉に耳を傾けると、何でも突如現れた襲撃者一人になのは達が苦戦しているから、すぐに加勢しに行ってほしいとの事だ。

「……」

彼女の報告を聞いて、紅麗は何も答えなかった。相変わらず何の感情も抱いていなかった。
ただ淡々と事実を受け入れ、自分がやるべき事を成す事だけを理解しただけだった。

紅麗は背中から一対の炎翼を生やし、炎の羽根を散らしながら上空へ羽搏いた。

其之二十七：奪う側　後編

「はあッ…はあッ…」

なのはは荒い息を吐きながら、下方にいる『敵』を、恐怖を含んだ目で睨みつけた。
彼女の視線の先には、武骨な大槍を握った巨漢が、周りの『獲物』を見渡しながら悠々と佇んでいた。

―そんな…何で…？　何で…？

なのはは疲労と恐怖で嫌な汗をかきながら自問する。

門都と戦う際―なのはたちは、彼との接近戦は危険だと判断し、全員が射撃戦を徹する事にした。
門都は巨体に似合わぬスピードを持っているが、空を飛ぶ事ができないし、射撃魔法が乏しい。彼の弱点を利用し、圧倒的な数の差で果敢に攻めるなのは達が優勢のように見えた。
しかし、何発も何発も、射撃魔法と砲撃魔法を打ち込んでも、一瞬ふらつきはするものの倒れる気配が全く無い。
いくら非殺傷設定とはいえ、何十発も打ち込まれれば、とっくに昏倒しているはずだ。
だが、それでも門都は倒れない。まるでなのは達の攻撃が、蚊に刺された程度だと言わんばかりだ。
実は、痩せ我慢か？

あの顔全体を覆う仮面の下では、実は苦しそうに顔を歪めているのだろうか？
いや、門都の挙動を見れば、彼がまだ余力がある事が伝わる。

―…限定解除するしかない…！

なのはは切り札を切る事を決断した。
まさかこんな数の差で、しかも一人相手に使うとは思ってもみなかったが、このまま続けてもジリ貧になってしまうかもしれない。

「『レイジング・ハート』」

なのはが愛機の『レイジング・ハート』に指示を出そうとした瞬間、門都がアクションを起こした。左足を前に踏み出し、コンクリートの地面を易々と踏み砕く。そして、長大な銃を構えるように、大槍を両手で持ち、その槍先をなのはたちに向けたのだ。

寒気がした。

なのはたちは今すぐにあの男を止めなければと本能的に悟り、門都に向けて射撃魔法による集中攻撃を行った。
雷の魔力弾、血塊の弾丸、鉄球、分裂した鋼鉄の矢、桜色の奔流が彼の巨大な肉体に炸裂する。だが、門都は倒れるどころか、未だに構え続けていた。

そして、?獲物たち?に向けている槍先に、赤が混じった緑色の魔力光が集まっていき、集束された魔力が砲弾の形へと凝固される。さらに、先端が鋭利になりながら僅かに湾曲し、肉食獣の牙のような形をした魔力砲弾が完成された。

「ウウウオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

門都は咆哮をあげながら、空気を震わせるほどの重低な爆発音とともに魔力砲弾を発射した。

獣牙の砲弾は易々と大気を突き破り、餓えた獣のように獲物に向けて凄まじいスピードで一直線に突き進む。

その獲物となったのが、ヴィータだった。魔力砲弾は誘導性が皆無な分、スピードに特化しているので避けられないものだった。ヴィータは直ぐ様、魔力砲弾を反らすための障壁を展開する。だが、魔力砲弾が障壁に接触した瞬間、障壁が一秒にも満たずに粉々に砕け散った。その事をヴィータが知覚する前には、彼女の胴体に砲弾が叩き込まれた。

「がッ…!!!」

門都の大槍型簡易デバイスに非殺傷設定が掛けられた事が幸いだった。もし、それが解除されてあったならば、ヴィータの上半身と下半身は断たれていただろう。しかし、それでも、肋骨を何本か砕き、内臓が潰される寸前のダメージを与えられた。その痛みは、ユニゾンしているリインにまで伝わっている。ヴィータとリインは悲鳴をあげることすらできず、鮮血を吐き出しながら建物の屋上に落下し

た。

「ヴィータちゃんッ！！」

なのはは、屋上に叩きつけられたまま動かなくなっているヴィータとリインを見て悲鳴をあげた。

「な、なのはッ！」

次にフェイトが悲鳴をあげた。悲鳴というより警告だ。
その瞬間、なのはは今まで以上の悪寒を感じた。彼女は顔を前に向けると、先程まで地表にいたはずの、仮面の巨漢が目の前にいた。
なのはは驚愕に目を見開きながら、疑問が頭の中を支配した。

―飛行魔法を使えたの…！？

いや、違う。使えたのなら、とっくに使っているはずだ。

―まさか…ただの跳躍――

次の瞬間、黒い布に巻かれた巨大な拳が彼女の視界を埋め尽くした。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

意思を持つ故、戦闘の状況判断ができるインテリジェントデバイスの特性によって、『レイジング・ハート』は主に代わって魔法を自動発動し、なのはの前に桜色の防御魔法が展開された。

しかし、驚くべき事が起こった。門都が振りかぶった?ただの拳?が、なのはの防御魔法を砕いたのだ。そして、すぐにその拳が彼女の肉体に叩き込まれた。まるで車に撥ねられたかのような重い痛みと重い衝撃を受け、吹き飛ばされたなのはの身体がビルに衝突した。荒廃したビルの室内の床に叩きつけられたなのはは全身に走る激痛に小刻みに震えながら身体を丸めた。

「う…うそだ…」

なのはは痛みと恐怖で震えながら、今にも消えそうな声で呟いた。

彼女は、長年の努力で自分の防御魔法の頑丈さには自信があった。たとえ、咄嗟に発動した防御魔法でも?ただの拳?くらい簡単に防げると思っていた。だが、その?ただの拳?に先程簡単に砕かれたのだ。

身体能力向上の魔法を使ったとしても、そんな事ができるはずがない。元々の身体能力か?それとも、何か『別の力』でも借りているのか?

何にせよ、その腕力も、跳躍力も、耐久力も、全てが『人間』の域を超えていた。

それらを身を以て思い知らされたなのははゆっくりと意識を失った。

◇

「なのは…！！」

フェイトは見開いた目で、なのはが吹き飛んだビルの方角を見据えた。

彼女（なのは）は無事だろうか？

今すぐに親友に駆け寄って安否を確認したい気持ちに駆られるが、それ以上に親友と仲間を傷つけられた怒りから、すぐに戦闘思考に切り替えた。

「？バルディッシュ？、フルドライブ…！！」

『Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．　Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ．』

？バルディッシュ？は漆黒の杖の形態から刃の無い柄の形態へと変わり、その柄から雷の長刃が出現する。刃の形状からして、片刃の長剣に分類される。

『ライオット・ブレード』―高密度の魔力を、刃に圧縮した？バルディッシュ・アサルト？のフルドライブ形態だ。

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ.』

フェイトは間髪を容れず、加速魔法の『ソニック・ムーブ』を発動する。

雷光化したフェイトは、飛行魔法を持たずに地面に落下していく門都の背後に回り、高圧電流を帯びた雷剣を薙いだ。

しかし、次の瞬間、門都はいつの間にか掌に生成した巨大な魔力弾を、振り向きもせずにフェイトに差し出した。いや、盾にした―と言った方が正しい。

「ッ！？」

フェイトは突然の危険行動に驚愕した。そんなものを盾にすれば、自分もただでは済まないじゃないか！

フェイトは長剣を返そうしたがもう遅く、雷の長剣が魔力弾に接触した瞬間、それが爆発した。

「くっ…！」

フェイトは爆発の衝撃で長剣を手放しそうになったが、何とか握り込む事ができた。しかし、至近距離での魔力弾の爆発は彼女にダメージを与えていた。フェイトは鞭打って体勢を整えようとした時、門都の大きな手がフェイトの細い身体を掴んで拘束し、そのまま一緒に落下していく。

眼下にはコンクリートの地面。

フェイトは対処する事ができず、痛みを覚悟する。しかし、その背中がコンクリートに叩きつけられた時、予想を遥かに越える激痛が走った。

「ぐうッ！！」

堪らず声を漏らすフェイト。だが、それだけでは終わらなかった。仰向けに倒れているフェイトに、門都は容赦無く、その巨大な足で彼女を踏みつけた。

「がああッ…！！！」

１００キロを越えるその巨体の体重が彼女の身体に重くのし掛かり、鈍痛と息苦しさに襲われながら、フェイトは酸欠した魚のように口を開閉させる。

門都は彼女に止めを刺そうと、無骨の大槍を逆手に持ち、それをフェイトの顔に向けて振り下ろす。

蛭湖や薫、駆けつけたはやて、見兼ねたティアナ達が門都を止めようと行動を起こすが、彼らよりも門都が大槍を振り下ろす方が早かった。

◇

「……？」

盲目の青年―刹那は、シグナムとシャッハの得物を？凶蜘蛛？で受け止めながら何かの異変を感じたらしく、耳をぴくりと動かした。

彼の裸の上半身にはシグナム達の攻撃を受けたであろう斬撃の痣が何本か刻まれ、逆にシグナム達も身に纏う騎士甲冑ごと肌を裂いた裂傷が刻まれていた。

刹那は異変を感じ取り、歯を剥き出しながら狂笑った。

「向こうは？楽しい事？になってんなァ…」

彼の呟きに反応したのは、眉を潜めたシャッハだった。

「どういう事ですか…！？」

シャッハは考えたくもない予想をしながらも問い掛けると、刹那は意味ありげに喉を鳴らすように笑った。

「そのまんまだよ…向こうは、？楽しい事？になってんだよ…知りたけれりゃ、自分の目で確かめなァ…」

刹那はそう言うと後ろへ跳躍し、屋上の手摺に音もなく着地する。

「俺もできれば向こうに行きたかったんだけどよ、これ以上欲求不満になるのは嫌だからなァ…ここらで帰らせてもらうぜ…」

「逃がしませんッ！！」

ようやく見つけた通り魔を見す見す逃がすわけがない。シャッハは、一切アクションを起こさないシグナムに怪訝に思いつつも、刹那に接近する。

次の瞬間、刹那が手摺からさらに後ろへ跳躍したのだ。別のビルに跳び移ったのではない。彼は、手摺から眼下のアスファルトへ飛び下りたのだ。刹那の姿が、シャッハたちの視覚から消える。

シャッハは素早く手摺に駆け寄り、そこから眼下を見下ろすが、その先には刹那の姿はなかった。

シャッハは表情を歪ませる。

一方、シグナムの方は虚空を見つめながら思案していた。

―…本気で戦っていなかったな…。

刹那と得物を交えての感想だった。

しかし、本気で戦っていなかったのは彼女も同じだった。

当然だ。

彼女は、彼を倒すつもりで戦っていなかった。

ただ？純粋に？、戦いを楽しむつもりで戦ったのだ。

しかし、今回は手を抜いた。敵が本気を出していないのに、自分が本気を出すわけにはいかない。強者なら尚更だ。

管理局員として、騎士としての彼女だったならば、不満に思いつつ

も、好機だと思って本気を出していたかもしれない。
しかし、今のシグナムは管理局員として生きていないし、騎士としても生きていない。
『戦闘狂』として、正直に、生きているのだ。
故に、『通り魔』相手に本気を出さず、わざと逃がした事に対して、後悔は微塵もない。

シグナムは『強者』との再戦を歪んだ気持ちで楽しみにしながら、長剣を鞘に納めた。

◇

フェイトは呆けた目をしていた。
彼女の顔を突き潰そうと迫っていた大槍が、彼女の鼻先で止まったのだ。
いったい、どうしたのだろうか？
門都は焦燥感に駆られたような様子で、周囲を見渡していた。
蛭湖達も彼の様子に怪訝に思いながら、彼を見据えていた。

一方、門都はフェイト達の存在すら忘れて、キョロキョロ見渡し続ける。

今、彼は異変と共に恐怖を感じていた。
？これ？は、彼にとって二度目の体験だった。

自分の近くに『何か』がいる。
『何か』がこちらを見ている。

獲物を捕らえる好機を窺う獣のようにこちらを見ている。
しかし、その気配は一つではなかった。
いっぱいいるように感じる。
廃棄ビルの窓の奥から視線を感じる。
屋上から視線を感じる。
ビルの群れの中から気配を感じる。
上空に漂う雲からも気配を感じる。
右方にも、左方にも、背後にも気配を感じる。

たくさんの気配が確かに存在している。

だが、？違う？。

？こいつ？は？一人？だ。

一人であるはずなのに、たくさんの気配を感じる。
しかも、その姿が一向に現れないから、不気味な恐怖感が門都の心を支配する。

今―恐怖を与える側であるはずの自分が、恐怖を与えられる側に回っている。

今―狩る側であるはずの自分が、狩られる側に回っている。

―危険ッ！！！

それが門都の判断だった。理性ではなく、一種の生物としての本能でこの場から逃げなければならないと察した。

門都はここから逃亡しようと振り向いた次の瞬間、

「……」

左手に、炎の鳥の頭部を生やした黒衣の男がいた。

「『焔鳴哭』」

炎の鳥が大口を開けて甲高い鳴き声を響かせ、口内から放たれた炎の奔流が門都を吹き飛ばした。
１００キロ以上の体重がどかされ、フェイトは咳き込みながらもようやく酸素を取り込むことができた。
そして、気付いたらいつの間にか紅麗が彼女の隣に立っていた。

「……」

紅麗は太陽を背に、フェイトを見下ろす。
フェイトは荒い呼吸を繰り返しながら力無い瞳で紅麗を見上げる。
彼女から見て、太陽の逆光で紅麗の表情と眼差しが見えなかった。
今の彼は、どんな目をしているのだろうか？

きっと、煉華やシグナムを見ている時と同じ―氷のような冷たい眼差しをしているに違いない。
フェイトはそう決めつけていた。

しかし、それを否定する自分もいた。

「ァアアアぁアぁアぁぁアアアぁアアぁアアッ！！！」

野獣よりも野性的な咆哮が轟いた。
炎の砲撃を受けて吹き飛ばされたはずの門都が、もう立ち上がっていた。
彼の胸元には、炎の奔流を受けた事による大きな火傷が痛々しく刻まれていた。だが、門都にとってこの程度の火傷など？痛い？の範疇には入らない。

「グルぁアアアアァアアアぁぁアアアッ！！！」

門都は爆砕音とともに地面を蹴り、凄まじい速度で紅麗に肉薄した
次の瞬間、その巨体が真横に吹き飛んだ。

「……」

紅麗は地面に転がる門都を一瞥し、彼を吹き飛ばすために用いた炎の片翼を仕舞いながら小さく鼻を鳴らした。

「ぐオッ…かァあ…！！」

門都は呻き声を漏らしながら再び立ち上がった。炎の片翼の打撃により、門都の顔面を覆う仮面が割れ、顔の右半分が露になった。彼の右目には、赤い宝石―？レリック？が埋め込まれていた。超高エネルギー結晶体は、門都の怒気に呼応するように赤々と鈍く光っている。

「グうッ…オ〝マえ！　ミた、コトあルッ！！」

門都は紅麗に指差しながら、聞き取りずらいが初めて言葉を発した。

「ミたコとアるッ！　見タこトアルッ！！　みたこトアルッ！！！　ミタコトアルッ！！！！」

門都は自分と、相手に言い聞かせるように何度も同じ言葉を意味無く繰り返す。

「……」

一方、紅麗は門都を冷ややかな目で見据えながら、ようやく彼の事を思い出す事ができた。別に彼の言葉で思い出したわけじゃない。どこかで見た事があるその目立つ容姿と、彼の周囲に漂う大量の怨念で思い出せたのだ。

それまで門都が『死四天』だという事すら忘れていた。
つまり、紅麗からして、門都という存在は―

「ああ…あの時の？雑魚？か」

その程度の印象でしかなかった。
彼らが以前対峙した時―門都が紅麗に手傷を負わせるほどの強さを持っていれば、紅麗は彼の事を忘れてはいなかっただろう。しかし、傷一つ付ける事すらできなかった？雑魚？をいちいち覚えていられるはずがない。紅麗からしてみれば、門都の存在なぞ、ガジェットと大差ない。

「ぅオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

門都は唸り声をあげた。
？雑魚？と言った紅麗の言葉に、怒りを覚え、その感情をそのまま声に出したのだ。
大気を震わせるほどのその声だけで、大抵の者は恐怖を覚えながら腰を抜かして戦意を失うだろう。
しかし、紅麗からして見ればただの雑音でしかない。

「先程から五月蠅い奴だ…灰にされたいのか…？」

紅麗は無感情な呟きを漏らすと、門都は魔力を集束させた大槍の先

を紅麗に向けた。次の瞬間、ヴィータを撃沈させた獣牙の形をした魔力砲弾を何発も発射した。
質より量を選択した攻撃だから、以前のものより威力は落ちている。
しかし、それでもなのはの魔力弾の威力を凌駕している。
紅麗は持ち前の速度で左右に動きながら何発か回避し、残りは炎の片翼で軌道を反らす。
そして、彼は姿を消すと同時に、一瞬で門都の背後に回る。
以前門都だったならば、紅麗の速度に反応できずに背後にいる事に気付くまで少し遅れていただろう。
しかし、今の門都は紅麗の速度を捉えていた。
門都は得物を真横に大きく振るう。人間をただの肉塊に変える大槍の一撃が唸りをあげ、紅麗の影を薙いだ。
しかし、大槍を持った手に肉体を潰した感触が伝わらない。
それに気付いた時には、黒衣の男が間合いに入っていた。
紅麗は門都が行動を起こす前に彼の鳩尾の一点に向けて、横蹴りを叩き込んだ。
激しい衝突音が響く。
いくら頑丈な肉体でも、強靭な脚力を備えた紅麗の蹴りを急所に叩き込まれれば気絶は必至だ。
だが、

「グウッ…ウウウオオオオオオオオオオオオッ！！！」

門都を気絶させる事はできなかった。門都は人体を簡単に叩き潰せるほどの威力を持つ巨大な拳を振り下ろす。
それを紅麗は後ろへ跳躍して難なく避わす。

「今ので立っていられるか…面倒な奴だ」

言葉とは裏腹に、紅麗の口調には何の感情もなかった。

一方、紅麗と門都の戦いを目の当たりしているフェイトは身体中に走る痛みすら忘れて、彼らの戦いを怯えに似た目で静観していた。

―あれが…紅麗の戦い…。

機動六課の訓練で？模擬戦として？の彼の戦いを何度も見た事があるフェイトだったが、？実戦として？の彼の戦いを見るのは初めてだった。

―次元が、違いすぎる…。

限定解除をしていなかったとはいえ、自分達を余裕で落とした敵相手に紅麗は優勢に戦っているのだ。

彼は、これほどまでに強かったのか？

しかし、管理局員として羨ましいほどの強さを持っているのに、彼の戦いを見ていると何故か悲しく思えた。何だか辛そうに見えた。

紅麗が被っているその仮面で、彼の表情は一切見えない。しかし、それでも彼が辛そうに見えるのだ。

そう思うと、フェイトは思い当たる事が一つあった。

―私が…あんな事を、言ったから…？

フェイトは、数時間前に自らの口で紅麗に叩きつけた言葉を思い出した。

深い罪悪感が、胸の中を蠢く。

だが、その言葉だけではないと直感できた。
それ以前に、何か大きな理由があるんじゃないのかと思えた。
フェイトが深く思案していると、突然その紅麗が彼女に向けて視線を向けた。

―え…？

あまりにも一瞬だったが、フェイトはしっかりと見えた。そして、その一瞬の眼差しに、深い悲しみを秘めた決意があった事にも気付いた。
そして、次の瞬間、紅麗が目視できないほどの速さで門都に背後に回ると同時に、門都の腹に鮮血が迸った。

―ッ！！！

フェイトだけではない、その場にいる全員が驚愕に目を見開いた。
紅麗が、その左手で、門都の腹を貫いたのだ。

「オオオオオオオオオオオッ！！」

門都は激しい痛みに叫び声をあげた。そして、この痛みを与えた張本人―すぐ背後にいる紅麗に手を伸ば―

「『翅斬』」

紅麗の左腕から―？殺傷のための？灼熱の炎が噴き出した。

「ギュオォオオォォオオオオォォオオオッ！！！」

門都は今までにない絶叫をあげずにはいられなかった。
非殺傷設定が解除された残虐な紅き炎が、体内を焼いているのだ。
非殺傷設定で炎に焼かれたトーレが受けた痛みとは比べものにならない。
紅麗は悶え苦しみ門都の背中を冷たい目で見据えながら彼を焼き続ける。
門都が絶叫をあげようと、容赦なく焼き続ける。

あえて殺さないように焼き続ける。

死んだ方がマシだと思える痛みを、長く長く与えるように焼き続ける。

慈悲も容赦も躊躇いもなく、じっくりと焼き続ける。

そして、見せつけるように焼き続けた。

門都の苦しむ姿。
門都の絶叫。
門都の肉体が焼かれる嫌な匂い。
視覚と聴覚と嗅覚が、気が狂いそうなくらいに刺激される極度な不快感。
それらを目の当たりにしてほとんどの者は呆然とした表情を蒼白とさせていたが、残虐行為に免疫があるはずがないスバルとエリオは気絶し、ティアナは涙を流しながら嘔吐した。
そんな中、一人だけ違う反応を示した者がいた。

「やめて…」

フェイトだった。

彼女は、紅麗をしっかりと見据えながら泣き出しそうな呟きを漏らした。しかし、門都の叫び声でかき消され、残虐行為が終わることはなかった。

「やめて…」

涙が溢れる。

「やめて、よ…」

―いやだ…。

これ以上、見たくなかった。

厳しいところもあるが優しいところもある彼が、こんな残酷な事をしている姿を、これ以上見たくなかった。

しかし、その気持ちがありながらフェイトは紅麗を見据えているという矛盾があった。

―いやだ…！

これが、紅麗の本性なのか？
今、何の躊躇いもなく人を焼き殺そうとしているのが、大好きな彼の本性だというのか？
もし、そうだったのなら、今まで？彼？は何だったのだ？
彼の優しいところを、見た事がある。
彼の数少ない笑顔だって、見た事がある。
もし、目の前の彼が本性だったのなら、全てが嘘や幻みたいじゃないか。
全ては、欺くための演技だったみたいじゃないか。

「やめてよ、紅麗ッ！！！」

フェイトは目の前の行為を強く否定するように、紅麗に駆け寄り、その身を抱き締めた。
ずるりと、門都の腹を貫いていた紅麗の左手が抜ける。

「紅麗ッ！　何で…何で、こんな事を―」

フェイトは紅麗を問い詰めようとした途中で、その言葉が遮られた。
紅麗が右手の甲で彼女の頬を強く打ったからだ。フェイトは口内に血の味を覚えながら地面に横転する。
次の瞬間、強い風と嫌な音を、彼女は捉えた。
フェイトは嫌な予感をしながらすぐに紅麗に顔を向けると、門都の突き出した大槍が紅麗の右の脇腹を抉っていた。

「ぐっ…！」

紅麗は短い呻き声を漏らしながら、門都の血に染まった左手で傷口を押さえる。しかし、指と手の隙間から夥しい鮮血が溢れ出て、全く止血にはならなかった。

「グゥオオオォォオオオォオオ！！！」

門都は好機の雄叫びをあげながら、大槍を振り上げた。しかし、それを振り下ろす事はできなかった。門都の足元に紫色の魔方陣が浮かび、彼の巨体がいずこへと消え去ったからだ。

「…ッ…」

紅麗は安堵の息を吐く余裕もなく、脇腹を押さえながら片膝をつく。そして、大量の出血によって意識を失い、ついには地面に倒れ込んだ。

「紅麗…紅麗ッ！！」

フェイトは直ぐ様紅麗に駆け寄った。他の者達も我に返り、彼女に倣った後、紅麗に応急処置を施し始めた。

そこから少し離れたビルの屋上に、駆けつけてきたシグナムとシャッハがいた。
シャッハがシグナムに向けて焦った口調で語りかけてくるが、シグナムはそれを無視する。そして、龍のような鋭い目付きで紅麗を見下ろしていた。その瞳に宿しているのは管理局員としての彼女なのか、騎士としての彼女なのか、戦闘狂としての彼女なのか―それは誰にも、シグナムすらわからなかった。

其之二十七：奪う側　後編（後書き）

？紅麗様、マジ紅麗？な回でした。
やっと二重の意味で、長き戦いが終わりました…（－ｏ－；）

感想のとこでシグナム（おまけにシャッハ）と刹那との戦いを期待していた読者さんが結構いらっしゃったんですが、ハショってしまいました。ですが、かなり先の話で、彼らは再び戦う事になりますので（もちろん、シャッハ抜き）それまで少し楽しみにしていてください。

Ｐ．Ｓ．
キリトと、けいおん！のムギって似てませんか？

はやて
「眉毛だけやろ（爆）！！」

ムギ
「実は私の眉毛、たくあんなのっ♪」

キリト
「実は私の眉毛、ゲジゲジなんだ」

はやて
「（。□。）」

其之二十八：毒液の言葉

目を覚ましたナナシが最初に目にしたものは、不気味なほどに染み一つない真っ白な天井だった。
しかも、ナナシにとって見慣れた天井。ナナシは、自分の部屋にいる事と、その部屋のベッドの上にいる事に気付く事ができた。
しかし、何故、こんなところにいるのだろうか？

「ナナシっ…！」

聞き慣れた少女たちの声が、ナナシの思案を中断させた。
彼は視線だけを下へずらすと、眼帯をつけた銀髪の少女と水色髪の少女、赤髪の少女、濃いピンク髪の少女―四人が彼の傍らに寄り添っていた。

「チンク…セイン…ノーヴェ…ウェンディ…」

ナナシは彼女たち一人一人の名前を噛み締めるに紡いだ。

「良かった…ナナシ、気が付いてくれて…」

チンクは隻眼にうっすらと涙を浮かべながら安堵の息をつく。他の三人も同様で、余程彼の事を心配していたらしく、嗚咽を漏らしそ

うな安堵の表情を浮かべていた。
一方、ナナシは彼女たちの様子と、痛みが走る自分の身体に巻かれてある包帯を見て、ようやく気を失う以前の事を思い出せた。
それは、あまりにも苦い記憶だった。

―自分は…届かなかったんやな…。

再会した元・仲間相手に、圧倒的な実力の差で敗北した。

―自分は…護れなかったんやな…。

大好きな女の子を傷付けられた。

ナナシは拳を強く握った。
腕に痛みが走るが、悔しさが鎮痛剤となって痛みなど感じられなかった。

ナナシは、彼女たち(ナンバーズ)が大好きだ。今まで出会ったどんな美女、美少女よりも、彼女たち(ナンバーズ)の事が大好きだ。
だから、護ると決意した。
自分が大怪我を負おうが、四肢が切断されようが、上半身だけになろうが、首だけになろうが―彼女たちをずっと護り続けると決意した。

―なのに…なんや、あのザマは…。

たった一人の男に手も足も出せなかった。
一人の女が傷付けられようとしていたときも、全身の痛みを?言い訳?にして動かなかった。
そして、動けたとしても、自分の?角?が届かなかったではないか。

―自分…弱っちいなぁ…。

相手の強さが規格外だったからとか、そういう事など関係ない。相手がどんな強さだろうと、どんな不利な状況だろうと―大好きな女すら護れなかった事が、無力感を覚えるには十分だった。

「あの、ナナシ…」

躊躇いがちに紡がれた声が、ナナシのネガティブな思案を中断させた。ナナシは現実に意識を戻し、声を紡いだ少女―セインに顔を向けた。

彼女はうつ向きながら、ぽつりぽつりとナナシに呟く。

「その…ごめん…。レリック…ケースは奪ったんだけど、中身が…カラだったんだ…」

セインはまんまとティアナたちの策に嵌まり、レリックのケースを奪えたものの、肝心の中身まで奪うことができなかったのだ。セインは自分の不甲斐なさにもう一度ナナシに謝ろうとしたとき、頬に暖かいものが当たった。ナナシが彼女の頬を、優しく触れたからだ。

「んなもん気にすんな…自分は、セインが無事だったらそれでええ」

手の温度に見合う優しい言葉だった。
ナナシにとってレリックの事など、どうでもよいのだ。
ナナシが望む事は、大好きな女の子たちが元気で、幸せに暮らしてほしい事だ。
彼女たちが怪我したり、泣いたりしてる事の方がナナシにとって遥かに一大事だ。
セインはナナシの言葉を受けて顔を赤くしながら、小さく頷いたその時、部屋のドアから控えめなノック音が聞こえた。
いったい誰だろうか？
一同は顔を見合わせた。
この場にいないトーレとクアットロとディエチは治療中だ。スカリエッティとウーノが見舞いにでも来てくれたのだろうか？　しかし、スカリエッティは直々に見舞いに来るような人間とは思えないし、ウーノがナナシのために料理を作ってきてくれたのだろうか？
ナナシと、何故かセインとウェンディもそれを期待しながら入室を促す。
だが、部屋に入ってきた者は、彼らにとって予想外な人物だった。

「ルーお嬢様？」

呆けた呟きを漏らしたのは、ウェンディだった。
黒いゴスロリ衣装を着込み、赤い瞳と紫髪の少女―ルーテシアだったのだ。

「ルーテシアお嬢様、どうしてここに？」

チンクは尋ねる。
しかし、ルーテシアは彼女たちから距離を置くような位置で佇みながら何も応えなかった。そして、その表情は何か言いたそうで、気まずい表情を浮かべていた。
そんな彼女に見兼ねて、ナナシが口を開く。

「黙ってちゃわからへんで？　何か用があるんやろ？」

ナナシはいつもの女性限定の優しい口調で語りかけると、少し気持ちがほぐれたのか、ルーテシアは意を決した表情を浮かべた。そして、スカートの裾を握りしめながら頭を下げた。

「ごめんなさい…」

それが彼女の一言だった。
突然の謝罪の言葉に、チンクたちは心当たりがないと言わんばかりに首を傾げた。
しかし、ナナシは何となく察しているらしく、ルーテシアの言葉を待つ。
ルーテシアは顔を俯かせながら今にも泣き出しそうな声で言葉を紡ぐ。

「わたし…ドクターにお願いされて…空間転送、わざと…遅らせたの…」

彼女の言葉に対してチンクたちは驚愕し、ナナシは表情を変えなかった。

「てめぇッ！　何でそんな事をしたんだよ！！？」

怒りを露にし、ルーテシアに怒声をぶつけたのはノーヴェだった。

「おいおい、ノーヴェちゃん…ちっちゃい女の子にそんなに怒鳴っちゃあかんで」

ナナシはノーヴェを宥めようとするが、彼女の怒りは静まらなかった。

「だって、ナナシ！　こいつが早くナナシたちを助ければ、こんな怪我を負う事なかったじゃねぇか！！」

たとえ、ナナシたちを傷付けたのが黒衣の男本人だとしても、それを逸早く助けなかったルーテシアも同罪だ。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

ルーテシアは俯いたまま何度も何度も謝る。
だが、頭の上に乗せられた暖かい感触がルーテシアの言葉を止めた。
ルーテシアは顔を上げると、いつの間にか目の前にナナシがいた。
そして、片膝をつきながらルーテシアの頭に手を乗せていたのだ。

「わかってたで。わざと遅れさせた事も、スカリエッティに言われた事も、な」

ナナシは全てを察していた上で、それを許すようにルーテシアを優しく撫でる。

「ルーテシアちゃんは、ええ子やなぁ。その年で、勇気を出してちゃんと謝ってきてくれたんやからな。…後でトーレ姐さんたちにも謝っとき。三人とも優しいから、誰かさんと違って怒りはせぇへんよ」

安心させるようなナナシの言葉を受けてもルーテシアは彼を見上げながら戸惑っていたが、やがて「……うん」と小さく頷いた。
それを見てナナシは微笑ましく見下ろしながらもう一度撫で、ゆっくりと立ち上がった。

「…自分、ちょいとトイレ行ってくるわ」

ナナシは一方的に告げると、早足で部屋を出て行く。彼の怪我を心配して、チンクたちが声を掛けてくるが、彼はそれを無視した。正確には、それどころではなかったのだ。長い髪の下に隠された彼の瞳が、怒りに染まっていたのだ。

◇

「何ということだ…彼の強さが、これほどとは…」

畏怖と歓喜が混ざり合ったような呟きを漏らしたのは、このラボの主であるスカリエッティだった。

彼は、紅麗の戦闘記録を映し出した複数のモニターを、それぞれ広い視野で同時に見据えている。

そんな彼の後ろ姿を、紫色のロングヘアーの女性―ナンバーズ？のウーノが悲しげな表情で見つめながら言葉を紡ぐ。

「…ナナシも、トーレたちも…あの男に全く歯が立ちませんでしたね…」

ウーノはスカリエッティから目線を外し、培養液が満たされた三つの生体ポットに目を向けた。正確には、それに入れられた負傷した三人の妹たちにだ。

彼女たちの裸体には、紅麗の炎による火傷が烙印のように痛々しく刻まれている。だが、トーレはもっと酷い。ほぼ全身に深い火傷を

負わされており、目も当てられない光景だった。
クアットロとディエチは明日には全快すると思うが、トーレは二日か三日ぐらいかかるだろう。
ウーノは、痛ましい妹たちの姿に目を反らしたくなったが、彼女はそれを拒否した。
妹たちが危険な戦いに身を投じていたのに、自分は安全な場所に待機していたからだ。もちろん、自分には戦う力もないし、戦わない代わりに情報処理や実務指揮などで、彼女たちを支えている事を熟知している。
しかし、それでも納得できないのが？一番の姉（ウーノ）？だ。
どういう仕様がない理由があるにしろ、傷つけられている妹たちすら救うことができなかったのだ。
そのような罪悪感が彼女の胸を締め付け、ウーノは無力な自分に罰を与えるように、彼女たちの姿を見つめ続けていた。

「…ああ…まさか、あのトーレがあっさりやられるとは、思わなかった」

いつの間にか、スカリエッティもまたトーレたちを見つめていた。
しかし、その横顔には感情というものが感じられなかった。

―ドクターは…今のトーレたちを見て、何とも思わないのかしら…？

ウーノはスカリエッティの表情を一瞥して、顔を伏せた。
スカリエッティは、ナンバーズを生んでくれた。
言わば、スカリエッティはナンバーズの親と言ってもいい。
しかし、今の娘たちの姿を見て、その親の表情には感情がない。
何とも思わないのか？　悲しんでいるとか怒っているとか、そんな

感情を抱かないのか？
結局、ナンバーズ（じぶんたち）は、創造主の？作品？でしかないのだろうか？
そして、
―貴方を愛する私ですら…？ただの作品？としか見ていないのですか…？
ウーノは、自分が最も絶望する予想をしてしまうと、その涙腺が緩み始める。
「しかし…トーレやナナシはともかく…まさか？この男？まで彼に敵わなかった事が、一番予想外だったよ」
スカリエッティの言葉で、ウーノの思案と涙腺が同時に停止する。
彼は、何台も連結させた手術台の上に横たわる巨漢を見下ろしていた。
体長が２ｍから３ｍもある、緑髪の巨漢―門都だった。
彼は先程の戦闘で紅麗に重傷を負わされたが、彼の強靭な生命力と、対人間の超絶的な治療法を心得ていたスカリエッティの治療により、一命を取り留め、今はスカリエッティの劇薬とも言える睡眠薬で強制的に眠らされている。そして、もし彼が起きた時に暴れられたら面倒だからと、魔法とデバイス技術を応用したバインド発生装置でその動きを封じている。
「せっかくレリックを移植させたというのに、不意打ちでしか彼に手傷を負わせられなかったとはね。まぁ、高町なのはらを余裕で撃破しただけでも上出来なのだが」

スカリエッティは苦笑しながら肩を竦め、門都の右目に埋め込まれている赤い宝石を見下ろす。
この超高エネルギー結晶体が、門都がスカリエッティたちに従順にさせるために自我をコントロールし、魔法的戦闘能力と、身体的戦闘能力を大幅に上昇させていたのだ。

「まったく…今回の戦闘記録を見て、あの仮面の男がいかにイレギュラーなのかを、凄く実感したよ。まさに彼の存在は、？常識の冒涜？だよ」

辟易しているような喜んでいるような言葉を紡いだスカリエッティは門都の事などすっかりと忘れたかのように、くるりと身体の向きを変える。そして、もう一方の手術台の上に置かれている？モノ？に目を向けた。

「だが…その？常識の冒涜？の力を手に入れることができた」

スカリエッティはまるで待ち望んでいたゲームソフトを手に入れた子供のような―それでいて歪んだ笑みを浮かべながら、？それ？に触れた。紅麗の血に染まった、大槍型簡素デバイスを。
益々狂喜な笑顔を浮かばせるスカリエッティを見つめながら、ウーノは何かを言いたそうな顔をした時、ラボのドアが横へスライドした。
そこからラボに足を踏み入れてきた者は、スカリエッティもウーノ

もよく知る人物―ナナシだった。

「ナナシ…」

滅多にラボに寄り付かない男が現れた事に、ウーノは僅かに驚いた顔をしていた。しかし、スカリエッティは意外そうな顔すらしていなかった。むしろ、

「やぁ、来る頃だろうと思っていたよ」

まるで待っていたかのような顔で、ナナシが来る事を予想していたようだ。

ナナシはスカリエッティの言葉に応えず、彼を見据えながら傍らにいるウーノに向けて言葉を発した。

「…ウーノ姐さん。ちょいと、出て行ってくれんかの…スカリエッティと話がしたい」

ラボに入ったナナシの開口一番がそれだった。一方、一瞬呆けた表情を浮かべたウーノだったが、すぐに厳しい表情に引き締めた。

「何を言ってるんですか？　それより、あなたの怪我はまだ治っていないんですから、早く部屋へ戻ってください」

ウーノの口から出た言葉は、ナナシを労っての言葉だったが、それだけではなかった。
ナナシとスカリエッティを二人きりにさせたくなかったからだ。
ナナシの言葉と、醸し出される雰囲気から、ただならぬ剣幕を感じ取ったからだ。今にも殴りかかりそうな雰囲気を醸し出しながら、ただ話をするにしては、あまりにも説得力がなかった。
もし二人っきりにさせたら、二人は激しく口論したり、殴り合ってしまうかもしれない。
ウーノはそれが嫌だった。
彼女はスカリエッティの事を愛人として愛しているし、ナナシの事を友人として好いている。
思いは違えど、大好きな二人が喧嘩しているところを見たくなかったし、させたくなかったし、想像すらしたくなかった。
だから、ウーノはナナシを労りながらも、スカリエッティと二人きりにさせる事を拒否した。

「―ああ、別に構わないよ、ウーノ」

だが、スカリエッティの言葉が、ウーノの思いを踏みにじる事となった。

「ナナシは、どうしてもすぐに私と話がしたいらしい。ここは彼の気持ちを汲んでやってくれないかい？　大丈夫、無理はさせないさ」

スカリエッティはウーノの心情を気付いていないのか、気付いておきながら気付かないふりをしているのか、どちらにしろ―ウーノの思いを踏みにじっている事に変わりなかった。
一方、ウーノはスカリエッティに諭されても、困惑した表情を浮かべながらこの場から動かなかった。
いくら愛する人からの言葉でも、納得できるはずがなかった。

―何とか…何とか…。

ウーノは二人を諭す言葉を模索しようとするが、安い言葉しか思い付かない。それでも彼女は懸命に模索し続けるが、スカリエッティとナナシが自分に視線を向けている事に気付いた。
二人とも無表情に、何も言わずにウーノを見据えてくる。

「…ッ…」

結局ウーノは諭す言葉すら思い付かず、彼らの視線から逃げるように早足でその場を後にした。
ウーノがラボから退室してから、ナナシもスカリエッティも、何も言葉を発さなかった。
二人はただただ、無言で目の前にいる男に目を向けている。
一人はウーノが離れていくのを待っているように、一人は相手の言葉を待っているように、二人は言葉を紡がなかった。
だが、次の瞬間、スカリエッティの身体が突如後方へ吹き飛ばされた。
スカリエッティに突進しながら彼の胸ぐらを掴んだナナシが、その勢いのまま壁に叩きつけたのだ。
ナナシは、まるで赤布（ムレータ）を前にした闘牛ような怒り狂った目でスカリ

エッティを睨みつけながら、ようやく言葉を発する。

「こら…スカリエッティ―」

「君が?私に対する批判というもの?を、いくつか予想してあげようか?」

ナナシの言葉を遮ったスカリエッティの表情と口調には、ナナシに対する脅えが一切無かった。まるで、問題に悩む友人に意地悪な笑顔を浮かべながらヒントをあげる子供のようだった。

「ルーテシアのような幼い女の子を戦い場に出させている事かい?
君の大好きなクアットロたちにヘリの撃墜を命令した事かい?そして、あの黒衣の男のデータを少しでも集めるために、わざとルーテシアの空間転送を遅らせた事かい?　さぁ、どれだい?」

「……全部や」

ナナシは目の前の男に苛立ちながら返す。何を楽しそうに笑いながら言っているのだ、この男は!

「…それで?　今にも私に殴りかかりそうな、君は…?これから、どうするつもりなのかな??」

スカリエッティは、次にナナシの口から出る言葉が待ち遠しそうに黒い笑みを浮かべた。その仕草に苛立ちを覚えながらも、ナナシはこう断言した。

「もう我慢できん…遅すぎる選択やったが、自分はナンバーズ全員を連れて管理局とやらに自首するわ」

だが、次にスカリエッティの口から返ってきたものは、嘲笑の高笑いだった。

「あっはははははははははははははははっ！！」

「…何がおかしい…？」

ナナシは怒気を孕んだ言葉で、スカリエッティを問い詰める。

「あはははははっ！　良いねぇ、とても良いよ！　素晴らしい選択だよ！　このまま悪事を続けるより、自首してしまった方がずっとずっと良いからねぇ！」

スカリエッティはナナシの？立派な言葉？を高らかに称賛した次の瞬間、毒蛇のような目付きでナナシを見据えると同時に、声のトーンを落とした。

「だがね…君について行くナンバーズは…果たして?全員?だろうか?」

「ッ!!?」

ナナシはまるで図星を指されたかのように硬直した。そして、真っ先に脳裏に浮かんだのは、先程退室した女の顔だった。

そんなナナシの反応を楽しそうに見つめながら、スカリエッティは毒液(ことば)を吐き始めた。

「君はナンバーズを何人か説得できたとしても、私側に残ったナンバーズを残して管理局に自首できるのかなぁ?これから起動するナンバーズを置いて自首できるのかなぁ?もしそうなったら、私側に残ったナンバーズが?大変な事?になっちゃうかもしれないよ?ほら、君を打ち負かし、トーレを焼きなぶった例の青年がいただろう?彼…管理局員でありながら、とうとう殺傷設定を使ってしまったんだよ?さぁ、君はこれを知って、どう考慮する?ふふっ、あえて私が言おうか。彼はもしかしたら、ナンバーズを容赦無く殺してしまうかもしれない、という事だよ?頭を吹き飛ばすだろうねぇ、心臓を潰すだろうねぇ、焼き殺すだろうねぇ。?君の大好きなナンバーズ?が殺されてる中、君は檻の中でヌクヌクしていられるのかなぁ?君は?優しい人間?だからね、君の大好きなナンバーズを何人も残して自分たちだけ自首するとは、私的にはとても思えないなぁ」

嫌らしい笑みで矢継ぎ早に語るスカリエッティの言葉に、ナナシは表情を強張らせながら口を噤んだ。

―できるはずがない…！！

一人だ。

たった一人でも、スカリエッティ側に残るナンバーズがいたら、ナナシの動きが完全に封じられてしまう。彼が、ナンバーズ全員を好いているからだ。そして、紅麗がナンバーズを殺してしまうんじゃないかと懸念しているからだ。

そんな彼の気持ちを、この毒蛇（スカリエッティ）は利用しているのだ。

だが、利用されているとわかっていながらも、ナナシはスカリエッティ側に残るナンバーズを見捨てる事はできなかった。

「…スカリエッティ、お前も自首せい」

ナナシは苦しげな表情で命令した。

スカリエッティも自首すれば、スカリエッティ派のナンバーズも一緒に自首するはずだと考えての言葉だった。

だが、スカリエッティにそう言ったところで、彼が納得して自首するとは思わなかった。

そして、ナナシの予想通り、スカリエッティは鼻を鳴らしながら拒否の言葉を口にする。

「自首なんかするはずがないだろう？　目的を諦めるくらいなら、舌を噛みきって死んだ方がマシだよ」

そう言う彼の言葉は、嘘でも冗談でもなく、本気だった。

これには理由があり、ナンバーズの体内には極小サイズのカプセルに収められたスカリエッティのクローンとなる?種?が簡易的な外

科的処置で埋め込まれており、万が一スカリエッティが死亡したり、捕らえられたとして、プロジェクトFの応用技術を用いて、体内に仕込まれているスカリエッティのクローンが約一ヶ月で記憶を受け継いだ新たなスカリエッティとして産まれてくるのだ。そして、スカリエッティもナンバーズも自首したとしても、時空管理局にスパイ活動しているドゥーエさえいれば、？新たなスカリエッティ？が計画を再開してくれるのだ。

故に、スカリエッティは自ら死ぬ事に躊躇しないのだ。たとえ死んだとしても、代わりがいる―ただそれだけだった。

そして、そんなスカリエッティの表情と口調から醸し出される、いつ死んで構わないという気持ちが、他人の心情を察しやすいナナシに伝わったのだ。

だが、ナナシはそれを気のせいにしたかった。

死んだ方がマシなんて…そんなはずはない。何かの目的を遂行している人間が、そんな簡単に死を選ぶはずがない！ハッタリに決まっている！

「…死んだ方がマシなんて言うな、ボケ。冗談に付きおうとる暇はないんや、自首しろ…！」

「冗談ではないのだよ。君が無理矢理私を自首なんかさせたら、私は迷わず自殺するよ」

またしても、いつ死んでも構わないと言わんばかりな表情と口調だった。ナンバーズの体内に埋め込まれているクローンの事など全く知らないナナシにとって、今のスカリエッティの言動が不気味で仕方がなかった。

「んなわけないやろッ！！　お前だって、そんなあっさりと死のうとするはずないやろッ！！　自分らを自首させないためのハッタリなんやろッ！！？」

「君は私の思考の何がわかるのかな？　何なら、今証明してあげるよ」

スカリエッティは悪戯っぽい笑みを浮かべながら、舌を突き出した瞬間、

「やめろやッ！！！」

ナナシの脳裏にウーノの顔が浮かび、彼はスカリエッティを殴り飛ばした。床に転がったスカリエッティはゆっくり立ち上がりながら、くつくつと喉を鳴らすように笑う。

「まさか、君が？死のうとした私？を助けるとは…意外と私を嫌っていないのかな？」

スカリエッティは人を食ったような表情を浮かべていたが、本心からの疑問だった。
あんなに焦った様子で、自害を止めるとはどういう事だろうか？
自分の事を嫌っているはずじゃなかったのか？
嫌いつつも、死んで欲しくなかったのか？

それとも、何か別の理由があるのだろうか？
ナナシがスカリエッティの自害を止めたのは、ウーノが悲しむからだ。だが、そんな事実を知らないスカリエッティはただ疑問に思うだけだった。だが、すぐにそれを閑却し、再び毒蛇のような目付きで、俯いているナナシを見据える。

「ねぇ、ナナシ？君は？やむを得ない事情？で自首する事ができなくなってしまったんだが、自首なんかできなくても？君の生き甲斐？を行える事ができるじゃないか」

するとナナシは顔を上げ、長い髪の下で疑問げな目でスカリエッティを見つめ返す。そんな彼の反応を、スカリエッティは呆れるような楽しむような表情を浮かべながら彼は続ける。

「言ったじゃないかぁ。君の生き甲斐はさぁ、？彼女たちを護る事？じゃないか」

「……」

スカリエッティの言葉を飲み込むように、ナナシは無言を貫く。それを見てほくそ笑んだスカリエッティは、ナナシに毒液（ことば）を吐く。

「まぁ、いつも通り、という事さ。私の計画が成功すれば、彼女たちは全員、幸せな場が与えられるのだよ。君は優しい人間だし、彼女たちの事が大好きだから、彼女たちの幸せは君にとっても幸福だ

ろう？　大丈夫さ。文句を言いつつも私の命令に従い…彼女たちを護るために、彼女たちの幸せのために、君は戦い続けるだけで良いのだよ。だから、これからも…私に協力してくれるかい、ナナシ？」

スカリエッティは笑顔で、ナナシに問い掛けてくる。だが、ナナシはすぐに応えず、彼の言葉を了承するようにこう言った。

「ホンマ…最悪なやっちゃな、お前…」

その言葉を残して、ナナシはラボから退室して行った。
スライドして閉ざされたドアを、スカリエッティは笑顔のままじっと見つめていた。
だが、機械の稼動音しか響かない静寂の中でスカリエッティはようやく声を発した。

「はっ、ははは…はは…はははっ…」

それは渇いた笑い声だ。

「あっはははっ…はは、ははははっ…」

嘲笑するような高笑いでも、自嘲するような笑い声でもなかった。

「はっはっはっ…ははっ…ははははははっ…あっははははっ…」

感情が感じられない笑い声だった。だが、それはスカリエッティの、心底からの嘘偽り無い笑い声だった。

しかし、何に対して笑っているのか、スカリエッティ本人でもわからなかった。

其之二十八：毒液の言葉（後書き）

何か感想のとこで次回は急展開って言っちゃったんですけど、今回の話は全然急展開じゃないですッ！　まさかナナシたちのところが思っていたより長くなってしまったので、次回こそが急展開ですッ！

何か夏休みに入ったのに、バンドの練習やら、ゲームやら（一番の原因ｏｒｚ）などで、なかなか時間取れないです…。
音無くんがいたら「多趣味過ぎだ！」って、突っ込みますよね。
まぁ、夏休み中にはシリアスパートが終わると思います。
早くギャグパートやりたいです、ネタが溜まりにたまってるんですよ…；

Ｐ．Ｓ．
スバルと、ストリートファイターのさくらってかなり似てませんか？
スバル
「真空ぅぅぅ…波動拳ッ！！！」

松岡修造
「全てを、出し切れッ！！！」

其之二十九：巡り会い　前編（前書き）

私が最も絶望している事は、
私が最も恐れている事は、
愛しい彼が泣いている事。

だから、私は導きの囀りを紡ぐ―蝋燭に火をつけるように。

其之二十九：巡り会い　前編

機動六課隊舎―。

隊舎の休憩所にて黒髪の少年―薫は一人、沈鬱な面持ちで休憩所に設けられた椅子に腰掛けていた。
普段沈んだ表情など滅多に見せない彼が、こんな表情を浮かべてしまうのは無理はなかった。

―…今日は、色々な事がありすぎた…。

薫は、思い返したくない今日という一日を自然と振り返ってしまう。

煉華という思わぬ存在が、この世界（ミッドチルダ）に現れた事により、紅麗とフェイトの仲が険悪なものになってしまった事。
紅麗がフェイトたちの目の前で、残虐なる一面を見せてしまった事。
そして、再会したルーテシアが敵だったという事。
どれも深刻な問題だが、薫にとって一番ショックだったのは、ルーテシアの事だった。
この世界へ来て、一番最初に出会った人物が彼女だった。出会ったその別れ際にまた会いたいと思っていたが、再会すると同時に管理局（じぶんたち）の敵である事を知ってしまった。

―…ルーテシアちゃんは…どうして、レリックなんか集めてるんだろ…？

薫の心中で、深い疑問が渦巻く。
彼女と会話した回数など指で数えるほどしかないが、彼女が悪い意味で私利私欲のために悪事を働くとも思えない。

それに、自分の問い掛けに対し、いつも無表情である彼女の表情に、悲哀と躊躇いの色が帯びているのがはっきりと見えた。
どうしてもレリックを集めなければならない事情でもあるのだろうか？
もしかしたら、彼女の弱味を握る人物でもいるのではないだろうか？

「―薫兄さんっ」

突然少年の声が薫の鼓膜を打ち、彼は少し驚きながら顔を上げた。
そこには、ティアナとスバルとエリオとキャロのフォワードメンバーの四人が、薫の目の前に立っていた。
どうやら彼女たちの存在すら気付けなかったほどに深く思案していたようだ。

「…どうしたの、皆？」

そう尋ねる薫は、エリオたちが何を言おうとしているのか何となく察していた。
彼らの表情がいずれも悲しみに染まりながら、？何か？を恐れるような雰囲気が醸し出されていたからだ。
そして、四人を代表しておずおずと口を開いたのはエリオだった。

「あの…紅麗兄さんの、ことで…ちょっと聞きたくて…」

―…やっぱりか。

彼の言葉を聞いて、薫は追い詰められたように内心で呟いた。
厳しくも優しいはずだった義兄が突然行った残虐行為を目にしたのだから、彼の事をよく知る人物に尋ねてくるはずだと薫は予想していた。

――…話す時が、来ちゃったか…。

薫にとって、最も訪れてほしくなかった時だった。
機動六課（ここ）の人間に、ずっと言うのを躊躇っていた真実。
自分がそれを話したら、目の前のエリオたちはどんな反応を示すだろうか？
自分たちの事を、受け入れてくれるのだろうか？
薫はそんな不安を抱えながら、話し始めた。
自分が、前の世界で紅麗から生き残る術――人を殺める術を教えられた事。
自分と紅麗が？麗（うるは）？という名の暗殺部隊に所属していた事。
そして、紅麗は優しい心を持つ反面、平然と人を殺せる残酷で歪んだ心も持っている事。

薫が一旦話し終えると、四人は紅麗が平然と人を殺せるという点で、信じられないと言わんばかりな驚愕の表情を浮かべた。
しかし、昼間に起こった紅麗の残虐行為を見た後なので、僅かに納得している表情でもあった。
だが、唯一キャロだけは残虐行為を見る前にはすでに彼女は気絶していたので、納得の表情なんて一切浮かべなかった。
ただただ、厳しくも優しい義兄が人を殺せるような残酷の心を持っている事が信じられなかったのだ。
薫はキャロたちの顔色を一瞥し、バンダナが巻かれた右の手首掴みながら、話を再開する。

「…だけどね。皆もわかっている通り…兄者は、本当は優しいんだよ」

薫はそう言うと、布を擦れる音とともにバンダナを外した。
?それ?を目にしたティアナとスバルとキャロは、表情を蒼白させた。
バンダナで隠してあった薫の右の手首には、刃物で切ったような傷痕が刻まれていたのだ。
ティアナは一瞬自傷行為（リストカット）かと思ったが、リストカットにしてはかなり大きくて、はっきりと見える傷痕だ。
つまり、自傷行為（リストカット）なんて生易しいものではなく、

「オレさ…本気で死のうとした時があったんだよ…」

自嘲げに微笑しながら力無く紡いだ薫の言葉に、ティアナたちは再び驚愕した。
普段無邪気で明るい性格である彼が自殺しようとしていたなんて思ってもみなかったのだ。
ただ、彼と一緒にいる事が多かったエリオだけは、以前に薫からその話を聞いていたので驚いてはいなかった。
だが、最初聞かされたときはティアナたちと同じリアクションをしていた。
悲しげに表情を曇らせる彼らの表情を見るのが辛いのか、薫は傷痕を見下ろしながらぽつりぽつりと話し続ける。

「孤児（みなしご）だったオレはさ、当然親も兄弟もいないし…孤児院にいても友達はできないし…一人でいる事がただ寂しくて、怖くて…怖くて、怖くて…イヤになってさ…」

だから孤独から溢れる恐怖感から、彼は孤児院を抜け出し、？楽になるために？一本のカッターを盗んだ。

一人にいる事が怖かった。

だが、死んだらどこに行くのかもわからず、鋭利な刃を手首に押し当てている時も怖かった。

だが、孤独（いまより）はきっと楽なはずだと信じ込んでいた。

楽になれると信じ込んでいた。

だが、それを止めたのが、偶然通りかかった紅麗だった。

彼は何も言わずに薫の頬を打った。

打たれた頬を押さえながら薫が見上げた先の紅麗の表情は怒っている表情も、哀れんでいる表情もしていなかった。

無表情だった。

自殺しようとしている他人をいちいち気に掛けないような無表情を浮かべていた。

だが、紅麗は血が溢れる薫の右の手首に一枚のバンダナを巻き、背を向けながらこう言った。

『―ついてこい』

その時の薫は涙を流しながら、生まれて初めて胸の暖かさを感じた。

当時の薫は、胸に感じたその暖かさを、上手く言葉にする事ができ

なかった。
だが、ただわかっている事は、今まで恐怖だけに囚われていた自分が、？怖くない？と感じた事だった。

話し終えた薫は再びエリオたちの顔を見ると、四人は共通して困惑の表情を浮かべていた。

―…まぁ…無理も、ないよね…。

現在、薫は紅麗の事を兄として慕っているが、一度彼を見限った事がある。
紅麗は、薫が恋心を抱いていた女の子―佐古下　柳をモルモット扱いしたのだ。
それによって紅麗を失望した薫は？麗？を抜け、義兄から離れた。
だが、紅麗を見限った後でも、彼が自殺を止めてくれたあの出来事が、毎日毎日薫の脳裏に引っ掛かっていた。
優しい心と、残虐な心―二つの真逆な心を持つ紅麗の事をこれからどう接していけばいいのか、迷ってしまうのは無理はない。

―オレだって、何週間も何ヵ月も迷ったのだから…。

「…もっと、早く話せばよかった…」

薫は思わず声に出して呟いた。
いずれ伝えるのならば、もっと早く伝えれば良かった。
エリオたちが紅麗の事を兄と呼び、兄として慕う前に伝えれば良かったかもしれない。
いや…そもそも自分たちは、機動六課（ここ）にいて良いのだろうか？
暗殺部隊に所属し、罪を犯した自分たちにとって、機動六課（ここ）は…機

動六課にいる人たちは…あまりにも無垢過ぎる。

―兄者は…どうして、ここにいる事を選んだんだろ…？

義兄だって、フェイトたちを見て、気付いていたはずだ。
彼女たちは、自分たちとは真逆な人間だ。
人一人殺していないような連中ばかりだ。
人を殺した事がある彼にとって、彼女たちに対して幾分か気まずい抵抗感を覚えていたのではないだろうか？
だが、それでも彼は、機動六課（ここ）にいる事を選んだ。
それは何でだろうか？
義兄は、ただで世話になるのは誇りに反すると言っていた。
プライドの高い彼だから、その言葉に嘘はない。
だが、それだけだろうか？
時空管理局に所属していれば、いずれ戦国の世に行ける方法を見つけられるからか？
自分に再び戻った炎の力を、役立てたいからか？
いや、そんな大それた事ではない。

―…兄者は…？暖かい居場所？が、欲しかったんじゃないかな…？

？麗？にはなかった、騒がしくて、楽しくて、暖かいものが機動六課にあった。
義兄がそれに惹かれたのではないだろうか？
彼はいつも沈着冷静で、クールぶってはいるが、彼は優しくて暖かな人間でもある。
自殺しようとした赤の他人を助ける事だってできた。
仲間を大切する事だってできた。
一人の女性を愛する事だってできた。
彼だって人間だ。

彼だって、一人になる事が怖かったはずだ。
だからこそ、紅麗は自分とは真逆なフェイトたちに抵抗感を覚えながらも？暖かな居場所？にいる事を望んだのではないだろうか？

◇

機動六課隊舎　屋上―。

二つの月と、無数の星々が淡く輝く青黒い夕闇の下で、金髪の女性―フェイトは屋上の手摺に手を添えながら静かに佇んでいた。
彼女は何をするわけでもなく、薫たちと同様の困惑な表情を浮かべながらただただ佇み続けていた。

夜風が吹き、彼女の長い髪が音も無く靡く。
夏を迎えようとしている今の季節の夜風はだいぶ暖かくなってきて、心地好いものだったが、フェイトは心地好さなんて一切感じられなかった。
いや、正確にはいちいち感想を抱く余裕なんてなかったのだ。

昼間に起きた？あの一戦？で、フェイトを含めて多くの者たちが負傷した。
フェイトとなのはは軽傷だったため、医務官であるシャマルの自慢の回復魔法ですぐに治療されたが、紅麗とヴィータとリインは重傷だったため、現在は聖王教会付属施設の病院に搬送されており、三人とも命に別状はないそうだ。

だが、それでもフェイトの気持ちは晴れなかった。

自分のせいで紅麗が怪我を負ってしまったという事もあるが、それ以上に紅麗が残虐行為を行った事と、煉華に行った暴力と暴言の出来事がずっとフェイトの心に深く深く刻み込まれていた。

煉華に対して、自分が最も嫌悪する言葉の数々を言い捨てた紅麗にずっと憤りを感じていたフェイトだったが、時間が経つにつれてその怒りが徐々に冷えていった。

そして、冷静になっていく思考の中でフェイトはずっと考えていた。

どうして、彼はそこまで煉華の事を酷く嫌悪しているのだろうか？

どうして、彼は平気で人を殺そうとする事ができるのだろうか？

いったい、何があったのだろうか？

わからない事だらけだった。

――…いったい、彼は――。

「こんばんわ」

突然聞こえてきた女性の声が、思案に耽っていたフェイトの鼓膜を静かに打ち、彼女の意識が現実に引き戻された。

背後から聞こえたその声は、とても優しげな響きを持っていた。まるで凍てついた心を暖かく包み込んでくれる灯火のような声だった。

フェイトはその声だけで悩む心が和らいでいくのを感じながらすぐに振り向くと、そこには全く見覚えのない女性が立っていた。

透き通るような肌に、うすい栗毛の髪、白の装いが誰よりも似合いそうな女性だった。

年齢は、自分より年上だろうか？　同い年や年下だったならば納得

できるかもしれないが、彼女から溢れ出す?大人の女性?の雰囲気が女性を年上だと強く思わせた。
そして、その美貌から作られる、暖かな声に見合ったその優しい微笑みは、同性でも顔を赤らめてしまいそうな美しさがそこにあった。
だが、一つだけ奇妙に思った事は、美女の服装だった。
彼女が身に纏っている衣服は、厚手のハイネックの長袖カットソーにロングスカートだった。
夏を迎えようとしている今の時期には、明らかに季節外れな服装だった。
フェイトは突然現れた美女に対して色々と疑問に思う事があるが、まず一つ目の疑問をぶつけた。

「あ、あの…どちら様ですか?」

何故真っ先に、一般人が隊舎(こんなところ)の屋上にいるのかと尋ねなかった辺り、フェイトが酷く混乱している証拠だった。
美女は、混乱した様子を見せるフェイトが微笑ましいのか、顔を綻ばせたまま言葉を紡ぐ。

「初めまして。?くれない?っていいます」

美女は?くれない?と名乗った。

―やっぱり知らない女性(ひと)だ…。

―でも、?くれない?って…どこかで聞いた事があるような―

「って、そうじゃなかった!!　あ、あなた!　ここは一般人が入って良い場所じゃないんですよっ!?　早くお家に帰りなさ～～～いっ!!」

思案に耽りそうなフェイトだったが、最も重要で当たり前の事を思い出し、?くれない?に人差し指を突き出しながら裏返った怒声を発した。
まるで夜遅くまで公園で遊ぶ子供たちをヒステリックに注意する近所のオバさんのような口調だった。
それに対し、?くれない?は先程から変わらぬ微笑みを浮かべながらこう言った。

「イヤです。そんな細かい事、どうでもいいじゃないですか。お話しましょ?　ここは風が気持ち良いですねぇ」

意外と強情だった。
だが、フェイトはめげなかった。
今日(こんにち)まで時空管理局に務め、今日まで阪神タイガースを応援し続けた彼女の心は?鋼の精神?なのである!

フェイトは先程より強い口調で叱責しようとした瞬間、たった一本の指が言葉を紡ごうとしたフェイトの唇に触れ、彼女の言葉を止めた。
?くれない?の人差し指が、フェイトの唇に触れたのだ。
しかし、触れらているはずなのに、まるで存在そのものがないよう

に、人差し指の感触がなかった。だが、炎の熱気のような暖かな感触だけは確かに存在していた。
フェイトはそれを感じつつも、恋人にやるような仕草を年上（かと思われる）美女にされて、思わず顔を赤らめながら口を噤んだ。
一方、そんなフェイトを見て？くれない？は悪戯っぽく、それでいて無邪気な笑顔を浮かべると、すぐにその表情を引き締めてながら言葉を紡ぐ。

「あなた…ここでずっと悩んでいたでしょ？　だから、私、黙って見てられなくて…。少しでも、力になってあげたいんです。話してみてください」

？くれない？はフェイトの唇から指を放しながら、もう一度微笑んだ。
フェイトは、何故見ず知らずの人間に対してここまで親切に接してくるのかと少し不審げに思い、自分の悩みを話しても仕様がないとも思うが、？くれない？のその微笑みから、とても頼もしく、安心できるものを感じた。
彼女だったら良い答えを得られるかもしれない。
フェイトは僅かに逡巡した後、俯きながらぽつりぽつりと話し始めた。

「私…大好きな人と、ケンカしちゃったんです…。その人は普段、とても優しい人なんですけど…。今日…その人の？悪いところ？―って言えばいいのかな…それを見てしまったんです…。何だか…全く別の人格が二つあるような…。だから…彼に、何があったんだろうって…ずっと疑問に思ってて…」

今にも消えそうな儚い声だったが、？くれない？はしっかりと耳を傾けていた。

「…あなたはその人の事を、今でも大好きなんですか？」

？くれない？は真摯な表情で尋ねると、フェイトは肯定も否定もしなかった。

「…よく、わからないです…ただ、彼の事が知りたくて…」

すると？くれない？は不安がっているような、困っているような、悲哀を帯びた苦笑をした。

「あの人は強情で断固ですから…自分の事をなかなか言いません」

「え…？」

今まで俯いてフェイトはすぐに顔を上げながら、？くれない？の顔を見た。

まるで紅麗の事をよく知っているような口ぶりではないか。

フェイトは問いただそうとした次の瞬間、彼女の顔を見つめていた？くれない？が夜の景色に顔を向けながら言葉を発した。

「彼は四歳の頃、邪悪なる心―？呪われし炎？に取り憑かれているされ、里の民たちから？呪いの児？として酷い扱いを受け続けた」

「―っ！！？」

フェイトは目を見開いた。

突然？くれない？が語った紅麗の過去もそうだが、今まで優しげな笑顔や真摯な表情を浮かべていた？くれない？が、この時の横顔と口調が無感情なものになっていたからだ。

「実の弟を刺して牢獄へ幽閉されたあと、彼の里に戦が起き、その際に自分の無力さ故に、愛する母を見殺しにしてしまった。それから遥か先の未来へと流され、そこで新たな母と出会うも、その六年後に母を人質に取られ、彼は人を殺すための戦闘訓練を余儀なくされた。」

紅麗の過去について、機械的な口調で語り続ける？くれない？。

フェイトは彼女の豹変に圧倒されながらも、彼女の言葉に耳を傾けていた。

そして、知った。

彼が１６歳のとき、彼の義父である森光蘭が紅麗の感情を完全に砕き、忠実な番犬に仕立て上げるために、一人の義娘を近付けさせ、愛し合わせ、彼の目の前でその娘を殺した事。

それがきっかけで、彼は弟を刺したときの冷酷さが、さらに増幅した事。

彼の周りにいた何人もの仲間が死んでいった事。

紅麗が煉華を憎んでいるのは、自分と死んだ恋人のＤＮＡから、冒涜的に造り出された事。
そして、彼の冷酷さはいつまでも変わらず、彼の不幸はいつまでも留まらず、彼の敵も彼の味方も次々と次々と屍と化していった事。

？くれない？が語り終えたとき、フェイトの瞳から大粒の涙が溢れていた。

「うっ…紅、麗っ…っ…紅麗ぃ…ううっ…」

フェイトは幼児のように、大好きな人の名前を呼びながら泣き続けた。
この世界へ来るまでの彼の過去が、あまりにも残酷で悲しかったからだ。
自分が何も知らずに、勝手に彼を高く印象付けて、失望し、怒鳴り散らしたからだ。
フェイトは、自分が背負っている悲しみと、彼が背負っている悲しみが同じだと思っていた。
だが、違った。
母を失った過去だけは同じでも、彼は誰よりも多くの者たちを失った。
両親を失った。
仲間も失った。
愛する人も失った。
死んでしまいたいと思うほどのたくさんの悲しい過去を、紅麗は今日までずっと背負い続けているのだ。

悲しみの気持ちが同じなんて冗談じゃない。
彼の方がずっとずっと辛い過去を歩んでいるではないか。
だから、彼はあんなにも歪んでしまったではないか。

「……」

俯きながら嗚咽を漏らし続けるフェイトを、？くれない？は悲哀の色を帯びた表情で見下ろしていた。
やがて、泣いているフェイトの姿を見つめ続ける事が耐えきれなくなり、再び夜の景色に顔を向けた。

「…彼は、幼い頃からずっとずっと辛い目に遭ってきた…。私よりも、あなたよりも…誰よりも」

そう語る？くれない？の表情は相変わらず悲しみに染まっていた。
だが、その表情になっているのは泣いているフェイトの姿だけではなく、辛い過去を背負い続ける紅麗に悲しんでいるだけではなかった。

「？彼は泣いています？。幼少の頃のままの姿で…膝を抱えながら泣いています。本当は助けてほしいはずなのに、誰かがそばにいてほしいはずなのに、変に強がっちゃって…我慢しながら、ずっとずっと泣き続けています。彼が泣き止んだ事なんて…一度もありません」

そして、？くれない？は再びフェイトに顔を向けた。だが、その表情には悲しみの色はなく、厳しさを湛えた冷たい表情だった。

「あなたは…彼の過去を聞いてもなお、彼を愛することができますか？　彼の冷酷な心をも、受け入れることができますか？」

？くれない？は冷たい口調で問い掛ける。
フェイトの心を抉るような、厳しい問い掛けだった。
だが、その返答は？くれない？が思っていたより早く返ってきた。

「…私は、紅麗の事が大好きですっ…」

フェイトは嗚咽混じりに断言すると、毅然とした目付きで？くれない？を見つめ返し、こう言い放った。

「けど…冷酷な心まで受け入れることは、できませんっ…！」

さっきまで泣きじゃくれていた少女のものとは思えない、力のある言葉だった。
それに対し？くれない？は依然として冷酷な表情を崩さなかったが、フェイトは強い口調で続けた。

「辛い過去があったから、自分が不幸だからって…人を殺していい

理由になるんですかッ？　一人の女の子を傷付けていい理由になるんですか！？　私はそんなこと、絶対に受け入れませんッ！」

「…では、彼の心の全てを受け入れられないのなら、彼を愛することができないということになります。？その人の全てを受け入れる？―愛するというのは、そういうことです」

「違うッ！　全てを受け入れるだけが、愛することじゃないッ！悪いところがあれば、それを指摘して、直すということも愛することじゃないんですか！！？」

フェイトがそう捲し立てると、？くれない？は口を噤んだ。だが、その冷たい表情には一切の変化がなかった。
一方、フェイトは？くれない？を見据えたまま、先程とは真逆な、穏やかな口調で言葉を紡ぐ。

「それに…紅麗は決して冷酷じゃない。彼はただ、？仮面？を被っているだけなんです」

フェイトはこれまで、幾度も紅麗の冷酷なところを見てきた。
シグナムと対峙したとき、人を殺そうとしているとき、煉華を傷付けたとき。
フェイトは、紅麗の冷酷な心は彼のもう一つの人格のようなものだと、否定しながらもそう思っていた。
だが、？くれない？の話を聞いて、その考えが改められた。彼の冷酷な心は、辛い過去によって作り出された？仮面？なのだ。
それは、彼の？本当の心？を覆い隠すためでしかない、？偽りの心

?だ。
もし、?冷酷な心?が彼の本当の心ならば、彼の事をよく知っている薫が兄として慕うはずがない。
暴挙を起こしたなのはからティアナを守るはずがないし、なのはを叱るはずがない。
何より、今日まで皆で歩んできた楽しい日常が、起こるはずがない！

「私は、あなたの言葉を聞いてやっと迷いが消えました…。彼が、とっても優しいという事…そして、紅麗の冷酷な心は―ただの?仮面?でしかないという事を、気付くことができました。なら、後は…私が…私たちが、その?仮面?を外すだけです！」

「……」

力のある言葉を言い放ったフェイトを、じっと見つめていた?くれない?は、

「…よかった」

と、安堵するように嬉しく微笑んだ。

「うん…。あなたなら…紅麗を任せられる」

彼女の微笑みには安堵と喜びの感情があったが、心中では羨望の感

情がほとんどだった。

フェイトが導き出した?答え?を、?くれない?もまた導き出していた。

だが、それは…全てが過ぎ去った後だった。

それまで?くれない?は、?全てを受け入れる?という?答え?を選択していた。

?くれない?がまだ?生きていた頃?、彼女が初めて紅麗と出会った瞬間に、彼から感じた印象は?泣いている事?だった。

当時の彼は無表情という名の?仮面?を被っていたが、?くれない?はその?仮面?の先にある?泣き顔?というものを彼から感じ取っていた。

?くれない?は生来の保護欲から、彼を泣き止ませたい、彼に笑ってもらいたいと夢を描いた。

そして、ある日―。

『見て、紅麗！　音遠(ねおん)さんに、お花を摘んでいただいたの！』

やり方なんて極単純だった。

ただ自分から積極的に接していれば、彼はおのずと心を開いてくれると思っていた。

そのために最初に行った事は、自分が大好きな花を彼に見せる事だった。

『ほら、綺麗でしょ?』

?くれない?は微笑みながら薔薇の花束を紅麗に見せた。だが、次の瞬間、紅麗は無表情のままその花束を叩き落とした。

『花は嫌いだ。すぐに散る…弱いからだ』

冷然に言い放つ紅麗に対し、?くれない?は柔らかく微笑んだ。だが、次の瞬間、すぐに厳しい表情になると何の躊躇いもなく彼の頬を打った。

『花はその儚い一瞬を、美しく咲く事で精一杯生きています！　あなたにその命を摘み取る資格はありません！』

一方、打たれた頬を押さえていた紅麗は初めて、感情のある表情を見せた。

『…感傷的な女だ』

だが、怒りの感情は一切なかった。それどころか、彼は微笑を浮かべていたのだ。

『女に叩かれた事など、初めてだよ…遠き地にいる母上にすら、手を上げられた事はない』

それに対し、?くれない?もまた笑顔を浮かべた。

『私も男の人を叩いたの、初めてよ！　お互い?初めての人?だね、紅麗っ！』

?くれない?は嬉しかった。

今までずっと無表情だった紅麗が、やっと笑ってくれたからだ。そして、?心中の紅麗?が少しだけ泣き止んだからだ。

それから日々が過ぎていく中で、?くれない?も紅麗も、その心が少しずつ変わっていった。

?くれない?は紅麗の事に対して恋愛感情を持つようになり、紅麗もまた?くれない?に恋愛感情を持つようになりながら、笑顔を浮かべる回数がだんだん増えていった。

?くれない?は嬉しかった。

紅麗が笑顔を見せるとともに、彼がだんだん泣き止んでいくのを感じられたからだ。

このまま何事もなく彼と過ぎていけば、紅麗はいつか満面な笑顔を浮かべるのが当たり前な人間になっていき、泣き止んでくれると確信した。

だが、?くれない?が描こうとしたその夢は、叶うことはなかった。

紅麗と?くれない?が愛し合い、彼がずっと隠し続けた?感情?を見せ始めた時を見計らって、彼らの義父である森光蘭はついに実行した。紅麗が愛するもう一人の母―月乃の体内に埋め込まれている遠隔性の爆弾。それが、?くれない?の体内にも埋め込まれていた。

何故か？
それは、紅麗が逆らわないように、紅麗を忠実な番犬として調教するために、森光蘭が全て行ったのだ。
そして、彼が押したボタン一つで、？くれない？の左胸が赤く弾けた。まるで、紅色の薔薇が儚く散った様のように。

『紅ィィイイイィィイイィィィ！！！』

紅麗は悲鳴をあげ、左胸から夥しい鮮血を流す？くれない？を直ぐさま抱き上げた。
？くれない？は愛する人に抱かれながら、薄れてゆく意識の中で涙を流す紅麗を見上げる。

―…ああ、紅麗…こんなに、泣いちゃって…。

今の彼は？無表情の仮面？など被っていなかった。
今、泣いている彼は、有りのままの――本心の姿だった。

―ようやく…泣き止み始めたのに…また、泣いちゃってる…。

『ははははははははっ！　喜べい、紅麗！　この女がどうなろうと関係ないのだろ！？　イヤな役はこの父が引き受けてやった！！　礼を言え！！』

そんな耳障りな男の笑い声を聞きながら、？くれない？は涙を流し続ける紅麗の頬を触れる。

『一瞬が美しい花…になんか…なりたく、ないよ…』

彼女はこよなく花を愛していた。
だが、この時だけは愛する花にはなりたくなかった。

『どんなに醜くなってもいい…。ずっと…あなたといたかった…やさしい…あなた、と…』

そう言い残し、？くれない？は息を引き取った。
命を失った愛する者の亡骸をしばらく抱き寄せていた紅麗は、やがて？くれない？をゆっくりと床に横たわらせると、彼女の最期の願いを叶えるために、実行した。

『お前の望み―叶えよう、紅…。たとえ人の道を外れたとしても…共に永遠を歩もう』

炎術士である紅麗の炎の型は、『不死鳥』。
人の霊魂を、己の炎と化す魔性の炎。
紅麗は、それを生まれて始めて使用した。
だが、それは冒涜的行為だと判断しにくいものだった。？くれない？は、どんなに醜くなっても愛する者と一緒にいたかった。
紅麗は、愛する者の命を悪魔に奪われるくらい、ならせめて我が炎に変えてしまった方がずっとずっと良いと判断した。

それが二人の?答え?。
周りから見れば歪んだ愛かもしれない。だが、それと同時に、何よりも美しい愛だった。

そして、?くれない?は紅き炎の化身となった。そんな愛する者の姿を見て、紅麗は一切の嫌悪感を抱かずに、高らかに告げた。

『お前は今、我が呪われし炎により、炎の魂となった…。契りを交わそう…お前を死へと追いやった忌まわしきこの顔を焼いてくれ…!』

炎の肉体となった?くれない?は、その炎の手で烙印を押すように紅麗の顔を触れた。

?くれない?は、幸せだった。

人ならざる姿になったが、また大好きな人と一緒に人生を歩める事に。
そして、自分が彼のそばにいながら、また彼を泣き止ませ、また彼に笑ってもらおうと?くれない?は再び夢を描いた。
だが、彼女はその時から、相手の間違ったことを指摘し、それを正すという気持ちがいつの間にか、消え去っていた。

?くれない?は紅麗と共に過ごしている中、彼は多くの人間たちの心と命を?奪ってきた?。
狂笑(わら)いながら人を殺した。
再会した実の弟も殺そうとした。
そして、多くの人間たちを傷付けた。

?くれない?は、本当は嫌で仕方なかった。

紅麗には、人を殺してほしくなかった。

弟と喧嘩してほしくなかった。

紅麗と自分のＤＮＡを元に作り出された煉華という少女すら、傷付けてほしくなかった。

数え上げれば、切りがない。

だが、?くれない?は紅麗を止める事ができなかった。いや、しなかったと言った方が正しい。

彼は、今までずっと辛い目に遭ってきたのだ。だからこそ、そんな大好きな人の良いところも、悪いところも受け入れる――それが彼女なりの?愛する?ことなんだと思っていたからだ。

だが、それは?言い訳?でしかなかった。

?くれない?の本心は、炎の化身でしかない醜い自分をそばにいさせてくれた強い感謝の気持ちが?義務感?となって、彼に対して強く言えなかっただけなのだ。

その結果、?心中の紅麗?は一向に泣き止まなかった。

弟と接しているときだけ、紅麗は何度か微笑を浮かべたことがあったが、心中で?泣き止んだ?ことなんて一度もなかった。

もし、自分が?義務感?に囚われずに、昔のように彼を叱責していたら、大きく変わっていたかもしれない。

人を平気で傷付けたり、殺したりすることをしなかったかもしれない。

幼少の頃のままの姿で膝を抱えながら泣き続けている彼が、泣き止んだかもしれない。

そして、彼は楽しく笑っていたかもしれない。

だが、全て遅すぎた。

今の自分は、炎の化身としても死んだ、ただの霊魂。
霊魂や怨念を見ることができる彼なら、自分の声が聞こえるかもしれない、自分の姿が見えるかもしれない。
だが、義務感に囚われて、間違いを正すことをしなかった自分が、彼に会う資格はない。
彼は今でも、?くれない?を愛しているだろう。ずっと彼を陰で見守り続けた?くれない?はそれを感じ取っていた。
だが、自分には会う資格はないし、そもそも?自分はもう死んでいるのだ?。
正直あまり良い気分ではないが、彼には自分の事を忘れて、別の女性と幸せになってほしい。それが?くれない?の本心だった。
そして、彼を幸せにできる女性こそが、フェイトだった。
彼女と接しているとき、紅麗は笑顔を浮かべ、少しずつ泣き止み始めている事を、彼らを見守っていた?くれない?は知っている。
そして、フェイトの強い言葉を聞いて、?くれない?は彼女なら任せられると確信した。

「…フェイトちゃん。絶対に、紅麗と一緒に幸せになってね」

優しい笑顔で紡ぐ?くれない?の言葉には、他人行儀な敬語がなくなっていた。その口調は、妹に対する姉のような口調だった。

「あなたは、?私のように?ならないでね。いや、ならない、だね…。私には?見えない?。?私と同じになる?あなたの姿が…」

?くれない?はさらにフェイトに言葉を紡ごうとしたが、喉の奥に封じ込めた。
これ以上、死者が口出すべきじゃない。
いや、言わなくても、彼女(フェイト)はちゃんとやってくれる。
だから、?くれない?はフェイトに言おうとした言葉の数々を、彼らの幸せを祈るように心の中で紡いだ。

―私ができなかった事を…いや、しなかった事をあなたがしてあげてね…。

―彼が間違いを犯していたら、叱ってあげてね…。

―彼が泣いていたら、抱き寄せながら悲しみを分け合ってね…。

―彼が笑っていたら、共に喜びを噛み締めてね…。

―彼を泣き止ませて…笑わせて…一緒に幸せになってね…。

―不安がらずに…紅麗に自分の想いを全力でぶつけて…。

―大丈夫…きっと、届く。

「あなたのお母さんだって…?あの時?は応えなかったけど…ちゃんとあなたの言葉は届いていたから」

「えっ…!?」

?くれない?の言葉に、フェイトは硬直しながら目を見開いた。

フェイトは問いただそうとした次の瞬間、？くれない？が優しい微笑みを浮かべるとともに、強い風が吹いた。
心地よい暖かな風だったが、その風量にフェイトは堪らず目を瞑った。そして、再び彼女が目を開いた時には、？くれない？の姿はどこにもなかった。
そして、いつの間にかフェイトの足元には、紅い炎の羽根が落ちていた。

其之三十：巡り会い　中編

聖王教会付属病院　午前1時―。

窓から漏れる月明かりだけが照らす薄暗い病室の中で、黒髪の青年は目を覚ました。

目覚めて早々、青年―紅麗はベッドの上で視線を巡らす。

自分には全く見覚えがない部屋だが、鼻腔に感じる少し馴染みのある消毒液の匂いと複数のベッドが置かれている閑散とした部屋から、ここは機動六課の医務室か、どこかの病院の病室だろうと判断できた。

だが、紅麗はこの場についての思案はすぐにやめ、自分が気絶する前の出来事を思い返す。

前の世界で殺したと思っていた男と遭遇し、その男を己の左手で貫き、そのまま火炙りの刑を処すように燃やした事だった。

あの時は、薫もいた。ティアナたちもいた。

蛭湖もいた。

はやてもいた。

そして、フェイトもいた。

残虐行為を行っている紅麗を見たときの、彼女たちの表情が、彼の脳裏に強く焼き付いている。

薫と蛭湖はともかく、それ以外の者たちは顔を蒼白させながら、信じられないものを見たような目で呆然と見据えていた。

無理もないだろう。

シグナムに対して冷徹な態度は取ったことはあるが、火影式魔法の

非殺傷設定を解除したり人を殺そうとした事など、この世界で一度もしていない。

？人を殺そうとした紅麗？――それが、彼女たちにはあまりにも衝撃的だったようだ。

―だが…私にとっては、当たり前だ…。

それは、以前から彼の事を知っている薫も蛭湖も同意できるだろう。

向こうの世界は、殺し合いが当たり前な世界なのだ。

そんな世界だからこそ、眼前に立ち塞がる敵は容赦無く焼き払ってきた。

だが、この世界（ミッドチルダ）は――時空管理局は殺害を御法度としている。

警察と同じようなものだからそれは当然なのだが、今まで殺しを当たり前としてきた自分にとって幾分か違和感を覚えた。

しかし、？郷に入っては郷に従え？だ。

それに、次元漂流者としてただで世話になるより、再び甦った炎の力を何かに役立てたいという想いもあった。

それから自分は？麗・首領？としてではなく、？一人の機動六課局員？として生きてきた。

―だが…駄目だった…。

自分は、再び殺しを当たり前とする？麗・首領？に戻ってしまった。

紅麗はベッドの上に仰向けになったまま、自分の左手を顔の前に掲げる。
染みも汚れもない手だった。
しかし、数時間前までは敵の血で染まっていた左手だ。

―…いや、今でも血に染まっている…。

―私は…この手で何十何百人もの人間を殺してきた…。

紅麗はその血（つみ）に染まった左手を、仮面を填めるように自分の顔の上に置いた。

―やはり私には…？平穏？は許されないらしい…。

それは、人生で二度目の呟きだった。

紅麗はかつて、二人目の母を失った絶望感から戦う事を諦めた時があった。
しかし、それは勘違いで、その母は実は生きていたのだが、それを知らぬまま勘違いしていた紅麗は戦う事を――誰かを失う事を恐怖した。
そして、このまま戦う事をせず、森光蘭から身を隠しながら？平穏？に暮らすのも一興だとも思った。

だが、?災厄?は彼を逃がさなかった。

?裏・麗?の一員が、紅麗の所在を探り当ててきたのだ。
その時も、紅麗は戦おうとしなかった。
しかし、仲間が傷付けられた姿を目の当たりにした瞬間、憎き男の顔と言葉を思い出しながら、?奪われる事?に強い嫌悪感を抱いた。
そして、紅麗は再び戦う決意をした。それと同時に、?オレは守るために戦う!?と言う異母弟の言葉を不快に思いながらも同意した。
そして、あの言葉を言ったのだ。

あの時は冷徹な笑みを浮かべながら言ったが、今の紅麗は笑みなど浮かべていなかった。
?平穏?を許されない自分を滑稽だと思いながら、自嘲に笑うことすらできなかった。

―笑えるはずがない…。

「?あの日々?は…本当に…ずっと続いてほしいと思っていたんだぞ…」

紅麗は、機動六課で過ごした日々を思い返しながら自分の気持ちを吐露した。

意味不明でふざけた事を言ってくるヴァイスや、はやて。

兄として慕ってくるエリオたち。

教え子たちの成長を願いながら訓練メニューを一緒に考える、なのは。

そして、可笑しくて可愛い、自分と同じ家族思いのフェイト。

彼女たちと過ごした日々は、心の底から楽しく感じられた平穏な日々だった。

前の世界でそんな日々を送った事があまりなかった自分にとって、少し衝撃的だったが、とても安らげる楽しい日々だった。

だが、それも終わりだ。

人を殺そうとした自分を、彼女たちが受け入れてくれるはずがない。

嫌悪感を抱いて当たり前だ。

実際フェイトは、煉華を傷付けた紅麗に向けて強い嫌悪の言葉を叩きつけてきた。

そこまで思案していた紅麗はある事に気付いて、心中で自嘲げに呟く。

――…何を、今さら…。

いつも通りじゃないか。

自分に?平穏?は許されず、?災厄?が降りかかってくるなど、幼少の頃からずっとそうじゃないか。

―もはや、これは…私の運命(さだめ)だ…。

この世に産声をあげたその瞬間から、自分はこうなる運命だったのだ。

自分が人を殺そうとし、周りの人間が離れていき、?平穏?の日々がぶち壊される事も―。

フェイトが、自分に嫌悪感を抱く事も―。

全て、運命の一つにすぎないじゃないか。

その瞬間、紅麗は何か違和感を覚えた。

自分が心中で論じた事の中に、何か重要な事を見落としている気がする。

―何かが、引っ掛かる…。

紅麗はその?違和感?について熟思しようとした時――何かが聞こえてきた。

「……?」

紅麗は思考を中断し、上体を起こしながら耳を澄ませる。
あまりにも小さな音で最初は気付かなかったが、よく聞き澄ましてみると、それは少女の声だった。
その少女の声が、笑い声を紡いでいる。
こんな真夜中の時間帯に聞こえてくる少女の笑い声は不気味に思えてくるかもしれないが、その楽しそうな明るい笑い声が、不気味さを払拭してくれた。

「……」

その笑い声に対して、紅麗は何を思ったのだろうか。
少女の笑い声に引き寄せられるかのように、紅麗はベッドから下り、声の正体を探るために歩きだした。

其之三十：巡り会い　中編（後書き）

書いてたら思っていたより長くなってしまったので、今回の話は中編として投稿しました。

感想のとこにも書きましたが、前回の紅の最後の言葉でかなり戸惑ったかと思いますが次回の話でその意味が明らかになります。

それではっ！

其之三十一：巡り会い　後編

少女の声を辿っていた紅麗は、いつの間にか病院の屋外に出ていた。彼の目の前に広がる光景はもちろん彼にとって見覚えのないものだったが、紅麗は意に介さずにレンガ畳の道を歩いていく。

だんだん少女の笑い声が近くなっていき、やがて紅麗は足を止めた。

彼の視線の先には、草木に囲まれた浅い湖があった。月の光に照らされた湖の水面が淡い輝きを放っている。

だが、紅麗が驚きの目で注視したのは、その湖にいる一人の少女だった。

今までの笑い声の正体は、彼女だったのだ。

少女は長いスカートを膝の上までたくしあげ、楽しそうな笑い声をあげながら踊るように浅い湖のほとりで遊んでいた。

しかし、紅麗が驚かされたのは、その少女の容姿だった。

あどけない顔立ちに、赤い瞳、長い金色の髪―少女の容姿がフェイトにそっくりだったのだ。

さすがに年格好は離れているが、もしフェイトが幼少の頃の姿になったら、あの少女と見分けがつかなくなるだろう。

やがて紅麗は、少女の他にもう一人の人物がいる事に気が付いた。

湖の前に置かれているベンチの上に、長い黒髪の女性が腰掛けていた。

髪の色が違うが、あの少女の母親だろうか？

後ろ姿しか見えないが、水遊びをする少女を見守る女性の背中が、紅麗が愛する二人の母のように見えた。

「……」

紅麗は表情を変えずに再び歩を進め、女性が座るベンチの隣に立ち止まる。

すると、女性は紅麗の存在に気付き、彼に声をかけてきた。

「こんばんわ」

女性の口から紡がれたその言葉は、慈母のような優しげな口調だった。

同時に、過ちを背負い続ける罪人のような悲しい口調でもあった。

「……」

紅麗は女性の言葉に応えるように会釈する。

そして、気付く。

目の前にいる女性も、湖で遊ぶ少女も――？死者？であることを。

さらにこれは予想だが、女性の正体は、フェイトを生み出した張本人―プレシア。

そして、少女の正体は、フェイトのオリジナル―アリシア。

数時間前にフェイトから自分自身についての過去を聞いていなければ、彼女たちの正体など全く予想ができなかった。

しかし、フェイトから話を聞いた後で、フェイトと同じ容姿を持つ少女と、その母親と思われる女性を目の当たりにすれば予想がつく。

だが、あくまで予想なので、紅麗は一応確認する。

「―あなたは、もしや…フェイトの母、なのですか？」

紅麗は敬語を使って尋ねる。

それは嫌味として気にくわない相手を挑発する口調ではなく、母親に対する敬意を払うような口調だった。

一方、尋ねられた女性は一瞬目を丸くすると、悲しげな苦笑を浮かべた。

「あの子の母、ね…。そうであるかもしれないし、そうでないかもしれないわね…」

女性は曖昧に返す。

それはどういう意味で答えたのだろうか？

自分の身体から産まれたわけでないが、一応自分の手で生みだしたのだからフェイトの母親という事になるのかと悩んでいる―という意味だろうか？

それとも、母娘（おやこ）の関係だと言えなくもないが、自分には母親としての資格はない―という意味だろうか？

どちらにしろ、その口ぶりから―この女性は、プレシア・テスタロッサ本人だという事の証明だった。

プレシアは紅麗から視線を外し、湖で遊びながら無邪気な笑い声をあげる娘(アリシア)の姿を見つめる。

「私は…可愛いあの子(アリシア)をすごく溺愛していた。それは、もう…自分の命よりも大切な存在よ。あの子のためなら、何だってするほどに」

突然話題を変えたプレシアは、自分が愛娘に対する愛情について語った。まるで自慢するような言葉だったが、それにしては彼女の声に翳りが宿っていた。

「だけど…それを失った時の絶望感は計りしれないほどだった…。だから、私は?狂った?…狂ってることを全く自覚しないまま…」

プレシアはそう言った瞬間、紅麗は何かの図星を突かれたように無意識に左目に手を伸ばした。正確には、左目の周りに刻まれた火傷の痕―にだ。

そんな彼の様子に気付いているのか、気付いていないのかプレシアは続ける。

「私は必死に探したわ…。どんなに信憑性もない、非科学的なものであろうと…どんなに非人道的なものであろうと…可能性があるな

ら何の迷いもなく賭けた…愛する娘を取り戻すために」

「…その賭けの一つが、クローン技術？」

紅麗は口を挟んだ。

本来なら黙って最後まで話を聞こうとしたが、何故か言葉を発していた。

一方、プレシアは嘆息しながら彼の言葉を首肯した。

「ええ…。その時は死者を蘇生させるなんて、夢のような方法を見つけられなかったからね…。なら、アリシアのクローンを作って、その子をアリシアと思って育てればいいと思った。…でも、ダメね…。いくら記憶を与えても…アリシアはアリシア。フェイトはフェイト。見た目は同じでも…性格も、一つ一つの仕草とかが全然違うもの…」

それはアリシアになれなかったフェイトを失望している言葉ではなく、フェイトを無理矢理アリシアの代わりにしようとした自分を責める言葉だった。

「だけど…私は、割り切ることができなかった…。その上…腹いせに虐待なんかしちゃって…」

エスカレートしていく虐待だけではない。

最後には？正直な気持ち？を以て、フェイトに雑言を叩きつけてし

まったのだ。
?当時の?プレシアはその事について全く罪悪感を抱かなかった。
フェイトに対する自分の言動が全て当たり前だと思っていたからだ。
しかし、虐待されても尚、雑言を叩きつけられても尚、フェイトはプレシアを嫌うことなく、彼女を母として愛し続けた。
そして、フェイトは言う。

『わたしは…世界中の誰からも、どんな出来事からも、あなたを守る。わたしはあなたの娘だからじゃない…あなたが、私の母さんだからっ！』

その言葉を聞いた瞬間、今までフェイトの事を?アリシアの偽物?として嫌悪していたプレシアの心が一瞬――ほんの一瞬だけ揺らいだ。
どんな仕打ちを受けようと、それでも母として見てくれるフェイトに今さら情が移ってしまったのだろうか?

しかし、その葛藤は一瞬で消え去り、プレシアはフェイトの言葉を簡単に拒絶してしまった。

そして、プレシアが虚数空間に落ち、狂った心を以て死した愛娘を追い求めた生が、幕となった時だった。

プレシアの純粋且つ歪んだ想いが通じたのか、彼女は愛娘（アリシア）と再会することができた。
生体ポットに入った物言わぬ屍ではない。
表情を浮かべることも、声を発することもできる娘の姿だった。

プレシアは嬉しかった。

たとえ霊魂だけの存在でも構わない。

愛する娘と会話ができ、これから一緒に過ごせる事がプレシアにとって、この上ない幸福だった。

しかし、

「私はあの子に怒られたわ…私がやってきたこと―フェイトにしてきたこと、全てをね…」

アリシアは死んだその時から、魂だけの存在になってプレシアのそばに居続け、見守っていたのだ。

だが、アリシアが目にしたのは、優しい心から歪んだ心に変わった母の姿。

そして、歪んでしまった母が行ったフェイトへの虐待も、フェイトへの雑言も見てしまったのだ。

だからアリシアは、優しかった母（プレシア）に激怒した。

自分が死んだせいで母が狂ってしまった―その事実を知りながらも、決して納得せずに激怒した。

自分は大切な人を失ったから、自分は不幸だからだと―そんな？こじつけ？があったからといって、人を傷付けて良い理由には絶対にならないからだ。

「あの子に怒られた瞬間…何だか、急に罪悪感が込み上げてきてね…」

プレシアは、ようやく罪の重さを自覚した罪人のような口調で語り続ける。

フェイトにしてきた言動に全く罪悪感を覚えていなかったプレシアだったが、娘に叱られた瞬間にやっと罪悪感を感じ取れた。

それを感じ取る事ができたのは、アリシアの言葉だけではない。

どんなに傷付けられようが、母として愛し、護ると言ってくれたフェイトの言葉のおかげでもあった。

フェイトの言葉だけだったから、プレシアは拒絶したのだ。

アリシアの言葉だけだったら、プレシアは納得しなかっただろう。

アリシアとフェイト――二人の言葉があったからこそ、プレシアは己の狂気から解き放たれた。

だが、それは全てが終わった後だった。

何とも皮肉な話か。

あれほどフェイトの事を酷く嫌悪していたのに、今さら自分の間違いに気付き、後悔してしまうとは。

「死んだ私には…あの子（フェイト）に謝る声も…あの子（フェイト）を抱き寄せる身体もない…。いや、そもそも…あの子を傷付けた私に、そんな資格はない

…」

プレシアはずっと後悔している。

自分が当たり前のようにしてしまった虐待や雑言が、強い後悔（トラウマ）となり、今でもそれを背負い続けている。

そして、この傷心は…決して消えることはない。

愛娘（アリシア）に許され、愛されても消えなかった。

仮に愛娘（フェイト）にも許され、愛されたとしても消えることはないだろう。

いや、消えてはならない。

愛娘たちに許されても、全ての人間に許されても、神に許されたとしても、自分で自分を決して許さない。

この傷心は、自分の罪として来世まで背負い続けるのだ。

「フェイトを…アリシアのクローンとしてではなく、フェイトという一人の女の子として…我が子として愛せればよかった…。私の勝手な都合でクローンとして生み出されて…何の罪もないあの子を苦しませてしまった…」

「……」

この時、紅麗はプレシアが自分に何を言いたいのか理解する事ができた。
そして、彼女が?それ?を言う前に紅麗はこう言った。

「…煉華(やつ)の存在は、紅への冒涜(かのじょ)だ」

紅麗はプレシアから目線を外しながら言葉を紡ぐ。

「私は奴の存在を認めるわけにはいかない」

「…それは、あなたが決めることなの?」

それに対し、プレシアは紅麗を見上げながら咎めるような、諭すような口調で反論した。

「あなただってわかっているはずよ。煉華(あのこ)は、望んであなたと紅のクローンとして生み出されたわけじゃない。他人の勝手な都合で生み出されたのよ。それをわかって言っているの?」

「奴が望んでいなくても…全て森光蘭の都合で生み出されていたとしても…愛する彼女を汚し、侮辱し、冒涜する奴の存在を、私は決して認めるものか」

「だから…一人の女の子の存在の認否を、あなたが決められることなの? あなたには…いや、誰にもそんな権利はないわ」

「貴様なら、わかるはずだ…。今はどうあれ…?かつてのお前?は?今の私?だ」

紅麗は灼熱を宿した氷塊のような目でプレシアを見下ろした。

「失った時に狂ってしまうほど愛する者を強く愛していた…その愛する者を、存在するだけで侮辱するクローンが許せなかったはずだ。その声も、その姿も虫唾が走り…息をしているだけで不愉快に思うほど、クローンを嫌悪していたはずだ」

「……」

プレシアは何も言えなかった。

?今?のプレシアは、そんな事など微塵も思っていない。

しかし、?かつて?のプレシアは紅麗の言葉に同意できる。

実際にそう思っていたからだ。

「私は…?かつてのお前?と同じ事をしているだけだ。奴を殴りつけたのも、奴に雑言を言ったのも…貴様がかつてフェイトにした事と、何も変わらない。今更改心したようが、過去は事実と決して変わらない。なのに…そんな過去を抱えながら私に説教か?　良い御身分だな。貴様は―」

「母さんのこと、悪くいわないでッ！！！」

突如割り込んできた幼き声の怒声が、紅麗の言葉を遮った。

「……」

紅麗はプレシアから視線を外し、顔を正面に向きながら目線を下へ向ける。

そこには、さっきまで湖で水遊びをしていた金髪の少女―アリシアが、いつの間にか紅麗の前に立っていた。

彼女は怒りに身体を震わせ、怒りの籠った瞳で上目使いに紅麗を睨みつけている。

「母さんを…母さんを、悪くいわないでよッ！！！」

「……」

紅麗は無言でアリシアを見下ろす。

その瞳はまるで…全てを拒絶し、否定するような冷たいものだった。

そして、その瞳に射抜かれた瞬間、アリシアのつぶらな瞳からぽたぽたと涙の粒が零れていく。

今の紅麗の眼は、多くの者たちを恐怖で震え上がらせるほどの冷淡さが宿っていた。幼き子供が恐怖を抱き、泣いてしまうのは当然だった。

しかし、それでも、涙が溢れるアリシアの瞳に宿る純粋な怒りは揺らぐ事はなかった。

もちろん、紅麗に対する恐怖は確かに存在している。

しかし、今は恐怖よりも怒りの方が勝っていた。

いかなる理由があろうと、自分のやってきた事を反省し、後悔に苦しんでいる母を侮辱する紅麗の言葉が、アリシアには許せなかったのだ。

「……」

毅然とした態度で睨みつけてくるアリシアを無言で見下ろしていた紅麗は、彼女に一つの質問をした。

「…お前は、フェイトの事をどう思っている？」

何故こんな質問をしたのか、紅麗自身にもわからなかった。

クローンを作るために採取された、自分と同じ？オリジナル？。

この娘に何かの答えを期待しているのだろうか？

一方尋ねられたアリシアは迷いなくこう断言した。

「フェイトは…わたしの？妹？だよっ！　わたしが、フェイトの？お姉ちゃん？なんだからっ！」

それが、アリシアの正直な気持ちだった。

確かにフェイトはアリシアのクローンだが、彼女は？アリシアの代わり？ではない。

フェイトはフェイト。

たとえアリシアと同じ容姿になっていようが、アリシアと同じ性格になっていようが、フェイトは決してアリシアにはなれない。

フェイトという唯一の人間なのだ。

だから、フェイトはアリシアの妹。

アリシアはフェイトの姉。

変わった形でも、自分たちは姉妹なのだ。

「…そうか」

アリシアが語った言葉の意味を感じ取る事ができた紅麗は、瞳を閉じながら彼女の言葉を噛み締める。

思い返すのは、愛する紅の事。

自分と紅のＤＮＡから作られた煉華の事。

？忠実な紅麗？を作り出すために煉華を生み出した森光蘭の事。

煉華と同様に生み出した者に捨てられたフェイトの事。

フェイトを拒絶したが、その後改心したプレシアの事。

フェイトを自分の妹だと語るアリシアの事。

そして、煉華を嫌悪する自分の事。

「……」

長き熟思を終えた紅麗はゆっくりと瞳を開くと、こう言った。

「―やはり、私は…お前のようにはなれない」

アリシア（オリジナル）の考えに、反対の意を示す言葉だった。

紅麗の言葉に、プレシアは悲しげに表情を曇らせ、アリシアは怒りと悲しさが入り混じった表情を浮かべる。

そんな彼女たちから顔を反らすように、紅麗は身を翻して歩き始め

た。

「いつまでもこの世に留まっていないで、さっさと黄泉へ還るがよい。ここはお前たちがいる場所ではない」

淡々とした口調でそう言い残し、紅麗はその場を後にした。

遠くなっていく紅麗の背中が暗闇に見えなくなると、プレシアは小さくため息をついた。

それと同時に、ずっと紅麗を睨みつけていたアリシアは我慢を解いて、母に抱き付いた。

「うぅっ…ぐすっ…怖かった…怖かったよぉ…」

母の胸の中で泣きじゃくれるアリシア。

冷たい目を向けてくる紅麗が余程怖かったようだ。

それでも毅然とした態度で紅麗に向かっていた愛娘を、プレシアは労うように、あやすようにアリシアの頭を撫でてあげる。

その瞬間、

「―やっぱり…納得してもらえなかったみたいですね」

そう呟いたのは、プレシアでもアリシアの言葉でもなかった。

いつの間にか、彼女たちの目の前に、栗毛の美女が佇んでいた。

「私なんかが説得できるはずがないじゃない…？紅？」

プレシアは咎めるように、自分の無力さを悔やみように栗毛の美女―紅に反論する。

「あなたが説得すればよかったんじゃないの？　あなたの言葉なら…きっと届いたと思うわ」

プレシアはそう言うが、紅は苦笑を浮かべ、アリシアの頭を優しく撫でる。

「そうかもしれません…。けど…それじゃあ、ダメなんです」

紅は、自分の考えを絶対に譲らなほどの強い意思で言葉を紡ぐ。

「彼には、私無しで羽搏いてほしいんです。彼は私を愛しているけれど…私に…依存しすぎているんです」

「依存しすぎている、ね…」

プレシアは同意するように呟く。

―私と彼は…よく似ている…。

愛する人を失ったときに狂ってしまった事も。

愛する人のクローンを嫌悪し、平気で傷付けてしまった事も。

これらは全て、愛する者を依存しすぎていたからだ。

「…だから、紅麗にはまず…?私?を乗り越えてほしいんです。私…?死んで?からも…彼の?呪縛?になりたくないよ…」

紅は寂しげな笑みを溢しながら、後悔に苦しむ気持ちを吐露した。

そんな彼女に対し、プレシアはどのような言葉を掛けたらいいのかわからなかった。

この娘もまた、以前の自分の言動に強い後悔を抱いている人間だ。

そんな人間に対して何と言えばいい?

?そんなことはない?と、知ったような口を利けるはずがない。

自分だって、どんな言葉を掛けられても…それで救われるとも思えない。

そんなプレシアの心情に気付いたのか、紅は微笑みながら話を変える。

「とにかく…これから先は、あの二人次第。彼らの背中を押した私

たちの出番はもうありません。後は…信じて、祈るだけです」

「…そう、ね」

プレシアは、泣きじゃくれる我が子を抱き寄せながら小さく呟いた。

◇

病室に戻った紅麗は複雑な心情を抱えながら眠りに就こうとした時、一つの事を思い出した。

「…早朝の訓練…どうするか…」

なのはへの負担を少しでも減らすために、早朝の訓練は紅麗が受け持つ事になっている。

―…ティアナたちに、いったいどんな顔をすればいい…？

自分が行った残虐行為を目の当たりにしたティアナたちに、いつも通りの態度で接する事なんてできるはずがない。

それはティアナたちも同じ気持ちのはずだ。

―…会いにくいな…。

対応に迷っていた紅麗は、

―なのはに、連絡するか…。

なのはに早朝の訓練を代わってもらう事に決めた。
もちろん、いつまでも会おうとしないわけではない。
早朝のときだけでいいのだ。

紅麗は端末を開き、なのはの端末へと発信する。
そして、程なくして端末のモニターになのはの顔が浮かびあがる。

『く、紅麗ッ!?　怪我、大丈夫なのっ!?』

なのはは驚きの表情をしながらいきなり詰め寄ってきた。

一方紅麗は?怪我?という単語を出したなのはの言葉に、一瞬疑問げに思ったが、脇腹に痛みがある事に今更気付いた。

「…あぁ。生活には支障はない。…それで、明日の早朝の訓練なんだが…」

『ああ、もちろん代わりに私がやるよ。いくら紅麗でも、怪我人にさせるわけにはいかないからね』

なのはは柔らかい笑顔を浮かべながら、いつも通りの態度で紅麗に接してくる。

その様子に意外そうに思っていた紅麗だったが、ある事に気が付いた。

―…そういえば、なのはは…あの場に、いなかったな…。

紅麗が残虐行為を行っていた時、彼女はあの場にいなかった。

だから、普段通りに接してくれているのだろうか？

もし、残虐行為を目の当たりにしていたら、彼女はこんな風に接してくれただろうか？

そして、今は朗らかな態度を取っているが、紅麗が残虐行為を行った事を知ったら、手のひらを返すように彼に嫌悪感を向けてくるのだろうか？

―…正直、怖い…。

だが、当然の報いだ。

自分は、それだけの事をしてしまったのだから。

それに、

―…いつだって…私には?平穏?は許されない…。

自分の?運命?を割り切るように心中で呟いた紅麗は、意識を現実に戻しながらなのはに言葉を紡ぐ。

「―それではティアナたちの事を頼む。明日の午後には戻る」

『大丈夫なの?　無理してない?』

なのはは心配げに尋ねる。

「傷はほとんど治っている。訓練はさすがにできないかもしれんが、生活には支障はないんだ。大丈夫だ」

『そっか。なら、良いね。…じゃあ、また明日ね』

「ああ…。夜遅くに連絡して、すまなかったな」

紅麗はそう呟き、通信を終えようと端末に指を伸ばした時、

『―ま、待って！　紅麗っ！』

なのはの言葉で、紅麗の指が止まる。
彼はなのはに顔を向けると、モニターに映る彼女の表情が困惑の色に染まっていた。

『あの…その…』

なのはは何か言いたそうに口を開閉していたが、やがて意を決して恐る恐る紅麗に尋ねた。

『紅麗…フェイトちゃんと、ケンカしたでしょ？』

「…ッ…」

紅麗の表情が微かに強張る。

その微妙な変化を気付く事ができたなのはは悲しげな表情でさらに続ける。

『それって…あの赤い髪の女の子とも…関係あるのかな？』

「……」

紅麗は何も答えず、強張った表情のまま唇を噛む。
その様子を見て、なのはは胸が苦しくなる感覚を覚えながら言葉を紡ぐ。

『…いったいどんな理由でフェイトちゃんとケンカしたのかわからないし、あの赤い髪の女の子のことも全然わからないんだけど…何か悩んでいるなら、相談に乗るよ?』

「……」

しかし、紅麗は依然と無言を貫く。
そして、なのはもめげずに言葉を続ける。

『紅麗…。前に…私がティアナにやり過ぎちゃったとき…叱ってくれたじゃない?』

突然話題を変えたなのはが切り出したのは、数週間前に危険行為を行ったティアナに、二発目の魔力弾を撃ち込もうとしたあの出来事だった。

『何で、昔から持っていた?話し合う大切さ?を…いつの間に忘れちゃったんだって後悔したけれど…。それと一緒に…紅麗が、?話し合う大切さ?を思い出させてくれて…私、嬉しかったんだよ?』

なのははは嬉しい微笑みを浮かべつつ、嗚咽を漏らしそうな声音でそう言った。

なのはにとって、紅麗という存在は恋人（ユーノ）とは違った、特別な感情を抱かせる男性だった。

？友達？とは、違う。
？恋人？とも、違う。
？家族？とも、違う。

？兄？―に近いかもしれないが、兄の恭也に対するものとはまた違った特別な感情だった。

もしかしたら、恋人（ユーノ）と出会っていなければ、紅麗に恋愛感情を抱いていたのかと迷うところだ。
それほどまでに、なのはにとって紅麗は特別な存在なのだ。

『私…できる事なら、紅麗の力になりたいの』

不器用な生き方しかして来なかった自分に、自分より遥かに？大人？な彼の力になってあげられるのかと不安に思うが、それでも？話し合う事？を重んじる自分は退くわけにはいかなかった。

『お話、聞かせて…紅麗』

かつて敵対していたフェイトにも、ヴィータにも言った言葉だった。
相手の事を一番に想っている、純真無垢な言葉だった。
だが、今回もまた…その言葉は相手に届かなかった。

「…すまない」

紅麗が返したのは、拒否の一言だった。
それに対して、なのはは沈鬱な表情を浮かべたが、すぐにいつもの笑顔を浮かべた。
しかし、それは少し寂しげなものだった。

『今日は…色々あったもんね。紅麗の気持ちが落ち着いてから言えばよかった…ごめんね』

「……」

『でも…もし必要だったら、いつでも私に相談してきて。それでちゃんとフェイトちゃんとも話し合って、仲直りしてね』

なのはの言葉に対し、紅麗はすぐに返事する事ができなかった。

―話し合えるものか…。会えるものか…。

―私の目には…フェイトの姿が、紅の姿に見えているのだぞ。

―それは…私がフェイトの事を、？紅の代わり？として見ている証拠…。そんな私が…どんな顔をして彼女に会えばいい…？

―いや、そもそも…煉華（やつ）を嫌悪する私を…彼女（フェイト）もまた、私を嫌悪する…。

―？仲直り？など、できるはずがない…。

―当たり前だ…。私には…？平穏？は許されないのだから…。

「…ああ。落ち着いたら…話し合おう」

紅麗は生返事をするように、そう言った。
もちろん、なのははその言葉に不安感を覚えた。
彼女は紅麗に何か言おうとしたが、それは自分の役目ではなく、親友の役目だと思い、言葉を喉の奥に止めた。

『…うん。じゃあ、また明日ね』

その言葉は終わるとともに通信モニターが瞬時に消える。
紅麗はモニターがあった空間を朧気な瞳で見つめていた。
そして、気付いていなかった。

彼はいつの間にか、左目の周りに刻まれた火傷の痕—炎と化した愛する恋人との契りを、掻きむしっていた。

其之三十二：一人の少女、かつての青年

午前　聖王教会付属病院―。

紅麗がプレシアとアリシアと出会った翌日、彼の怪我はほとんど癒えていた。

?彼の世界?だったら全治何ヵ月も要する大怪我だったが、?魔法?を使った医療技術が完治を早めさせた。

だが、まだ完治していない故、生活に支障はないが、まだ激しい運動はできない状態だ。

また、完治していない状態なので病院の意向で本来ならまだ退院できないのだが、紅麗が機動六課に帰還してから安静すると強く言ったので、半ば強制的に退院の許可が得られた。

そして、紅麗が退院の準備をしていると、聖王教会のシスター―シャッハ・ヌエラにある事を告げられた。

「…避難しろだと?」

紅麗はシャッハの言葉を怪訝そうに聞き返すと、彼女は申し訳なさそうな顔で事情を説明する。

「はい…。こちらの不手際がありまして…検査の合間に、昨日保護した女の子が抜け出してしまったんです」

「…たかが女子(おなご)一人に、何を大袈裟な」

ため息をついて呆れた言葉を漏らす紅麗に、シャッハは詳しい説明を付け足した。

「いえ、ただの女の子ではないんです。確かに魔力量は高い数値ですが、それも普通の子供の範疇…。しかし、その子は―?人造生命体?なんです」

?人造生命体?という単語を耳にした瞬間、紅麗は僅かに目を見開く。

そして、フェイトと、エリオと、煉華の姿が脳裏に浮かんだ。

向こうの世界にも、この世界にも存在する―他者の都合によって生み出される命。

その命が生み出される事は、この世界では絶えない。

そして、捨てられる事も、絶えない。

そこまで思案していた紅麗は、仮面のような無表情を浮かべた。

まるで他者の都合で命が生み出され、他者の都合で捨てられるその事実を他人事だと思い込むように。

そして、その表情のまま、シャッハの言葉に従って避難しようと足を動かそうとした時、

「とにかく…検査の結果では？一応？危険反応はなかったんですが、？人造生命体？という時点で、どんな潜在的な危険を持っているか…」

「……」

シャッハの言葉で、動こうとした足が止まる。
そして、幼きの頃の記憶が呼び起こされた。
己の？定められし運命？の始まりである、忌まわしき記憶が。

◇

《むしろ災いは、紅麗の方ぞ》

《ワシがなぜ紅麗生まれし後も、子作りを続けさせたかわかるか、麗奈？　その子に感じたものがあったからじゃ》

《邪悪なる心―？呪われし炎？じゃ》

◇

「……」

四歳の頃に告げられた、里の長老の言葉。

その言葉が、シャッハの言葉と同じように思えた。

言っている言葉は違えど、その言葉に秘められた感情は全く同じであった。

「…なら、私もその女子（おなご）を探そう」

他者の勝手な都合で危険視されるその子供と自分を重ねたのか、紅麗はそう言った。

だが、シャッハは心配そうな顔をした。

「しかし、あなたは怪我人で…」

「歩く分には問題ない。探す者が少しでも多ければ効率が良いだろう」

シャッハの言葉を最後まで聞かず、紅麗は彼女に一方的に告げた頃には歩きだしていた。

◇

顔も名前もわからぬ少女を捜索していた紅麗は病院の中庭にまで歩いていた。
すると、木々が立ち並ぶ草の茂みから小さな影が飛び出してきた。

「…お前か」

紅麗は小さく呟く。

彼の目の前には、赤と緑のオッドアイを持つ金髪の少女がいた。
年格好は、まだエリオたちよりも幼い。
病院特有の質素な衣服を着込んでいる少女はウサギのヌイグルミを抱えながら、自分より遥かに背の高い男性に怯えた目を向ける。
その瞳に射抜かれた紅麗は、ここから足を進めるのを憚られた。
少女に近付こうとしないまま、これ以上怯えさせないようにどんな言葉を掛けたらいいか苦心していると、

「うっ…ぐす…ひくっ…」

突然、少女がうつ向きながら嗚咽を漏らし始めた。
これにはさすがの紅麗も困惑の表情を浮かべる。
もしかしたら、気付かぬ内に怖い顔をしていたのだろうか？
いや、怖い顔なのはいつもの事かもしれない。

多くの者たちを恐怖させてきた自分に少し嘆きながら、紅麗は少女に尋ねかける。

「…私が、怖いか？」

答えはすでにわかっている。
肯定するに決まっている。
だが、一応の確認だ。
もし、怖いと肯定されたらすぐに立ち去って他の者に任せる。
しかし、次に少女の口から出た返答は紅麗にとって予想外なものだった。

「ううん…ぐすっ…ママ…いないの…」

少女は紅麗の問い掛けを否定し、泣いている理由を口にした。
それに対し、紅麗は少女の否定の言葉を意外そうに思うよりも、その後に紡がれた言葉に引っ掛かった。

―…母がいない、か…。

この少女もまた、造られた存在だ。
母親など、いるはずがない。

だが、その事実を他人事だと思えず、紅麗は母がいない寂しさを漏

らす少女の言葉に胸を締め付けられた。
紅麗もまた母を愛し、失った人間だ。
母がいない寂しい気持ちがよくわかる。

母が存在しないのに涙しながら探し求める少女と、母を見殺しにして母を失ってしまった自分――果たして、どちらが不幸なのだろうか？

紅麗はそんな事を思いながら、母がいなくて悲しむ少女にどんな言葉を掛けたらいいのかわらなかった。

幼き頃の紅麗にとって救いだったのは、二人目の母が現れた事だった。

一人目の母を失ってすぐに、異母弟の母親が使った？時空流離？によって４００年先の時代へ流され、悲しみと困惑の気持ちを抱えていた紅麗に、「どうしたの、ボク？」と一人の女性―月乃が優しく話し掛けてきた。
当時両親を例外として人間不信に陥っていた紅麗は、最初敵意を剥き出しにしていたが、尚も話し掛け続ける月乃が、厳しくも優しい母と同じように見え始めた。
それがきっかけで紅麗は彼女について行き、少しずつではあるが彼女を二人目の母として慕うようになった。

だが、それが、彼を更なる不幸へ陥れる男―森光蘭と出会うきっかけとなったが、紅麗は月乃と出会った事に後悔はない。
孤独となった彼に彼女が優しく手を差しのべてくれた時、彼は本当に心を救われたのだ。

だが、紅麗の目の前にいるこの少女に…手を差しのべてくれる者はいない。

紅麗も、手を差しのべる事ができなかった。

―人の血で汚れたこの手を…こんな無垢な少女に差しのべる資格はない。

―この少女の前に、優しく話し掛けながら手を差しのべてくれる母親など――

「あっ、こんなところにいた」

突如、紅麗でも少女でもない第三者の声が彼らの耳を打った。

その声はまるで、かくれんぼをしている我が子をようやく見つけた母親のような優しいものだった。

紅麗は後ろに振り向くと、長い栗毛をサイドテールにした女性がにこやかな面持ちで佇んでいた。

「なのは…」

紅麗は意外そうに呟いた。

何故、こんなところにいるのだろうか？

疑問に思う彼の表情を見て心情を察したのか、なのはは念話で理由を口にする。

『今日の訓練は早朝だけなんだ。…言ってなかったっけ？』

『…そういえば、そうだったな』

彼女の言葉で、紅麗は忘れていた今日のスケジュールを思い出すことができた。

納得の声をあげる紅麗になのははさらに続ける。

『それに…その子のことが昨日からずっと気になっててね。もう一度会おうと思ってたんだけど…』

なのははそう言うと紅麗の横を通りすぎ、少女に歩み寄っていく。

一方、少女はヌイグルミを抱えたまま、なのはにも怯えた目を向けるが、不思議とその場から一歩も動こうとしなかった。

やがてなのはは少女の前まで立ち止まると、彼女と目線を合わせるようにしゃがみ、優しい口調で語りかけ始めた。

「初めまして、高町なのはって言います。…お名前、言える？」

初対面の人間に対する最初のコミュニケーションとして、なのははまず自分から自己紹介した後、少女に名前を尋ねた。

一方少女はすぐには答えなかったが、儚げな声で自分の名前を名乗る。

「…ヴィヴィオ…」

「ヴィヴィオ…良いね、可愛い名前だ」

なのはは世辞のない正直な言葉を言うと、ヴィヴィオに別の事を尋ねる。

「ヴィヴィオ、どこか行きたかった？」

「ママ…いないの…」

ヴィヴィオは紅麗にも言った事を、なのはにも言った。

その言葉を聞いて、彼女の事情を知っていたなのはは悲しげに表情を曇らせる。

しかし、すぐに優しげな笑顔を浮かべ、寂しさに暮れるヴィヴィオを元気付けるように、その笑顔に見合った言葉を紡ぐ。

「ああ、それは大変っ。じゃあ、一緒に探そうか？」

「……うん…」

なのはとヴィヴィオとの穏やかなやり取りを、紅麗は無表情で静観していた。

彼から見て――彼女たちの姿はまさに、幼き頃の自分と二人目の母

とのやり取りと同じように見えた。

―二人は…近いうちに親子の関係になるのだろうな…。

紅麗は彼女たちの未来を予測する。

自分と月乃がそうであったように、なのはとヴィヴィオもこれを期に親子という関係を築いていくだろう。

まだ知り合ったばかりなので、今の時点でなのははヴィヴィオの母になる気も、ヴィヴィオもなのはを母として慕う気もないだろう。

しかし共に過ごしていけば、気持ちが変わっていき、二人はいずれ親子の関係になる――紅麗は確信に近い予測をし、なのはたちの邪魔をしないように静かにこの場から立ち去ろうとした。

その時、長年戦いに身を置いてきた彼の鋭敏な第六感が、敵意の気配を感知した。

その敵意は自分に向けられたものではない事も認識できたが、彼にとってそんな事はどうでもいい。

紅麗は？無粋な乱入？に対して腸が煮え繰り返る思いを抱えながら、こちらに近付いてくる？敵意の気配？に向かって、？素手の？左手を振りかぶった。

デバイスを起動させなくとも、身体能力向上の魔法を使わなくとも、彼は素手だけで人体を八つ裂きにできる。

しかし、彼の左手は、？強襲者？に届いていなかった。

届かせる前に彼が寸止めしたからだ。

「な、何を…？」

紅麗の左手の先には――バリアジャケットを纏い、刃のようなトンファー型デバイスを携えた襲撃者（シャッハ）がいた。

「どういうつもりですか…！？　その子にどんな危険があるかわからないと、先程話したはずです…！」

素手の左手を突きつけられているだけなのに、剣先や銃口を向けられているような恐怖感に囚われながらもシャッハは気丈を振る舞った態度で抗議した。
それに対し、紅麗は静かな声音で反論する。

「？どういうつもり？？　それはこちらの台詞だ…貴様こそどういうつもりだ？…この子供はただ…孤独に苦しんでいただけだ」

そう紡ぐ紅麗の言葉は、ヴィヴィオだけでなく、かつての自分をも弁明するような言葉だった。

「親もいない、友もいない…ただただ寂しく、さ迷っていただけなんだ。だから、こいつに危険はない。危険はないんだ。たとえ災いを呼び込む、呪われし力を持っていたとしても…」

言葉を紡ぎ続ける紅麗の口調はいつの間にか、ヴィヴィオやかつての自分を弁明するような口調ではなく、まるで何かに取り憑かれたようにただただ独り言を呟くような口調に変わっていた。
その時、

「―紅麗…」

深い哀愁を含んだ声が紅麗の耳を打つと、彼はようやく我に返った。紅麗は後ろに振り向くと、悲しげな顔をしているなのはと、彼女の陰に隠れながら涙目を向けてくるヴィヴィオの姿があった。彼を見つめるヴィヴィオの瞳（オッドアイ）は、血に飢えた獰猛な野獣を見るような恐怖感を宿したものだった。

「……」

その瞳に見つめられた紅麗は、改めて?平穏?を許されない自分を苦い気分で再認識しながら、彼女たちから逃げるように踵を返した。

「ま、待って！　紅麗！」

後ろからなのはが焦ったように呼びかけてくるが、紅麗はそれを無視してその場を後にした。

午後、機動六課隊舎　部隊長室―。

「絶望したぁあああぁぁぁあああああ～！！！」

閑散とした一室で、出落ちな絶叫がやかましく木霊した。

ソファーに座り、頭を抱えながら絶叫を発したのは、ＢＬＥＡＣＨと機動戦士ガンダムをこよなく愛する女性―機動六課・部隊長　八神はやてであった。

ふざけたような雄叫びをあげた彼女だが、その言葉通り―八神はやては？絶望？していた。

実際は？絶望？と言うほどではないが、それに近いようで程遠い状況に彼女は立たされていた。

「くぅ～…ついに？地上本部（ウェコムンド）？から臨時査察が来よったわ…」

はやては親指の爪を噛みながら足を組む。

時空管理局・地上本部―それは文字通り、ミッドチルダの地上に構える管理局の地上部隊本部の事だ。

そして、はやてはその地上本部が苦手だ。

それは彼女一個人だけでなく、本局や聖王教会に所属するほとんど職員たちも彼女と同じ心境だろう。

地上本部と本局は何十年も前から非常に仲が悪く、地上本部は縄張り意識が強いためか、地上に本局が介入してくる事を極端に嫌う性

質を持っている。

地上本部のトップであるレジアス・ゲイズ中将（はやては、？メタボ中将？や？バラガン・ルイゼンバーン？と命名している）は、「地上の平穏を守ってきたのは自分たちだ」と自負しているようだが、仕方のない事情があるとはいえ、そちらの対応が遅いから？機動六課？を設立させたというのがわからんのかと、はやては不満を漏らさずにはいられない。

閑話休題。

とにかく、その地上本部の査察はかなり厳しいらしく、配置やシフトの変更命令されたら致命的だ。

ただでさえ色々と突っ込み所を抱える機動六課にとってできれば何とか避けたいところだが、何とか乗り切らないといけない。

「……」

そこまで思案していたはやては査察対策にも関係してくる、？ある事？が思い浮かんだ。

―…そろそろ、機動六課を設立させた？本当の理由？…なのはちゃんたちに話した方がええかもな。

丁度今日の午後は、彼女たちの予定は特にないはずだ。

これを期に機動六課を設立させた？本当の理由？を話した方がいい

だろう。

しかし、そこでもまた問題が発生する。

?本当の理由?を話すために、場所を?聖王教会?に移すわけだが…

―絶っっっっっっっっ対!!　紅麗とクロノくん、一悶着ありそうやなぁ…。

クロノ・ハラオウン―フェイトの義兄で、２５歳の若さで提督という高い役職の肩書きを持っている男だ。

クロノと紅麗――あの二人が顔を合わせれば、確実にトラブルが起きるだろう。

昨日の任務で、紅麗がデバイスの非殺傷設定を解除し、一人の人間を殺しかけた。

その情報は間違いなく、クロノの元へ届けられているだろう。

陰で?生真面目の擬人化?というあだ名をつけられているあの男の事だ、彼は絶対に紅麗を追及するだろう。

さらに、クロノは昔から言い方というものを考えずに厳しい言葉を平然と言うタイプだ。

最近は改善されているようだが、人を殺しかけた人間に対していちいち言葉など選ばないだろう。

一方紅麗は問い詰めてくるクロノに対し、皮肉を込めた敬語を使いながら挑発するだろう――模擬戦という名の喧嘩をする前の、シグナムの時のように。

はやてから見て――紅麗という男は、自分に敵意を向けてくる相手が誰であろうと、自分もその相手に敵意を向ける人間（タイプ）だ。
初対面の人間や目上の者には敬語を使う辺り、ある程度の常識を持ってはいるが、時々持ち前の冷静さを欠いてプライドに拘ってしまうのが彼の欠点だ。
プライドの高い紅麗がクロノの言葉使いに対して、鼻につく思いを抱くのは確実だ。

相性の悪すぎるあの二人が顔を合わせるのは非常にまずい。

―せやけど…今回は紅麗に来てもらいからなぁ。

次元漂流者の魔導師を代表して是非出席してもらいという気持ちもある。
だが、それ以上の理由は―彼が、？新たに現れた預言？に関連するかもしれないからだ。

―…クロノくんの事で気が重いけど、今回はしゃあないなぁ。

はやては溜め息をつきながら端末を操作し、モニターを展開した。
そこには、ベッドや机など―最低限な家具しか置かれていないとある一室が映し出された。
そして、その一室のベッドの上には赤髪の少女が腰掛けており、その表情には覇気や生気が一切感じられない。
そんな少女を元気付けるように、彼女の前に膝をついている金髪の女性が何やら話し掛けている。

そして、彼女たちの横にある机の上には、一切手がつけられていない食事が置かれていた。

「……はぁ…」

モニターに映し出されている光景を悲しげな目で一瞥し、はやては再びため息をついた。

この赤髪の少女は昨日、機動六課で一時的に保護したのだ。
だが、明日の午後には聖王医療院に移送する予定だ。
それは、少女が食事に手をつけられず、睡眠すらろくに取れないほどの不安定な精神状態になっているからだ。
食事が喉に通らないなら点滴で栄養補給、眠れないなら睡眠薬を使えばいいかもしれないが、長期的にそんな生活を続けていれば、いずれ限界が来る。
カウンセリングなどを行って不安定な精神状態を正常にできればいいのだが、最終的にそれは少女の心次第だ。

事情を知らないはやては、何故少女が深刻な精神状態になってしまっているのかわからなかった。
事情を知っているフェイトに尋ねてみても「まだ話したくない」と一点張りだ。
しかし、少女が身に纏っている見覚えのある黒衣や、逆立った髪。
そして、フェイトが少女の事を強く気にかけている様子を見れば、?ある予想?がついてしまう。

―…もしかして、この娘って…紅麗のクローンなんか…?

確証はない。
しかし、そういう予想を思い浮かんでしまう。
だが、この少女が紅麗のクローンとして…少女が不安定な精神状態になったのは何故だ？
フェイトの様子が少し変なのは、少女と関連しているのだろうか？
どちらにしろ―

「紅麗って…尊敬できるほどの常識人なはずやのに、か・な・り・の・トラブルメーカーやな～」

はやては苛ついているような、呆れているような呟きを漏らした次の瞬間、

「絶望したぁあああぁぁあぁぁあぁぁあぁぁ～！！！」

再び頭を抱えながらシャウトした。

「ああ、もうっ！　シグナムとケンカするわッ！　非殺傷設定を解除して、人を殺しかけるわッ！　クロノくんにケンカ売るわッ（確信）！　あの女の子と何やら関係がありそうやしッ！　これ以上、私にストレスを与えんといてやぁあぁぁあああぁぁあぁ～！

！」

ずっと抱え込んでいた鬱憤を、声に出して解放するはやて。
叫んだところで問題は解決しないし、鬱憤が完全に払拭されるわけがない。
だが、叫んだ事で少し気が紛れたらしく、落ち着いたような疲れ切ったような様子でソファーに深く座り直す。

「？泣いている？、か…」

はやては、紅麗について少しだけ語ったシグナムの言葉を思い出しながら呟いた。

彼が？泣いている？というのは、いったいどういう事だろうか？
彼がミッドチルダ（ここ）へ来る前に、何か悲しい出来事でもあったのだろうか？
もしかしたら、その？悲しい出来事？が、彼がシグナムに対して豹変した事と、彼が人を殺しかけた事と関係しているのだろうか？
しかし、いくら考えても確証は得られるはずもなく、はやては思案をやめる。
本人から直接話を聞いた方が一番良いと思い、とりあえず紅麗の事は置いておき、聖王教会で機動六課を設立した？本当の理由？を話すために出席者を集めよう。

「なのはちゃん、戻っとるかな？」

はやては端末に指を走らせる。
今頃、親友は聖王教会から戻ってきてるはずだ。
はやては女子寮の方にモニターを展開した瞬間、

『うわぁあああぁぁぁああ〜ん！！』

彼女は目に飛び込んできたのは、見覚えのない金髪の幼女が泣き喚いている姿だった。
その幼女が栗毛のサイドテールの女性に離さんばかりに強くしがみつき、女性の方は困った表情を浮かべながら幼女を泣き止ませようと言葉を掛けている。

「……」

モニターに映し出されているその光景を、はやては目を丸くしながら無言で見つめていた。
やがて少しの時間の経過で落ち着きを取り戻し、いつになく真摯な表情を浮かべながらこう呟いた。

「あっらまぁ〜…（声：黒子）！　なのはちゃん、元気な子、産んだなぁ」

其之三十三：届かない言葉

機動六課に設けられた閑散とした一室に、赤髪の少女と金髪の女性が静かに言葉を交わしていた。

少女の方は、？忠実な紅麗？として、森光蘭によって紅麗と紅のＤＮＡを元に生み出されたクローン――煉華。

女性の方は、？アリシアを甦らせる？として、プレシアによってアリシアを元に生み出されたクローン――フェイト。

ベッドの上で膝を抱えながら腰掛ける煉華の表情には生気が感じられなかった。

無邪気で活発な性格を持つ彼女を知っている者が見れば、さぞや驚いた事だろう。

今にも死んでしまいそうなほどに深淵の陰気を振り撒いている彼女だったが、それでもちゃんとした会話ができる事がフェイトにとって大きな救いだった。

食事も睡眠もままならない煉華は、明日の午後には聖王医療院に送られてしまう。

その前に、フェイトは何とか傷心した煉華を元気付けたかったのだ。

傷付いてしまった心を癒し、立ち直らせるには何ヵ月、何年もの長い時間が必要になるかもしれないが、それでもフェイトは心が荒んでいたエリオや、心を開かなかったキャロを救ってきた。

メンタルケアには自信がある。

だから、空いてる時間さえあれば煉華を救うために使いたいと思い、こうして彼女と会話をしている。

「パパは…いつも、私のことを可愛がってくれた…」

煉華は、フェイトに自分の過去を打ち明け始める。
彼女の口から紡がれたのは自慢するような言葉だったが、それに込められた感情は実に暗いものだった。

「？煉華はいいコだなァ？って頭を撫でてくれた…。私はそれがとても嬉しかった…。だから…。ずっと、私に優しくしてほしかったから…私は、逆らわないでパパの言う事をなんでも聞いてた…。だけど…パパは私を裏切った…？失敗作？と言いながら、私を突き飛ばした…」

―同じだ…。

煉華の悲痛な言葉を聞くと、フェイトは昔の自分を思い返しながら内心でそう呟いた。

？誰かの代わり？として生み出された。

形はどうあれ、自分を生んでくれた？親？からの愛情が欲しかった。

決して反抗したりせず、何でも言う事を聞きながら必死に頑張った。

なのに、最後には？失敗作？として捨てられた。

自分と同じ境遇を持っている故に、フェイトは煉華に対してエリオたち以上に感情移入をしていた。
それ故、フェイトは自分の涙腺が崩れていくのを感じる。
だが、涙を堪え、かつての自分にも語りかけるように優しく言葉を紡ぐ。

「大丈夫だよ、煉華。今は、辛くて辛くて苦しいだろうけど…辛いことは決して長く続かない。…ううん、続けさせない。私が煉華の姉になって、煉華を守っていく」

「…姉…。…お姉ちゃん…？」

煉華はフェイトに呆然とした目を向け、初めて言葉を口にした赤子のようにたどたどしく呟いた。
その瞳は依然と生気が感じられないものだったが、それでも反応を示してくれただけでも、フェイトは嬉しかった。

「そう。他にも薫やエリオ、キャロ…弟や妹もいる。紅麗だって、兄として煉華を――」

？紅麗？という単語を耳にした瞬間、煉華の心が？黒色？に塗り替えられた。

「い、いやぁあぁぁあぁあああぁあぁあぁあぁあッ！！！」

死が間近に迫られたような強い恐怖に身も心も支配され、煉華は悲鳴をあげた。

「お、落ち着いて、煉華！」

フェイトは煉華を安心させるように優しい声音で話しかけるが、彼女はフェイトをも恐怖の対象にしているかのように、近付いてくるフェイトの手を乱暴に叩き落とす。

「こ、殺される…お兄ちゃんがッ…お兄ちゃんが私を殺しに来るッ！！」

煉華は涙を流しながら、紅い炎で焼き殺そうとしたあの仮面の男に恐怖する。

―怖イ…！

―怖イ…！！

―怖イ、怖イ、怖イ…！！！

今、この場に恐怖の対象はいないはずなのに、すぐそばにいるような気がしてならない。

ドアが急に開いて、？恐怖？が現れるかもしれない。
窓や床を突き破って、？恐怖？が現れるかもしれない。
自分が寄りかかっている壁から、くびり殺すために？恐怖？の手が伸びてくるかもしれない。
自分たちが作っている影や物影すら、？黒衣？に見えて仕方がない！

「怖い…怖イよぉ…死にタイ…死ニたイ…」

早くこの恐怖から抜け出したい。
殺される前に、自分で自分を殺したい。

舌を噛み切って絶命する方法を知らぬ煉華は、握り潰す勢いで自分の首を絞め始める。

「ダメだよ、煉華ッ！！」

叱責の声をあげたフェイトは煉華の手を掴み、強引に首から引き離す。

「い、いやぁ！！　やだぁ！！　怖い、怖いのぉ！！！」

ヒステリックに駄々をこねる子供のように喚きながら、煉華はフェイトを振り払おうとする。
フェイトはそんな彼女を見て悲しげに表情を曇らせると、自分と同

じ過去を持つ少女をその身で優しく抱き締めた。

「…ぁ…」

煉華の口から緊張が解けたような吐息が漏れた。
優しくて、柔らかくて、暖かい抱擁が、先程まで煉華の心を埋め尽くしていた恐怖が徐々に徐々に溶けていく。
以前？パパ？にも腕に抱かれた事があるが、それとは比べものにならないほどの安らぎが彼女（フェイト）の抱擁にはあった。

「大丈夫だよ…煉華」

息がかかりそうな距離にまで顔を近付けているフェイトは、泣きじゃくれる妹をあやすような声で語りかける。

一方、彼女（フェイト）の瞳に射抜かれた煉華は、呆気に取られたように見つめ返した。
自分と、目の前にいる女性は赤の他人であるはずなのに、何故か他人だとは思えぬ妙な親近感が胸中でわだかまっていくのを感じた。

そんな煉華の心情に気付かず、フェイトは続ける。

「自分から死のうとするなんてダメだよ。今は辛いだろうけど、不幸の時間は長く続かない。私がそうであったように、私の義弟や義妹がそうであったように…昔は辛い目に遭ったけど、今は幸せに生

きている」

「……」

「…それに、紅麗は決して残酷な人じゃないよ…この短い間でも、私は彼の優しいところを何度も見てきたから。…残酷な心がある事が事実だとしても、それは辛い過去によって作り出された?仮面（偽りの心）?でしかない。すぐにはできないかもしれないけれど、私は必ず紅麗の?仮面?を外す…。そうすれば、紅麗は煉華に酷いことなんてしない」

「……」

非現実的とも言えるフェイトの言葉を聞き澄ました煉華は、言葉を咀嚼するように沈黙した。

やがて、僅かな時間が経つと、煉華は弱々しく首を振った。

「無理だよ…」

彼女は、?否定?を断言した。

「お兄ちゃんは…絶対に私を殺しに、来る…」

今まで冷酷な紅麗しか見てこなかった煉華にとって、フェイトの言葉はとても信じられなかった。

しかし、フェイトには見えていた。
煉華の生気のない瞳に一瞬、期待の色が過った事を。

◇

午後、機動六課隊舎―。

聖王医療院から戻ってきた紅麗は、隊舎の廊下を淡々とした歩調で歩いていた。
その表情は仮面のような無感情なものだったが、廊下を歩むその足取りはどこか重いように見えた。

彼が歩いている間に出会った何人かの局員たちに挨拶や会釈をされたが、彼は何の反応も示す事ができなかった。

いつも通りに挨拶してきた局員たちは、ただ?昨日の事?を知らないだけだ。
もし、知っていたら挨拶などするはずがない。
それどころか、蔑みや恐怖の目を向けてくるに違いない。

彼らだけではない。
現場を目の当たりにしたティアナたちも。
?昨日の事?を知らないなのはも例外ではない。

実際に、フェイトは煉華(クローン)に対して暴力と雑言を加えた紅麗に対して激怒した。

シャッハと対峙した紅麗に対して、ヴィヴィオは恐怖に震えながら怯えた目を向けていた。

しかし、紅麗はその事実を淡々と受け入れる。
他者に嫌われるのは、今に始まった事ではない。
?前の世界?では多くの人間たちに恐怖され、憎まれてきたのだ。
ただ多いか少ないかの違いだ。

しかし、紅麗は自分の特性を受け入れているはずなのに、自分の居場所を歩むその足取りは重かった。
なのはたちに会う事を憚っている自分に気付いていないのか、気付いていながら気付かないフリをしているのかはわからない。
しかし、彼の足取りが依然と重いままである事実は変わらなかった。

―…紅…。

紅麗はふと、愛する女性の名を心の内で紡いだ。
たった一文字の、ただの名前だったが…彼が紡いだその一文字には幾千幾万囁く愛の言葉よりも、深い深い愛情が込められていた。
しかし、その想いがあまりにも深すぎている事を彼は気付く事ができなかった。

―会イタイヨ…紅…。

悲痛でいえ非人間的な呟きを内心で漏らし、その言葉とは裏腹な無

表情を浮かべながら、左目の周りに刻まれた火傷の痕を掻きむしった。

カリカリ、カリカリと響くその掻きむしる音は、まるで童の咽び泣く声のようだった。

?彼女?はいつもそばにいてくれた。

とても近い?場所?に、彼女はずっといてくれた。

人でなくても構わない。

炎の化身でも構わない。

人の言葉を失っても、愛し合う身体を失っても構わない。

彼女がどんな姿であろうと、ずっとそばで、共に永遠を歩めるならば、それだけで自分は幸せだったのだ。

しかし…今、彼女はいない。

どこにもいない。

当たり前のようにいてくれた、?ここ?にすらいない。

―だが…私の?不死鳥の炎の型?は…失ってはいない…。

人の霊魂を己の炎とする――歴代の炎術士の中で紅麗と彼の父だけが有していた、最も特殊でいて魔性の炎の型。

その力がまだ失われていなかった。

正確には、一度失った炎術士の力の代わりに手に入れた?火影式魔法?が引き継いでいたのだ。

―紅…私の前に、姿を見せてくれ…。

紅麗は、愛する者を呼びかける。
もし?彼女?がこの世のどこかに彷徨っているのであればこの世の全てに届くように、
もし?彼女?が天国いるのであれば天国に届くように、紅麗は心の内で呼びかける。

たとえ霊魂のままでも、姿を見せてくれれば再び共に歩める事ができる。
今度は、途中で?力?が失い、お互いが離れ離れになる事はない。
自分が老いて死ぬまで、共に永遠を歩む事ができるのだ。

だが、紅麗の脳裏に浮かんだのは――自分が再び炎の化身と化した紅と共に歩んでいる情景ではなく、死した金髪の女性が?不死鳥の炎の型?によって?炎?に変えられた情景だった。

「――ッ!!!」

突然吐き気に襲われた紅麗は、猫背になりながら口元に手をやった。
だが、次の瞬間には、胸元に渦巻いていた濃密な吐き気は嘘のように霧散した。

「はあッ…はあッ…!」

全身に嫌な汗をかきながら、紅麗は荒い呼吸を繰り返す。

何故、あんな情景が脳裏によぎったのだろうか？

そして、それを目にしただけで何故吐き気が起こったのだろうか？

そう自答していた紅麗だったが、ふと視線の先にある？存在？に気付き、思案を中断した。

彼が見やったのは――真っ直ぐに続く廊下の壁に寄りかかり、瞳を閉じながら腕を組んでいる、桜色の髪の女性だった。

「……」

紅麗はその女性がシグナムである事を認識すると、仮面のような無表情を浮かべた。

ティアナの一件以来、二人は言葉を交わした事がない。

こうして顔を合わせる事すら久しぶりかもしれない。

？二度と喧嘩をしない？という名目の模擬戦を行ったからでもあるが、片や相手を避け、片や相手に対してどんな態度を取ればいいのかわからない――そんな二人の想いが、同じ居場所にいても自然と会う事がなくなっていった。会ったとしても、相手の存在を認識していないかのように言葉を掛ける事もない。

そして、現在も、紅麗はシグナムの存在に気付いていないかのように歩を進め始めた。

一方、まるで紅麗を待ち伏せていたかのように壁に寄りかかってるシグナムは彼の存在に気付いていないのか、気付いていながら気付かないフリをしているのか――瞼を開く事すらせずに口を固く結んでいた。
やがて紅麗が通り過ぎても、シグナムは一切の動作を起こさなかった。

だが、これはいつもの光景だ。
お互いが相手の存在を気付いていないふりをして、言葉を交わさない。
今回も同じだ。

紅麗は自分でも気付かずに緊張と僅かな安堵を抱きながら、シグナムの前から姿を消すように歩き続けた、その時、

「―いつも以上に?泣いている?ようだな」

それまで無言を貫いていたシグナムが、紅麗の背中に向けて言葉を紡いだ。
それと同時に、紅麗の足が止まる。
無視する事もできたかもしれないが、彼女の言葉が聞き捨てならないと言わんばかりに歩みが止まってしまった。

紅麗は首だけ振り返り、言葉の意味を問い掛けるようにシグナムに無感情の瞳を向ける。
一方シグナムは依然と瞳を閉じたままだったが、疑問の意思が込められた?好敵手?の視線に気付いたのか、彼女は鋭い瞳を開きながら言葉を続ける。

「もういい加減、強がりはやめておけ。泣き顔を隠すために？仮面？を被ろうとも、？仮面？を厚くしようとも…溢れる涙と、漏れる泣き声までは隠せんぞ。もっとも…厚くなるどころか、どんどん剥がれていっているぞ。？堕落した不死鳥？よ」

「……」

シグナムの言葉を聞き取った紅麗の仮面のような表情に、変化はなかった。

そして、彼がゆっくりとシグナムの方に身体を向けた刹那、彼の姿が消えるとほぼ同時に彼女のすぐ目の前にまで移動した。

「貴様こそ、私に濁った眼を向けるな…？竜眼の騎士？…！」

先程まで無表情を浮かべていた紅麗は、ついに感情を露にした。

その瞳孔の開いた瞳と、その口調は、敵対する者にしか向けない冷徹なものだった。

「何だ、その眼は？　堕落しているのは貴様も同じだ。以前の貴様の眼は…私の？知り合い？と同じ―？不愉快極まりない？ものだったぞ」

？知り合い？――それは、彼の異母弟―烈火の事だ。

シグナムは、弟と同じ目をしていた。
知性や常識を欠いているが…全ての生き物の頂点に立つ?竜?のような圧倒的な強さと、触れれば危険でいて優しげな暖かさを持った?炎?のような灼熱が―?不愉快極まりなく?その瞳に宿っていた。
しかし、今のシグナムにはそれがいつの間にか無くなっていた。

「私にはわかるぞ。?怨念めいた執念?が籠められた貴様の眼は…死にゆく者の眼だ」

?凡人(石)?と呼ばれながらも、?天才(金)?を超えるために強さを磨いていき―そして、死んでいった仲間の事を思い出しながら紅麗はそう断言した。
だが、シグナムは?その事実?をすでに自覚していたようで、表情を変えずに彼の言葉を受け入れる。

「ああ、私にもわかっている。今の私は早くに死ぬだろう…これ以上にないほどに無様で、愚かな屍を晒すだろう。…だが、少なくとも?今の貴様?には敗けはしない」

?烈火の将?は真っ直ぐに?炎の堕天使?を見据える。

「今の貴様は誰よりも弱い。愚かで、腐りきった戦闘狂(わたし)にすら劣る。たとえ幾千回戦おうとも、幾万回戦おうとも…私は貴様に一度も敗ける気がしない」

傲岸不遜な物言い。
しかし、シグナムの口調には傲慢の念が無く、事実をそのまま語るような淡々とした口調だった。
故に、紅麗は彼女の言葉を鼻で笑いながら聞き流す事ができずに苛立ちを覚えた。
そして、そんな自分に対しても苛立つ。

「どいつも、こいつも…自分を見据える事すらできずに知った風な口を利く…」

紅麗は怨嗟のような呟きを漏らしながら、凶器とも言える細長い五本の指を屈伸させる。
鋭利な爪を携えた猛禽の趾（あしゆび）ような指が荒々しく蠢き、ゴキゴキと関節が鳴り響く。

「あの戦いで、圧倒的な力量差を体感した上での発言とはとても思えぬ。…貴様の傲慢（自信）が嘘か真か、試してやろうか？」

紅麗はそう言い終わると同時に、握った拳をシグナムの頬に向けて振りかぶった。
しかし、シグナムは腕を組んだまま防ごうとも避けようともしなかった。
紅麗は素手だけで人間を物言わぬ肉塊に変えるほどの腕力を有している。

ある程度まで加減しているが、それでも数本の歯を叩き折るつもりだ。
だが、彼の拳がシグナムの頬に叩き込まれた瞬間、歯が折れる破砕音が響かなかった。
紅麗の拳は、彼女の歯を叩き折る事ができず、口元を切らすだけに留まっていたからだ。

紅麗は僅かに目を見開いた。
今の一撃はシグナムの歯を砕くつもりだった。
ここまで極端に加減を間違えるはずがない。

「…どういうつもりだ？」

一方、シグナムは頬に拳を押し当てられながら淡々と尋ねた。
その言葉に含まれていたものは失望の感情ではなく、どこか悲しげなものだった。

「一度手合わせすれば相手の利き手くらいわかる…」

シグナムはそう呟くと、紅麗の拳を掴んだ。

「お前…？左利き？だろ？」

「―ッ！？」

彼女の言葉で、紅麗はようやく利き手じゃない?右手?で殴りつけた事に気が付いた。
そして、何故自分は利き手で殴らなかったと疑問に思い始めた。
次の瞬間、彼が自答するより先にシグナムが紅麗の胸ぐらを掴みながら、足を掛けてきた。
紅麗は咄嗟に対処しようとするが、すでに遅く、何もできずにそのまま地面に転倒した。

「くっ…!」

無様に地面に叩きつけられた紅麗は悔しさに歯噛みしながら、シグナムを睨みつける。
一方シグナムは、超えたいと思っていた?不死鳥(好敵手)?を敗北の地に叩き落としたにも関わらず、その表情に満足そうな色はなかった。

「…何故だ?」

突然、シグナムは悲しげな口調で重々しく口を開き始めた。

「今のお前は…?泣いてる?上に、恐怖している…。だが、お前の事だ…私に脆弱な拳を打ち込んだのは、私に恐怖しているからではなかろう?…なら、いったい何に恐怖している?」

「…ッ…」

紅麗は何かの図星を突かれたように表情を歪ませた。
しかし、?何か?に恐怖しているのは確かだが、その?何か?は、自分でもわからなかった。
自答すれば、すぐに答えが見つかるかもしれない。
しかし、何故かその答えを掘り起こす事を強く拒絶する自分がいた。
故に、紅麗は?恐怖?に対して思案をしようする感情を振り払うように、シグナムに拒絶の言葉を紡ぐ。

「…失せろ」

それは、?自分の本心を決して見せたくない?――頑固な意思を持った言葉だった。

「さっさと失せろ…。私はお前に話す事など…何も無い」

「……」

彼の頑なな態度を見て、これ以上話を聞こうとしても無駄だと判断したシグナムは彼の胸ぐらから手を放し、何事もなかったかのようにその場から歩き始めた。

―…私らしくもない…。

シグナムは紅麗を一瞥せず、歩み続けながら一人ごちる。

紅麗に対して挑発するような態度を取った彼女だが、喧嘩を売るつもりであんな態度を取ったわけではない。

態度とは裏腹に、彼女はただ彼から話を聞きたかっただけなのだ。

彼は周りに悟られないつもりで仮面の無表情を浮かべていたようだが、シグナムから見ればそれは逆に怪しく見え、彼が思い悩んでいるのがすぐにわかった。

故に、いったい何に対して悩んでいるのか、問い質したかったのだ。

しかし、素直になる事ができなかった。

?好敵手?としての意地なのか。

最初に敵愾心を向けていたのに、今更態度を真逆に変えたくない気まずさからなのか。

その理由はシグナム自身にもわからない。

しかし、彼女の本心は、紅麗から話を聞きたいという気持ちだけなのだ。

それが、?自分らしくない?のだ。

―今の私は、?戦闘狂?だ…。

自分でも自覚できるほどに、狂いに狂い過ぎている戦闘狂。

そんな自分が、?好敵手?を心配し、話を聞こうというのはあまり

にも可笑しな話だ。
まだ?騎士だった?頃の自分ならまだしも、今の自分は成れ果てた?戦闘狂?だ。
それでも尚、紅麗から話を聞こうという気持ちが湧き上がったのは、まだ?騎士?としての心が残っている証拠だったのだろうか?

其之三十四：我が儘

シグナムが立ち去った後も、紅麗は床の上に仰向けになったまま動こうとしなかった。

自分より遥かに格下だと思っていた人間に、足を掛けられて無様に押し倒された。

得物を交えた戦いをしたわけではない。

だが、それでも敗北感を含んだ強い悔しさがプライドの高い彼の胸中に渦巻いていた。

今床に倒れている事も無様だが、このまま立ち上がってしまっても、格下（シグナム）に負けたという事実が今以上に突きつけられると思え、起き上がる気にはなれなかった。

「―おい、いつまで遊んどるんや」

突然、独特なイントネーションを含んだ女性の固い声が紅麗の鼓膜を打った。

「床（そこ）がそんなに寝心地が良いとは思えへんがな」

真剣のようでかなりふざけている言葉を聞きながら紅麗は視線を動かすと、茶髪のボブカットの女性が彼を見下ろしていた。

「いつまで狸寝入りを決め込むつもりや？」

「……」

悪魔と契約した貴族少年のような台詞を口にするはやてに対し、紅麗は何も応えずに立ち上がった。
すると、彼女は不満げに頬を膨らませた。

「ツッコミ無しかい。ノリ悪いなぁ」

「…お前は、何故いつも通りに接してくるんだ？」

紅麗ははやての言葉を無視して、疑問を口にした。

？昨日の出来事？は、はやても間近で目撃している。
本来なら、紅麗に対して軽蔑や畏怖の態度を取るはずだ。しかし、現に彼女は昨日は何事もなかったかのように、いつも通りの朗らかな態度で接してくる。
その事に対して、紅麗は嬉しく思うわけでもなく、逆に怪しく思うわけでもなく、ただただ疑問に思っていた。

一方はやては突然の脈絡のない問い掛けに対して、一瞬呆けたように目を丸くした。
だが、すぐに紅麗の言葉から今の彼の心情を察する事ができた。
しかし、先程のお返しとばかりに紅麗の疑問にあえて答えず、全く別の事を話しだす。

「それよりも大変なんよ！　紅麗にど～～～しても頼みたいことがあるんやっ！　機動六課アンケートで？お兄ちゃんにしたい男性局員？第一位である、紅麗の力が必要なんよっ！」

はやては矢継ぎ早にそう言うと、紅麗の手を取って歩き始めた。

「おい、はやて…」

紅麗は抗議の声をあげるが、はやては彼の言葉を全く聞く気はなく、「早く早く♪」と悪戯っぽく笑いながら紅麗を引っ張り続ける。まるで、引きこもりの少年が一人の少女に無理矢理家から外へ連れ出されているかのような光景だった。

◇

「うわぁあぁあああ～んっ！！　いっちゃ、やだぁあああぁぁあああ～っ！！！」

「ああ…そんなに泣かないで…」

機動六課の女子寮の一室にて、大泣きする少女にスカートを掴まれ

ながら高町なのはは困り果てていた。

あの後ヴィヴィオを聖王医療院から機動六課に連れ帰ったわけだが、すっかり彼女になつかれてしまい、お仕事があるからと離れようとした途端、駄々をこねながら大泣きしてしまった。

―困ったなぁ…。

これから聖王教会へ赴いて機動六課を設立した本当の理由を聞かなければならない。

自分たちも、聖王教会のカリムも暇ではない。お互いの予定が合う機会なんて、今日を逃していつになるかわからない。

しかし、ヴィヴィオは駄々をこねるし、フォワード陣に任せてようとしても全くヴィヴィオになつかれない。

―フェイトちゃんがしてくれたら何とかなるんだけどなぁ…。

申し訳なさそうな顔をするティアナたちを一瞥しながら、親友を思い返す。

エリオとキャロを幼児の頃から育て、幼い甥と姪の世話をしている彼女なら幼児の扱いを心得ている。

彼女がいてくれればこの状況を打破する事ができるはずだ。だが、どういう訳か先程から姿を見せない。

母性本能を燻る幼女（ヴィヴィオ）の存在があれば、火の中水の中でも必ず降臨されるはずなのに。

その時、彼女の背後でドアが開かれる電子音が聞こえた。

なのはの表情がぱあっと輝く。

―ああっ、良かった！　誰か来てくれた！　フェイトちゃんかなっ

!?　紅麗かなっ!?

救世主の姿を思い浮かべながら開かれたドアの方に顔を向けると、
そこにいたのは――――

「ガンダム諸君ッ!!」

もう、お分かりいただけただろうか?

「昼の挨拶―即ち、?こんにちは?という言葉を…謹んで贈らせてもらおう」

機動六課のガンダムオタク――ヴァイス・グランセニックだった。

「―帰　っ　て」

なのはは顔の影を濃くしながらヴァイスに向けて即帰れ宣言。
しかし、ヴァイスは極度のマイペースなのか、彼女の辛辣な言葉に対し、ナルシストな微笑を浮かべた。

「ふっ…邪険にあしらわれるとは」

「（イライラするな、こいつ…＃）いいから帰ってよ。ここ、一応女子寮なんだよ？　本気で訴　え　る　よ？」

「ま、まぁ、待ってくださいッ。俺はただ…困ってるなのはさんを助けようとここに参上しただけスよ」

正論とも言える、かなりリアルな脅し文句にビビったヴァイスは素に戻りながらも本来の目的を話すが、なのははジト目で見返す。

「ヴァイスくんにそんなことできるの？　できるんだったら良いけど…もし、ただ悪ふざけがしたかっただけだったら怒るからね…？」

「望むところだと言わせてもらおう。……少年っ！」

ヴァイスは自信満々になのはに応えた後、少女（ヴィヴィオ）を呼びかけた。
ヴィヴィオはなのはにしがみついたまま、珍しい（シスクード）ものを見るような目でヴァイスを見上げる。

「この俺―ロックオン・ストラトスが…君の着任を歓迎しよう」

「せめて、どっちかに統一しなよ」

なのはのさりげないツッコミを無視して、ヴァイスは続ける。

「着任祝いとして、君に良いモノをプレゼントしよう」

懐をあさりながらヴィヴィオに近寄るヴァイス。それを見て、なのはは呆れた表情を浮かべた。

「ああ…物で釣るんだね…」

「多少強引でなければ…ガンダムは口説けません」

「すごいや、ヴァイスくん。ドヤ顔でものすごくイタい発言してるの」

正論を放つなのは。

しかし、ヴァイスはすでにヴィヴィオだけに意識を向けていた。

そう。彼はすでにヴィヴィオ（ガンダム）にメロメロになっているのだ（※ロリコンじゃないよ）。

「君は何だか格闘戦が得意そうに見えるからな…そんな君にはコレだッ！」

ヴァイスが懐から取り出したのは、１／６０スケール　ＰＧ（パーフェクト・グレード）『シ

ャイニング・ガンダム』――要するに、ガンダム・プラモデルだった。

「あくまでガンプラだからな。決して乱暴に扱わずに部屋に飾るといい」

「……」

何の惜しげもなく差し出されるガンプラを、ヴィヴィオはつぶらな瞳で数秒見つめた次の瞬間、

「やあっ！」

可愛らしいかけ声とともに無邪気な心を以て、小さな手を振りかぶった。

幼女の平手打ち（シャイニング・フィンガー）によって叩き落とされたガンプラは、床の上でバラバラに解体（スクラップ）された。

「ガンッ！ダァァァァァァァァムッ！！！！」

「うるっさいよッ！！　もう帰ってよ、ヴァイスくんッ！　すっごい邪魔なんだけど！！」

「くっ…まさか、ガンダムの魅力が…幼女の域にまで届かなかったとは…！　汎用性が高すぎるぞ（？）…幼女（ガンダム）！」

ヴァイスが四つん這いになりながら全力全開で嘆いていると、部屋の自動ドアが再び開き、二人の男女がなだれ込むように入ってきた。

「いい加減に離せ、はやて…。何なのだ、いったい？」

「いいから来るんやっ！　機動六課アンケートで？お兄ちゃんにしたい男性局員？第一位である紅麗に――」

ドアから現れたのははやてと、彼女に無理矢理連れて来られた紅麗だった。

その時、部屋の隅にいたティアナたちの間に気が張った空気が流れる。

それを敏感に感じ取った紅麗はティアナたちの存在に気付き、彼女たちに顔を向けた。

だが、ティアナたちはすぐに気まずげに顔を反らしてしまった。

それを見た薫は慌てて紅麗に念話を飛ばした。

『あ、あの…兄者っ！オレ、ティアナたちに―』

『いや、わかっている』

事情を察した紅麗は、薫の言葉を遮った。
大方、ティアナたちが薫に自分たちの過去を聞き出したのだろう。
だが、勝手に話された事に紅麗は気を悪くしなかった。
この世界に鉄血と闘争が存在し、自分が戦場に立っていれば、？自分の戦い方？が必ず晒される事が明白だからだ。
そして、それを目に焼きつけた者たちが、自分に対して畏怖する事も明白だ。
そう。ティアナたちの反応こそ、？普通の反応？だ。
今まで通りに接してくるなのはやはやての方が異常なくらいだ。
だが、紅麗はその？必然？に対して、淡々とした気持ちで受け入れる。
しかし、受け入れているはずなのに、彼の足はティアナたちから逃げるようにこの場から立ち去ろうと動いていた。
その時、
『あの、紅麗…助けて』
助けを求める声によって、紅麗の足が止まる。
彼は首だけ振り向くと、依然とヴィヴィオにしがみつかれているなのはが困惑した苦笑いを浮かべていた。
一方、紅麗の姿を目にしたヴィヴィオは聖王医療院での出来事を思い出し、恐怖で身体を震わせながらなのはの後ろに隠れた。
しかし、紅麗はヴィヴィオの態度に落胆の様子は見せず、逆に彼女の態度も当然だと言わんばかりに何の反応も示さなかった。

すると、痺れを切らしたはやてが紅麗に向けて怒声を発する。

「こらっ！　何ぼーっとしとるんや、紅麗！　何のためにあんたを連れ込んだと思うとるんやっ！　機動六課アンケートで？お兄ちゃんにしたい男性局員？第一位である紅麗の？口車？で、駄々をこねるそこのロリっ子を説得するんやっ！　フラグを立てるのも可！」

彼女の言葉で、紅麗は何故ここへ連れて来られたのか合点がいった。
しかし、何とも迷惑な話か。
ヴィヴィオは自分に対して脅えている。
？恐怖の対象？からの言葉をすぐに受け入れてくれるとは思うが、どんな言葉を並べてたとしても結局？恫喝？に辿り着きそうで、あまり気持ちの良いものではない。
だが、そんな紅麗の心情に気付かずになのはは事情を説明する。

『とりあえず、病院から連れ帰ったんだけど…何か、離れてくれないの。フォワード陣に相手してもらおうとしてもダメだったし…』

―…まぁ、当然だろうな。

紅麗は幼少の頃の自分を思い出しながら内心でそう呟いた。
今となっては気恥ずかしい過去だが、月乃に拾われたばかりの自分も、駄々をこねたりはしなかったが彼女になついて離れなかったものだ。

『ねぇ、紅麗…。私、これからはやてちゃんたちと一緒に聖王教会にどうしても行かなくちゃいけないから、何とかヴィヴィオを説得できないかな？　口八丁な紅麗ならできるでしょ？』

？口八丁？という単語を果たして誉め言葉として使ったのだろうかと疑問に思うが、紅麗はそんな事を気にせず、代わりに彼女を咎めるようにこう返答した。

『…お前は、？あの時？にいったい何を見ていた？』

それは――聖王医療院で突然ヴィヴィオに襲いかかってきたシスターを威圧し、それによってヴィヴィオにまで脅えさせてしまった事だった。

恐怖に囚われている少女に、その恐怖を与えた自分が何事もなかったかのように話しかけるなど、できるはずがない。

何より…狂気を纏いながら、周りの人間を恐怖で従えさせる人間性を持つ自分が、こんな無垢な少女に話しかけるのは、とてもおこがましい事だ。

紅麗の正直な言葉を聞いたなのはは悲しげに表情を曇らせた。

しかし、すぐにいつもの微笑みを浮かべると、自分の後ろに隠れるヴィヴィオに話しかける。

「ヴィヴィオ。隠れてないで、紅麗お兄ちゃんにちゃんと挨拶しないとダメだよ？」

まるで我が子を注意するような口調でそう言った。
しかし、ヴィヴィオは弱々しく首を振ってそれを拒否する。
だが、なのはもまた譲らんとばかりに説得を続ける。

「大丈夫、紅麗はちっとも怖くないよ？　怖く見えるだけで、とっても優しい人なんだよ？」

その言葉はヴィヴィオを安心させるためではなく、ただ事実を語る事を第一に優先した言葉だった。
言葉の内容はシンプルだが、どこか確固たる説得力が秘められており、ヴィヴィオの脅えた心を僅かに揺さぶるには十分だった。
彼女だけでなく、紅麗に対して困惑な心情を抱えていたティアナたちでさえ、今日（こんにち）まで紅麗と過ごした日々を思い返されながら心を打たれた。

だが、紅麗本人は心外と言わんばかりになのはに異議を唱える。

『なのは…勝手な事を言うな』

『勝手な事じゃないよ、紅麗は優しい人だよ』

なのはは強情且つ正直な心を以て首を振った。

『たとえ紅麗が人を殺そうとしたとしても…私とティアナを救ってくれたことも、ヴィヴィオを助けてくれたことも…私たちと一緒に過ごした楽しい日々も全部――ウソじゃないから』

なのはは柔らかく微笑んだ。
優しい言葉を紡ぐ彼女の微笑みを、紅麗は仮面のような無表情で見据えた。

自分は一人の人間を殺そうとしたにも関わらず、畏怖の感情を抱かずに…信じてくれているというのか…？

なのはの言葉は、紅麗にとって救いのようなとても暖かなものだった。
だが、その暖かさが…紅麗には重すぎた。
今、彼が最初に無意識に求めているものは、優しさなどではないからだ。

ふと紅麗は、いつの間にかヴィヴィオが自分を見上げている事に気が付いた。
彼女は未だになのはの後ろに隠れていたが、困惑が込められた瞳でチラチラと紅麗を見上げている。
どうやらなのはの諭しが、少し通じたようだ。

紅麗はヴィヴィオから目を反らし、まるで助けを求めるようになのはに無表情を向ける。
しかし、助けを求めているのはなのはの方で、『お願い…』と念話で伝えながら苦笑いする。

「……」

未だに警戒心を持っている幼女に対してどのような対応したらいいのか迷っていた紅麗だったが、まず義母やなのはがしたように――片膝をついてヴィヴィオと目線と合わせる。

だが、いざ話そうとしても、駄々をこねる幼女を納得させられる上手い言葉が思い付かず、苦心しながら沈黙する。

やがてようやく言葉が思い付いたのか、重い口を開き、なるべくヴィヴィオを怖がらせないように穏やかさを意識した声音で言葉を紡ぐ。

「ヴィヴィオ…あまりなのはを困らせるな。彼女は、これから外せない用事があるんだ…」

自分でも自覚できるほどに、短くて下手な言葉だった。

案の定、ヴィヴィオは納得できないと言わんばかりに「うぅ…」と小さく唸りながらなのはにしがみついたまま離れようとしない。

それを見た紅麗は何かを諦めたような、何かを決意したような表情を浮かべながらこう言った。

「怖がるな…。母（なのは）と…？永遠に？離れ離れになるわけではない」

それは過去の自分と、現在の自分を思い返しながらの言葉だった。

四歳の頃の自分は、病を抱えた母に甘える事などできなかった。

病が治ってからでも、甘えながら親孝行をしようとも考えていた。
だが、火影魔導具を求めた織田信長が火影の里に進軍してきた事によって、その想いが粉々に砕かれた。

?魔導具無しで戦う?という火影頭首・桜火の意向によって行われた火影忍軍と織田軍の合戦は火を見るよりも明らかであり、紅麗は母と一緒に逃げ延びようとした。
だが、母は我が子を助けるために傷を負い、紅麗を助けるまでに病に冒された身体に鞭打って織田軍と戦っていたのだ。
もう母の体力は限界であり、自分を置いて逃げろと言ってきた。
しかし、母を愛する紅麗にそんな言葉を受け入れるはずもなく、駄々をこねるようにそれを拒否した。
それに対する母の言葉は、厳しい言葉だった。

?涙を流すな?と。

?強く生きよ?と。

そして、?母を想うのならば、母の死を乗り越えて進むのじゃ…?と。

最後まで厳しく、我が子の成長を第一に望む母の優しい言葉を受けた紅麗は、自分の無力さを呪いながら母を置いて逃げだした。

それからすぐに遥か未来の世界で二人目の母と出会うも、自分が１０歳になると森光蘭によって義母を人質に取られ、離れ離れになってしまった。
それでも会えることはあったにはあったが、その一日はとても貴重

なもの。しかも貴重な一日でも、愛する義母と過ごせるのは一時間足らずだった。

そして、森光蘭を討ち倒した後は、彼女の元へ帰る事はなく、甘える事も親孝行もする事もせずに、両親の墓を作る事と織田信長を討ち果たす事を優先して？時空流離？を使って過去の世界へ旅立った。結局辿り着いた場所は過去の世界ではなく別世界だったが、どちらにしろ―もう、義母に会う事などできないのだ。

とにかく…母（なのは）と離れたくないヴィヴィオの気持ちは、痛いほどによくわかる。

しかし、紅麗から見て駄々をこねるヴィヴィオの様は――？この上ない我が儘？に見える。

一方、幼女のヴィヴィオは紅麗の言葉をよく理解できなかったが、彼の言葉に込められた悲哀と羨望の感情を感じ取ったらしく、名残惜しげになのはの服を掴んだ手を放した。

「ありがとね、ヴィヴィオ。ちょっとお出掛けするだけだから」

なのはは優しく声をかけると、ヴィヴィオは目尻に涙を溜めながら小さく頷いた。

それを見て、はやてが「よしゃっ」と声をあげる。

「なのはちゃんの？隠し子？のためにさっさと行って、さっさと切り上げよ」

「隠し子じゃないよッ！！　ユーノくんとはキスしかしてないよッ！―って、何言わせるのッ！？」

「紅麗、あんたも出掛ける支度しぃ。私らと一緒に聖王教会に行くから」

「…唐突だな」

「当たり前やん、今言うたんやから。…ほら、ヴァイスくんもいつまでも東方不敗を亡くして悲しみに暮れるドモンのような顔してないでヘリの準備しぃ」

「師匠ォォォォォォォォォ（？）！！！」

◇

「何故、私まで聖王教会へ？」

両手に包帯を巻いた金髪の青年―蛭湖は、はやてに疑問の言葉を口にする。

彼らの前には、聖王教会へ行くための大型ヘリが鎮座している。

「まぁ、蛭湖さんも聖王教会に顔出した方がええと思うてな」

「昨日（さくじつ）顔を出したばかりですが？」

蛭湖が指摘すると、はやては一瞬身体を硬直させ、しどろもどろになりながら言葉を選ぶ。

「まぁ、そりゃ…あれや……そ、そうっ！　今回は大事なお話があるんや。次元漂流者の魔導師として、紅麗だけでなく蛭湖さんも是非出席してほしいんや。昨日報告にあった連続通り魔事件の犯人の事も、殺戮め…カリムとクロノくんに話さなあかんしな」

「はあ…」

（少しでも？殺戮女神？の機嫌を良くさせんと、私が殺されるッ！！！）

「？…何かおっしゃいましたか？」

「う、ううん！　何でもないでっ！　ほ、ほらっ！　はよ、乗り込むんや！　さもないと股ぐら、いきり立たせるで（？）！！」

そんな会話を背に、紅麗は重い足取りでヘリへと乗り込んだ。
すると、ヘリの中にすでに先客がいた事に気付く。
ヘリの内壁に備えつけられた椅子に腰掛けていたのは、金髪の麗人―フェイトだった。

すると彼女も紅麗の存在に気付き、彼の姿を見て「あ…」と呟きを漏らした。
その髪の色も、その瞳の色も、顔立ちも体型も全く違うのに――紅麗の瞳にはフェイトの姿が、自分の腕の中で死んでいった亡き恋人の姿に見えた。

「……」

紅麗は顔を反らし、彼女から一番離れた席に腰掛ける。

それから二人は、気まずげに沈黙していた。

昨日の今日で、フェイトは彼に話し掛ける事を躊躇っていたが、やがて意を決して沈黙を破る。

『あ、あのっ…紅麗っ！』

フェイトは上擦った声音で紅麗を呼びかけた。

彼はぴくりとも反応せず目線すら向けてこなかったが、それでもフェイトは紅麗に話し掛ける。

『えっと…今日の会談が終わったら、ちょっと話があるから…付き合ってくれないかな？』

「……」

懇願するようなフェイトの言葉を、紅麗はすぐには答えなかったが

『…ああ』と小さく呟いた。

其之三十五：生殺と、救い手

午後、聖王教会―。

「なぁ、紅麗？　今日だけ。今日だけでも良いんや。できればこれから先の未来―ずっとそうしてほしいんやけど、とりあえず今日だけは？大人しく？してや？」

目的地に着いて早々、八神はやては掃除が行き届いている渡り廊下を歩きながら、後ろにいる同行者に念入りに念入りに言い聞かせていた。

「？疑っていれば敵は見つかる。けど、信じてみなければ仲間は見つからない？―なんて素敵な言葉があるんやけど、日々の行動を見ているとな…なんか、こう…はっきり言えば…信じたくても信じられないんやなぁ。だから、私はあんたにこの言葉を贈る――大　人　し　く　し　て　や？」

「…言っている意味がわからん」

「これから会う殺戮め…これから会う方たちに粗相のないよう、お願いしてるんや。いや、マジでマジで、ホンマにホンマに」

懇願するように言い聞かせくるはやてに対して、紅麗はこう答えた。

「……善処しよう」

「信じられるかァ！！！！」

はやては振り向きながら、怒り狂った狸のような形相（？）でシャウトした。

「なに、その溜め！？　なに、その言葉！？　善処するなんて言葉、信用できそうで一番信用できない言葉なんやでッ！！？　本来なら、あんたみたいな悪い子！『殺戮女神（こんなところ）　封印の地』に連れ込みたくなかったんや…！」

忌々しげに吐き捨てていると、自分たちの前に一つの扉が立ちはだかっていた事に気付く。

豪奢な雰囲気を漂わせるだけで何の変哲もない扉だが、はやての目には『地獄の封印門』にしか見えなかった。

なぜなら、この扉の向こう側には――拳骨一回で人を殴り殺せる（と、はやてが勝手にそう思い込んでいる）殺戮女神が存在しているからだ。

はやては汗が滲んだ手で扉をノックする。

程なくして、「どうぞ」と柔らかい女性の声が返ってきた。

その穏やかな声を聞いても、緊張感と恐怖心が全く和ませられる事なく、はやては『地獄の封印門』を開門した。

「いらっしゃい」

出迎えてくれたのは、麗しいブロンドの髪を揺らす美女だった。

「初めまして。聖王教会　教会騎士団　騎士――カリム・グラシアと申します」

カリムは柔和な微笑みを浮かべながら、自己紹介した。
その柔らかな物腰と、美しいルックスは、まるで？美を司る女神？のようだと人々は夢想してしまうだろう。
しかし、はやてには嫌と言うほどわかっていた。
目の前にいる『この存在』は、？美を司る女神？などという清浄な存在ではない。

――？ＴＨＥ・殺戮？やッ！！

殺戮を司る女神――？殺戮女神？だ。
見た目や態度が清楚に見えても、こいつの腹の中は真っ黒だ。内臓代わりに？腹黒召喚獣（ブラック・バハムート）？を腹内に住まわせているのだ。
そして、この殺戮女神は恋敵を滅ぼすためなら、『見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ）』という絶対命令を平気で下せるほどの残虐性を持ち（事実）、その拳から発せられる無差別大量殺戮衝撃波――『女神の甘い吐息（ジェノサイド・アポカリプス）』は地球を崩壊させるほどのドラゴンボール的な破壊力を持っているのだ（これはウ・ソ☆）。

はやてが失礼極まりない事を心の内で呟いている中、カリムは「ど

うぞ、こちらへ」と、紅麗たちを部屋の中に案内する。もし、カリムが相手の心を読む魔導具―『心眼』を所有していたら、八神はやては今頃この世の人間ではなくなっていただろう。

カリムに席を勧められ、なのはたちは「失礼します」と慇懃な一言を言ってから丸いテーブルを囲んだ椅子に座っていく。

「蛭湖、あなたも座ってちょうだい」

カリムは、椅子に座らずに部屋の壁際に佇む蛭湖に声をかけた。

「いえ、私はあくまで聖王教会（ここ）の一介の執事兼騎士でございますれば…」

蛭湖はいつもの生真面目さを醸しながらそう言うが、カリムは首を振った。

「いいえ、今日のあなたはお客さんよ。…座ってちょうだい」

それでも尚蛭湖は反論したが、数ヵ月の付き合いでも意外と強情な所がある主人の性格を熟知しており、何より彼女の気遣いを無下にできず、複雑な心情を抱えながら椅子に腰掛けた。

紅麗も、彼らに倣って「失礼します」と一言を添えて腰掛けようと

したとき、前方から視線が向けられている事に気付き、僅かに顔を上げる。
紅麗が座る席の――丁度真正面の席に、すでに?先客?がいた。
黒色の管理局の制服を着込んだ黒髪の青年。
この世界(ミッドチルダ)について独自に調べられる範囲で調べものをしていた紅麗は、新聞やニュースなどによく取り上げられているこの青年の名を知っていた。

クロノ・ハラオウン。

リンディ・ハラオウン統括官の実の息子で、フェイトの義兄だ。
※ちなみにヴァイスと『趣味』が合うため、二人は大の仲良し。

さて、そのクロノが紅麗に視線を向けていた。
睨んでいるわけではない。無感情の目を向けているだけだ。
だが、紅麗は――その無感情の瞳の奥に隠された、敵愾心を感じ取る事ができた。
今まで何度も向けられた感情(もの)だ。
故に、紅麗は特に気を悪くしなかった。だが、何故初対面の人間に敵愾心を向けられるのかと疑問に思う。
ある程度の予想はついているが、あえて理由を尋ねようとした。
だが、紅麗とクロノの間に早くも不穏な空気を敏感に感じ取ったはやてが、二人を話し合わせないために「ごほんッ!!!」とワザとの極みの咳払いをした。
そして、むせた。

「げほっ、げほっ!　けほっ、こほっ、おふんっ…ざで…んんっ!…マ～(美声)♪マ～(美声)♪マ～(美声)♪…さて…昨日の動きについてのまとめと。改めて、機動六課設立の裏表について…そ

れから、今後の話や」

顔をうつ向かせながら必死に笑いを堪えている友人（なのは）の姿が視界に入るが、はやては何事もなかったかのように、ドヤ顔で話し始めた。
しかし、その頬は羞恥で僅かに赤くなっていた。
クロノもまたはやての気持ちを汲み、何事もなかったかのように彼女の言葉を引き継ぐ。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア―？レリック？の対策と…独立性の高い、少数部隊の実験例」

クロノの言葉に合わせて、テーブルの上に複数人の顔写真を映し出したモニターが展開される。

「知っての通り。六課の後見人は、僕と騎士・カリム。それから、僕とフェイトの母親で上官―リンディ・ハラオウンだ。それに加えて…非公式ではあるが、かの？三提督？も設立を認め、協力の約束をしてくれている」

三人の老人の顔写真を見て、フェイトたちは驚きの表情を浮かべた。
紅麗もまた、？三提督？がどのような経歴を持つ人物なのかを知っているため、表情に出さなくても少し驚いていた。

「その理由は…私の能力と関係があります」

そう言ったカリムの手の上には、帯が巻かれた数十枚の古ぼけた札があった。

「私の能力――？預言者（プロフェーティン・シュリフテン）の著書？」

カリムは帯を取ると、全ての札が淡く発光しながら宙に浮いた。

「これは最短で半年…最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した予言書の作成を行うことができます。二つの月の魔力が上手く揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません。予言の中身も、古代ベルカ語で…」

札に古代ベルカ語の文字が浮かぶが、なのはたちには全く読めなかった。

「解釈によって意味が変わることがある難解な文章…世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで…解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割りとよく当たる占い。つまりは…あまり便利な能力ではないんですが」

苦笑いするカリム。

「ちなみに、ウェコム…地上部隊はこの予言がお嫌いや。あのメタボ中将が、この手のレアスキルとかお嫌いやからなぁ」

「レジアス・ゲイズ中将だね…」

上司に向かって事実とも言える失礼なあだ名をつけるはやてに、苦笑いするなのは。
そんな彼女たちのやり取りに構わず、クロノは話を進める。

「そんな騎士・カリムの予言能力に、数年前から少しずつある事件が書き出されている」

クロノはカリムに目配せすると、彼女は頷いてから予言を読み上げ始めた。

――古い結晶と無限の欲望が集い、交わる地――

――死せる王の元、聖地より、かの翼が甦る――

――死者たちが踊り、なかつ大地の法の搭は虚しく焼け落ち…――

――それを先駆けに、数多の海を守る法の船も砕け落ちる――

「それって…まさか…」

予言の内容に含まれている—特に後半の単語から、なのはたちは察する事ができた。彼女たちの代わりに、カリムは予言の意味を口にした。

「ロストロギアをきっかけに始まる…管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊…」

これが、機動六課が設立させた理由。
何十、何百もの次元世界を管理する時空管理局が崩壊するとは、そっとする話だ。
だから、機動六課に多くのS級魔導師と騎士たちが揃えられたのか。

「…予言は、これだけではありません」

カリムの一言で、紅麗たちの意識が現実に戻る。
数々の予言を読み上げてきた聖王教会騎士は、まるで不気味なものを見るような顔で？一枚の札？を見下ろしていた。

「先程…私の能力は、二つの月の魔力が揃う時――つまり、年に一度しか発動できないと言いました。しかし…今年の分の予言はすでに現れたはずなのに、？この予言？は、今年で二度目のもの。しかも…？二つの月の魔力が揃えるという過程を踏まず？に現れたのです」

フェイトたちは目を見開いた。

法則を大きくねじ曲げられている。

二つの月の魔力が揃っていなかったのなら、いったい何の力が働いて予言を発動させたというのだ？

「その予言が現れたのは…いつなんですか？」

背筋が凍るような感覚を覚えながら疑問を口にするフェイトに、カリムはこう答えた。

「紅麗さんたちが…この世界（ミッドチルダ）に次元転移される前日です」

カリムは、新たに現れたその予言を読み上げた。

―異界より、？炎の堕天使？を初め、数多の戦士が降り立ち、世界の未来を変えん―

―天には、一分(いちぶん)以て羽搏く悲壮な不死鳥―

―地には、血肉を漁る狂わざる竜―

―火焔の合戦が始まり、この世は心躍らされながら灼熱に包まれる―

―そして、紅く染まった太陽が血涙という名の赤光を垂れ流し、大地を赤々と照らす―

「？炎の堕天使？…」

はやては、一行目に現れた単語を呟きながら、この世界に現れし炎を操る青年に顔を向けた。他の者たちも、はやてに同意するように彼に顔を向ける。

「…私のことだろうな」

紅麗もまた、？炎(それ)の堕天使？は自分以外誰でもないと確信する。

「では…二行目の？不死鳥？は？」

クロノは疑問の呟きを漏らすと、「それも私のことかもしれん」と紅麗が再び発言する。

「私が炎術士だった頃…力の源である炎の型は、不死鳥。他の者たちが該当しないのであれば、予言にあるその？不死鳥？は私のことになるかもしれん」

「…で、次に書かれてある、？竜？は？」

「…それは最近、巷で多発している連続通り魔事件の犯人――刹那だと思われます」

なのはの疑問に答えたのは、蛭湖だった。

一方犯人の名を耳にした紅麗は、その名前を知っているらしくぴくりと反応した。

「何か知っているみたいね？」

カリムが尋ねると、蛭湖は説明を付け足す。

「はい。通り魔事件の被害者の証言にあった？紫色の炎？―それを扱う男を昨日目撃しました」

「その通り魔の犯人が、どうして?竜?に結びつけられるんですか?」

蛭湖はなのはの質問を答えようとしたが、そうなると花菱烈火が使役する?火竜?の事について話さなければならない。
?火影?に対する知識は多少あっても、?火竜?についての知識は全くない。
だから蛭湖は、内容を少し変えて説明する事にした。

「実はあの男も、私たちと同じ世界の人間なのです。そして…前の世界で、奴は?邪悪竜?というあだ名を付けられていました」

「それで、その通り魔事件の犯人を?竜?だと推測するわけか…」

クロノは顎に手を当てながら呟きを漏らす。
なのはたちが予言について話し合ってる中、紅麗は蛭湖に念話を飛ばした。

『蛭湖、その刹那という男は…』

『ああ。お前の弟―花菱烈火が操る複数の火竜の内の一匹――あの刹那だ。私も最初は信じられなかったが…炎を使い、自分から?邪悪竜?と名乗り、左胸に火影の刻印が刻まれていた…火竜・刹那で間違いないだろう』

『…まさか奴の飼い蛇が、人間の姿になってここに現れるとはな…』

?火竜?が、元は炎術士（にんげん）だった事は天堂地獄との決戦の時に知ったが、その火竜が成仏（消滅）していなかったとは驚きだ。

蛭湖は念話で語りかける。

『次の予言に?火焔の合戦?という単語がある…前の文章を考慮してみると、これは炎の能力を持つお前と刹那が戦うということになるのではないか?』

『…その解釈は間違っていないが、炎を使う?血肉を漁る狂わざる竜?は…何も奴だけではない』

紅麗のそう指摘した瞬間、蛭湖の脳裏に一人の人物が浮かんだ。

『まさか…シグナムか…!?』

『恐らくは』

紅麗が淡々と返すと、蛭湖は『馬鹿な…!』と吐き捨てた。

『奴とお前が対立していても、機動六課の人間同士だ。敵対することなぞ―』

『奴の様を見ていれば、可能性は否定できん。私からはなくても…奴の方から牙を剥いてくるだろう。その時は…私は何の躊躇いもなく迎え撃つ』

場合によっては殺す事もいとわないと、紅麗は断言した。

蛭湖は彼の言葉を聞き流す気にはならなかった。

いつ殺し合ってもおかしくない不穏の空気が、彼らの間に漂っている。

紅麗が言ったように、彼から仕掛ける事はなくても、シグナムから仕掛ける可能性が高い。

彼女の主である八神はやての存在が、シグナムの抑止力となっているが、その歯止めがいつ外れるかわからない。

だが、あくまで可能性の話。

予言にある？血肉を漁る狂わざる竜？は、刹那にも該当している。

それに？火焔の合戦？と言っても、それ＝？不死鳥？と？竜？が必ず戦い合うとも限らない。

―もし、紅麗とシグナムが戦うことになったとしても…私がさせてたまるか…。

蛭湖は、かつての自分を思い起こした。

彼は、裏麗を見限る以前――組織に対する？使命感？を以て戦ってきた。

自分を殺す事で、機械になる事で――命令があれば仲間すら殺してきた。

それによって強さを手に入れたが、その代わりに失うモノも増えた。
だが、火影忍軍のある男と戦う事によって――仲間のために戦う心と、自分の意思で戦う心に触れ、その強さに憧れるように、今まで殺してきた?自分?を解き放った。

紅麗も、シグナムも――かつての自分と同じだ。

自分の向かっていく先にあるものは、?空虚?しかない事をわかっていながら、動かす足を止めようとしない。
だが、警告したところで素直に聞き入れてくれるとは思えない。
それ故―もし二人が戦う事になったその時は、自分が命を賭して食い止める。
蛭湖は密かに決意した。

一方、そんな彼の思案など露程も知らず、紅麗は予言の最後の文章の意味を探っていた。

―?紅く染まった太陽?…。

どういう意味だろうか?
文字通り、天体の太陽が紅く染まるというのか?
それとも、太陽は比喩表現なのか?
だが、この世界に住むカリムたちにも、比喩的な意味で?太陽?に該当する存在がわからないようだ。
次に書かれる、太陽の光が大地を赤々と照らすという文章も意味がわからないが、少なくとも前の予言のような危険性は感じられない。
ただ直接的に書いていないだけかもしれない。

だが、予言の意味は結局わからぬまま、今日の会談は終わった。

◇

「―待ちたまえ」

会談を終えて機動六課へ戻ろうとしたはやてたちだったが、クロノに呼び止められた。
いや、正確にクロノが呼び止めたのは、彼の視線の先にいる人物―
―紅麗だった。

「…私に何か御用でしょうか？」

紅麗は椅子に座り直しながら、慇懃な口調で尋ねた。
だが、言葉は丁寧でも、クロノを見返すその瞳は相手を見下すような冷たい色を湛えていた。
そう。彼は？敵？に対して――憎んでいた異母弟にも、最も憎き義父にも敬語を使う男だ。
だが、上官に対して反抗的な目を向けてくる事にあえて注意せず、クロノは気付かないふりをして一つ尋ねた。

「昨日、デバイスを殺傷設定にしたうえに犯罪者の一人を殺しかけたそうじゃないか。…どういうつもりだ？」

嘘も誤魔化しも許さない。
鋭い瞳と厳しい声音に圧力を加える。
だが、それに対する紅麗は動揺する事なく返答した。

「どういうつもりも何も…私は?やむを得ず?ああするしかなかったのです」

紅麗はこのように説明するが、嘘であった。
あんなただ倒れにくいだけの雑魚なぞ、自分の力を以てすれば昏倒させる事はできる。
だが、手間がかかるから殺した方が良かったのだ。
そんな彼の嘘に気付く事ができたのか、クロノの不信感は消える事はなかった。

「…いまいち信用に欠ける。君はリミッター付きとはいえあのシグナムを無傷で打ち倒し、なのはたちが苦戦した容疑者相手に十分対応するほどの実力を持っているじゃないか。…君が前にいた世界の環境がどんなところであったのかは知らんが、郷に入っては郷に従えだ。時空管理局は人殺しなぞ御法度だ、そのくらい知っているだろう?」

「…では、クロノ・ハラオウン提督。いかなる理由があろうと、人を殺めてはならぬ――そう言いたいのですね?」

「だから何だ…?」

「？つくづく甘い？ということだ、クロノ・ハラオウン…」

急に声色と口調が変わっただけで、部屋中が圧迫感に包まれた。
今まで味わった事がない？殺気？というものを当てられたクロノは冷や汗を垂らした。
そんな彼を、常に殺気を纏い続ける事ができる青年が瞳孔の開いた眼で見据えながら、怨嗟を呟くように言葉を発する。

「人をも殺す覚悟がない者は、戦場（いくさば）に立つ資格はない。容赦無く殺しに来る敵も現れるだろう。もし…その敵が自分より強かったら、どうするつもりだ？　つまらぬ道徳観念で自分も、果たすべき任務も、守るべき者も失ってしまったら…これ以上に無いほどの間抜けだ。…ここで一つ、貴様に問答を与えてやろう」

紅麗は生徒に対する教師のように、質（たち）の悪い問題を贈る。

「お前の最も愛しい者が、とある犯罪者に人質にされた。
お前の手には拳銃が握られている。

すでに照準は定まっている。
そのまま一回だけでも引き金を引けば…犯罪者を殺す事ができ、愛する者を護る事ができる――それを踏まえた上で問うぞ。？死んでも守る者の為、人をも殺す覚悟があるか？？」

この問題に対し、クロノは答える事ができなかった。
魔法だったら話は別だ。
非殺傷設定にした魔法を相手に与えれば、殺さずに昏倒させられる便利な機能がある。
だが、紅麗が尋ねているのは、そういう事ではない。
もし、相手を殺さなければ守れない状況に立たされたら――自分は、撃てるのか？

「…何を黙っているんだ？　？簡単な？問答だ。犯罪者相手に躊躇う理由もないだろう？　躊躇の感情を湧き上がらせる、その根源は何だ…？　組織の枠組みに感化された自分の意地か？　それとも、ただ人を殺すのが怖いのか？…どちらにしろ、そんな下らない理由で、愛する者を見殺しにするのか？」

「やめろ…」

「問答をもう少し簡単にしてやろうか？　その犯罪者は何人、何十人もの人間を殺している。逮捕されれば当然死刑と確定される。…殺しても良い人間なのだ。？自分は正義だ？と胸を張って殺しても良いのだぞ。私が殺そうとした奴は…そんな人間なのだ―」

次の瞬間、渇いた音が響いた。

紅麗は、自分の頬に痛みがある事を感じた。

懐かしい痛みだった。

―そうだ…。

―この痛みは…？彼女？に与えてもらったものと同じ…。

紅麗は無表情のまま視線を動かすと、そこには繊手を振りかぶった金髪の女性が涙を溜めた瞳で見下ろしていた。

「勝手な…勝手なこと、言わないでよ！！」

フェイトは紅麗の胸ぐらを掴んだ。

「あなたはそうやって人を殺してきたの！？　殺しても良い人間だと自分勝手に判断して、人を殺してきたの！？」

「……」

―…ああ、そうだ…。

―私はこの手で…何人、何十人もの罪のない人間を殺してきた…。

「確かに…！　私たちは人を殺したこともない！　守るべき人を守るために、人を殺さなければならない状況に立たされたこともなかったし、何より魔法の力に助けられたッ！　でも、もし…魔法の力すら通用しない、その状況に立たされたら…人を殺せるのかと迷ってしまうかもしれない…。けれど…これだけは言える…！」

フェイトは力強く紅麗を見据えると――かつて薔薇の花を叩き落とし、花の命を侮辱した紅麗を叱責する？彼女？のように言葉を紡いだ。

「殺しても良い人間だから、人を殺す考えは絶対に認めないッ！！　そんな権利、誰にもないッ！！……人の命、は…人の命は、そんな軽いものじゃないんだよ！！？」

「…命が重かろうが、軽かろうが…」

激怒するフェイトから愛する恋人の幻影が少しずつ消えていくのを感じながら、紅麗は淡々と言葉を紡ぐ。

「人は死ぬぞ…簡単に死ぬ…。簡単に奪え…簡単に奪われる…。自分にとってどれほどかけがえのない者でも、あっさりと消えてしまう…」

紅麗は相変わらず仮面のような無表情を見せていたが、フェイトの

目には全く違うように見えた。
昨夜出会った?彼女?の言う通り、今の彼は――幼少の頃のままの姿で、膝を抱えながら泣いているように見える。

「どうすればいいのだろうな…?　自分の無力さ故に、愛する母をも見殺しに…自分の無力さ故に義理の母が奪われていく時、私は押さえつけられたまま何もできなかった…。全ての理由が自分の?無力?で…もう二度繰り返させないために、母の教えを心に刻みながら力を磨いてきた…。だが…どれほどの力を手に入れても…意味はなかった…失う一方でな」

誰にも語るつもりがなかった自分の本心。
言葉を紡ぐ紅麗自身も不思議に思う。
何故、フェイトに対してこれほどまでに素直になれるのだろうか?

ふと、顔に暖かい感触が触れられた。
紅麗は意識を現実に向けると、フェイトがその両手で彼の頬を優しく包み込んでいた。
彼女の瞳から溢れた涙が、ぽたぽたと紅麗の顔に落ちていく。

「もう、いい…もういいよ、紅麗…」

フェイトは涙を流しながら、無感情の仮面を剥がすように紅麗の頬を撫でる。

―ずっと前から、思っていたことだ…。

―紅麗に、？冷たい氷？なんて似合わない…。

―紅麗には…？激しくて、暖かい炎？がよく似合う…。

「私、は…私たちは消えないよ…？　だから、もう…？悪ぶる？必要はないんだよ？　もう、自分から距離を置くことなんてない…」

紅麗はフェイトの言葉に、呆然となった。
唐突に何を言い出すのだ？
悪ぶる？　自分から距離を置く？

「…紅麗。一つ、素朴な質問をさせて」

疑問符を浮かべる紅麗に語りかけてきたのは、これまで静観していたはやてだった。

「紅麗が、人を殺しかけた時のことや」

紅麗が門都の腹を貫手で貫き、殺傷設定の炎で焼いた事だ。

「あの時…紅麗は最初の一撃で心臓でも貫けば、犯罪者を殺すことができたはずや。なのに、紅麗は急所を狙わず…そのまま、まるで

?見せつけるように?焼きつけた。人を殺そうとしないのが甘いと言うのなら、紅麗の行為もまた別の意味で問題や。…これは、どういうことなん?」

はやての問い掛けを受け、紅麗は自答した。
やがて、答えはすぐに導き出せた。

―ああ…そうだ…。

―私が…わざと心臓を外して奴を焼きつけたことも…煉華を傷付けたことも…。

―全て…。

紅麗は、涙を流し続けるフェイトを見上げた。

―全て…?お前に、嫌われるためにやったのだ?…。

紅麗は、機動六課で過ごす日々の中でいつの間にか、フェイトに対して恋心が芽生え始めた――今は亡き、愛する?彼女?の幻影が見えてしまうほど。
だから、彼はフェイトに嫌われたかった。

理由は二つある。

一つは、?また会おう?と約束した、愛する紅を裏切りたくなかっ

た。

もう一つは、フェイトを死なせたくなかったのだ。
彼女だけではない。なのはも、ヴァイスも、薫も、エリオたちも。

―私は？死神？だ…。

その証拠に、自分が好く者たちが次々と消えていった。
愛する者も、両親も、仕えてくれる仲間も。
後一歩のところで死んでいったかもしれない者もいた。

何人、何十人もの人間を失っても…母の教えの元に、決して立ち止まりはしない。

―だが…もう？御免？だ…。

これ以上…一人だって失いたくない。

だからこそ、自分の？鬼の姿？をあえて、彼女たちの目の前に晒した。
そうして嫌われる事で、自分の？死神？を彼女たちから遠ざける事ができる。

それでいいのだ。

好かれながら死んでいくよりも、嫌われながら生きてもらった方が

ずっと良い。

だが、自分が皆の前から姿を消さずに、未だに?機動六課?に留まっているという事は…まだ、彼女たちと共に歩みたい事なのだろうか?

「――帰るぞ」

紅麗は長い思案を中断させ、椅子から立ち上がる。

「おい、待ちたまえ!」

退室しようする紅麗の背中に向けて、クロノが制止を呼び掛ける。
紅麗は一旦立ち止まり、背中を向けたまま言葉を発する。

「クロノ・ハラオウン…お前の?我が儘?通り、人を殺す事は?控えよう?。だが、あくまで?控える?、だ。もしもの時は、私は人を殺す事に躊躇しない」

「そんなこと、許されるとでも――」

クロノは叱責を飛ばそうが、目の前に包帯が巻かれた手がかざされて言葉が詰まった。

クロノは視線をずらすと、手を差し出していた蛭湖が首を振る。

『?あの紅麗?が人を殺すことを控えると言ったのです。それだけでも、十分過ぎます』

しかし、クロノは彼の言葉を納得できず、彼らを束ねる部隊長(はやて)に非難するように視線を向けるが、彼女は苦笑しながら肩を竦めた。

『…ねぇ、クロノ』

フェイトは、念話を使って義兄(クロノ)に声をかけてきた。

『私、こんなことは言いたくないけれど…紅麗の言ってること、間違いじゃないと思う…。私たちは…戦いの中で、?人を殺さなければ守るべき者を守れない状況?に立たされたことがなかった…。それは、運が良かっただけかもしれない。けど…これから先、そういうことが起こるかもしれない…。私たちが過信している魔法だって、通用しない日が来るかもしれない。?綺麗な道?を歩めるのなら、それが一番良い…でも、?もしもの時?があるかもしれない。時空管理局(わたしたち)…それを考えるべきなんじゃないかな?』

クロノは絶句した。

あのフェイトから、そんな言葉を聞けるとは絶対に思えなかったからだ。

そして、思い返されたのは――１０年前、まだ9歳だったフェイトに対して、残酷な決断をした自分の事。

―外道と言うのなら…僕も、人のことは言えないな…。

◇

「?消えない?、か…」

部屋から退室した紅麗は誰もいない廊下を歩きながら、フェイトの言葉をそのまま呟いた。

安い言葉だ。
言うだけなら、誰でもできる。
だが、それにすがってしまうほどに…?死神(じぶん)?にとって、とても嬉しい言葉だった。

―すまない…紅…。

紅麗は愛する恋人に謝罪した。

―私は…支えになってくれる者がいないと…生きられないようだ…。

紅麗は懺悔するように、何かを決意するように心の内で呟いた。

其之三十五：生殺と、救い手（後書き）

大学のレポートがあるので、次回も一ヶ月以上かかるかもしれませんｍ（＿＿）ｍ

ちなみに今日、俺の誕生日です。いつの間にか紅麗と同い年…彼と比べると、自分はなんてちっぽけな人間なんだと痛感してしまう（比べること自体、おかしいですが…）
…あ、別に何も期待してないですよ？ｗ　シンセのシールドとか、コートとか、食べ物とかを宅配で送ってほしいなんて邪な期待はしてないですよｗｗ

其之三十六：両手

紅麗がヘリの停留場へと着くと、ヘリに寄りかかる一人の青年の姿があった。
ヴァイス・グランセニックだ。
彼の口には煙草がくわえられている。
どうやらはやてたちが会談している間にこっそりと一服していたようだ。
彼は紫煙をくゆらせながらどこか遠くを見つめていて、まだ紅麗の存在に気付いていない。
その姿を見た紅麗は彼に声をかけてみた。

「…ヴァイス」

「トレーズッ!?」

ヴァイスは妙な驚きの声をあげて、慌てて紅麗の方に顔を向けた。

「…なんだ、紅麗か。おどかすなよ…俺の?生き残るための儀式?を邪魔しやがって」

何故、ただの喫煙で?生き残るための儀式?になってしまうのか気になったが、ヴァイスの?趣味?に巻き込まれてしまうと思い、紅麗はあえて突っ込まなかった。

「それよりハッチを開けてくれ。もう間もなく、フェイトたちも来るだろう」

「（それより…？）　会談終わったのか。んじゃ、帰る準備しねぇとな」

ヴァイスは吸いかけの煙草を落とし、靴底で踏んで火を消すと、その吸い殻を拾ってポケットにしまった。
そして、そのままヘリの操縦席に移動しようとした時、不意に振り向いて紅麗の顔をマジマジと見つめてきた。

「……何だ？」

「…お前、何か顔つき変わったよな」

ヴァイスから口に出た言葉と、その表情はいつにない真面目さが窺われた。

「何か、ふっ切れた…みたいな顔してるぜ？　向こうでなんかあったか？」

いつもふざけているくせに、この時に限ってやけに鋭い。
紅麗は、微かに苦笑する。
それは鋭いヴァイスに対してでもあり、？ふっ切れた自分？に対し

てでもあった。

「…ああ、ふっ切れたさ」

紅麗は嘘偽りなく正直に答えた。
言葉だけなら悩みから解放されたかのように思えるが、その言葉を紡ぐ声色はどうしてこうも、罪悪感に苦しんでいるように感じられるのだろうか？
しかし、どちらにしろ、ヴァイスにとって紅麗の姿が眩しく映った。
自分もトラウマからふっ切れるものならそうしたい。だが、それができないのだ。
ふっ切れたことに、どうして苦笑いができよう？

ヴァイスは彼に問いたかったがさすがに無粋と思い、紅麗に対して羨望の念を抱きながら操縦席へ歩いていった。

◇

紅麗たちを乗せたヘリは機動六課へ向かっていた。
その間、座席に腰掛ける紅麗たちはずっと口を噤んでいた。
先程聖王教会で、管理局が滅ぶという不吉な予言を聞き、紅麗とクロノが管理局における殺人について口論したのだ。
例外の状況を除いて紅麗が人を殺すことを控えると約束した後とはいえ、重々しく沈黙してしまうのは無理ないのかもしれない。

だが、その沈黙の空気を破ろうとしたのは、紅麗だった。
自分は、機動六課部隊長(はやて)に話さなければならない。
自分はずっと、何十、何百人も殺してきた人間であることを隠し通していた。
?殺してもいい人間?がいると考える思想を持っていることも、隠し通していたのだ。

本来自分は、人殺しをご法度としている管理局――機動六課にいてはならない人間だ。
相反する思想が存在すれば、必ずどこかで反発してしまう。

では何故、それでもなお、彼が機動六課(ここ)にいることを選んだかというと――彼は、ただ?居場所?が欲しかったのだ。
関わる者たちを死に追いやる?死神?である自分の事を忘れてしまうほどに、４００年前の時代へ帰り両親を弔うための使命が霞んでしまうほどに、彼自身も気付かずに?居場所?を求めていたのだ。

元の世界には存在しなかった、暖かな?居場所?に居続けるために自分が人殺しであることを隠し続けていたが、隠し通していたが故に、人殺しの姿を目の当たりにした多くの仲間にショックを与えることになってしまった。
それに対する謝罪として、機動六課部隊である八神はやてに、なのはにも、そしてフェイトにも人殺しである自分の過去を、彼は打ち明ける。

「…はやて――」

「紅麗の言おうとしてること、何となくわかるで」

紅麗が打ち明けようとする前に、はやてが一言で制した。

「あんなことあったばかりやからな…予想はできる。せやけど、そんな無理に言おうとする必要ないで？」

はやては紅麗を真っ直ぐに見据え、いつになく真剣でいて、優しげに言葉を紡ぐ。

「ここ数日、色々あったから紅麗だって頭ん中ゴッチャゴチャやろ？」

「…聞きたくはないのか？」

「まぁ、ぶっちゃけ聞きたいで？　けど、無理に聞こうとするほど私だって不躾な奴やないよ。……話したくなかった理由があるんやろ？　それはあんたの問題や。私はそれを訊く方法を知らない。あんたの気持ちに踏み込んで、泥をつけずにそれを訊く上手い方法が私にはわからへん。…だから、待つで。気持ちを整理できた頃でも、何ヵ月先でもええ。いつかあんたが話したくなるまで、話してもええって思う時まで。それまで…別に話さんでええよ」

はやては澄ました顔で言い切ると、話は終わりだとばかりに足を組みながら瞳を閉じた。

すると、彼女たちのやり取りを静観していたなのはが何とも言えない複雑な表情を浮かべながら口を開いた。

「……はやてちゃん。それ、マンガの受け売りでしょ？」

「「「……」」」

再び沈黙の空気が流れた。

「……」

瞳を閉じたまま何も答えないドヤ顔のはやて。

「……」

はやての言葉を感心していた紅麗も？そうなのか…？？と訴えかけるようにはやてを見据える。

「……」

フェイトもはやてを見つめる。

「……」

はやてはゆっくりと瞳を開けると、窓から外の景色を見ながら何事もなかったかのように何も答えなかった。
ドヤ顔をしているが、どうやら図星のようだ。

◇

機動六課―。

「ああ、そうやッ！　マンガの受け売りですぅ！　ＢＬＥＡＣＨで、ルキアの言葉を受け取りした一護の言葉を受け売りしたんやッ！　それが何か！？　受け売りしましたけど、何かァ！？　カッコ良かったから私も使いたかったんですが、何かァ～！！？」

「ああ…そんなに怒らないでよ、はやてちゃん…。ごめんね…私、空気読めなくて…」

「ホンマよ！　このっ、オルゴ・デミーラッ！！（笑）」

「はやてちゃん、怒　る　よ…？」

「ごめんなさい…椅子だけは…椅子で滅多打ちだけはご勘弁で夜露死苦…」

はやてとなのはの会話を背後に聞きながら、紅麗は機動六課隊舎の

入り口をくぐった。
すると、ロビーのソファーに腰掛けている五人の男女がいることに気付く。
義弟―薫と、ティアナたちフォワードメンバーの四名だ。
どうやら五人は紅麗のことを待っていたようだ。
彼の存在に気付くと、素早くソファーから腰を上げ、駆け足で駆け寄って来た。

「あの…おかえりなさい、紅麗兄さん」

まず、五人の中で声をあげたのはエリオだった。
彼の表情は紅麗に対して気まずげな色を見せ、ティアナたちも同様の表情を浮かべていた。
紅麗もまた、表情には出していなかったが、自分の戦い方で怖がらせてしまったエリオたちに対して気まずさを感じていた。
だが、彼らを無視して通り過ぎることもせず、そのまま無言で佇む。
一方、エリオはこれから言葉を発することを躊躇うように口を開閉させていたが、やがて勇気を振り絞って言葉を紡ぎ始めた。

「あの、ボクたち…薫兄さんから、紅麗兄さんたちのことを聞いたの」

「……」

「最初…どうしたらいいか、わからなかった…」

厳しくも、優しいはずであった紅麗が人を惨たらしく殺しかけた姿を見て、彼のことを慕っていたエリオたちは強いショックを受けた。
そして、困惑した。
これからどう彼と接すればいいのだろう？
義兄と見る慕う気持ちと、殺人者と見る恐怖する気持ちとの間に揺れ動いた。
薫から自分たちについての過去を聞かされたときも、困惑の気持ちはすぐに消えることはなかった。
悩んだ。
さんざん悩んだ。
そして、その答えは…

「…正直…今でも、怖い、と思ってる…」

「……」

エリオの紛れもない本心を聞いて、紅麗は一切表情を動かさなかった。
彼の言葉は妥当だと思っているからだ。
しかし、エリオの言葉はまだ終わってはいなかった。

「でも…？好き？って気持ちの方が、強い、よぉ…」

エリオはいつしか、泣いていた。
キャロもそうだ。
ティアナも、スバルも。

いったい、何故泣いているのだろうか？
紅麗にはわからなかった。
泣いている本人たちでさえわからなかった。
だが、泣く理由などいらない。
たとえ人を殺せるほどの冷酷な心を持っていようが、優しかった紅麗との思い出は嘘ではない。
恐怖を持っていようが、それ以上に好意の感情の方が強かった。
だからこそ、彼と共に居たくなるのだ。

エリオとキャロは紅麗の元へ駆け寄って、すぐさま長身の彼の腰にしがみついた。
幼い彼らは語彙が乏しく、相手のことが好きならば、ただ単純に？好き？と言い、さらに相手を抱き締めるという単純な表現しかできない。
しかし、単純だからこそ相手にわかりやすい。
好意を抱く相手に素直になれない紅麗にとって、単純に素直に好意を表現できる幼い彼らの姿がまぶしく映る。

紅麗は、身体にしがみつきながら嗚咽を漏らすエリオとキャロを一瞥した後、自分の両手を見下ろした。

この血に染まった両手で、無垢な彼らを抱いてよいのだろうか？
この手に抱いたら、彼らは自分の前から？消えて？しまうのではないか？

そこまで後ろ向きな思案していた紅麗は、誰かの視線を感じて顔を上げた。
彼の視線の先には、義弟の―小金井　薫の姿があった。
彼は小さく微笑しながら、頷いて見せた。

紅麗がどれだけ傷付けても、どれだけ罵声を浴びせても、薫は彼を慕う気持ちは失わず、最終的に共に歩むことを選んでくれた。
そして、?消える?ことがなかった。

紅麗は、表情には出さずに内心で苦笑した。

―…ああ…今まで通りだ…。

自分に好意を抱いてくれているのであれば、素直に受け止めよう。
消えてほしくなければ、時には自分が守り、彼らを戦いで死なすことがないように鍛えればいい。

「…泣くやつがあるか」

紅麗は、エリオとキャロだけに聞こえるように呟くと、彼らの小さな頭の上にそっと手を置いた。

其之三十六：両手（後書き）

三ヶ月以上ぶりの更新ですね、お久しぶりです。

更新して早々ですが、この作品のシリアスパートを終えたら魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～の更新を凍結しようと思います。

理由はいくつかあるんですが、大きな理由としては…今、自分は将来の夢へ向けて打ち込んでいます。

でも、執筆やバンドなどの趣味をたくさん持っていて、そこに時間を費やしています。

趣味を持つこと自体は悪いことではないですが…それをたくさん持っていては、将来の夢への努力も、執筆も、全て中途半端になってしまうと思い始めました。

それでもまだやりたいって気持ちがあり、数ヶ月は悩みながら何とかやってきたわけですが、やっぱり限りある時間の中で夢に向けて一点に打ち込もうと思い、作品の凍結を決意しました。

シリアスパートを終えてからとはいえ、完結できぬまま読者さんの胸の内にシコリを残すような真似をして、申し訳ありません。

あとほんの少し間ですが、それまではよろしくお願いしますｍ（＿）ｍ

其之三十七：ナミダ

紅麗に呼びつけられたフェイトは、彼と共に隊舎の屋外へと出ていた。

「話って、なに？」

「…お前こそ、私に言いたいことがあったのではないか？」

フェイトを優先しているのか、自分から話したくないのか、紅麗はフェイトを促すように尋ねた。
すると彼女は苦笑する。

「私は…もう、言いたいこと言っちゃったから」

「…そうか」

「……紅麗は？」

今度はフェイトが尋ねると、紅麗は気まずげに口を噤んだ。
顔に出ていないが、フェイトには、沈黙する彼の姿が痛ましく見えた。
どれほどの時間が経ったのだろうか？
一分か、二分か。

その間、フェイトは全く嫌な顔をせずに紅麗の横顔を見上げ続ける。
やがて、紅麗は意を決して重い口を開いた。
罪人が己の罪を口にするように。

「―私は、お前のことが好きだ」

突然の告白の言葉に、フェイトは目を丸くした。

「…私には、亡くした恋人がいたんだが…お前のことを好きになり始めると、その人と…重ねて見えていた」

告白する相手に、昔の女のことを語るものではない。
しかし、自分の正直な気持ちを伝えるために、あえて口にした。

「別れは、果たしたはずなんだがな。…私はあいつの幻影をずっと追いかけていたようだ…」

紅のことを、深く深く愛していた。
愛していた故に、彼女から巣立つことができなかった。
それによって、別の女に紅の影が見えてしまったのだ。

だが、聖王教会でフェイトが紅麗に全力で向かって来たことで、彼の気持ちが変わった。
彼女の叱りを受け、彼女の優しさに触れ、フェイトから紅の幻影が

消え去っていった。
それによってフェイトを、フェイトとしてみることができた。
そして、

「私には…お前が必要のようだ。私には…誰かの支えがなければ、ならないようだ」

叱ることも、優しくすることも含めて自分と向き合える相手に出会うことができた。

紅麗の言葉の中にある一字一句を聞き澄ましたフェイトは小さく頷いた。
そして、嬉しそうに微笑んだ。

「…私も、好きだよ。ずっと前から、好きだったよ」

「…そうか」

ようやく自分の拠り所を見つけられたような安堵の言葉を呟く紅麗。
すると、彼の瞳から涙が溢れ始めた。
そのことに気付いた紅麗は慌てたように自分の目元を隠した。

「っ、すまない…。もう泣かないと…決めていたのにな」

涙を流すな―それが亡き母の教えであった。
だから堪えていた。

仲間が死んだときも。
紅と別れた果たしたときも。
弱々しく泣きはしなかった。

これからどんなことが起きても、決して涙を流しはしない。
すると、暖かい感触が紅麗の顔に触れた。
フェイトがその両手で、紅麗の顔を包み込んだのだ。

「いいよ、泣いても…」

フェイトは紅麗の顔を見据えながら優しく言葉を紡ぐ。

「泣かなきゃ、辛いでしょ？　一人のときだっていい、私の前だっていい…泣いてもいいんだよ？　もっと強くなるために、泣くことだって必要だよ」

フェイトの微笑みを呆然と見据えていた紅麗は強く彼女を抱き寄せた。
そして、彼女の肩の上で声を圧し殺しながら涙を流した。

いったいどれだけの涙を溜めてきたのだろう。
いったいどれほどの悲しみに耐えてきたのだろう。

涙する彼の姿は―まるで、幼少の童（わらべ）のような姿であった。
ああ、そうだ。
彼は幼い頃から涙を堪えていたのだ。

フェイトも悲しみを受け入れるように、紅麗を抱き返してあげる。
広い背中であったが、どこか小さく感じた。
だが、フェイトは失望などしなかった。
今まで、普段の紅麗の姿を見ていて、自分たちがちっぽけに感じていた。
力も、心も強く、弱いところなどない―自分たちとは違う人間だと思っていた。
しかし、それは違っていた。
彼もまた、自分たちと同じだったのだ。
こんなにも思い悩み、ちっぽけな弱い人間だったのだ。

気付けば、フェイトも涙を流していた。
彼が漏らす嗚咽、自分の頬を濡らす彼の涙に、フェイトは堪え切れなかった。
本来なら、笑顔で抱き返してやりたかった。しかし、あまりにも彼の歩んできた悲しみが深すぎた。
それに、彼が泣いている理由は心の拠り所を得られた安堵だけではなかった。

彼は、悔しいのだ。
かつての恋人を裏切って、他の女に身を寄せてしまった自分の弱さに。
彼は、そのことで一生悔いてしまうのかもしれない。
だからフェイトはこれから先、彼の悔しさを少しでも和らげるために努めようと決意した。
？彼女？に全てを託されたのだから。

そんな二人の姿を、遠くから見つめる第三者の姿があった。

「…よかったね、紅麗」

紅は木の陰に隠れながら満足げに微笑んだ。

嫉妬していないと言えば、嘘になる。
本来なら、自分がやるべきことでありたかった。
自分が彼を慰めて、彼の腕に抱かれて、彼に愛されたかった。
だが、彼を叱ることすらできず、彼を苦しめてしまったのは自分だ。
そんな自分が彼の前に立って、慰める資格などない。
たとえ紅麗が今でも愛してくれたとしても、許してくれたとしても、
自分は動くことができない。
自分で、自分を許せないのだ。
絶対に。

だから、フェイトに全てを託したのだ。

―ヤキモチは、確かにあるんだけど…。

紅は木の陰からひょっこりと顔を出し、泣いている紅麗を一瞥すると、もう一度微笑んだ。

―…でも、紅麗が、やっと?泣き止んで?くれた…。

それで十分だ。

嫉妬よりも、彼が?泣き止んで?くれた嬉しさの方が強い。

―私にとって一番悲しいことは、大好きな彼が泣いていること…。

―私にとって一番嬉しいことは、大好きな彼が笑っていること…。

心の中でそう呟いた紅は、?飛び立つ準備?を始まる。
彼女の背中から、二筋の紅い炎が噴き出した。
それは、一対の紅い炎の翼。
炎という点を除けば、まるで天使のような姿であった。

―今度こそ…さようなら…。

紅は愛する人に向けて、二度目の別れの言葉を口にする。
それは、二人の幸せを願うような声音でもあり、寂しそうな声音でもあり、また会えることを期待するような声音でもあった。

―さようなら…大好きな紅麗…。

彼女の瞳から一筋の涙が流れるとほぼ同時に彼女は飛び立ち、地面に一枚の紅い炎の羽根が落ちていった。

其之三十八：自分の存在

早朝　機動六課隊舎の渡り廊下―。

「…謝れだと？」

紅麗はフェイトの言葉に、訝しげに返答した。

「うん、謝ってほしいの」

謝ってほしいというのは、煉華のことであった。
？パパ？という人物に裏切られ、紅麗に身も心も痛みつけられた彼女は睡眠も食事もろくに取れないほどに不安定な精神状態となっている。
フェイトの優しさと説得により何とか自殺は踏み止まったが、それでも危険な状態であり、また自殺しようする可能性だってある。
そうさせないためにフェイトは紅麗に、煉華に謝ってほしいと頼んだ。
しかし、

「―断る」

紅麗は顔を反らしながら拒否の言葉を紡いだ。

「ッ！？　どうして―」

「勘違いするな。私は奴のことが憎くて、謝りたくないわけではない」

フェイトが顔を強張らせながら怒声を発しようとしたが、その前に紅麗が自分の言い分を主張し始めた。

「私が謝っただけで…奴の心は救われるのか？」

冷水のような紅麗の言葉に、フェイトの激昂の炎がすぐさま鎮火した。

「謝罪の言葉一つで…奴の心は決して救われはしない。私も、？あの男？も…あいつにそれだけのことをしたのだ」

「……」

フェイトは紅麗の言葉を納得するように、何も言えずに口を噤んだ。納得できたのは、自分が煉華と同じ境遇を味わったことがあるからだ。

自分はかつて、母（プレシア）に数々の非道な言葉を言われたが、その後もう一

度母に会いに行った。
会いに行ったのは、母が自分に謝ってほしかったからではなかった。
―…そうだ…。私が母さんに求めたものは…謝罪の言葉なんかじゃない…。
―私が…母さんに求めたものは――

「――奴の部屋はどこにある？」

訪ねてきた紅麗の声で、フェイトの思案が中断される。
以前の彼女だったら、煉華の場所を教えることを躊躇したであろう。
しかし、お互いわかり合えたことでその気持ちは薄れていた。
暴言や暴力を振るってきたが、自分にできなかったことを彼なら何とかしてくれるかもしれない。
フェイトは煉華がいる部屋の場所を教えた。

◇

隊舎の一室にあるベッドの上で、赤髪の少女――煉華が膝を抱えながら座り込んでいた。
昨日の今日で、彼女は睡眠も食事もろくに取れず、その表情から生気が感じられなかった。
？パパ？に裏切られた絶望感と、紅麗からの恐怖心で自殺をしようとした煉華だったが、フェイトの説得で何とか踏み留まった。

しかし、この状態がいつまで続けば、いずれ限界が来る。
また近い内に自殺する可能性も高く、睡眠と食事もまともに取らない日々が続けば衰弱してしまう。
その時、煉華は鈍くなってしまう感覚のせいで、すぐ近くに来ている?あの男?の存在を感じ取ることができなくなっていた。

自分が生み出されるきっかけとなった?あの男?の存在を—。
自分が最も恐れる?あの男?の存在を—。

部屋のドアが開く音が鼓膜を打たれ、煉華はすぐさま入り口に顔を向けた。
そこには、顔の一部に火傷の痕が刻まれた黒髪の青年が立っていた。
青年—紅麗は無表情に煉華に目を向ける。

「ひッ…!!」

煉華の表情が絶望の色に染まる。
そして、この場から逃げようとするその前に、紅麗の方が動いた。
瞬間移動を思わせる瞬発力で一気に彼女との間合いを詰め、その手で煉華の黒衣の胸ぐらを掴み上げた。
その時には、彼はいつの間にかその顔に仮面をつけ、その身体に黒衣を纏っていた。
彼の戦闘装束だ。

「ついて来い…」

顔面全体を覆う仮面のせいで、紅麗の表情を窺い知ることはできないが、その言葉は氷塊のような響きがあった。

◇

訓練シミュレーター

「紅麗、遅いなぁ…どうしたのかな？」

午前中の訓練開始五分前―訝しげな呟きを漏らしたのは、高町なのはだった。

薫たち五人は揃っているのに、紅麗だけが姿を見せていない。毎回、３０分前には訓練場で準備運動している彼なのに珍しい。遅れるにしても、必ず連絡を入れるはずなのに。

「なのは姉ちゃーんっ！　多分兄者、う○この切れが悪くなってるんだよっ！」

ふざけた推測をする薫に向けて、なのはは満面な笑顔を浮かべながら手加減抜きのドロップキックをくらわせながら思案する。

さっきから念話を飛ばしてみても、何の反応も返ってこない。

寝坊しているという推測はできなくもないが、普段の行いを見ている限り、そんなことはありえない。

もしかしたら、何か事件に巻き込まれたのではないかと可能性の低いことを懸念してしまう。親友（フェイト）に探しに行ってもらおうか？

そんでもって、軽く？お話？でもしてみようか。
こんな感じに←←←

◇

なのは
「心配したんだからっ！　遅れるにしても休むにしても、ちゃんと連絡しなきゃダメでしょっ！　メだよ！　メーっ！」

紅麗
「ぶぅ～…（「３」）」

ファンゴラム
「バッカでー、紅麗！　怒られてやんのーっ！」

フリード
「人間とはつくづく愚かな生き物だな。のう、我が主？」

キャロ
「ああっ！　わたしの目の前でXファイル的な怪奇現象が～！　ま、まいっちんぐ～！／／／／」

はやて
「ｗｗｗ…恥ずかしいんやったら、やんなきゃええのにｗ（やらせた本人）」

◇

…何だか余計過ぎる人たちが武力介入してきて、カオスなことになってしまったが、普通に一言二言注意するだけだ。
そう。何も、問題は、ない。
大の字で伸びている薫と、抱き締め合いながらガタガタ震えるスバルたち四人、そして薫を揺さぶりながら「パンツの色は!?　見えたんだろ!?　パンツの色は!?」と聞いているヴァイス（イライラさせるクソ野郎）の姿が視界に入るが、あえて気にしないことにするなのは。
とりあえずヴァイス（残念な変態）には後で全力全壊の瞬☆獄☆殺をお見舞いすることを考えながら、フェイトに念話を飛ばそうとした、その時だった。
遠くの方から、こちらに歩み寄って来る黒い影が見えた。

――…あれって…。

遠目であったため、一瞬怪しげに見たなのはだったが、正体はすぐにわかった。
噂をすれば影――紅麗であった。
しかも、何故だか、彼と同じ格好をした赤髪の少女を小脇に抱え込んでいるではないか。
やがて、紅麗はなのはたちの所まで来ると暴れ回っていた煉華を地面に放り投げた。

「く、紅麗…？　何で、その娘を――」

「なのは。悪いが、今日の薫たちの訓練は中止にして、訓練場（ここ）を使わせてもらう」

「ええッ!?」

紅麗の突然の言葉に、なのはは驚きの声をあげた。

「い、いきなり何言ってるのッ!?」

「あと、薫たちを連れて訓練場から出て行ってくれ。離れた所から見るだけなら構わんが、私たちのことに口出しも手出しもしないでくれ」

「まだ了承もしてないのに、話を進めないでッ！　いったい、何するつもりなの!?」

来て早々に何を言い出すのだ、この男は?
訓練を中止し、自分たちを追い出して何をしようというのだ?
この赤髪の少女をどうするつもりだ?
訳を聞かせてほしい。
なのはは強気な目で真っ直ぐに紅麗を見据えながら、問いかける。
一方、そんな彼女を黙って見つめながら紅麗はほんの数秒、沈黙した。
やがて、仮面の下でただ一言を静かに呟いた。

「――頼む…」

理由すら無い、ただの一言を漏らしただけだった。

「……」

なのはは紅麗の顔を見つめる。

仮面に覆われているので、その表情を窺い知ることはできない。しかし、隠された顔の中で唯一露になっている一部分――その紅い瞳には、有無を言わせぬ強い意思が感じられた。

「……はぁ…」

話したくない理由をこれ以上問い詰めても無駄だろうと思い、なのはは小さくため息をついた。

いったい何をするかはわからない。だが、今の彼の瞳は――以前、暴走してしまった自分を止めてくれたときと同じであった。

きっと何か考えてのことだろう。

なのはは「…うん、わかった」と呟いて、薫たちを連れて訓練場を出て行った。

「――さて…」

なのはたちを見届けた紅麗は、地面にへたり込む煉華を見下ろした。

それだけで彼女はびくりっと身体を震わせながら、小さく悲鳴をあげた。

「な、何するの、お兄ちゃん…？　私、を…殺すの…？」

死を宣告する死神を前にしたかのように、かたかた震えながら問いかける。

煉華にとって、死神や悪魔以上に――目の前にいる黒衣の人間が何よりも恐ろしかった。

「恐怖とは何か？」と問われれば、それは紅麗だと即答してしまいそうなほどだ。

おかげでいつ殺されるかと思うと、食事も睡眠もろくにとっていない。

この辛苦から抜け出そうと自殺も考えたが、フェイトの説得で何とか踏み留まった。しかし、これから殺されるのだったらさっさと自殺すればよかったと思う。

だが、次に彼の口から出た言葉は煉華にとって予想外なものだった。

「――お前を殺すつもりはない」

煉華は目を丸くした。

殺すつもりはない？

何故だ？

数日前に思わぬ再会したときは、あんなにも殺したがっていたではないか。

とても信じられない言葉だ。

しかし、煉華の心中の片隅に、安堵と――そこから先へ続く？期待？の感情が沸き上がっていた。

そんな煉華の胸中に構わず、紅麗は話を続ける。

「お前もミッドチルダへ来たのだから、私のように炎を出せるであろう？？前の炎？とは使い勝手がほんの少し違うが…」

紅麗の言葉に、煉華は首を傾げた。

？前の炎？という言い回しはどういうことなのか気になるが、炎が出せるから何だというのだ？

紅麗のクローンであろうと、自分は炎術士だ。炎を出すなど、手足を動かすのと同じくらい容易いことだ。

天堂地獄が滅び、それによって火影に関わる魔導具、？炎術士の炎？も全て消え去ってしまったことを、煉華は知らない。

そして、その消え去った？炎術士の炎？の代わりに、？新たな炎？が備わっていることも知らなかった。

煉華は片手を広げ、紅麗に見えるようにいつもの感覚で？炎？を出す。

すると、煉華の足元に翡翠色に輝く火影の刻印が浮かび、その手には同色の炎が吹き上がった。

「な、なに…これ…？」

自分の足元に浮かんだ火影の刻印を見て、訝しげな呟きを漏らした。

今まで自分が炎を出したときは、こんな刻印は現れなかった。

しかも、炎を出しているときのこの微かな違和感は何だろうか？

具体的には言えないが、今まで炎を出していた感覚と、どこか違うのだ。

一方、炎を出すことに成功した煉華を見て、紅麗は満足げに小さく頷いて再び口を開いた。

「やはり、炎を出せるな。では、お前にやってもらうことはただ一つだ…その炎で、私に一撃を与えてみせよ」

「えッ…！？」

煉華は目を見開いた。

殺すつもりはなく、炎を出せるならその一撃を与えよとはどういうことだ？

そんな疑問が浮かんだが、煉華は弱々しく首を振った。

「そ、そんなこと…できっこないよ…」

「何も、私を倒せと言っているのではない。たった一撃を与えるだけでいい。もっとも…？前のように？私自ら当たろうとするチャンスは与えんがな」

たったそれだけが、どれほど難しいか。

煉華は以前、紅麗と戦ったことがあるが、彼の脅威的なスピードに全く追い付けなかった。彼がわざと当たろうとしない限り、当たるはずがない。

へたり込んだまま何も行動しようとしない煉華に見兼ねて、紅麗はただ一言呟いた。

「…来ないのなら、こちらから仕掛けるぞ」

そう言い終わった瞬間に、煉華に向けてローキックを放った。
あまりにも突然だったので、煉華は防御できぬまま蹴り飛ばされた。
地面を転がって、小さく呻く煉華に再び声をかける。

「何もせぬまま痛めつけられたいか？　まさか…痛めつけられればいつか死ぬと期待しているのではなかろうな？」

煉華は地べたの上で身じろぎながら幼い頭で考え込む。
痛めつけられて死ぬ―それもいいかもしれない。
苦しみがいつまで続くくらいなら、死んだ方が良いに決まっている。
だが、？自殺を踏み留まって、この時まで生きてきた意味がない？

―…え…？　私…。

自分の心の声に、自分が耳を疑った。
今、自分は心の内で何と言った？
生き地獄より死ぬことを望んでいた自分が…死ぬことよりも、生きることを選んだというのか？

―私は…まだ、生きたいと思ってるの…？

生きて、どうしようというのだ？
目の前の男への恐怖を片時も忘れることなく、生きていくことなどできるはずがない。

―もしかしたら、私は…。

?彼は本来、優しい人なんだ?と言った彼女(フェイト)の言葉を、期待しているのだろうか?
そんなはずはないと言う自分もいれば、期待している自分もいた。
だが、考えても考えても、答えは出ない。
とにかく、どういう訳か、彼は殺す気はないらしい。
一撃を与えることへの意図は全くわからないが、与えることができれば殴られることははずだ。
自分だって…痛いのは嫌だ。

煉華はその瞳に微かな生気を宿し、紅麗に向けて掌を向けた。

周囲に複数の炎の塊が生まれ、それらが矢の形へと成した。
紅麗に向けて真っ直ぐに飛来する翡翠色の炎の矢。
しかし、それが当たる寸前に彼の姿が消えてしまった。

―消えた…!?　どこに―

姿を消した紅麗を探そうと頭を巡らす前に、頬に衝撃が走り、身体が軽く吹き飛ぶ。
いつの間にか彼女の近くにまで接近していた紅麗が、黒衣をはためかせながら悠然と立っていた。
魔導具も使っていないのに、何たる速さか。
だが、驚嘆や恐怖を抱いている時間はない。煉華は地面を転がったまま、炎の矢を飛ばす。
仮面に覆われた顔面へと向かうが、当たる前に素手で掴まれ、翡翠色の炎が紅い炎に焼かれて消えていった。

「―その程度か…?」

以前と戦ったときと同じこと言いながら、起き上がっていない煉華の脇腹に体重を乗せた鉄拳を振り下ろした。

◇

「なのはさん、やめさせてくださいよッ！」

訓練シミュレーター外から紅麗と煉華の様子をモニターで見ていたティアナは、同じくモニターを見つめるなのはに抗議した。

少女の炎の攻撃を避わし、彼女が地面に倒れていても拳と足を以て相手を打ち伏せる。

一方的な戦い――いや、戦いにすら見えない。

「こんなの、模擬戦でも訓練でもないですよッ！　こんなの…」

それ以上のことを、ティアナは言えなかった。

いや、言いたくはなかった。

こんなのは、ただ弱者をいたぶっているようにしか見えない。

こんなことをして、いったい何の意味があるのだろうか？

ティアナだけでなく、スバルたちも言葉に出さなかったが、彼女と同じ気持ちであった。

しかし、なのははティアナの言葉に耳を貸さず、ただじっと紅麗たちの様子を見つめていた。

彼女だけでなく、薫も、後から駆けつけてきたフェイトもそうであ

った。
何も応えようとしない彼女たちを見兼ねて、ティアナは再び声をあげる。

「フェイトさんも、何か言ってくださいよ！　止めたくはないんですか！？」

「止めたいよッ！！」

フェイトは、怒りを込めて声を荒げた。

「私だって…止めたいよ…」

先程の怒声からうって変わって、消え入りそうな声で返した。
今すぐにでも、止めたい気持ちは一緒なのだ。
彼のこんなやり方は、とことん好かない。
彼のことは好きだが、彼のそんなところが嫌いだ。
自分の気持ちをそのまま言葉にして、表せばいいのに…それを拒んで、相手に伝わりにくい不器用なやり方でしか表すことができない。
彼のそんなところが、嫌いだ。

◇

いったい何分、何十分経ったのだろうか？
煉華は未だに紅麗に一撃を与えるどころか、かすることすらできずにいた。

ただでさえ彼女は睡眠も食事もろくに取っておろず、だんだんと意識が白濁し、集中力が乱れてきた。
そんな彼女に容赦せず、紅麗は拳を叩き込む。

もう何度目か、煉華の身体が地面を転がる。髪や顔についた砂埃を気にする余裕もなく、何かにすがるような感情をその瞳に宿して、紅麗に掌を向けた。

――――『あなただってわかっているはずよ。煉華(あのこ)は、望んであなたと紅のクローンとして生み出されたわけじゃない。他人の勝手な都合で生み出されたのよ。それをわかって言っているの？』――――

紅麗の脳裏に、かつて死んだ娘の代わりとしてクローンを生み出してしまったとある母親の声が響く。

――…ああ…。わかっているさ…。

紅麗は、狙いも速度も大したことがない炎の矢を避わしながら、心の内で呟く。

初めからわかっていた。
森光蘭によって作られた紅(かのじょ)のクローンという理由だけで、煉華を嫌悪するなどお門違いだ。
彼女もまた、森光蘭によって虐げられた被害者なのだ。
それでも煉華を憎んだのは、もう一つは、紅(かのじょ)のことをあまりにも愛し過ぎてしまっていたからだ。自分にとって、紅(かのじょ)は聖域だ。何者にも踏み込んで欲しくない存在なのだ。
それを――憎きあの男が堂々と汚ならしく踏み込んで、煉華(クローン)を作った。
それが酷くたまらなかったのだ。

煉華を憎むのは筋違いだと頭の中では理解できていても、歪みきった心の中では納得できなかった。

だが、そんな歪んだ心が少しずつ変わっていくのが、わかる。
ミッドチルダは良い所だ。
血溜まりの匂いが濃厚に充満していた向こうの世界とは違い、ここはとても薄い。

―だから…良くも悪くも―？調子が狂う？…。

紅麗は、倒れ伏した煉華の胸ぐらを掴み、そのまま剛腕を以て高々と上げる。
怖れているような、すがるような少女の目が紅麗の顔を捉える。

―…すまぬな。こんなやり方で…。

紅麗は心の内で、煉華に謝罪した。
素直になって、話し合うことすらできぬ自分が恨めしい。
高いプライド故か―本心を心の内に留めて、表にさらけ出すことをしない。
義弟はともかく、異母弟には随分と反感を買ったものだ。
ちゃんと話し合えとなのはに説教したのに、自分のことを棚に上げていることに気付き、紅麗は自嘲する。

―…お前には、？気付いてほしい？…。

好きなだけ恨んでも構わない、怖れを抱いても構わない。
だが、子供のような我が儘でもあるが、？あることに気付いていただきたい？。
不幸になって人生を終えたお前が、もう一度生を与えられたこの世

界で、幸せを得るために羽搏けるように。

紅麗に投げ飛ばされ、煉華は地面の上を転がった。
いったい、いつまで続くというのだ?
森光蘭に裏切られ、今は紅麗になぶられている。
そこまで自分が憎いのか?
そんなことを心の中で呟いた煉華だが、ある不思議なことが頭の中に浮かんだ。
彼の口から一度たりとも、罵声を発していなかったのだ。
以前戦ったときも、再会したときも、彼は数々の罵声を言った。

?:虫唾が走る…その声も、その姿も…?

?:息をしているだけで不愉快だ?

?:出来損ない?

?:欠陥品の造りモノ?

?:失敗作?

ｅｔｃ…

まるで息を吐くのと同じくらい気軽さで言っていた。
しかし、今は一言も言っていない。

また、紅麗に殴られたり蹴られたりしたとき、思っていたより痛く

ないのだ。
確かに痛みはあるのだが、戦ったときや再会したときに比べれば、手加減されていることがはっきりとわかる。

これはいったい、どういうことだ？
気紛れ？
わからない。
仮面でその顔を隠すように、彼の本心が全くわからない。
…いや、わからないことを考えていてもしょうがない。
とにかく、彼に一撃を当てることだけ考えていればいい。
しかし、どうやって？
自分は、世界中最強の人間である紅麗のクローンだ。
たくさん失敗したクローンで唯一の炎術士―選ばれた存在なのだ。
しかし、ここまで大きな差があるというのか？
紅麗のクローンであることを、疑いたくなるほどの雲泥の差だ。
煉華はそう自嘲するが、彼女は強い方だ。
かつて烈火を初めとする五人の火影忍軍相手に、全く隙を見せず、火影のＮｏ．２の実力者である水鏡も驚嘆したほどだ。
目覚めて間もなく、十分な戦闘訓練を受けていない煉華でも、紅麗の戦闘能力をちゃんと引き継いでいる。

―…いや…やめよう…。

それまで、戦う人間として紅麗のクローンであることに誇りを持っていた煉華の心の内で、何かが変わった。
紅麗のクローンなど、考えるな。
そんなものは、彼の前では一切通用しない。
自分は自分として、一人の人間として彼に挑むしかない！
そんな想いに呼応するように、彼女の右腕から炎が噴き上がった。

炎がどんどんと膨れあがり、辺り一帯を翡翠色に染める。
あまりの熱量に右腕部分の黒衣が灰になり、右腕全体がビリビリと衝撃が走る。

「行くよ…お兄ちゃん…！」

右腕に巨大な翡翠色の炎を宿し、煉華は痛みで表情を引きつりながらも微笑を浮かべた。
紅麗はそんな彼女をじっと見つめる。
以前戦ったときと同じ光景に見えるが、唯一の相違点は、煉華の表情であった。
以前は娘として森光蘭に愛されることを、クローンとして紅麗を超えようとすることに必死だったが、醜く歪んだ表情を浮かべていた。
しかし、今は、そんな所は微塵もない。
引きつった笑みが、何ともいじらしい。

―全力を以て、応えようではないか…。

紅麗は左腕を掲げ、そこから紅い炎を噴き出した。

―…私は、お前のことが嫌いではない…。

紅麗は炎を纏った左手を煉華に向ける。

―ただ…お前の言動に一つ、気に食わないことがある…。

灼熱の熱気に包まれながら、両者は気持ちとともに炎をぶつけるために相手にその手を向ける。

「『煉獄』ッ！！！」

「『翅斬』…！！」

撃ち出された翡翠色の炎と、紅い炎。
衝突した二つの炎が、周囲の温度を急激に上昇させる。

―仮にお前が？成功作？だったとしても、己の誕生を喜んで傲るな…？失敗作？だったとしても、己の誕生を嘆くな…。

翡翠色の炎が紅い炎を飲み込んだ。
さらに炎は留まることなく、紅麗に向かい、その左腕に食らいついた。

―生まれた者に対して…成功も、失敗も…？意味？すらもないのだから…。

翡翠色の炎に飲み込まれた紅麗の左腕は、黒衣を燃やされ、腕全体に火傷が刻まれていた。
煉華はようやく、紅麗に一撃を与えることができたのだ。

「や、やっ…た…」

煉華は所々に痣ができた顔で安堵の表情を浮かべ、緊張が途切れて膝から力が抜けていった。
脱力した身体が固い地面に倒れようとしたとき、視界が黒一色で埋め尽くされ、それが彼女を抱き止めたのだ。
煉華は目を丸くしながら上を見上げると—仮面に覆われた紅麗の顔がそこにあった。
仮面のせいで彼が今、どんな表情を浮かべているかわからない。
太陽の逆光のせいで彼が今、どんな目をしているかもわからない。
だが、?自分を抱き止めてくれた?その事実が煉華の胸を熱くさせた。

—何だろう…。

—怖く、ない…。

煉華は痣だらけの顔で、嬉しそうに微笑んだ。

「お兄ちゃん…やさしい…」

「……」

◇

紅麗は何も言わず、煉華を肩に担いでその場から歩き始めた。

医務室で手当てを受けた煉華は、ベッドの上で毛布を被っていた。
2、3日もろくに眠っていなかったので、今すぐにでも眠りたい。
しかし、彼女は強い眠気を必死に耐えて、瞳を開け続けた。
紅麗を怖れているからではない、その彼と話したかったからだ。
すると、医務室のドアが開き、紅麗が入ってきた。
そんな彼に怖れることなく、煉華は微笑みかけた。

「お兄ちゃん…怒られてたね」

「…聞こえてたか」

どこかぎこちない口調で、紅麗は返した。
先程医務室の外で、煉華を無理矢理模擬戦させたことで、シャマルに部屋に響くほどにこっぴどく怒られたのだ。
さらに「罰として、一ヶ月間私の創作料理の味見係になってもらいますからねっ！」という嬉しい特典付きだ。
それが罰なのかと煉華も、紅麗も首を傾げたものだが、盗み聞きしていたはやてとヴァイスのデカい笑い声でそれがどういう意味なのか、何となく理解できた。

「…眠らなくてよいのか？」

部屋の外から未だに呼吸困難になるほどに大爆笑しているはやてとヴァイス（後でなのはさんに瞬☆獄☆殺をされる人）の笑い声をあえて無視して、紅麗は無感情を感じさせる声で語りかける。

「う、ううん…まだ、眠りたくないの…」

「…早く眠れ。ろくに寝ていないんだろ」

紅麗はそう言い残し、自分がいては眠れないだろうと思い、医務室から出ようとする。

「ま、待って！」

煉華が紅麗を呼び止めた。

彼は振り返ると、煉華は少しもじもじしながら言葉を紡ぐ。

「あの…近くに、座って…？」

ベッドの近くに置いてある椅子に座るよう促す。

特に断る理由もなく、紅麗は黙って椅子に腰掛けた。

それから二人は、言葉を交わさなかった。

煉華はチラチラと紅麗を見上げてくるが何も言わず、紅麗はそんな彼女の視線を気付かぬふりをして瞳を閉じながら声をかけなかった。

だが、一言謝りたい気持ちが紅麗の中であった。

許されたいわけでも、好かれたいわけでもない。どんな理由があろうと、自分は理不尽に彼女を気付けたのだ。

しかし、未だに素直になれず、口を開くことができなかった。

長い沈黙が続き、その沈黙を破ったのは煉華だった。

「あの、お兄ちゃん…」

煉華は恐る恐るといった様子で紅麗に声をかける。紅麗は瞳を開けて煉華を見下ろすと、彼女から予想外な言葉が出た。

「ごめんね…」

それは、謝罪の一言だった。

あなたを殺そうとして、ごめんなさい。

軽はずみで自分と紅はそっくりなんだと言って、ごめんなさい。

そして…自分が生まれてきて、ごめんなさい。

「……」

謝罪の言葉を耳にした紅麗は、何も言わずに沈黙した。

彼女が謝ることなど、何一つない。むしろ、自分が謝るべきなのだ。

どんな言葉をかけてあげればいい？

良い言葉が見つからない、自分は彼女にそれだけのことをしたのだ。

拙い言葉でも、ただ素直な気持ちをそのまま伝えればいいのだが、

紅麗はやはり素直になることができなかった。

「お兄、ちゃん…」

煉華が潤んだ瞳で不安そうに見上げてくる。
無表情のまま何も言わない紅麗を見て、もしかしたら自分を許してくれないのではないかと怖がっているようだ。

「……」

紅麗は黙ったまま煉華に手を伸ばした。
殺されるのではないかと煉華はぎゅっと目を瞑ったが、彼の手は煉華の頬を触れただけだった。
煉華はゆっくりと瞳を開ける。
紅麗は未だに無表情を浮かべ、その手で彼女を頬を優しく撫でる。
これが彼にできる、精一杯の素直な行動だった。
一方、頬を撫でられている煉華は顔を赤くした。

―温かい…。

森光蘭にも撫でられたことはあったが、こんな温かさを味わったことがあっただろうか？
紅麗に撫でられると頬も心も温かくなる。
自分は本当に愛されているんだと、生まれて初めて実感できた瞬間だった。
感極まって、煉華は涙を流した。

「お兄ちゃん…大好き…」

煉華はゆっくりと瞼を閉じて、眠りについた。

全部持ってかれる『おまけシーン』

「お兄ちゃん…大好き…」

煉華はゆっくりと瞼を閉じて、眠りについた。

「……」

紅麗は無表情のまま、煉華の寝顔を見つめ続けていた。

『ｗｗｗ…』

『ｗｗｗ』

医務室の廊下から、二人の男女の笑い声が聞こえた。

『ｗｗｗ…、ば、罰として…ｗ一ヶ月間、シャマルさんの創作料理の味見係だってよ～ｗｗｗ　くははっｗｗ』

『死ぬ～ｗｗ　紅麗さん、絶対死ぬ～ｗｗｗ　その前に私らが笑い死ぬぅ～ｗｗｗ』

「……」

『わ、笑っちゃいけねぇよｗ　笑い事じゃ…ｗ　笑い事じゃねぇよ～、くひひっｗｗ』

「……」

『せ、せやな…ｗ　笑い事じゃないなぁｗｗ…はぁ…』

「……」

『……』

「……」

『……』

「……」

『ぶっ…ｗｗｗ』

『ば、ばっか！ｗｗ　吹いてんじゃね～よ～！ｗｗｗ』

『だ、だって、完全に？笑い事？やもんっｗｗｗ』

『『ぎゃはははははははははははははっ！！！ｗｗｗｗ』』

「さ　っ　き　か　ら　五　月　蠅　い　わ、貴　様　ら…！！！」

完全に堪忍袋の緒が切れ、袋自体が灰となった紅麗は医務室のドアを蹴り破り、廊下にいるはやてとヴァイスの前に躍り出た。
廊下の上に笑い転げていたはやてたちは、怒りと殺気に満ちる紅麗の姿を見て、ぎょっとした表情を浮かべた。

「や、やっべぇ！　聞こえてたし！！　逃げろ～！！…ｗｗｗ…笑いまくってて、上手く走れねぇや～ｗｗｗｗ」

ふらつきながら全速力で走るヴァイス。
一方、はやては腕を組みながら余裕の表情を浮かべていた。

「フッ…簡単に私を捕まえられると思うなや。　聖祥大附属中学、元・陸上部エース―八神はやて。１００ｍは……１２秒フラッとぶあぁッ！！！」

はやてが駆け出した瞬間に一気に間合いを詰めた紅麗が、彼女の頭

を掴んで床に叩きつけた。痛そう…。
ちなみに、本当の記録は１９秒フラット。
マウントポジションを取った紅麗は炎を纏った左手をはやてに向ける。

「さぁ、八神はやて…選択だ。ミディアム、レア、ウェルダン…どの焼き方が好みだ？」

「ま、待ってくれよ、紅麗！　こんなところで、『まーくんステーキ』を作るつもりかッ！？」

ヴァイスはそう言いながら紅麗に、良い発射音を奏でるＺガンダムのビームライフルを突きつけていた。
仲間を見捨てずに逃げなかったヴァイスに拍手。

「（『まーくんステーキ』ってなんだよ…）　吠えるな、ヴァイス」

「こんなことをして、ただで済むと思っているんですの！？　この『フェロモンの擬人化男』！！」

「誰　だ、お　前　は…？」

いきなり話に入ってきたツインテールの変態淑女局員に向けて、紅麗は冷然に言い放った。

「はやて、さっさと選べ。何が好みだ？」

「く、紅麗…。あんたは…ただ笑われただけでマジギレして…女の子の顔面を床におもっくそ叩きつけても…それでも、まだ…足らへんのかッ！！？（キリッ」

「足　ら　ん　な　ぁ…！！」

歪んだ表情で即答する紅麗。
異母弟に自分の過去を勝手に喋ったという理由で、仲間の女性をフルボッコにする男だ。
彼にとっては序の口に過ぎない。
女性を痛めつけてはならないというフェミニストの真理など、彼にとってはクソ食らえだ。
紅麗という存在こそが、男女平等の擬人化である。

「命を乞う時の？こつ？は二つ。一つは命を握る者を楽しませること…もう一つは、その人間を納得させる理由を述べることだ。お前はまだ？どちらも満たしてはいない？。さ　ぁ、踊　れ　ッ　！！！！」

―バラライカさんか、あんたはァァァァァ！！？；；

確かに同じ火傷顔（フライフェイス）だけど、そこまでするかぁ！？
しかし、不思議と違和感がニート化しているッ！

「く、紅麗さん…あんたは、一つ勘違いしとる…」

はやては怯えながらも、紅麗の目を見て語りかけた。

「私は…あんたを嘲笑いたいわけやない…。見てる人たちを笑わそうという芸人魂でやっとるわけでもない…。これは…私の？趣味？や」

「…？趣味？？」

「ああ、？趣味？や…。ゲートボールの趣味もあれば、鍛練や散歩…天堂地獄級の創作料理（科学兵器）をｗ作ｗるｗ趣ｗ味ｗもｗあｗるｗぅｗｗ…あんたが今しとることだって、趣味やろ？　根本的には、あんたと同じやで…」

「……」

無表情になって、じっとはやてを見下ろす紅麗。

やがて数秒経つと、その無表情に変化が現れた。

「くっ…は、ははっ…ははは…」

突然、笑い始める紅麗。

それまで、床に寝っ転がりながら漫画を読んでいたヴァイスが、笑い始めた紅麗に不審げな目を向けた。

「あっはははっ！　はははははっ！」

（いよ～し。助かるでぇ、助かるでぇ…）

（はやてっち、何面白いこと言ったんだろ？　…まぁ、いいや。漫画、読も）

「あっはははは！はははははっ！はははははははははははははは――余計、タチ悪いわ…！！！」

紅麗は全力ではやての顔面を殴りつけた。

「やっぱりネー！！！」

はやては鼻血を出しながらも、どこか嬉しそうな表情を浮かべた。
芸人魂を燃やしたはやてに拍手。

「私をイライラさせるヴァイスく～ん、高町流・瞬☆獄☆殺を食らう準備はできたかにゃ～？　にゃはは～っ♪」

「な、ＮＡ☆ＮＯ☆ＨＡさんッ！！；　何で出てくんのよッ！！？
？芸人魂を燃やしたはやてに拍手？で終わればよかったじゃんッ！　こんなオチ、ヤだよッ！！　…ちょっ、待、アッーーーーー

ー！！！」

「ちょっ、ちょっと！そんな悲鳴やめてよッ！！　何か変な誤解されちゃうじゃんっ！！」

「もう終われ」

じゃれ合うヴァイスとなのはから目を背けながら、紅麗は一言呟いた。

今日も機動六課の局員はとても仲が良く、ミッドチルダは平和であった。

其之三十八：自分の存在（後書き）

気付いたら、約４ヶ月ぶりでしたね…お待たせして、すみません；
夏休みに入ったので、楽に時間が取れて執筆できました。
そんで、これでようやくシリアスパートが終わりました。いやぁ、
長かった；

さて、凍結予定であった『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～』は、次回で終えようと思います。
シリアスなんて微塵もない、ギャグ満載なんで最後は楽しく笑って終わらそうと思います、今更ですけどキャラ崩壊が激しいんで注意してください（笑）

あと、２４時間後に、この話の最後におまけシーンを追加します。
何故後から追加するのかと言うと、この話の謎の感動を？はやてたち？に全部持ってかれちゃうからですｗｗ

それではノシ

其之三十九：不死鳥のなく頃に・鬼醒まし編（※いつも以上のキャラ崩壊）（前

はやて
「夏だっ！！」

スバル
「海だっ！！」

森光蘭
「金だあッ！！　＞◎＜　＞◎＜」

薫
「くっそぉ…いきなり斜め上過ぎて、笑っちゃったよ…ｗｗｗ」

其之三十九：不死鳥のなく頃に・鬼醒まし編（※いつも以上のキャラ崩壊）

古代遺物管理部機動六課――それは『化け物の巣窟』と言っても過言ではない、チート部隊である。
何せ機動六課の中には、その強さから畏怖（中には悪口）を込められた異名を持つ者が多く存在している。

『管理局の白い悪魔』

『管理局の黒い死神』

『殺戮女神の下僕』

『鉄槌の騎士』

『烈火の将』

『創作料理人（ケミカルウェポン・メーカー）』

『人間を焼き喰らう黒鬼』

ｅｔｃ…

３名の隊長格はオーバーＳランク、副隊長はニアＳランク――リミッターが付けられているとはいえ、一つの部隊にこれほどの戦力を有していると、周りから見れば「ちょっと…ズルくない？；」と思ってしまうのは、致し方ないことだ。
しかし、その強さと恐ろしき異名に反して、彼女たちは実に朗らかで気さくな心を持っていた。

その証拠として、機動六課隊舎の食堂にて朝食を採る、彼女たちの日常を見てみよう。

「あっ、はやてっち。そのミニハンバーグ、いっただき～！」

「あっ！？　何するんや～！　じゃあ、私もヴァイスくんのミニハロ（ただのグリーンピース）をもらうでっ！」

「お、おいっ！　や～め～ろ～よ～！！」

「あっ、そうや。スバルのお○ぱい揉もう」

「はやてさん、唐突過ぎる～ｗｗｗ　良い意味で（裏声」

「おめーら、何なんだよ？」

同じテーブルで仲良くじゃれ合うヴァイスとはやてとスバル（機動六課の余分三兄妹）を見て、ヴィータは冷然に言い放った。
今日も機動六課の局員たちはとても仲がよく、ミッドチルダはとても平和であった。
一方、別のテーブルでは―

「♪～♪～、お兄ちゃ～ん♪」

「いい加減、いつまでも引っつくな。さっさと離れろ」

「え～、ヤだヤだ～♪」

「は、ははは…」

このテーブルで朝食を採る一人の青年と二人の少女との間に、他と所は違う異様な空気に包まれていた。

まず、赤髪の少女―煉華が朝食なんてそっちのけで、隣に座る黒髪の青年―紅麗の腕に抱きつき、幼い顔立ちに少し不釣り合いな大きな胸を押しつけながら離れなかった。

彼らが分かり合えていなかった時は煉華は紅麗のことを酷く怖れていたのに、分かり合えた途端に彼女は生来の無邪気な甘えん坊モードを全開にしてすっかり紅麗に懐いてしまった。

そんな煉華に対して、紅麗は食事をしながら離れるように言うが、相手は全く聞かない。振り払うこともできるが、彼はあえてしなかった。

そんな二人の様子を、金髪の女性―フェイトはこめかみに一本の青筋を立てながら、引きつった笑顔で眺めていた。

そう、彼女は紅麗に抱きつく煉華に対して嫉妬をしているのだ。

しかし、嫉妬しているのは彼女だけではなかった。

別のテーブルでは、数人の局員たちが紅麗に恨めしい目で睨んでいた。

「くそぅ…あの野郎、今日も見せつけやがって…！」

まず最初に忌々しげに口を開いたのは、顔に傷跡が刻まれている青年―ヤ・ムチャであった。

ちなみに生粋の釘宮病。

「…許されることではないな。オヤシロサマに祟られて、嫌な事件になればいいのに…」

次に続いたのは、首からカメラを下げ、眼鏡をかけたガチムチ男―トミー・トミタケ。
ちなみに幼女が好きなのに、周りからガチホモだとイジメの如く噂されている。

「まっ、私は別にどうでもいいじゃんっ☆」

本当にどうでもよさげに、ふざけたような口調で言ったのは、長い黒髪を後ろに縛った女性―ジャンマリア・ジャン・ジャンガリアン（本名はアイホ・ヨミカワ、愛称はジャン）。趣味は麻雀、好きな調味料は豆板醤、ようはジャンが付けば何でもいい。
ちなみに『ジャンキー』という特に意味のない異名を持っている。

「くぎゅううう～…何でアイツのとこばっかり、女が寄って来るんだ？　しかも、全員胸がデカいときた」

「確かに。…まぁ、僕にとっては巨乳なんてものは腫瘍だ。やはり、胸はツルペタに限る」

「お前、一回死ねばいいＪ☆Ａ☆Ｎ」

ヤ・ムチャの言う通り、フェロモンの擬人化とはまで言われている紅麗は、とある禁書目録の上条さんの如く、多くの容姿端麗な女性に慕われている（豊胸の特典付き）。

フェイト・Ｔ・ハラオウン（ガチで好いている）、胸大きい。

煉華（義妹としてガチで好いている）、胸大きい。

高町なのは（妹のように慕っている）、胸大きい。

スバル・ナカジマ（ウザく絡んでくるため紅麗におもっくそ冷たくされているが、妹のように慕っている）、胸まぁ大きい。

シグナム（グラハム的な意味で好いている）、胸大きい。

八神はやて（良い相方として慕っている）、胸小さい。

…おんやぁ？
ひんぬー？

「あ、例外いたわ（胸的な意味で）。部隊長、貧乳じゃねーか貧乳」

「ツルっツルのペタペタだが、幼女ではないから全く萌えない。１０年前はあんなに可愛かったのになぁ…（物凄く怖い発言」

「『ムサシノ牛乳』飲んでないから、小☆さ☆い☆じゃんっｗｗ」

「聞こえとるでぇぇぇぇぇ～！！　貧乳だからって、馬鹿にすんなやッ！？　たとえ貧乳でもなぁ！職権乱用して、あんたらの給料を私の給料に加算することもできるんやでぇぇぇ～！！？　ちゅうか、もう私の給料にしよっ！今すぐ手続きしよっ！うはははははっ（森光蘭の笑い方）！！　思わぬボーナスが入ったでぇぇえぇえぇえぇえぇえぇえぇえぇ～！！」

「「「部隊長、この野郎ォォォォォォォォォォ！！！」」」

部隊長と局員たちの追いかけっこが始まった。
それはさて置き、モテ男に嫉妬するのは彼らだけではない。もちろん、？あの男？が黙っているはずがない。

「…やはり、私と君は…運命の赤い糸で結ばれていたようだ」

もうお気付きであろう。
モテ男を激しく憎むガンダムオタク―ヴァイス・グランセニックであった。
いつの間にか、彼の顔には武者の面具のような仮面が填められ、その両手には『シラヌイ』、『ウンリュウ』と呼ばれる長刀がそれぞれ握られていた。

「「「ミ、ミスター・ブシドー！！？」」」

スバルを初め、元ネタがわかるガンオタ局員たちが驚きの反応を示

した。
ヴァイスは双刀の刀身を赤々と光らせながら、食事を続ける紅麗の背中に向けて高らかに告げる。

「君の圧倒的な性能に（モテる意味で）、私は心奪われた…。この気持ち―まさしく、愛だッ！！！」

紅麗は無視して食事を続ける。
ヴァイスは心の中で「愛！？」と言ってほしかったと思いながら、構わず続ける。

「だが、愛を超越すれば―それは、嫉妬（にくしみ）となるッ！！」

そう言い終えた瞬間には、ヴァイスは駆け出していた。
彼の接近に気付いていないのか、紅麗は煉華を注意しつつ食事を続けている。
その背中に向けて、ヴァイスは赤光を纏った双刃を振り下ろした。

「切り捨てぇ！！　御免んんんんんんんん、んごばはぁ！！！」

いきなり打ち込まれた紅麗の裏拳が仮面ごと彼の鼻頭を粉砕し、ヴァイスの身体が後方に大きく吹き飛んだ。

「ま、まさか…乙女座である私が敗れるとは…！」

鼻血を出しながら苦しげに口を紡ぐヴァイス。
仮面がなければ、即死であっただろう。

「くっ…生き恥をさらすくらいなら…！！」

ヴァイスは懐を漁ると、そこから一振りの短刀を取り出した。
柄を握り、刃が擦れる音を響かせながら短い刀身を露にする。

「武士道とは…死ぬことと、見つけたり…！！！」

彼はいったい何をする気なのか、いち早く察知したのはスバルだった。

「あ、あれは、まさか…なのはさんたちの世界で流行っている自決法…『切腹』ッ！？」

「わっ！？　いつの時代の方ですのッ！！？」

局員たちを撤いたはやてがツッコミを入れる。
それを見ていたなのはが「はやてちゃん、スバルをツッコミなよ」と指摘した。

ヴァイスたちがやかましく騒ぎ合っている中、そんな雑音など気にも止めずにフェイトはこめかみに青筋を浮かばせながら、穏やかに（装って）煉華に声をかける。

「れ、煉華…？　く、紅麗も迷惑してるんだから、さ…。離れてくれないかな、かな～…？」

その返答は―、

「だが、断るっ！（はやてに教えてもらった聖書の言葉」

びきっ…
フェイトのこめかみに浮かんだ青筋が二本に増える。
ぴくぴく震える青筋から、何かとんでもない化け物が出て来そうだ。

「そ、そう…。だ、だけど、ね…？　私は、あなたのために言っているんダヨ…？　いいから、紅麗から離れなイカ…？」

「え～？　だってだって、私、お兄ちゃんが大好きにゃんだもんっ♪　あ…噛んじゃった…」

猫語で噛んでしまって、煉華は恥ずかしそうに顔を赤くした。

―な、なんだ、この可愛い生き物はッ！！？

母性本能を激しく燻られたフェイトは一瞬で萌え死にました。嫉妬心なんて、どこか遠い星までアディオスしました。

こんな可愛い生物が、この世界に存在していたとは！

今すぐお持ち帰りして、ペットにしておきたい！

さぁ、私の胸に飛び込んでおいで！

子猫のように私の頬をペロペロしなさい！　あぁん、くすぐったいよ～！

でっへへ～……ぅおっと！自重しなさい、フェイト・Ｔ・ハラオウン！素数だ、素数を数えなさい！

何とか理性を復活させたフェイトは口元に垂れた涎を拭きながら一旦煉華たちから距離を離す。そして、シャーリーに作ってもらった人間捕獲用のモンスターボールをポケットから取り出し、ピッチャーのような投球フォームで赤毛の子猫に向けて投げつけようとした、その時だった。

次に紡がれた煉華の無邪気な言葉が、世界を終焉へと導くような災厄を呼び起こしてしまった。

「ねぇ、お兄ちゃん？　クローンの私でも、お兄ちゃんの子供産めるのかなぁ？」

仏

の

も

三

顔

ま

度

で…。

目映い黄金の光が迸り、和やかだった食堂の空気が一瞬で凍りついた。

食堂にいる者たち全員が、フェイト―いや、？フェイトだったもの？の姿を見ての感想は、この一言だった。

―なんだ、この恐ろしい化け物は…！！？

風が吹いているわけでもないのに金色の長い髪が浮き上がり、ハイライトが消えている両目を大きく見開いている姿は、三度の飯より殺戮が大好きな鬼のように見える。
そして、いったいどこから取り出したのか、その手には汚れ一つない黄金色の大鎌が握られていた。
身体中から迸る黄金の光が神々しくも見えるが、それと一緒に滲み出る邪悪な殺気が、黒や紫の色よりも禍々しく見せていた。
何という恐ろしき姿か。
何という重圧な殺気か。
彼女と比べれば、アーカードやファンゴラム、剣八、門都なんか可愛い兎のようなものだ。
恐怖によってこの場にいるほとんどの者が息を呑んで一言も発することができぬ中、一番最初に口を開いた薫が身体を震わせながらこう叫んだ。

「く、くく、空海だぁあぁあああぁあああ～！！！」

説明しようっ！
空海――それは紅麗たちの世界で行われた裏武闘殺陣と呼ばれる武闘会にて、紅麗の異母弟―烈火率いる新生火影忍軍が最初に戦った格闘集団―？空？の大将の名だ。ついでに言うと、烈火のセカンド☆キスの相手だ（人工呼吸だが）。
彼は普段、格闘集団の長とは思えないほどの温厚な性格をしており、その性格から？仏の空海？と呼ぶ者もいる。
しかし、彼が所有している？ある魔導具？の能力によって（アニメ設定）、？仏の空海？から？鬼の空海？へと激変する。
魔導具―『鬼』。これは持ち主が三回以上の打撃を受けることによって発動し、持ち主の身体中の筋肉が硬質化し、完全な戦闘マシー

ンへと変える。
その鬼の拳は、一撃で人間を魂の無い肉の塊へと化すことができる。
そして、顔が物凄く怖くなるという嬉しい特典付きだ。
薫から見て、今のフェイトの姿が空海と重ねて見えたのだろう。
フェイトの場合強烈な怒りによって、こめかみに三本の青筋が浮かんだとき、?菩薩のフェイト?から?般若のフェイト?に切り替わるのだ（という設定）。

「煉華ッタラ…何テはしたナいこと言ウんだろ…お姉チゃん、がっカりダなァ…」

フェイトはとても穏やかな声で言葉を紡いだ。
しかし、その顔と、その大鎌と、その殺気で全てを台無しにしていた。

「そンナいけない子には、オ仕置きしないトナァ…」

絶対に殺られる〜ッ!!!
そう思った煉華はドラえもんにすがりつくのび太の如く紅麗に助けを求めた。

「お兄ちゃ〜んっ!!　お姉ちゃんに殺されるよぉ!!　助けて、お兄ちゃあんッ!!」

しかし、機動六課最強であるはずのツンデレダークヒーローは床に伏して、死んだフリをしていた。

「お兄ちゃん、この野郎ォォォォォォォォォォォォ！！！」

「アハハ…殺されるダナんて心外だナァ…これは『教育』ダヨ…」

「お姉ちゃん…『本当の吸血鬼の闘争』を教えるわけじゃないよね…？　教育と言って、最終的には私を殺さないよね…？」

不安げな声を漏らす煉華を無視し、フェイトはなのはに顔を向けた。

「…といウわけダから、なノは…。訓練場ヲ使わセテもラうよ」

「え゛っ…！？　ちょ、ちょっと、待ってよ！　フェイトちゃん！」

なのはは恐怖の対象がいきなり話しかけてきたことに驚き、恐怖しながらも、独断で訓練場を使うフェイトに対して異議を唱える。

「そ、そんな勝手な理由で使わせるわけにはいかないよっ。フェイ

トちゃんの理由なんて、ただの――」

突然、話している途中でなのはの身体が浮き上がった。
フェイトが大鎌を持っていない手でなのはの胸ぐらを掴んで、そのまま高々く持ち上げたからだ。
フェイトは大きく見開いた目で、なのはを見上げる。

「借…り…る…ね…♪」

「は、はい…。ど、どうぞ、お使いくだ、さい…ごめ〝ん〝な〝さい〝…」

なのはは泣きながら了承した。
―Ｗｈｉｔｅ　Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ―
白い悪魔も泣き出す恐怖が、ここにあった。
スパーダもムンドゥスも真っ青だ☆

「良　か　ッ　タ…快　諾　し　テ　も　ら　え　テ」

満足げに頷いたフェイトはなのはを下ろし、再び煉華に顔を向けたその時だった。

「シャマル、ザフィーラ！縛道（拘束魔法）やッ！！」

はやてがいつになくキリッとした表情で、自分の騎士たちに命令を飛ばした。
突然の命令に動じることなく、シャマルとザフィーラは直ぐ様拘束魔法を発動した。

「『戒めの鎖』！」

「『鋼の軛』！」

シャマルは己のデバイスから飛ばした魔力のワイヤーでフェイトの身体を縛りつけ、ザフィーラはフェイトの周囲の地表から円錐型の光柱を発生させて、その動きを封じた。

「あ、ありがとうございます…シャマルさん、ザフィーラ。…だけど、はやてちゃん。隊舎内とはいえ、魔法を使わせるのは…」

「仕方ないやろ、緊急事態なんやから。？あの症状？に冒されているフェイトちゃんを捕らえるには、こうするしかなかったんや」

「？あの症状？…？　はやてちゃん、何か知ってるの！？　フェイトちゃんは病気になっているの！？」

なのはの言葉に、はやては神妙な顔で大きく頷いた。

「ああ…その病名は、『ミッドチルダ症候群』ッ！！」

「『ひぐらしのなく頃に』ですね、わかるのです」

幼女の声で言葉を紡ぐなのは。

しかし、はやてはツッコまずに話を続ける。

「症状を改善するには、Ｃ１２０という治療薬が必要なんやけど、今からだと時間が足ら――ああ～！もういいやッ！　メンドくさ！！　何やねん、『ミッドチルダ症候群』って！　アホちゃうか！！？」

突然、面倒臭くなって逆ギレするはやて。「あんたからやりだしたんでしょうよ…」となのはは思ったが、あえて声に出さなかった。

「こらっ、羽搏く１８禁（紅麗）！　いつまで死んだフリしとんねん！？　今のうちに上条さんのような暑苦しい説教でフェイトちゃんを説得して、正気にさせ――って、いない…！？」

先程まで死んだフリをしていた紅麗が、いつの間にかいなくなっていた。

はやてたちは頭を巡らせていると、食堂の出入口に向けて全速力で走っていく紅麗の後ろ姿を発見した。

「あ〝ッ！　きったねえッ！！」

まるで、ベンガルオオトカゲを服の中に入れられて悲鳴をあげながら走っていく妻を、「早苗ぇ！やったのは俺じゃないぞぉ！？」と叫びながら追いかけるように駆け抜ける紅麗の姿を見て、ヴァイス岡崎が声を荒げた。
そして、「待てよ！お義父さんッ！！」と叫びながら彼の後を追いかけていった。
はやては食堂から逃げ出した臆病者が通っていたドアを無表情に眺めながらなのはに声をかける。

「なのはちゃん。裏切り者二名を、非殺傷設定で死ぬ寸前までリンチするってのは…どうや？」

「珍しく意見が一致したね、ＯっＫ～♪」

二人は爽やかな笑顔でハイタッチした。
その時、ミシミシ…と嫌な音が聞こえてきた。
二人はその音の根源に目を向けると、般若（フェイト）がデバイスや魔法を使わずに生身の肉体で拘束魔法を破ろうとしているではないか。

「あわっ…あわわ…ば、化け物や～！！」

「ど、どうするの、はやてちゃん！？」

もし破られたら、煉華の前に自分たちが殺されるッ！！
何とかしなければと、なのはたちは必死に思考を巡らす。

―き、『切り札』を使うべきか…！？

はやての頭の中に、一つの策が浮かび上がった。
目に目を！　化物（ヤンデレ）には、化物（ヤンデレ）だ！！
それは、純粋な恋心から生まれた『殺戮女神』―カリム・グラシア・アームストロング少将であった。
彼女は以前まで『慈母』や『聖女』と呼ばれるほどの温厚な性格の持ち主だったが、蛭湖が現れてから彼に恋心を持ち、『化け物』に覚醒してしまったのだ。
蛭湖を機動六課へ送り込む際、はやてに「蛭湖を狙う害虫がいたら、消　せ　」と命令するほどに彼のことを酷く溺愛している。

―けど、恋心を持ったとしても、あんな血も涙もない、人でなしの行けず後家に蛭湖（マルコ）が惹かれるはずがありませんもの～！　まぁ、も・っ・と・も！？　もし、カリム様を好きなったとしら、蛭湖（マルコ）も相当なギャンブラーですわよね～！？　よりにもよって、賞味期限切れ目前の女なんかと！　罰ゲームじゃあ、あるまいし！（声：白井黒子）

「はやてちゃん…。私…大切な親友が一人死んで、とても悲しいの…」

死体を見るような目ではやてを一瞥して、なのははハンカチで涙を拭った。
閑話休題。
そんな彼女に「蛭湖が今、（どちらかの意味で）別の女にヤられそ

うになっている」と言ったらどうなる？
フェイトに対抗できる強力な化け物を味方にできるというわけだァ、はっは～☆

―…あれ？　でも…どうやろ…？

はやてはだんだん不安になってきた。
カリムが直々に機動六課へ来て、フェイトと対峙するとは限らない。
あんなＢＧＭに『片翼の天使』が流れてきそうな化物（ジェノバ）なら、地球破壊級（ルール）の技で、隊舎ごと敵を滅ぼしかねない！　いや、下手したら全次元世界が滅びてしまうッ！！

「妄想が過ぎるよ、はやてちゃん」

なのはは呆れた呟きを漏らした。
とにかく、カリム様に頼る案は却下だ。
しかし、どうするべきか？
はやては呻きながら頭を抱えていると、彼女たちの目の前に通信用モニターが開いた。
いったい、誰からだ？　こんな時に？
はやてとなのはは苛立ちながら首を傾げていると、モニター画面に先程食堂から逃げ出した男―ヴァイスの顔が映し出された。

『いよ～、はやてっち、俺の嫁（なのはさん）♪　ガンダムＯＯの劇場版、見たかぁい？』

「こぅら、ワレぇ！！　今、どこにおんねん！！？」

「紅麗はどうしたのッ！！？　ってか、あんたの嫁じゃないしッ！！」

戦場から逃げ出した逃亡者に対して、はやてとなのはは怒声を発する。そんな二人とは対照的に、ヴァイスは穏やかに言葉を紡ぐ。

『まぁ、待ってくれ。別に俺は逃げ出したわけじゃねぇ…そこにいる化物（フェイト）を止めるための準備をしただけだよ』

「どうでもいいけどヴァイスくん、いくら何でもフェイトちゃんを化物呼ばわりは失礼だよ」

『だって、そうでしょ！？？割愛？させてもらいますけど？あんた？に恐れを抱かせたほどなんだから！』

「ちょっと！　何か私、悪口言われてるような気がするんだけど、気のせいかなァ！？」

『では、はっきりと言いましょう。この、悪魔めッ！！！ｗｗｗ』

「言いやがった！！　一応当たり前なこと言うけど、私、人間だからねっ！？」

『おいおいっ（笑）』

「ムカつくぅぅぅぅぅ！！　何が？おいおいっ（笑）？なの！？　あからさまなウソの？17歳です？って言ってるわけじゃない

だからさぁ！！」

「あ～、もうっ。ケンカはやめてや、二人とも」

痺れを切らしたはやてが、夫婦漫才を繰り広げるヴァイスとなのはを仲裁する。

「…で、ヴァイスくん。どうやって、フェイトちゃんを止める気なんや？」

『まぁ、極単純に…遠距離から頭部へ向けて魔力弾を打ち込み、脳震盪を起こさせる。あ、もちろん、非殺傷設定ＹＯ☆Ｎ（キリッ』

「（何でカマ言葉…？）　遠距離って…ヴァイスくん、今どこにいるの？」

『俺の領域（テリトリー）である…空にいます』

なのはとはやては食堂の窓から空を見上げると、機動六課の大型ヘリがあった。
その後部ハッチはすでに開いており、そこからヴァイスが顔を出していた。

「ちょっと！　簡易デバイスを使うんだったら、そんな遠くからじゃ届かないよ！？　だいたい何で、わざわざ空に上がるの！？」

『へっ…誰が、簡易デバイスを使うなんて言いました…？』

後半のイタい所を突いたなのはの発言を聞こえなかったふりをして、中二病・ヴァイスは歯を剥き出しながら笑った。
その手には、遠距離射撃に特化した狙撃銃型デバイスが握られていた。

まさか再びこの得物を持つ日が来るとは思ってもみなかったと、ヴァイスは新鮮な気持ちになっていた。
彼は機動六課ではヘリパイロットという役職に就いているが、数年前は得物を握って幾人、幾十人もの敵を狙撃してきた凄腕のスナイパーだった。
しかし、数年前のある日―、彼の妹―ラグナを人質に取った犯罪者を狙撃しようとしたが、何としてでも妹を助ける気持ちに焦りが生まれたのか、手元が狂い、妹の片目を誤射してしまったのだ。非殺傷設定であったが、柔らかい眼球に当たれば失明するのは当然であった。
それ以来、トラウマに囚われた彼は銃を握ることをやめ、ヘリパイロットとして戦場から身を引いた。
誤射した罪悪感から、妹とも距離を取った。
妹のラグナはとっくに許してくれているが、ヴァイスの心に植えつけられたトラウマと罪悪感によって、銃を取らず、妹と距離を置いた生活が何年も続いた。
そして、これからも続いていくのだろうと思っていた。
だが、昨日起こったある出来事によって、彼の心が大きく変わることとなった。
それは、紅麗が突然、自分の過去について話したことであった。
どうして、そんなことを話すのかとヴァイスは首を傾げたものだが、友として聞いて欲しかったと紅麗は語る。

何かを求めているわけではない。ただ聞いて欲しい、話させて欲しい。自分にとって初めての友だから、と。

ヴァイスは何も返答することができなかったが、心の中に湧き上がった感情は、たった一つ。

それは、情けない自分への、悔しさだ。

紅麗は実の親を失い、恋人を失い、仲間を失いながらも、それでも戦い続けている。立ち止まらずに、歩み続けている。

それなのに、自分はどうだ？

妹を撃ち殺したわけではない。罪悪感を感じるのは結構だが、それが強すぎて、今まで敵を狙い撃ちしてきた銃を取らず、ヘリパイロットとなって逃げているではないか。

紅麗の姿を見ていると、自分はなんてみじめな男だろうか。

ならば、銃を取ろう。距離を置いていた妹とも再び元の仲になろう。

再び、歩もうではないか！

戦場の兵士と化したヴァイスは不敵な笑みを浮かべたまま、己の得物に語りかける。

「さぁ、粛清の時間だ…『嵐の襲撃者（ストームレイダー）』！　常駐戦術思考を狙撃仕様（スナイプ・モード）で起動…！！」

『Ｐｏｓｉｔｉｖｅ，Ｃｏｍｂａｔ　Ｏｐｅｎ（了解、戦闘開始）．』

ヴァイスは高速且つ正確な動作で狙撃銃を構え、覗き込んだスコープでフェイトに照準を合わせる。

「高町一等空尉…特別に教えてあげますよ。俺の最大狙撃範囲は…」

――？成層圏の向こう側？だ…！！！――

『Ｔａｒｇｅｔ　ｉｎ　ｆｉｒｉｎｇ（狙い撃つぜ）！！！』

さぁ、刮目するがいい。

（自称）歴代の全魔導師の中でも最高の射撃能力を持つ、ヴァイス・グランセニックの超絶技巧狙撃を。

ボリュームを抑えた発砲音とともに、銃口から深緑の魔力弾が発射された。

撃ち出された魔力弾は大気を突き破りながらマッハの域の速度で真っ直ぐ飛来し、１秒も経たずに窓を割って食堂内へ躍り出た。

狙うは、フェイトの側頭部。

彼女は拘束魔法を破るのに集中していて、まだ魔力弾の存在に気付いていないようだ。いや、気付いたとしても防ぎようがないだろう。

―Ｊａｃｋ　Ｐｏｔ…！！！

ヴァイスは勝利を確信した笑みを浮かべた。

次の瞬間、フェイトが突然、魔力弾の方にぐるりと顔を向け、その歯を以て魔力弾に食らいついた。魔力弾と般若の牙がスパークを発生しながら拮抗していたが、フェイトの硬質な歯と強靭な顎によって魔力弾が粉々に砕け散った。

「ちゃらり～ん！　鼻から牛～乳～！！」

ヴァイスは小学生の頃に流行ったなつかしい言葉を絶叫した。
フェイトはヴァイスに向けて大きく口を開いた。
その身に宿りしメガボルト級の生体発電によって、彼女の口内に雷が発生する。
どうしてこうなった。
そして、撃ち出される、真横に走る稲妻。
真っ直ぐに向かって来る超電磁砲を前に、ヴァイスは為す術もなくこう叫んだ。

「？ひゃっほーう！！　すっげぇ、お宝だぜぃ！！！？言っちゃったあああああああ！！　死亡フラグ、キｗタｗコｗレぇ！！！」

これがヴァイスの最期の言葉だった。
機動六課隊舎の上空に、汚ねぇ花火が上がった。

一方、その頃、紅麗は―。

◇

「チェック」

「む…！？　待て、蛭湖…！」

「…わかった。３００秒までだぞ？」

ロビーにて、蛭湖とチェスをしていた。

◇

「ヴァ、ヴァイスくぅうぅぅぅぅぅぅ～ん！！！」

「はやてちゃん。ヴァイスくん、死んでないと思うよ？　だって？　ヴァイスくん？だもん。息をしているだけで生存フラグ、立たせまくってるもん」

泣き叫ぶはやてを見ながら、なのはは淡々とフォローした。

と、その時、

「阪　ネ申　タ　イ　ガ　ー　ス　を…舐　メ　ル　ナ　ァ…！！

！」

フェイトが何の脈絡もない発言をしながら、身体中に万力の力を込め、拘束魔法をガチの力押しで破った。
そして、ゆっくりとはやてたちに顔を向ける。

「いきなリ何ヲするのカナ…？　ナのハ…はヤテ…」

「（わ、私、何もしてないのに～～～！！）　は、はやてちゃん…ど、どどど、どどうするののののの…？」

なのはは声と身体を震わせながら、すがりつくようにはやてに問いかけた。
その横顔を見てみると、何かを覚悟したような真摯な表情を浮かべていた。なのはは、彼女の表情を見て、目を丸くした。すると、はやてがいつものように朗らかに微笑み、なのはに言葉を紡いだ。

「なのはちゃん…紅麗に言うといてくれるかな？　？次の機動六課部隊長は、あんたや？ってな」

「は、はやて、ちゃん…？」

突然の言葉に呆けているなのはを一瞥し、はやてはフェイトに向かって歩き始めました。薫が小声で「すっげぇ迷惑じゃん…」と言っ

ているが、はやては聞こえていないのか、表情が変わることなく、歩みながらなのはに声をかける。

「いつもふざけてる私やけど…たまには部隊長らしく、カッコつけさせてくれや。ははっ…一年も経ってへんけど、機動六課で過ごした日々は…楽しかったなぁ。…なのはちゃん、聞いて？　私…この戦争が終わって、無事に生き残れたら…結婚する予定だったんや」

なのはは（空気を読んで）何も答えられなかった。

薫を初め、他の局員たちは「死亡フラグ、立たせまくりだろｗｗ」「なんだよ、この大根役者…」「まず恋人なんかいねーだろｗｗ」「貧乳狸、乙」「デストロイガンダム」と、ニコ動の弾幕の如く好き勝手にほざいている。

しかし、はやてはあえて聞こえぬふりをして、般若（フェイト）の前に立ち止まった。

まるでタタリガミに冒されたオッコトヌシとモロが対峙しているような光景であった。

はやてはフェイトをじっと見つめながら沈黙していたが、やがて重々しく口を開いた。

「フェイトちゃん。私は…機動六課部隊長・八神はやて二等空佐としてではなく…あなたの親友である、八神はやてというただ一人の人間として…あなたに、この言葉を贈ります」

はやては真摯な表情を浮かべながら拳を大きく突き上げると、こう叫んだ。

「私は…紅●×ヴ○イスが、大☆好☆物であるっ！！（キリッ」

次の瞬間、フェイトははやての首に左腕を回し、頭の上に右手を置くと―そのままごきりっ…と、首　を　刈　った。

「は、はやてちゃあああああああああああああんッ！！！」

「ハワード・メイスンッ！！！」

「うん、今のははやて姉ちゃんが悪い」

なのはとヴァイス（何故かいた）が絶叫をあげ、薫は淡々と言葉を紡いだ。

「わ、私…フラッグは…そんなに、好きや、ない…」

はやては最期の瞬間までヴァイスに突っ込み、首が変な方向に曲がったまま力尽きた。

一方、その頃、紅麗は――。

◇

「さぁ、ミスター紅麗　ａｎｄ　ミスター蛭湖！　ご覧になってくださいまし！　クロコ・シライの超セクスィ～なレゲエダンスをッ！！」

「帰　れ、馬　鹿　野　郎」

踊りくねってチェスの邪魔する変態淑女局員に向けて、椅子を投げつけていた。

◇

「は、はやてちゃんッ！　死んじゃ、ヤだよッ！！」

「俺の嫁（なのは）！　はやては…死んだんだ…。無茶しやがって…」

「惜しい人を亡くしたナーｗｗｗ」

ヴァイスや薫の言葉に構わず、なのははやての亡骸に駆け寄った。

「はやてちゃんが死ぬはずないよッ！　だって、ヴァイスくんみたいに生存フラグ立たせまくってるもん！　はやてちゃん、起きてぇ

！！」

なのははそう言うと、仰向けに倒れているはやての心臓目掛けて、エルボードロップを叩き込んだ。

「ごっぶあッ！！！」

「はやてッ！　ちゃんッ！　起きて！　起きて！！　起きてぇ！！！」

「ごッ！　ちょっ、ぼふッ！　待、あふッ！！　なの、ふもっふ！！…ぶるあああああああッ！！　ええ加減にせぇや、なのはちゃんッ！　生きとるわッ！！」

はやては曲がった首をゴキっと戻しながら怒声をあげた。
それを見て、なのはは嬉しそうに微笑んだ。

「あっ、良かったぁ！　私の心臓マッサージが効いたんだねっ！」

「ああ…とっても効いたわ…。お礼として、毎朝目覚まし代わりになのはちゃんにもやってあげ――」

「はやてっち、俺（なのは）の乳ッ！　ガンダムとか言ってる場合じゃないぜッ！！」

今にも取っ組み合いしそうな二人に、ヴァイスが焦った口調で警告した。
気付けば、フェイトが左手を向けながら周囲にいくつもの雷の魔力弾を浮かばせているではないか。
それを見て、はやては魔力弾に指を差しながらやたら高くした声で言葉を紡ぐ。

「あんのぉ、フェイト様～…それ、なぁに？　私らが使う、非殺傷設定という便利な機能が付いた魔法ですよね？　それ以外のナニモノでもなくないですよね？　っていうか、殺傷設定なんていう、残酷な―」

「Ｆ　ｉ　ｒ　ｅ…！！！」

言い終わらぬうちに、フェイトは魔力弾を撃ち出した。
雷を纏った複数の魔力弾が真っ直ぐにはやてたちに向かっていく。

「くっ…こうなったらぁ！　『はやてちゃん・シールド』！！」

「展開読め取るでぇ、なのはちゃん！　私を盾にしようたって、そうは行くかい！『デビル・シールド』！！」

「いやいや！　これははやてちゃんの専売特許でしょ！？　『タヌキ・シールド』！！」

「いやいやいや！　たまにはなのはちゃんもおいしいところを取っ

とき！　『デビルキング・シールド』！！」

「いやいやいやいや！　そんな大役、ツッコミ役の私なんかじゃ務まるわけないじゃない！　『ひんぬー・シールド』！！」

「いやいやいやいや！！　なのはちゃんにもできるで、自信を持って！　『おはなシールド』！！」

親友を魔力弾の盾にしようと、前、後ろ、前、後ろと何度も入れ替わりながら嫌味を言い合う腹黒狸と白魔。仲が悪いように見えるが、とても仲が良い二人であった。

そうしている間にも、魔力弾はターゲットへ向かって飛来していく。

そして、二人が気付いたときには防御も回避できない距離にまで詰まっていた。

髪型がアフロになってしまうことを覚悟して、二人がぎゅっと目を瞑ろうとした次の瞬間、発砲音とともに深緑の光が見えたかと思うと、魔力弾が全て弾けて、消えた。

いったい、何が起こったのだ？

目を丸くするなのはとはやてのそんな疑問に答えるように、？ある男？の言葉が静かに響いた。

「フェイトそん…。俺の本当の名前を、教えてやろうか…？」

口に火のついていない煙草をくわえ、銃口から硝煙を上げている二丁拳銃を握りながら、ヴァイス・グランセニックは己の本当の名前を語り始めた。

「ロックオン…ロックオン・ストラトスだ。時空管理局からは、最も射撃能力が高い者だけに許される『銃王（ガンズ・キング）』の称号を与えられ…敵からは恐怖心を以て『恐怖を撃ち込む者（フィアー・シューター）』の異名を与えられた男の名前だ」

「「ウソ、ほざいてんじゃねーよ」」

ドヤ顔で偽名と嘘の中二病発言を言うヴァイスを見ながら、なのはとはやては冷徹にツッコんだ。
フェイトも静かに口を開く。

「『銃王（ガンズ・キング）』のロックオン…アノ天才銃使い（ガンスリンガー）が…実ハ、ヴァイスだったなンテ…」

「ノッてあげてる！！　フェイトちゃん、超優しいッ！！」

「そんな慈母の如き優しさがあるなら、正気に戻ってよッ！！」

ツッコむはやてとなのはに構わず、フェイトは続ける。

「けド…ヴァイスは、数年前に萌え萌えキュンキュンな妹ヲ誤射シテカら、一度も銃ヲ握ってイナイでしょ？まァ…数年のブランクはどうデモ良いけド…大シた魔力もナく、ただ射撃能

力が高イだケで、この私に勝テるト―」

「能書きこそ、どうでもいいんだよ、『死神』」

フェイトの言葉を遮ったヴァイスは、彼女に対する恐怖など微塵もなく、歯を剥き出しながら不敵な笑みを浮かべていた。煙草をくわえたまま、手の中で二丁拳銃を回す。

「かの有名なバラライカさんが言ってたぜ…？こんなひどい銃で、撃たれる奴の気持ちを考えたことはあるか？？と。確かに…これから粛清される者には、敬意を表して『良い銃』で撃ち殺してやらねぇといけねぇよ、な…？　さぁ…何が良い、『死神』…？　『ストームレイダー』か…『ソード・カトラス』か…『ディエス・イレ』か…『ジャッカル』か…『ジャッジメント』か…『ロート・グラーフ』か…『パニッシャー』か…何なら特別に、『ケルベロス・セインターヘッド』の弾丸（いや、砲弾？）をブチ込んでやろうか？」

「ヴァイスくん。最後のは反動で、確実にあなたの全身の骨が砕けます」

はやてが綺麗な気をつけの姿勢で忠告した。二次元の銃にも三次元の銃にも詳しいティアナも、彼女の言葉に同意するように大きく頷きながら「そもそも持てないしね」と漏らした。元ネタが一つもわからなかったなのはたちは首を傾げるしかなかった。
フェイトは呆れるように、電気を帯びた溜め息を漏らした。

「マともな選択肢がナイ…ヴァイスガ私に撃ち殺サレる選択肢はナイのか…ナッ！！？」

フェイトは再び魔力弾を放った。
６つの雷の魔力弾は、撃ち落とすことが難しい複雑な軌道を描きながらヴァイスへ飛来する。
彼は慌てることなく、回していた二丁拳銃を握り直した。

「『ストームレイダー』…常駐戦術思考を狙撃仕様（スナイプ・モード）から殲滅仕様（ジェノサイド・モード）に書換え（リライト）…」

『Ｐｏｓｉｔｉｖｅ.』

ヴァイスはデバイスの（全く意味のない中二病的な）プログラムを書き換えながら、二丁拳銃を持った両腕を交差させる。
そして、

「Ｉ　ｓｈｏｏｔ　ａ　ｆｅａｒ　ａｔ　ｙｏｕ…（？恐怖？を撃ち込んでやろう）」

発　砲。
ヴァイスが扱う魔力弾は威力とスピードを重視しているため、誘導性は皆無。しかし、彼はフェイトの魔力弾の軌道を先読みし、一発も外すことなく魔力弾を一つ、また一つ撃ち落としていく。
やがて、魔力弾は残り一つとなった。

しかし、弾切れを起こしたのか、ヴァイスは双銃を下ろしながら魔力弾を撃ち落とそうとしない。
だからといって、急いでリロードをしようともしない。
魔力弾が煙草をくわえたヴァイスの顔面に肉薄した次の瞬間、彼は首を大きく後ろへ反らした。魔力弾は、火のついていない煙草の先端を掠め、そのまま彼の後方へ飛んでいった。
ヴァイスは反らした首を元に戻しながら、満足げに煙草の煙を吸った。

「ふぅーっ…ありがとよ。両手使えなくて、煙草の火が欲しかったんだ」

「って、ヴァイスくん…その後ろで薫くんが感電してるんだけど…」

「はばばばばばばばばばばばばばば！！！」

ヴァイスの避わした雷の魔力弾が、彼の後ろにいた薫に当たり、全身の骨を見せながら感電していた。

（？そんなこと？より、さっきからヴァイスくんがイケメン過ぎて、●れるんやけどぉ…／／／／　ｂｙ，恋に目覚め始めたチビ狸）

「まぁ、大丈夫でしょ。感電が終わった頃にはアフロになってますよ」

ヴァイスは薫の姿を一瞥しながら冗談を言う。そして、顔を再び正

面に向けた瞬間、いつの間にか目の前にいた金髪の般若が、見開いた両目を赤く光らせながら、大鎌を高々く振り上げていたからだ。

「くっ…！」

振り下ろされた大鎌を、ヴァイスは二丁拳銃を交差させて受け止めた。

フェイトは信じがたい剛力を以て、大鎌の刃をギリギリと押し込んでいく。

「コノまま押し込ンで、真っ二ツにしテヤル…私ノ勝ちダ…！！！」

「ハッ…！　状況がお前に分があろうと…たとえ、どれほどの性能差があろうと…！」

ヴァイスは額から脂汗をかきながらも、笑みを浮かべ、その瞳に絶望の色は一切なかった。

「今日の俺は…」

――阿修羅すら凌駕する存在だッ！！！

――

銃王（ヴァイス）は鬼神（フェイト）以上の力を以て、彼女を跳ね飛ばした。腕力で押し負けられたフェイトは体勢を崩しながら後ろへよろめく。
そして、次に彼女の赤き瞳が捉えたのは――漂う紫煙と、二つの銃口だった。

「Ｄｅａｄ　Ｅｎｄ　Ｓｈｏｏｔ…！！」

発射された二発の魔力弾。
しかし、ヴァイスが発砲する前にはフェイトは崩れた体勢から、凄まじい運動神経を以て頭を伏せていた。
因果応報――鬼を撃ち抜くはずだった弾丸が獲物を捉えられずに後方へ虚しく飛んでいった。

「残念だったナ…！！　巨人崇拝者のニンゲンめ…！！！」

フェイトはとてつもない言い掛かりの言葉を吐き捨てながら、両手で握った大鎌を真横に構え、腰を後ろへ大きく捻る。大鎌の金刃に雷が走る。
しかし、彼女は気付いていなかった。自分の後方――二つの魔力弾が向かった先に、？二振りの長刀？が突き刺さっていたことを。

魔力弾はそれぞれ、長刀の滑らかな刀身を捉え、跳弾と化す。それが向かった先は――

「ぐ　う　ッ…！！！」

跳弾の魔力弾が両の肩甲骨に撃ち込まれたフェイトは苦悶の表情を浮かべる。
その時には、ヴァイスの振り上げた爪先が顎に叩き込まれた。
全身の力が抜けて、フェイトの体勢が崩れていく。倒れようとした彼女の身体を、何かが支えてくれた。
いや、支えてくれたという言葉は不適切なほどに、鳩尾に当たった感触は鋼のように硬く、冷たかった。
二丁拳銃の形態だった『ストームレイダー』を狙撃銃の形態へ切り替えたヴァイスが、その長い銃身でフェイトの鳩尾に突きつけていたのだ。
彼は左手の指を煙草に添え、右手の指をトリガーに掛ける。
銃口に収束した魔力が、硬く、重く、強く――弾丸の形へと成していく。
その弾丸の名は―、

「『イーヴィル・ショット』…」

―『悪』を撃ち込む…！！！―

狙撃銃から爆音の銃声が響いた。
零距離で発射された強大な魔力弾が鳩尾に撃ち込まれ、フェイトは白目を向き、凄まじい衝撃に襲われながら身体がくの字に折れて後

方へ吹き飛んだ。
それを横目で見ながら、ヴァイスは紫煙を吐いて小さく呟いた。

「Ｒｅｓｔ　Ｉｎ　Ｐｅａｃｅ…（安らかに眠れ）」

「永　遠　の　眠　り　に　つ　か　せ　な　い　で…！！！」

聞き捨てならない発言に、なのはもさすがに顔を歪ませながらツッコまざるをえなかった。
その横で、はやては火照った顔に両手を当てながらヴァイスを熱い眼差しでチラチラ見ていた。ティアナも頬を染めながら、ぼーっとヴァイスを見つめていた。
次の瞬間、白目を向きながら宙に浮いていたフェイトが突然ぎょろりと眼球を動かして、赤く輝く瞳でヴァイスを睨みつけた。
そして、すぐに口内を帯電させると、巨大な超電磁砲（レールガン）を吐き出した。
それを見て、ヴァイスは無表情に呟いた。

「おりょりょ～、これはさすがにどうしようもないのだ～」

防ぐことも避わすこともできないまま、ヴァイスはモロに食らった。
感電しながら吹き飛んだヴァイスの身体は机や椅子、ヤ・ムチャ、トミー、ジャン、シャマルを巻き込みながら壁におもいっきり叩きつけられた。

一方、その頃、紅麗は――。

◇

「フォッフォッフォッ…ワシは弟子のクロコのようにはいかぬぞぉ？　さぁ、紅麗、蛭湖！　刮目するのぢゃ！　コクウじいさんのす～ぱ～せくすぃ～なキタキタ踊りをッ！！！」

「やかましい」

なつかしい踊りでチェスの邪魔をする隻眼の老人に向けて、人体破壊のボディブローを打ち込んでいた。

◇

「阪神タイガースに舐めた口ヲ利くカラ、こうナルのダ…」

フェイトは吹き飛ばしたヴァイスを一瞥しながら果てしない言い掛かりの言葉を言い捨て、彼に背を向けて歩き始めた。

「ち、ちくしょう…！」

口元を血を流しながらヴァイスは机や局員たちをどかしながら、ゆっくりと立ち上がった。

「くっ…かくなる上は…！！！」

ヴァイスは丸腰で、フェイトに向かって走り始めた。
まだそんな力が残っていたのか。

「ヴァ、ヴァイスくん――いや、私の婿、やめてッ！！　死んじゃうで！！」

はやては愛人を見る眼差しでヴァイスを見ながら、悲鳴に近い声で叫んだ。しかし、彼はフェイトへ向かう気など更々なかった。ヴァイスはいきなり方向転換すると、『目標』へ向けて飛びかかっていった。
その目標とは―、

「一生のお願いッ！　揉　ま　せ　て、なのはすわぁあぁあぁあ～んッ！！！」

先程まで銃を持っていた両手をワキワキといやらしく動かしながら、

制服の胸元を大きく押し上げているなのはの豊満な胸に向けてダイブしてきた。なんて清々しい奴なんだ。

それに対して、なのははドロップキックで応戦した。繰り出した彼女の両足はヴァイスの顔面に叩き込み、そのまま大きく蹴り飛ばす。吹き出したヴァイスの鼻血が、咲き誇った後に儚く散っていく花びらのように美しく舞い上がった。

宙に浮き上がっているなのははは、赤き花びらの中で、両腕を真横へ真っ直ぐに伸ばしながら、片膝をついて綺麗に着地した。

見事なドロップキックと、その後の着地に、局員たちは感嘆な息を漏らしながら拍手した。そんな中、床に仰向けになっているヴァイスは「へへっ…お前の言った通りだぜ、薫…白い世界の中に…フェレットの、顔が…あっ、たぜ…」と漏らしていた。それを地獄耳（デビルイヤー）で聞き取ったなのはは、彼自身のスナイパーライフルにエルボードロップを叩き込んでトドメをさした。もう、彼のは使いものにならないだろう。

「な、なのはちゃんッ！　大変やッ！！」

はやてが焦った声で叫ぶ。

なのはは振り向くと、フェイトが大鎌を引きずりながら煉華に歩み寄って行くではないか。煉華はフェイトへの恐怖に腰が抜けたらしく、立ち上がることができずに後ずさっている。

「なのはちゃん、煉華ちゃんがピンチや！　早う助けなッ！！」

「な、何で、私だけッ！？　はやてちゃんたちもッ！！」

「いや～…行きたいのは山々なんやけど、な？　私、一回首を刈られたし～？？誰　か　さ　ん？に心臓をおもっくそド突かれたし～？　何　度　も…」

「くっ…！！」

なのはは顔を歪ませた。

確かにはやてはボケやツッコミができても、まともに戦える状態ではない。

調子に乗ってエルボードロップをしなければ良かったと激しく後悔。

フェイト相手に奮闘していたヴァイスはトドメをさしてしまった。

エルボードロップをしなけ…いや、イライラさせるコイツはいいか。

ヴァイスの存在を完全に記憶から抹消したなのはは助けを求めるように、道連れを求めるように他の局員たちに顔を向けた。

すると、あんな化け物と戦いたくないと言わんばかりに顔を背けたり、死んだフリをしたりしている。

世　知　辛　い　世　の　中　で　あ　る。

「もうッ、いいよォォォォォォォォォォォ！！！」

なのはは涙を滝のように流しながら、ヤケクソ気味に叫んだ。

そして、何故か床に落ちていたモップを握って般若（フェイト）に駆け出して行った。

「あ、遊んであげる…！！　お、おお、おいでで、かか鎌女ぁ…！！！」

「逝ってらっしゃい、なのちゃま～」

ヤンデレ鉈女に立ち向かう幼女のような勇姿を見せるなのはの背中に向けて、はやては白いハンカチを振るった。
しかし、フェイトと煉華はもう手が届く距離にまで近付いてしまっていた。

「ゴ　め　ん　ネ…ご　ち　ャ　ご　チ　ゃ　し　テ、時　間　ガ　か　か　っ　ち　ゃ　ッ　テ…さ　ァ、訓　練　場　へ　行　こ　ウ　か…」

フェイトは優しく声をかけながら煉華に手を差しのべる。
しかし、赤々と輝く見開いた両目と、鋼鉄の大鎌と、帯電した重圧な殺気が―これから地獄へ誘う死神に見えてしょうがなかった。

「う、うぅ…や、やだよぅ…お姉ちゃあん…」

煉華は身体を震わせながら、つぶらな瞳から涙の粒をぽたぽた溢しながら訴えかけた。
次の瞬間、憎しみの塊と化したフェイトの心に変化が現れた。
彼女は見開いた赤い目で、煉華を見下ろす。

泣き顔

←
上目使い
←
涙声
←
お姉ちゃん発言
←
可愛い
←
可愛い可愛い
←
可愛い可愛い可愛い
←
可愛い可愛い可愛い可愛い
可愛い可愛い可愛い可愛い

「あ、あれ…？　私…今まで、何を…？」

フェイトは片手で頭を抱えながら疑問を漏らした。

「覚えてないのか…？」

はやては訝しげに呟く。

追いつめられたことによって、第二の人格やらダークサイドやらが覚醒し、何らかの形で正気に戻った中二病的な主人公ですか、あなたは？

「あ、あれ…どうしたの、皆…？　ここで…何かあったの？」

乱雑された机や椅子、恐怖で身体を震わせるながら異様な目で見てくる局員たち、そして何名かの死体（？）を見て、フェイトは不気味に思いながら尋ねた。

一方、その頃、紅麗は――。

◇

「チェス、強いのだな、蛭湖」

「『死四天』のメンバーでよくやっててな。ちなみに一番弱いのは門都だ。あの男…何の作戦もなしにキングを敵陣に突っ込ませるからな…ｗｗ」

「ｗｗｗ…烈火以上の馬鹿だな…ｗｗ」

缶コーヒーを片手に、蛭湖と談笑していた。
そんな二人のやり取りを腐女子（シャーリー）が顔を赤くしながら汚れきった腐った目で見つめていた。
翌日には女性局員の間で紅●×蛭〇の同人誌が密かに発売するだろう。

『不死鳥のなく頃に・朝殺し編』

早朝、機動六課隊舎　男子寮の一室にて、紅麗は二段ベッドの下の段で目を覚ました。
上の段にはヴァイスが眠っており、寝間着としてアニメイトで買った緑色のパイロットスーツを着ている。
紅麗は上半身を起こし、ベッドから下りようとした。しかし、生暖

かい何かが自分の左腕にしがみついていることに気付き、動きを止めた。

「……」

紅麗は嫌な予感をしながら、布団を捲り上げた。そこには、赤髪の少女―煉華が静かな寝息を漏らしながら眠っていた。しかも、下着しか身につけていない。

それを見た紅麗の口から出た言葉は「どうやって入った?」ではなく、「これ、なんてエロゲー?」でもなかった。

「…いきなり、オチが読めたな」

誰もが予想するであろう。

ここにフェイト（ヒロイン）が現れ、あらぬ勘違いをし、紅麗（主人公）の説明を聞かずに半殺しにする。

そ う、小 話 の オ チ だ。

しかも、煉華は下着姿で、紅麗は上半身が裸になっている。

二人の男女が、朝っぱらから、半裸状態で、同じ布団で寝ていたら、誤解されてしまうのは必至だ。

自分の習慣がこんなふざけた形で仇になってしまうとは思いも寄らなかった、いや本当に。

とにかく、またフェイトが般若化するのを防がなければならない。

彼女が来る前に何とかしなければ。

そんな彼の元に、天から救いの選択肢が降りて来た。

其之一、煉華を毛布で隠す。

其之二、煉華を外へ放り出す。

其之三、煉華の胸を堪能する。

其之四、とりあえず、リインを追いかける。

―二が一番妥当かもしれないが、放り出した瞬間に騒がれたら駄目だな…。三と四は明らかに論外だろ、何の解決にもならんわ…！！
何だ、とりあえずって…！

其之一、アナベル・ガトー

其之二、バーナード・ワイズマン

其之三、ニール・ディランディ

其之四、マチルダさん

―どういう意味だ、ヴァイス…！！？　死ぬと言っているのか、遠回しに死ぬと言っているのか…！？

其之一、紅麗様！　私の雷神で、黄金般若以上の雷撃を以て討ち倒します！

其之二、紅麗様！　私の不狂和音で黄金般若めを肉塊へと変えましょう！　そして…私がヒロインに…／／／／

其之三、紅麗様！　私が氷魔閻で黄金般若を氷漬けしてやりましょうぞ！

其之四、紅麗様！　お風呂へ入られるときは俺が背中を流して差し上げますぞ～！

―…気休めな言葉ではあるが、私は良い臣下を持って幸せだ…ホロリ…。だが、磁生よ…お前だけは…その、何だ……どうした？

其之一、さぁ、ナナシ…。私が特別に健康診断してあげるから、壁に手をついて君の可愛いお尻を突き出したまえ。

其之二、ちょう待て、スカリエッティ…。どんな健康診断や、それ？

其之三、つべこべ言わずに、私の言う通りにしたまぇ。さもなくばぁ……こうだッ！！！

其之四、アッーーーーーーーーーーーーーー！！！！

―ジョーカー！　何があったッ！！？

其之一、あえて言おう、カスであると！

其之二、絶☆好☆調である！！

其之三、倍返しだぁぁぁぁ～！！

其之四、プルプルプルプルプル～♪

―邪魔をするな、ヴァイスッ！　お前の？相談室？で、何が解決するのだ…！！？

お○ぱい、プルプルプルプル～♪

―殺すぞ、貴様ッ…！！！

その時、電子ドアの方からブザーの方が鳴り、ドア越しに女性の声が聞こえてきた。

『おはよう、紅麗っ。私だよ。フェイトだよ。とりあえず、すぐにここを開けてくれるかなっ？』

―出たな、妖怪・黄金般若…！！

紅麗は顔を歪ませながら、心の内で妖怪呼ばわりする。

フェイトは電子ドアを叩きながら、その向こうにいる紅麗に語りかける。

『ねぇねぇ、早く開けて？　いるのは、わかってるんだよ？　ついでに、今、目を覚ましていることも何故かわかっているんだよ？』

―何故（なにゆえ）…！！？

恐怖心を抱くが、早くドアを開けなければならない。

紅麗はとりあえず寝ているヴァイスをおもいっきり殴りつけてから、煉華を毛布で隠し、電子ドアを開けた。

次の瞬間、真っ赤な液体が紅麗の胸元を濡らした。

いきなり彼が攻撃されたのではない。紅麗の半裸姿を見たフェイトが鼻血を吹き出したのだ。

「……」

紅麗は鼻血で濡れた自分の胸元と、鼻血を垂らすフェイトを見てから、一言呟いた。

「……お前、よく鼻血を出すな」

「きゅ、きゅれいぎゃしょんにゃエロ素晴らしいきゃっきょうをしゅてりゅきゃりゃでひょ！！？」

「何故、エロ素晴らしいしか言えないのか…私は不思議でならない」

「う、うるちゃい！もうっ！　とりあえず、今の紅麗の格好を写真に撮らせてよ！！」

「何故（なにゆえ）…？」

フェイトはいつも持ち歩いている超高画質のデジカメで紅麗を撮影した。

『富竹フラーッシュ！！！（シャッター音）』

「……趣味、悪いな」

「このデジカメは色々なシャッター音があって、面白いんだよ？あっ、もう一枚撮るから、ポーズ取ってもらえるかな？」

「や　な　こ　っ　た」

デジカメを叩き落とす紅麗。

それを瞬時に反応したフェイトは「ぅおおいッ！　何すんだよォォォ！！」と言いながら打球を捌く内野手の如く、素早く片膝をついて、落ちたデジカメを受け止めた。

「…で、お前はいったい何をしに来たんだ？」

紅麗は内心早く胸元についた鼻血を拭きたいところだが、下手に動けば膨らんだ毛布がフェイトの視界に入ってしまうため、動かずに尋ねる。
彼の言葉にフェイトは思い出した素振りを見せると、一つの弁当箱を取り出した。

「えへへ…実は私、紅麗のためにお弁当を作って来たんだよっ？」

「今は、血の味で事足りておる（鼻血じゃないよ☆）」

悪七兵衛・景清のような台詞を言って、紅麗はドアを閉めようとする。
わざわざ作ってくれたのは嬉しいが、
煉華と般若がいるせいでそれどころではない。
電子ドアを閉めようとした瞬間、フェイトは弁当を持っていない手でドアを握り込んで閉めるのを阻止した。

「何で閉めちゃうの？　ねぇ、何で？　私、紅麗のために作ってきたのに…」

「…ああ、すまぬな。だが、今はいらぬ。早朝の訓練が終わったら、ありがたく頂戴するとしよう」

「え～、待ちきれない…今すぐに食べてほしいなぁ。…ねぇ、部屋の中に入れてくれない？」

フェイトは上目使いで甘えたように言ってくるが、状況も状況なので紅麗は内心デカい舌打ちをすることしかできなかった。

「…我が儘を言うな。すぐに訓練場へ行かねばならない」

「いいよ。なのはには私から言っておくから。ねぇ、部屋に入れて？」

「……私は鍛練を怠ることが嫌いなタチでな。お前の弁当はいつでも食べられるが…たった一回でも、その鍛練の時間は二度と帰って来ないのだぞ」

「いいじゃん、今日くらいっ。紅麗は強いんだからさ。ねぇ、部屋に入れて？」

「……強い弱いは関係ない。才能があろうとなかろうと、努力は怠ってはいけないのだ」

「はいはい。ねぇ、部屋に入れて？」

「貴様…さっきから？部屋に入れて、部屋に入れて？と、しつこい

ぞ…！」

「紅麗だって、私が何回も言ってるのにまるで現実逃避をするみたいにスルーしてるじゃないねぇ、部屋に入れて？」

「語尾になっている…！！」

紅麗はそうツッコんだ後、小さくため息をついてフェイトの弁当を受け取った。

「…ならば、ここで食べるとしよう」

「え、ここで？　立ちながら食べるの？　行儀が悪いよ、紅麗。どうしたの？　行儀が悪いなんて、らしくないよ？　部屋の中でキチンと座って食べなよ」

「……今日は…そういう気分なのだよ」

長い前髪の下で額に血管を浮かばせながら、堪えた様子で返答する紅麗。それをじっと見つめたフェイトは、小声で呟いた。

「…もしかして、見られたくないものが…部屋の中にあるの？」

その瞬間、紅麗の心臓がびくりっと跳ね上がったが、態度に出さなかった紅麗は称賛に値するべきであろう。
しかし、ここからどう返すべきか…。

無いと答えれば、「じゃあ、いいじゃん」と言って乗り込んで来る。
有ると答えるにも、煉華以外のもので何と答えればわからない。「ヴァイスの趣味」と答えようとも思ったが、「私、そんなの気にしないよ？」と言って乗り込んで来るかもしれない。
どう答えるべきかわからずに沈黙する紅麗。
そんな彼の様子を見て、フェイトは肯定と受け取った。そして、頬を染めながら次に出た彼女の発言が、紅麗にとって良い流れを引き寄せることになった。

「…も、もしかして…え、エッチな本、とか…？」

「……？」

「そ、そうだよね…。く、紅麗だって…男の子だもん、ね…」

紅麗の言葉を聞かずに、勝手に話を進めるフェイト。全ての男が、とまでは思っていないが、ほとんどの男が持っているという印象がフェイトの中にあった。そして、男が部屋の中に入れたくないという理由はエロ本という禁書目録があるからと相場が決まっている――と、フェイトが勝手に思っている。
もちろん、紅麗はそんなものを持っていない（ちなみにヴァイスはガンダムの同人誌を何冊か持っている）。
しかし、これはチャンスかもしれない。事実ではないが、入れたくない理由にはなる。後は、自分が適当に合わせ…般若（フェイト）が納得するか、どうか。

「…ああ、そうなのだ。だから…お前には入ってほしく、ないのだ」

「そ、そうだよ、ね…。うん…。で、でもね…？　そんな…エッチぃ本なんか読まなくても…えっと、その…わ、私…私、が…その…ううっ…」

「フェイト、鼻血が垂れているぞ」

紅麗は話を無理矢理切り上げるようにポケットティッシュを渡した。
フェイトは「あ、ありがと…」と言って受け取り、ティッシュで鼻血を拭いた。
それを一瞥し、紅麗はフェイトの言葉を聞かずに弁当の蓋を開けた。

「…では、お前が作ってくれた弁当をいただくとしよう」

「えっ…？　ぁ…う、うん…」

フェイトは戸惑いながら生返事をした。彼女はもう部屋の中に入れてとは言わなかった。そう言うと、また禁書目録（エロ本）の話になり、彼女もさすがにその話をまたするのは抵抗があるようだ。
まだまだ子供だな…と、紅麗は内心黒い笑みを浮かべた。生死に関わる問題が絡むだけで、ここまで二人の関係が歪んでしまう不思議。心の内でほくそ笑んでいた紅麗だったが、弁当から香った匂いによって眉を潜めた。

「フェイト…。この…炊き込みご飯、か？　やけに甘い匂いがするのだが…」

「うん、バナナの炊き込むご飯」

「――ッ！！！」

紅麗の仮面の如きポーカーフェイスが一瞬で歪んだ。

「貴様、何を炊き込んでいるのだ…！？　しかも、何故（なにゆえ）、バナナ…！！？」

「バナナを馬鹿にしてはいけないわ、バナナはスポーツ食の王様」

「お前の行為がバナナを馬鹿にしてるわ…！！　そうではなくて、何故ご飯に炊き込んだのかと聞いているのだ…！！？」

顔を歪ませたまま怒声を発する紅麗とは対照的に、フェイトはドヤ顔をしながら言葉を紡ぐ。

「バナナはカリウムが多く、筋肉の働きを良くする。そして、消化吸収が早くて―」

「いや、そうではなく！……わかった、もういい…」

これ以上追求しても、バナナについてのトリビアを熱く語られるだけだ。

バナナの炊き込みご飯は切り捨て、おかずを食べよう。

「…む。この唐揚げは…さすがに普通のものだな？」

「うん。中身はもちろん、バナナ（キリッ」

「弁当の中身、全部バナナなのかァ…！！？　い、いや、そんなはずは…このサラダとか…」

「バナナにバナナを和えてみたんだっ」

「否、これはサラダではないッ！　ただのバナナの盛り合わせだ…！！　唯一救いなのは、一緒に盛られたこのレタスだけだぞ…！！？」

「え？　それもバナナだよ？」

「どんなバナナ…！！？　こんな薄い葉のようなバナナがミッドチルダにあるというのか…！！？」

「そう見えさせるのが、料理人の腕というものだよっ♪」

「どんな技術…！！？　あの白い棒状の果実を、どうやったら薄く緑色にさせることができるのだ…！！？」

「棒状の果実だなんて…紅麗ったら、そんなはしたない…／／／」

「いつも鼻血を垂らすお前の方がはしたないわ…！！」

「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ＢＡ☆ＮＡ☆ＮＡ」

「やかましいわ…！！！」

何の脈絡もなく？バナナへようこそ？というフェイトに、紅麗がそうツッコんだ、その時だった。

「う、うぅん…お兄ちゃ、ん…」

煉華の寝言が聞こえましたとさ。

仏

の

顔

も

三

度

ま

で

フェイトの見開いた両目が赤く輝き、身体から黄金色の殺気を滲み出し、その手に鋼鉄の大鎌が握られた。

―早すぎるだろ…！！

紅麗は心の内で怒声を発した

一発だけなのに、何故(なにゆえ)三度!?　サバを読むにもほどがあるだろ！

紅麗は電子ドアを閉めるボタンを１６連打（無限ループ）する。しかし、黄金般若がその凄まじい腕力を以てドアを押さえているため、閉めることができない。ただの無駄な時間稼ぎでしかない。

やがて、黄金般若は押さえることが面倒になったのか、その大鎌―『金爪般若』で電子ドアを微塵切りにした。（ちなみに、紅麗は大鎌の刃を見ていて、その形がバナナと似ているなと思ってしまった。彼の脳内に何かが感染してしまったようだ）

―…ッ…どうやら、戦うしかないようだな…！

以前のときとは違い、今は押しつけられる人間がいない。このまま逃げてしまっては、近くで眠っている友と、妹(ヴァイス)がこの黄金般若に喰われてしまう（失礼(れんげ)）。

紅麗は戦いの意思を示すように、左腕に紅い炎を灯した。

ヤンデレと化したヒロインに主人公が半殺しにされるのは、お約束の展開だ。しかし、それはあくまで大抵の主人公は、だ。
紅麗は違う。
彼は機動六課の中で最強と謳われ、相手が女であろうと容赦せず、仲間の女をもフルボッコにできる冷徹な人間だ。

「宇宙天地　与我力量…降伏群魔　迎来曙光…！！！」

鬼の左手を持つ地獄先生の如く、紅麗は黄金般若に肉薄した。

◇

腕を組みながら仁王立ちにするフェイトの前で、黒焦げになっている紅麗が正座をしていた。

―ＢＡ☆ＮＡ☆ＮＡ！！　い、いや…馬鹿な…！！！

恐ろしい…バナナの不思議な力。こんなベタでつまらないギャグを言わせるとは。
閑話休題。
彼は、黄金般若に勝つことができなかった。これも、バナナの偉大なる力だとでも言うのか。
ちなみに、一頻り暴れたことでフェイトは人間形態に戻っている。
紅麗の横には、お馴染みの黒衣を着ている煉華も正座しており、さ

らにその隣には何故かヴァイスまで正座していた（何故か裸で）。

「…さて…説明してもらおうかなぁ？」

フェイトは仁王立ちしたまま、紅麗たちに問い掛ける。
人間形態とはいえ、その身体から滲み出るプレッシャーは紅麗でも怯んでしまうものだった。
しかし、彼はそれを態度に出さず、あくまで冷静な態度で返答した。

「だから…私は、煉華に何もしていない。朝起きたら、隣で寝ていたのだ」

「ウソおっしゃいッ！！！」

フェイトは紅麗の言葉を真っ向から否定した。

「だって、紅麗！上半身、は、裸になってたもんっ！　煉華も、し、下着姿になってたもんっ！　これで、どう信じろって言うの！！？
どうせ、紅麗たちはッ！…えっと…よ、夜中に、え、えええ、エッチなこと、してたんでしょ！！？」

煉華

『やぁうっ！お、お兄ちゃんっ…そ、そんなに、したらぁ…らめぇえええぇえぇえぇ～！！！』

ぶふぅうううううーッ！！！

夥しい鼻血を吹き出すフェイト。

妄想してみたら、嫉妬よりも興奮の方が勝っていた。

羨ましいというか、混ざりたいというか…。

「本当だよ、お姉ちゃん。私が部屋に忍び込んだときには、お兄ちゃん上半身裸になってたよ？　私が下着姿になったのは…まぁ…気分？みたいなぁ？」

「みたいなぁ？じゃないよッ！！　女の子がそんな無闇に半裸になっちゃダメだよ！　せめて、私と一緒に寝るときにしなよ！！」

「お姉ちゃん…怒る趣旨がすごい変わっちゃってるよ…。あと、鼻血拭きなって」

「だが、フェイトそんの言う通りだ！　柔肌をさらすとは…破廉恥だぞ、ガンダムッ！！」

その言葉をただ言いたかったヴァイス。そんな彼を、煉華は珍獣を見るような目で見つめる。

「どうでもいいけど…何で、ヴァイスくん、裸になってるの？」

「わっかんねぇよ。気が付いたら、こうなってたんだよ…」

ぼやくヴァイス。
すると、フェイトの脳内である妄想が浮かんだ。

紅麗
『ふっ…こんなところに、スナイパーライフルを隠してあったとはな』

ヴァイス
『や、やめろ、ハルファスガンダム…そ、そんなことしたらぁ…アッーーーーーーーーーーーーーー！！！！！』

「お　ぅえぇえぇ～…！！」

ヴァイスは窓から外へ顔を出しながらリバースし、紅麗は激しく喉を掻きむしった。

「き、貴様…よりにもよって何てことを想像するのだ…！」

「フェイトそん！　あんたみたいな！　あんたみたいな人がいるからぁ！！　ＳＥＥＤとかＯＯとかは腐女子狙いだと言い出すアンチが出て来んだよ！！　猛省を、猛省を要求するぜッ！！！」

「ちょっと、ヴァイス！　わかった、わかったから！！　煉華もいるんだから、前を隠してよッ！！！」

全裸で激しく抗議するヴァイスに、フェイトは顔を赤くしながら注意する。
怒りで我を忘れていたヴァイスは全裸でいることに気付き、恥ずかしそうに両手で前を隠した。

「やっべぇ、恥ずかし…穴があったら、挿れたいほどの恥ずかしさだよ」

「「ひ　ど　い」」

あまりにも酷い言葉のアレンジに、紅麗とフェイトは顔に影を作った。しかも、ヴァイスの「俺、上手いこと言ったぜ」と言わんばかりなドヤ顔がかなりウザい。

一方、煉華はヴァイスの言葉がどういう意味なのかわからず、首を傾げていた。

「とにかく！　煉華は二度と紅麗の部屋で一緒に寝ちゃダメ！　次からは、私と一緒に寝るようにっ！！」

指を突き出しながらそう言い聞かせるフェイトに、煉華は不満の声を漏らした。

「え～っ…お姉ちゃんはふかふかしてて気持ち良いけど、毎日は、ちょっと…。お兄ちゃんとも一緒に寝たいよ…」

「贅沢言っちゃダメっ！　わ、私だって、我慢してるんだよ…色々と…」

顔を赤くしながらぶつぶつ呟くフェイト。それを見て、煉華はこう提案した。

「じゃあ、お姉ちゃんもお兄ちゃんと一緒に寝ればいいじゃんっ」

「にゃ、にゃにを言うッ！！？」

フェイトは鼻血を垂らしながら噛んだ。内心、素敵な提案だと思ってしまった。

ヴァイスも煉華の提案に賛成のようで、提案の付け足しを発言する。

「なら、俺とフェイトそんで部屋を代えようじゃないか。そんで、俺が白い巨乳（なのはさん）と一緒に寝る」

「「欲望丸出しだよ、お前」」

紅麗とフェイトのダブルライダーキックがヴァイスの顔面に炸裂した。

しかし、フェイトもヴァイスほどの薄汚い欲望がないとはいえ、全く人のことを言えない。

「れ、煉華の案もい、良いかなぁなんて思うけど…決められた規則を破ることなんてできないよ…」

「ハワード・メイスンの墓前にそう誓ったからな」

「誓ってないよ、ヴァイス。誰なの、ハワード・メイスンって？」

あくまで提案を拒否するフェイトに、煉華はわざと上目使いで見上

げながら困り顔をする。

「え～…どうしてもダメ～…？」

「うっ…ダ、ダメでおじゃる…」

萌え心を強く刺激する煉華の破壊力の前に、フェイトは思わず紡いでしまいそうな是の言葉を必死に堪えた。

「むぅ…意外に手強い…」

眉を寄せる小悪魔・煉華。

もう行っていいかな？と思い始める紅麗。

するとヴァイスが煉華の耳に顔を寄せ、ぼそぼそと何かを耳打ちする。それを聞いた、煉華は悪戯っぽい笑みを浮かべて、フェイトに近寄ってきた。

―いったい何をする気だ、この可愛い生き物は！？

フェイトは期待と不安……いや、期待ばかりが胸を膨らませて、口がにやけてしまっていた。

「えっへへ～、お姉ちゃんっ♪」

煉華はフェイトの腕に抱きつき、柔らかい胸を押しつける。そして、フェイトに顔を近付けると、その頬をペロリと舐めた。

「ふおおっ…！！　って、な、何をするのでおじゃるかッ！？」

フェイトは煉華の甘えん坊な子猫のような仕草と、頬を舐められた感触に悶えた。

「お姉ちゃんが提案に乗るまで、やめないよ～？　くらえ、くらえ～っ♪」

悪戯っぽく笑いながら、小さい舌でフェイトの頬を何度も舐める煉華。

「れ、煉華…ダメだってばぁ…！　ちょっ…み、耳はあかんっ！ぬふおお～…！！」

「もう、やめろぃ！！　フェイトそんのライフポイントはもうゼロだッ！！」

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！！」

「貴　様　ら、馬　鹿　か…？」

紅麗は顔に影を作りながら冷徹に呟いた。

今日も機動六課は、ミッドチルダは平和であった。

其之三十九：不死鳥のなく頃に・鬼醒まし編（※いつも以上のキャラ崩壊）（後

どうも、恵慈です。
これで最後ということで、ケータイなんでそんなに長くは書けませんが、ここまで書いて振り返ってみての自分の気持ち（というか愚痴？）を書こうと思います。

全てのキャラクターの中で一番好きな紅麗様を主人公にしたリリカルなのはとのクロスオーバーということで…いかがだったでしょうかね？
思い返してみると、書いて良かったなって気持ちと、後悔している気持ちもあって、複雑な気分です（苦笑）
クロスオーバーは（当たり前なことなんですが）、両作品の世界観とかキャラのことについて深く知り、キャラの性格を保ちつつ、時々自分流に少しアレンジしたり…だけど、不自然にならないように物語を進めていくことなんじゃないかなぁと思います。まぁ、よくわかんねぇけどｗｗ

この作品でやりたかったことは、殺しを当たり前としてきた紅麗が殺しを躊躇うフェイトたちに良い意味でも悪い意味でも感化されることと、フェイトと同じ境遇を持つ煉華を登場させ葛藤しながらも紅麗にクローンに対する考えを改めてもらおうということでした。

また、最初の頃は紅麗とフェイトを結ばさせようと軽い気持ちで書いたわけなんですが、後になって物凄く後悔しました。
亡くしたとはいえ愛する紅を裏切るようなことを彼がするはずがないという考えに、後から至りました。しかし、最初はそういう気で書いたらもう後には退けないと思って、無理矢理な展開ですが、最後まで書きました。

やっぱり書き始めたての頃の自分はすごく考え無しで、紅麗について何一つわかっていなかったと思います。原作者である安西先生が言った「多分誰も紅麗の本当の考えは解らない」の言葉が、今になって重くのしかかっております…（苦笑）

最後に、完結に至らず、完全凍結になって申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

書いて、皆さんに見てもらいたいことがたくさんあったのですが、事情により書けなくなってしまいました。

また執筆が再開できるかは、まだわかりません。数年後になるかもしれないし、再開できないかもしれません。

もし、再開できたのなら、その時はまたよろしくお願いします。

今までありがとうございましたっ！

ヴァイス

「さらばだ！　ガンダム諸君！！」

…まさか、ヴァイス・グランセニックがこれほど大きな人物になってしまうとは、書き始めの頃は全然思わなかったです…（笑）

ホント…未来のことなんて、全くわからないもんです…ｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0917j/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜炎の堕天使〜

2011年10月9日23時56分発行